

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 269

高尾北ヤシキ遺跡 高尾北ヤシキ古墳

一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査 3

2024

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 269

高尾北ヤシキ遺跡 高尾北ヤシキ古墳

一般国道 53 号（津山南道路）改築工事に伴う発掘調査 3

2024

岡山県教育委員会



1 調査地遠景（南から）



2 高尾北ヤシキ遺跡2区・高尾北ヤシキ古墳近景（南西から）



1 高尾北ヤシキ遺跡3・4区全景（南から）



2 高尾北ヤシキ遺跡3区南半、4区全景（北東から）



1 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居4 遺物出土状況 (南から)



2 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居8~10 (東から)



3 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居12 カマド (西から)



4 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居19 カマド 遺物出土状況 (南西から)



5 高尾北ヤシキ遺跡出土遺物



1 高尾北ヤシキ遺跡 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況 (南から)



M 24

2 高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像



1 高尾北ヤシキ古墳全景（南東から）



2 高尾北ヤシキ古墳 竪穴式石室（南東から）



3 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室（南東から）



1 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室 遺物出土状況（南東から）



2 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室 遺物出土状況（上が北東）



C 1

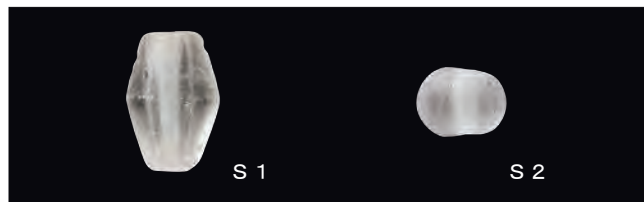
1 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土陶棺



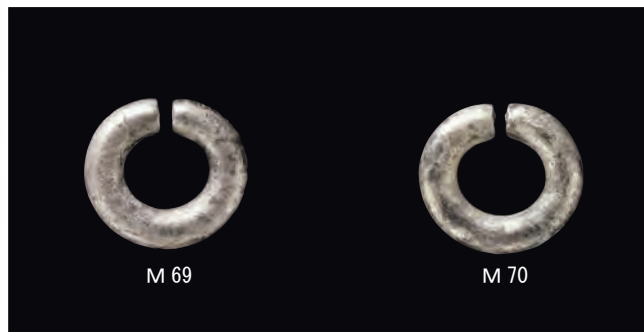
2 高尾北ヤシキ古墳出土遺物



1 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土皮袋形瓶



2 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土玉類



3 高尾北ヤシキ古墳 竖穴式石室出土耳環



4 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土筒形土製品



C2

序

一般国道 53 号は、岡山市から鳥取市に至る延長約 140km の主要幹線道路です。津山南道路は、このうち久米郡美咲町打穴中から津山市平福に至る区間に並行する延長 5.4km の道路として計画され、津山周辺圏と県南部地域との連携強化を促進し、沿線地域の発展を図ることを目的としています。

岡山県教育委員会では、計画路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてはやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

本書は、一般国道 53 号（津山南道路）改築に伴う発掘調査報告書の第 3 冊目であり、令和元年度から令和 3 年度にかけて行った、津山市高尾に所在する高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳の発掘調査記録を収載しています。

高尾北ヤシキ遺跡では、弥生時代から室町時代の遺構・遺物が確認され、主に弥生時代中期、古墳時代後期、鎌倉時代から室町時代の集落跡であることが分かりました。特に鎌倉時代から室町時代には丘陵斜面を大規模に造成して整地面を造り、長期間にわたって複数の掘立柱建物が建て替えられました。その一角では、菩薩像が線刻された青銅製の鏡像が埋納された状態で見つかり、注目を集めました。

一方、高尾北ヤシキ古墳では、6 世紀末に築かれた円墳や土坑墓が確認されました。円墳には横穴式石室と竪穴式石室が造られました。横穴式石室には陶棺が納められ、土器・武器・馬具・装身具などの豊富な副葬品、筒形土製品が出土しました。特に、筒形土製品が古墳から出土した事例は全国的にも希少で、美作地域の渡来系文化を考えるうえで重要な資料と言えます。

これらの調査成果を収めた本書が、地域の歴史研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりましては、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所をはじめとする関係機関や地域住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和 6 年 3 月

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 奥 山 修 司

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と岡山県の委託契約に基づき実施した、高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳は、津山市高尾に所在する。
- 3 発掘調査は令和元年度から令和3年度に実施した。令和元年度は尾上元規・小嶋善邦・藤井雅大・四田寛人が担当し1,390㎡を、令和2年度は小嶋・氏平昭則・藤井・藤田京佑が担当し1,680㎡を、令和3年度は米田克彦・樋口英行（高梁市から派遣）・四田・山口香織・西村奏が担当し4,025㎡を調査した。
- 4 発掘調査及び報告書作成に当たって「一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴う埋蔵文化財保護調査指導会」を設け、次の委員各位から指導・助言をいただいた。記して謝意を表する。

小郷 利幸（津山弥生の里文化財センター）	令和元年度まで
可児 通宏（津山市文化財保護委員）	令和元年度まで
亀田 修一（岡山理科大学）	令和4年度から
澤田 秀実（くらしき作陽大学）	
清家 章（岡山大学）	
仁木 康治（津山弥生の里文化財センター）	令和2年度から
三坂 一徳（岡山理科大学）	令和5年度から
南 健太郎（岡山大学）	令和元年度から令和3年度まで
- 5 報告書の作成は令和4年度に米田・藤井、令和5年度に米田が担当した。
- 6 本書の執筆は、第2章第1節を大橋雅也・柴田英樹が行い、その他は尾上・小嶋・米田・氏平・樋口・藤井・四田・山口・西村が担当した。全体の編集は米田・藤井が行った。
- 7 遺物に関する鑑定・分析を次の諸氏に依頼し、有益な教示を受けた。記して謝意を表する。

土器・陶棺の胎土分析	白石 純（岡山理科大学）
石材の鑑定	鈴木 茂之（岡山大学）
青銅製品の鑑定	内藤 栄（大阪市立美術館）
- 8 年代測定及び炭化物等の自然科学的分析、青銅製品の保存処理等、製鉄～鍛冶関連遺物及び銅生産関連遺物の調査は、次の機関と業務委託契約を行い実施した。

放射性炭素年代測定・炭化物及び赤色付着物の自然科学的分析	株式会社パレオ・ラボ
青銅製品の保存処理・材質分析	公益財団法人 元興寺文化財研究所
製鉄～鍛冶関連遺物及び銅生産関連遺物の調査	日鉄テクノロジー株式会社
- 9 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 10 本書に関連する遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は標高であり、挿図に示す北方位は平面直角座標V系（世界測地系）の座標北である。
- 2 挿図・報告書抄録の座標値・経緯度は、世界測地系に準拠している。
- 3 遺構・遺物の縮尺は個々に明記している。
- 4 各遺跡及び古墳群の遺物番号は種類ごとに通し番号とした。また、土器・埴輪以外の遺物はその材質を示すため、番号の頭に次の記号を付している。
土製品：C 石製品：S 金属製品：M ガラス製品：G 瓦：R
- 5 土器実測図において、口縁部または底部を示す上端・下端の線が中軸線の左右で途切れているものは、復元径が不確実であることを示している。
- 6 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。
- 7 次の挿図は、国土地理院発行の地形図を複製・加筆したものである。
第2図 1/25,000 地形図「津山西部」
第3図 1/50,000 地形図「津山西部」
- 8 横穴式石室の袖・側壁等の左右は、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびきー各種遺跡調査編ー』2013に従い、入口から奥壁側をみた場合の左右とした。
- 9 写真36～40、第289図に使用した画像は、国立文化財機構所蔵品統合検索システムより加工して作成した。
- 10 本書で使用した時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用している。また、弥生時代～中世の土器・陶磁器の編年、分類、年代観については、主に次の文献を参考にした。
【弥生土器】河合忍 2005「弥生土器について」『久田堀ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192 岡山県教育委員会
【須恵器】田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
 西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』
【勝間田焼】小林利晴 2011「勝間田焼」『美作国府跡 小田中遺跡 山北遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告228 岡山県教育委員会
【備前焼】重根弘和 2022「備前」『新版 概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編 真陽社
【瓦質土器】鈴木康之 1996「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』広島県教育委員会
 八峠興 1998「山陰における中世土器の変遷についてー供膳具・煮炊具を中心としてー」『中近世土器の基礎研究』XIII 日本中世土器研究会
【陶磁器】大宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV』陶磁器分類編
 愛知県 2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章	地理的・歴史的環境	1
第2章	発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯	9
第2節	発掘調査の経過	12
第3節	報告書作成の経過	15
第4節	発掘調査及び報告書作成の体制	15
第5節	日誌抄	17
第3章	高尾北ヤシキ遺跡	
第1節	遺跡の概要	19
第2節	弥生時代の遺構・遺物	23
1	掘立柱建物・柱穴列	25
2	段状遺構	25
3	土坑	29
4	墓	30
5	土器溜まり	30
6	その他	36
第3節	古墳時代～古代の遺構・遺物	38
1	竪穴住居	41
2	柱穴列	71
3	段状遺構	71
4	土坑	78
5	その他	81
第4節	中世の遺構・遺物	82
1	掘立柱建物・柱穴列・整地面	85
2	段状遺構	124
3	土坑	136
4	溝	142
5	集石	145

6	その他	147
第5節	谷部の包含層	150
1	包含層	150
第6節	その他の遺構・遺物	171
1	段状遺構	171
2	墓	171
3	土坑	171
第4章 高尾北ヤシキ古墳		
第1節	立地と調査前の状況	173
第2節	墳丘と周溝	175
第3節	横穴式石室	179
1	横穴式石室	179
2	横穴式石室内棺	181
3	横穴式石室内遺物出土状況	181
4	横穴式石室内出土遺物	183
第4節	竪穴式石室	194
1	竪穴式石室	194
2	竪穴式石室内遺物出土状況	196
3	竪穴式石室内出土遺物	197
第5節	周溝内出土遺物	198
第6節	土坑墓	201
1	概要	201
2	土坑墓	201
第5章 自然科学的分析・鑑定		
第1節	高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土遺物の胎土分析	岡山理科大学 白石 純 203
第2節	高尾北ヤシキ遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定	株式会社パレオ・ラボ 211
第3節	高尾北ヤシキ遺跡から出土した炭化種実	株式会社パレオ・ラボ 214
第4節	高尾北ヤシキ遺跡出土炭化材の樹種同定	株式会社パレオ・ラボ 215
第5節	高尾北ヤシキ遺跡出土須恵器の赤色付着物の材質分析	株式会社パレオ・ラボ 217
第6節	高尾北ヤシキ遺跡・桑山遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物および銅生産関連遺物の調査	日鉄テクノロジー株式会社 鈴木瑞穂 219
第7節	高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像について	大阪市立美術館 内藤 栄 245

第8節	高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像（懸仏）に関する所見	公益財団法人 元興寺文化財研究所	高橋平明	249
第9節	高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像（懸仏）の材質分析	公益財団法人 元興寺文化財研究所	植田直見	251
第6章 総括				
第1節	高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳の変遷			257
第2節	古墳時代のカマドについて			266
第3節	皿川下流域周辺における6～8世紀の手工業生産について			269
第4節	佐良山古墳群の展開と集落遺跡について			274
第5節	高尾北ヤシキ古墳の築造方法について			278
第6節	筒形土製品について			282
第7節	高尾北ヤシキ遺跡の中世集落について			291
第8節	高尾北ヤシキ遺跡から出土した鏡像について			299
遺構一覧表				309
遺物観察表ほか				315
新旧遺構名対照表				348
図 版				
報告書抄録				
奥付				

目 次

<p>第1図 遺跡の位置 (1/2,000,000) 1</p> <p>第2図 周辺の遺跡分布 (1/25,000) 2</p> <p>第3図 計画路線 (1/50,000) 9</p> <p>第4図 計画路線と調査対象遺跡 (1/4,000) 10</p> <p>第5図 発掘調査の工程 12</p> <p>第6図 高尾北ヤシキ遺跡の調査区・トレンチ配置 (1/1,500) 13</p> <p>第7図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳 遺構全体図① (1/800) 20</p> <p>第8図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳 遺構全体図② (1/400) 21</p> <p>第9図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳 遺構全体図③ (1/400) 22</p> <p>第10図 弥生時代遺構全体図① (1/800) 23</p> <p>第11図 弥生時代遺構全体図② (1/400) 24</p> <p>第12図 掘立柱建物1 (1/60) 25</p> <p>第13図 柱穴列1 (1/60) 25</p> <p>第14図 段状遺構1～3 (1/60)、段状遺構1出土 遺物 (1/4) 26</p> <p>第15図 段状遺構2・3出土遺物 (1/4・1/2) ... 27</p> <p>第16図 段状遺構4 (1/60) 27</p> <p>第17図 段状遺構4出土遺物 (1/4) 27</p> <p>第18図 段状遺構5・6 (1/60)、段状遺構5出土遺 物 (1/4) 28</p> <p>第19図 段状遺構7 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/2) 28</p> <p>第20図 土坑1 (1/30)、出土遺物 (1/4) 29</p> <p>第21図 土坑2 (1/30)、出土遺物 (1/4) 29</p> <p>第22図 土坑3 (1/30)、出土遺物 (1/4) 30</p> <p>第23図 土坑4 (1/30)、出土遺物 (1/4・1/3) .. 30</p> <p>第24図 墓1 (1/30) 30</p> <p>第25図 土器溜まり1 (1/100) 31</p> <p>第26図 土器溜まり1出土遺物① (1/4) 32</p> <p>第27図 土器溜まり1出土遺物② (1/4) 33</p> <p>第28図 土器溜まり1出土遺物③ (1/4) 34</p>	<p>第29図 土器溜まり1出土遺物④ (1/4・1/2・1/3) 35</p> <p>第30図 被熱面1 (1/30)、出土遺物 (1/4) 36</p> <p>第31図 ピット1～6出土遺物 (1/4・1/2・1/3) 36</p> <p>第32図 遺構に伴わない遺物 (1/4・1/2・1/3) 37</p> <p>第33図 古墳時代～古代遺構全体図① (1/800) 38</p> <p>第34図 古墳時代～古代遺構全体図② (1/400) 39</p> <p>第35図 古墳時代～古代遺構全体図③ (1/400) 40</p> <p>第36図 竪穴住居1 (1/60)、カマド周辺 (1/30) 41</p> <p>第37図 竪穴住居1出土遺物 (1/4) 42</p> <p>第38図 竪穴住居2 (1/60)、出土遺物 (1/4) ... 43</p> <p>第39図 竪穴住居3 (1/60) 43</p> <p>第40図 竪穴住居4 (1/60)、カマド周辺 (1/30) 44</p> <p>第41図 竪穴住居4出土遺物 (1/4) 45</p> <p>第42図 竪穴住居5 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/2) 46</p> <p>第43図 竪穴住居6・7、段状遺構12～16 (1/60) 47</p> <p>第44図 竪穴住居6 (1/60) 48</p> <p>第45図 竪穴住居7 (1/60)、カマド (1/30) ... 49</p> <p>第46図 竪穴住居7出土遺物 (1/4) 50</p> <p>第47図 竪穴住居8～10、段状遺構18・19 (1/60) 51</p> <p>第48図 竪穴住居8・9 (1/60) 52</p> <p>第49図 竪穴住居9出土遺物 (1/4・1/3) 53</p> <p>第50図 竪穴住居10 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/3) 54</p> <p>第51図 竪穴住居11 (1/60)、出土遺物 (1/4) .. 55</p>
--	---

第 52 図	竪穴住居 12 (1/60)、カマド (1/30) …	56	第 82 図	段状遺構 25・26 (1/60)、段状遺構 26 出土遺物 (1/4・1/2) ……………	77
第 53 図	竪穴住居 12 出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	57	第 83 図	段状遺構 27 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/3) ……………	78
第 54 図	竪穴住居 13～16、土坑 6 (1/60) ……	58	第 84 図	土坑 5 (1/30) ……………	79
第 55 図	竪穴住居 13 (1/60) ……………	59	第 85 図	土坑 5 出土遺物① (1/4) ……………	80
第 56 図	竪穴住居 14 (1/60)、出土遺物 (1/4) …	59	第 86 図	土坑 5 出土遺物② (1/3・1/1) ……………	81
第 57 図	竪穴住居 15 (1/60) ……………	60	第 87 図	土坑 6 (1/30) ……………	81
第 58 図	竪穴住居 15 出土遺物 (1/4・1/3) ……	61	第 88 図	遺構に伴わない遺物 (1/4) ……………	81
第 59 図	竪穴住居 15 - P 4 (1/30)、出土遺物 (1/6) ……………	62	第 89 図	中世遺構全体図① (1/800) ……………	82
第 60 図	竪穴住居 16 (1/60) ……………	62	第 90 図	中世遺構全体図② (1/400) ……………	83
第 61 図	竪穴住居 16 出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	63	第 91 図	中世遺構全体図③ (1/400) ……………	84
第 62 図	竪穴住居 15・16 出土遺物 (1/4) ……	63	第 92 図	柱穴列 3～6 (1/60) ……………	85
第 63 図	竪穴住居 17～21 (1/60) ……………	64	第 93 図	整地面 1～4 平・断面図 (1/400) ……	86
第 64 図	竪穴住居 17 (1/60)、出土遺物 (1/4) …	65	第 94 図	整地面 1・2 遺構配置図 (1/150) ……	87
第 65 図	竪穴住居 18・19 (1/60) ……………	66	第 95 図	整地面 1・2 断面 (1/150) ……………	88
第 66 図	竪穴住居 19 カマド (1/30) ……………	67	第 96 図	掘立柱建物 2 (1/60) ……………	89
第 67 図	竪穴住居 19 出土遺物 (1/4) ……………	68	第 97 図	掘立柱建物 2 出土遺物 (1/3) ……	89
第 68 図	竪穴住居 20 (1/60)、出土遺物 (1/4) …	69	第 98 図	掘立柱建物 3 (1/60)、出土遺物 (1/4) ……………	90
第 69 図	竪穴住居 21 (1/60) ……………	69	第 99 図	掘立柱建物 4 (1/60)、出土遺物 (1/4) ……………	91
第 70 図	竪穴住居 21 出土遺物 (1/4・1/3) ……	70	第 100 図	掘立柱建物 3・4 周辺出土遺物 (1/4) ……………	91
第 71 図	竪穴住居 17～21 周辺出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	70	第 101 図	掘立柱建物 5 (1/60)、出土遺物 (1/4) ……………	92
第 72 図	柱穴列 2 (1/60) ……………	71	第 102 図	掘立柱建物 6 (1/60) ……………	93
第 73 図	段状遺構 8・9 (1/60)、出土遺物 (1/4) ……………	71	第 103 図	掘立柱建物 7 (1/60) ……………	93
第 74 図	段状遺構 10 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/3) ……………	72	第 104 図	掘立柱建物 8 (1/60) ……………	94
第 75 図	段状遺構 11 (1/60)、出土遺物 (1/4) …	73	第 105 図	柱穴列 7 (1/60) ……………	94
第 76 図	段状遺構 12～15 (1/60) ……………	73	第 106 図	柱穴列 8 (1/60) ……………	95
第 77 図	段状遺構 15 出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	74	第 107 図	柱穴列 9 (1/60) ……………	95
第 78 図	段状遺構 16～19 (1/60・1/30)、段状遺構 16・19 出土遺物 (1/4) ……………	75	第 108 図	柱穴列 10 (1/60)、出土遺物 (1/4) ……	95
第 79 図	段状遺構 20 (1/60)、出土遺物 (1/4) …	76	第 109 図	柱穴列 11 (1/60) ……………	96
第 80 図	段状遺構 21～24 (1/60) ……………	76	第 110 図	柱穴列 12 (1/60)、出土遺物 (1/4) ……	96
第 81 図	段状遺構 21～24 出土遺物 (1/4) ……	77	第 111 図	柱穴列 13 (1/60) ……………	97
			第 112 図	柱穴列 14 (1/60) ……………	97
			第 113 図	柱穴列 15 (1/60) ……………	97

第 114 图	柱穴列 16 (1/60)	98	第 148 图	整地面 4 遺構配置图 (1/150)	119
第 115 图	柱穴列 17 (1/60)	98	第 149 图	掘立柱建物 17・18 (1/60)	120
第 116 图	柱穴列 18 (1/60)	98	第 150 图	掘立柱建物 17・18 出土遺物 (1/4・1/3)	121
第 117 图	柱穴列 19 (1/60)	99	第 151 图	掘立柱建物 19～21 (1/60)、出土遺物 (1/4)	122
第 118 图	柱穴列 20 (1/60)	99	第 152 图	柱穴列 38・39 (1/60)	123
第 119 图	柱穴列 21 (1/60)	99	第 153 图	柱穴列 40 (1/60)	123
第 120 图	整地面 2 遺構配置图 (1/150)	100	第 154 图	段状遺構 28 (1/60)	124
第 121 图	整地面 2 南半 (1/100)	101	第 155 图	段状遺構 29 (1/60)	124
第 122 图	整地面 2 出土遺物 (1/4・1/3)	102	第 156 图	段状遺構 30 (1/60)	124
第 123 图	掘立柱建物 9 (1/60)、出土遺物 (1/4)	103	第 157 图	段状遺構 31、集石 1 (1/60)	125
第 124 图	掘立柱建物 10 (1/60)	104	第 158 图	段状遺構 31 断面① (1/60)	126
第 125 图	掘立柱建物 11 (1/60)	105	第 159 图	段状遺構 31 断面② (1/60)	127
第 126 图	掘立柱建物 12 (1/60)	106	第 160 图	段状遺構 31 出土遺物① (1/4)	128
第 127 图	掘立柱建物 12 断面 (1/60)、出土遺物 (1/4)	107	第 161 图	段状遺構 31 出土遺物② (1/4・1/3) ..	129
第 128 图	柱穴列 22 (1/60)	107	第 162 图	段状遺構 31 - P 1 (1/5)	130
第 129 图	柱穴列 23 (1/60)	108	第 163 图	段状遺構 31 - P 1 出土遺物 (1/2) ..	130
第 130 图	柱穴列 24 (1/60)	108	第 164 图	鏡像・尊像各部名称 (1/2)	131
第 131 图	柱穴列 25 (1/60)	109	第 165 图	段状遺構 31 - 集石 1 (1/30)	132
第 132 图	柱穴列 26 (1/60)	109	第 166 图	段状遺構 31 - 集石 1 出土遺物 (1/4)	132
第 133 图	柱穴列 27 (1/60)	109	第 167 图	段状遺構 32 (1/60)、出土遺物 (1/4)	133
第 134 图	整地面 3 遺構配置图 (1/150)	110	第 168 图	段状遺構 33 (1/60)、出土遺物 (1/4)	134
第 135 图	整地面 3 断面 (1/150)	111	第 169 图	段状遺構 34 (1/60)	135
第 136 图	掘立柱建物 13 (1/60)	111	第 170 图	段状遺構 35 (1/60)、出土遺物 (1/4)	135
第 137 图	掘立柱建物 14・15 (1/60)	112	第 171 图	段状遺構 36 (1/60)	136
第 138 图	掘立柱建物 14・15 断面 (1/60)、出土遺物 (1/4)	113	第 172 图	土坑 7 (1/30)	136
第 139 图	掘立柱建物 16 (1/60)	114	第 173 图	土坑 8 (1/30)	137
第 140 图	掘立柱建物 16 出土遺物 (1/3・1/2) ..	114	第 174 图	土坑 9 (1/30)、出土遺物 (1/4)	137
第 141 图	柱穴列 28 (1/60)	115	第 175 图	土坑 10・11 (1/30)	138
第 142 图	柱穴列 29 (1/60)	115	第 176 图	土坑 12 (1/30)	138
第 143 图	柱穴列 30 (1/60)	115	第 177 图	土坑 13～16 (1/30)、土坑 14・16 出土遺 物 (1/4・1/3)	139
第 144 图	柱穴列 31・32 (1/60)、出土遺物 (1/4)	116	第 178 图	土坑 17 (1/30)、出土遺物 (1/4・1/3) ..	140
第 145 图	柱穴列 33・34 (1/60)	117			
第 146 图	柱穴列 35 (1/60)	117			
第 147 图	柱穴列 36・37、溝 6 (1/60)	118			

第 179 図	土坑 18 (1/30)	140	第 212 図	包含層 1 出土遺物⑯ (1/3)	169
第 180 図	土坑 19 (1/30)	140	第 213 図	包含層 1 出土遺物⑰ (1/4)	170
第 181 図	土坑 20 ~ 22 (1/30)、土坑 20 出土遺物 (1/4)	141	第 214 図	段状遺構 37 (1/60)、出土遺物 (1/4)	171
第 182 図	土坑 23、溝 1 (1/60)	141	第 215 図	墓 2・3 (1/30)、墓 3 出土遺物 (1/3)	171
第 183 図	土坑 23 出土遺物 (1/4・1/2)	142	第 216 図	土坑 24 ~ 26 (1/30)	172
第 184 図	溝 1 出土遺物 (1/4・1/3)	142	第 217 図	炉 1 (1/20)	172
第 185 図	溝 2 (1/100)、出土遺物 (1/4)	143	第 218 図	高尾北ヤシキ古墳周辺図 (1/1,500) ..	173
第 186 図	溝 3 ~ 5 (1/60)、溝 3・5 出土遺物 (1/4・1/3)	144	第 219 図	高尾北ヤシキ古墳・土坑墓全体図 (1/400)	174
第 187 図	溝 6 出土遺物 (1/4)	145	第 220 図	調査前の地形 (1/150)	174
第 188 図	集石 1 ~ 4 配置図 (1/100)	145	第 221 図	高尾北ヤシキ古墳墳丘 (1/150)	175
第 189 図	集石 2 (1/30)	146	第 222 図	高尾北ヤシキ古墳墳丘・石室内土層断面① (1/100)	176
第 190 図	集石 3 (1/30)	146	第 223 図	高尾北ヤシキ古墳墳丘・石室内土層断面② (1/100・1/80)	177
第 191 図	集石 4 (1/30)、出土遺物 (1/4)	147	第 224 図	横穴式石室掘り方・墳丘構築前地山整形段 (1/150)	178
第 192 図	ピット 7 ~ 13 出土遺物 (1/4)	148	第 225 図	高尾北ヤシキ古墳横穴式石室 (1/60)	179
第 193 図	遺構に伴わない遺物① (1/4)	148	第 226 図	横穴式石室積み直し掘り方・土層断面 (1/60)	180
第 194 図	遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3・1/2)	149	第 227 図	横穴式石室遺物出土状況① (1/30・1/20)	182
第 195 図	包含層 1 の範囲・グリッド (1/400)	150	第 228 図	横穴式石室遺物出土状況② (1/30) ..	183
第 196 図	包含層 1 断面 (1/150)	151	第 229 図	横穴式石室出土陶棺① (1/20)	184
第 197 図	包含層 1 出土遺物① (1/4)	153	第 230 図	横穴式石室出土陶棺② (1/20)	185
第 198 図	包含層 1 出土遺物② (1/4)	154	第 231 図	横穴式石室出土筒形土製品① (1/6) ..	186
第 199 図	包含層 1 出土遺物③ (1/4)	155	第 232 図	横穴式石室出土筒形土製品② (1/6) ..	187
第 200 図	包含層 1 出土遺物④ (1/4)	156	第 233 図	横穴式石室内出土遺物① (1/4)	189
第 201 図	包含層 1 出土遺物⑤ (1/4・1/6)	157	第 234 図	横穴式石室内出土遺物② (1/4)	190
第 202 図	包含層 1 出土遺物⑥ (1/4)	158	第 235 図	横穴式石室内出土遺物③ (1/3)	191
第 203 図	包含層 1 出土遺物⑦ (1/4)	159	第 236 図	横穴式石室内出土遺物④ (1/3・1/2) ..	192
第 204 図	包含層 1 出土遺物⑧ (1/4)	160	第 237 図	横穴式石室内出土遺物⑤ (1/2・1/1) ..	193
第 205 図	包含層 1 出土遺物⑨ (1/4)	161	第 238 図	竪穴式石室天井石検出状況・土層断面 (1/30)	194
第 206 図	包含層 1 出土遺物⑩ (1/4)	162	第 239 図	竪穴式石室・掘り方 (1/30)	195
第 207 図	包含層 1 出土遺物⑪ (1/2)	164			
第 208 図	包含層 1 出土遺物⑫ (1/2・1/3)	165			
第 209 図	包含層 1 出土遺物⑬ (1/3)	166			
第 210 図	包含層 1 出土遺物⑭ (1/2・1/6・1/3・1/10)	167			
第 211 図	包含層 1 出土遺物⑮ (1/3・1/2)	168			

第 240 図	竪穴式石室遺物出土状況 (1/30) ……	196	第 269 図	分析箇所 9 の XRF スペクトル ……	256
第 241 図	竪穴式石室出土遺物 (1/4・1/2・1/1・1/3) ……………	197	第 270 図	分析箇所 10 の XRF スペクトル ……	256
第 242 図	周溝出土遺物① (1/4) ……	198	第 271 図	高尾北ヤシキ遺跡・古墳における遺構の変 遷 (1/1,000) ……	258
第 243 図	周溝出土遺物② (1/4) ……	199	第 272 図	高尾北ヤシキ遺跡の弥生時代石器の出土数 ……………	259
第 244 図	周溝出土遺物③ (1/3・1/2) ……	200	第 273 図	高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳総括 図① ……	260
第 245 図	土坑墓 1 (1/30)、出土遺物 (1/4) ……	201	第 274 図	高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳総括 図② ……	261
第 246 図	土坑墓 2 (1/30)、出土遺物 (1/4) ……	202	第 275 図	美作地域における古墳時代～古代のカマド (1/60) ……	267
第 247 図	高尾北ヤシキ古墳・遺構出土須恵器の産地 推定① ……	206	第 276 図	高尾北ヤシキ遺跡・桑山遺跡の製鉄・鍛冶 関連遺物出土量 ……	269
第 248 図	高尾北ヤシキ古墳・遺構出土須恵器の産地 推定② ……	206	第 277 図	皿川下流域周辺における 6～8 世紀の生産 遺跡の分布と関連資料 (1/50,000・1/150・ 1/6) ……	271
第 249 図	高尾北ヤシキ古墳・遺構出土須恵器の産地 推定③ ……	207	第 278 図	佐良山地域の地形と遺跡 (1/25,000) ……	275
第 250 図	各遺構出土須恵器の比較① ……	207	第 279 図	佐良山地域における遺跡の動態 ……	276
第 251 図	各遺構出土須恵器の比較② ……	208	第 280 図	同一墳丘案築造工程模式図 ……	279
第 252 図	各遺構出土須恵器の比較③ ……	208	第 281 図	高尾北ヤシキ古墳墳丘構築過程 (1/150) ……………	280
第 253 図	高尾北ヤシキ古墳出土陶棺と津山市内陶棺 の比較① ……	209	第 282 図	別古墳の周溝外縁推定範囲 (1/200) ……	281
第 254 図	高尾北ヤシキ古墳出土陶棺と津山市内陶棺 の比較② ……	209	第 283 図	筒形土製品出土遺跡の分布 ……	282
第 255 図	高尾北ヤシキ遺跡出土天目茶碗と他地域の 胎土比較① ……	210	第 284 図	各遺跡出土筒形土製品① (1/12) ……	284
第 256 図	高尾北ヤシキ遺跡出土天目茶碗と他地域の 胎土比較② ……	210	第 285 図	各遺跡出土筒形土製品② (1/12) ……	285
第 257 図	暦年較正結果 ……	213	第 286 図	高尾北ヤシキ遺跡における中世遺構の変遷 (1/1,000) ……	293
第 258 図	赤色付着物の赤外分光スペクトル図 ……	218	第 287 図	津山市域における主な中世の掘立柱建物 (1/1,000) ……	295
第 259 図	FeO - TiO ₂ 二元平衡状態図 ……	232	第 288 図	皿川下流域周辺における中世遺跡の分布 (1/30,000) ……	297
第 260 図	高尾北ヤシキ遺跡出土懸仏 (鏡像) の線描 と合成画像 ……	250	第 289 図	岡山県における遺跡出土御正体 (1/4) ……………	300
第 261 図	分析箇所 1 の XRF スペクトル ……	252	第 290 図	中世の御正体出土遺跡・遺構の種別・件数 ……………	301
第 262 図	分析箇所 2 の XRF スペクトル ……	252	第 291 図	ピットに埋納された御正体・銅鏡と出土状 況 (1/20・1/4) ……	302
第 263 図	分析箇所 3 の XRF スペクトル ……	253			
第 264 図	分析箇所 4 の XRF スペクトル ……	253			
第 265 図	分析箇所 5 の XRF スペクトル ……	254			
第 266 図	分析箇所 6 の XRF スペクトル ……	254			
第 267 図	分析箇所 7 の XRF スペクトル ……	255			
第 268 図	分析箇所 8 の XRF スペクトル ……	255			

表 目 次

第 1 表	本書関連調査一覧	12	第 11 表	供試材の履歴と調査項目	232
第 2 表	文化財保護法に基づく提出書類一覧	18	第 12 表	供試材の化学組成	233
第 3 表	高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土遺物の胎土分析 結果 (%)	205	第 13 表	高尾北ヤシキ遺跡の弥生時代石器の出土数	259
第 4 表	測定試料および処理	211	第 14 表	美作地域における古墳時代～古代のカマド 一覧	266
第 5 表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	212	第 15 表	高尾北ヤシキ遺跡・桑山遺跡出土製鉄・鍛冶 関連遺物集計表	269
第 6 表	高尾北ヤシキ遺跡から出土した炭化種実	214	第 16 表	筒形土製品出土遺跡	283
第 7 表	高尾北ヤシキ遺跡出土炭化材の樹種同定結果	215	第 17 表	津山市域における中世の掘立柱建物の床面積 別軒数と集落の時期	295
第 8 表	須恵器内面付着物の特徴	217	第 18 表	岡山県における中世の御正体一覧	300
第 9 表	生漆の赤外吸収位置とその強度	217	第 19 表	中世の御正体出土遺跡一覧	303
第 10 表	内面付着物の化学組成 (単位: 重量%)	218			

写 真 目 次

写真 1	高尾北ヤシキ古墳の調査風景 (北から)	14	写真 16	埴輪 561	157
写真 2	埋蔵文化財保護調査指導会	14	写真 17	陶棺手前須恵器出土状況 (南東から)	182
写真 3	高尾北ヤシキ遺跡の調査風景 (北東から)	14	写真 18	竪穴式石室作業風景 (南東から)	196
写真 4	高尾北ヤシキ遺跡現地説明会	14	写真 19	竪穴式石室作業風景 (北西から)	196
写真 5	筒形土製品の復元作業	15	写真 20	土坑墓 1 (北東から)	202
写真 6	高尾北ヤシキ遺跡の全景 (南西から)	19	写真 21	土坑墓 2 遺物出土状況 (東から)	202
写真 7	竪穴住居 1 作業風景 (東から)	39	写真 22	高尾北ヤシキ遺跡出土の炭化種実	214
写真 8	竪穴住居 4 作業風景 (南西から)	39	写真 23	高尾北ヤシキ遺跡出土炭化材の走査型電子顕 微鏡写真	216
写真 9	竪穴住居 9・10 作業風景 (北から)	39	写真 24	分析試料	218
写真 10	竪穴住居 12～21 作業風景 (西から)	39	写真 25	炉壁・鉄鉱石の顕微鏡組織	234
写真 11	整地面 1・2 オルソ画像 (1/300)	102	写真 26	製錬滓の顕微鏡組織	235
写真 12	鏡像 M 24 赤外線写真 (拡大)	131	写真 27	製錬滓・鍛冶滓 (含鉄) の顕微鏡組織	236
写真 13	段状遺構 31 - 集石 1 (南東から)	133	写真 28	鍛冶滓 (含鉄) の顕微鏡組織・E PMA 調査	237
写真 14	溝 1 土層断面 (南西から)	142	写真 29	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	238
写真 15	溝 1 完掘状況 (東から)	142	写真 30	銅滓の顕微鏡組織・E PMA 調査	239

写真 31	銅滓の E P M A 調査・X 線回析測定	240	写真 36	十一面観音鏡像 表・裏	246
写真 32	炉壁の顕微鏡組織	241	写真 37	文殊菩薩立像	246
写真 33	鉄鉱石・製錬滓の顕微鏡組織	242	写真 38	春日本地仏曼荼羅 部分	247
写真 34	製錬滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	243	写真 39	春日鹿曼荼羅 部分	247
写真 35	鉄塊系遺物の顕微鏡組織・E P M A 調査・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織	244	写真 40	五尊懸仏 部分	248
			写真 41	分析箇所 (○: 蛍光 X 線分析箇所)	251

巻頭図版目次

巻頭図版 1	1 調査地遠景 (南から)		巻頭図版 5	1 高尾北ヤシキ古墳全景 (南東から)	
	2 高尾北ヤシキ遺跡 2 区・高尾北ヤシキ古墳近景 (南西から)			2 高尾北ヤシキ古墳 竪穴式石室 (南東から)	
巻頭図版 2	1 高尾北ヤシキ遺跡 3・4 区全景 (南から)			3 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室 (南東から)	
	2 高尾北ヤシキ遺跡 3 区南半、4 区全景 (北東から)		巻頭図版 6	1 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室 遺物出土状況 (南東から)	
巻頭図版 3	1 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居 4 遺物出土状況 (南から)			2 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室 遺物出土状況 (上が北東)	
	2 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居 8~10 (東から)		巻頭図版 7	1 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土陶棺	
	3 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居 12 カマド (西から)			2 高尾北ヤシキ古墳出土遺物	
	4 高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居 19 カマド遺物出土状況 (南西から)		巻頭図版 8	1 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土皮袋形瓶	
	5 高尾北ヤシキ遺跡出土遺物			2 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土玉類	
巻頭図版 4	1 高尾北ヤシキ遺跡 段状遺構 31-P 1 鏡像出土状況 (南から)			3 高尾北ヤシキ古墳 竪穴式石室出土耳環	
	2 高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像			4 高尾北ヤシキ古墳 横穴式石室出土筒形土製品	

図版目次

図版 1	1 調査地遠景 (南西上空から)		2 3 区南半・4 区オルソ画像 (1/500)
	2 調査地遠景 (東上空から)		図版 4
図版 2	1 調査地遠景 (南東上空から)		1 3 区南半・4 区北半全景 (南東上空から)
	2 2 区全景、3・4 区調査前 (東上空から)		2 4 区全景 (南西上空から)
図版 3	1 3 区南半・4 区全景 (北東上空から)		図版 5
			1 掘立柱建物 1、柱穴列 1、竪穴住居 5 (北東から)

	2	段状遺構1～3、竪穴住居1 (東から)			(南西から)
図版6	1	段状遺構1～3、竪穴住居1 (南から)		5	竪穴住居7カマド煙道完掘状況
	2	段状遺構4・10 (南から)			(南西から)
図版7	1	段状遺構5 (南から)	図版13	1	竪穴住居8～10、段状遺構18・19
	2	段状遺構7土層断面 (南西から)			(東から)
	3	土坑1 (東から)		2	竪穴住居8～10、段状遺構18・19
	4	土坑2遺物出土状況 (東から)			(西から)
	5	土坑3 (南西から)	図版14	1	竪穴住居9炭化材等検出状況 (南から)
	6	土坑4 (北東から)		2	竪穴住居9・10土層断面 (南西から)
	7	墓1 (南から)		3	竪穴住居9北端炭化材検出状況
	8	土器溜まり1土層断面 (北東から)			(南西から)
図版8	1	竪穴住居1 (東から)		4	竪穴住居9遺物 [135・143] 出土状況
	2	竪穴住居1カマド周辺検出状況 (東から)			(南から)
	3	竪穴住居1カマド南側遺物出土状況		5	竪穴住居9遺物 [138・140] 出土状況
		(南から)			(東から)
	4	竪穴住居1カマド北側の溝 (東から)	図版15	1	竪穴住居11 (南東から)
	5	竪穴住居1煙道完掘状況 (東から)		2	竪穴住居11-P1・3土層断面 (南西から)
図版9	1	竪穴住居2 (北東から)		3	竪穴住居11-P2・4土層断面 (南西から)
	2	竪穴住居2土層断面、床面検出状況		4	竪穴住居11-P2・4完掘 (南西から)
		(南から)		5	竪穴住居11壁体溝内遺物出土状況
	3	竪穴住居2遺物 [108] 出土状況 (東から)			(東から)
	4	竪穴住居2遺物 [110] 出土状況 (東から)	図版16	1	竪穴住居12～21 (南西上空から)
	5	竪穴住居2-P1 (南東から)		2	竪穴住居12～21 (北西上空から)
図版10	1	竪穴住居4遺物出土状況 (南西から)	図版17	1	竪穴住居12 (南西から)
	2	竪穴住居4遺物出土状況 (東から)		2	竪穴住居12遺物出土状況 (南東から)
	3	竪穴住居4遺物 [111] 出土状況 (東から)		3	竪穴住居12-P1土層断面 (西から)
	4	竪穴住居4カマド・煙道完掘状況		4	竪穴住居12カマド (南西から)
		(南東から)		5	竪穴住居12カマド袖石 (西から)
図版11	1	竪穴住居5 (南西から)	図版18	1	竪穴住居13～16 (南東から)
	2	竪穴住居5遺物 [120・124] 出土状況		2	竪穴住居15遺物出土状況① (南東から)
		(東から)		3	竪穴住居15遺物出土状況② (南から)
	3	竪穴住居5遺物 [121] 出土状況 (東から)		4	竪穴住居15遺物 [187] 出土状況 (南から)
	4	竪穴住居6・7、段状遺構12～16、		5	竪穴住居15-P4被熱石出土状況
		土坑5 (南東から)			(南東から)
図版12	1	竪穴住居6・7、段状遺構16 (南西から)	図版19	1	竪穴住居16遺物出土状況 (南東から)
	2	竪穴住居6・7土層断面 (南から)		2	竪穴住居16紡錘車S33出土状況 (西から)
	3	竪穴住居7遺物 [127] 出土状況 (北東から)		3	竪穴住居16北東側遺物出土状況 (南から)
	4	竪穴住居7カマド煙道土層断面		4	竪穴住居16-P2周辺遺物出土状況

- (南から)
- 5 竪穴住居 16 遺物 [193] 出土状況 (南から)
- 図版 20 1 竪穴住居 17 ~ 20 (東から)
2 竪穴住居 17 (東から)
- 図版 21 1 竪穴住居 17 壁体溝遺物出土状況
(南西から)
2 竪穴住居 19 土層断面、遺物出土状況
(南西から)
3 竪穴住居 19 遺物出土状況 (南東から)
- 図版 22 1 竪穴住居 19 遺物 [228] 出土状況
(南東から)
2 竪穴住居 19 カマド周辺遺物出土状況
(南から)
3 竪穴住居 19 遺物 [233 ~ 235] 出土状況
(南東から)
4 竪穴住居 19 遺物 [233] 出土状況 (南から)
5 竪穴住居 19 カマド・煙道検出状況
(南から)
6 竪穴住居 19 カマド・煙道完掘状況
(南から)
7 竪穴住居 18 ~ 21 (南西から)
8 竪穴住居 20 (南東から)
- 図版 23 1 竪穴住居 21、段状遺構 26 (南西から)
2 竪穴住居 21 床面検出状況 (北西から)
3 竪穴住居 21 遺物出土状況 (東から)
4 竪穴住居 21 遺物出土状況 (北東から)
- 図版 24 1 柱穴列 2、段状遺構 24 (北東から)
2 段状遺構 9 (北から)
3 段状遺構 10 (南から)
- 図版 25 1 段状遺構 11 (北東から)
2 段状遺構 12 ~ 15 (北東から)
3 段状遺構 12・13 (東から)
- 図版 26 1 段状遺構 18 (北東から)
2 段状遺構 19、竪穴住居 8 ~ 10 (西から)
3 段状遺構 19 遺物出土状況 (西から)
- 図版 27 1 段状遺構 24 (北から)
2 段状遺構 21 ~ 23 土層断面 (北から)
3 段状遺構 26 (北東から)
- 図版 28 1 段状遺構 27 (東から)
2 段状遺構 27 遺物出土状況 (北から)
- 図版 29 1 土坑 5 遺物出土状況 (東から)
2 土坑 5 土層断面 (南から)
3 土坑 5 遺物出土状況 (北西から)
4 土坑 5 遺物 [306] 出土状況 (北から)
5 土坑 6 (南から)
- 図版 30 1 整地面 1 ~ 4 (北東上空から)
2 整地面 1 ~ 4 (南東上空から)
- 図版 31 1 整地面 1 ~ 4 (南西上空から)
2 整地面 1・2 (南東上空から)
- 図版 32 1 整地面 1 (南東から)
2 整地面 1、掘立柱建物 2 ~ 8、
柱穴列 12 ~ 17 (北東から)
- 図版 33 1 整地面 1 遺構検出状況 (南西から)
2 整地面 1、掘立柱建物 2 ~ 4、
柱穴列 11 ~ 13 (南西から)
- 図版 34 1 整地面 1、掘立柱建物 2 ~ 4、
柱穴列 7・11 ~ 13 (北から)
2 整地面 1、掘立柱建物 5 ~ 8、柱穴列 14
(北西から)
- 図版 35 1 整地面 2 (南東から)
2 整地面 2、掘立柱建物 9 ~ 12、
柱穴列 25 ~ 27 (北東から)
- 図版 36 1 整地面 2、掘立柱建物 9 ~ 12、
柱穴列 25・26 (北から)
2 整地面 2、掘立柱建物 9 ~ 12、
溝 3 ~ 5 (南西から)
- 図版 37 1 整地面 3 (北から)
2 整地面 3、掘立柱建物 13 ~ 16、
柱穴列 28 ~ 35 (北東から)
- 図版 38 1 整地面 3、掘立柱建物 13 ~ 16、
柱穴列 30 ~ 35 (東から)
2 整地面 3、掘立柱建物 13 ~ 16、
柱穴列 31 ~ 34 (南から)
- 図版 39 1 整地面 4 (南東から)
2 整地面 4、掘立柱建物 17・18、
柱穴列 38 ~ 40 (東から)

- 図版 40 1 整地面 4、掘立柱建物 17・18、
柱穴列 40 (南東から)
2 整地面 4、掘立柱建物 17・18、
柱穴列 40 (北東から)
- 図版 41 1 整地面 4、掘立柱建物 19～21 (南東から)
2 整地面 3、溝 6 (北から)
3 掘立柱建物 2 - P 2 石出土状況 (北から)
4 掘立柱建物 12 - P12 石出土状況 (南から)
- 図版 42 1 段状遺構 28 (南から)
2 段状遺構 29 (東から)
3 段状遺構 31 土層断面 (北東から)
4 段状遺構 31 - 集石 1・2 検出状況
(北東から)
- 図版 43 1 段状遺構 31 (北東から)
2 段状遺構 31 (北から)
- 図版 44 1 段状遺構 31 北半 (南から)
2 段状遺構 31、柱穴列 22・23 (南から)
- 図版 45 1 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況
(北東から)
2 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況①
(南から)
3 段状遺構 31 - P 1 鏡像上面の土層断面
(北から)
4 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況②
(南から)
5 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況③
(南から)
6 段状遺構 31 - P 1 土層断面① (東から)
7 段状遺構 31 - P 1 土層断面② (東から)
8 段状遺構 31 - P 1 完掘状況 (南から)
- 図版 46 1 段状遺構 20・32 (北東から)
2 段状遺構 33 (南から)
3 段状遺構 35 (北東から)
- 図版 47 1 土坑 7 (北東から)
2 土坑 8 (南東から)
3 土坑 9 土層断面 (南西から)
4 土坑 9 完掘状況 (東から)
5 土坑 10・11 (南から)
6 土坑 12 (東から)
7 土坑 14 (南から)
8 土坑 15 (東から)
- 図版 48 1 土坑 16 (東から)
2 土坑 17 (南東から)
3 土坑 19 (南西から)
4 土坑 20 (南東から)
5 土坑 23 土層断面 (南から)
6 溝 1 (西から)
7 溝 2 (東から)
8 溝 3～5 土層断面 (東から)
- 図版 49 1 段状遺構 31 - 集石 1 (東から)
2 集石 2 (南から)
3 集石 3 (北東から)
4 集石 4 (北西から)
5 包含層 1 西側土層断面 (北東から)
- 図版 50 1 包含層 1 中央西半土層断面 (東から)
2 包含層 1 中央東半土層断面 (北東から)
3 包含層 1 東側土層断面 (北から)
- 図版 51 1 段状遺構 4 出土土器
2 土坑 2 出土土器
3 土器溜まり 1 出土土器
4 P 3 出土土器
5 竪穴住居 1 出土土器
6 竪穴住居 2 出土土器
7 竪穴住居 5 出土土器
- 図版 52 1 竪穴住居 4 出土土器
2 竪穴住居 7 出土土器
3 竪穴住居 9・10 出土土器
- 図版 53 1 竪穴住居 10 出土土器
2 竪穴住居 12 出土土器
3 竪穴住居 15・16 出土土器
4 竪穴住居 17 出土土器
5 竪穴住居 19 出土土器
- 図版 54 1 竪穴住居 21 出土土器
2 段状遺構 8・10 出土土器
3 段状遺構 19・20・27 出土土器
- 図版 55 1 土坑 5 出土土器

- 2 柱穴列 12 出土土器
- 3 整地面 2、掘立柱建物 17・18 出土土器
- 4 整地面 2 出土土器
- 5 段状遺構 31 出土土器
- 6 段状遺構 31 一集石 1 出土土器
- 図版 56 1 段状遺構 35 出土土器
- 2 溝 2 出土土器
- 3 集石 4 出土土器
- 4 包含層 1 出土土器
- 図版 57 1 打製石器・剥片
- 2 鑿状片刃石斧
- 3 磨製石包丁未・完成品
- 4 太型蛤刃石斧
- 5 扁平片刃石斧未・完成品
- 図版 58 1 火打石
- 2 小円礫
- 3 砥石
- 4 叩石
- 5 紡錘車
- 6 石硯
- 7 玉類
- 8 鉄鉱石
- 9 その他の石製品
- 10 土器円板
- 図版 59 1 炉壁
- 2 陶棺
- 3 平瓦
- 4 土錘
- 5 古墳時代の鉄製品
- 6 火打金
- 7 楔
- 8 鉄釘
- 9 鉄滓
- 10 銅滓
- 図版 60 1 鏡像
- 2 鏡像の X 線画像
- 3 鏡像の赤外線画像 (鏡面)
- 4 鏡像の三次元画像
- 図版 61 1 高尾北ヤシキ古墳調査前 (西から)
- 2 横穴式石室天井石検出状況 (南西から)
- 3 横穴式石室埋没状況 (南東から)
- 図版 62 1 高尾北ヤシキ古墳全景 (東から)
- 2 高尾北ヤシキ古墳全景 (西から)
- 図版 63 1 横穴式石室 (南東から)
- 2 横穴式石室奥壁 (南東から)
- 図版 64 1 横穴式石室右側壁 (西から)
- 2 横穴式石室左側壁 (東から)
- 図版 65 1 竪穴式石室天井石検出状況 (北東から)
- 2 竪穴式石室 (南西から)
- 3 竪穴式石室 (南東から)
- 図版 66 1 横穴式石室作業風景 (南東から)
- 2 横穴式石室作業風景 (東から)
- 3 横穴式石室遺物出土状況 (上が北東)
- 図版 67 1 横穴式石室陶棺片出土状況 (南東から)
- 2 陶棺内石材・陶棺片出土状況 (南東から)
- 3 陶棺脚部下の須恵器出土状況 (東から)
- 4 筒形土製品検出状況 (南東から)
- 5 筒形土製品口縁部片出土状況 (南東から)
- 6 筒形土製品内破片出土状況 (南東から)
- 図版 68 1 墳丘土層断面 (南東から)
- 2 墳丘土層断面 (南から)
- 3 墳丘内礫群出土状況 (北東から)
- 図版 69 1 墳丘土層断面 A-B 墳丘内礫群 (南東から)
- 2 横穴式石室積み直し掘り方 (南から)
- 3 土坑墓 1 (南東から)
- 4 土坑墓 2 (南東から)
- 図版 70 横穴式石室出土陶棺
- 図版 71 横穴式石室出土筒形土製品・土器
- 図版 72 横穴式石室出土土器①
- 図版 73 1 横穴式石室出土土器②
- 2 横穴式石室出土鉄器
- 3 横穴式石室出土玉類
- 図版 74 1 竪穴式石室出土遺物
- 2 周溝出土土器
- 3 周溝出土鉄器
- 4 土坑墓 1 出土遺物
- 5 土坑墓 2 出土遺物

第1章 地理的・歴史的環境

遺跡の位置と地勢

高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳は、岡山県北東部の津山市高尾・平福に所在し、古代の行政区域では美作国久米郡長岡郷にあたる。高尾北ヤシキ古墳は、学史上著名な佐良山古墳群⁽¹⁾の一角をなしている。

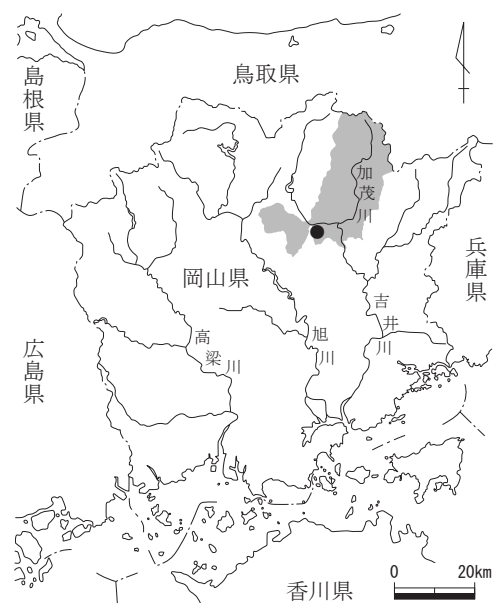
津山市は、標高1,000 m前後の山々が連なる中国山地脊梁部の南から吉備高原の北縁まで、南北に長いおよそ500 km²の市域で、調査地はその南端に位置する。市の中心部が所在する津山盆地は、吉井川と加茂川が合流する付近に形成された標高約75～200 mの盆地である。岡山県東部を北から南に貫いて流れる吉井川は、この津山盆地で東西方向に大きく向きを変え、吉井川及びそれに注ぐ諸河川の流域にいくつもの小盆地を形成し、それらが東西に連なるように展開している。このような地勢から、津山盆地は河川に沿って美作地域を東西につなぐとともに、吉井川や津山往来（現国道53号）を介した備前地域との交通においても重要な位置を占めていることが分かる。さらに、盆地を横切って通る出雲道や、加茂川を遡る加茂往来、因幡道などで山陰地方にも通じており、東西及び南北に至る交通の結節点となっている。

旧石器時代

美作地域において人々の生活の最初の痕跡が認められるのは旧石器時代である。この時代の遺跡は、真庭市蒜山高原や鏡野町恩原高原など中国山地脊梁に近い地域において、厚く堆積した火山灰に覆われた状態で良好に残されている⁽²⁾。津山市内では、天神原遺跡⁽³⁾や大開遺跡⁽⁴⁾のナイフ形石器、大田茶屋遺跡⁽⁵⁾の細石刃・細石核などが報告されているが、いずれもわずかな石器類の出土のみで、生活の痕跡を留めていない（以下、津山市内の遺跡については市名を省略）。

縄文時代

縄文時代では、まず草創期に遡る石器が挙げられる。領家遺跡⁽⁶⁾で局部磨製石斧、稻荷遺跡⁽⁷⁾で有茎尖頭器が出土しており、勝央町大河内遺跡では局部磨製石斧とともに打製石斧、尖頭器、石鏃など多くの石器類が出土している⁽⁸⁾。早期になると、大田西奥田遺跡において堅穴住居が確認されている⁽⁹⁾。壁際に杭列が廻る構造で、鏡野町竹田遺跡⁽¹⁰⁾に類例がある。前期から中期にかけての遺跡は少ないが、前期の遺物が西吉田北遺跡⁽¹¹⁾、山ノ奥遺跡⁽¹²⁾など、中期の遺物が堀坂宮ノ前遺跡⁽¹³⁾で出土している。いずれも少量の出土で、この時期の遺跡の希薄さを示している。後期以降になると遺跡数が増加する。沼京免遺跡⁽¹⁴⁾で後期の土坑、大田茶屋遺跡、押入兼田遺跡⁽¹⁵⁾でも晩期の土坑が発見され、後期の堀坂星ヶ坪遺跡では土器多数や石器類が出土している⁽¹⁶⁾。



第1図 遺跡の位置 (1/2,000,000)



第2図 周辺の遺跡分布 (1/25,000)

1 勝負峪遺跡	27 大開古墳群	54 門の山古墳群	81 丸山古墳群	106 古墳
2 桑山古墳群	28 二宮杉澤古墳	55 寺山古墳群	82 高野山根古墳群	107 散布地
3 桑山遺跡	29 二宮尺當遺跡	56 煙硝庫古墳群	83 剣戸古墳群	108 後谷古墳
4 高尾桑山遺跡	30 後山古墳	57 皿丸山遺跡	84 小屋谷古墳群	小麦尾古墳群
5 桑山南古墳群	31 二宮恵下遺跡	58 皿西寺坂遺跡	85 小屋谷窯跡	うるしご古墳群
6 細畝古墳群	32 二宮天王遺跡	59 皿穴田遺跡	86 若林古墳群	109 散布地
7 正京茶島古墳	33 美和山古墳群	60 皿寺坂東遺跡	87 福田登尾遺跡	110 鰻谷古墳群
弁慶岩古墳群	34 二宮岡の虬遺跡	61 寺池東古墳群	88 清水古墳	111 方の谷古墳群
8 高尾北ヤシキ古墳	35 二宮岡東遺跡	62 カキ谷A古墳群	89 奥山田古墳群	112 古墳
9 高尾北ヤシキ遺跡	36 中禪奥古墳群	63 カキ谷B古墳群	90 ウノメ古墳	113 大久保古墳群
10 高尾廃寺跡	37 二宮俵田遺跡	64 皿佐良山遺跡	91 福田ウノ免遺跡	114 中山横穴墓
11 高尾上ノ畑遺跡	38 二宮みのり学園古墳	65 皿高妻遺跡	92 丸山城跡	115 散布地
12 高尾宮ノ前遺跡	39 二宮風呂屋峪遺跡	66 皿立宿遺跡	93 奥の虬古墳	116 嵯峨山城跡
13 西ノ岡古墳群	40 松原A遺跡	67 皿山城跡	94 三ツ塚古墳群	117 三ツ塚古墳群
14 院庄毘沙門前遺跡	41 松原B遺跡	68 高尾ズリ谷古墳群	95 天神山城跡	118 中堂古墳群
15 院庄五輪鼻遺跡	42 二宮大成遺跡	69 中曾根古墳群	96 福田湯田遺跡	119 片山古墳
16 戸島丸山古墳	43 二宮大成古墳	70 高尾安廣遺跡	97 岡道東遺跡	120 平福向山遺跡
17 院庄大塚古墳	44 小田中狐塚古墳	71 丸山古墳群	98 岡の虬古墳	121 平福向山古墳
18 院庄権現ノ前遺跡	45 小田中戌亥谷古墳	72 御笠美下古墳群	99 山の谷古墳	122 平佐古墳
19 院庄大滝遺跡	46 一方北遺跡	73 三ツ塚古墳群	召出山古墳群	123 祇園畝古墳群
20 二宮野辺遺跡	47 津山口十文字遺跡	74 高尾堂免南遺跡	太平古墳群	124 火の釜古墳群
21 院庄奈良順古墳	48 一方岸上遺跡	75 御笠美下大塚古墳	100 天笠山遺跡	125 高塚古墳
22 二宮飛峪遺跡	49 一方今屋敷遺跡	76 大塚上古墳	101 小坂遺跡	126 下山山上古墳
23 二宮円通寺北遺跡	50 井口井手端遺跡	77 御笠美古墳	102 散布地	127 中山山古墳群
24 二宮円通寺遺跡	51 井口宮下遺跡	78 比久尼塚古墳	103 奥禪寺跡	128 高尾中山田遺跡
25 鐘つき堂古墳	52 一方北古墳群	79 高尾中宮上古墳群	104 小坂古墳群	129 城成古墳
26 大開遺跡	53 神南備山城跡	80 中宮古墳群	105 松ヶ崎古墳	

また、鏡野町久田原遺跡⁽¹⁷⁾及び久田堀ノ内遺跡⁽¹⁸⁾では、後～晩期の堅穴住居や土坑、多量の遺物が確認され、長期間にわたり集落が営まれた様子が窺える。そのほか、縄文時代の落とし穴遺構が多数の遺跡で検出されている。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡はわずかしか知られていないが、前期後半の高橋谷遺跡⁽¹⁹⁾、天神原遺跡、沼京免遺跡などがいくつか確認されている。中期中葉～後期になると集落は増加し、沼遺跡⁽²⁰⁾、沼E遺跡⁽²¹⁾、紫保井遺跡⁽²²⁾、大田十二社遺跡⁽²³⁾などの集落が形成される。後期の沼京免遺跡では環濠を廻らせる大規模集落がみられ、天神原遺跡や上部遺跡⁽²⁴⁾では直径11mに達する大型堅穴住居が検出されている。堅穴住居は建て替えや拡張が多く認められ、比較的長期間にわたる居住が窺える。

弥生時代の墳墓では、中期以降、木棺墓群を中心とした集団墓がみられる。集落内に小規模な墓域を形成する竹ノ下遺跡⁽²⁵⁾などのほか、後期には丘陵上に台状墓や区画墓が出現する。下道山遺跡では、方形台状墓2基に加えて135基の木棺墓群が検出され、特殊器台や供献土器が出土している⁽²⁶⁾。有本遺跡B地区では、3基の区画墓とその内外に140基の木棺墓が検出され、特殊器台が出土したほか、ガラス製管玉や鉄鏃などの副葬品を伴うものもある⁽²⁷⁾。また、皿丸山遺跡では、遺跡の性格は不明ながら鼓形器台や特殊器台などが出土している⁽²⁸⁾。

古墳時代

古墳時代に入ると各地に大型前方後円墳(後方墳)が出現する。美作最大の勝央町植月寺山古墳⁽²⁹⁾(墳長約92mの前方後円墳)や銅鏡3面などを出土した鏡野町郷観音山古墳⁽³⁰⁾(墳長約43mの前方後円墳)が古く、津山市内ではやや遅れて、銅鏡などを出土した日上天王山古墳⁽³¹⁾(墳長約57mの前方後円墳)、さらに市内最大の美和山1号墳⁽³²⁾(墳長約80mの前方後円墳)が築かれる。以上は前期前半頃に位

置づけられ80～90 m級の大型古墳を含むが、美作では以後これを上回る規模の古墳は築かれていない。続いて前期中葉～後半には、銅鏡や堅矧板革綴短甲を出土した奥の前1号墳⁽³³⁾（墳長約68 mの前方後円墳）、竜山石製⁽³⁴⁾の石棺をもち銅鏡2面などの出土を伝える正仙塚古墳⁽³⁵⁾（墳長約56 mの前方後円墳）が築造されている。津山の東に位置する勝英地域では、植月寺山古墳以降も美作市檜原寺山古墳⁽³⁶⁾（墳長約46 m）、勝央町岡高塚古墳⁽³⁷⁾（墳長約56 m）、同町美野高塚古墳⁽³⁸⁾（墳長約65 m）など前期を通じて前方後方墳が多くみられる。

中期（4世紀末～5世紀頃）には、県南部において巨大前方後円墳が築かれたが、美作地方では前方後円墳がみられなくなり途絶えてしまう。代わって、国分寺飯塚古墳⁽³⁹⁾（径約38 mの円墳）や多数の武器を副葬する橋本塚1号墳⁽⁴⁰⁾（径約30 mの円墳）、美作最大の方墳とされる大日古墳⁽⁴¹⁾（一辺約34 m）など、30～40 m級の大型円墳・方墳が首長墓として認められる。

5世紀末頃、津山盆地の中央部に墳長約60 mの前方後円墳である十六夜山古墳が出現する。二重の盾形周濠を伴い、円筒・朝顔形・盾形・石見型など多量の埴輪が出土している⁽⁴²⁾。二重周濠や石見型埴輪は、備前あるいは畿内地域との関係を示しており、突如現れた前方後円墳の背景に、そうした外部勢力との関わりを想定することができる。このあと後期前半にかけて、津山盆地周辺で築造される古墳には、十六夜山古墳を頂点とする階層性が認められる。井口車塚古墳⁽⁴³⁾、日上畝山58号墳⁽⁴⁴⁾、玉琳大塚古墳⁽⁴⁵⁾、高野山根1号墳⁽⁴⁶⁾、中宮1号墳⁽⁴⁷⁾など、十六夜山古墳の半分程度の規模をもつ前方後円墳ないし帆立貝形古墳が吉井川流域に分布しており、さらに下位に小規模な円墳群が位置づけられる。佐良山古墳群もこの頃から形成され始め、中でも笹山南西麓（JR津山線佐良山駅南方）には、高野山根1号墳、中宮1号墳などの首長墳が集中している。

後期中葉（6世紀中葉頃）には、美作地域にも横穴式石室が導入され、以後急速に普及する。美作地域の横穴式石室は、全長9 m前後以上のものが地域の首長墓と考えられ、そのうち万燈山古墳⁽⁴⁸⁾や鏡野町井上大塚古墳⁽⁴⁹⁾など大規模なものは全長11～12 mに達する。横穴式石室を内蔵する前方後円墳は、津山市内では中宮1号墳、高野山根2号墳⁽⁵⁰⁾、鴻の池2号墳⁽⁵¹⁾の3基のみで減少傾向にあり、いずれも墳長30 m前後の小規模なものである。6世紀末頃には前方後円墳はつくられなくなり、以後は首長墓でも主に円墳を採用する。佐良山古墳群には、中宮1号墳、桑山1・2号墳⁽⁵²⁾など導入期の横穴式石室が集中しており、また高野山根2号墳、剣戸13・14号墳⁽⁵³⁾などの大規模な石室も多くみられる。先進的な墓制をいち早く導入した有力な地域であったといえよう。

有力首長墓とされる前方後円墳や大型円墳・方墳のほかに、各地に密集して築かれる小墳群がある。佐良山古墳群の調査を行った近藤義郎は、このような小規模墳の大多数が古墳時代後期の所産であり、この時期急速に、爆発的に古墳の数が増えると指摘した。そしてこれらを「家父長的家族」の墓と考え、古い共同体の分解を示す大きな社会的変化と評価した⁽⁵⁴⁾。近藤による調査と論文は考古学・古代史学界に大きな影響を与え、「群集墳」という概念を定着させた。しかし、その後の大規模な発掘調査成果の蓄積により、小型古墳の群集は古墳時代後期だけでなく、弥生時代以来古墳時代全般にわたって存在することが知られるようになった⁽⁵⁵⁾。それらは、①中期中葉頃までは低平な方墳が中心だが、②中期後葉以降、比較的高い盛土をもつ円墳に変わって築造数が増加し、③後期後半になると堅穴系埋葬施設から横穴式石室に変わる、という変化をたどる⁽⁵⁶⁾。以上のうち①を弥生時代以来の小型墳墓群の流れをくむものと考え、②③を特に「群集墳」とし、さらに②を「古式群集墳」あるいは「初期群集墳」と呼ぶことが多い⁽⁵⁷⁾。美作地域では、①の例として真庭市中原古墳群⁽⁵⁸⁾、②の例として

日上畝山古墳群⁽⁵⁹⁾、③の例として鞍山古墳群⁽⁶⁰⁾などが挙げられる。ただし、佐良山古墳群では桑山南古墳群⁽⁶¹⁾、桑山古墳群など②から③にかけて連続して造営がなされており、必ずしも明確に区分できるものではない。これら群集墳の盛行の背景には、農耕、鍛冶、製鉄、製陶など著しい生産力の発展によって小規模ながらも古墳を築き得る新興勢力や有力家族が台頭し、そうした階層をヤマト王権が直接掌握しようとする状況などが想定されている。さらに、有力家族の軍事的編成、渡来系氏族の組織化なども指摘される。

前方後円墳の築造が停止する古墳時代終末期（6世紀末～7世紀頃）に至っても、横穴式石室を内蔵する小規模墳は築造が続く。この時期の美作地域を大きく特徴づけるのが、土師質亀甲形陶棺である。陶棺は全国でおよそ800の遺跡から出土しているが⁽⁶²⁾、そのうち約7割が岡山県内で、さらに県内の約7割を美作地域が占め、市町村別では津山市が最多である。終末期後半（7世紀後半）になると古墳の築造数は徐々に減り、横穴式石室の規模も縮小する。この時期の群集墳は鞍山古墳群などで調査されている。

古 代

和銅6（713）年、備前国の6郡を割いて美作国が新設された。国府や国分寺・国分尼寺などの主要な施設が現在の津山市内に置かれ、美作国の中心をなしている。国府は津山市街地北方の高台に位置し、発掘調査によって国府前身官衙（苫田郡衙か）を含む7世紀後半から12世紀にかけての遺構が明らかになっている⁽⁶³⁾。国府の北約1.5kmに所在する大田茶屋遺跡では、8世紀後半から9世紀前半にかけての建物群が検出されている。性格は不明であるが公的な宗教施設、軍事施設等の可能性が示されている⁽⁶⁴⁾。国分寺は、吉井川と加茂川の合流点近くに置かれ、国府から直線で約4.9kmの距離にある。2町四方の寺域の中に、国分寺式伽藍配置をとる主要遺構が確認されており、創建は8世紀中頃で、13～14世紀頃に廃絶したと推定されている⁽⁶⁵⁾。国分尼寺は国分寺の西約450mにあり、発掘調査によって礎石建物などが検出された⁽⁶⁶⁾。郡衙と推定される遺跡として、宮尾遺跡がある。長大な建物が東西及び南北方向に棟を揃え、久米郡衙に比定されている⁽⁶⁷⁾。宮尾遺跡に近接する久米廃寺は、7世紀後半に創建されたとみられる寺院で、宮尾遺跡との関連が深い⁽⁶⁸⁾。

美作における製鉄は、6世紀後半に遡るとされる大蔵池南遺跡⁽⁶⁹⁾が初現で、7世紀の緑山遺跡⁽⁷⁰⁾、8世紀のキナザコ遺跡⁽⁷¹⁾などと続く。8世紀を中心とする一貫西遺跡では、製鉄炉とともに、鉄滓や羽口を多く出土する集落遺構が検出されており、鉄生産に関わった集団の居住あるいは作業空間であったと推測されている⁽⁷²⁾。また、津山市皿を中心とした一帯には、かつて佐良荘があったことが推測されている。天長3（826）年には、和気真体が山城国の高雄山神護寺伝法料として美作国佐良荘などを寄進したことが伝わる⁽⁷³⁾。

中 世

中世には美作にも守護職が置かれたが、守護所と推定されている院庄館跡は、一部発掘調査が行われ、平安時代末期から鎌倉時代前半頃の掘立柱建物や井戸、土塁などの遺構が検出されている⁽⁷⁴⁾。また、美作地域は山陰と山陽を結ぶ交通の要衝であり、周辺諸勢力がたびたび侵入し攻防を繰り返した。南北朝時代には播磨赤松氏や伯耆山名氏、戦国時代には出雲尼子氏、安芸毛利氏、備中三村氏、備前浦上氏、宇喜多氏などが攻め込み、戦場となっている。中世の城館遺跡数は美作で約400か所が確認されている⁽⁷⁵⁾。

室町時代の中頃、美作守護となった山名教清は、その一門の将、山名忠政に命じ、美作国中央の鶴

山に城砦を築かせた。これが津山城の起源とされるが、応仁の乱後、山名氏の退去により廃城となる。

近 世

関ヶ原の戦い後、美作国は岡山城を拠点とする小早川秀秋が支配したが、彼の死後の慶長8（1603）年、森忠政が18万6,500石を領して入国し津山藩が成立する。山名氏旧壘の鶴山を津山と改めて城地とし、城と城下町の建設に着手した。石垣に使われた石材は「津山石」と通称される凝灰岩で、吉井川の南側一帯などから切り出された。城下町は、津山城を中心として吉井川北岸に形成され、現在の津山市街の基礎となった。津山藩主は森氏4代の後、松平氏に替わり明治に至る。

近 代

明治4（1871）年の廃藩置県により津山県が置かれ、間もなく美作地域全体が北条県となった。明治9（1876）年には岡山県と合併し、ほぼ現在の岡山県となる。近代国家建設に向け、津山においても産業の育成や交通網の整備などが進められた。吉井川の高瀬舟も大いに栄え、津山と西大寺（現岡山市東区）との間には客船が運行された。明治31（1898）年には中国鉄道（現JR津山線）の津山（現津山口駅）－岡山間が開通し、現津山口駅周辺は津山の玄関口として栄えた。付近に今も残る作州民芸館（旧土居銀行本店）、旧中島病院本館などの洋館がそれを物語っている。（尾上）

註

- (1) 近藤義郎・中島壽雄 1952『佐良山古墳群の研究』津山市
- (2) 稲田孝司編 1996『恩原2遺跡』岡山大学考古学研究室
稲田孝司編 2009『恩原1遺跡』恩原遺跡発掘調査団 ほか
- (3) 岡山県教育委員会 1975「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7
- (4) 津山市教育委員会 1994「大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第51集
- (5) 岡山県教育委員会 1998「大田茶屋遺跡2・大田西奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』129
- (6) 岡山県教育委員会 1975「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8
- (7) 津山市教育委員会 1990「稻荷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第35集
- (8) 岡山県教育委員会 2008「大河内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』216
- (9) 註5
- (10) 土居徹 1986「竹田遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
- (11) 津山市教育委員会 2006「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第76集
- (12) 岡山県教育委員会 2004「山ノ奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』180
- (13) 津山市教育委員会 1997「堀坂地内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集
- (14) 津山市教育委員会 1982「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第11集
- (15) 津山市教育委員会 2000「押入兼田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第69集
- (16) 註13
- (17) 岡山県教育委員会 2004「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184
- (18) 岡山県教育委員会 2005「久田堀ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』192
- (19) 中山俊紀 2020「高橋谷遺跡」『新修津山市史』資料編 考古 津山市
- (20) 近藤義郎ほか 1957『津山弥生堅穴住居群の研究－西地区－』津山市・津山郷土館
- (21) 津山市教育委員会 1981「沼E遺跡II」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第8集

- 津山市教育委員会 2001「沼E遺跡I」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第71集
- (22) 中山俊紀 1993「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備』第15集 古代吉備研究会
- (23) 津山市教育委員会 1981「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集
- (24) 津山市教育委員会 1990「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第30集
- (25) 註14
- (26) 岡山県教育委員会 1977「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17
- (27) 津山市教育委員会 1998「有本遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第62集
- (28) 河本清 1975「津山市丸山遺跡発見の遺物」『津山市文化財年報』1 津山市教育委員会
- (29) 光永真一 1986「植月寺山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
- (30) 梅原末治 1938「美作郷村観音山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』3 日本古文化研究所
- (31) 津山市教育委員会 1997「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第60集
- (32) 津山市教育委員会 1992「史跡美和山古墳群保存整備事業報告書」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第42集
- (33) 澤田秀実 2020「奥の前1号墳」『新修津山市史』資料編 考古 津山市
- (34) 間壁忠彦・間壁葎子 1974「石棺研究ノート(一)石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第9号 倉敷考古館
- (35) 津山市教育委員会 1996「正仙塚古墳測量調査報告」『年報津山弥生の里』第3号
- (36) 近藤義郎 1986「檜原寺山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料
澤田秀実 2006「檜原寺山古墳」『美作町史』資料編1 美作市
- (37) 倉林眞砂斗・澤田秀実編 2000『美作の首長墳—墳丘測量調査報告—』吉備人出版
- (38) 註37
- (39) 津山市教育委員会 2014「国分寺飯塚古墳測量調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第83集
- (40) 津山市教育委員会 2003「橋本塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第73集
- (41) 津山市教育委員会 2014「大日古墳測量調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第83集
- (42) 岡山県教育委員会 1998「十六夜山古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』130
- (43) 津山市教育委員会 1994「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第52集
- (44) 津山市教育委員会 2007「日上畝山古墳群Ⅱ—範囲確認調査報告—」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第78集
- (45) 今井堯 1961「津山市川崎玉琳大塚調査報告」『津山市文化財調査略報』第1集 津山市教育委員会
平井泰明 2020「玉琳大塚古墳」『新修津山市史』資料編 考古 津山市
- (46) 安川豊史 1986「高野山根1号墳・2号墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
- (47) 近藤義郎 1952「中宮第1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』津山市
- (48) 岡山県吉田郡加茂町文化財保護委員会 1974『万燈山古墳』
豊島雪絵 2020「万燈山古墳」『新修津山市史』資料編 考古 津山市
- (49) 土居徹 2000「井上大塚古墳(まかべ13号墳・井上火の釜)」『鏡野町史』考古資料編 鏡野町
- (50) 内山敏行・大谷晃二・田中弘志 1991「佐良山古墳群高野山根2号墳について」『古代吉備』第13集 古代吉備研究会
- (51) 澤田秀実 2020「鴻の池2号墳」『新修津山市史』資料編 考古 津山市

第1章 地理的・歴史的環境

- (52) 岡山県教育委員会 2023 「勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』262
- (53) 安川豊史 1986 「剣戸塚西塚・東塚」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
平井泰明 2020 「剣戸古墳群」『新修津山市史』資料編 考古 津山市
- (54) 近藤義郎 1952 「問題の所在」『佐良山古墳群の研究』津山市
- (55) 石部正志 1980 「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 朝鮮三国と倭国 学生社 ほか
- (56) 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第5巻 近畿Ⅰ 角川書店
安川豊史 1992 「古墳時代における美作の特質―群小古墳の動向と評価―」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社 ほか
- (57) 註55、白石太一郎 2000 『古墳と古墳群の研究』塙書房 ほか
- (58) 岡山県教育委員会 1995 「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93
- (59) 津山市教育委員会 1998 「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第63集、註44
- (60) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980 『椋山遺跡群』Ⅱ
- (61) 岡山県教育委員会 2022 「桑山南古墳群 細畝古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』255
- (62) 津山郷土博物館 2013 『平成25年度特別展図録 土の棺に眠る―美作の陶棺―』
- (63) 岡山県教育委員会 1973 「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6
津山市教育委員会 1984 「美作国府跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第15集
津山市教育委員会 1994 「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第50集
津山市教育委員会 1995 「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第56集
津山市教育委員会 1999 「美作国府跡発掘調査概要」『年報津山弥生の里』第6号
岡山県教育委員会 2011 「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』228
- (64) 岡山県教育委員会 1994 「大田茶屋遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』96、註5
- (65) 津山市教育委員会 1980 「美作国分寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第5集
津山市教育委員会 2002 「美作国分寺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第72集
- (66) 津山市教育委員会 1983 「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第12集
- (67) 岡山県教育委員会 1973 「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4
- (68) 岡山県教育委員会 1973 「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4
- (69) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982 『椋山遺跡群』Ⅳ
- (70) 津山市教育委員会 1986 「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第19集
- (71) 加茂町教育委員会 1980 『キナザコ製鉄遺跡』
- (72) 津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1990 「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第33集
- (73) 三好基之 1972 「律令時代」『津山市史』第一巻 原始・古代 津山市役所
今津勝紀・前田茂雄 2022 「平安時代」『新修津山市史』資料編 古代・中世 津山市
- (74) 津山市教育委員会 1974 「史跡院庄館跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第1集
津山市教育委員会 1981 「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第7集
- (75) 岡山県教育委員会 2020 『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第3冊―美作編―

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道53号は、岡山市北区から鳥取市までを結ぶ延長約140kmの主要幹線道路である。津山南道路は、この国道53号の久米郡美咲町打穴中から津山市平福に至る区間に並行する延長5.4kmのバイパスであり、地域高規格道路「空港津山道路」の一部を構成する。交通安全や災害時の代替ルート確保、救命救急活動支援をはじめ、県南部と津山周辺圏の連携強化を促進し、沿線地域の発展を図るため、久しく待ち望まれ、平成15年度に都市計画決定され、翌16年度に事業化、19年度に用地化着手、26年度から工事着手されている。

路線内の埋蔵文化財の取り扱いは、都市計画決定以前から今日に至るまで、岡山県教育庁文化財課（当初は文化課、以下県文化財課）と事業を管轄する国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所（以下国道事務所）間で協議を重ねてきた。

まず、平成14年9月に県教育委員会教育長宛「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて」の文書によって、国道事務所から計画区域内における埋蔵文化財包蔵地の有無、名称、位置、及び法的手続きについての照会があった。これに対し10月、県文化財課は周知の埋蔵文化財包蔵地として7基の古墳と集落遺跡等3遺跡の存在を回答するとともに、現地において計画路線範囲の確認が困難であったため、計画が決定し、路線境界の確定後、再度分布調査が必要であると示した。計画路線内に所在する古墳は佐良山古墳群の支群として知られていた。佐良山古墳群は、津山市市街の南西部、皿川流域の丘陵に築造された6～7世紀の古墳群の総称で、複数の支群からなる約170基を超える群集墳である。昭和20年代の近藤義郎氏による発掘調査や詳細な分布調査に基づく『佐良山古墳群の研究』⁽¹⁾は、古墳時代後期の墓制や家父長制社会に関する研究の原点として後の研究に多大な影響を与え、学史的にも重要な古墳群として著名である。また、支群の一つである中宮古墳群は県の重要遺跡となっ



第3図 計画路線 (1/50,000)



第4図 計画路線と調査対象遺跡 (1/4,000)

ている。このことに鑑み、県文化財課は埋蔵文化財保護に関する重要な課題として認識した。

平成16年3月、県文化財課は地元津山市教育委員会職員の支援を得、分布調査を実施したものの、荒廃が進む山林の中で現認できなかった古墳が複数あった。この後も現地確認を行い、平成22年1月に分布調査成果を国道事務所に示したが、なお所在不明な古墳があり、現認した古墳にも名称と位置の錯誤があった。

さらに平成23年度に再び詳細分布調査を実施し、不明であった古墳を現認し、ようやく『佐良山古墳群の研究』に記載された古墳名称と位置をほぼ整合させ、特定した。こうして平成24年度に、倭文川以北の路線内に10基、以南に2基の古墳が所在することを国道事務所に改めて提示し、その保存について重ねて要望し、協議を継続した。

平成26年10月には、平成23年度の分布調査によって倭文川以南の津山市福田地内で新たに発見した高まりについて試掘調査を実施し、古墳であることを確認し、マンドウ山古墳と名称した⁽²⁾。

文化財課としては、この時点までに路線内の所在が明らかとなった計13基の古墳の

取り扱いと保存についての基本方針を以下のように整理した。まず、第1に実施設計にあたり現状保存の配慮を求める、第2に路線境界に接する古墳については工事の影響が及ばないように求める、第3にやむなく現状保存ができない古墳については、十分な体制と調査期間を確保して記録保存の措置を講ずる。この方針をもとに、平成27年4月、国道事務所に再度要望を行い、この後も協議を継続した。また、所在が明らかな古墳以外の遺物散布地等については、内容と広がり把握するため順次確認調査を実施し、その結果に基づき記録保存調査の対応を図ることとした。

同年5月には、平成14年10月の県文化財課回答に基づいて現地に用地幅杭が打設されたことから、国道事務所から「直轄道路事業の実施に伴う埋蔵文化財の取扱について」の再照会があった。これに対し6月に県文化財課は、路線内の包蔵地位置を明示するとともに、文化財保護法第94条に基づく通知が必要であること、実施設計に際して文化財保護に十分な配慮をすること、事業実施にあたっては事前の発掘調査が必要であること、さらに調査の結果、重要遺構等の発見時には別途保存について協議を求める、と回答した。この後、用地取得状況及び工事施工計画と具体的な発掘調査実施計画の調整を進めた。こうした中で、平成28年9月7日付で国道事務所から文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、県文化財課は発掘調査の実施を勧告した。

以上の経緯を経て、平成30年1月から桑山南古墳群、細畝古墳群、桑山古墳群において記録保存のための発掘調査^(3・4)を順次実施し、令和元年度後半には本書収載の高尾北ヤシキ古墳・高尾北ヤシキ遺跡へ移る計画であった。そのため県文化財課では、平成30年度当初から条件整備として本発掘調査及び試掘確認調査に必要な範囲の樹木伐採を国道事務所に依頼しており、高尾北ヤシキ古墳・高尾北ヤシキ遺跡の範囲については令和元年度後半に施工された。また、作業ヤードの提供に関しても、工事工程と調整を図りながら事業用地内に確保してもらうなど、国道事務所の協力を得た。

ところが、私道付け替えの都合で開始時期を延ばしていた桑山南3号墳とその際に発見された5号墳を先行して調査することになり、当該古墳・遺跡の調査に着手できたのは令和2年1月からで、範囲も古墳以北のみとなった。さらに、北からのパイロット道路を優先する工事工程の影響で、令和2年4月からは、新たに発見された勝負峪遺跡と桑山5号墳の調査を優先して行う必要があり、当該調査は一旦中断することになった。そのために再度必要になった樹木伐採を国道事務所に依頼して実施し、古墳及びその西側の範囲について10月から調査を再開した。

一方、高尾北ヤシキ古墳以南の範囲については試掘調査が必要であったため、国道事務所の協力を得て、令和2年3月6～13日にかけてトレンチ7本を設定して実施した(第6図参照)。その結果、弥生・古墳時代の遺構・遺物や中・近世の遺物を確認したことにより、南に所在する谷地形手前までの丘陵部全体に高尾北ヤシキ遺跡が広がることが判明し、古墳以南の範囲は引き続き令和3年4月から発掘調査を行うことになった。(大橋・柴田)

註

- (1) 近藤義郎・中島寿雄 1952『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市
- (2) 岡山県教育委員会 2015「一般国道53号(津山南道路)改築工事に伴う試掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』45
- (3) 岡山県教育委員会 2022『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告255
- (4) 岡山県教育委員会 2023「勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告262

第2節 発掘調査の経過

1 調査対象遺跡と発掘調査工程

本事業の予定路線内にある遺跡は、計10遺跡がある（第3図）。これらの遺跡は本事業の工事工程と調整を図りながら、発掘調査を実施した。このうち、桑山南古墳群と細畝古墳群は令和4年1月、勝負峪遺跡、桑山遺跡、桑山古墳群は令和5年3月に報告書を刊行した。なお、高尾北ヤシキ古墳以南の遺跡については、調査中もしくは調査予定である。本書に収載した遺跡は高尾北ヤシキ遺跡、高尾北ヤシキ古墳である。高尾北ヤシキ遺跡は1～4区に分けて調査を進めた。令和元年度に1区から発掘調査を開始した後、本事業の工事工程との調整により一時中断したが、令和2年度に高尾北ヤシキ古墳とともに2区の調査を再開し、令和3年度に3・4区を調査して終了した。（米田）

2 令和元年度

令和元年度は、1月から3月にかけて、高尾北ヤシキ遺跡北端部（1区）の本発掘調査と、同一丘陵の南側緩斜面部（3・4区）の試掘調査を行った。

1区の調査は、傾斜の緩やかな高所を中心に行ったが、時期不明の小型土坑数基の検出に留まり、周辺からは弥生土器や須恵器、鉄滓などがわずかに出土した。一方、東に降る急斜面部はトレンチを入れたが遺構が皆無であり、それ以上の調査を行っていない。

3・4区では、計7本のトレンチを設定し試掘調査を行った。その結果、T1で弥生時代の段状遺構と古墳時代の竪穴住居、T3・5・7で中世の柱穴を確認した。また、地山上に遺物包含層の堆積が認められる箇所もあり、弥生時代から中世にいたる遺物が多数出土した。この丘陵斜面一帯に集落遺構が展開しているものと判断され、本発掘調査対象地に加えることになった。（尾上）

第1表 本書関連調査一覧

	遺跡名（地区）・地点等	種別	年度	期間	面積	遺物箱数	担当者
1	津山市高尾1423ほか （高尾北ヤシキ遺跡3・4区）	試掘調査	令和元	R2.3.6～R2.3.13	142.4	1	尾上元規
2	高尾北ヤシキ遺跡（1区）	発掘調査	令和元	R2.1.21～R2.2.21	1,390	1	尾上元規・小嶋善邦・藤井雅大・四田寛人
3	高尾北ヤシキ遺跡（2区） 高尾北ヤシキ古墳	発掘調査	令和2	R2.10.7～R3.3.31	1,680	51	小嶋善邦・氏平昭則・藤井雅大・藤田京佑
4	高尾北ヤシキ遺跡（3・4区）	発掘調査	令和3	R3.4.1～R4.3.31	4,025	132	米田克彦・樋口英行・四田寛人・山口香織・西村 奏

年度	令和元			令和2									令和3																
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
高尾北ヤシキ遺跡	1	区											2	区							3								
高尾北ヤシキ古墳																													

第5図 発掘調査の工程



第6図 高尾北ヤシキ遺跡の調査区・トレンチ配置 (1/1,500)

3 令和2年度

年度当初から行っていた勝負峪遺跡と桑山5号墳の調査が終了した10月から、高尾北ヤシキ遺跡2区と高尾北ヤシキ古墳の調査を開始した。調査面積は両遺跡を合わせて1,680㎡で、担当調査員は4名である。

高尾北ヤシキ遺跡2区は重機により表土を除去した後、古墳周辺の調査を優先的に行い、その後斜面上方から調査を行った。傾斜が急で場所によっては斜度が40度を超える場所もある調査地西半では遺構が検出されなかったが、東半の高尾北ヤシキ古墳周辺の緩斜面で弥生時代の土器溜まり、古代の段状遺構、中世の柱穴列などを検出した。

高尾北ヤシキ古墳は、後世の整地等により墳丘が削平され天井石が露出している状態であった。天井石は調査条件整備の樹木伐採時に重機と接触し不安定な状態となっており、石室内調査時の安全を確保するため最優先で図化と写真撮影を行った後、重機によって撤去した。石室内は攪乱を受けていたものの、奥壁側に副葬されていた遺物は良好に遺存していた。特に陶棺の横に置かれていた筒形

土製品は被葬者の社会的な階層を示す遺物として注目されることから、3月16日に報道発表を行い、広報した。

2月4日にはドローンによる空中撮影を行い、調査成果を記録した。3月にはコロナ禍のため開催を断念した現地説明会の代わりに、岡山県古代吉備文化財センター（以下、センター）のYouTubeチャンネルで今年度の調査成果の動画を期間限定で公開し、好評を得た。（小嶋）



写真1 高尾北ヤシキ古墳の調査風景（北から）



写真2 埋蔵文化財保護調査指導会（令和3年8月6日）



写真3 高尾北ヤシキ遺跡の調査風景（北東から）



写真4 高尾北ヤシキ遺跡現地説明会（令和3年2月16日）

4 令和3年度

当該年度は3・4区（4,025㎡）を対象とした。発掘調査は2区の続きとなる3区を北から進めた。調査は、表土を重機で除去したのち、人力で包含層や遺構の掘り下げを行った。調査が進むにつれて、弥生時代の段状遺構や古墳時代の堅穴住居などが徐々に確認されたが、5月中旬から調査を始めた3区南側の谷部では、弥生時代から中世の遺物包含層が広範囲に堆積していた。この包含層は最大で1.5mと分厚いうえ、各時代の包含層の下面では弥生時代、古墳時代、中世の遺構がそれぞれ確認され、猛暑と重なって調査は難航した。また、包含層下で確認した中世の段状遺構31では菩薩像を線刻した鏡像がピットに埋納された状態で見つかり、遺跡の性格を考えるうえで、希少かつ貴重な資料が得られた。

さらに、3区の南側から4区の北側にかけて、中世の整地面が4面確認され、各面では夥しい数の柱穴が見つかり、掘立柱建物や柱穴列が複数かつ重複した状態を確認した。そして、調査の終盤には4区南端で古墳時代の堅穴住居12～21が連続あるいは重複して見つかっただけでなく、令和4年3月は同事業地内の高尾宮ノ前遺跡（1区）の発掘調査を並行して行うこととなり、調査期間や体制に苦慮したが、3月15日に現地での調査を完了した。なお、令和3年12月、令和4年3月にはドローンにより空中撮影を行った。

このほか、令和4年2月16日にはコロナ禍による制限があるなか、地域住民を対象に事前申込み制で現地説明会を開催し、調査成果を公開した。

発掘調査にあたっては、令和2年2・11月、同3年3・8月、同4年2月に埋蔵文化財保護調査指導会を開催し、各委員から有益な御指導、御助言を賜った。（米田）

第3節 報告書作成の経過

報告書の作成は、令和4年4月から令和6年3月にかけて行った。対象遺構は、高尾北ヤシキ遺跡が竪穴住居、掘立柱建物、段状遺構などの129遺構、高尾北ヤシキ古墳が古墳1基と土坑墓2基である。対象遺物数は、整理箱（コンテナ）に換算して、高尾北ヤシキ遺跡が計146箱、高尾北ヤシキ古墳が計38箱である。これに加えて、高尾北ヤシキ古墳は陶棺1基と筒形土製品があった。

整理作業では、各時代の多種多様な遺物があるだけでなく、高尾北ヤシキ古墳から出土した陶棺や筒形土製品は大形品で破片も多かったことから、復元と実測に多くの時間を費やした。また、両遺跡から出土した金属製品は、基本的に当センターで保存処理を行ったが、高尾北ヤシキ遺跡出土の青銅製鏡像については、特殊かつ脆弱な遺物であるため、クリーニングと保存処理、材質調査などを公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。図面の浄書については、すべてデジタルトレースを行った。

遺構・遺物のトレースが終了後、割付と文章の執筆を進めた。この間、鏡像については保存処理により菩薩像が線刻されていることが新たに分かったことから、令和5年4月22日に報道発表を行い、当センター展示室にて期間限定で公開し、県内外から注目を集めた。

報告書の作成にあたっては、埋蔵文化財保護調査指導会において各委員から遺構や遺物に関する有益な御指導、御助言を賜ったほか、土器や石製品、特殊な遺構や遺物については専門家に指導や協力を仰いだ。（米田）



写真5 筒形土製品の復元作業

第4節 発掘調査及び報告書作成の体制

令和元年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 高見 英樹

文化財課

課長 大西 治郎

参事（文化財保存・活用担当）横山 定

総括副参事（埋蔵文化財班長）柴田 英樹

主幹 河合 忍

主任 原 珠見

岡山県古代吉備文化財センター

所長 向井 重明

次長（総務課長事務取扱）佐々木雅之

参事（文化財保護担当）大橋 雅也

〈総務課〉

総括主幹（総務班長）甲元 秀和

主任 東 恵子

主任 多賀 克仁

〈調査第二課〉

総括参事（調査第二課長事務取扱）亀山 行雄

総括副参事（第二班長）尾上 元規

（試掘調査・調査担当）

副参事 小嶋 善邦

（調査担当）

主事 藤井 雅大

（調査担当）

〈調査第三課〉

主事 四田 寛人

（調査担当）

令和2年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 高見 英樹

文化財課

課長 小林 伸明

参事（文化財保存・活用担当） 大橋 雅也

総括参事（埋蔵文化財班長） 柴田 英樹

主幹 河合 忍

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 小見山 晃

次長（総務課長事務取扱） 佐々木雅之
（～10月14日）

参事（文化財保護担当） 亀山 行雄

〈総務課〉

課長 甲元 秀和
（10月15日～）

総括副参事（総務班長） 甲元 秀和
（～10月14日）

総括主任（総務班長） 多賀 克仁
（10月15日～）

主任 多賀 克仁
（～10月14日）

主任 井上 裕子

〈調査第二課〉

課長 澤山 孝之

総括副参事（第一班長） 尾上 元規

副参事 氏平 昭則
（調査担当）

主事 藤井 雅大
（調査担当）

総括副参事（第二班長） 小嶋 善邦
（調査担当）

主事 藤田 京佑
（調査担当）

令和3年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 池永 亘

文化財課

課長 小林 伸明

副参事（文化財保存・活用担当） 尾上 元規

総括主幹（埋蔵文化財班長） 河合 忍

主幹 松尾 佳子

主事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長（総務課長事務取扱） 浅野 勝弘

参事（文化財保護担当） 亀山 行雄

〈総務課〉

総括主幹（総務班長） 多賀 克仁

主任 井上 裕子

〈調査第二課〉

課長 澤山 孝之

総括主幹（第一班長） 米田 克彦
（調査担当）

主任（高梁市から派遣） 樋口 英行
（調査担当）

主事 四田 寛人
（調査担当）

主事 西村 奏
（調査担当）

〈調査第一課〉

主事 山口 香織
（調査担当）

令和4年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 浮田信太郎

文化財課

課長 江草 大作

副課長 尾上 元規

総括副参事（埋蔵文化財班長） 河合 忍

副参事 松尾 佳子

主事 金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長（総務課長事務取扱） 浅野 勝弘

参事（文化財保護担当） 柴田 英樹

〈総務課〉

総括副参事（総務班長） 福池 光修

主幹 井上 裕子

〈調査第二課〉

課長 弘田 和司

総括副参事（第一班長） 米田 克彦
（整理担当）

主事 藤井 雅大
（整理担当）

<p>令和5年度</p> <p>岡山県教育委員会</p> <p>教育長 鍵本 芳明</p> <p>岡山県教育庁</p> <p>教育次長 國重 良樹</p> <p>文化財課</p> <p>課長 浜原 浩司</p> <p>副課長 尾上 元規</p> <p>総括副参事（埋蔵文化財班長） 河合 忍</p> <p>主任 藤井 翔平</p> <p>主事 金田 涼</p> <p>岡山県古代吉備文化財センター</p> <p>所長 奥山 修司</p> <p>次長 柴田 英樹</p>	<p>総括参事 弘田 和司</p> <p>〈総務課〉</p> <p>課長 福池 光修</p> <p>副参事 絹輪 桂子</p> <p>主任 中江 理恵</p> <p>主任 西山祐太郎</p> <p>〈調査第二課〉</p> <p>課長事務取扱 弘田 和司</p> <p>総括副参事（第二班長） 米田 克彦 (整理担当)</p> <p>主事 山口 香織</p> <p>〈調査第一課〉</p> <p>主事 小林有紀子</p>
---	---

第5節 日誌抄

<p>令和元年度</p> <p>1月21日（火）高尾北ヤシキ遺跡1区調査開始</p> <p>2月20日（木）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p> <p>2月21日（金）高尾北ヤシキ遺跡1区調査終了</p> <p>3月6日（金）津山市高尾1423ほか地点試掘調査開始</p> <p>3月13日（金）津山市高尾1423ほか地点試掘調査終了</p> <p>令和2年度</p> <p>10月7日（水）高尾北ヤシキ遺跡2区、高尾北ヤシキ古墳調査開始</p> <p>11月13日（金）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p> <p>2月4日（木）高尾北ヤシキ遺跡2区、高尾北ヤシキ古墳空中写真撮影</p> <p>3月11日（木）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p> <p>3月19日（金）高尾北ヤシキ遺跡2区、高尾北ヤシキ古墳調査終了</p> <p>3月31日（水）2区調査事業終了</p> <p>令和3年度</p> <p>4月1日（木）3・4区調査事業開始</p> <p>4月6日（火）高尾北ヤシキ遺跡3・4区調査開始</p> <p>8月6日（金）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p>	<p>12月2日（木）高尾北ヤシキ遺跡3区空中写真撮影</p> <p>2月8日（火）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p> <p>2月16日（水）現地説明会開催（参加者25名）</p> <p>3月4日（金）高尾北ヤシキ遺跡4区空中写真撮影</p> <p>3月15日（火）高尾北ヤシキ遺跡3・4区調査終了</p> <p>3月31日（木）調査事業終了</p> <p>令和4年度</p> <p>4月1日（金）報告書作成作業開始</p> <p>7月6日（水）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p> <p>9月28日（水）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p> <p>9月29日（木）岡山理科大学白石純教授による土器の胎土分析指導</p> <p>2月20日（月）岡山大学鈴木茂之特命教授による石製品の石材鑑定</p> <p>2月24日（金）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p> <p>3月2日（木）大阪市立美術館内藤栄館長による青銅製品の鑑定</p> <p>3月31日（金）報告書作成作業終了</p> <p>令和5年度</p> <p>7月7日（金）埋蔵文化財保護調査指導会開催</p>
--	--

調査協力

岡崎有紀（岡山県立博物館）、中田利枝子（きび美ミュージアム学芸アドバイザー）

第2表 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類 名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第153号 R2.3.16	周知外	—	津山市高尾1423 ほか	147.6	一般国道53号(津 山南道路)改築	有	岡山県古代吉備文化財 センター所長	尾上元規	R2.2.10、 R2.3.6～ R2.3.13

埋蔵文化財発掘の通知(法第94条)

番号	文書番号 日付	種類 名称	所在地	面積 (㎡)	目的	通知者	通知日	主な 勧告事項
1	教文埋 第857号 H28.9.28	古墳 桑山1号墳ほか	津山市高尾	—	道路	国土交通省中国整備局岡山国道事務所長	H28.9.7	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

番号	文書番号 日付	種類 名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第1号 H31.4.1	古墳 桑山古墳群・ 高尾北ヤシキ古墳	津山市高尾・平福	4,550	一般国道53号(津山 南道路)改築	岡山県古代吉備文化財 センター所長	尾上元規 小嶋善邦 藤井翔平 藤井雅大 四田寛人	H31.4.1 ～ R2.3.31
2	岡吉調 第1号 R2.4.1	集落跡・古墳 勝負岨遺跡・ 桑山古墳群・ 高尾北ヤシキ古墳・ 高尾北ヤシキ遺跡	津山市高尾・平福	4,025	一般国道53号(津山 南道路)改築	岡山県古代吉備文化財 センター所長	尾上元規 小嶋善邦 氏平昭則 藤井雅大 藤田京佑	R2.4.1 ～ R3.3.31
3	岡吉調 第3号 R3.4.1	集落跡 高尾北ヤシキ遺跡・ 高尾宮ノ前遺跡	津山市高尾1423ほか	4,725	一般国道53号(津山 南道路)改築	岡山県古代吉備文化財 センター所長	米田克彦 樋口英行 四田寛人 山口香織 西村 奏	R3.4.1 ～ R4.3.31

埋蔵文化財発見通知(法第100条第2項)

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第2023号 R2.3.19	弥生土器・須恵器・備前焼ほか 計 整理箱1箱	津山市高尾1423ほ か	R2.3.6 ～ R2.3.13	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター
2	教文埋 第1608号 R4.1.25	土器(弥生土器・須恵器)、鉄滓ほ か 計 整理箱1箱	津山市高尾1423ほ か 高尾北ヤシキ遺跡	H31.4.8 ～ R2.3.13	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター
3	教文埋 第1876号 R3.3.22	土器(弥生土器・須恵器・土師器)・ 土製品(陶棺・筒形土製品)・玉類 鉄器(鉄刀・鉄鎌・馬具)・鉄滓・ 石器(石鏃・剥片)ほか 計 整理箱38箱	津山市高尾1423ほ か 高尾北ヤシキ古墳	R2.4.6 ～ R3.3.19	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター
		土器・陶磁器(弥生土器・須恵器・ 土師器・勝間田焼・備前焼・唐津焼・ 伊万里焼)・瓦・石器(石鏃・剥片)・ 鉄滓ほか 計 整理箱13箱	津山市高尾1423ほ か 高尾北ヤシキ遺跡				
4	教文埋 第1943号 R4.3.16	土器・陶磁器(弥生土器・土師器、 須恵器・勝間田焼・備前焼、青磁、 白磁)、陶棺、瓦、石製品、鉄製品、 青銅製品、玉類、鉄滓、銅滓ほか 計 整理箱132箱	津山市高尾1423ほ か 高尾北ヤシキ遺跡	R3.4.12 ～ R4.3.15	岡山県教育委員会教育長	国土交通省	岡山県古代吉備 文化財センター

第3章 高尾北ヤシキ遺跡

第1節 遺跡の概要

高尾北ヤシキ遺跡は岡山県津山市高尾 1423 ほかに所在する。この遺跡は嵯峨山から南東に派生した丘陵斜面に立地し、皿川下流域及びその支流の種川流域とその両岸に広がる平野部を良好に眺望できる環境にある。調査地は標高 118 ～ 132 m の斜面部にあたり、平野部との比高差は 20 m 前後である。調査地北半の 1・2 区は急斜面であるのに対し、南半の 3～4 区は緩斜面であるうえ、3 区中央はわずかに谷部となり、全体的に緩やかな起伏のある地形となっている。

発掘調査では、高尾北ヤシキ遺跡で弥生時代～中世の集落跡、遺跡の北東側にあたる高尾北ヤシキ古墳では古墳 1 基と土坑墓 2 基を確認した。

弥生時代の遺構は掘立柱建物 1 棟、柱穴列 1 棟、段状遺構 7 面、土坑 4 基、木棺墓 1 基、土器溜まり 1 か所、被熱面 1 面を確認した。これらの遺構は弥生時代中期を主体とする。このうち、段状遺構は 3 区北側斜面上方と谷部に配置されていた。また、木棺墓は掘立柱建物や段状遺構に近接して認められた。土器溜まりは 2 区中央で確認し、弥生時代中期の土器が比較的まとまって見つかった。

古墳時代の遺構は竪穴住居 21 軒、柱穴列 1 列、段状遺構 18 面、土坑 2 基を確認した。これらの遺構は古墳時代後期に属し、2～4 区を中心に配置されていた。竪穴住居は 3～4 区の 8 か所に散在するように認められた。このうち、竪穴住居 6・7、8～10、13～16、17～21 は各地点で建て替えが行われたのに対し、竪穴住居 1～5・11・16 は単独で配置された。造り付けのカマドをもつ竪穴住居は 5 軒認められた。また、段状遺構の多くは単独で配置されたものが多いが、段状遺構 12～15 は 3 区中央に重複するように造り替えられた。土坑では、3 区中央の谷部に配置された土坑 5 は、規模

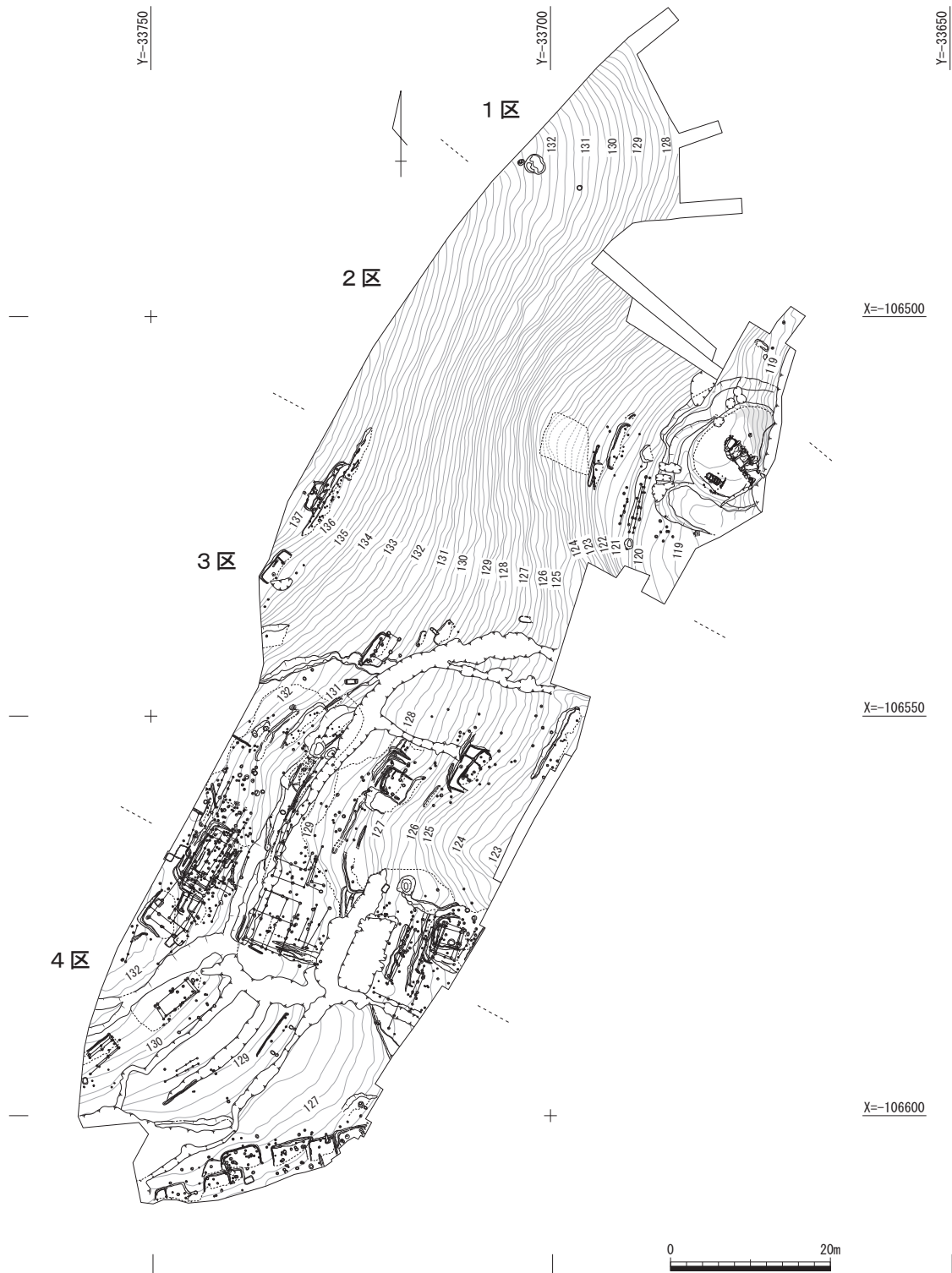


写真6 高尾北ヤシキ遺跡の全景（南西から）

が大きく、土師器、須恵器、ガラス小玉、桃核などの多様な遺物が出土した。

古代の遺構は段状遺構2面と少なく、2区の東側と4区の南東隅でそれぞれ確認した。

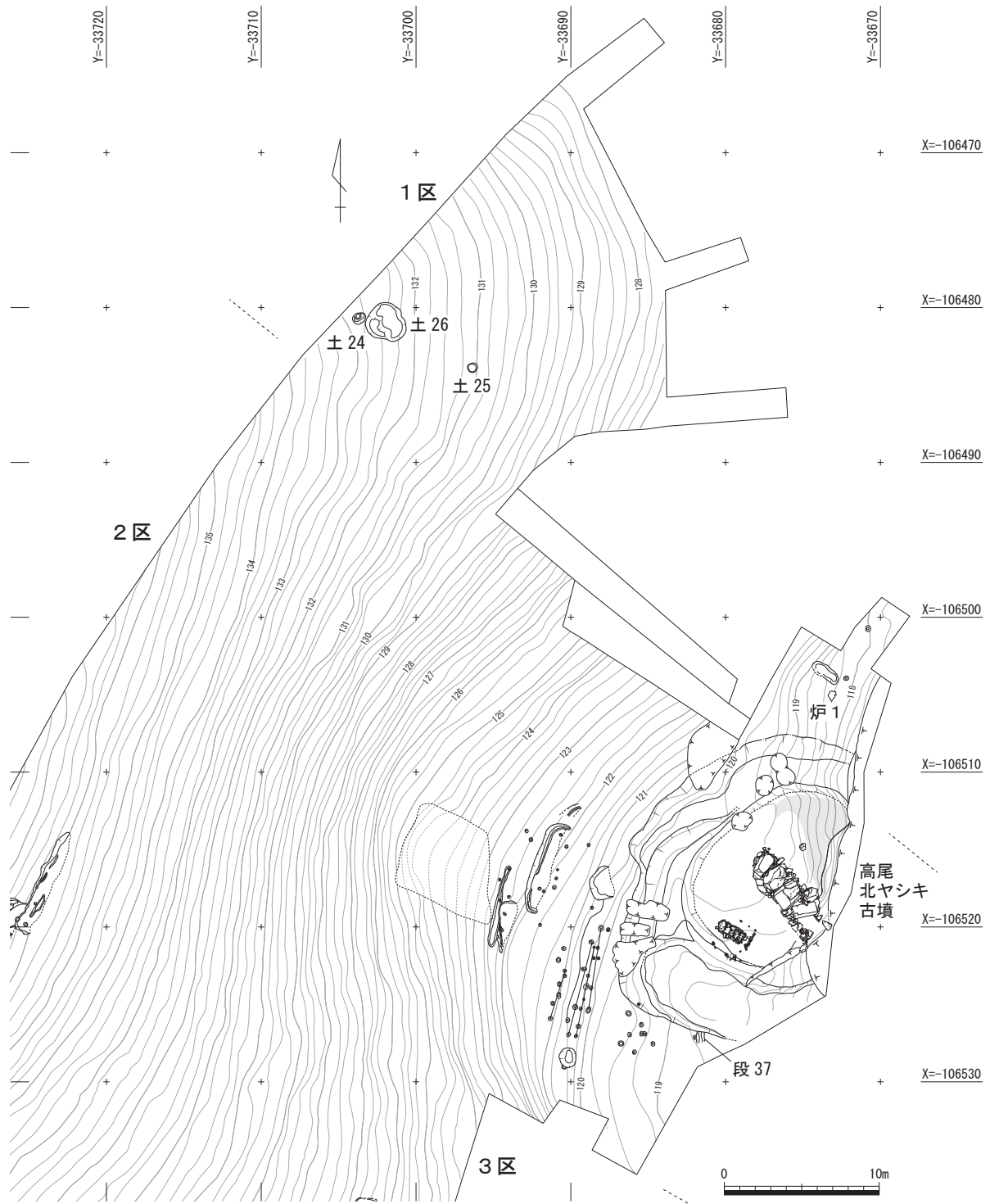
中世の遺構は整地面4面、掘立柱建物20棟、柱穴列38列、段状遺構9面、土坑17基、溝6条、集石4基、ピットなどである。これらの多くは、3区と4区西側において、丘陵斜面を造成した整地面1～4に集中して認められた。整地面1～4では多数の柱穴が見つかり、掘立柱建物や柱穴列の建



第7図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳 遺構全体図① (1/800)

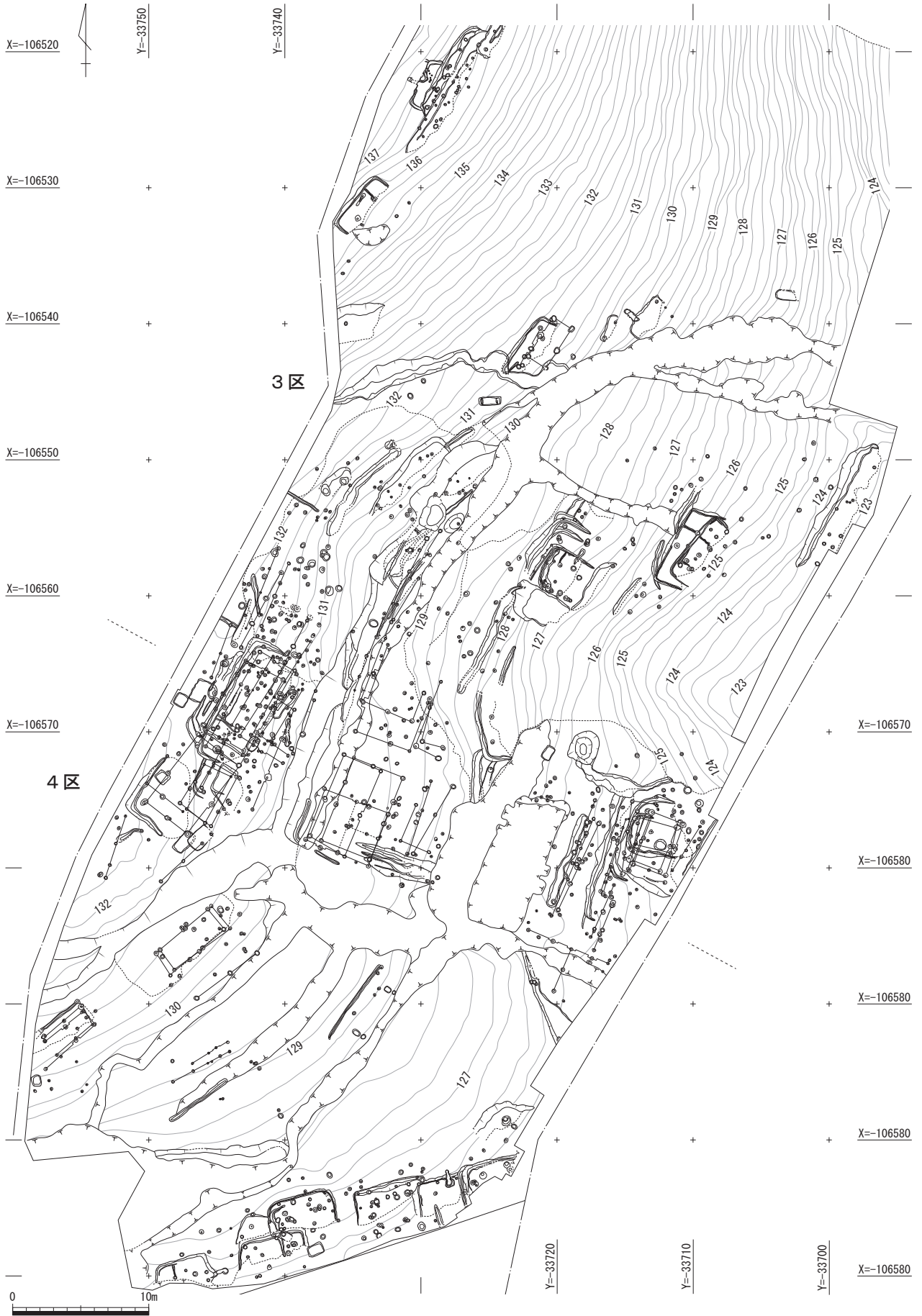
て替えが複数回にわたって著しく行われたと考えられる。また、整地面2の北端に造られた段状遺構31では、ピットに青銅製の鏡像が埋納された状態で見つかったことが特筆される。鏡像は菩薩像が線刻されており、製作から埋納までの時期差から長期間にわたって信仰されたと考えられる。

また、3区中央の谷部では、遺物包含層が厚く堆積しており、弥生時代中期から中世の遺物が多く出土した。遺物の出土状況や種別から、集落は調査地の西側上方に広がるだけでなく、調査地周辺で古墳時代後期に製鉄・鍛冶、中世に銅生産が行われた可能性があることが示唆される。 (米田)



第8図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳 遺構全体図② (1/400)

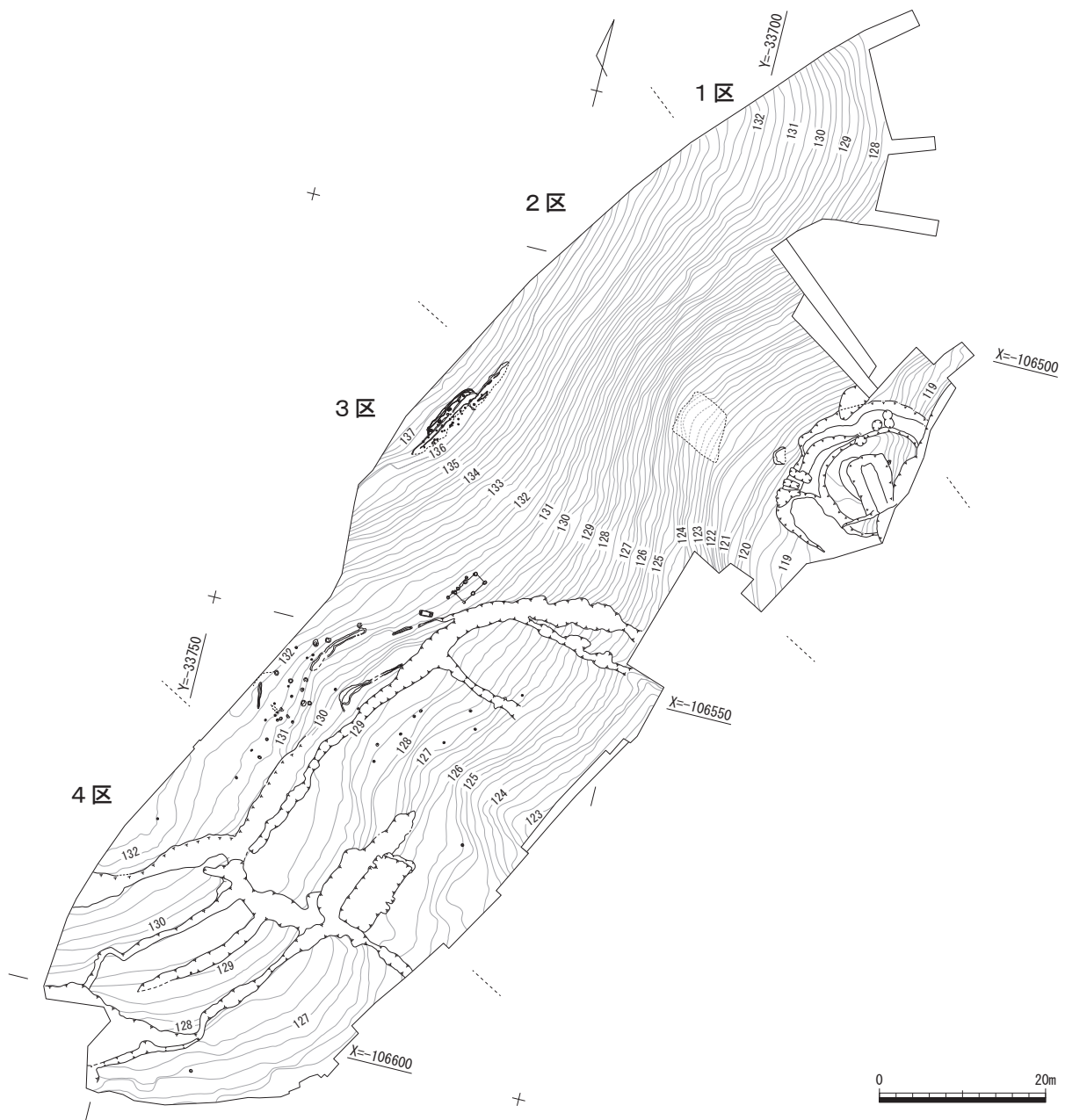
第3章 高尾北ヤシキ遺跡



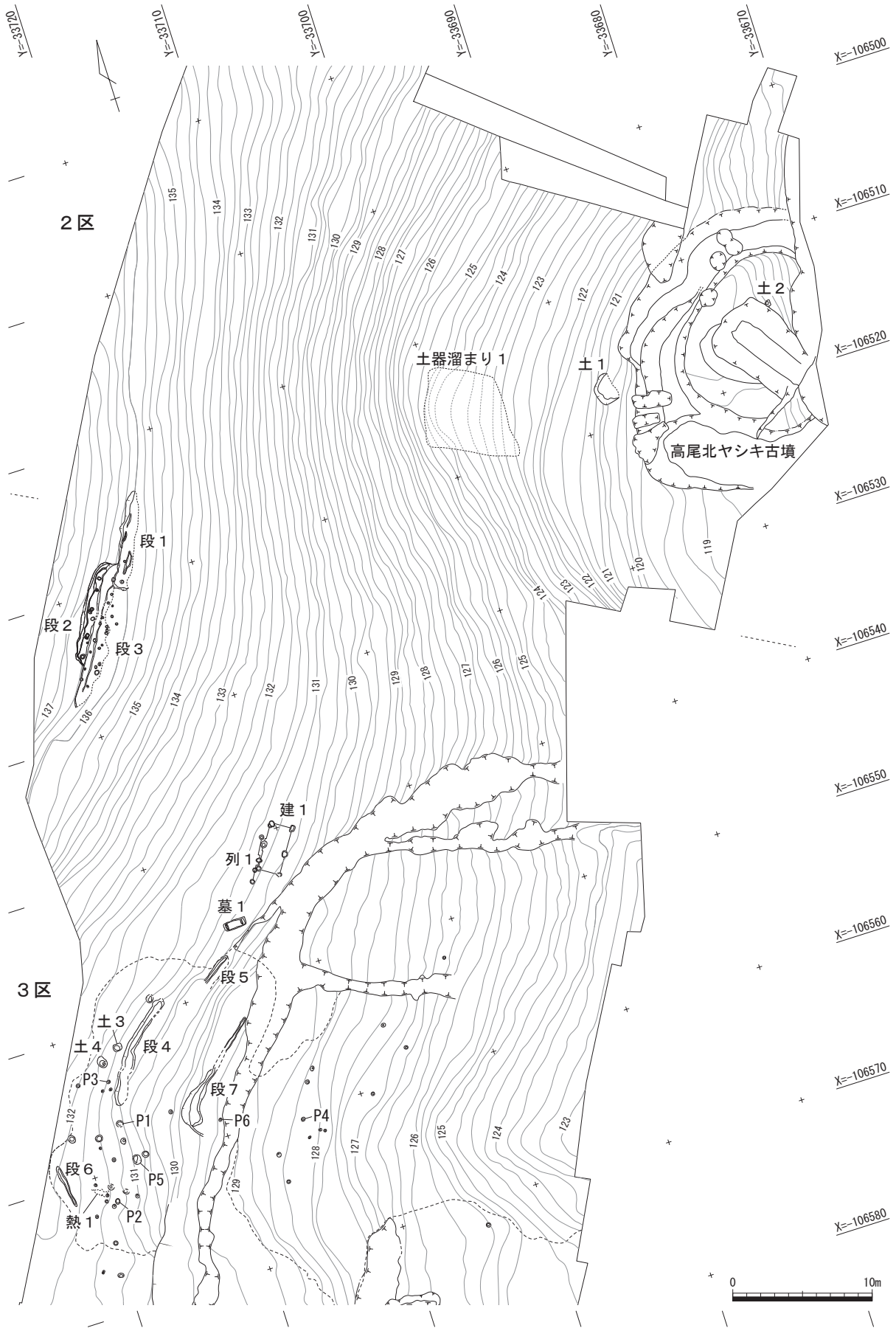
第9図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳 遺構全体図③ (1/400)

第2節 弥生時代の遺構・遺物

高尾北ヤシキ遺跡では、2・3区を中心に弥生時代の遺構・遺物を確認した。掘立柱建物1棟、柱穴列1棟、段状遺構7面、土坑4基、木棺墓1基、土器溜まり1か所、被熱面1面を確認し、集落を構成する。これらの遺構は、段状遺構7が配置された標高129.4mよりも斜面上方に配置されており、当該期の集落の範囲をある程度想定できる。ただ、調査区内で確認した遺構は限られるが、第5節で述べるように3区南側の谷部に堆積した包含層1では弥生時代から中世の遺物が大量に出土したことから、2・3区の調査区外の西側上方にも弥生時代の集落が広がる可能性や、第4節のように中世の整地面の造成によって弥生時代の遺構が削られたことが推測される。(米田)



第10図 弥生時代遺構全体図① (1/800)



第11図 弥生時代遺構全体図② (1/400)

1 掘立柱建物・柱穴列

掘立柱建物 1 (第12図、図版5)

3区北西の標高131 mあたりに位置する掘立柱建物である。竪穴住居5や柱穴列1と重複し、竪穴住居5に切られる。本建物と柱穴列1との切り合い関係は不明である。規模は桁行3.47 m、梁行1.60 mの1間×2間である。主軸はN-31°-Eである。柱間距離は153~194 cmで、柱穴は径35~50 cm、最大深39 cmである。遺物は出土していないが、切り合いから弥生時代中期と推測される。(米田)

柱穴列 1 (第13図、図版5)

3区北西の標高131 mあたりに位置し、本来は掘立柱建物であった可能性がある。竪穴住居5や掘立柱建物1と重複し、竪穴住居5に切られる。規模は全長3.28 m、2間である。主軸はN-30°-Eで、掘立柱建物1とほぼ同じである。柱間距離は165 cmほどである。出土遺物はないが、切り合いや規模から弥生時代中期の可能性はある。(米田)

2 段状遺構

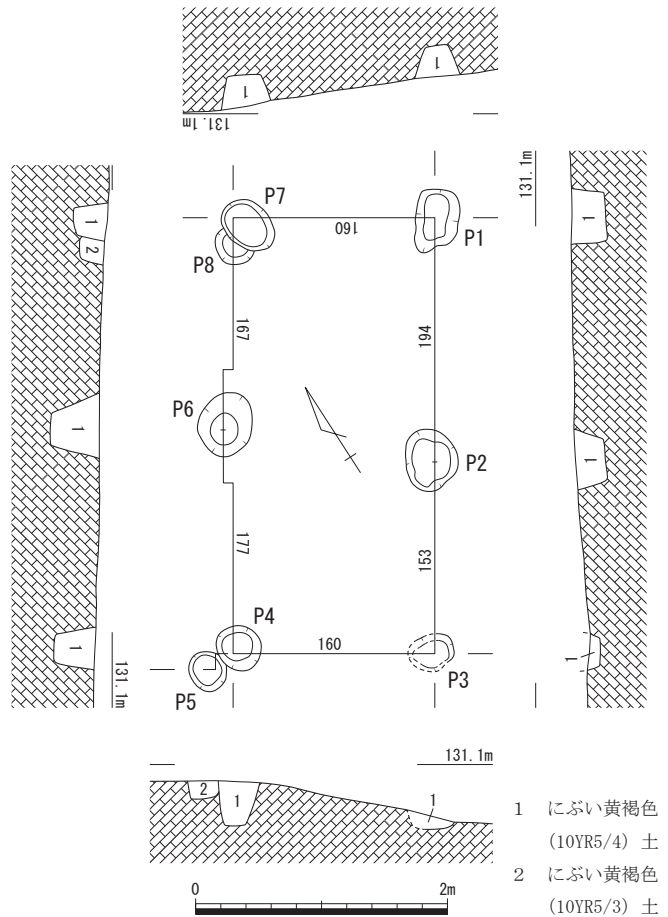
段状遺構 1 (第14図、図版5・6)

3区北西端の標高136.2 m前後に位置し、段状遺構3の床面北端を切る。規模は長軸6.95 m、短軸0.89 mである。壁面中央には壁体溝が断続的に認められる。柱穴は床面南側で2個確認した。出土遺物は弥生土器の甕1がある。時期は弥生時代中期と考えられる。(米田)

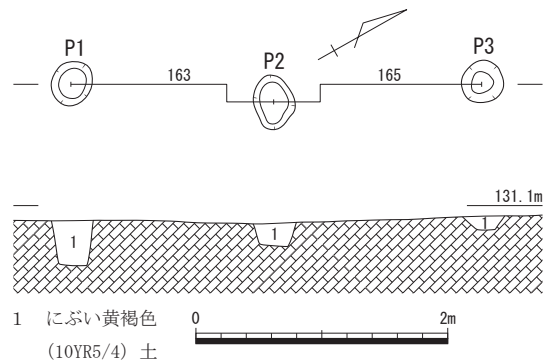
段状遺構 2

(第14・15図、図版5・6・57)

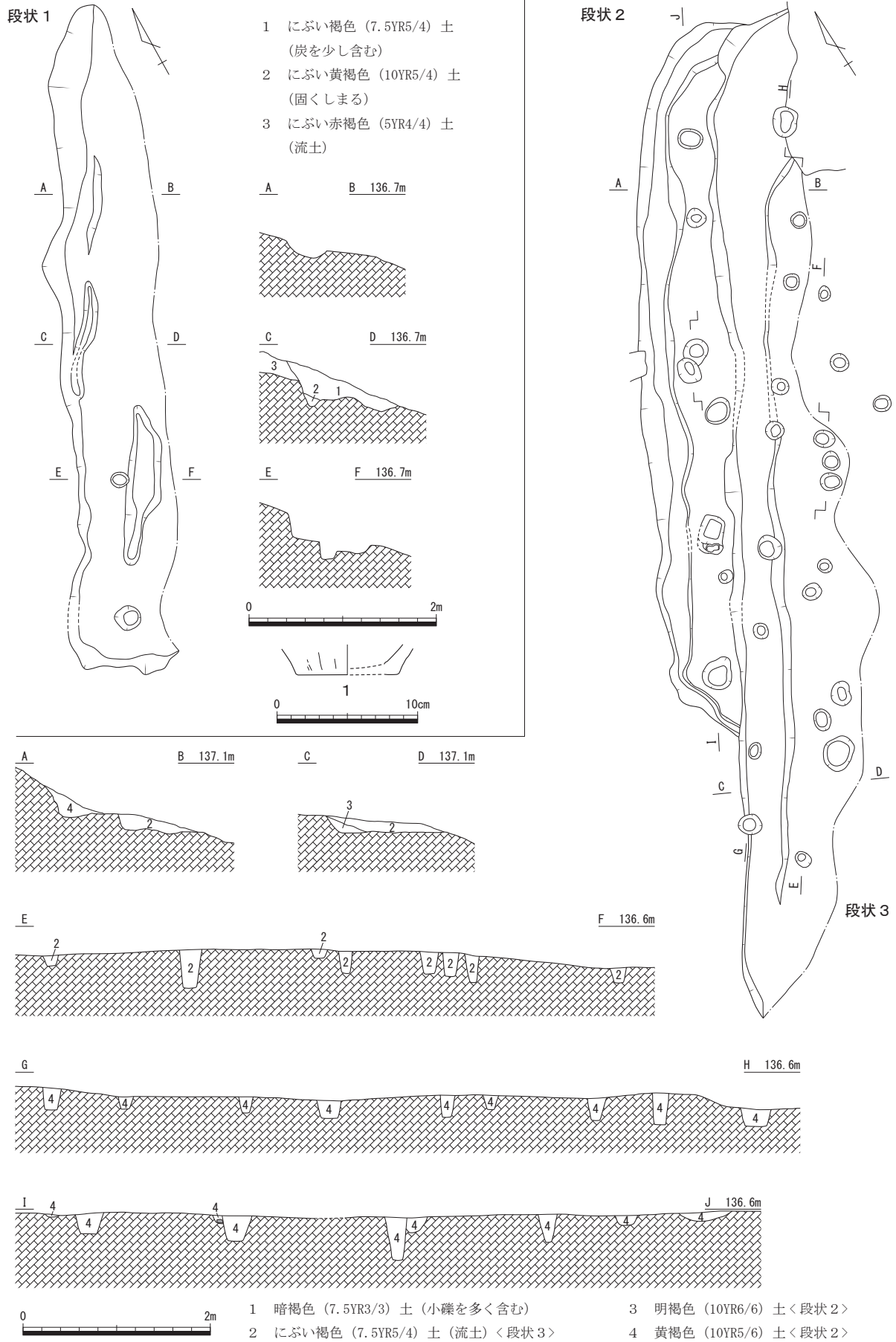
3区北西端の標高136.6 mあたりに位置し、段状遺構3に切られる。規模は長軸7.35 m、短軸0.8 mである。壁面には壁体溝がめぐる。床面には5個の柱穴が直線的に並び、掘立柱建物を伴う可能性が高い。柱間距離は85~170 cm、深さ11~45 cmと不規則である。覆土から弥生土器の壺2、サヌカイト製石鏃S1、サヌカイト剥片1点が出土した。このほ



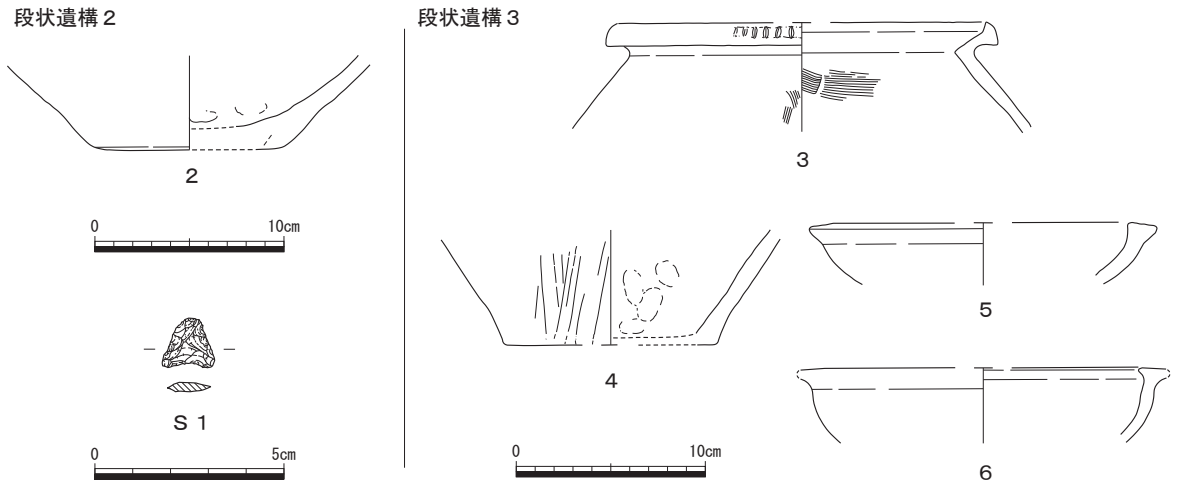
第12図 掘立柱建物 1 (1/60)



第13図 柱穴列 1 (1/60)



第14図 段状遺構1～3 (1/60)、段状遺構1出土遺物 (1/4)



第 15 図 段状遺構 2・3 出土遺物 (1/4・1/2)



1 暗褐色 (10YR3/4) 土 (固くしまる。炭を多く含む)

第 16 図 段状遺構 4 (1/60)

第 17 図 段状遺構 4 出土遺物 (1/4)

か、段状遺構 2・3 からサヌカイト剥片 3 点も見つかった。時期は弥生時代中期である。(米田)

段状遺構 3 (第 14・15 図、図版 5・6)

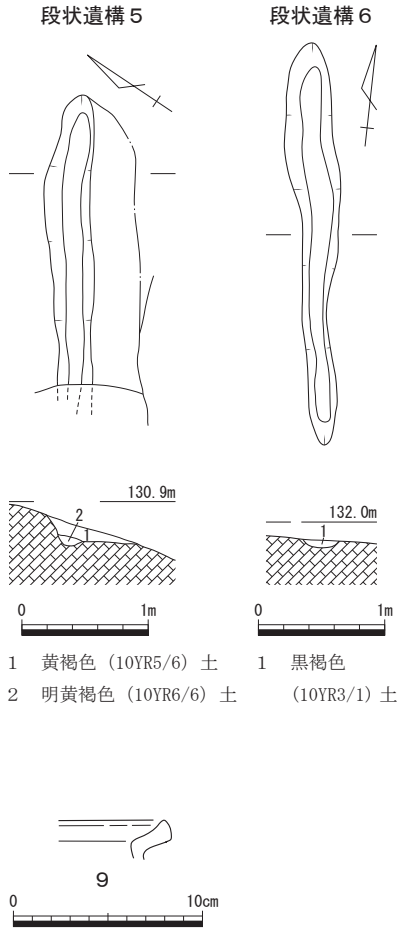
3 区北西端に位置し、段状遺構 2 を切り、段状遺構 1 に切られる。規模は長軸 9.75 m、短軸 1.28 m である。壁面には幅広の壁体溝がめぐる。床面周辺では複数の柱穴が確認されているが、不規則な配置である。遺物は覆土から弥生土器の壺 3・4、高杯 5・6、サヌカイト剥片 1 点、玄武岩剥片 1 点が出土した。時期は弥生時代中期中葉と捉えられる。(米田)

段状遺構 4 (第 16・17 図、図版 6・51)

3 区南西の標高 131.3 m あたりに位置する。段状遺構の長さ 7.93 m、幅 0.92 m の壁体溝のみが残存する。壁体溝の中央から弥生土器の甕 7・8 のほか、サヌカイト剥片 1 点が出土した。時期は弥生時代中期中葉である。(米田)

段状遺構 5 (第 18 図、図版 7)

3 区南西の標高 130.6 m あたりに位置する。段状遺構 10 に切られる。規模は長軸 2.12 m 以上、幅 0.51



第18図 段状遺構5・6(1/60)、
段状遺構5出土遺物(1/4)

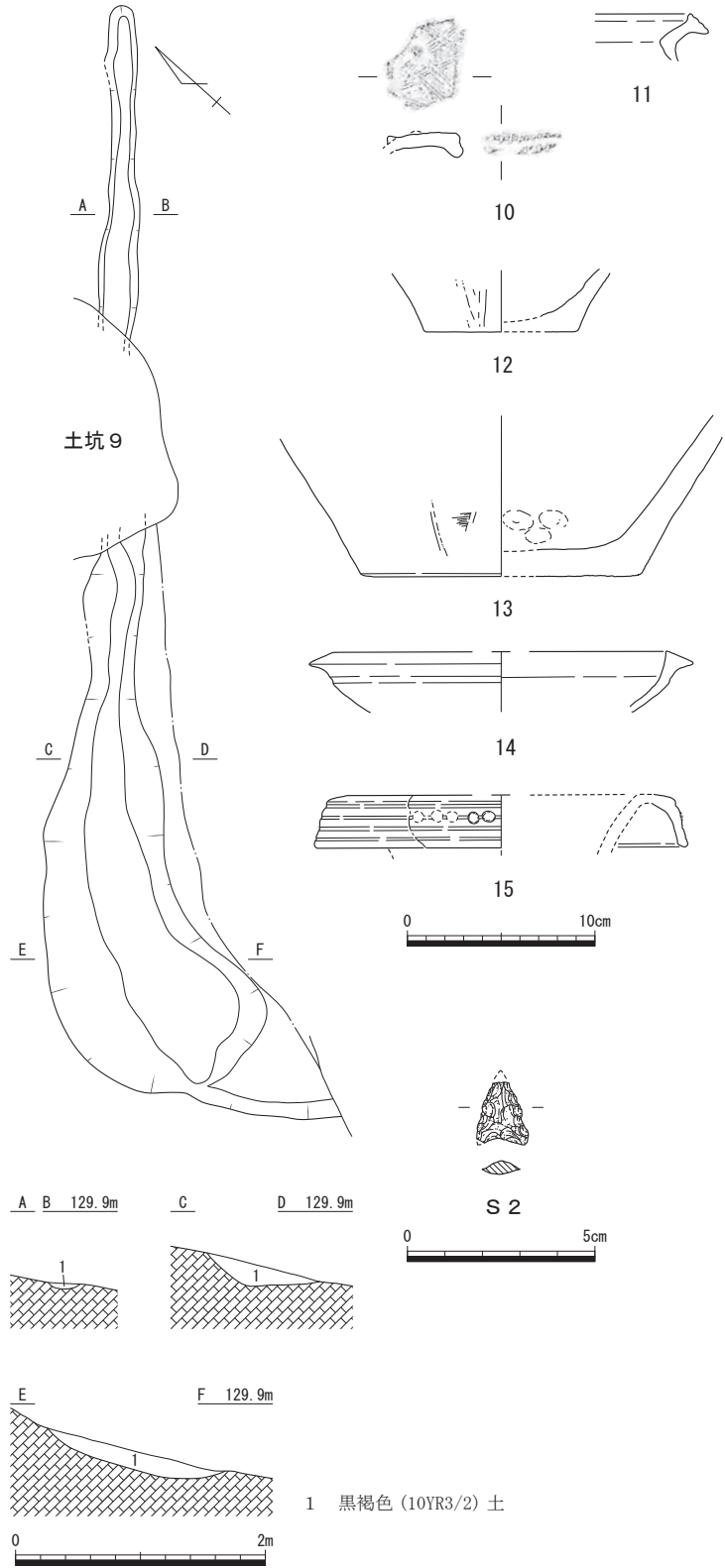
mである。壁面には直線的な壁体溝が認められる。覆土から弥生土器の甕9が出土した。時期は弥生時代中期中葉である。(米田)

段状遺構6 (第18図)

3区南西の標高131.9mあたりに位置する。長さ2.8m、幅0.38mの壁体溝のみが残存する。埋土は黒褐色土で、段状遺構4・7と類似する。埋土や地形に長軸が沿う配置状況から、時期は弥生時代中期中葉と推測される。(米田)

段状遺構7 (第19図、図版7)

3区南西の標高129.4mあたりに位置し、段状遺構31に切られる。残存する規模は長軸8.55m、短軸0.62mである。壁体溝の南端は幅80cm前後と広いが、北側は幅約20cmと狭い。溝の



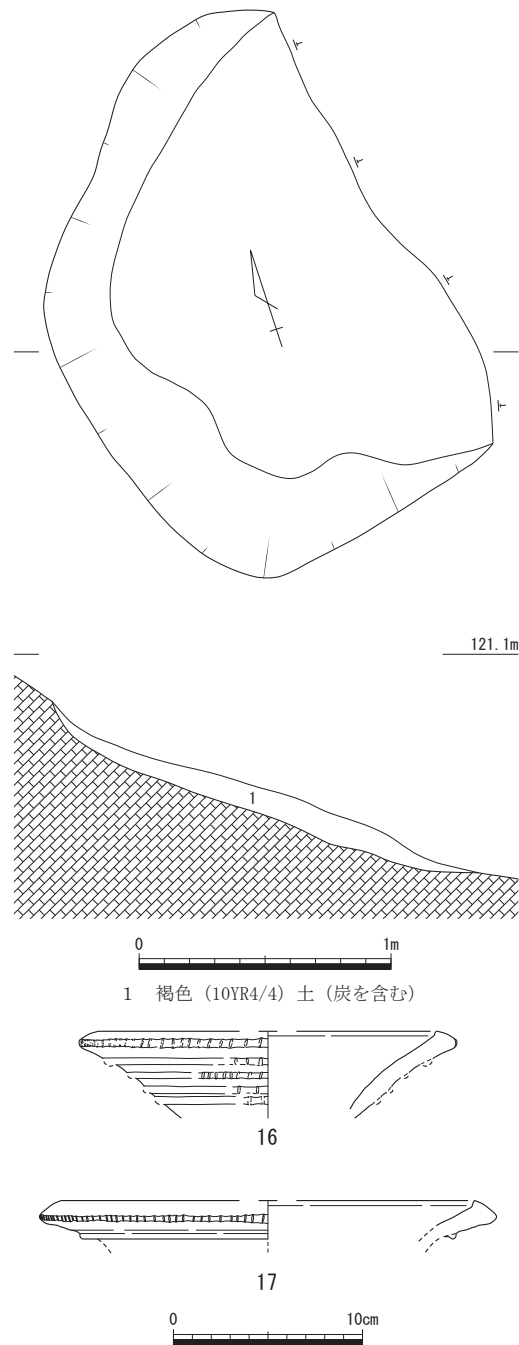
第19図 段状遺構7(1/60)、出土遺物(1/4・1/2)

埋土から弥生土器の壺 10、甕 11、甕・壺の底部 12・13、高杯 14、器台 15、サヌカイト製石鏃 S 2 が出土した。時期は弥生時代中期中葉である。(米田)

3 土坑

土坑 1 (第 20 図、図版 7)

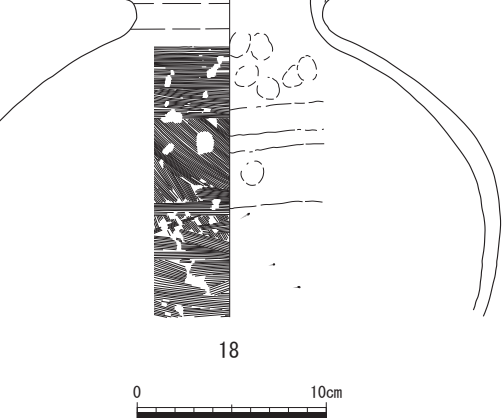
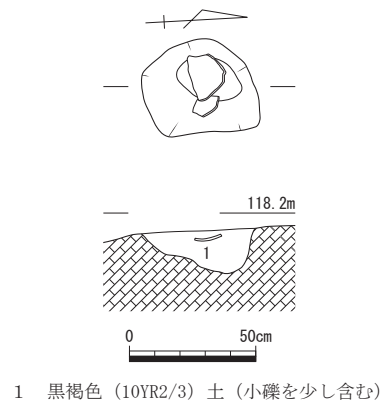
2 区の南東側、斜面と平坦地の傾斜変換点よりやや斜面側に位置する。斜面下方側は、自然流出もしくは平坦面造成時の削平により失われており、検出時の形態は長軸 209cm、短軸 148cm の不整半円形を呈する。埋土は炭を含む褐色土で、貼付突帯や肥厚した口縁部に細かい刻み目を施した弥生時代中期の壺 (16・17) などを包含していた。(小嶋)



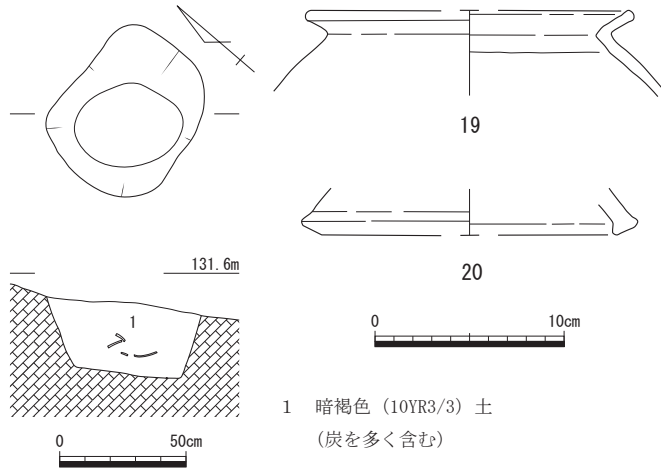
第 20 図 土坑 1 (1/30)、出土遺物 (1/4)

土坑 2 (第 21 図、図版 7・51)

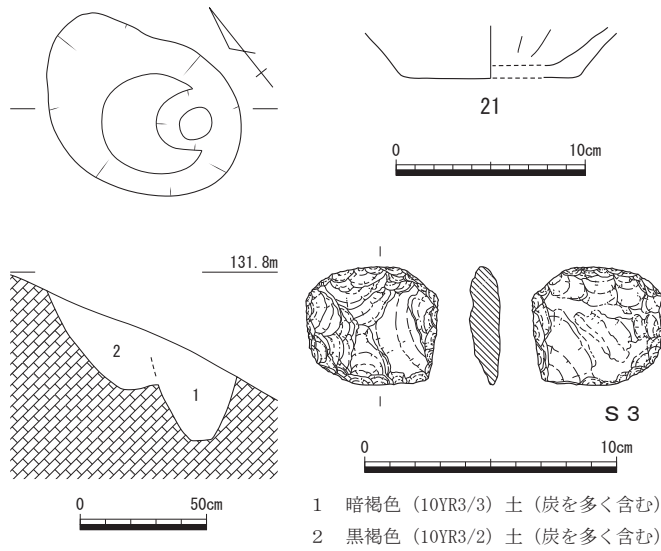
2 区東側、高尾北ヤシキ古墳築造以前の基盤層を精査した時に、18 の破片が口縁を横にした状態で不整形の土坑内に検出された。土坑は長軸 51 cm、短軸 38 cm で 深さは最大 18 cm であった。出土状況から土器棺の可能性が考えられる。弥生土器壺 18 は類例が少ないが、後期後葉に相当する。(氏平)



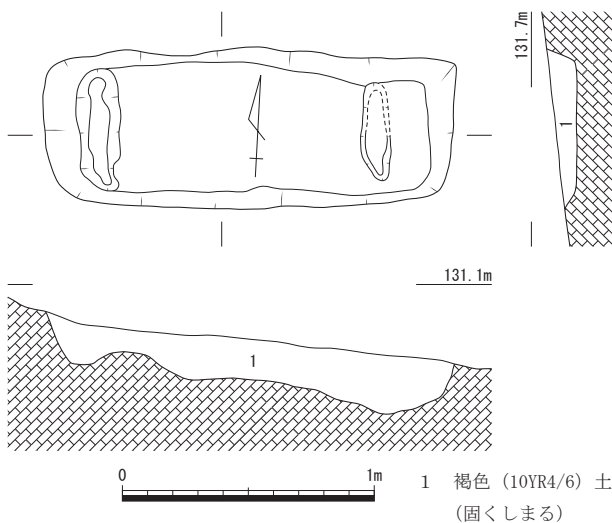
第 21 図 土坑 2 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第22図 土坑3 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第23図 土坑4 (1/30)、出土遺物 (1/4・1/3)



第24図 墓1 (1/30)

土坑3 (第22図、図版7)

3区南西に位置し、段状遺構4西隣、土坑4に北隣する。平面形は不整形、断面は逆台形を呈する。長軸63cm、短軸50cm、深さ32cmである。遺物は弥生土器の甕19、高杯20が出土した。時期は弥生時代中期中葉に比定される。(米田)

土坑4 (第23図、図版7・58)

3区南西に位置し、段状遺構4の西隣、土坑3の南隣にある。平面形は不整形楕円形、断面は不整な逆台形を呈する。長軸86cm、短軸62cm、深さ58cmである。遺物は弥生土器の壺21、緑色片岩製の磨製石包丁の研磨工程品S3が出土した。時期は弥生時代中期中葉である。(米田)

4 墓

墓1 (第24図、図版7)

3区北西、掘立柱建物1の南西、段状遺構5の北東に位置する。長軸162cm、短軸65cmの規模で、深さは検出面から23cmである。底部には小口溝があり、西側で掘り方の下端に接し、東側では掘り方下端より15cm内側に掘られ、小口溝間の距離は112cmである。遺物は出土していないが弥生時代の木棺墓と考えられる。(樋口)

5 土器溜まり

土器溜まり1

(第25～29図、図7・51・57・58)

2区西側の斜面に位置する。斜面中のくぼみ状に見える部分に遺構が存在する可能性があったため試掘を行ったところ、黄橙色土の下に断面図第2層の褐色土が存在し、その層だけでなく下層からも弥生土器

が多く出土した。この結果から褐色土の範囲が遺構であると考え、その範囲を平面的に確認して掘削を行った。褐色土は平面図の点線で囲われた東西約6m、南北約6mの範囲に分布していた。褐色土の下には断面図で第3・4層にあたる黄橙色土が堆積し、これらは基盤層よりやや灰色に近い色調と基盤層に似た土質であった。第2～4層の範囲を掘削した結果、斜面上部側では岩盤が露出して約30度の急斜面になり、中央部は窪んでいたが人為的な加工やピットなどは確認できなかった。土器は第2～4層に包含し、特に第3層が多かった。調査区内で、この土器溜まりの斜面上部側に遺構は見られなかったため、調査区外に存在した遺構から急斜面を伝って流れた遺物が堆積した自然堆積とみられる。

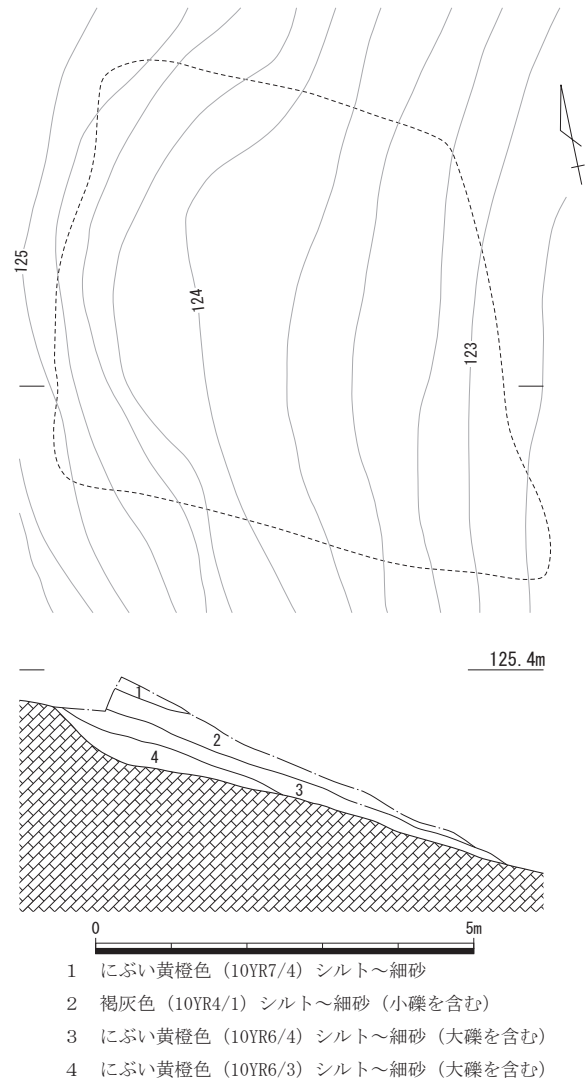
出土土器はすべて弥生土器で、大きさが20cm大から小片まで様々だったが、接合できるものは少なかった。

広口壺は口縁を屈曲外反させ端面を肥厚、浮文・刻目を付ける22～29と、口縁が緩やかに外側に開いて外面に2～3条の突帯を施す30～34に大別される。40・43・44は無頸壺で、脚がつくものであろう。口縁端面を肥厚させ浮文・刻目を付ける35～38は甕・壺の区別が困難である。甕としては口縁端面の拡張が弱い45・46がある。47～54は底部で、壺・甕いずれかになる。

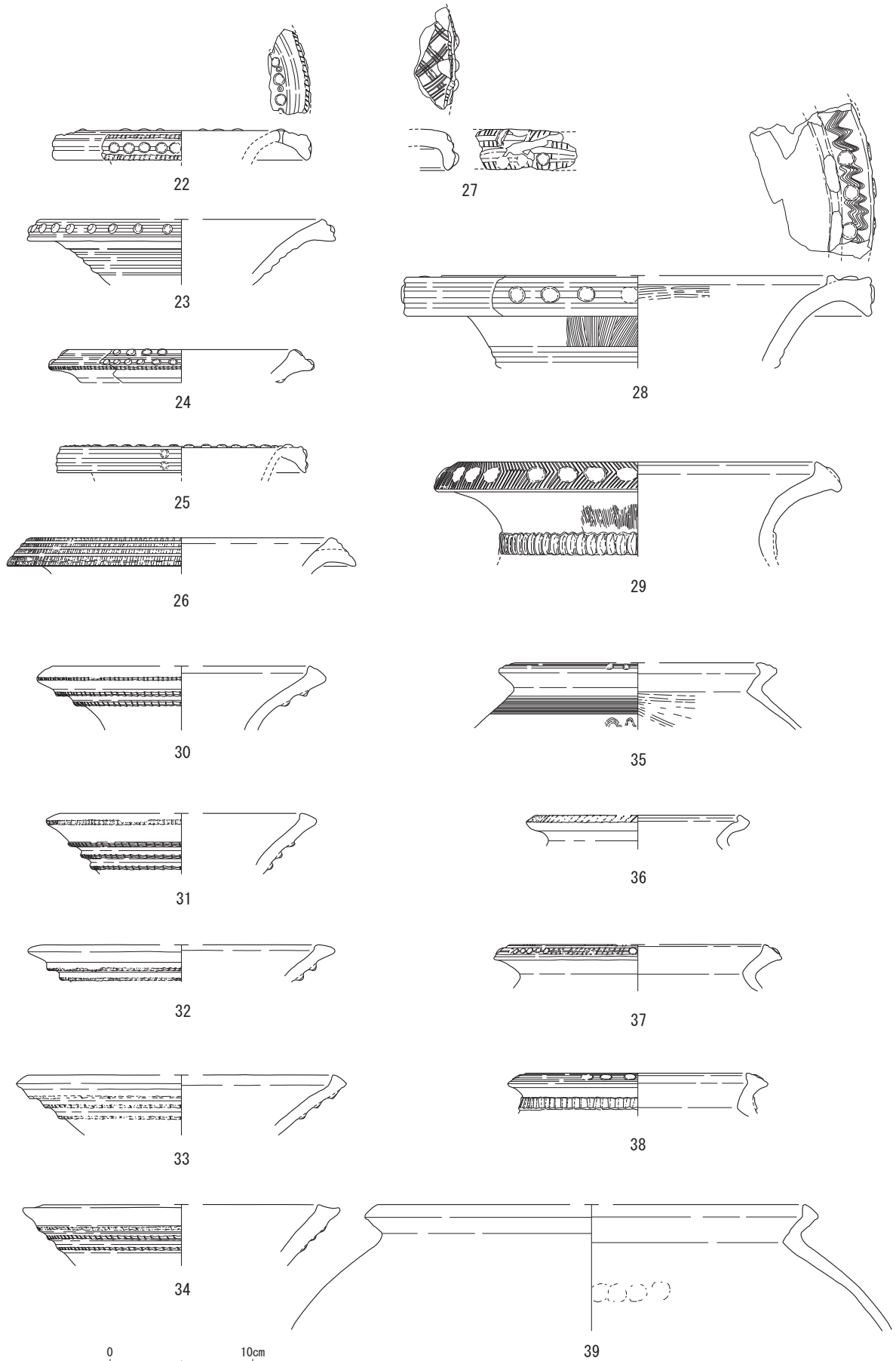
55～63が高杯である。55は器台としては口径が小さい。56～59は椀状の杯部を持ち口縁端面を肥厚させる口縁部、60・61は脚柱部、62・63は脚端部である。64～81は器台とした。口縁部は端部が下垂するが、壺で同形態を取る口縁部もあるので区別が困難であり、この形態をとる口縁部を一律に器台として扱っている。口縁部には円形浮文を施し、透かし穴は方形であることがわかる。高杯・器台には59・64・71・72のように接合できなかったが同一個体と思われる破片が存在する。82は回転台形土器で、装飾が皆無いため実際に使用したものと思われる。83も回転台形土器の一部と考えた。

土製品は土器片転用紡錘車C1がある。石製品はS4が石鏃、S5の剥片は石鏃未成品の可能性があり、S6は結晶片岩製磨製石包丁、S7は扁平片刃石斧の剥離工程の未成品である。

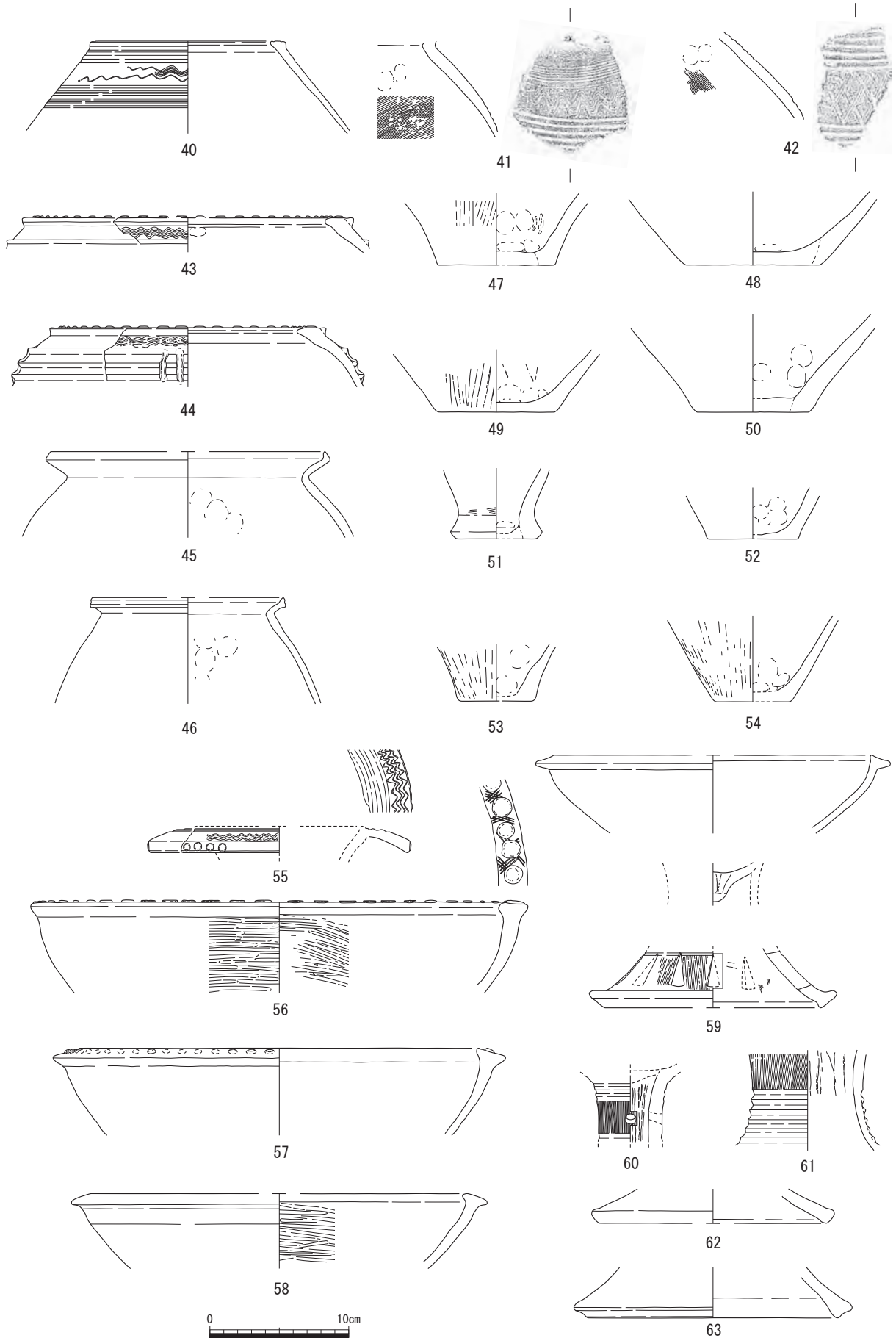
出土土器の特徴を見ていくと、壺で頸部に浮文を持つ29、外面突帯を持つ30～34は中期中葉的要素であり、28の端部の水平張り出しが弱いのも中葉的である。甕か壺39、甕45・46は後葉にも存在する、口縁端部を過度に拡張しない特徴を有している。高杯については後葉の指標である口縁部を上



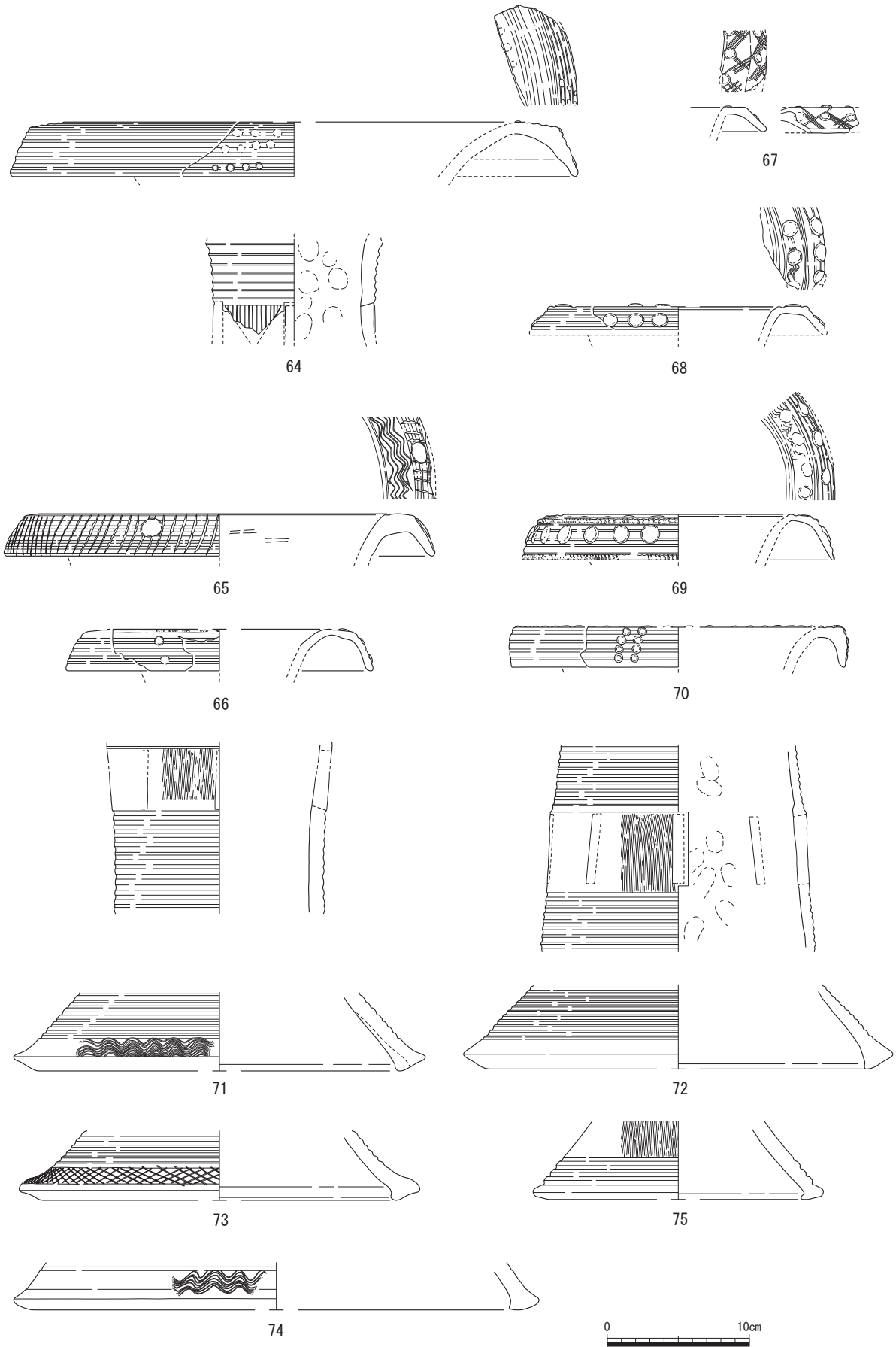
第25図 土器溜まり1 (1/100)



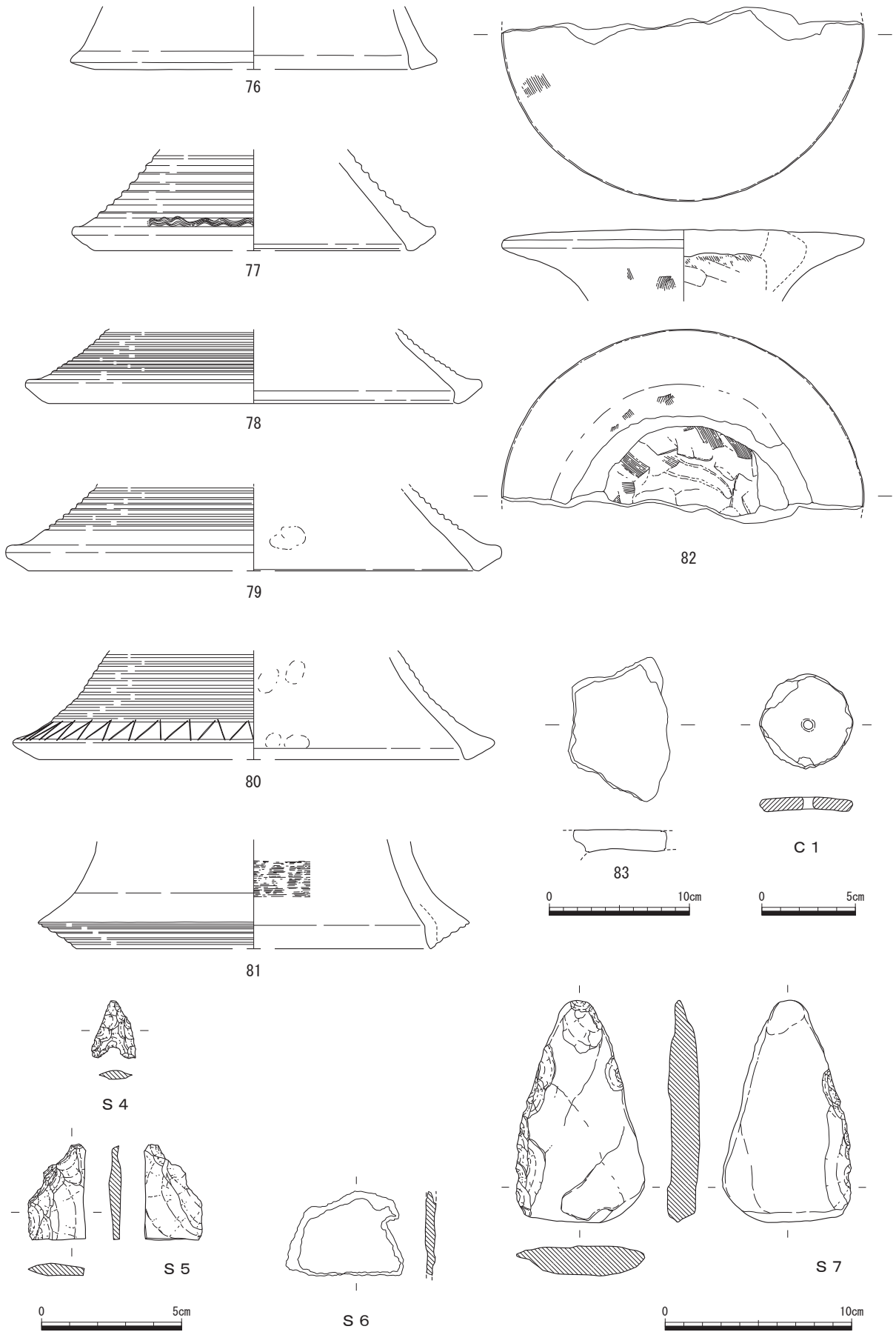
第26図 土器溜まり1出土遺物①(1/4)



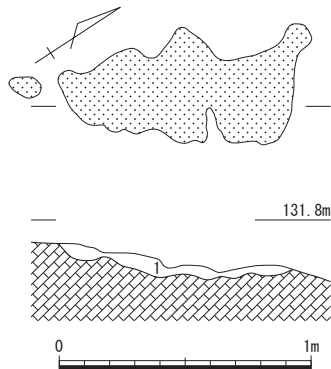
第27図 土器溜まり1出土遺物②(1/4)



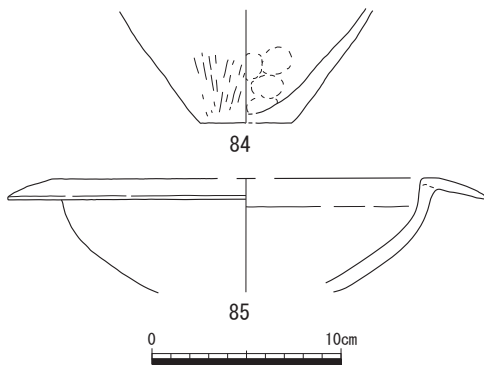
第28図 土器溜まり1出土遺物③(1/4)



第29図 土器溜まり1出土遺物④(1/4・1/2・1/3)



1 明赤褐色 (5YR5/8) 焼土 (被熱によりやや硬化)



第30図 被熱面1 (1/30)、出土遺物 (1/4)

方に立ち上げる高杯が存在しない。土器溜まり1の土器群は自然堆積と認識したこと、また層位別に取り上げられなかったことから、一括と認識してよいかどうかは難しいが、全体として弥生時代中期中葉の後半～後葉の前半に属するものと考えている。(氏平)

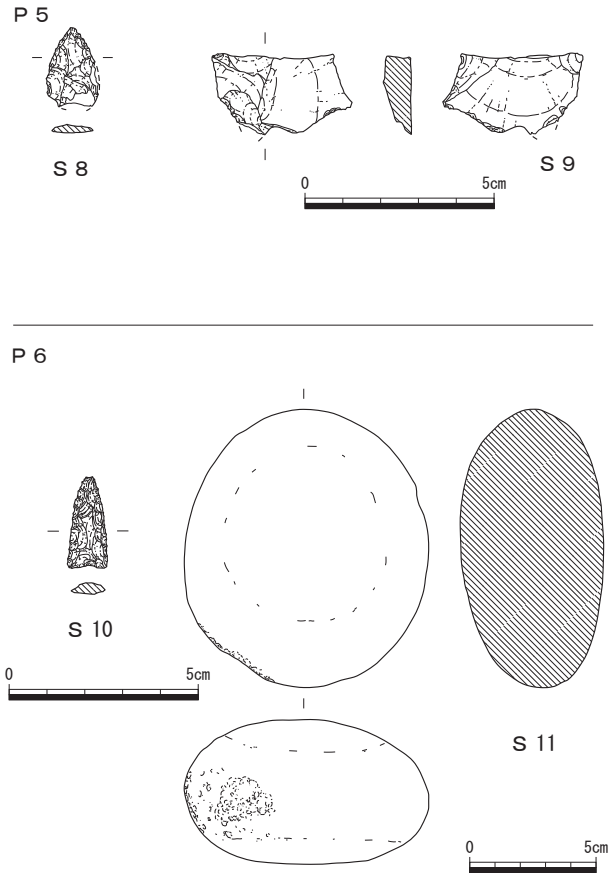
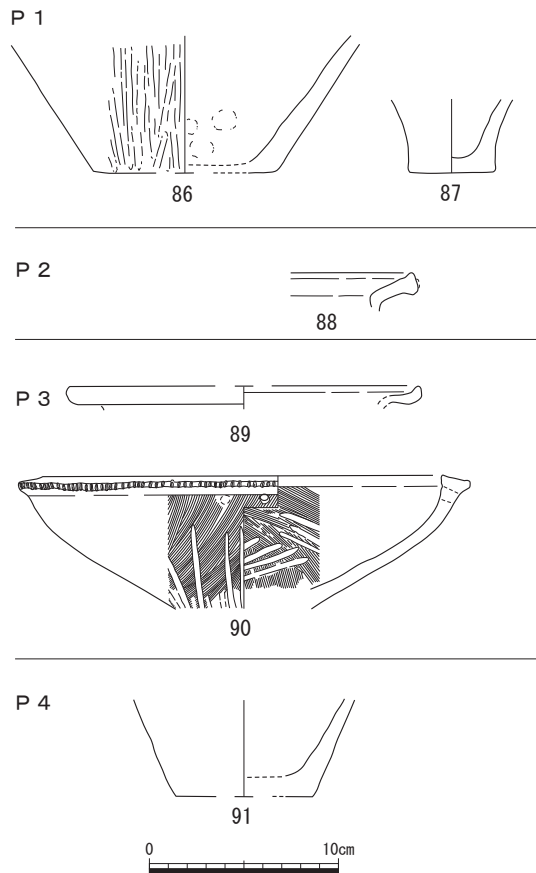
6 その他

被熱面1 (第30図)

3区の南西で、段状遺構6の東に位置する。平面形は南北に長い不整形で、長軸113cm、短軸46cm、被熱の赤色化は厚さ約8cmを測り、表面は被熱によりやや硬化していた。被熱面の上面より、弥生土器の甕底部84と高杯口縁部85の破片が出土したため、時期は弥生時代中期と考えられる。(樋口)

ピット1～6 (第31図、図版51・57・58)

弥生時代のピットは黒褐色土を主体する埋土が多く、3区の南側を中心に点在する。このうち、P1～6の配置は第11図、出土遺物は第31図に示した。

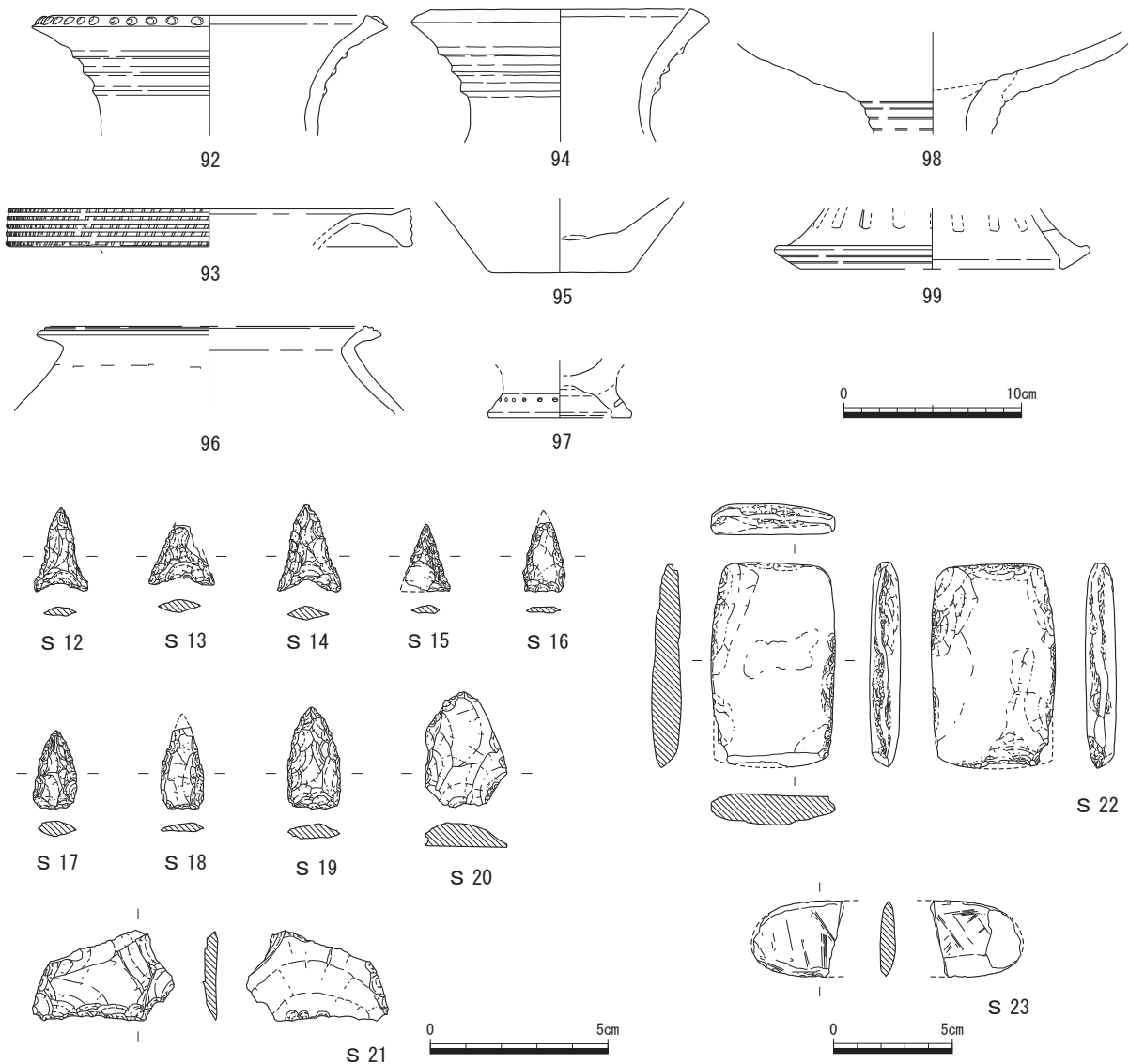


第31図 ピット1～6出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

P 1から弥生土器の壺 86、甕 87、P 2から弥生土器の甕 88、P 3から弥生土器の甕 89、高杯 90、P 4から弥生土器の甕 91が出土した。これらは弥生時代中期中葉の範疇に収まる。P 5からはサヌカイト製の石鏃 S 8、剥片 S 9、P 6からはサヌカイト製の石鏃 S 10、デイサイト製の叩石 S 11が出土した。このほか、337頁の石器石材集計表のとおり、5個のピット（旧3A区-P 90・122・161、旧3B区-P 142・376）から、計6点のサヌカイト剥片が見つかった。（米田）

遺構に伴わない遺物（第32図、図版57）

遺構外から出土した弥生時代の遺物を第32図にまとめた。92～97は弥生土器で、壺 92～94、壺の底部 95、甕 96、台付鉢の底部 97、高杯 98・99である。いずれも中期中葉に比定される。S 12～S 19はサヌカイト製石鏃である。S 12～S 14は凹基式、他は平基式である。S 20・S 21はサヌカイト製の調整痕のある剥片である。S 22は粘板岩ホルンフェルス製の扁平片刃石斧である。長さ8.65cm、幅5.24cm、厚さ1.3cmで、大形にあたる。表裏面は丁寧に研磨されているが、両側面は剝離面を残す部分が多い。S 23は緑色片岩製の磨製石包丁の破片である。このほか、図示していないサヌカイトの剥片18点、玄武岩の剥片3点が出土した。（米田）



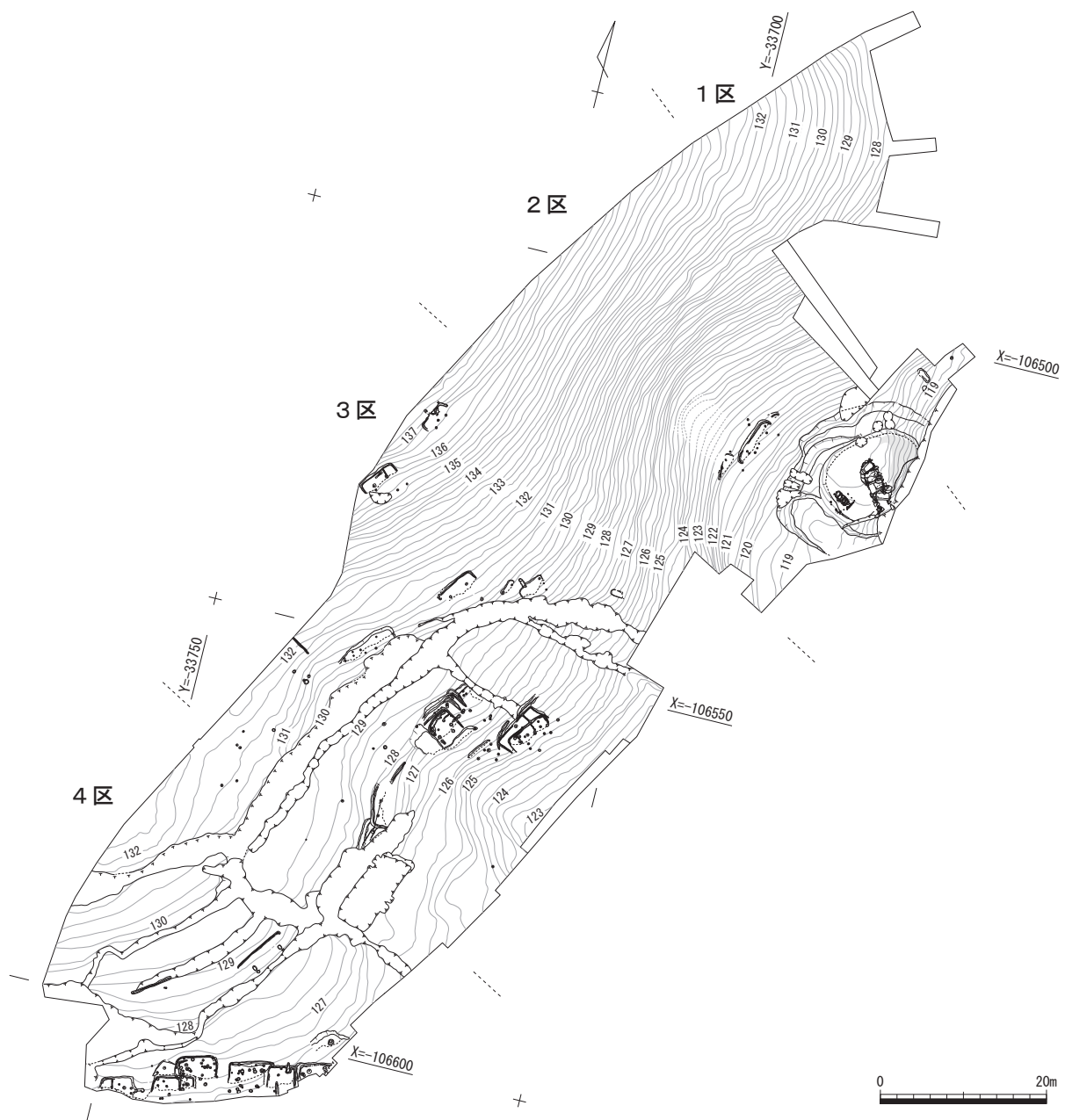
第32図 遺構に伴わない遺物（1/4・1/2・1/3）

第3節 古墳時代～古代の遺構・遺物

高尾北ヤシキ遺跡では、2～4区南半を中心に古墳時代の遺構・遺物を確認した。古墳時代後期の
竪穴住居 21 軒、柱穴列 1 列、段状遺構 20 面、土坑 2 基が見つかり、これらは集落を構成する。

竪穴住居は3～4区の8か所に散在している。21軒のうち、竪穴住居 6・7、8～10、13～16、
17～21は各地点で1～4回の建て替えが行われたのに対し、竪穴住居 1～5・11・16は単独で配置
されて集落内に散在する傾向にある。また、竪穴住居 21軒のうち、造り付けのカマドをもつ竪穴住
居は5軒で確認された。

段状遺構 16面のうち、段状遺構 10～24が3区に配置されており、竪穴住居に近接している。段

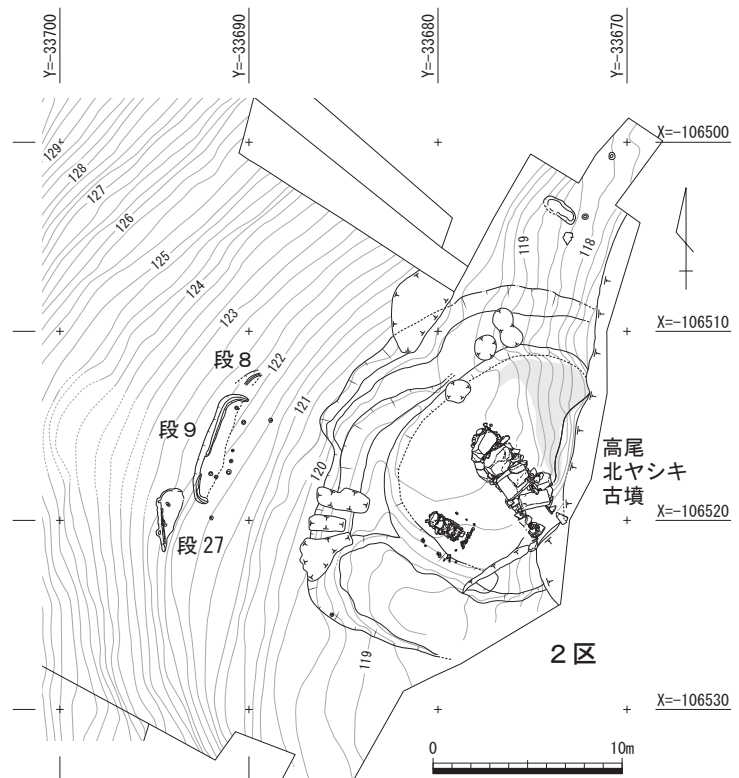


第33図 古墳時代～古代遺構全体図① (1/800)

状遺構の多くは単独で配置されたものが多いが、段状遺構 12～15 は 3 区中央に重複するように造り替えられた。また、本遺跡では古墳時代の土坑が少ないなか、3 区中央の谷部に配置された土坑 5 は、大規模であることに加え、土師器、須恵器、ガラス小玉、モモ核などの多様な遺物が出土したことから、祭祀に関わるような遺物が廃棄された可能性がある。

さらに、第4章で報告するように、2 区の東端では高尾北ヤシキ古墳、その南北で土坑墓 2 基を確認した。古代の遺構は、段状遺構 2 面と少なくとも、2 区の東側と 4 区の南東隅でそれぞれ確認した。

古墳時代～古代の遺構は本節で報告する以外に、中世の整地面の造成によって、削平された可能性があることも見込んでおく必要がある。(米田)



第34図 古墳時代～古代遺構全体図② (1/400)



写真7 竪穴住居1作業風景(東から)



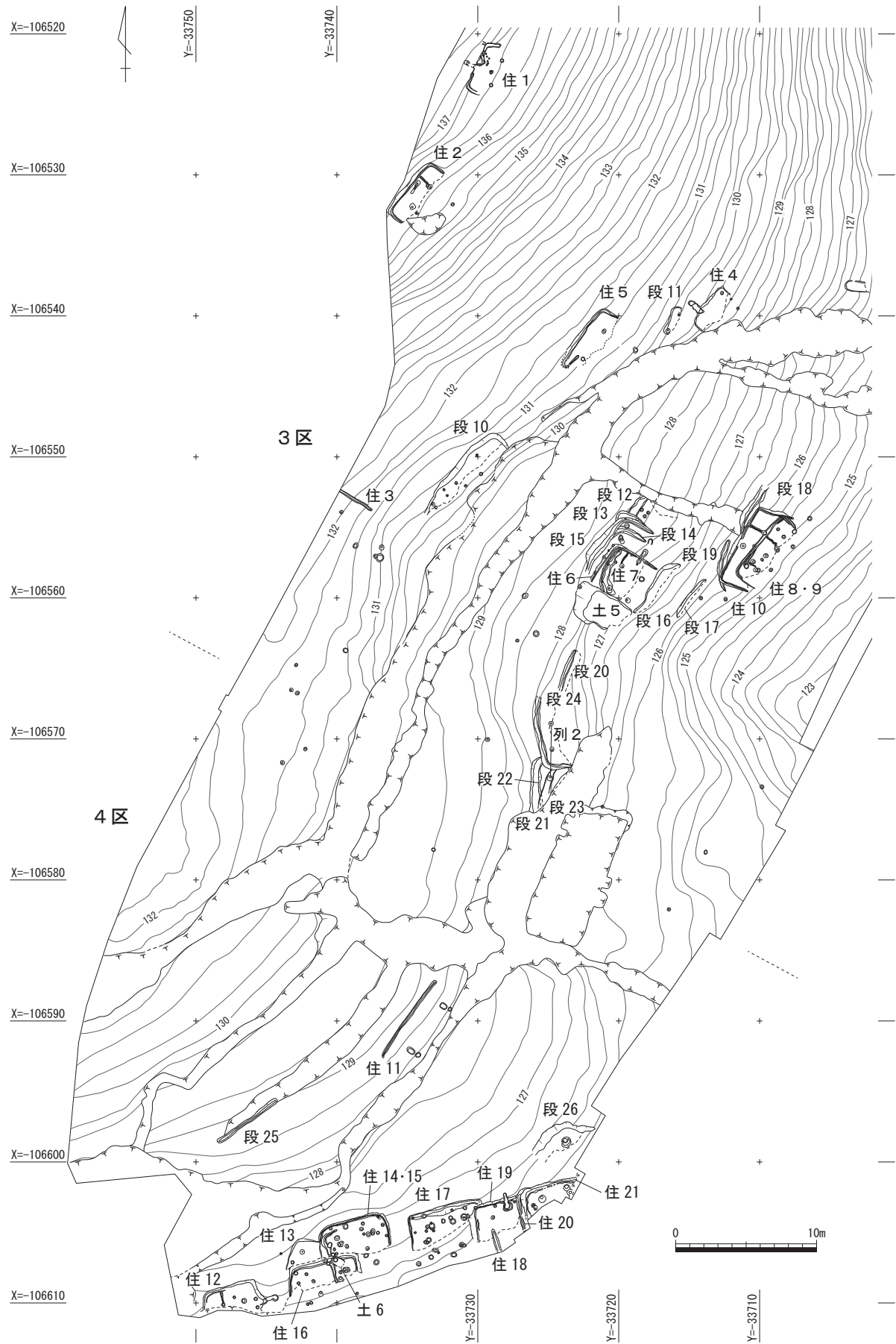
写真8 竪穴住居4作業風景(南西から)



写真9 竪穴住居9・10作業風景(北から)



写真10 竪穴住居12～21作業風景(西から)

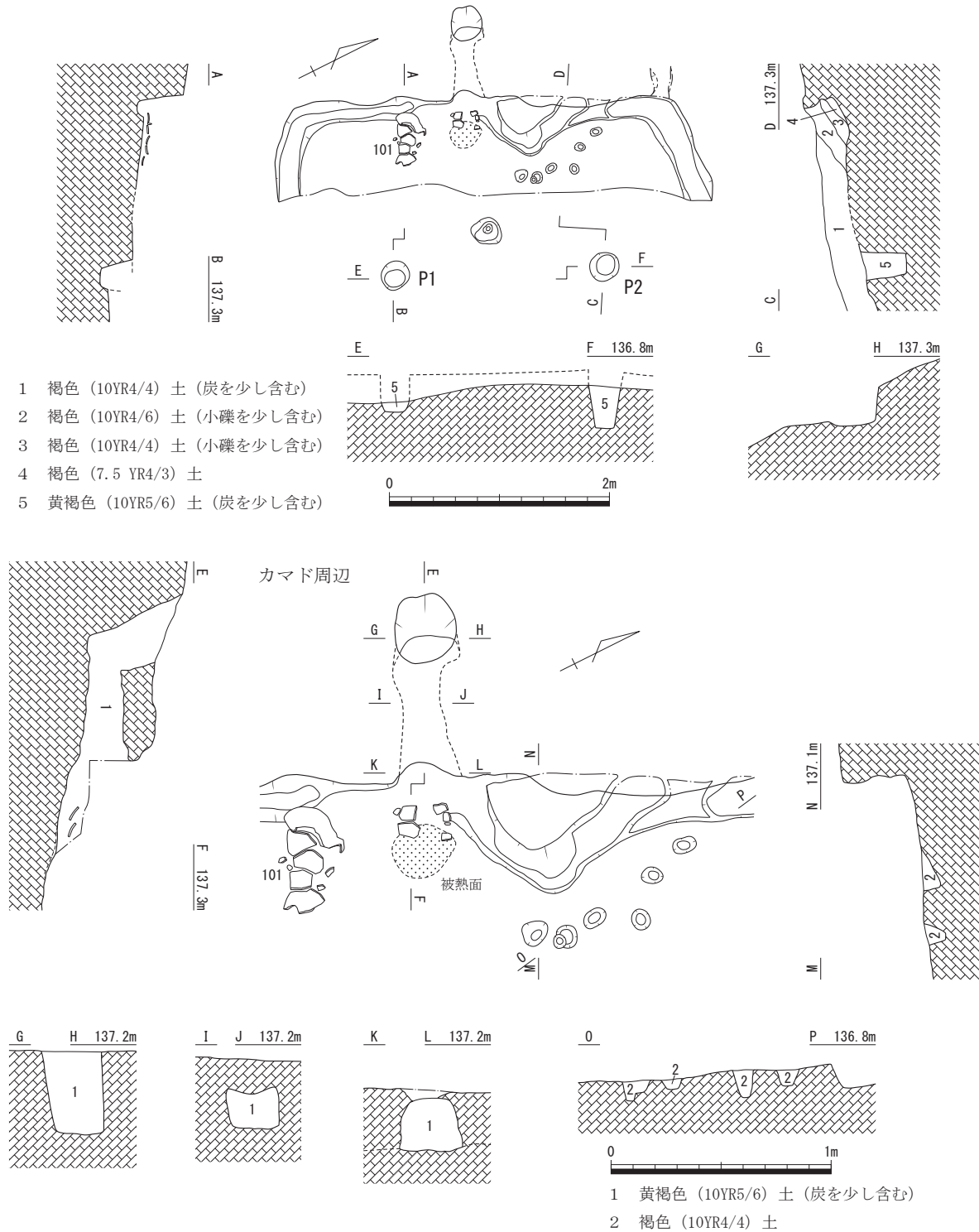


第35図 古墳時代～古代遺構全体図③ (1/400)

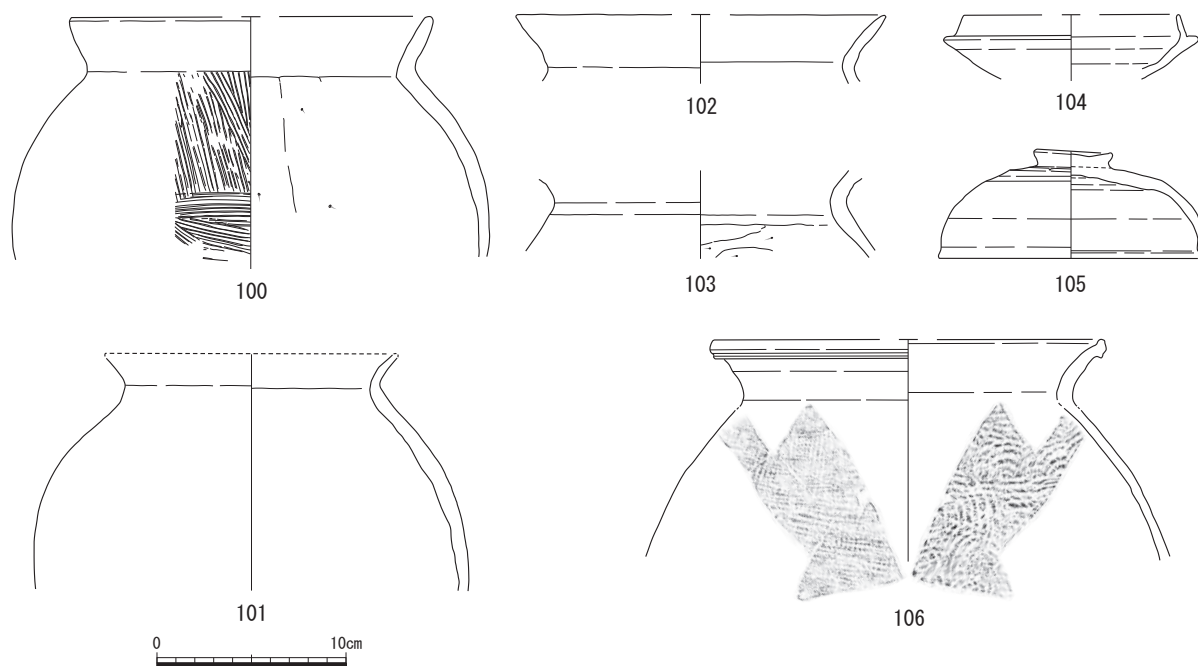
1 竪穴住居

竪穴住居 1 (第 36・37 図、図版 5・6・8・51)

3区の北西側、標高 136.7 mあたりに位置し、段状遺構 2 を切る。平面形は方形に近く、北壁がやや開く。規模は長軸 3.7 m、残存する短軸は 0.75 m、深さは検出面から 38 cmである。主軸はN-23°-Eである。南西隅角部と北西隅角部に壁体溝がめぐる。主柱穴はP 1・2で径 25 cm、深さ 35～50



第 36 図 竪穴住居 1 (1/60)、カマド周辺 (1/30)



第 37 図 竪穴住居 1 出土遺物 (1/4)

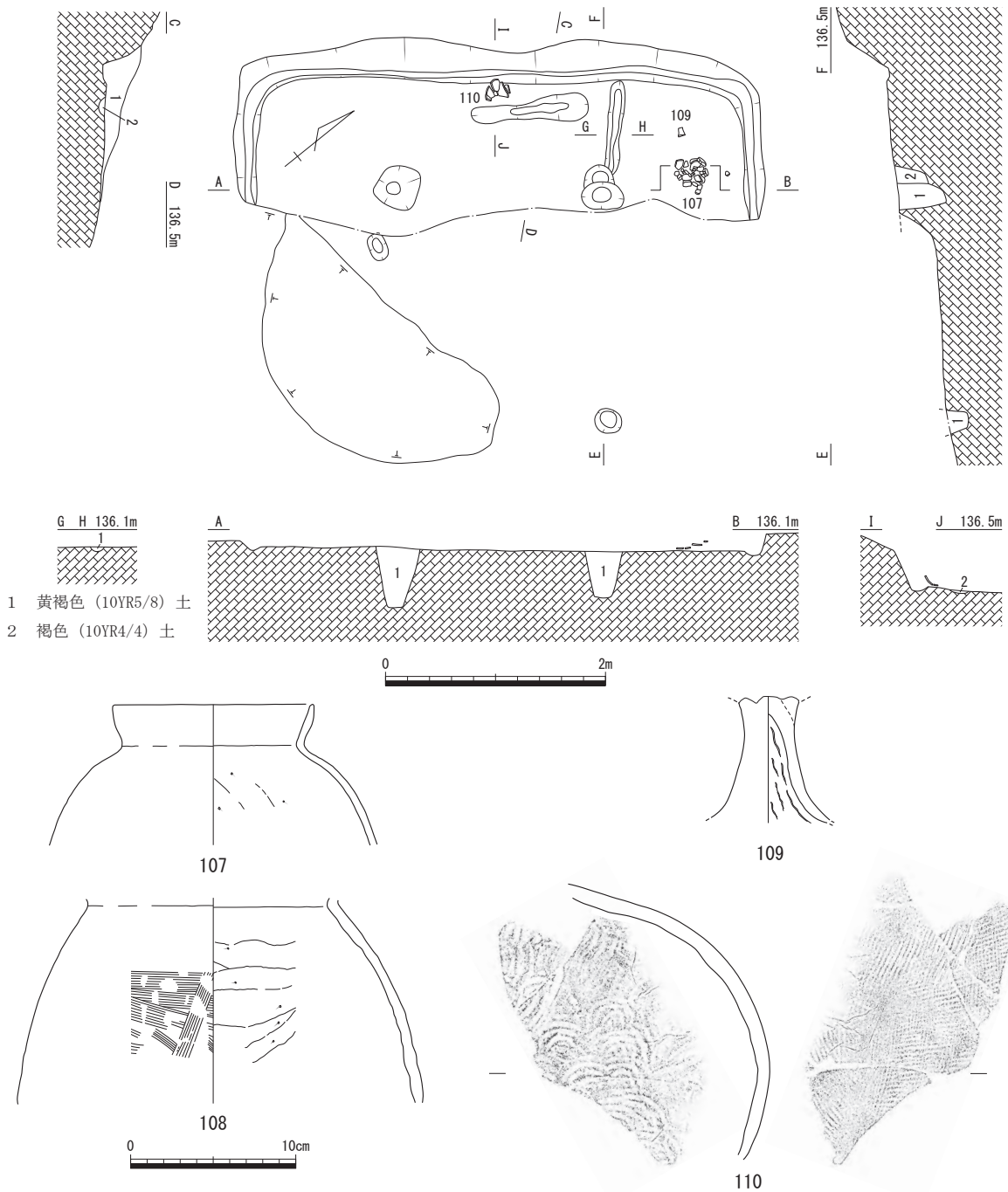
cmと復元される。

住居に伴う施設として、西壁中央でカマドの焚口と煙道、煙道の入口から西へ 55 cm のところに煙出しピットを確認した。焚口は 29 cm × 24 cm の被熱面が残る。被熱面は赤褐色で、その 5 cm 上で土師器甕の破片が散在していた。また、焚口の南隣では床面付近で土師器の甕 101 がつぶれた状態であった。煙道は延長 43 cm、入口が幅 56 cm、高さ 45 cm で、天井部が良好に残る。底面の勾配は 6° で、奥行き約 40 cm のところで煙出しピットと繋がる。煙出しピットは径 28 cm、深さ 44 cm で、65° ほど西へ傾いていた。焚口のすぐ北側では、幅 19 cm、深さ 8 cm の溝が屋内へ湾曲し、北西隅角部の壁体溝に繋がる。その連結部は両側の溝より底面が 5 cm ほど高く、排水以外の溝の用途が推測される。湾曲した溝の東側には径 5 ～ 13 cm、深さ 4 ～ 12 cm の小ピットが 7 個認められ、溝に沿うように構造物があった可能性がある。このほか、北西隅角部は壁から西に向かって、延長 25 cm、幅 20 cm ほど溝状に浅く窪んでいた。

出土遺物は土師器の甕 100 ～ 103、須恵器の杯身 104、有蓋高杯の蓋 105、甕 106 がある。104・105 は TK 43 型式に相当し、6 世紀後葉に埋没したと考えられる。(米田)

竪穴住居 2 (第 38 図、図版 9・51)

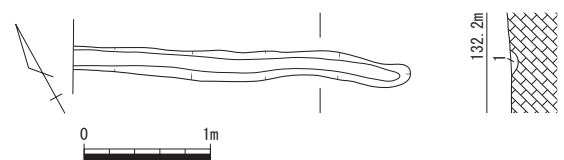
3 区の北西側で調査区の西端にあたる南東向き斜面で、竪穴住居 1 の南西に位置する。平面形は方形であるが、南東側の大部分が斜面に位置し、なおかつ樹木が生育していたため、斜面の崩落と樹根の攪乱で大半を失われている。住居の規模は残存している部分から、一辺約 4.58 m の規模と考えられ、堀方の内側に沿って、幅約 20 cm、深さ約 6 cm 程度の浅い壁体溝が周囲に巡っている。支柱穴は本来 4 本で構成されていたと考えられるが、建物北西側の 2 本と斜面下方の南東側が 1 本確認でき、南西にあったと考えられる柱穴は、樹根の攪乱により確認できなかった。北東の支柱穴に土層断面で切り合いが確認できることから、住居は建て替えて使用されていたことが考えられる。また、住居内には住居に直交するように深さ約 6 cm、幅 20 ～ 30 cm 程度の 2 本の短い溝が確認されている。出土遺物は、住居北東の床面から土師器甕の破片 107・108 と土師器高杯の脚部 109、住居北西の壁体溝に近い位置で須恵器の横瓶の胴部破片 110 が出土している。時期は古墳時代後期と考えられる。(樋口)



第38図 竪穴住居2 (1/60)、出土遺物 (1/4)

竪穴住居3 (第39図)

3区西端中央に位置する。方形の竪穴住居の壁体溝のみを確認した。溝は長さ2.67m以上、幅24cm、深さ6cmである。埋土から時期は古墳時代後期と推測される。(米田)

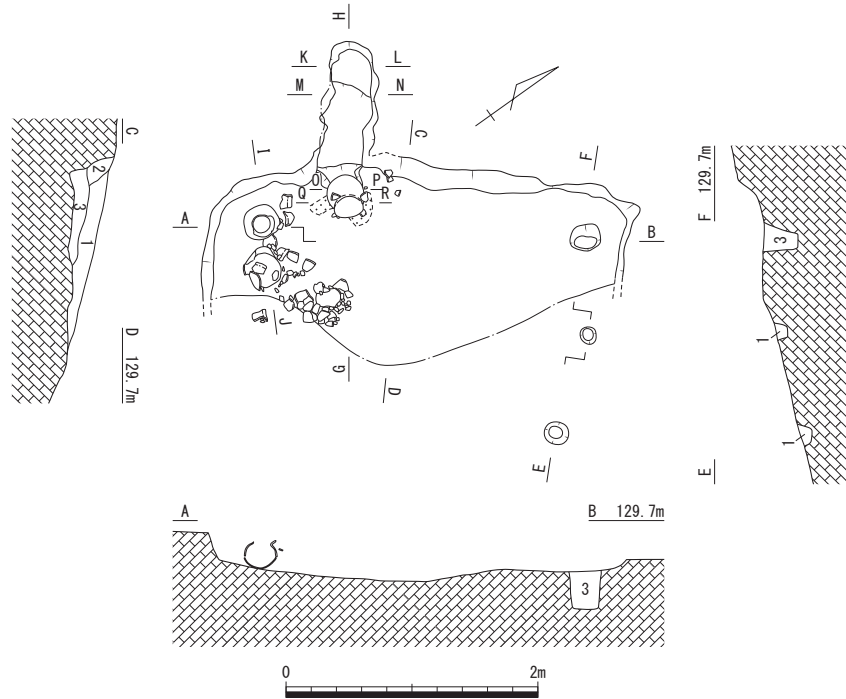


1 黄褐色 (10YR5/6) シルト (固くしまる。炭を少し含む)

第39図 竪穴住居3 (1/60)

竪穴住居4 (第40・41図、巻頭図版3、図版10・52)

3区中央、標高129.5m付近に位置する方形の竪穴住居である。南半は削平されており、規模は残存長で長軸3.2m、短軸1.49mである。ピットを住居北辺で3個確認したが、支柱穴は明確ではない。

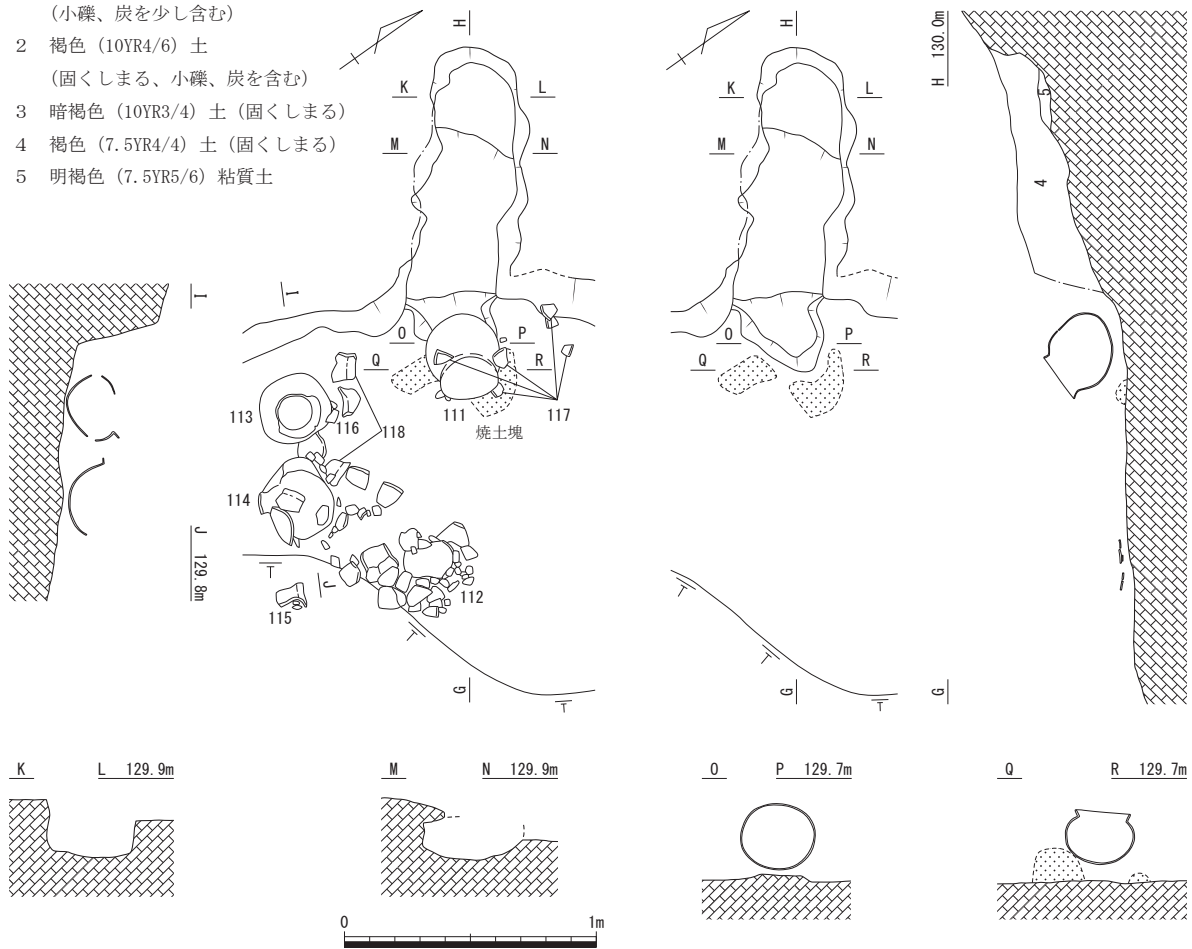


住居に伴う施設として、北西壁でカマドの焚口と煙道を確認した。カマドは長さ約90cm、幅約45cmで、断面は凸レンズ形を呈する。焚口部分には焼土塊が見られた。住居床面には土師器甕111～118が置かれていた。甕111は完形に近く、カマド焚口の正面に口を南東方向へ斜めに向けて置かれていた。また住居南西隅角付近の甕113・114もほぼ原位置を保って出土したとみら

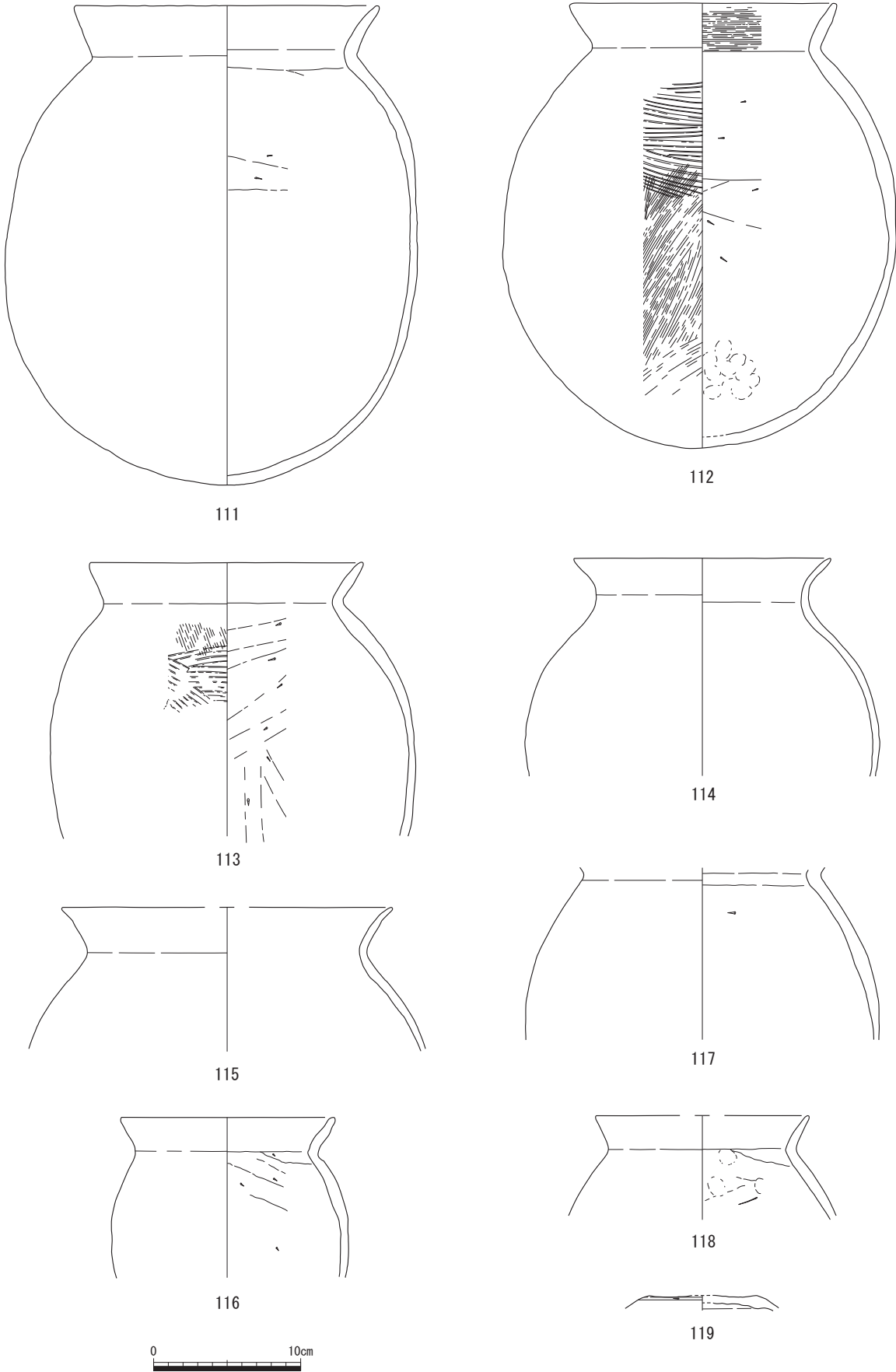
- 1 褐色 (10YR4/4) 土
(小礫、炭を少し含む)
- 2 褐色 (10YR4/6) 土
(固くしまる、小礫、炭を含む)
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 土 (固くしまる)
- 4 褐色 (7.5YR4/4) 土 (固くしまる)
- 5 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土

カマド周辺遺物出土状況

完掘状況



第40図 竪穴住居4 (1/60)、カマド周辺 (1/30)



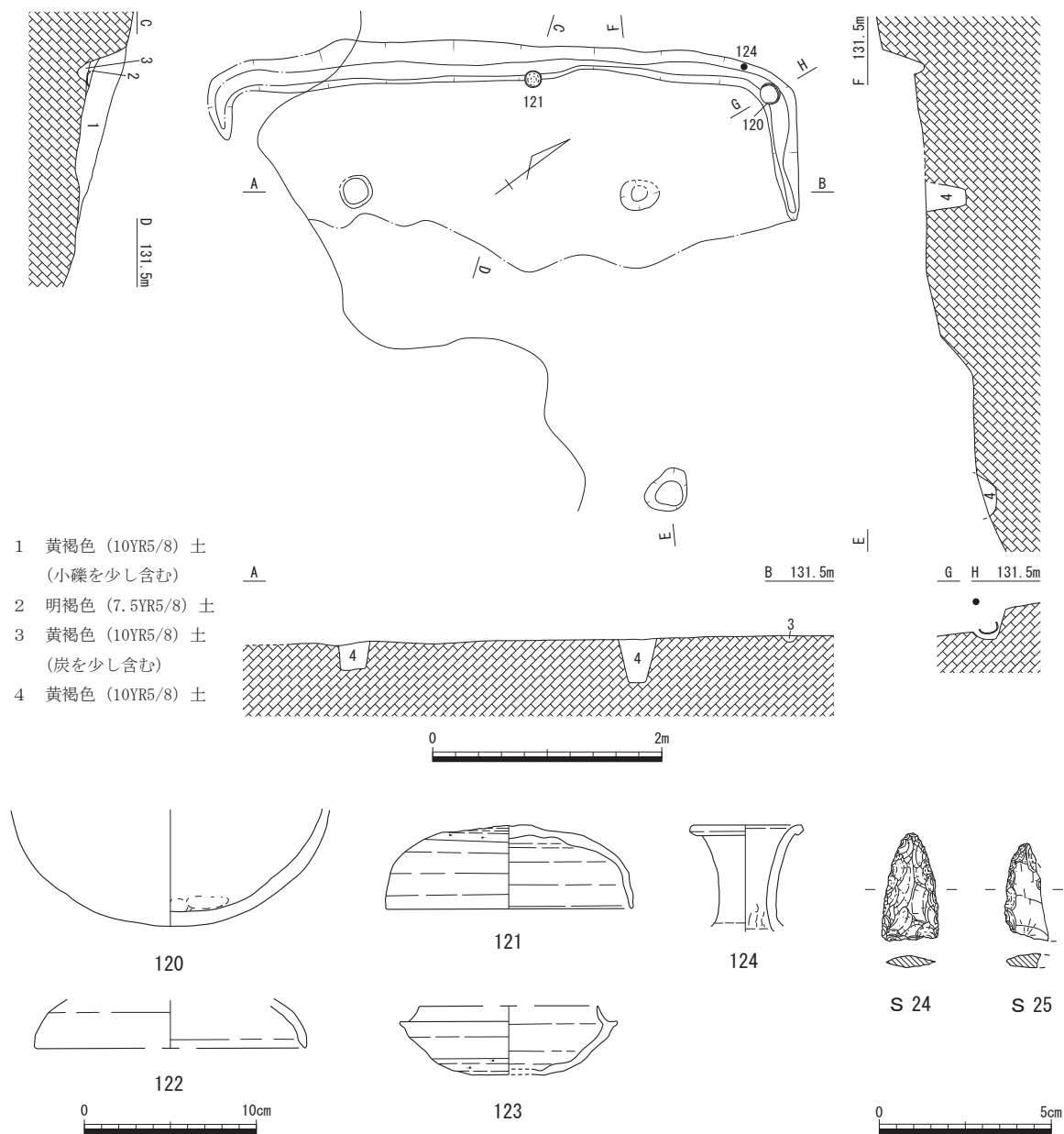
第41図 竪穴住居4出土遺物 (1/4)

れる。一方で床面で潰れたように出土した甕 112 などは、破碎した状態で置かれたか、住居が削平された際に破碎したか不明である。

出土遺物は土師器甕 111 ~ 118、須恵器杯蓋 119 がある。出土遺物から住居の廃絶時期は 6 世紀後半と考えられる。 (四田)

竪穴住居 5 (第 42 図、図版 5・11・51・57)

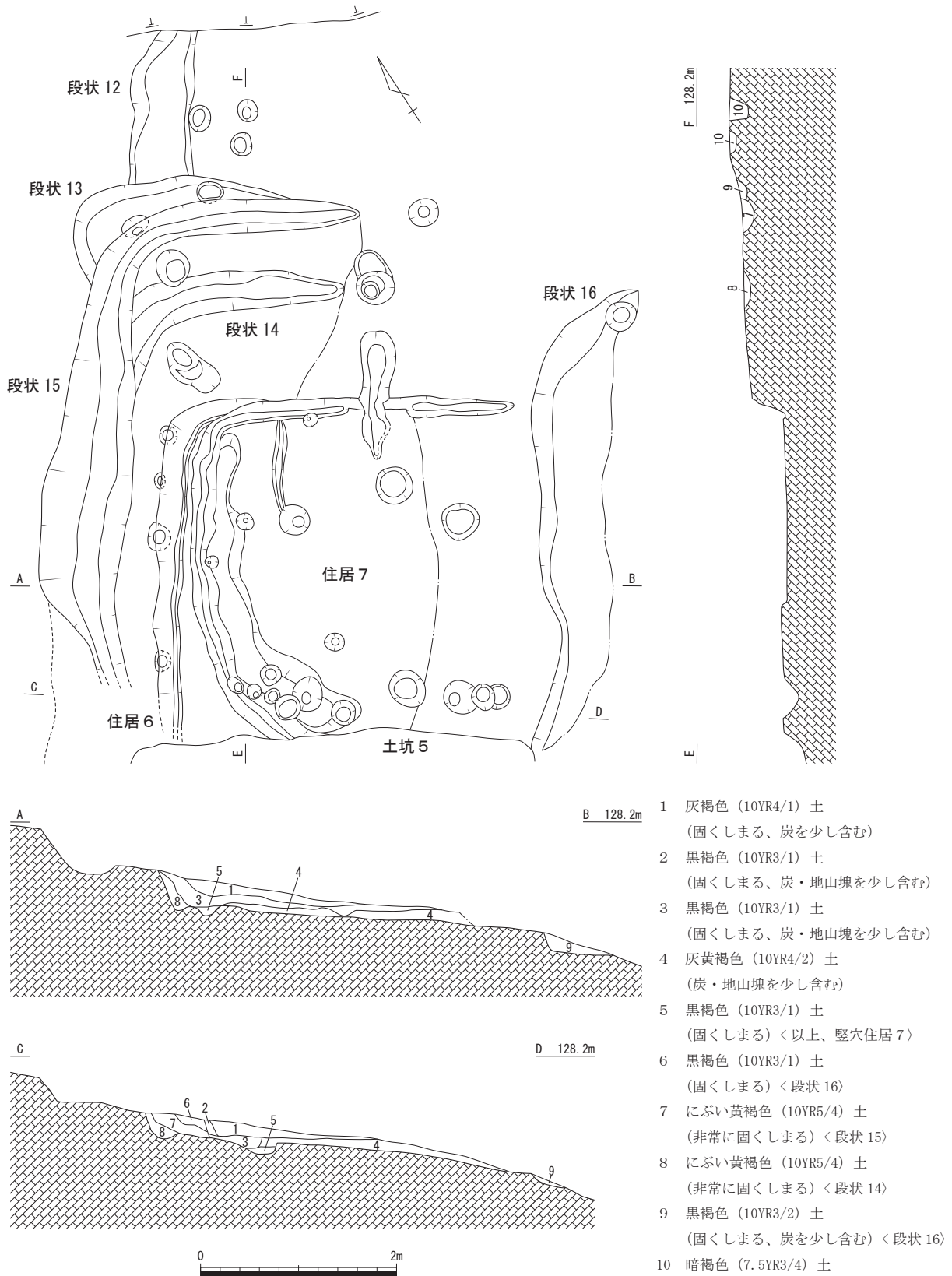
3 区の中央にあたる斜面上で、竪穴住居 2 の南東の下斜面に位置する。平面形は方形であるが、南東側の大部分が斜面の崩落と後世の掘削により失われている。住居の規模は、一辺約 4.9 m の規模と考えられ、掘り方の内側に沿って、浅い壁体溝が巡っている。支柱穴は建物北西側の 2 本と斜面下方南東の 1 本が検出できた。出土遺物は、住居内から土師器甕底部 120 と須恵器蓋杯の蓋部 121・122、杯身 123、壺 124 がある。埋土から石鏃 S 24・S 25 が出土したが、弥生時代の掘立柱建物 1 と柱穴列 1 が住居と重複することより、混入した可能性がある。時期は古墳時代後期と考えられる。 (樋口)



第 42 図 竪穴住居 5 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/2)

竪穴住居6（第43・44図、図版11・12）

3区中央に位置し、段状遺構15を切り、竪穴住居7や土坑5に切られる。竪穴住居の西端のみ残存する。平面形は方形で、長軸3.23m、短軸0.9mが残存するが、全体は明らかでない。深さは検



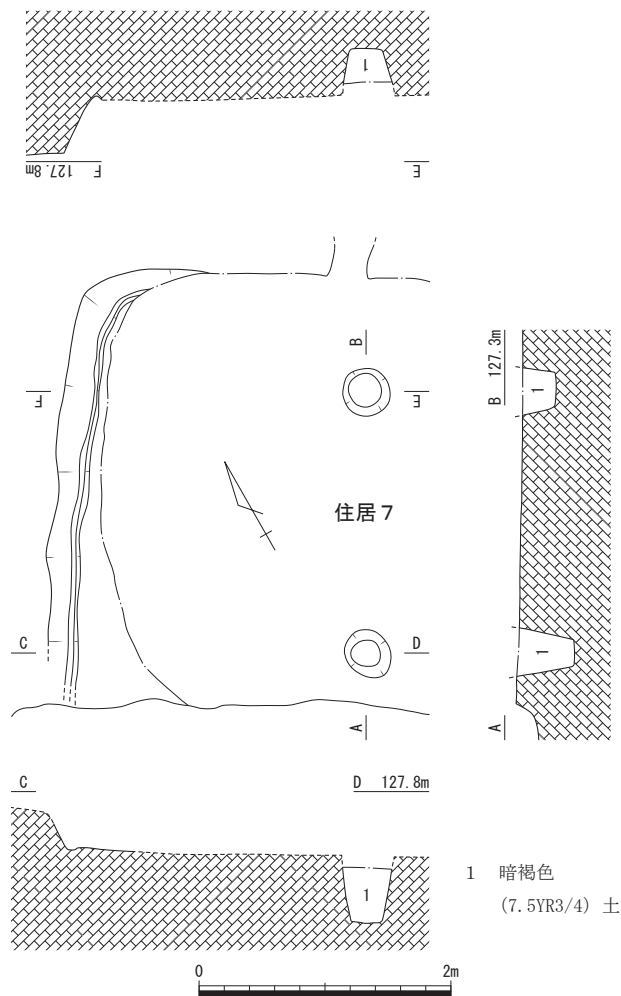
第43図 竪穴住居6・7、段状遺構12～16 (1/60)

出面から43 cmである。西壁は壁体溝が巡る。北壁は竪穴住居7がほぼ踏襲しているが、竪穴住居7のカマドが本住居から伴っていたかは不明である。支柱穴は2本である。埋土から土師器や須恵器の破片が出土した。時期は古墳時代後期で、段状遺構15より新しく、竪穴住居7より古い。(米田)

竪穴住居7

(第43・45・46、図版11・12・52)

3区中央に位置し、竪穴住居6を切り、土坑5に切られる。竪穴住居6・7と段状遺構12～15が複雑に重複するなかで、本住居が最も新しい。平面形は方形を呈する。南壁は土坑5に切られるため、全体は明らかでないが、長軸3.3 m、短軸2.9 mが残存する。深さは検出面から42 cmである。床面の高さは竪穴住居6とほぼ同じである。西壁と北壁は壁体溝が巡り、西側の壁体溝の内側には、上幅30 cm前後、高さ11 cmの土手状に地山が削り出されている。支柱穴は4本で、深さは22～50 cmと様々である。北西側の主

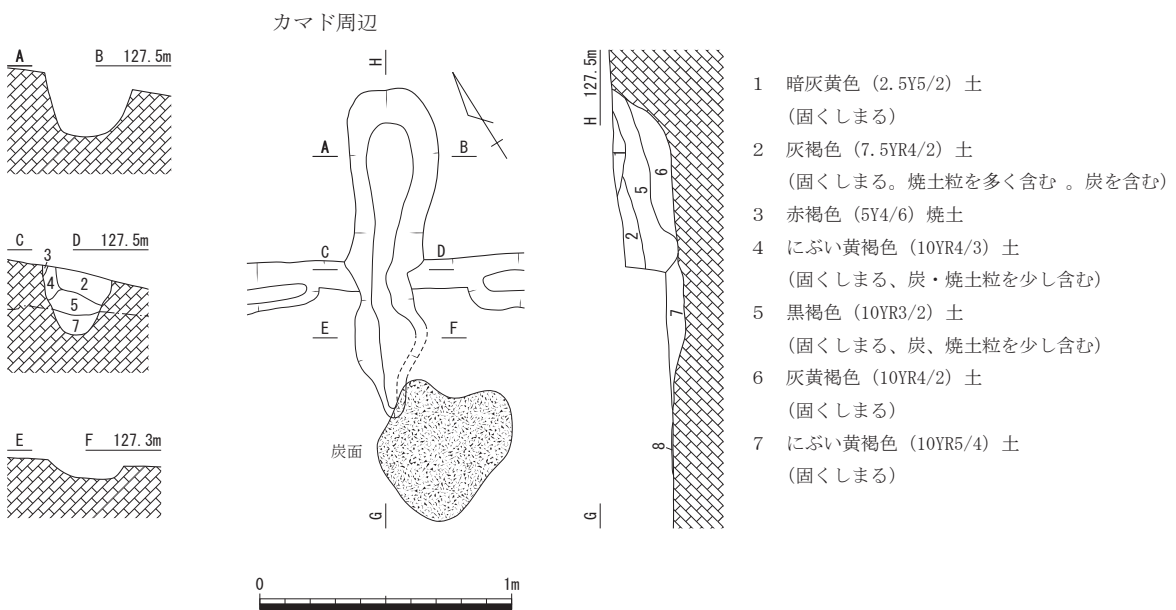
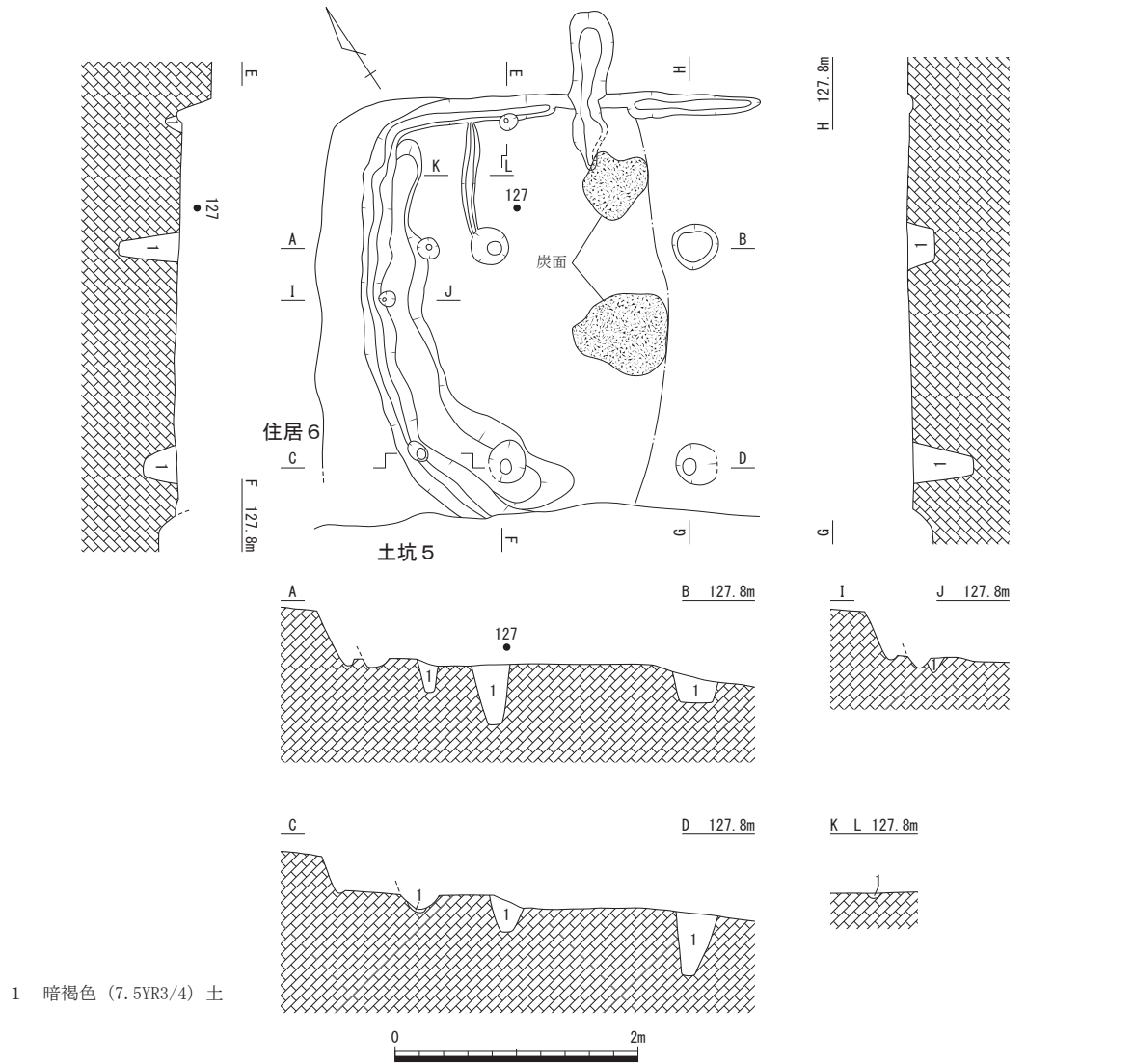


第44図 竪穴住居6 (1/60)

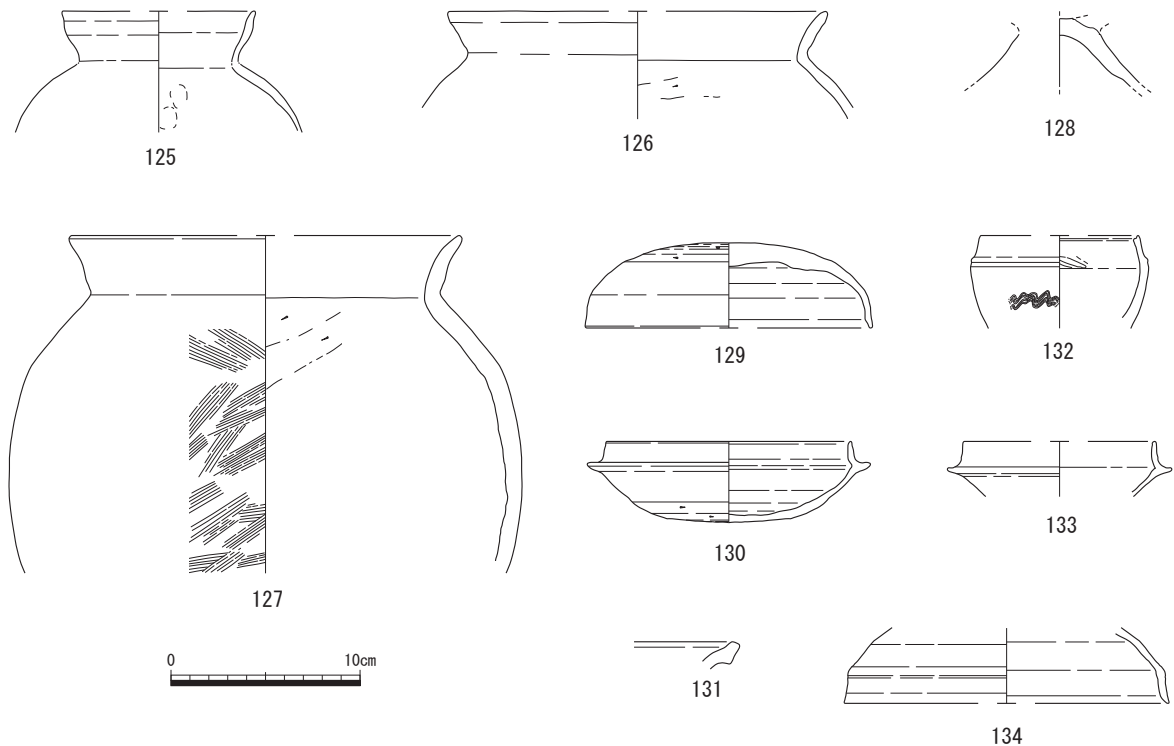
柱穴と北壁の間では幅10 cm、深さ4 cmの間仕切り溝が認められた。北壁中央ではカマド及び煙道が確認された。焚口や袖部は残存していなかった。煙道は延長52 cm、幅35 cm、底面は水平に近い。煙道内の埋土は炭や焼土粒をわずかに含む。煙道の天井部は残存していない。煙出しの勾配は55°である。焚口周辺は約30 cm×50 cm、深さ7 cmほど窪み、煙道と繋がる。被熱面は確認できなかった。

床面ではカマドの付近と中央で炭面が認められた。遺物は土師器甕127が中央北寄りで床面から10 cmほど浮いたところ、他の遺物も覆土から出土した。床面付近では遺物は認められなかった。

出土遺物は、土師器の壺125、甕126・127、高杯128、須恵器の杯蓋129、杯身130、甕の口縁部131、長頸壺の口縁部132・133、装飾付壺の脚部134がある。土師器の壺125は退化した複合口縁部をもつ。甕127は肩部がやや張り、外面はハケメ、内面ヘラケズリで調整されている。高杯128は脚部の上半部で、受け部と脚裾部を欠く。須恵器の蓋129は口縁端部に段がつき、天井部は回転ヘラケズリによって調整されている。杯身130は口縁端部がやや長く直立する。132は口縁部の下の外面にわずかな段がつき、櫛描波状文が施されており、把手付鉢の可能性はある。133は細片であるが、口径が10.0 cmと復元でき、杯身よりも径が小さく、器壁が薄いことから、装飾をもつ有蓋長頸壺の口縁部にあたるものと考えられる。このうち、129・130はTK10型式に相当する。時期は古墳時代後期中葉で、層位的に竪穴住居6より新しく、土坑5より古い。(米田)



第45図 竪穴住居7 (1/60)、カマド (1/30)



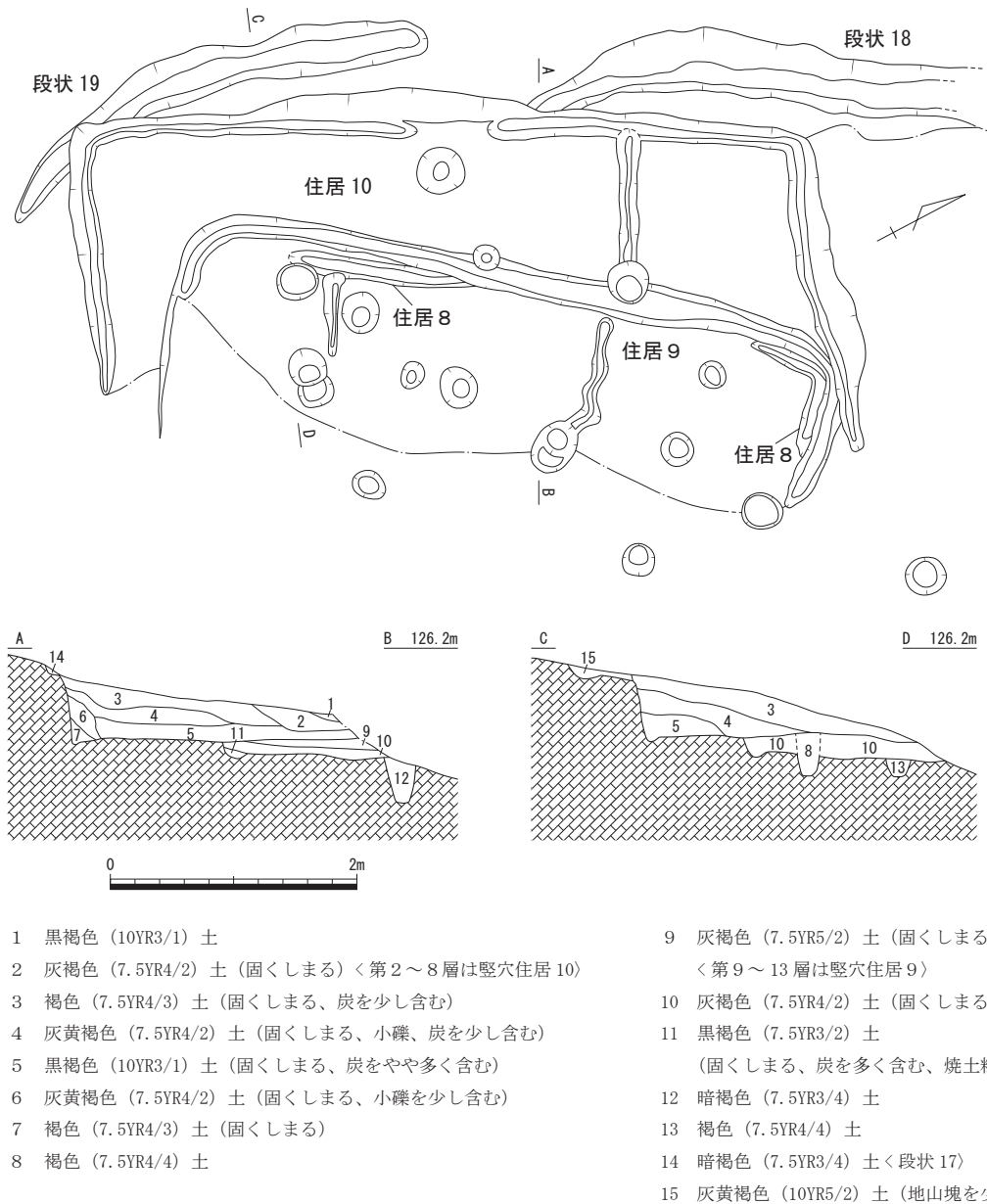
第46図 竪穴住居7出土遺物(1/4)

竪穴住居8・9(第47～49図、巻頭図版3、図版13・14・26・52・58・59)

3区中央よりやや南西に下った斜面地に位置する。竪穴住居8は、竪穴住居9により削平されており、壁体溝のみを検出した。この壁体溝は北東隅角部と南西部分のみが残る。住居全体の規模は明らかではないが、隅角部の形状から平面形は方形と考えられる。残存長は4.32mであるが、南西隅角部を検出していないことから本来の規模はこれ以上であったと思われる。竪穴住居8に伴う柱穴は明らかではないが、第48図C-D断面上の浅いピットが相当する可能性がある。

竪穴住居9は、竪穴住居8を拡張して形成されたとみられる。平面形は方形を呈し、長軸は5.37m、短軸は1.58mである。掘り方の北東から南西にかけて幅20～30cm、深さ約15cmの壁体溝が巡っている。主柱穴はP1・2である。柱穴は円形で径27～32cm、深さ38～89cmで、柱間寸法は約305cmである。P1・2の間には、幅約10cm、深さ5cm前後の間仕切り溝があり、この溝は幅25cm、深さ30cmの柱穴に接続している。

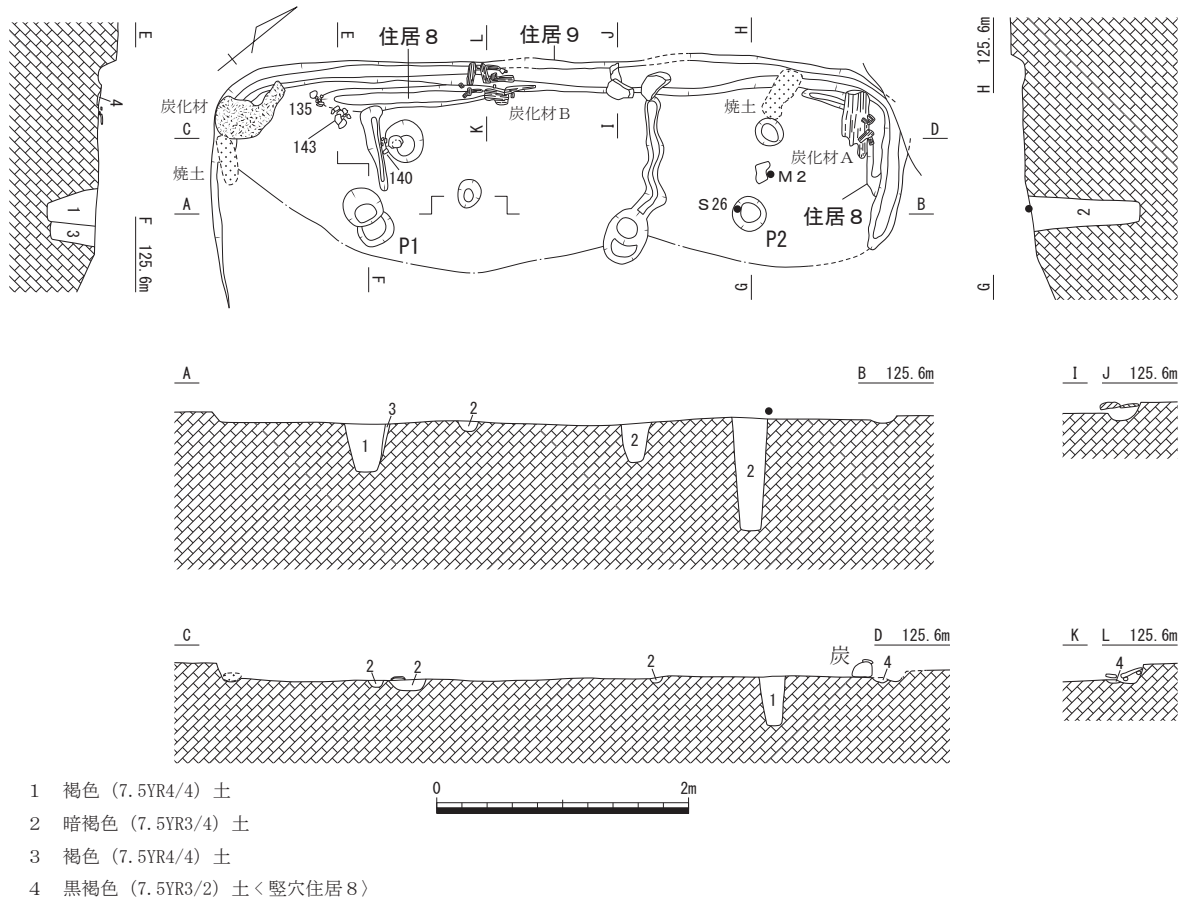
竪穴住居9は北東隅角・中央・北西隅角の壁体溝上で炭化材・焼土を検出していることから焼失住居と考えられる。北東隅角の炭化材Aは残存長53cm、幅21cmで、樹種はサカキと同定されている(第5章第4節)。主柱穴の径からみて主柱の一部であったと考えられる。また放射性炭素年代の測定の結果、 2σ 暦年代範囲で528-583 cal AD (56.33%)を示す(第5章第2節)。中央の炭化材Bは、住居短軸方向と長軸方向を向く幅10cm未満の細い材がそれぞれ3～4本程度折り重なっており、樹種はクヌギと同定されている(第5章第4節)。また放射性炭素年代の測定の結果、 2σ 暦年代範囲で574-644 cal AD (95.45%)を示す(第5章第2節)。これらは垂木もしくは垂木を緊結する材など屋根を構成するものと思われる。北西隅角の炭化材は原形をとどめておらず部位を推測することができないが、出土状況から中央の炭化材同様屋根を構成していた材の可能性はある。焼土は住居北東・北



第47図 竪穴住居8～10、段状遺構18・19 (1/60)

西の炭化材付近の2か所で検出した。住居床面には明確な被熱の痕跡が認められなかったことから、住居の屋根に被せられた土が焼失に伴って被熱・転落した可能性を考えておきたい。

竪穴住居9からは、土師器壺135・136、土師器甕137、土師器高杯138、須恵器杯蓋139・140、須恵器杯身141～145、甕146、砥石S26、薄板状鉄器M1、針金状鉄器M2、椀形鍛冶滓M3・M4、鉄塊系遺物M5が出土した。須恵器杯蓋は口径12.2～13.6cmで、天井部はヘラケズリを施す。口縁端部は丸く仕上げている。杯身は口径12.0～13.9cm、外面底部は回転ナデとヘラケズリを施す。甕146は体部に楕状工具による沈線文と斜行沈線文を施し、底部はカキメで仕上げる。須恵器は主に杯蓋・杯身の特徴からTK43型式にあたり、住居の埋没年代は6世紀後葉に位置づけられる。これは炭化材の放射性炭素年代測定の結果に整合的であり、炭化材の年代を重視すると574年以降と推定できよう。M1は全長3.6cmの薄板状鉄器である。上縁付近に孔があり、端部は直角に近い角度で反る。詳



第48図 竪穴住居8・9 (1/60)

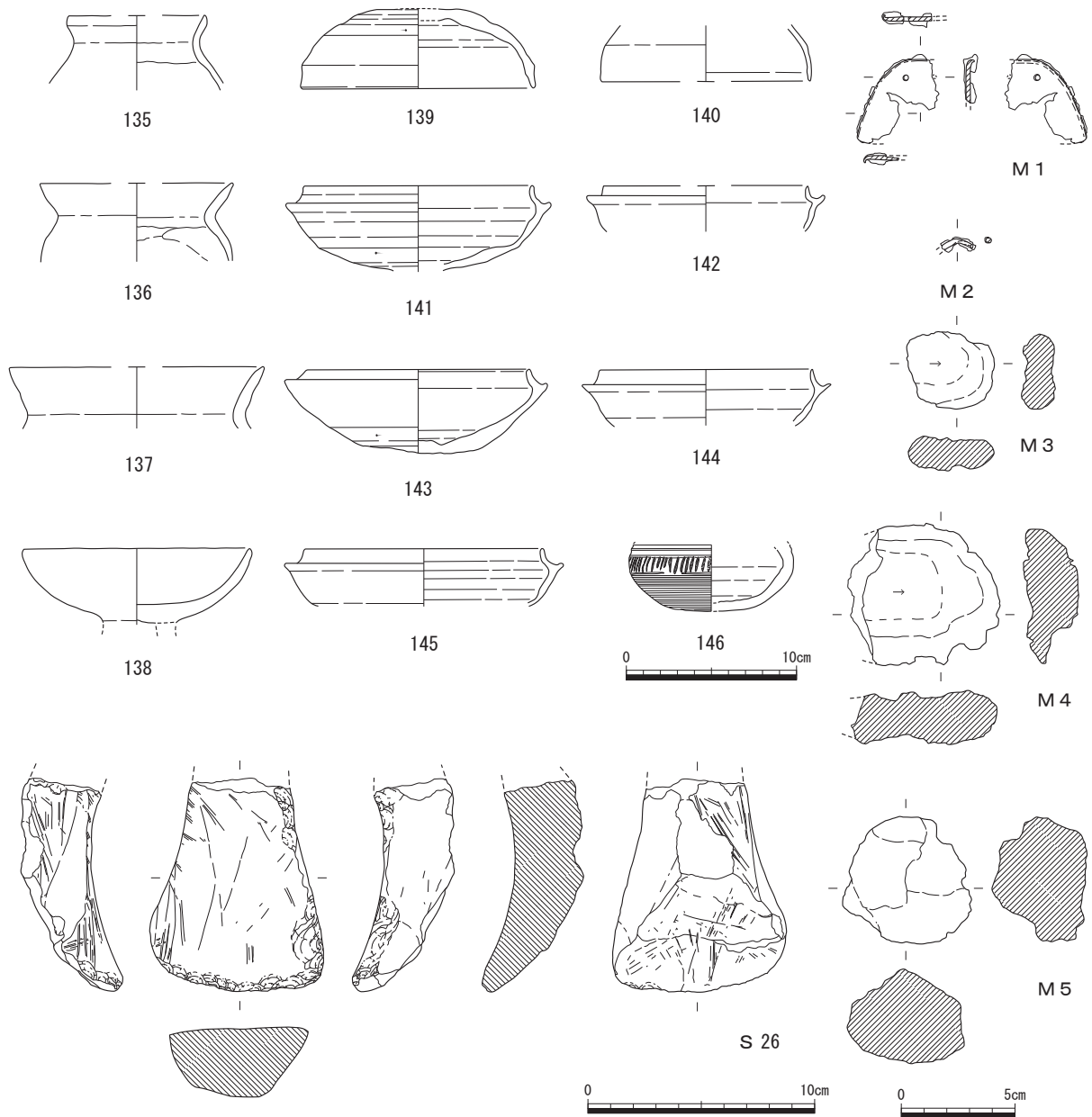
細な種別・部位は不明である。M2は全長14mm、幅2.5mmの針金状鉄器である。断面は円形でねじりを有する。M3・M4は椀形鍛冶滓、M5は鉄塊系遺物である。S26は流紋岩製の砥石で、4面で使用痕が認められる。M3～M5、S26は、遺跡周辺で鍛冶が行われたことを示す。(四田)

竪穴住居10 (第47・50図、巻頭図版3、図版13・14・26・53・58)

3区中央よりやや南西に下った斜面地に位置する。段状遺構18・19及び竪穴住居8・9を切り、竪穴住居9の焼失後に造られたと考えられる。平面形は方形で、長軸6.1m、短軸2.55m、検出面からの深さは約60cmである。掘り方の内側に沿って幅15～25cmの壁体溝が巡る。住居の南側では貼り床によって床面を整えている。

支柱穴は2基検出している。床面の中央付近、斜面上方の壁体溝から約1.3m離れたところに位置し、平面形は円形である。径33～34cm、深さ28～33cmで、柱穴間の距離は270cmである。北側の柱穴には壁体溝まで延びる長さ103cm、幅14cmのごく浅い間仕切りの溝がある。2個の柱穴の間には円形を呈する径21cm、深さ8cmほどのピットを検出しているが、形態の差から柱穴とは言いがたい。また住居中央の壁体溝付近で径39cm、深さ9cmの浅いピットを検出した。このピットからは須恵器短頸壺の破片159が出土した。このピットに近い住居中央部では壁体溝が途切れるため、何らかの構造があった可能性があるが、被熱痕や焼土などは確認していない。

出土遺物は、主に埋土中より出土している。土師器は壺147がある。須恵器は杯蓋148～152、杯身153、有蓋高杯蓋154、椀155、高杯の脚部156・157、甕158、短頸壺159、高杯160がある。その

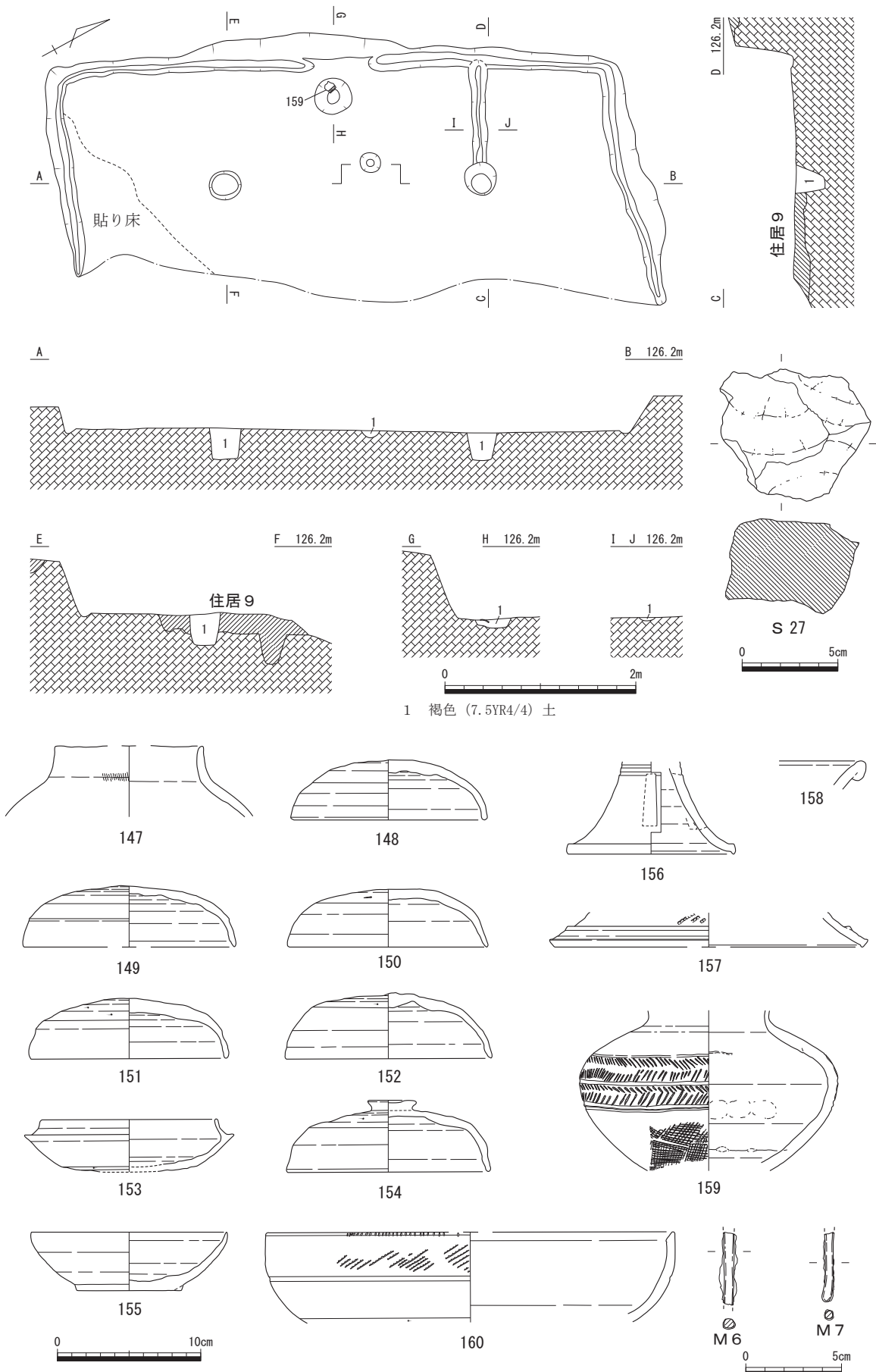


第49図 竪穴住居9出土遺物 (1/4・1/3)

ほか鉄鉱石S 27、鉄製の釘M 6・M 7がある。

須恵器杯蓋 148～152 は口径 13.3～14.7 cmで、外面は天井部までヘラケズリを施す。口縁端部 149 はナデにより段状に仕上げるが、150～152 は丸く収める。また 149 は天井部と体部の境に細い沈線で稜を作り出すが、150～152 は稜がない。杯身 153 は口径 12.2 cm、外面はヘラケズリを施し、底部はヘラ切りの痕跡がみられる。口縁端部は丸く仕上げる。156・157 は須恵器高杯で、157 は外面に刺突文を施す。短頸壺 159 は外面底部に格子目タタキが残る。体部の中ほどは沈線の間綾杉文が2条施される。鉄鉱石 S 27 は磁鉄鉱を主体とする鉄鉱石で、重量は 499.1g である。鑑定の結果、岡山県下の製鉄遺跡でよく利用されるスカルン鉱床で採取された鉄鉱石であるという (第5章第6節)。

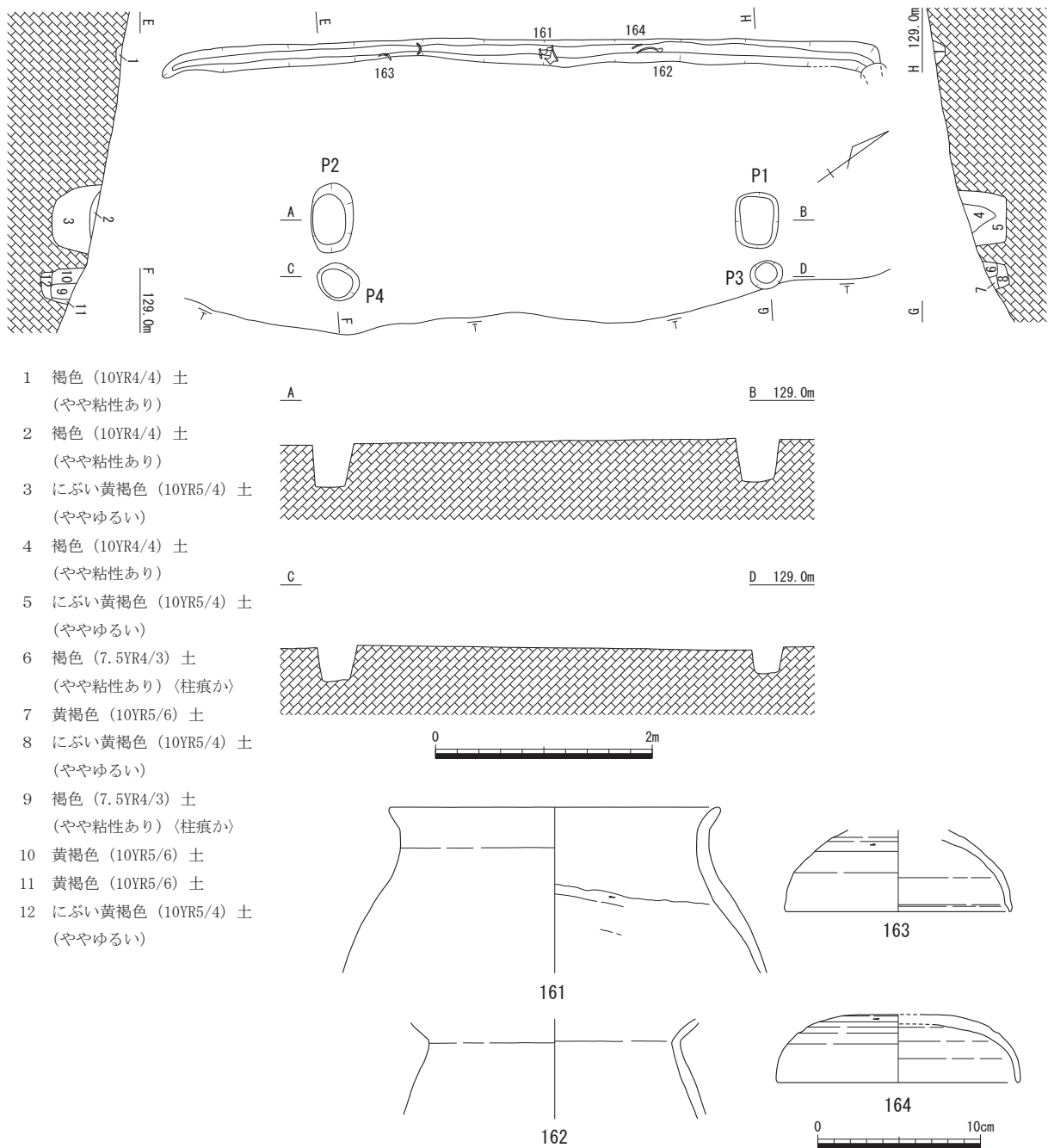
須恵器をはじめとする出土品は、杯蓋 149 がやや古い特徴を有するが、概ねTK 43 型式に相当する。そのため住居の埋没年代は6世紀後葉と考えてよいと思われる。 (四田)



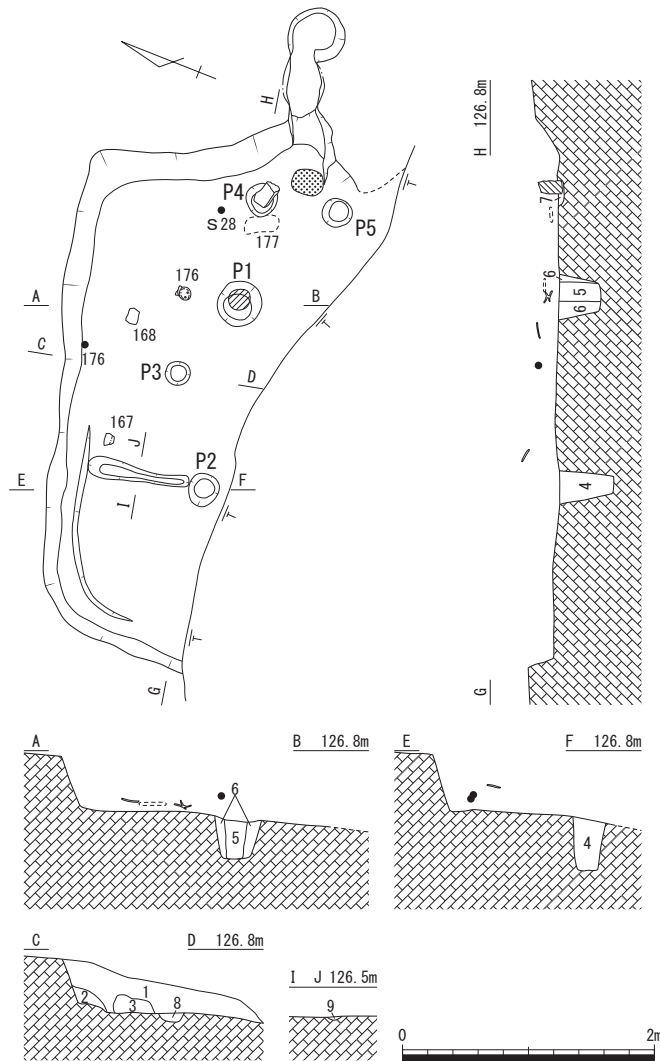
第50図 竪穴住居10 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居 11 (第 51 図、図版 15)

4区中央、段状遺構 25 の北東隣に位置する。周辺は後世の削平により残存状況は良くなく、竪穴住居西辺の壁体溝と柱穴を確認したに過ぎない。西辺の壁体溝は直線的に伸び、平面形は方形を呈する。規模は長軸 6.4 m で、壁体溝の両端が隅角部に近い。壁体溝から東へ 1.1 m 離れたところでは、平面形が円形と楕円形の柱穴が各 2 本認められた。P 1・2 は円形を呈し、径 30～39 cm、深さ 20～30 cm である。P 1 の第 6 層、P 2 の第 9 層は柱痕の可能性がある。一方、P 3・4 は平面形が楕円形を呈し、長軸 50～55 cm、短軸 37～40 cm、深さ 35～38 cm である。P 1・3、P 2・4 は 2 個一対と考えられる。壁体溝の中央から土師器の甕 161・162、須恵器の杯蓋 163・164 が出土した。164 は TK 43 型式にあたる。廃絶時期は古墳時代後期後葉である。(米田)



第 51 図 竪穴住居 11 (1/60)、出土遺物 (1/4)

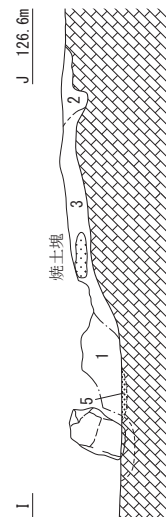
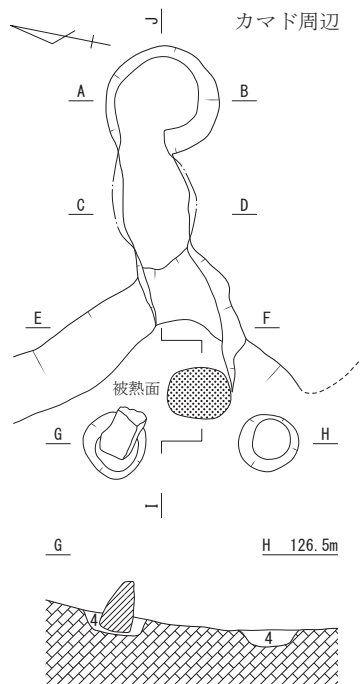
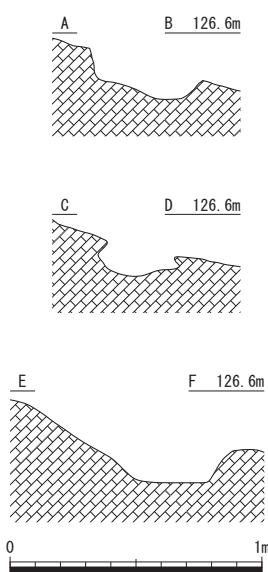


竪穴住居 12 (第 52・53 図、巻頭図版 3、
図版 16・17、53・58)

4区最南端、竪穴住居 13～16の西に位置する。南半は調査時にはすでに流出していた。平面形は方形と考えられ、長軸は3.5m、短軸は残存長2.26m、検出面からの深さは45cmである。壁体溝は床面西側隅角部のみで認められた。支柱穴はP1・2で、径25～35cm、深さ35～40cm、柱穴間の距離は155cmである。P1には柱痕が認められた。

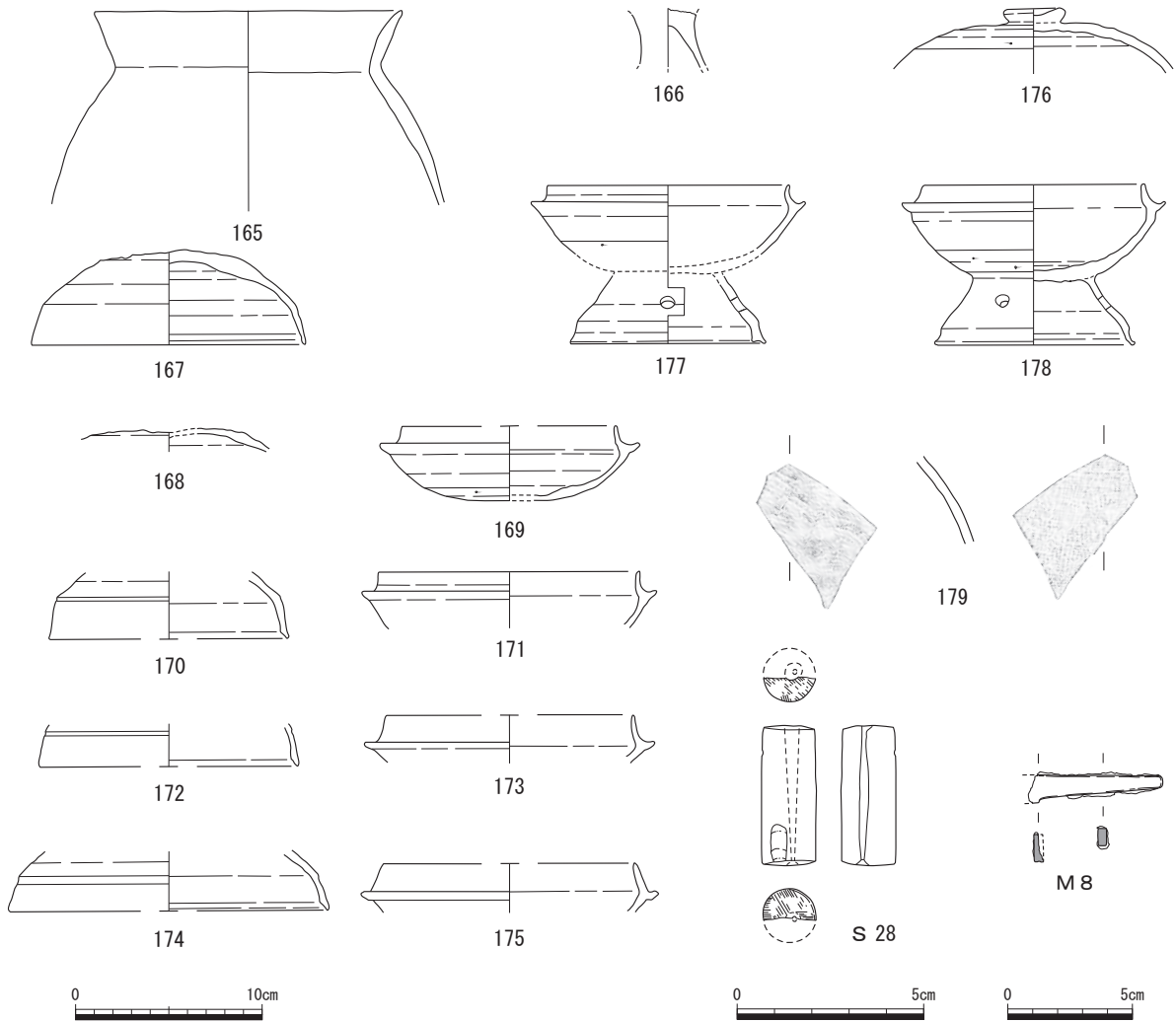
住居に伴う施設として、住居東側でカマドの焚口と煙道を確認した。カマ

- 1 黄褐色 (10YR5/8) 土細砂 (炭を少し含む)
- 2 褐色 (10YR4/4) 土 (固くしまる。地山塊を含む)
- 3 褐色 (10YR4/4) 土 (固くしまる。地山塊を含む)
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土
- 5 褐色 (10YR4/4) 土
- 6 黄褐色 (10YR5/6) 土
- 7 褐色 (10YR4/6) 土
- 8 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土
- 9 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土



- 1 暗褐色 (7.5YR3/4) 土 (炭を多く含む)
- 2 褐色 (7.5YR4/4) 土 (焼土塊を含む)
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土
- 4 褐色 (10YR4/6) 土
- 5 赤褐色 (5YR4/8) 焼土

第 52 図 竪穴住居 12(1/60)、カマド (1/30)



第53図 竪穴住居12出土遺物(1/4・1/2・1/3)

トは全長約160cm、幅30～45cmで、天井部はすでに崩落していた。断面形は凸レンズ状で、焚口部分の両側には径約25cmの小ピットが掘られ、北側ピットには石が立った状態で残っていた。また床面で幅約25cmの被熱面を確認した。

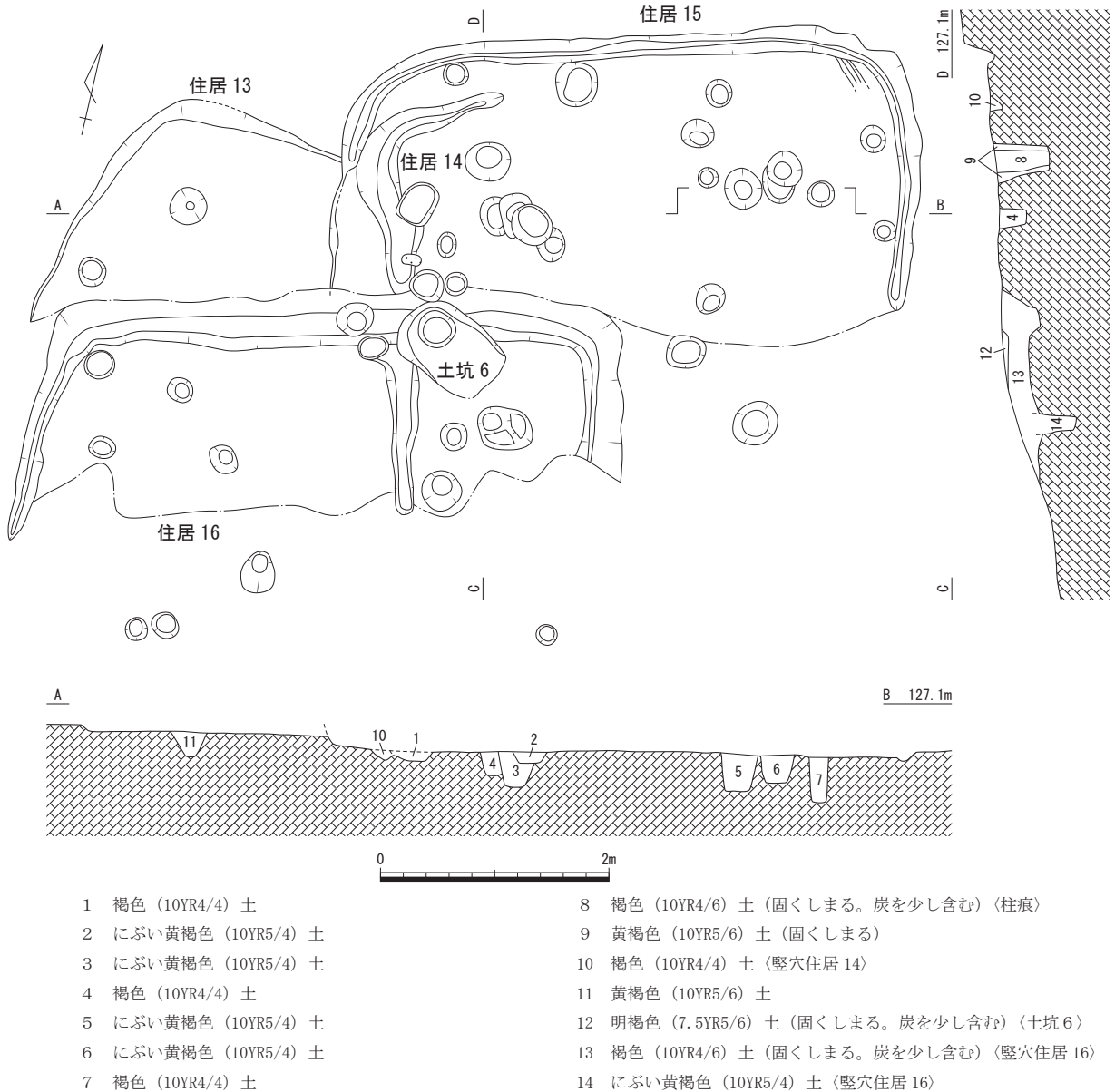
出土遺物は土師器甕165、土師器高杯166、須恵器蓋杯167～175、須恵器有蓋高杯176～178、須恵器甕179、碧玉製管玉S 28、刀子M 8がある。須恵器蓋杯はTK 43型式にあたり、6世紀後葉に埋没したものと考えられる。(四田)

竪穴住居13(第54・55図、図版16・18)

竪穴住居13～16、土坑6は4区南端に位置する。同じ個所に4棟の住居と土坑が重複しており、短い期間に建て替えが繰り返されたとみられる。竪穴住居13は北西部分にあたり、支柱穴は土坑6を切り、竪穴住居14・15に東側の床面を切られる。確認できた床面は全体の1/4程度と思われる。

残存していたのは住居の北西隅角のみだが、平面形は方形と考えられる。残存長は長軸2.2m、短軸2.1m、検出面からの深さは約10cmである。確認した支柱穴は第55図P 1～3で、径約30cm、深さは20～30cm、柱穴間の距離は240cmである。検出した範囲では壁体溝は認められなかった。

竪穴住居13からは明確な遺物は出土していないが、先行する竪穴住居16とより新しい竪穴住居



第54図 堅穴住居13～16、土坑6 (1/60)

14・15はいずれも6世紀後葉であるため同様の時期と考えられる。

(四田)

堅穴住居14 (第54・56図、図版16・18)

4区南端に位置する。堅穴住居13を切る住居であり、堅穴住居15へと拡張する際に削平されたものとみられる。残存状況は悪く、北西隅角部分と北東隅角部分と推定される壁体溝を部分的に検出したのみである。平面形は方形であり、規模は長軸4.22m、短軸残存長3.05mである。北西・北東隅角で検出した壁体溝は残存幅25～35cm、深さ約5cmを測る。支柱穴はP1～4の4個を検出した。径35～40cm、柱穴間の距離は200cmである。P4は堅穴住居15のP3と同じ柱穴であるが、複数回掘り直された状況が確認されている。

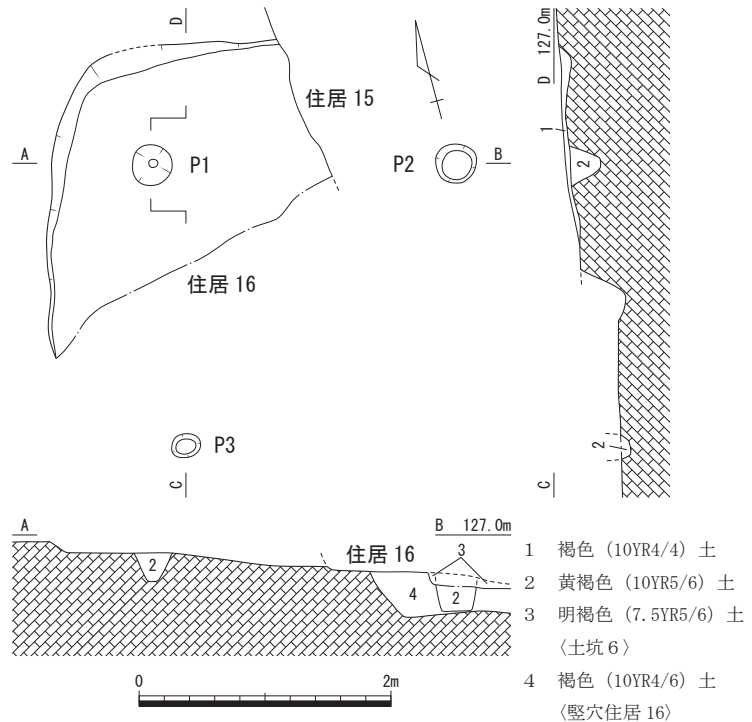
出土遺物は柱穴中で須恵器杯身180が出土している。口径復元値は約13.2cm、器高約3.2cmで焼成は良好である。外面外周はヘラケズリで調整する。口縁端部は丸くおさめている。こうした特徴からTK43型式に相当し、時期は6世紀後葉にあたる。

(四田)

竪穴住居 15 (第 54・57～59・62 図、
図版 16・18・53・58)

4 区南端に位置する。竪穴住居 14 を拡張して形成されており、竪穴住居 13～16 の中では最も新しい。

平面形は隅角部分がやや丸みを帯びた方形で、長軸 4.86 m、短軸残存長 2.68 m で、検出面からの深さは約 20cm である。住居の斜面上部方向には壁体溝が巡っており、幅 20～25cm、深さ 20～25cm である。支柱穴は P 1～3 の 3 個を検出しており、住居北側に 2 個、南側に 1 個である。径は 30～40cm、深さ 40～50cm で、柱穴間の距離は 260cm を測る。

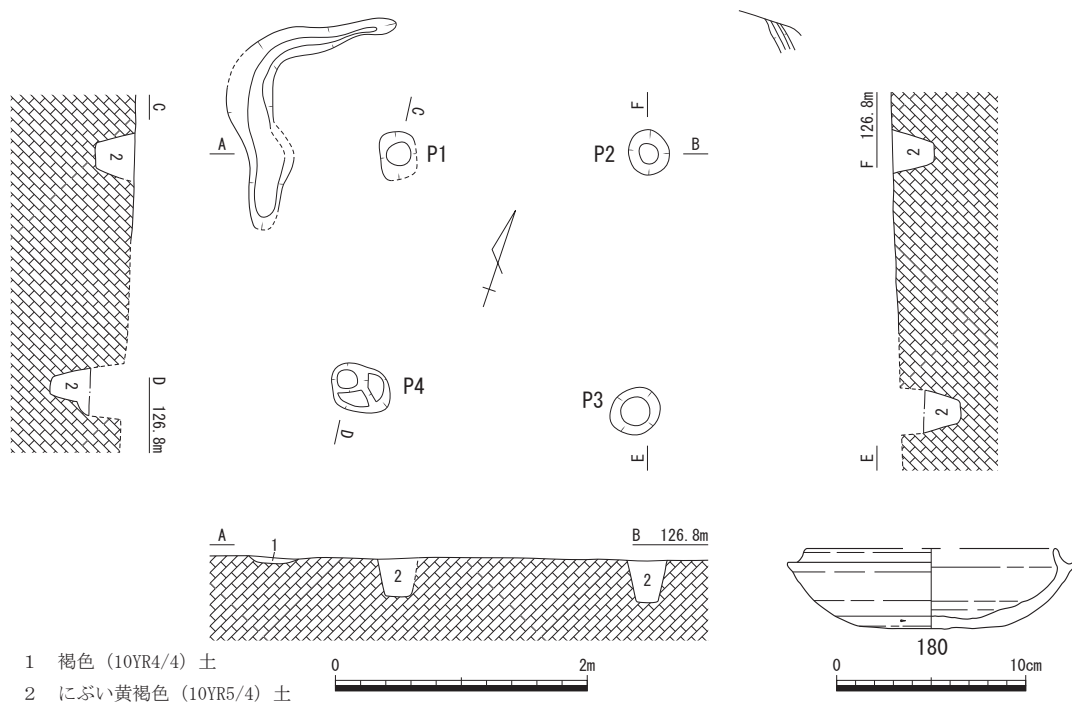


第 55 図 竪穴住居 13(1/60)

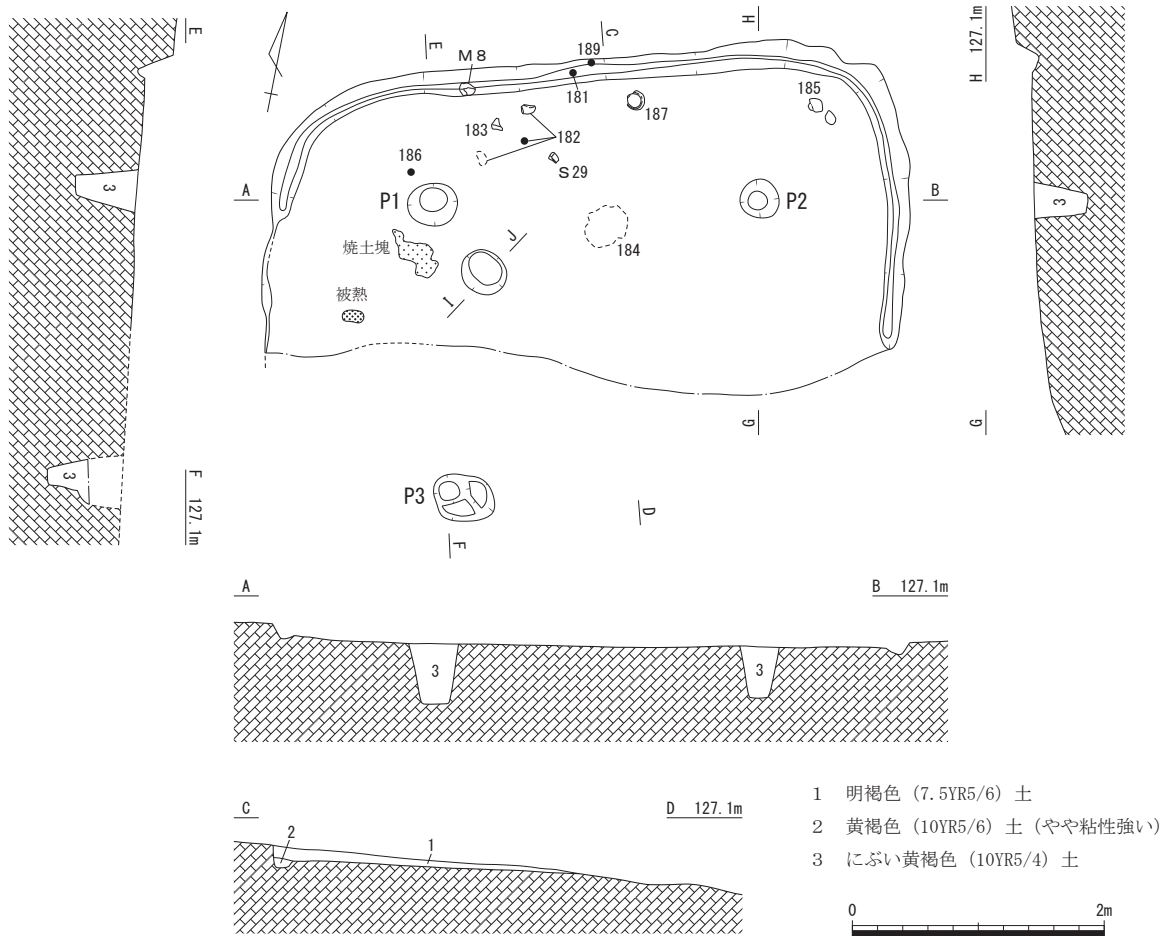
住居中央よりやや西よりの床面で

幅 36 cm、深さ 33 cm のピット P 4 を検出した。埋土中には全体が被熱を受けた石 S 31・S 32 が垂直に重なった状態で見つかった。S 31 は住居床面に先端が約 10 cm 露出していた。このピットは形態から柱穴の可能性はあるが、遺構・遺物の性格は不明である。また住居床面の西側で被熱痕跡と焼土塊を検出したが、部分的にしか残存しておらず性格は不明である。

出土遺物は土師器では壺、甕がある。須恵器は杯蓋、杯身、高杯、短頸壺が出土した。そのほか砥石、



第 56 図 竪穴住居 14(1/60)、出土遺物 (1/4)



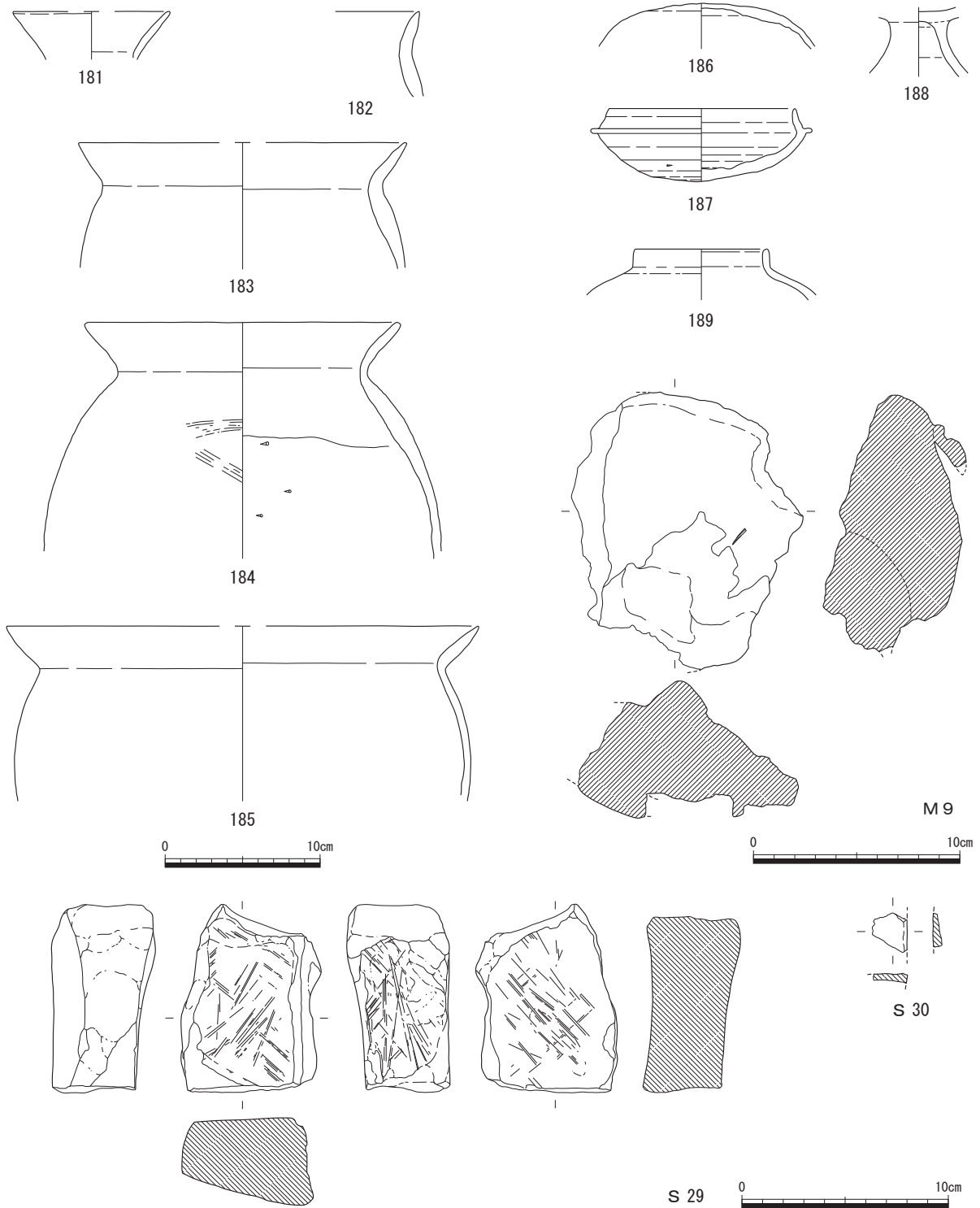
第57図 竪穴住居 15(1/60)

製錬滓がある。

181は土師器壺の口縁部で、住居北側の壁体溝内で出土した。182～185は土師器甕で、182～184は住居中央の床面、185は北東隅角付近の床面で出土している。184は外面にハケメ、内面はケズリで調整する。186は須恵器杯蓋の天井部片で、焼成は不良である。187は須恵器杯身で住居中央付近の床面で出土した。口径の復元長は12.0cm、器高4.7cmで、外面全体をヘラケズリで調整する。焼成は良好である。188は須恵器高杯である。189は須恵器短頸壺の口縁部から体部にかけての破片で、口径は約8.4cmである。S29・S30は砥石である。S29は流紋岩製で、全長9.1cm、幅6.8cm、高さ5.0cm、重量は374.9gである。全体に擦痕がみられ、概ね長軸方向に対して並行から斜行する。S30はデイサイト製で、残存長は1.9cmほどである。S31・S32はP4に据えられた被熱を受けた石である。S31は安山岩製、S32は凝灰角礫岩製である。M9は製錬滓であり、住居北側の壁体溝内から出土した。(四田)

竪穴住居 16 (第54・60～62図、図版16・18・19・53・58・59)

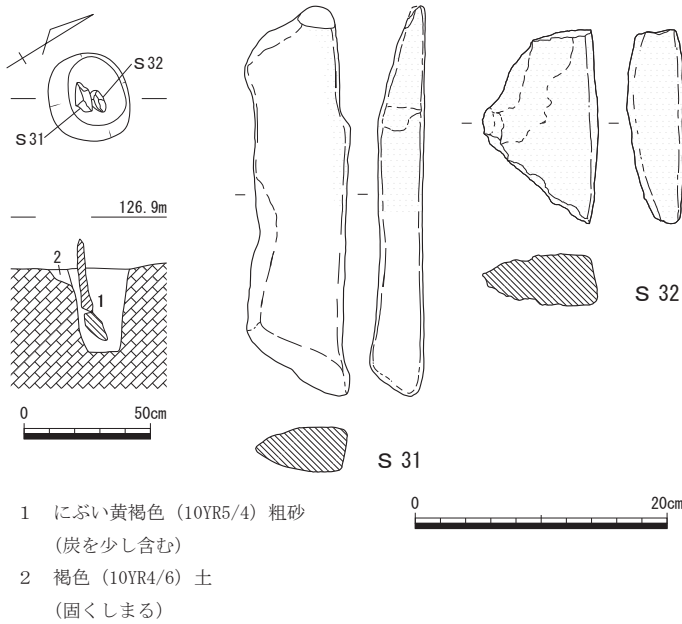
4区南端に位置する。竪穴住居13～16のなかで最初に造られた竪穴住居である。住居の埋没後に土坑6が掘り込まれ、竪穴住居13～15に切られる。平面形は方形であり、長軸4.93m、短軸1.66m以上、検出面からの深さは約40cmで、掘り方の内側に沿って壁体溝が巡っている。また第60図P1の付近には、住居に直交して幅20～30cmほどの浅い溝が掘られていた。主柱穴は2個を確認して



第58図 竪穴住居15出土遺物(1/4・1/3)

いる。幅25cm程度、深さ20～30cmで、柱穴間の距離は200cmを測る。

出土遺物は土師器では甕、高杯、竈形土器、甑がある。須恵器では杯蓋、杯身、高杯、壺、甕、短頸壺、甗、その他に石製紡錘車、鉄滓がある。出土位置は大きく住居北東隅角付近、P2直上、床面西側に分かれる。北東隅角付近では床面から15cmほど上の埋土中でまとまって出土した。その他の2か所ではほぼ床面に接して出土している。



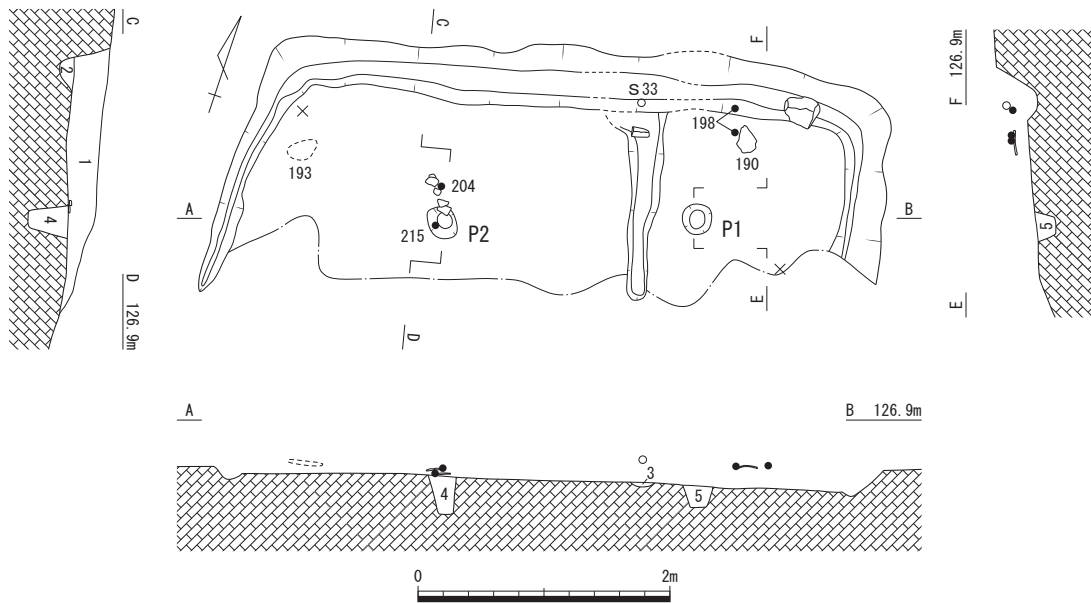
- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂
(炭を少し含む)
- 2 褐色 (10YR4/6) 土
(固くしまる)

第59図 竪穴住居 15 - P 4 (1/30)、出土遺物 (1/6)

土師器は甕 190、高杯 191、竈形土器の基部 192 などの破片が出土している。甕 193 は口径 22.4 cm、底径 14.0 cm、器高 22.5 cm で、内面はヘラケズリで仕上げる。須恵器杯蓋 194 ~ 198 は口径 13.0 ~ 14.4 cm で、いずれも天井部はヘラケズリを施し、口縁端部は丸く仕上げる。杯身 199 ~ 208 は口径 10.0 cm 程度の小形のものと 12 ~ 13 cm 程度のものに分けられる。いずれも底部外面は回転ナデ・回転ヘラケズリで調整すること、口縁端部の立ち上がりの程度が同程度であることから明確な時期差はないものとする。また 199・203・204 など焼成不良のものを

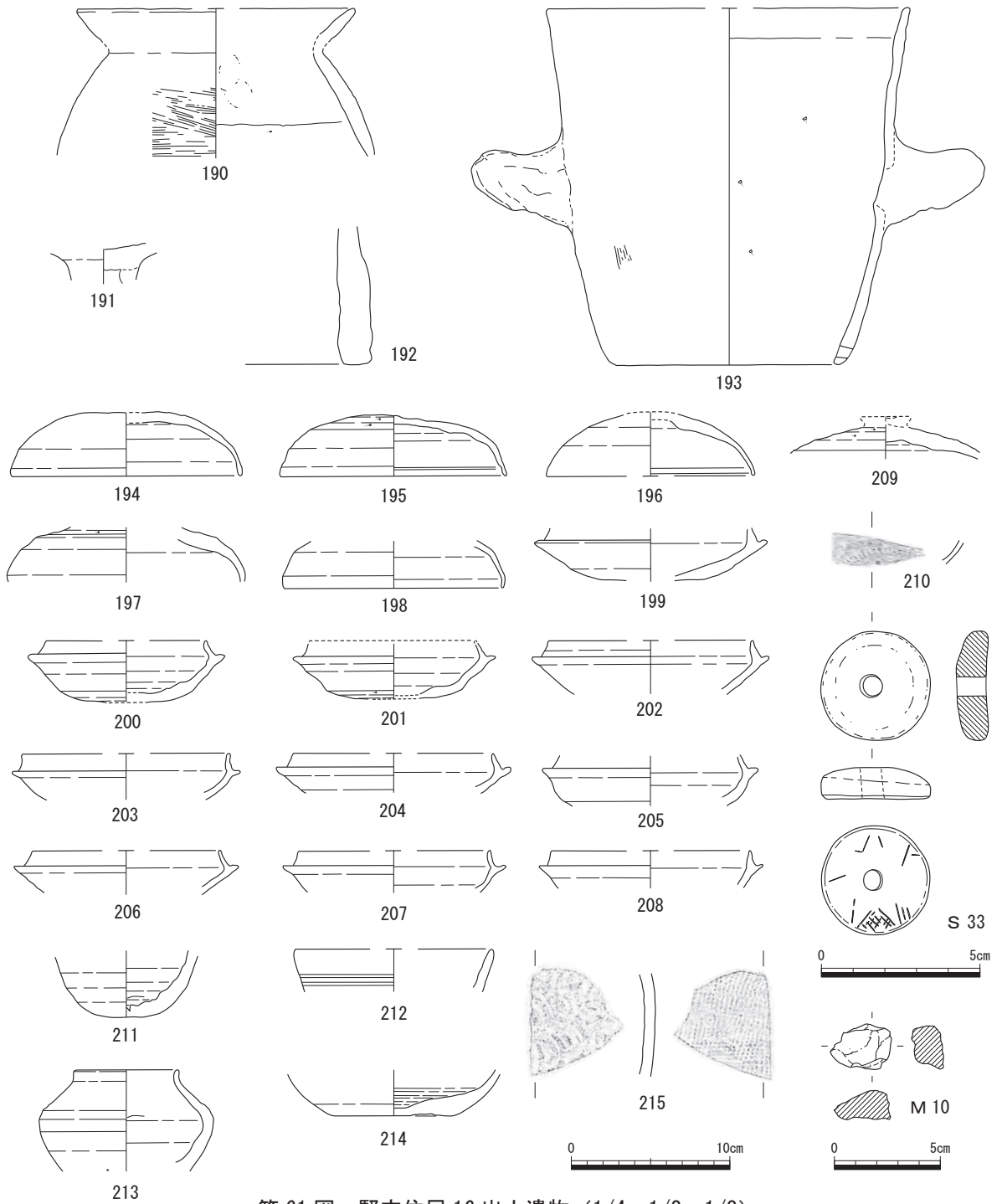
含み、特に 199 は生焼けであり土師質となっている。S 33 は埋土中から出土した蛇紋岩製の紡錘車である。断面形は丸みを帯びた台形で、広面の縁に線刻による文様を配する。M 10 は磁着度の強い鉄滓で、鉄塊系遺物の可能性がある。出土土器は TK 43 型式に位置づけることができ、住居 13 ~ 15 の状況を踏まえても竪穴住居 16 の埋没年代は 6 世紀後葉と考えられる。

第 62 図には、竪穴住居 15・16 の周辺から出土した須恵器を示した。216 は甕の口縁部から体部上半で、口径 20.4 cm を測る。217・218 は高杯で、218 は長方形透かし孔が 3 方向に開けられる。219 は甕の胴部で、外面は平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕が認められる。(四田)

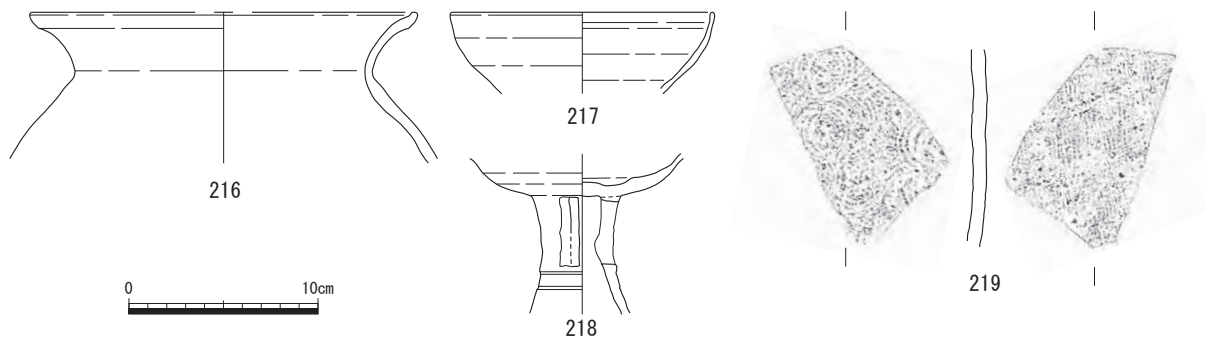


- 1 褐色 (10YR4/6) 土 (やや固くしまる。炭を少し含む)
- 2 明黄褐色 (10YR7/6) 土 (やや固くしまる。地山塊を含む)
- 3 褐色 (10YR4/6) 土
- 4 褐色 (10YR4/4) 土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土

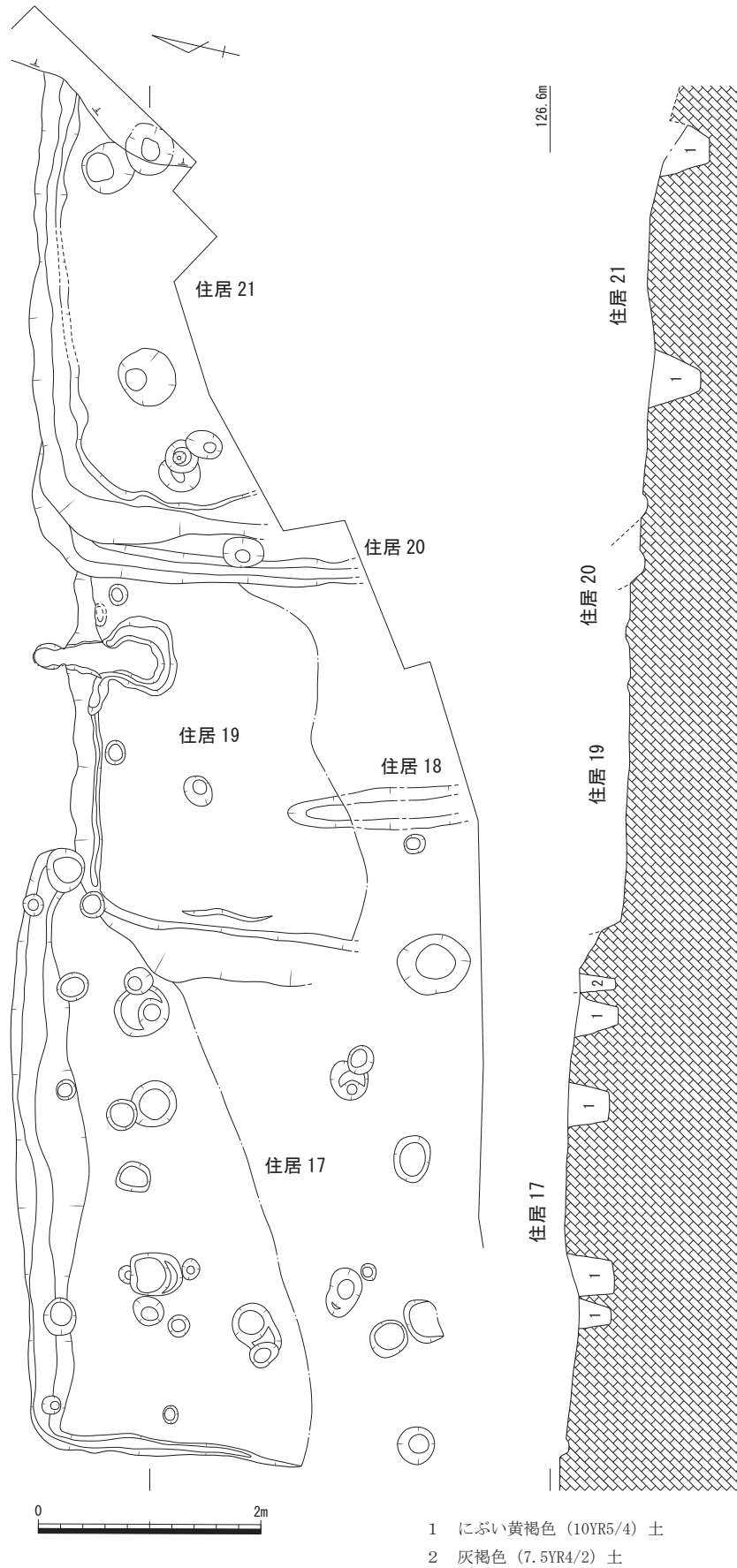
第 60 図 竪穴住居 16 (1/60)



第61図 竪穴住居16出土遺物 (1/4・1/2・1/3)



第62図 竪穴住居15・16出土遺物 (1/4)



第63図 竪穴住居 17～21 (1/60)

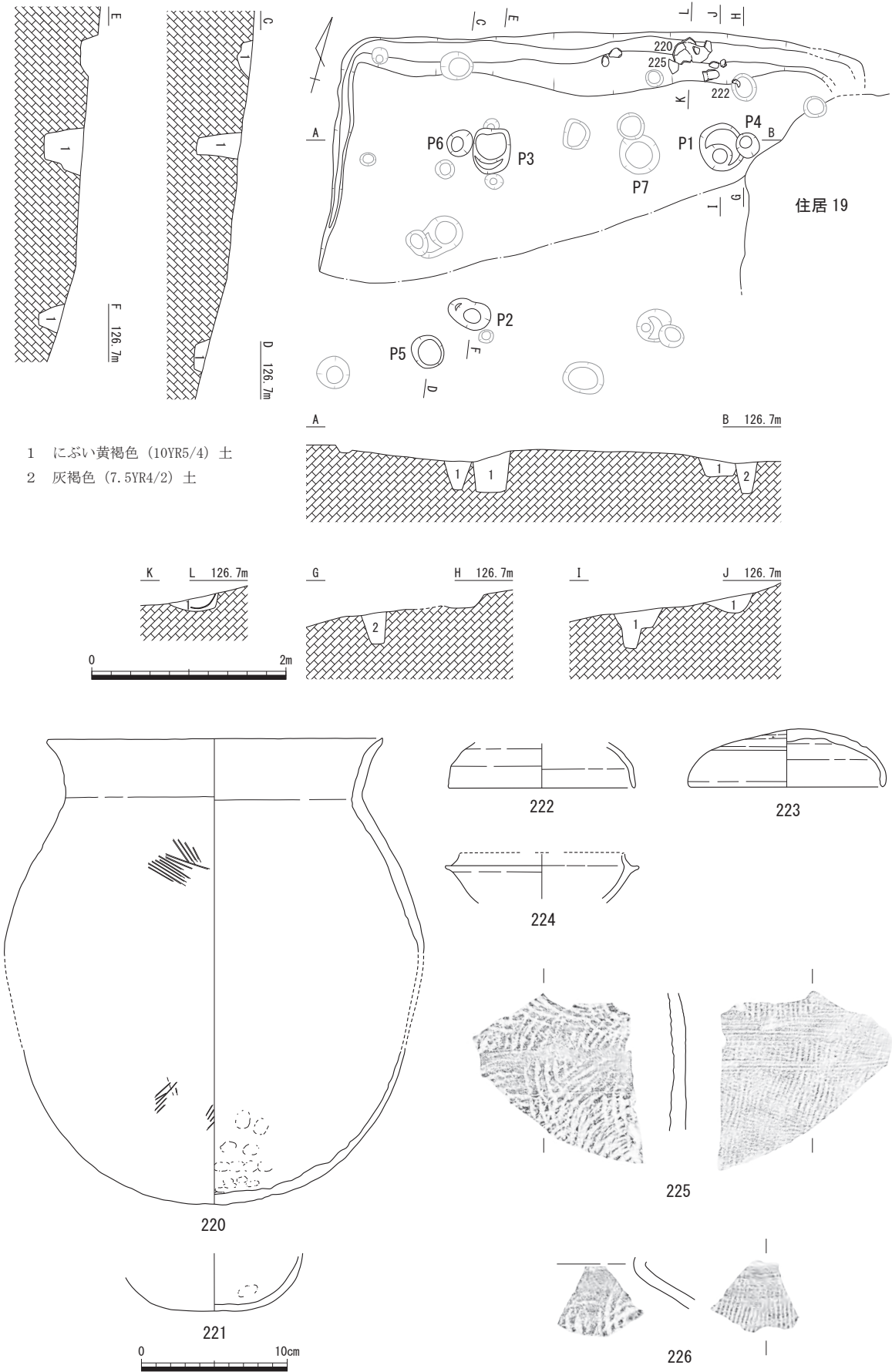
竪穴住居 17

(第63・64・71図、図版16・20・21・53・59)

竪穴住居 17～21 は4区の南端、竪穴住居 13～16の東に位置する。竪穴住居 17・19～21の4棟が切り合い、これらは同時には存在していなかったとみられる。このうち竪穴住居 17は最初に造られたものである。

平面形は方形で、住居東側は隅角部付近から住居 19に切られる。長軸 5.1 m、短軸残存長さ 2.39 mである。掘り方の内側に沿って巡る壁体溝を検出しているが、深さ約 15 cmと浅く、住居上面はすでに削平されていたとみられる。支柱穴は住居北側で5個、南側は2個検出した。柱穴間の距離は約 240～300 cmである。これらの柱穴は複数回掘り直された痕跡があることから、建て替えられた可能性がある。

遺物は主に住居北東部の壁体溝内から出土しており、土師器甕 220や須恵器杯蓋 222・223、杯身 224、甕 225などがある。須恵器杯蓋・杯身はTK 43型式に位置づけられ、時期は6世紀後葉と考えられる。(四田)



第 64 図 竪穴住居 17(1/60)、出土遺物 (1/4)

竪穴住居 18 (第 63・65・71 図、図版 16・20・22・59)

竪穴住居 17 に東接し、竪穴住居 19 の南に位置する。竪穴住居 19 に上面を削平されており、調査区外へと続く壁体溝の一部のみを検出した。残存長は 1.50 m、幅は最大 0.35 m である。壁体溝が直線的に掘られているため住居の平面形は方形と思われるが、残存している部分のごくわずかであるため判然としない。

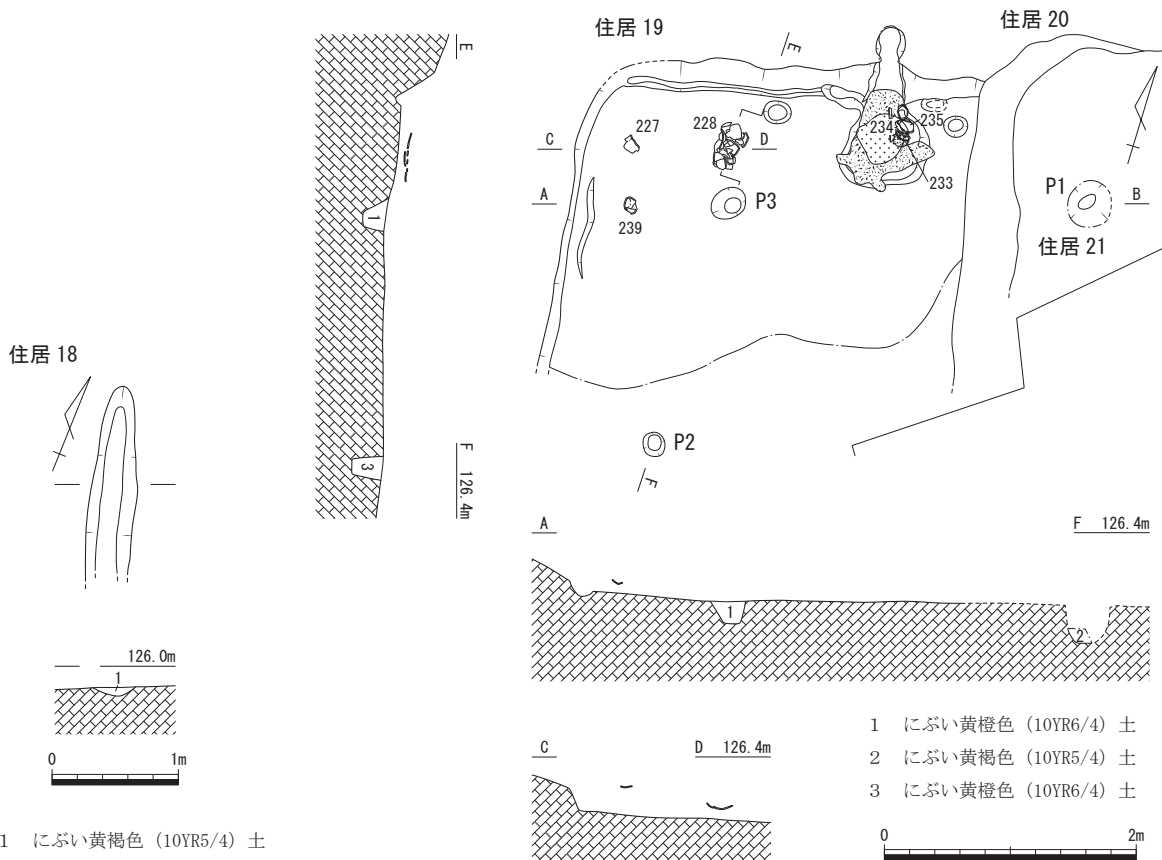
確実にこの住居に伴う遺物は出土しておらず、時期については不明である。切り合い状況から 6 世紀後葉に埋没した竪穴住居 19 よりは古く、6 世紀後半頃と考えられる。(四田)

竪穴住居 19 (第 63・65～67・71 図、巻頭図版 3、図版 16・20～22・53・59)

この竪穴住居は 4 区南端の斜面部に位置し、西側が竪穴住居 17 を切り、東側が竪穴住居 20 に切られている。平面形は方形を呈し、残存する長軸は 3.03 m、短軸は 2.46 m である。床面積は 5.97 m² 以上となる。支柱穴は 3 個見つかったが、配置状況から本来は 4 個であったと考えられる。

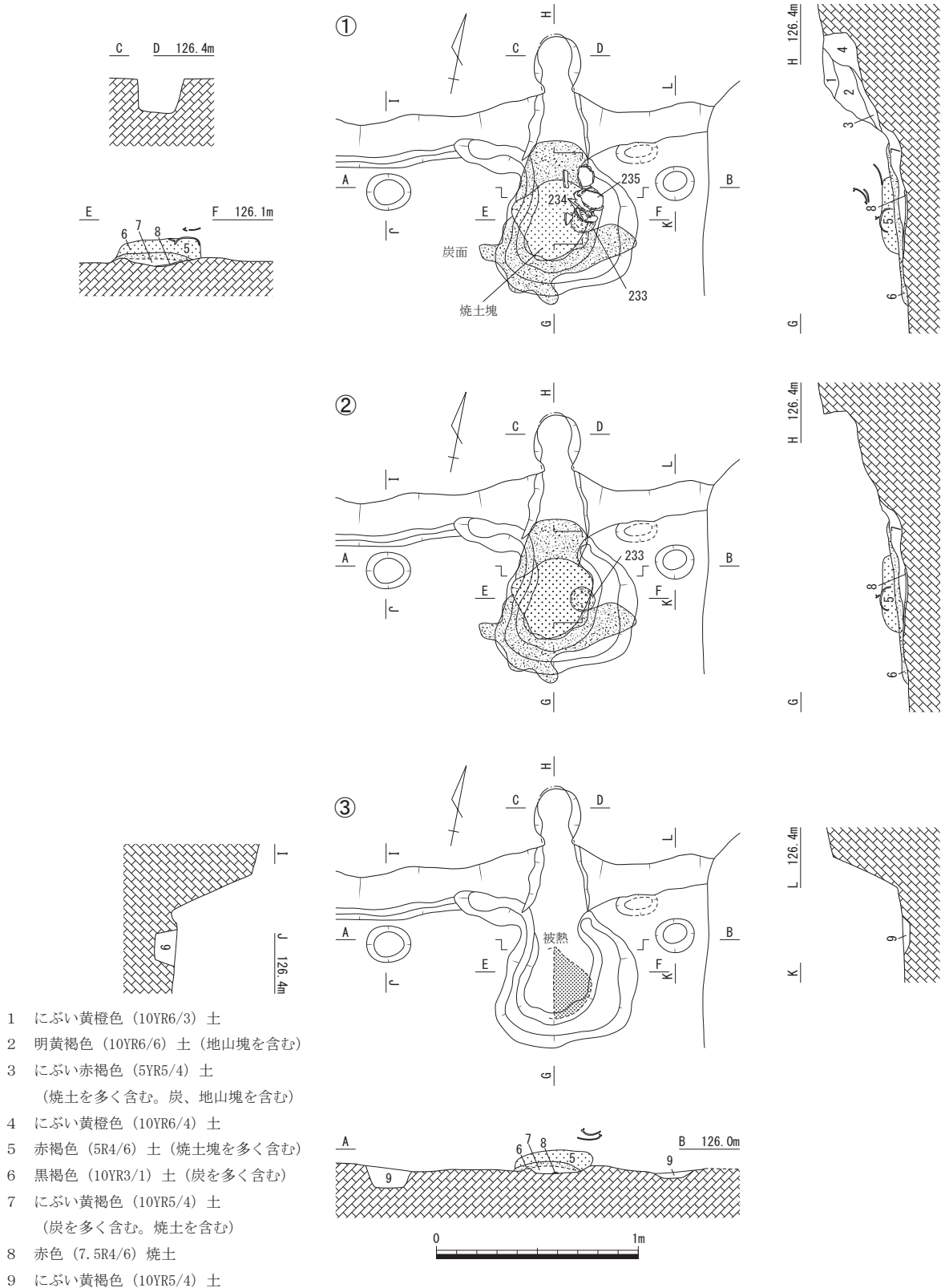
支柱穴の位置から住居北壁の中央であることが推定される位置で、造り付けのカマドが検出された。煙道は全長約 30cm で、天井部は残存していない。煙出しピットは壁面からの距離が 12cm 程度である。焚口部の周囲には床面から削り出された高さ 1cm 前後の土手状の高まりが巡り、30～40cm の範囲が結果として緩やかに窪んでいる。住居西側で確認された壁体溝は焚口部の周囲の高まりで途切れており、カマド構築後に壁体溝が掘削されたことが分かる。カマド袖部は確認できなかったが、焚口部両脇に小ピットが存在する。

焚口部底面は被熱により赤色化しており、使用面とみられる。焚口上面の埋土である第 7 層は炭と

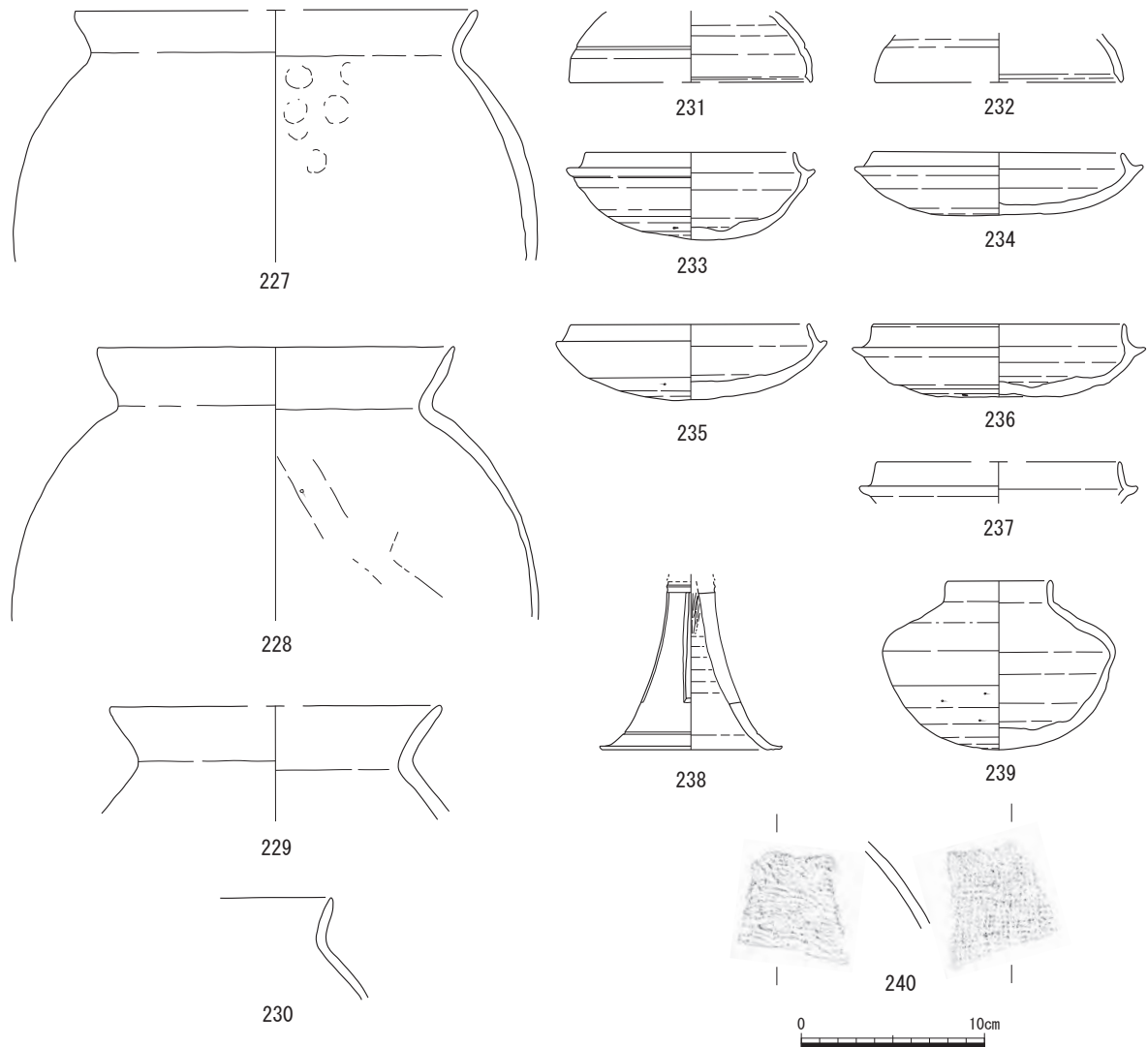


第 65 図 竪穴住居 18・19(1/60)

焼土を含んでおり、カマドの廃棄直後に堆積したと考えられる。焚口及び周囲の高まりを広範囲に被覆する第6層は炭を多く含み黒褐色を呈する。この上面で再び火が焚かれ、焼土塊を多く含む第5層が厚みをもって盛られた。第5層には須恵器の杯身 233 が伏せられた状態で埋まっていた。この杯身は第6層の上面からはやや浮いた状態であり、表面は強く被熱している。これらのことから第5層が



第 66 図 竪穴住居 19 カマド (1/30)



第 67 図 竪穴住居 19 出土遺物 (1/4)

複数回にわたって火を受けながら堆積したことが推定される。第5層より上では須恵器の杯身 234・235 が正位置で重なった状態で見つかった。これら須恵器の杯身はカマド・住居廃棄の際の祭祀的行為に伴う可能性が考えられる。また、住居北西隅角部では土師器の甕 227・228、須恵器の短頸壺 239 が出土した。228 は床面付近から出土しており、住居廃絶時に使用された可能性がある。その他、土師器の甕 229・230、須恵器の杯蓋 231・232、杯身 236・237、高杯 238、甕 240 が埋土から出土した。

須恵器の杯身 233 は T K 10 型式に併行で 6 世紀中頃、須恵器の杯身 234・235、須恵器短頸壺 239 は T K 43 型式に併行で 6 世紀後葉である。住居の廃絶時期は概ね 6 世紀後葉と考えられる。(西村) 竪穴住居 20 (第 63・68・71 図、図版 16・20・22・59)

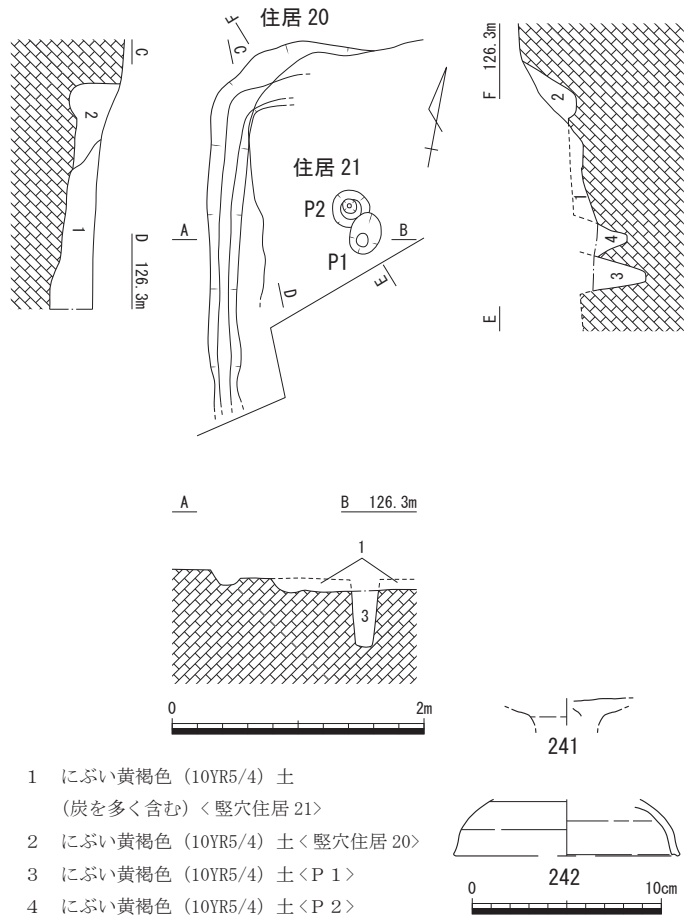
4 区南東端に位置し、竪穴住居 19 を切り、竪穴住居 21 に切られる。竪穴住居の西辺と柱穴を確認した。壁面には直線的な壁体溝がめぐり、長軸は 2.5 m 以上である。平面形は方形の可能性が高い。床面はほとんど残存していなかった。柱穴は竪穴住居 21 に上面を削平されていたが、南西側の柱穴 P 1・2 を確認した。ほぼ同じ位置に同規模の柱穴が重なっていたことから、1 回建て替えた可能性がある。遺物は土師器の高杯 241 と須恵器杯蓋 242 の細片が出土した。時期は古墳時代後期後葉と考

えられ、竪穴住居 19 より新しく、竪穴住居 21 より古い。(米田)

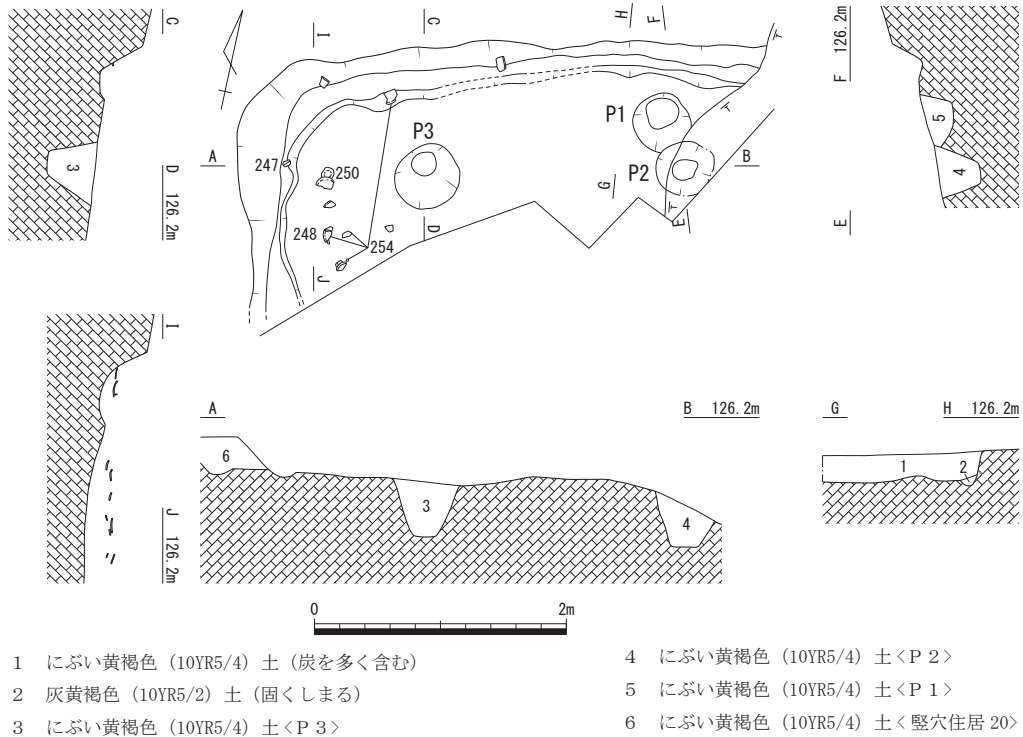
竪穴住居 21 (第 63・69～71 図、図版 16・22・23・54・58・59)

4 区南端の竪穴住居群のうち最も東側に位置する。竪穴住居 17～21 の中では最も新しく、竪穴住居 20 を拡張して造られる。検出したのは長軸約 3.5 m、短軸 1.55 m であるが、住居の東から南にかけて調査区の外に延びているため全長は明らかではない。掘り方の内側に沿って壁体溝が掘り込まれており、幅は最大 50 cm、深さ 35 cm を測る。柱穴は住居北側で 3 基を検出した。このうち第 69 図 P 1・2 は重複しており、P 2 が掘りなおされたものである。柱穴間の距離は 210 cm である。

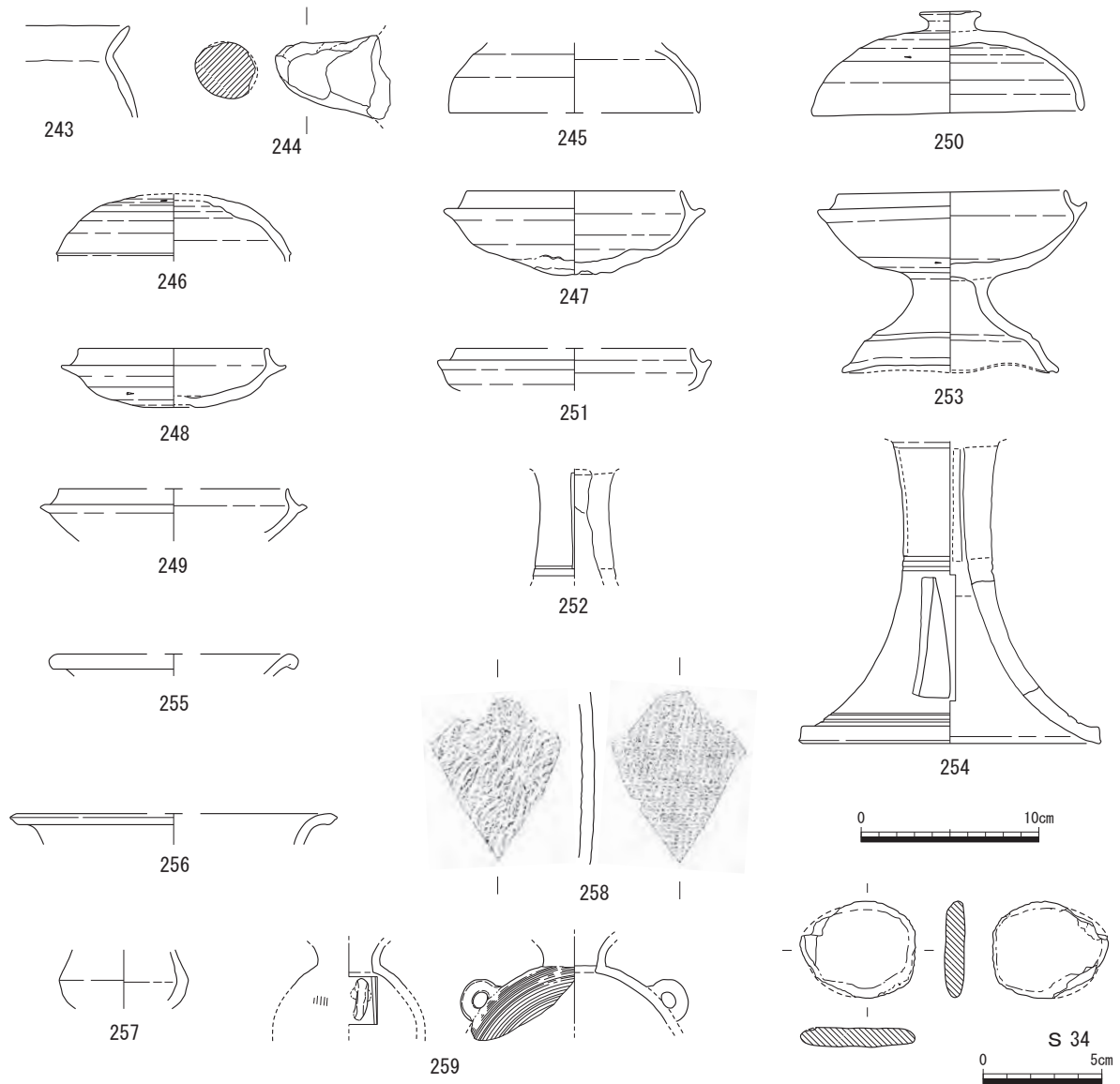
遺物は主に住居西側から出土している。土師器は甕と甑、須恵器は杯蓋・杯身・高杯・壺・甕・提瓶、研磨痕の



第 68 図 竪穴住居 20 (1/60)、出土遺物 (1/4)



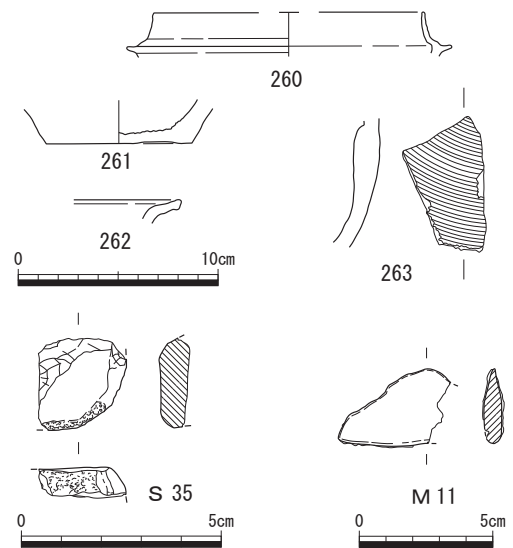
第 69 図 竪穴住居 21 (1/60)



第70図 竪穴住居 21 出土遺物 (1/4・1/3)

ある円盤状の石製品 **S 34** が出土している。須恵器杯蓋 **245** や杯身 **247・249**、高杯 **254** は TK 43 型式に位置づけることができるが、杯身 **248** は口径 10.4 cm と小さく新しい特徴をもつものを含む。これらの遺物は主に遺構埋土中からの出土であることから、住居の埋没年代は 6 世紀後葉～末頃と考えられる。

第 71 図は竪穴住居 17～21 周辺出土の遺物である。須恵器は壺 **260・261**、提瓶 **262・263** がある。**S 35** は石英の火打石、**M 11** は三角形を呈する火打金である。**S 35・M 11** は竪穴住居 17～21 周辺の遺構検出中に出土した遺物であり、古墳時代後期以降の流れ込みの可能性はある。(四田)

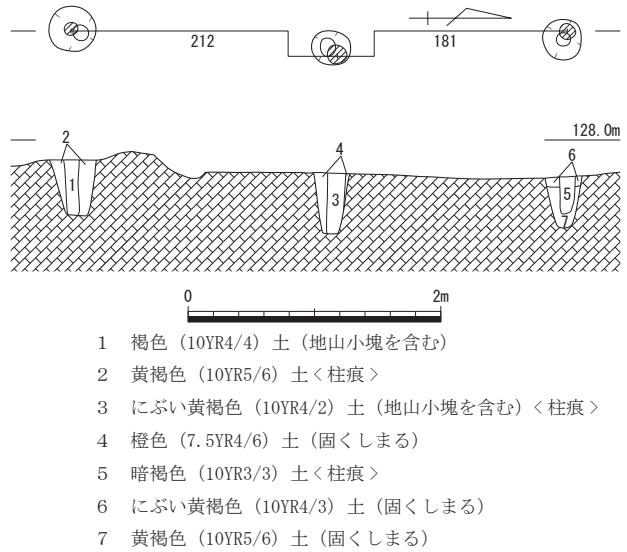


第71図 竪穴住居 17～21 周辺出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

2 柱穴列

柱穴列 2 (第72図、図版24)

3・4区境の中央に位置し、段状遺構22・24に切られる。P1～3で構成される柱穴列で、全長3.93mである。各柱穴では柱痕を確認した。時期は古墳時代後期後葉以前と考えられる。(米田)



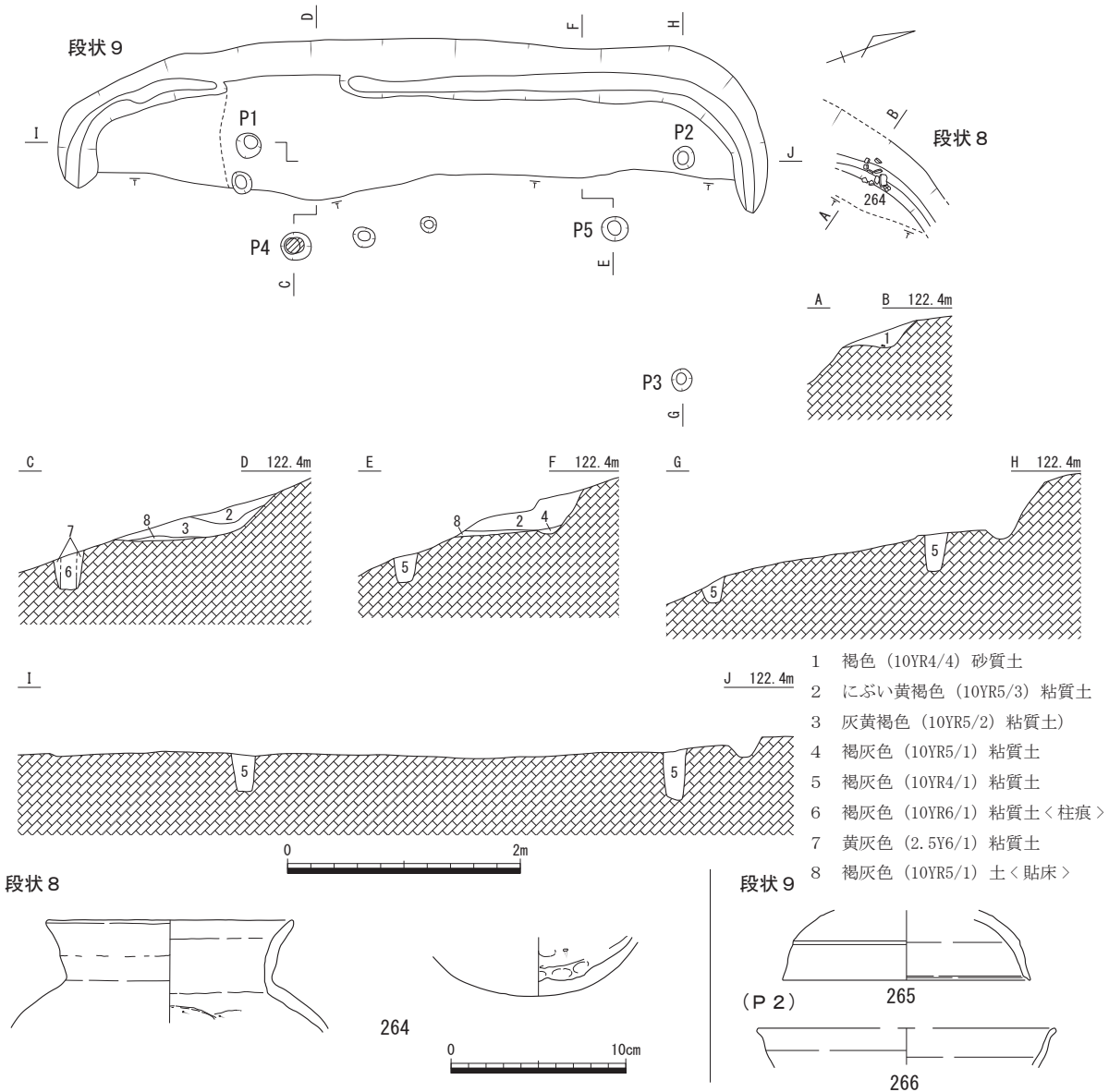
- 1 褐色 (10YR4/4) 土 (地山小塊を含む)
- 2 黄褐色 (10YR5/6) 土 <柱痕>
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/2) 土 (地山小塊を含む) <柱痕>
- 4 橙色 (7.5YR4/6) 土 (固くしまる)
- 5 暗褐色 (10YR3/3) 土 <柱痕>
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 (固くしまる)
- 7 黄褐色 (10YR5/6) 土 (固くしまる)

第72図 柱穴列 2 (1/60)

3 段状遺構

段状遺構 8・9 (第73図、図版24・54)

2区西側の、傾斜が若干緩くなる場所に位置する。段状遺構8上に植林木根が乗



- 1 褐色 (10YR4/4) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
- 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 5 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 6 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 <柱痕>
- 7 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土
- 8 褐灰色 (10YR5/1) 土 <貼床>

第73図 段状遺構 8・9 (1/60)、出土遺物 (1/4)

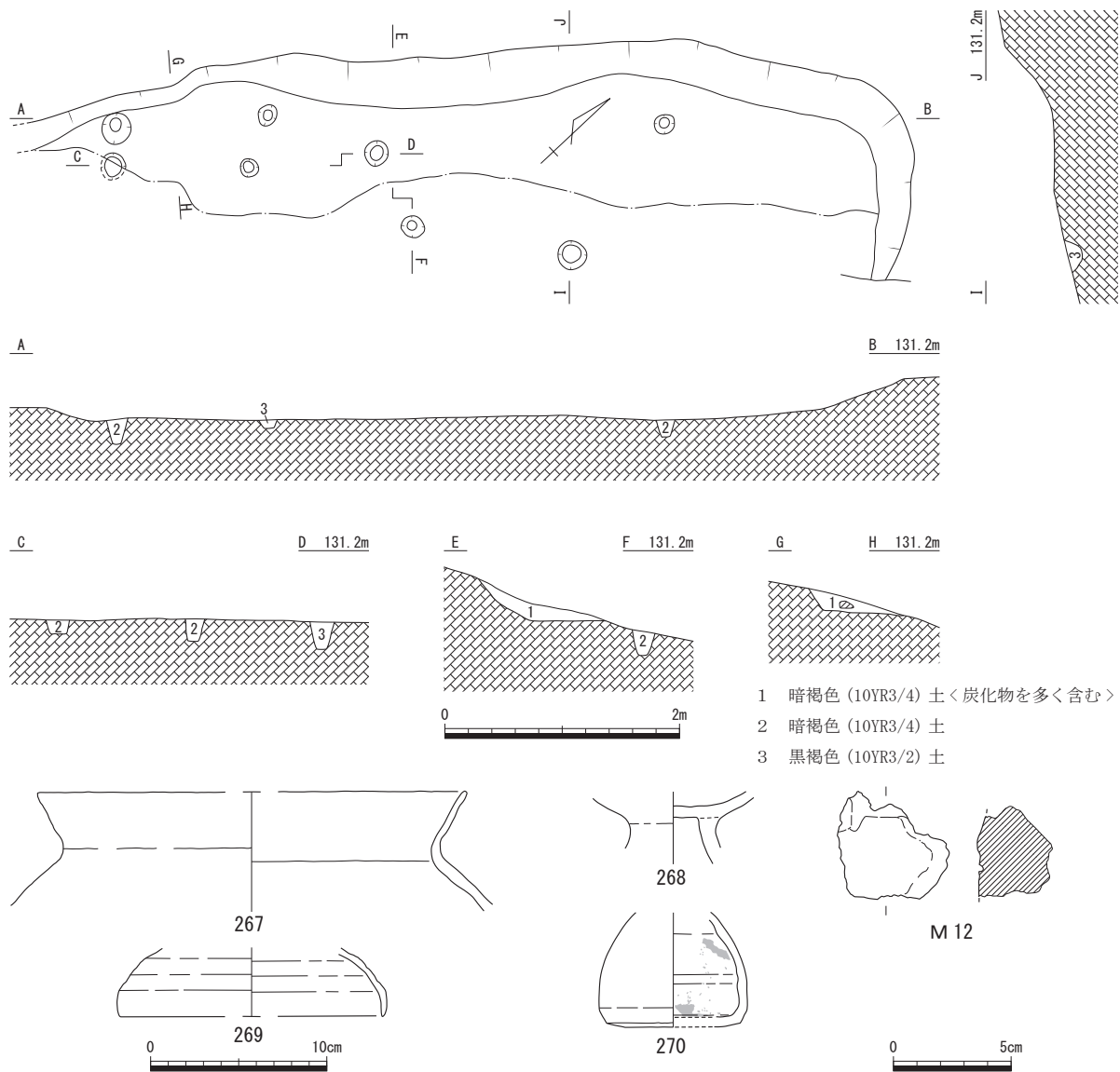
っていた関係で検出面での直接の切り合い関係は不明だが、段状遺構8の床面が段状遺構9より標高が高いので、段状遺構8の方が古いと思われる。段状遺構9は長軸5.84m、短軸は98cm以上で、床面には平面でP1の南側の点線までの範囲で第8層の貼床層が見られた。遺物は、土師器甕264は図示した位置の壁体溝底面より約7cm上方で壁体溝に落ち込むように一括で検出された。須恵器杯蓋265は段状遺構9の床面出土で、椀266は混入と考えられる。265は6世紀前半に相当する。(氏平)

段状遺構10 (第74図、図版6・24・54)

3区南西側に位置し、段状遺構5を切る。規模は長軸7.16m、短軸1.13mが残存し、深さ44cmである。床面ではピットが散在していた。覆土から土師器甕267、高杯268、須恵器の杯蓋269、壺270、鉄滓M12が出土した。268はTK43型式に相当する。270は底部がへら切りで平坦に仕上げられており、亀田修一氏に百済系の影響を受けた可能性があるかと御教示をいただいた。また鉄滓M12は製錬滓(炉内滓)である(第5章-第3節)。時期は古墳時代後期、6世紀後葉である。(米田)

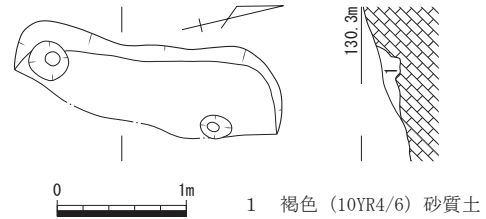
段状遺構11 (第75図、図版25)

3区中央北寄りに位置し、竪穴住居4の西隣、竪穴住居5の東隣で確認した。長軸2.0m、短軸58



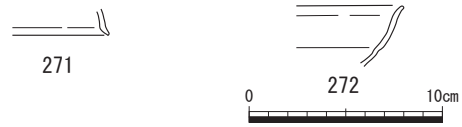
第74図 段状遺構10(1/60)、出土遺物(1/4・1/3)

cm、深さ 15 cm である。床面ではピットが散在していた。遺物は覆土から須恵器の杯蓋 271、勝間田焼の椀 272 が出土した。古墳時代と中世の遺物が混在しているが、埋土や配置状況から時期は古墳時代後期の可能性がある。(米田)

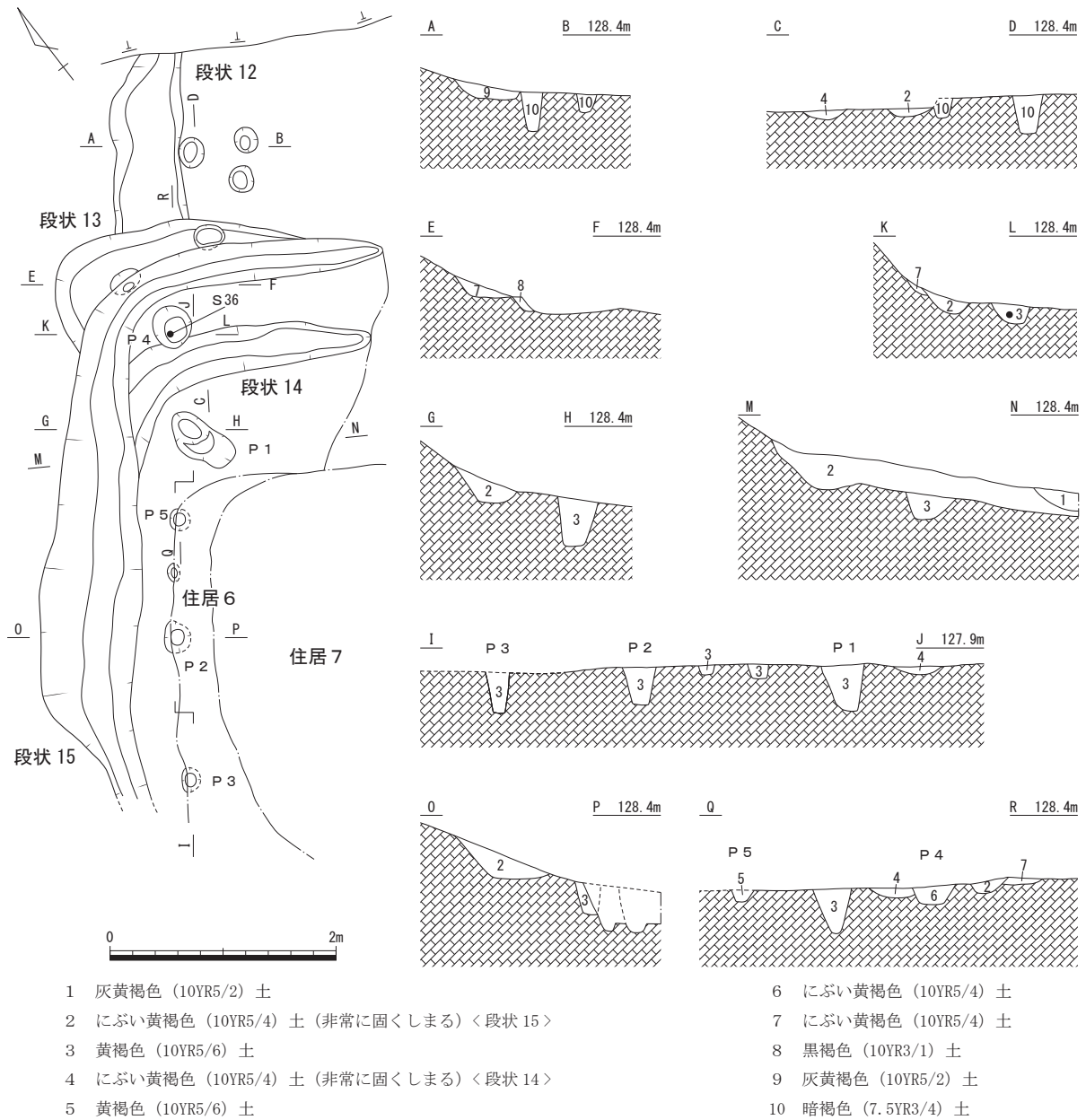


段状遺構 12 (第 43・76 図、図版 11・25)

3 区中央に位置し、段状遺構 13 に切られる。段状遺構の壁体溝とピットのみを確認した。長軸は 1.5 m ほど残存し、溝の幅は 65 cm、深さ 14 cm である。床面は残存していない。溝の東側で 3 個のピットを認められたが、本段状遺構に伴うかは不



第 75 図 段状遺構 11 (1/60)、出土遺物 (1/4)



第 76 図 段状遺構 12～15 (1/60)

明である。遺物は出土していないが、埋土から時期は古墳時代後期で、段状遺構 13 より古い。(米田)
段状遺構 13 (第 43・76 図、図版 11・25)

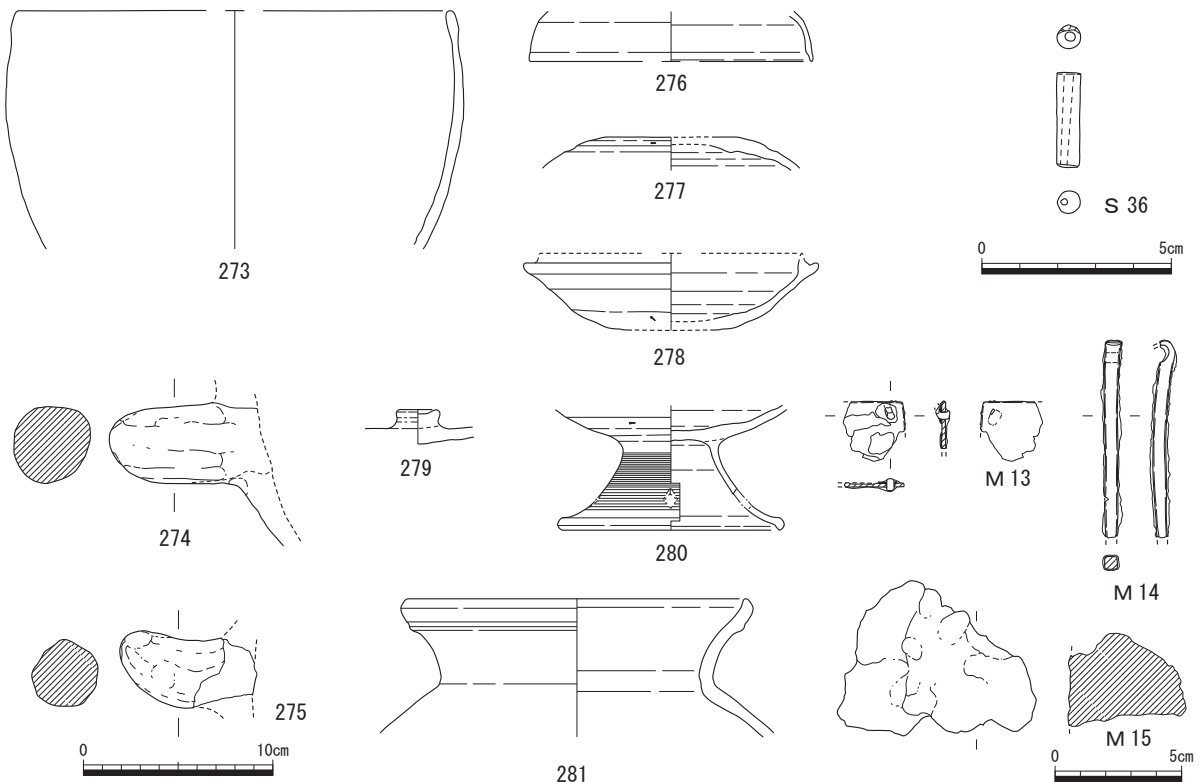
3 区中央に位置し、段状遺構 12 を切り、段状遺構 15 に切られる。段状遺構の北西隅角部にあたり、南北 55 cm、東西 195 cm、深さ 15 cm の掘り方を確認した。ピットは 1 個認められた。遺物は出土していない。埋土の特徴から時期は古墳時代後期で、段状遺構 15 より古く、段状遺構 12 より新しい。(米田)

段状遺構 14 (第 43・76 図、図版 11・25)

3 区中央に位置し、段状遺構 15 と竪穴住居 6 に切られる。段状遺構の北辺の壁体溝と柱穴を確認したのみで、全体は明らかでない。壁体溝は幅 70 cm、深さ 9 cm で、長さ 2.02 m ほど残存する。柱穴は P 1～3 が伴う。P 1 は長径 65 cm、短径 32 cm、深さ 41 cm である。P 2・3 の深さは 32～35 cm である。壁体溝から土師器の細片が出土した。時期は古墳時代後期で、段状遺構 15 より古い。(米田)

段状遺構 15 (第 43・76・77 図、図版 11・25・59)

3 区中央に位置し、段状遺構 13・14 を切り、竪穴住居 6 に切られる。段状遺構の北・西辺の壁体溝と柱穴を確認したが、全体は明らかでない。規模は長軸 4.45 m、短軸 2.35 m、深さ 39 cm である。柱穴は P 4・5 が伴う。P 4 は径 40 cm、深さ 16 cm で、中位から碧玉製管玉 S 36 が出土した。また、壁体溝から土師器の甑 273～275、須恵器の杯蓋 276・277、杯身 278、有蓋高杯の蓋 279、高杯 280、甕 281、鉄器 M 13・M 14、鉄滓 M 15 が出土した。278 は TK 209 型式で、竪穴住居 6・7 との層位的な切り合い関係と齟齬がある。管玉 S 36 は硬質の碧玉製で、片面穿孔である。M 13 は一辺 24.6 mm 以上の方形の薄板状の鉄器で、表面に薄板状の別の鉄器が重なる。また、右上隅に小孔がある。M 14 は鉄釘で、中世の混入か。鉄滓 M 15 は分析により製錬滓との結果が得られた(第 5 章—第 3 節)。埋没時期は古墳時代後期で、段状遺構 13・14 より新しく、竪穴住居 6・7 より古い。(米田)



第 77 図 段状遺構 15 出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

段状遺構 16 (第43・78図、図版11・12)

3区中央、竪穴住居7の東隣に位置する。南辺は削平されており、残存する規模は長軸4.75m、短軸0.62m、深さ20cmである。覆土から須恵器の杯身282が出土した。時期は古墳時代後期である。(米田)

段状遺構 17 (第78図)

3区中央、段状遺構16の東隣に位置する。規模は長軸3.38m、短軸0.22m、深さ15cmである。埋土から土師器や須恵器の細片が出土した。時期は古墳時代後期の範疇で捉えられる。(米田)

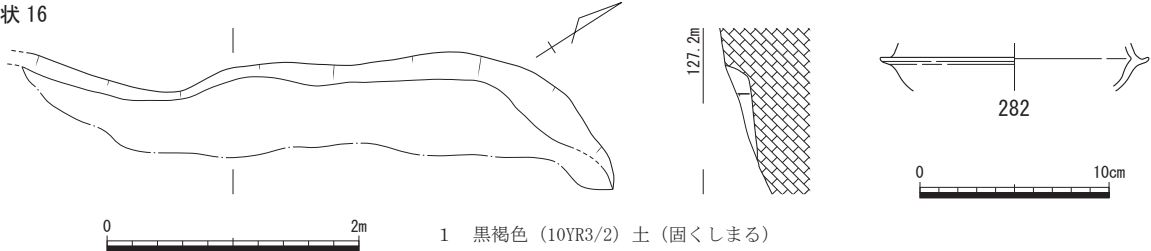
段状遺構 18 (第47・78図、図版13・26)

3区中央、段状遺構19の北東隣に位置する。残存する規模は長軸3.45m、短軸0.4m、検出面からの深さ27cmである。遺構の南側は竪穴住居10に切られている。出土遺物がなく時期は不明であるが、少なくとも竪穴住居10が営まれた6世紀後葉には廃絶したとみられる。(四田)

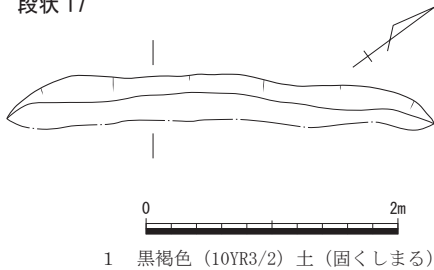
段状遺構 19 (第47・78図、図版13・26・54)

段状遺構18の南西側に位置し、規模は長軸3.48m、短軸0.4m、深さ15cmである。一部を竪穴住居10に切られる。土師器高杯283、須恵器杯身284よりTK43型式段階に位置づけられる。(四田)

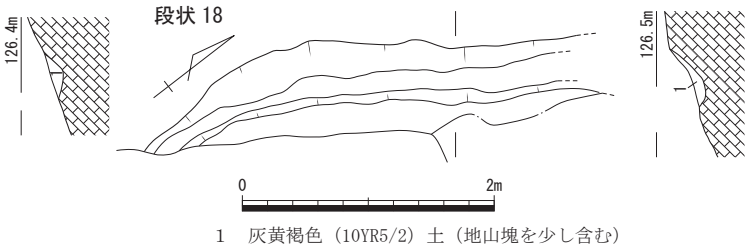
段状 16



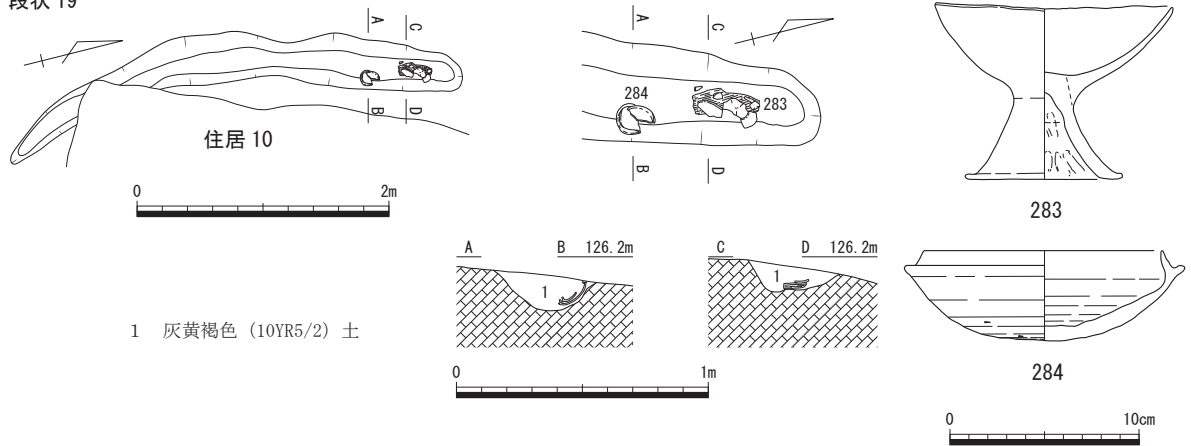
段状 17



段状 18



段状 19



第78図 段状遺構16～19(1/60・1/30)、段状遺構16・19出土遺物(1/4)

段状遺構 20 (第 79 図、図版 46・54)

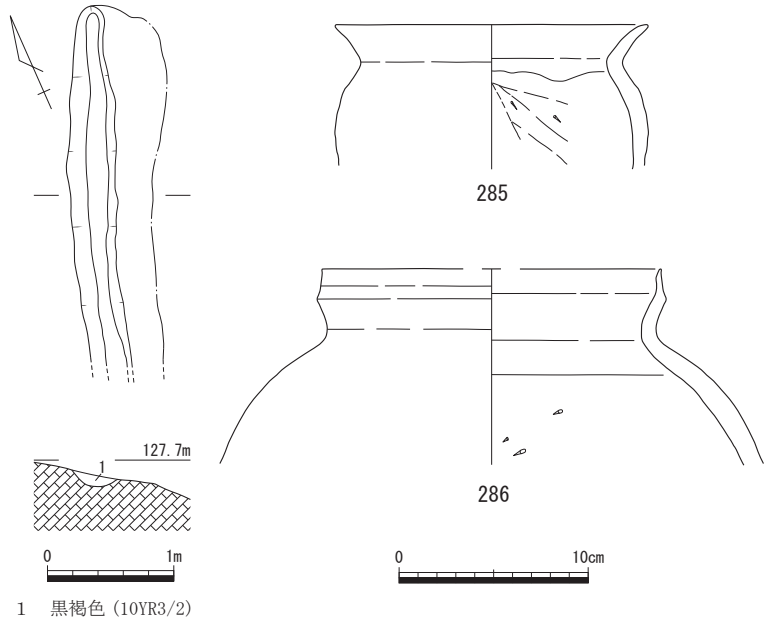
3区中央、段状遺構 24 の北隣、段状遺構 32 の東隣に位置する。残存する規模は、長軸 2.78 m、短軸 0.53 m、深さ 12 cm である。覆土から土師器の甕 285・286 や須恵器の細片が出土した。時期は古墳時代後期である。(米田)

段状遺構 21 (第 80・81 図、図版 27)

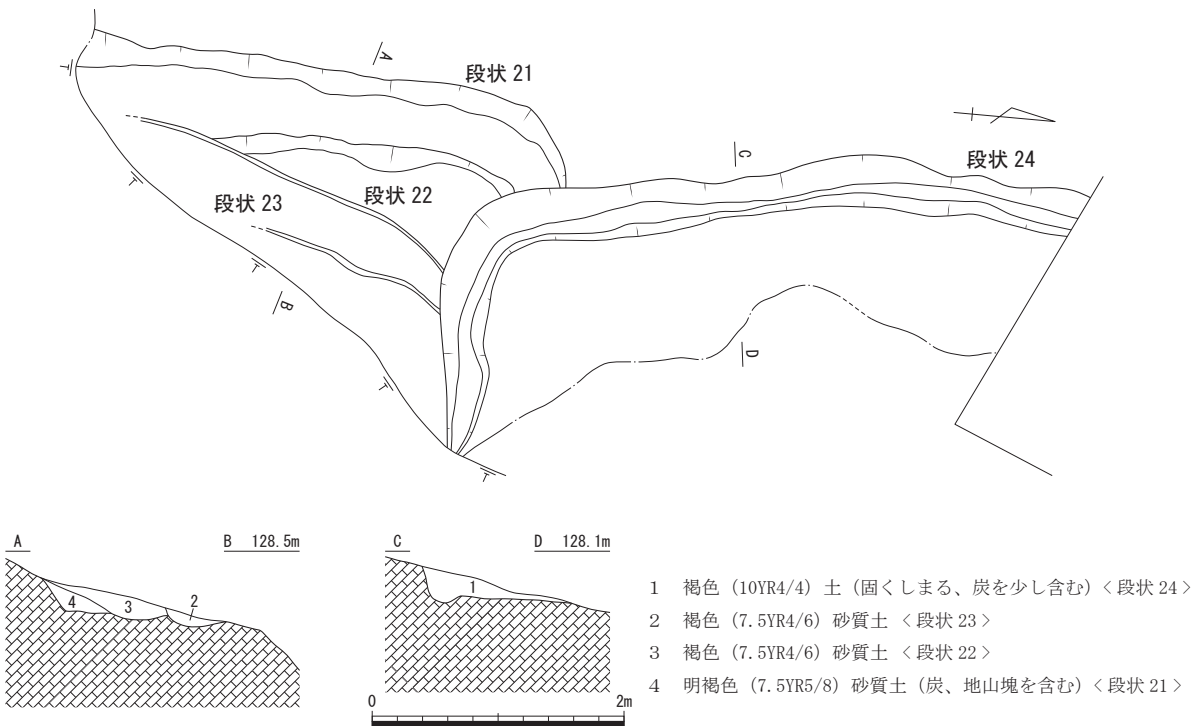
3区中央南側に位置する。段状遺構 21 は段状遺構 22～24 に切られるほか、遺構の南端は削平されている。規模は確認できた範囲で長軸 3.95 m 以上、短軸 0.55 m 以上、検出面からの深さ 25 cm である。出土遺物は須恵器杯身 287、装飾付壺の脚部裾 288 がある。出土遺物及び周辺の段状遺構の状況から、古墳時代後期と考えられる。(四田)

段状遺構 22 (第 80・81 図、図版 27)

3区中央南側に位置する。段状遺構 21 を切り、段状遺構 23・24 に切られる。確認できたのはごくわずかな部分であるが、規模は長軸 2.06 m 以上、短軸 0.8 m 以上である。この段状遺構に伴う遺物は出土していないが、周辺の段状遺構の時期から古墳時代後期と考えられる。(四田)



第 79 図 段状遺構 20(1/60)、出土遺物 (1/4)



第 80 図 段状遺構 21～24 (1/60)

段状遺構 23

(第80・81図、図版27)

規模は確認できた範囲で長軸2.65mを測る。出土遺物より、6世紀後半と考えられる。(四田)

段状遺構 24

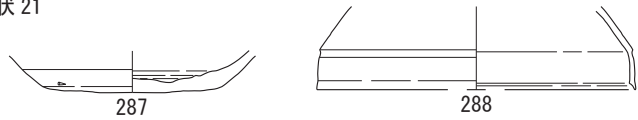
(第80・81図、図版27)

段状遺構 21～23を切る。規模は長軸4.65m、短軸1.43mである。柱穴は確認していない。時期は出土遺物から古墳時代後期か。(四田)

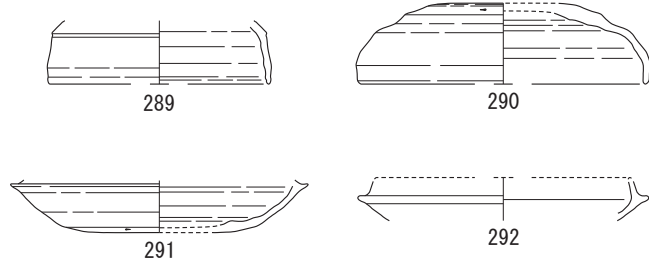
段状遺構 25 (第82図)

4区南側に位置し、竪穴住居11の南西隣に位置する。周辺は削平が著しく、壁体溝のみが残存していた。溝は長さ4.91m、幅0.4m、深さ8

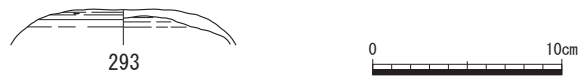
段状 21



段状 23

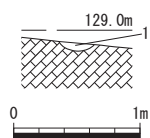
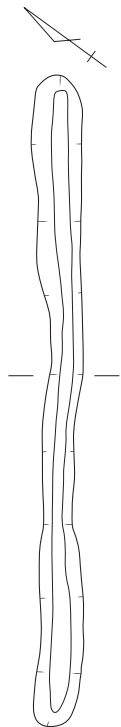


段状 24



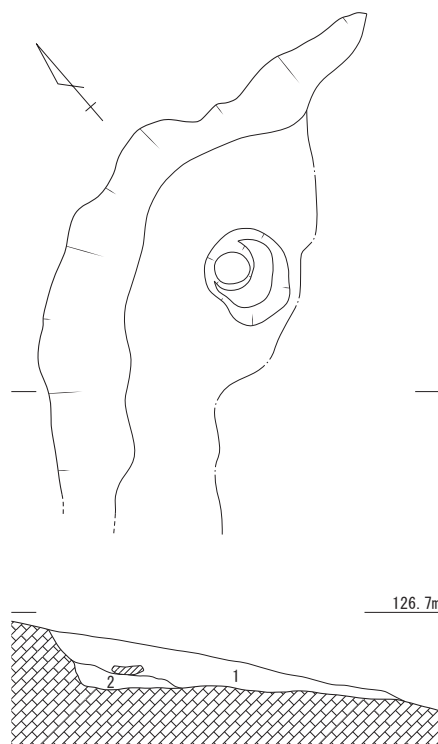
第81図 段状遺構 21～24 出土遺物 (1/4)

段状 25

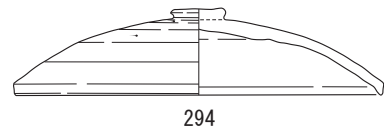


1 黒褐色 (10YR3/2) 土

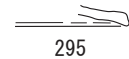
段状 26



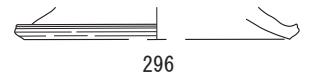
1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 (炭を少し含む)
2 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 土



294



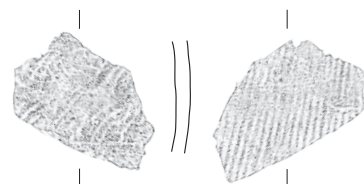
295



296



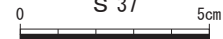
297



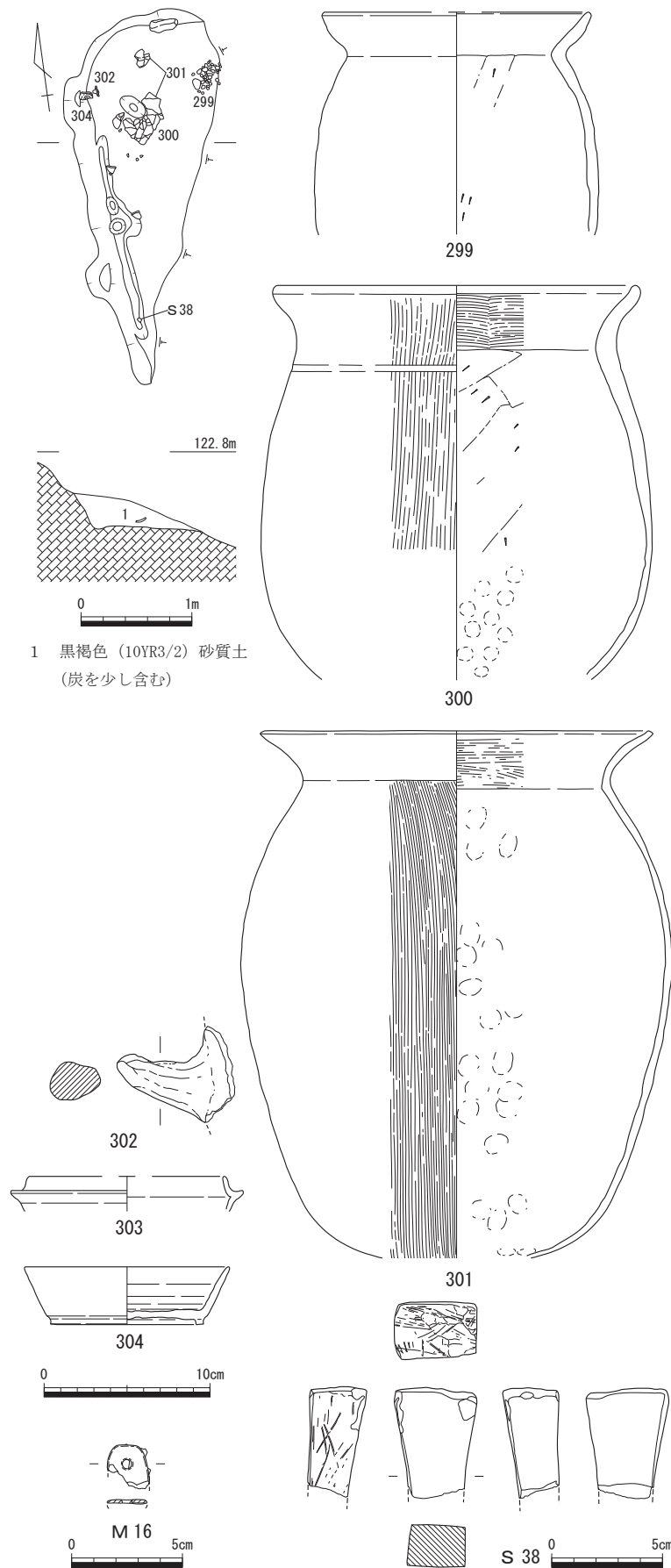
298



S 37



第82図 段状遺構 25・26(1/60)、段状遺構 26 出土遺物 (1/4・1/2)



1 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土 (炭を少し含む)

第 83 図 段状遺構 27 (1/60)、出土遺物 (1/4・1/3)

cmである。埋土から時期は古墳時代後期と推測される。(米田)

段状遺構 26

(第 82 図、図版 23・27)

4区南東端、竪穴住居 21の北隣に位置する。段状遺構の北側にあたり、南側は削平されている。規模は長軸 3.45 m、短軸 1.31 m、深さ 47 cm である。覆土から須恵器の杯蓋 294、高杯 295・296、甕 297・298 が出土した。294・295 は M T 21 型式に相当し、7 世紀末から 8 世紀中葉に収まる。石鏃 S 37 は混入とみられる。(米田)

段状遺構 27

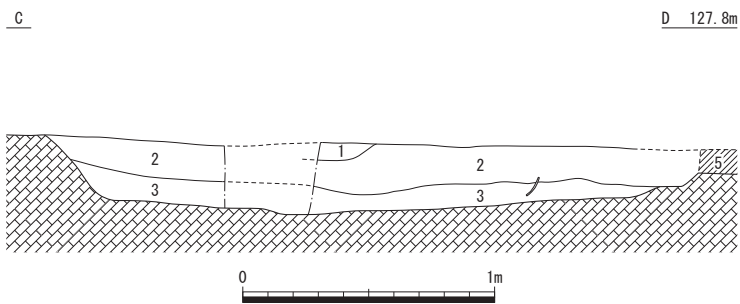
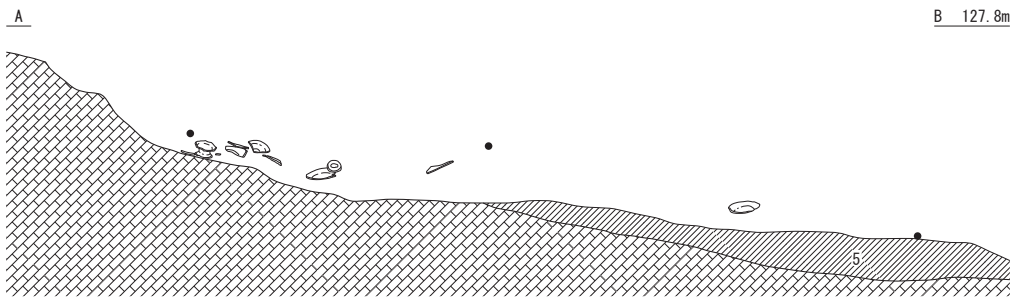
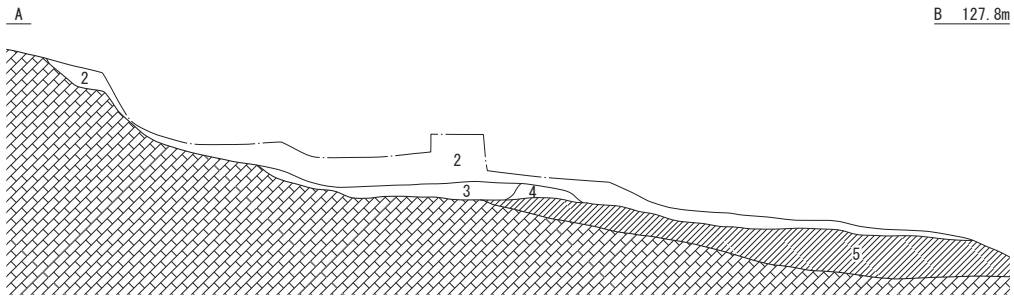
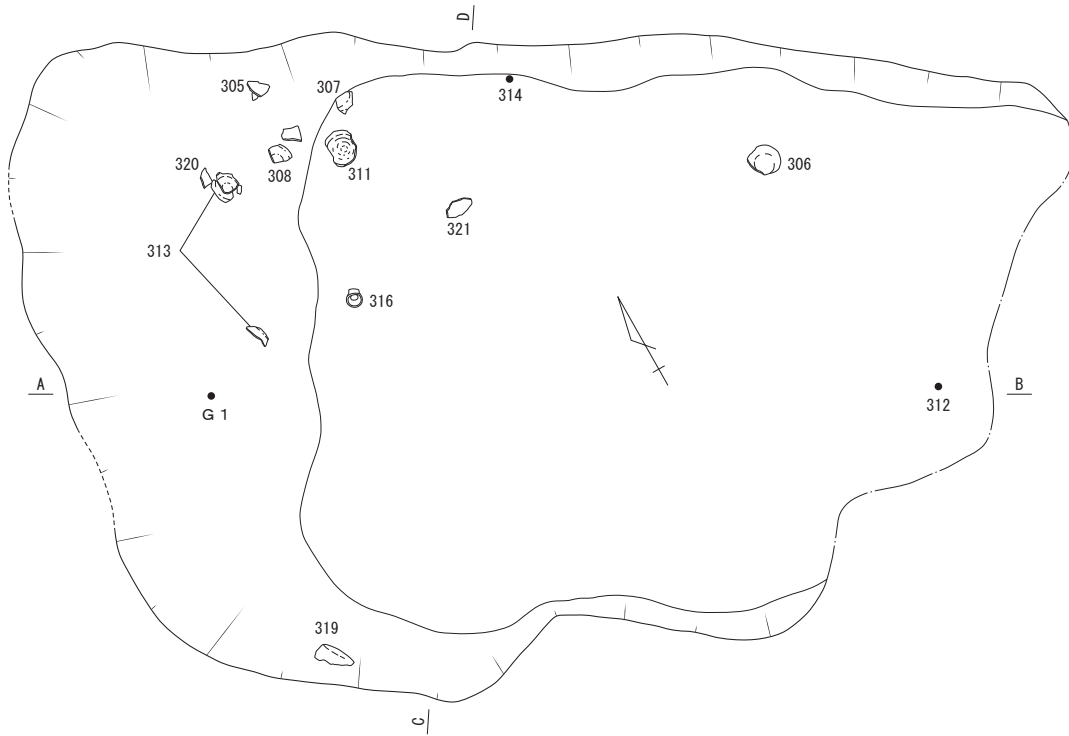
(第 83 図、図版 28・54・58)

2区西側で段状遺構 9 南西に位置する。埋土は黒褐色で明瞭に検出できた。北西隅のみ残存で、長軸 3.2 m 以上、短軸 1.2 m 以上を測る。床面上で西側に幅約 16cm、深さ 2～12cm を測る壁体溝が巡り、深さ 10cm の柱穴 1 本を検出した。出土遺物で須恵器杯身 304 は床面から 20cm 上、土師器甕 299～301 は床面から 7 cm 上で検出された。303 は混入と考えられる。M 16 は孔のある板状鉄器、S 38 は砥石である。304 から遺構の埋没は 8 世紀後半であろうか。(氏平)

4 土坑

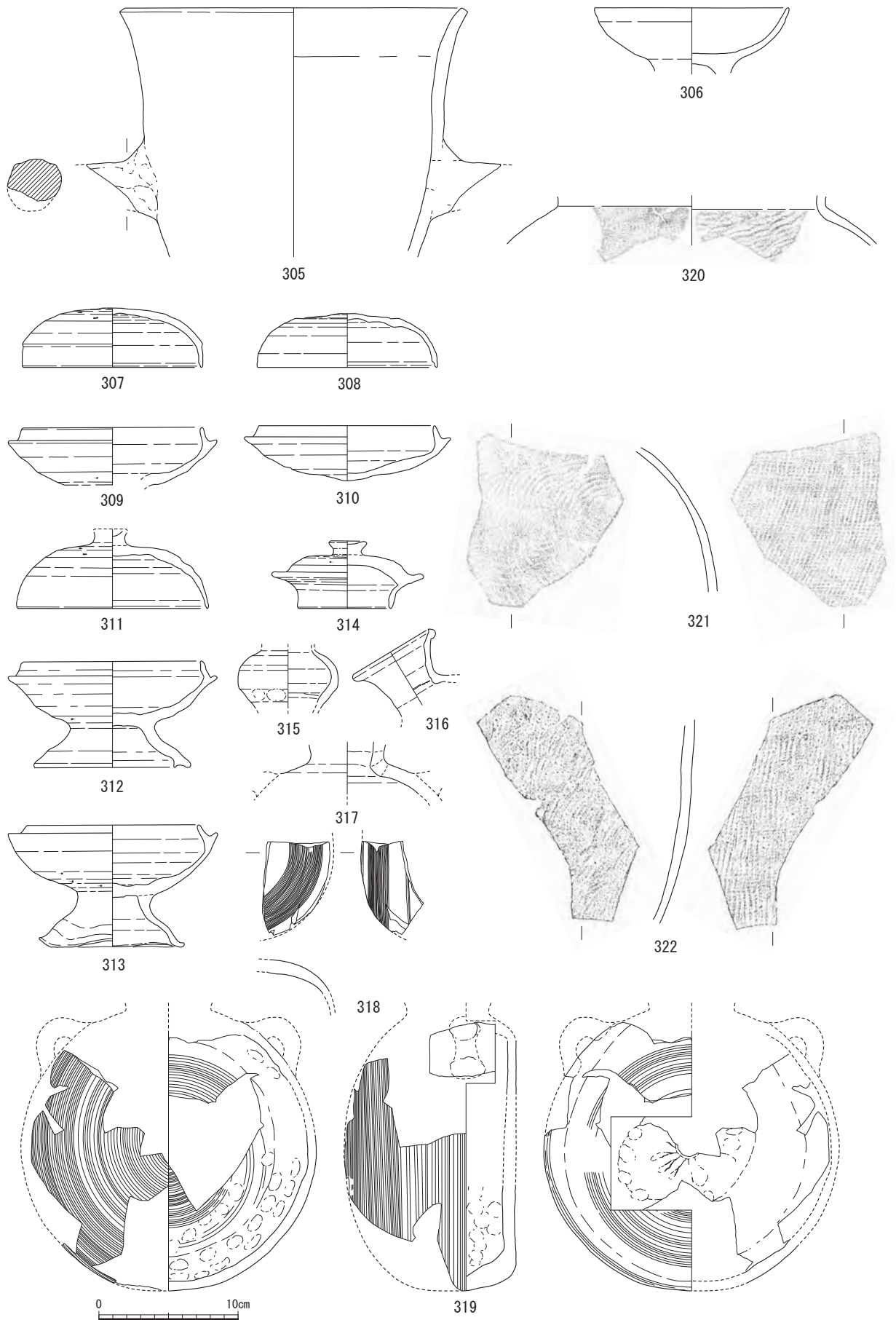
土坑 5 (第 84～86 図、図版 11・29・55・58)

3区中央の谷部に位置し、竪



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 (固くしまる)
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 土 (固くしまる。
地山塊をやや多く含む。やや粘性あり)
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 土 (固くしまる)
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 (固くしまる)
- 5 褐色 (10YR4/4) 土
〈弥生時代中期の包含層〉

第84図 土坑5 (1/30)

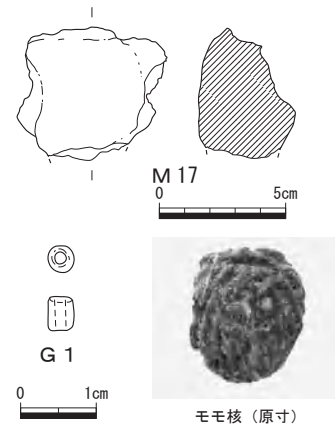


第85図 土坑5出土遺物① (1/4)

穴住居 6・7 を切る。本土坑は、谷部に堆積した包含層 1 のうち、古墳時代後期～古代の包含層である暗褐色土（第 196 図―第 10 層）の下面で検出した。本土坑の埋土とその上下層（第 196 図―第 10・12 層）は酷似していたため、掘り方は認識しづかった。

平面形は不整楕円形を呈し、長軸が斜面に直交するように配置されている。斜面上方にあたる土坑の西半は残存状況が良好であったが、斜面下方の東半は徐々に浅くなって東端は流失していた。残存する規模は長軸 421 cm 以上、短軸 261 cm、深さ 55 cm である。埋土は 3 層に分かれるが、黒褐色土や褐灰色土を基調とする。土坑内からは比較的多くの遺物が出土し、特に土坑の北西側に偏っていた。

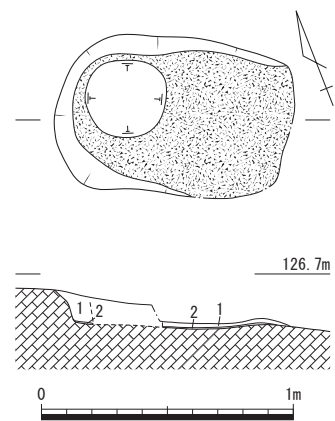
出土遺物として、土師器の甑 305、高杯 306、須恵器の杯蓋 307・308、杯身 309・310、有蓋高杯の蓋 311、高杯 312・313、長頸壺の蓋 314、装飾小型壺 315、平瓶 316、提瓶 317～319、甕 320～322、鉄滓（鍛冶滓）M 17、ガラス製小玉 G 1、モモ核 1 点がある。このうち、313 は北西側底面、305・307・308・311・316・320・321 は北西側中位、314 は西側上層、306 は東壁中央の中位、312 は東側底面、319 は南壁上層、G 1 は西側中位、モモ核は西側から出土した。306・311～314 は完形に近い状態であった。307～311 は TK 43 型式に相当する。また、319 は本土坑出土土器と竪穴住居 9・10、段状遺構 15 から出土した土器片が接合した。



第 86 図 土坑 5 出土遺物②
(1/3・1/1)

遺物は多様で、完形に近い土器が散見されるほか、長頸壺の蓋、装飾小型壺、平瓶、提瓶、ガラス製小玉やモモ核が含まれることから、祭祀に関わる遺物が埋没過程で二次的に廃棄された可能性がある。埋没時期は古墳時代後期後葉である。（米田）
土坑 6（第 54・87 図、図版 29）

4 区南端、竪穴住居 16 の埋没後に掘られた被熱土坑である。平面形は不整楕円形で、規模は長軸 95 cm を測る。底面には炭を多く含む土が堆積し、壁面に被熱痕が残る。竪穴住居 13 の柱穴が炭層を切り、時期は 6 世紀後半と考えられる。（四田）



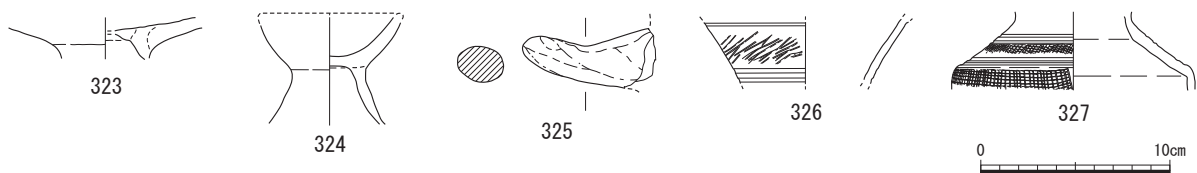
- 1 明褐色（7.5YR5/6）土（やや固くしまる）
- 2 黒褐色（10YR3/1）土（炭を多く含む）

第 87 図 土坑 6 (1/30)

5 その他

遺構に伴わない遺物（第 88 図）

遺構外から土師器の高杯 323、小形の高杯 324、甑の把手 325、須恵器の甕の口縁部 326、甕の体部 327 が出土した。いずれも古墳時代後期に属する。（米田）

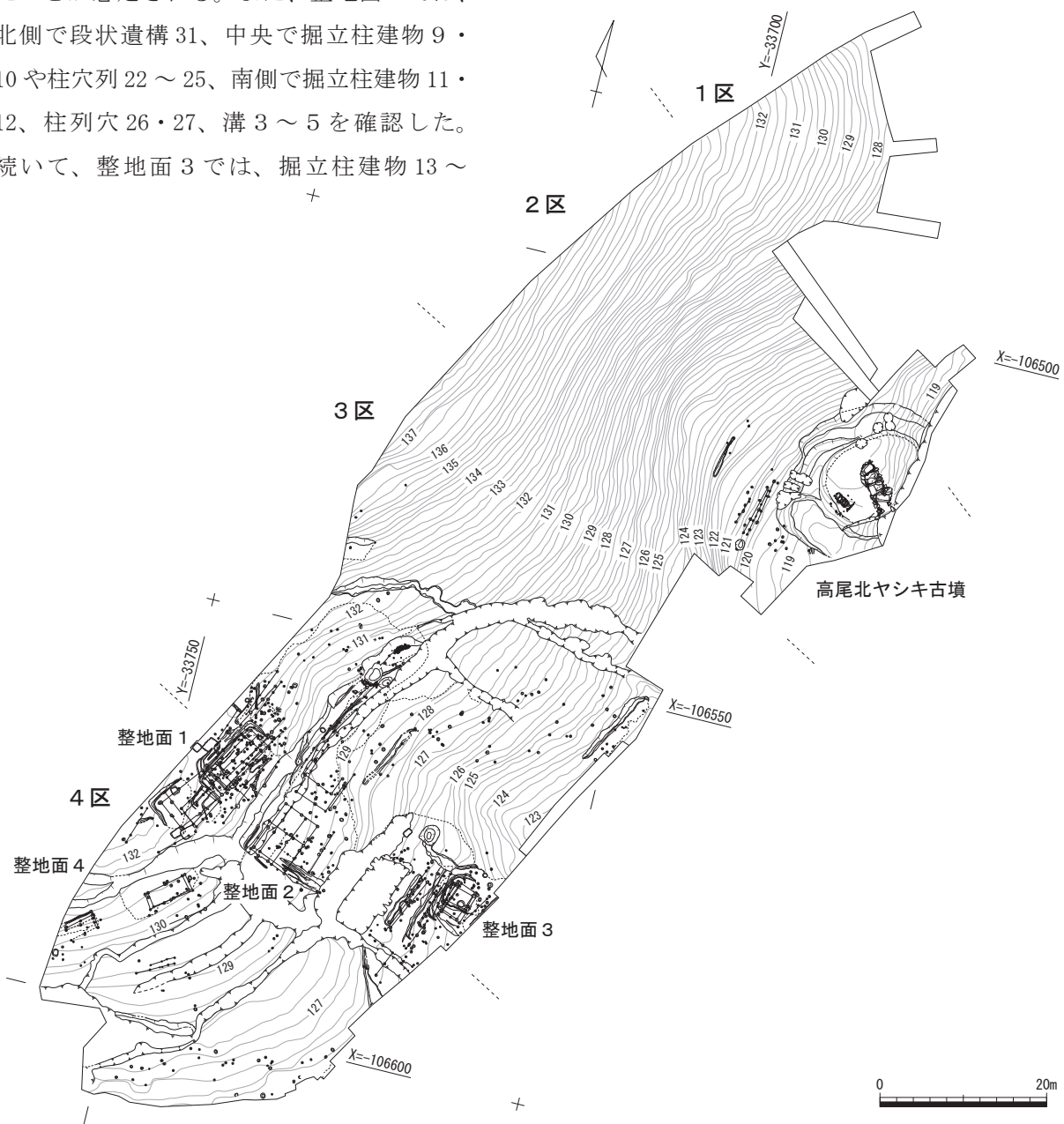


第 88 図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

第4節 中世の遺構・遺物

高尾北ヤシキ遺跡では、中世の遺構として、2区東側、3区、4区西側において、整地面4面、掘立柱建物20棟、柱穴列38列、段状遺構9面、土坑17基、溝6条、集石4基、ピットなどを確認した。これらの多くは、3区と4区西側において、丘陵斜面を造成した整地面1～4で確認した。整地面1は3区西側の斜面上段、整地面2は3区中央の中段、整地面3は3区東側の下段、整地面4は4区西側に配置され、各整地面では掘立柱建物や柱穴列の建て替えが著しかった。

整地面1では、掘立柱建物2～8、柱穴列7～21、土坑10～17が重複かつ集中して配置された。掘立柱建物6→5→7→8、柱穴列12→掘立柱建物2→3→4→柱穴列15・16の順に建て替えられたことが想定される。また、整地面2では、北側で段状遺構31、中央で掘立柱建物9・10や柱穴列22～25、南側で掘立柱建物11・12、柱穴列26・27、溝3～5を確認した。続いて、整地面3では、掘立柱建物13～

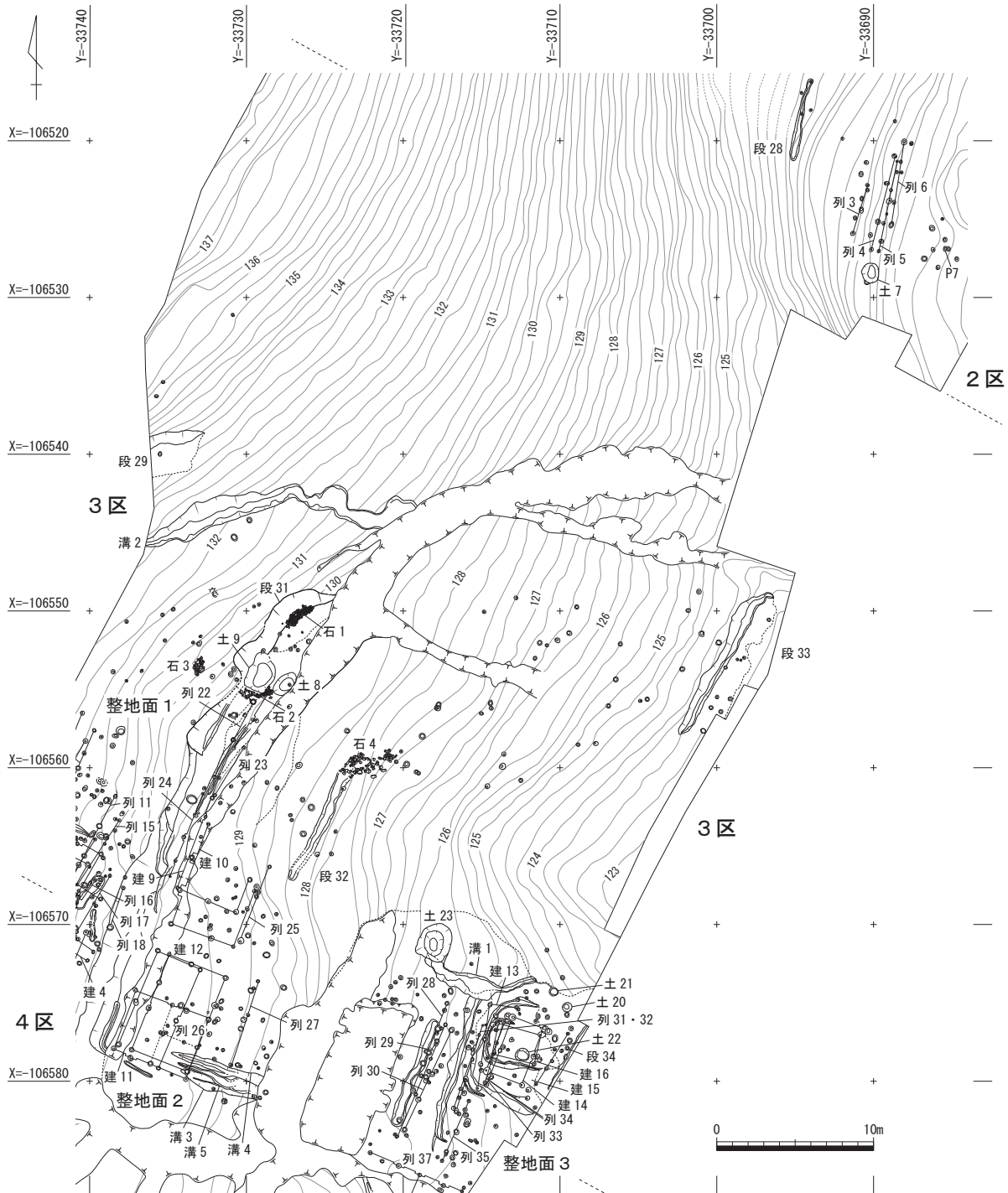


第 89 図 中世遺構全体図① (1/800)

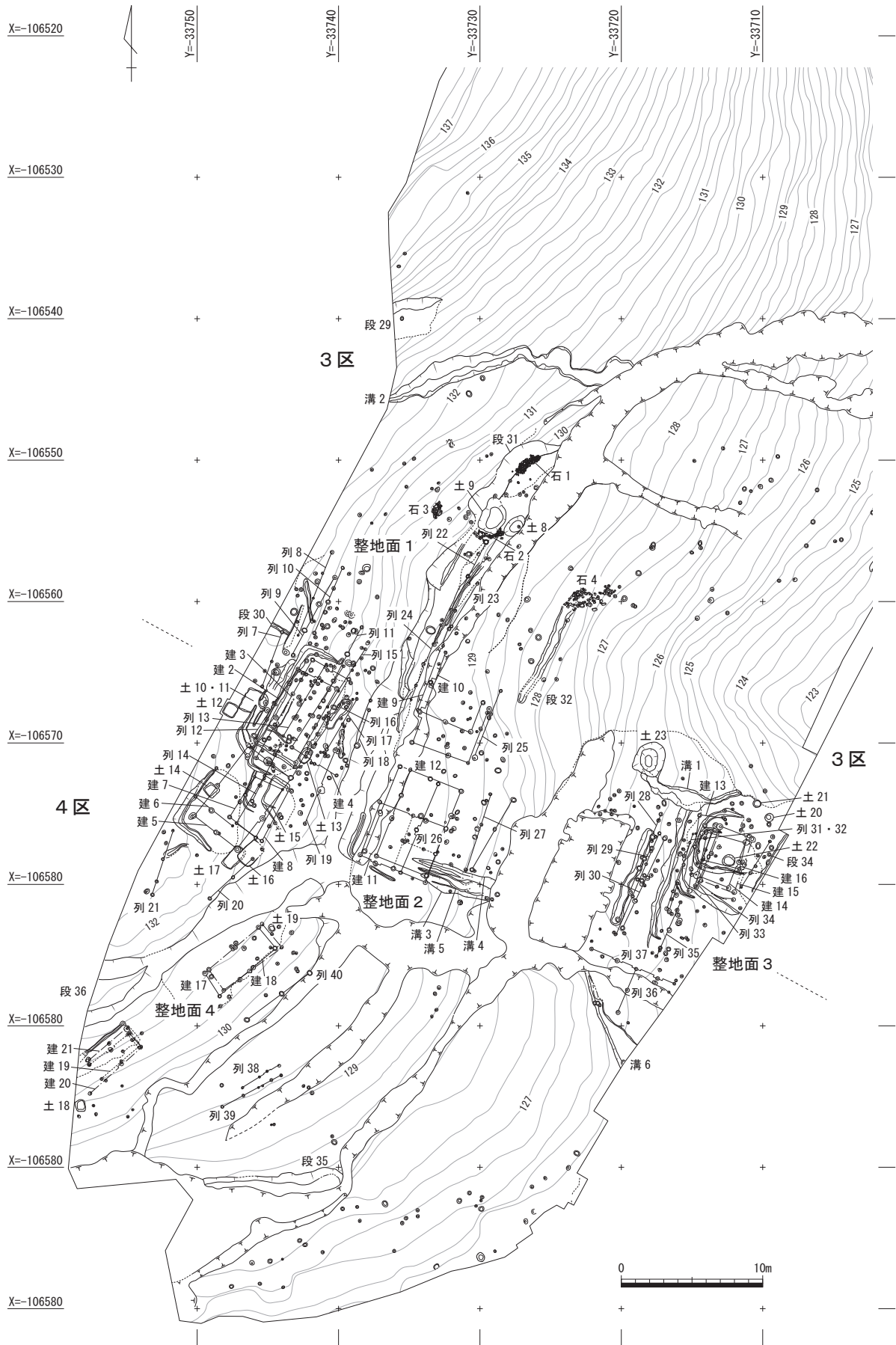
16、柱穴列 28～37、土坑 20～23、溝 1・6 を確認した。このうち、掘立柱建物 13→14→15→16 の順で建て替えられたことが想定される。さらに整地面 4 では、東側で掘立柱建物 17・18、土坑 19、柱穴列 40、西側で掘立柱建物 19～21、土坑 18 を確認した。このほか、2区東側では柱穴列 3～6、3区北東端では段状遺構 33、4区南側では段状遺構 35 と柱穴列 38・39 が配置されていた。

遺物は土師器、勝間田焼、備前焼、瀬戸・美濃焼、青磁、白磁、瓦質土器、鉄器、青銅製品、土錘、銅滓が出土した。なかでも、段状遺構 31-P1 から出土した青銅製の鏡像は注目される。

このほか、第4章で述べるが、中世前半には高尾北ヤシキ古墳の横穴式石室が再利用された。(米田)



第90図 中世遺構全体図② (1/400)

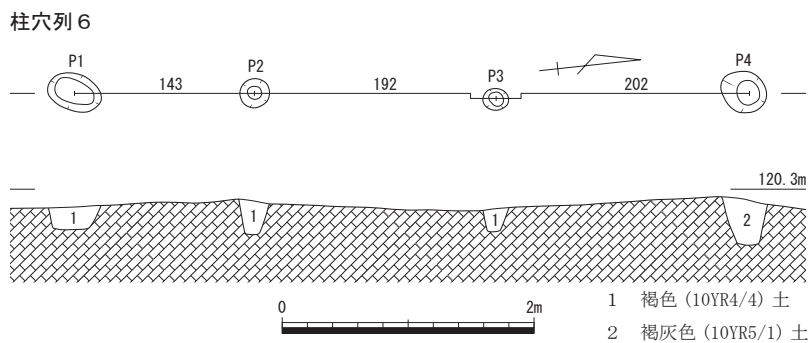
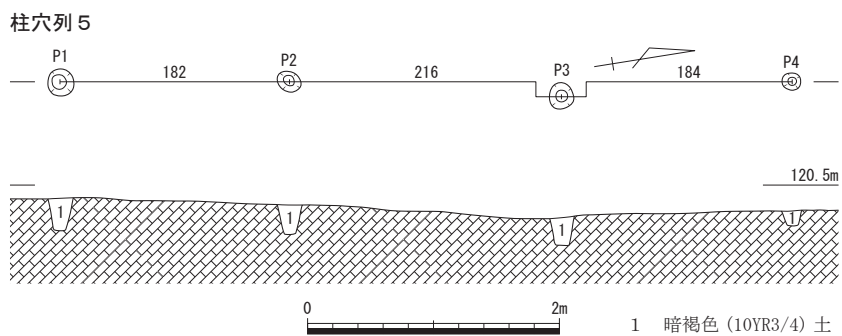
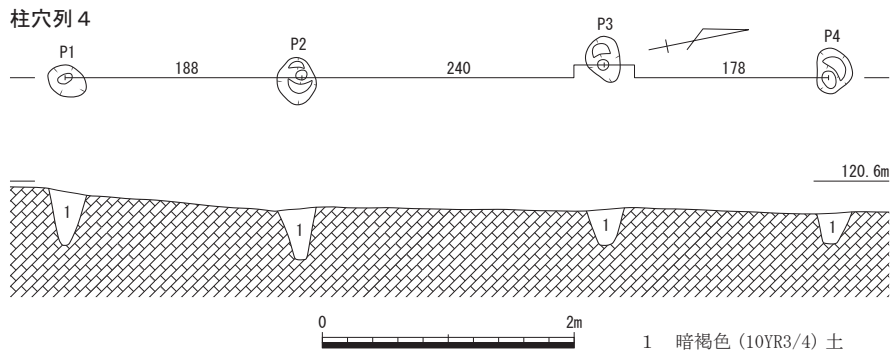
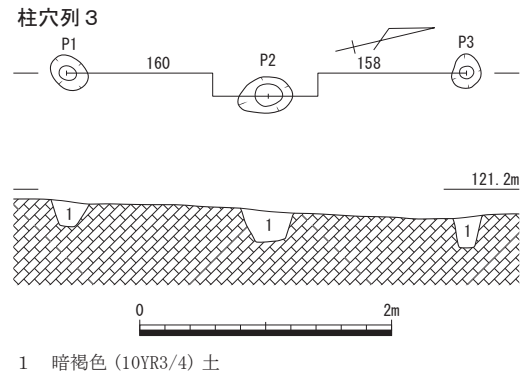


第91図 中世遺構全体図③ (1/400)

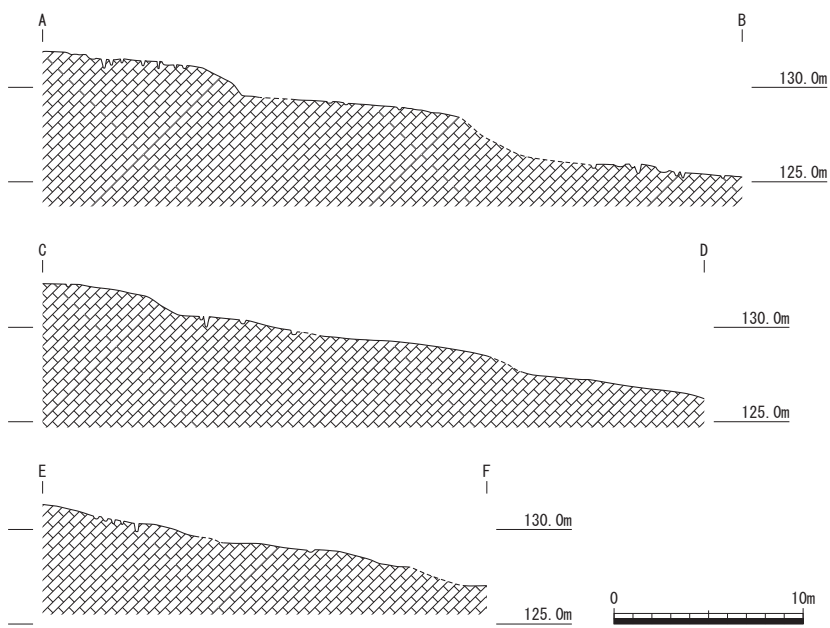
1 掘立柱建物・柱穴列・整地面

柱穴列3～6 (第92図)

柱穴列3～6は2区の東半、斜面地と平坦地の傾斜変換点よりやや斜面側に所在し、その主軸はN-10°-E前後で、平坦地の境界を画すように設置されている。この場所から平坦地にかけては多数の柱穴が検出されているが、柱穴列として認定できたのはこの4基のみであった。これら柱穴列の構成は柱穴列3のみ柱穴3基で、その他は柱穴4基である。各柱穴の平面形は円～楕円形で、その長軸は約20cm～45cmを測る。いずれの柱穴列からも遺物が出土していないが、中世の土師器皿(418)が出土した柱穴(P7)と埋土が近似していることから、これら柱穴列は中世に帰属すると判断した。(小嶋)



第92図 柱穴列3～6 (1/60)

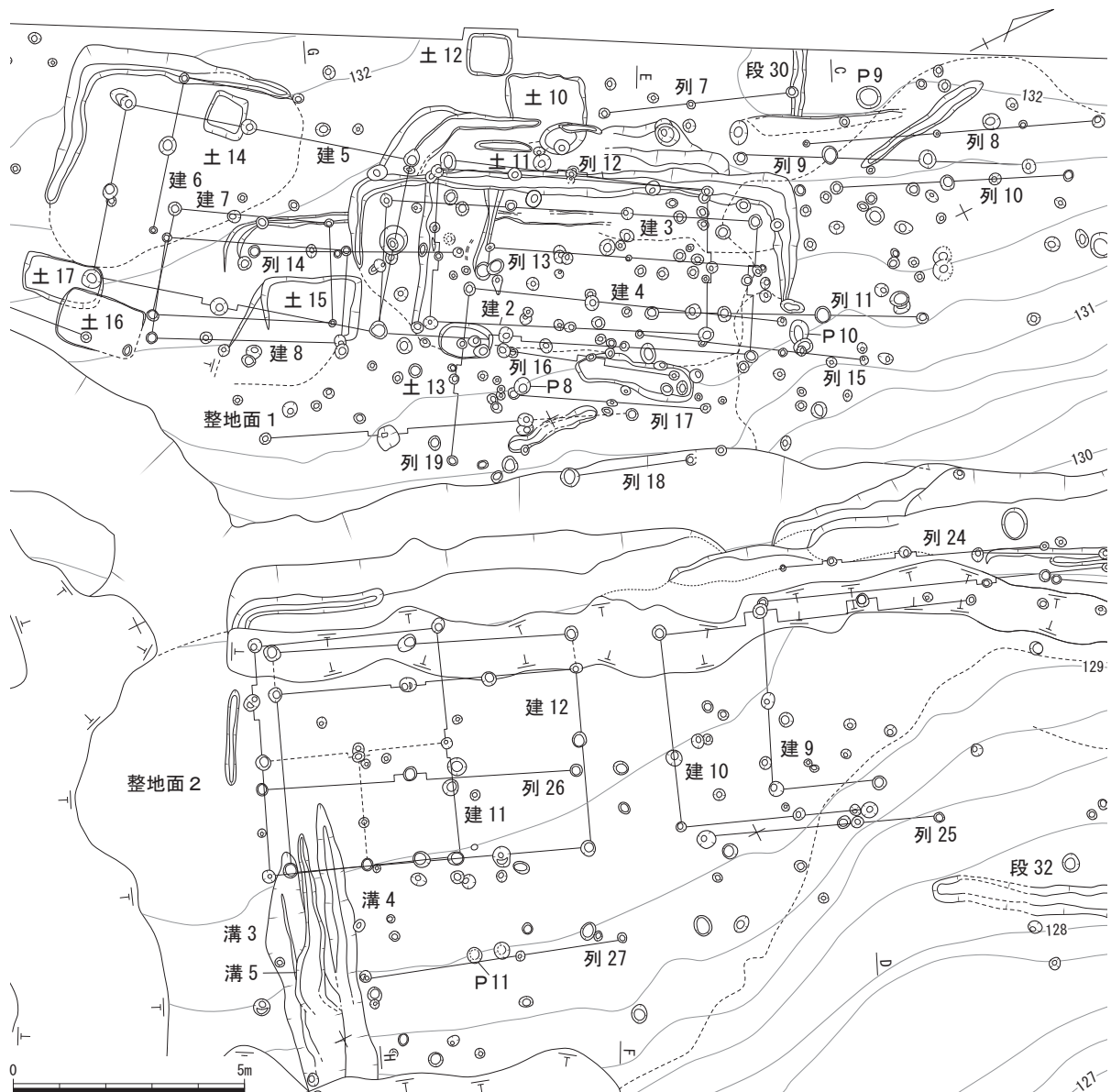


第93図 整地面1～4平・断面図 (1/400)

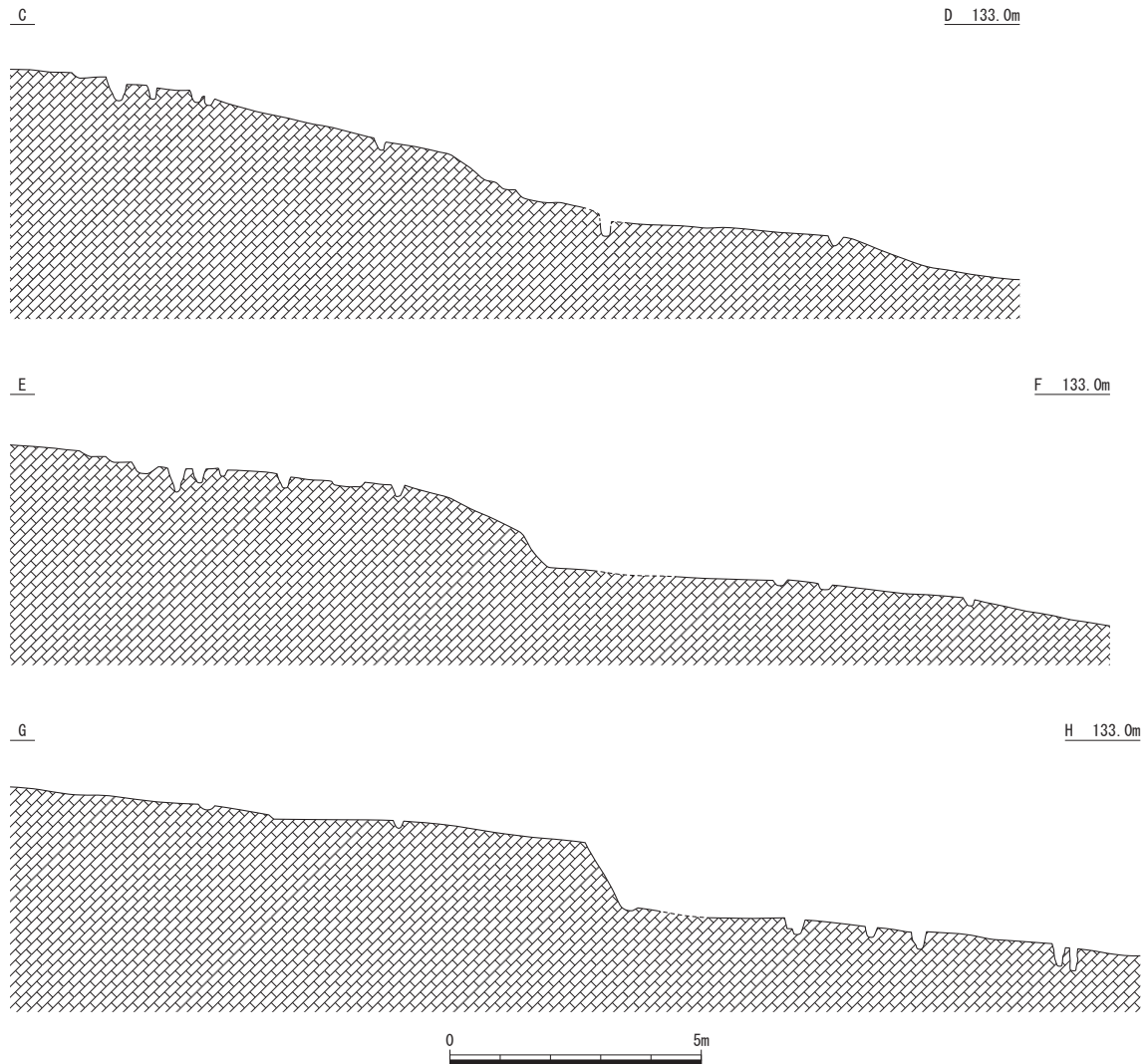
整地面1 (第93～95図、写真11、図版30～34)

3・4区の西に位置する整地面で、整地面2より西と整地面4より北の上段にあたる。整地面1は、3区南西側の谷部（包含層1）より南側にある丘陵張り出しの斜面を削平し、標高131～132mあたりを平坦面や緩斜面に整地している。整地面1の範囲は、北端は溝2、南端は柱穴列19、東端は柱穴列16あたりである。西端は、地表面を見ると、調査外の西1～2mほどと推測される。よって、規模は概ね南北45m前後、東西12mとみられる。

整地面1の南半は、掘立柱建物2～8、柱穴列7～21、土坑10～21が重複かつ集中して配置されており、長期間にわたって機能していた可能性がある。掘立柱建物2・3・5・7・8は建物の全体が残存していたが、掘立柱建物4・6は柱穴が浅い、あるいは緩斜面に配置されていたことから、下方の柱穴が残存していたものは少ない。また、柱穴列7～21の多くは、配置状況や規模から掘立柱建物の桁行に相当すると考えられる。これらは複雑に重複しているが、主軸や配置状況、柱穴や溝の



第94図 整地面1・2遺構配置図 (1/150)

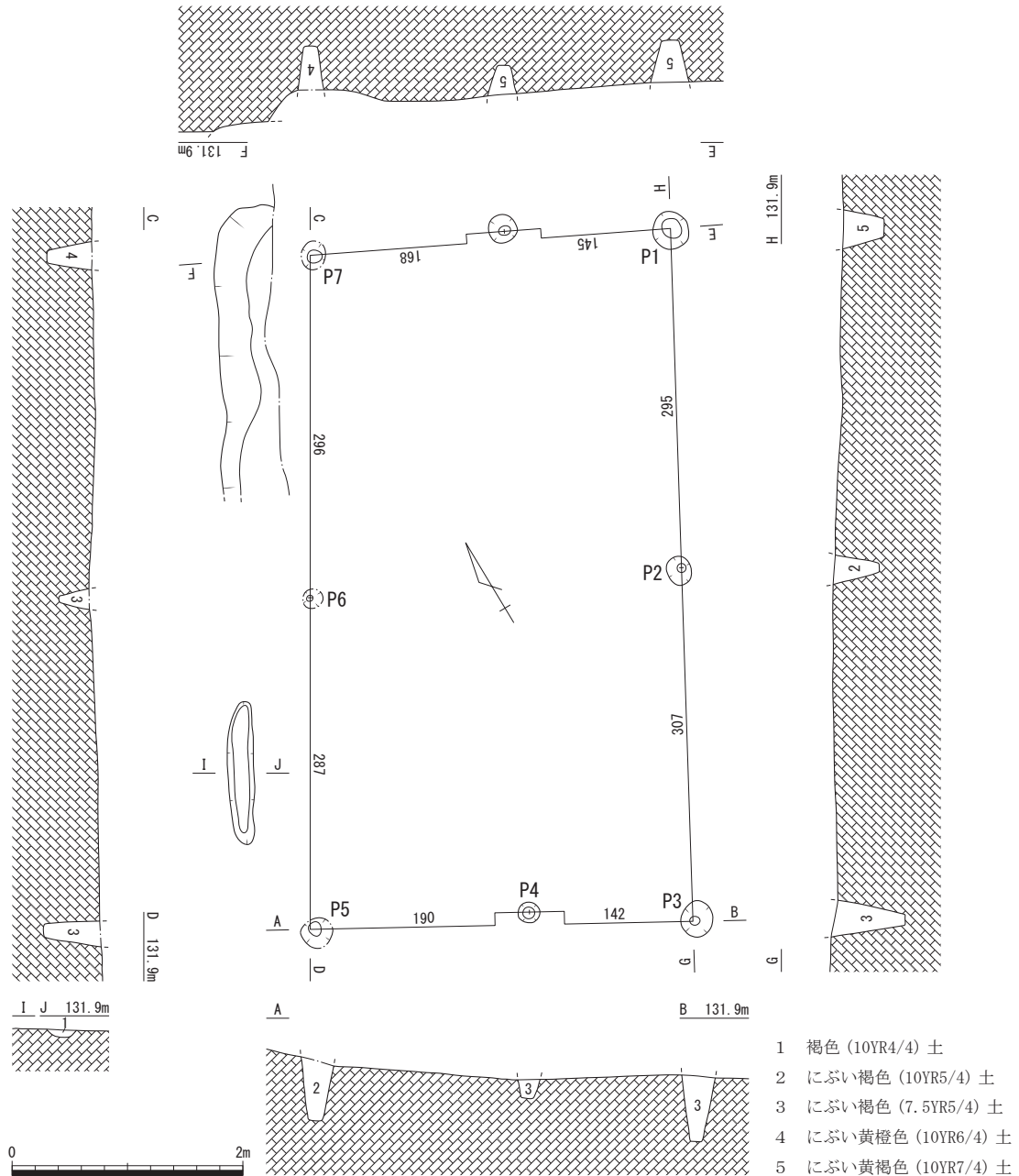


第95図 整地面1・2断面(1/150)

部分的な切り合い関係を考慮すると、掘立柱建物6→5→7→8、柱穴列12→掘立柱建物2→3→4→柱穴列15→16の順に建て替えられたことが想定される。さらに、掘立柱建物2・7は同時併存した可能性もある。なお、整地面1は調査区内では最も西側に位置するが、西側の調査区外にも大規模な段が2面あることが地表面で確認でき、中世の集落が西側にも広がることが推測される。(米田)

掘立柱建物2 (第96・97図、図版32～34・41・58)

4区北西の整地面1中央に位置し、掘立柱建物3・4、柱穴列11～14と重複する。遺構の切り合いと位置関係から、柱穴列12に後続し、掘立柱建物3・4より先行する建物と想定される。桁行2間×梁行2間の側柱建物で、主軸はN-30°-Eである。建物の規模は、桁行6.02m、梁行3.13m、面積19.10㎡である。柱間距離は桁287～307cm、梁142～190cmで、柱穴は径17～30cm、最大深57cmである。本遺構の大部分に後続する掘立柱建物3が重複しているため、床面は本来のレベルより下がっている可能性が高いものの、北西辺には柱穴の並びに平行するカット面と溝が一部残存している。遺構配置や埋土から中世の遺構と考えられる。なお、出土遺物として粘板岩製の長方形硯S39が出土している。残存長7.1cm、幅7.08cm、厚さ1.63cmを測り、側面はほぼ垂直で裏面は平坦なつくりである。原田倫子氏による分類⁽¹⁾では16世紀後半から17世紀の時期に主流となる形態である

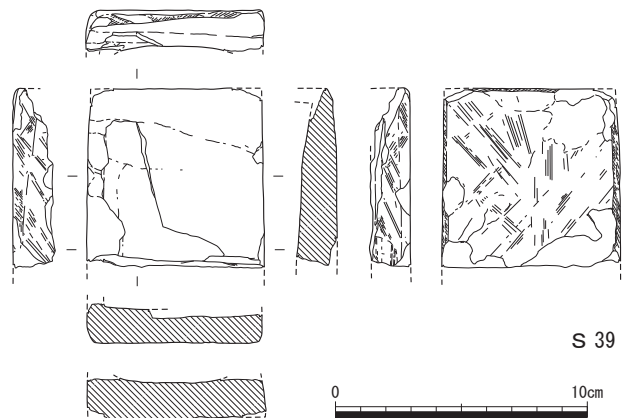


第96図 掘立柱建物2 (1/60)

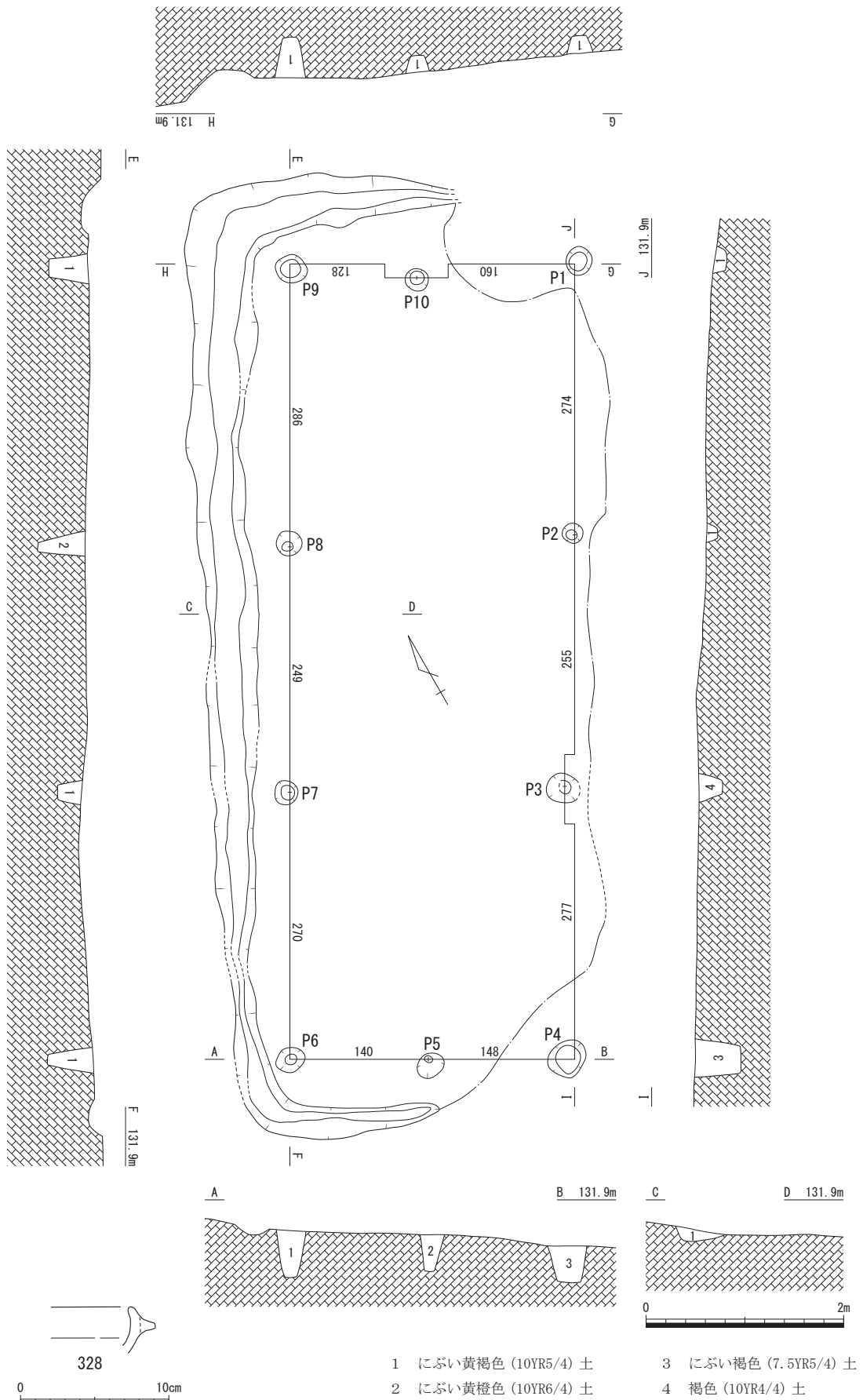
ことから、遺構の埋没過程で混入した可能性が高い。(山口)

掘立柱建物3 (第98・100図、図版32～34・59)

3・4区西側にまたがる整地面1中央で見つかった。3間×2間の側柱建物であり、棟方向はN-30°-Eに向く。桁行全長8.06m、梁行全長2.88m、面積は23.09㎡である。柱間寸法は梁行が128～160cm



第97図 掘立柱建物2出土遺物 (1/3)



第98図 掘立柱建物3 (1/60)、出土遺物 (1/4)

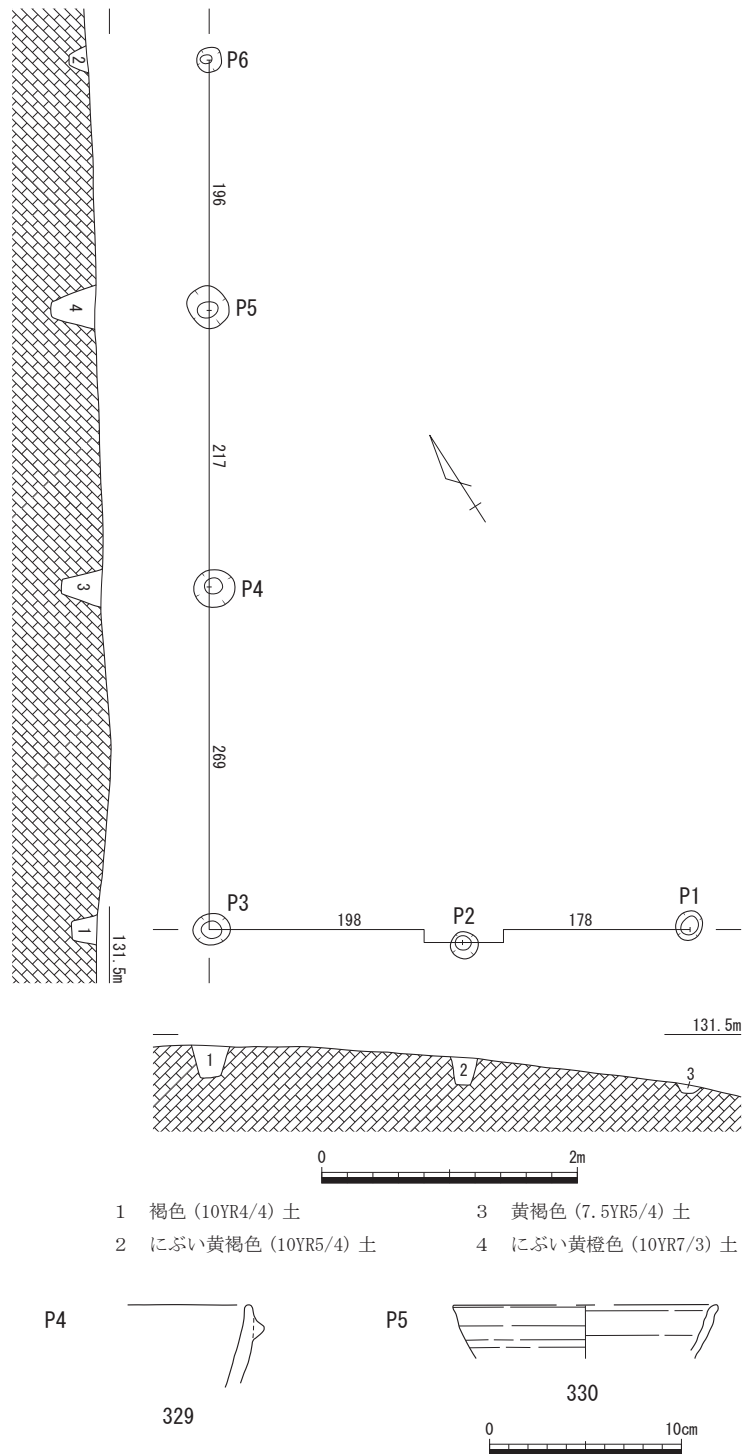
に対し、桁行が249～286cmと約2倍となる。斜面上方側で溝が確認でき、床面が残る。この溝が掘立柱建物2の溝に切り込んでいることから、掘立柱建物2の後に建て替えられた可能性が考えられる。この場合、建て替えに伴う建物規模の拡大が行われている。出土した瓦質土器の鍋328の特徴から14世紀頃と考えられる。(西村)

掘立柱建物4 (第99・100図、図版32～34・59)

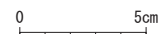
4区の北西、整地面1の中央に位置し、掘立柱建物2・3、柱穴列15・16と重複する。建物を構成する南辺と西辺のP1～6を確認した。規模は2間×3間で、桁行6.82m、梁行3.76m、面積は25.77㎡と復元される。主軸はN-34°-Eである。柱間寸法は178～269cmとやや不規則である。柱穴の掘り方は円形が多く、径21～33cm、深さ35cmである。P4から瓦質土器の羽釜329、P5から勝間田焼の椀330、掘立柱建物3・4周辺で火打金の可能性がある鉄器M18が出土した。時期は14世紀後半で、配置状況から掘立柱建物2・3より新しく、柱穴列15・16より古いと考えられる。(米田)

掘立柱建物5 (第101図、図版32・34)

4区北西の整地面1の南側に位置し、掘立柱建物3・6～8、柱穴列12・14、土坑14・15・17と重複する。また、掘立柱建物2の南西側に隣接するが、両者の間隔が狭いところでは50cm程度しかないことから、同時併存はしていないも

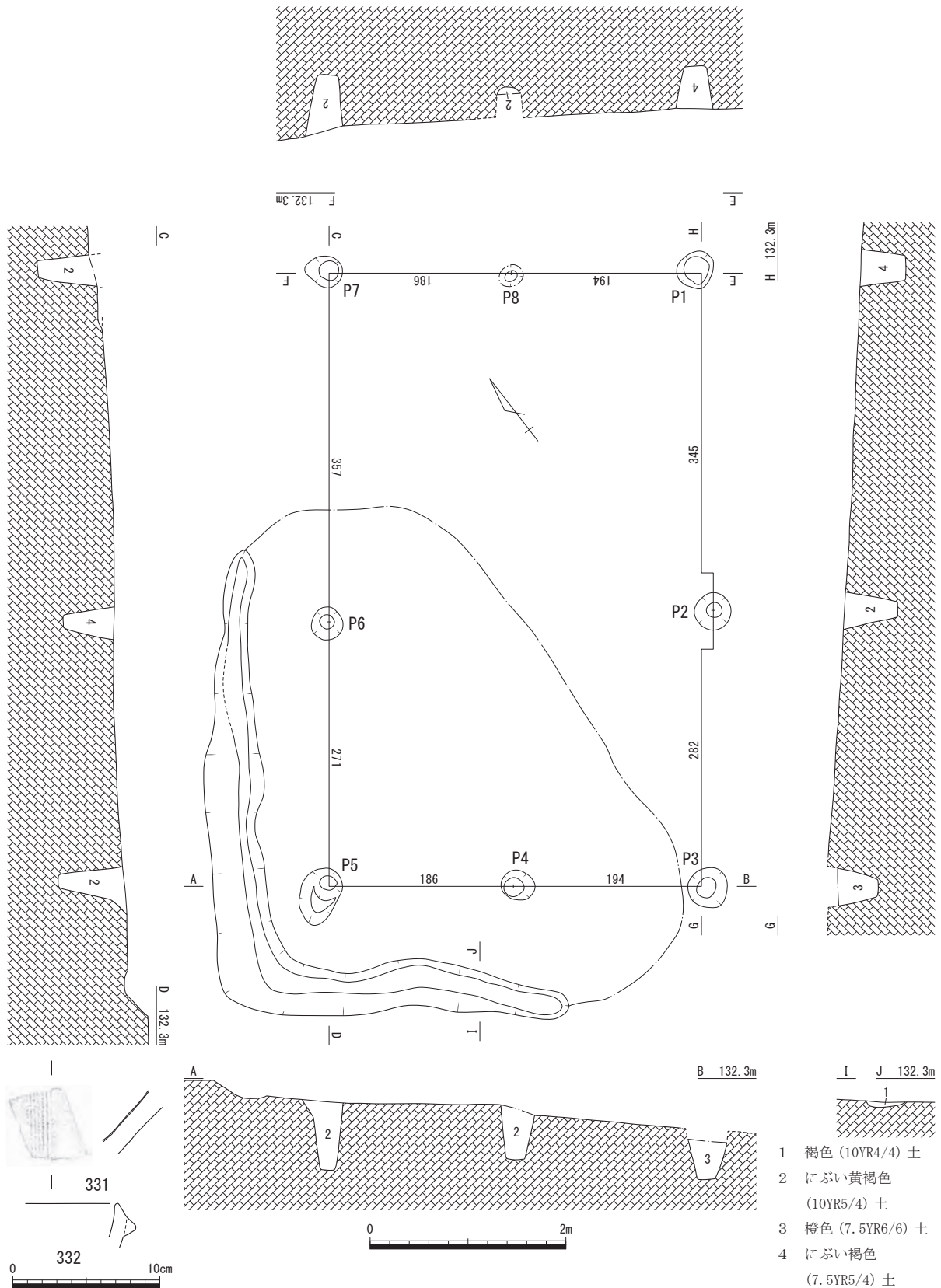


第99図 掘立柱建物4 (1/60)、出土遺物 (1/4)



第100図 掘立柱建物3・4周辺出土遺物 (1/3)

のと考えられる。桁行2間×梁行2間の側柱建物で、主軸はN-38°-Eである。建物の規模は、桁行6.28m、梁行3.80m、面積23.96㎡である。柱間距離は桁271~357cm、梁186~194cmで、柱穴は径32~39cm、最大深70cmである。西側隅には建物をめぐる溝が一部残存している。建物埋土

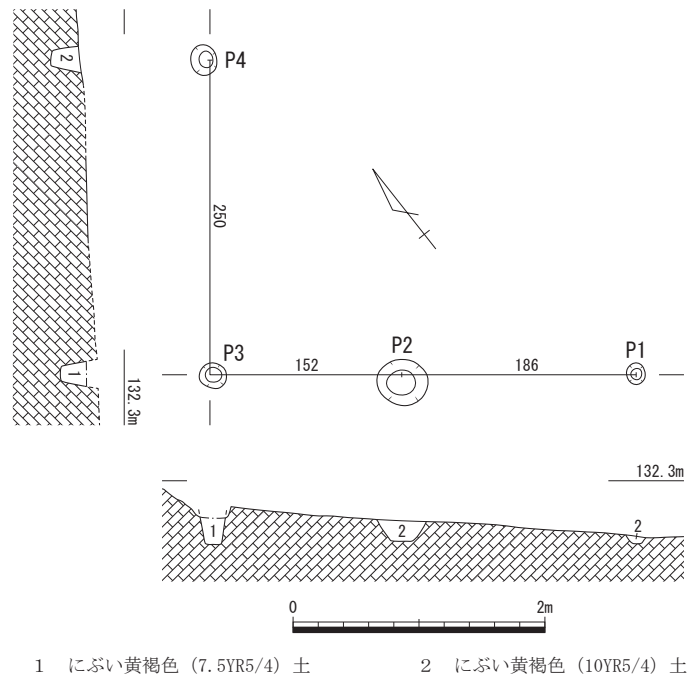


第101図 掘立柱建物5 (1/60)、出土遺物 (1/4)

から備前焼播鉢 331、P 3 から瓦質土器羽釜 332、小片のため掲載しえなかったが瓦質土器も出土している。出土遺物から時期は 14 世紀頃と考えられる。(山口)

掘立柱建物 6 (第 102 図、図版 32・34)

4 区の北西、整地面 1 の南側に位置し、掘立柱建物 5 と重複する。建物の南辺と西辺の P 1 ～ 4 を確認した。規模は 2 間 × 1 間以上で、桁行 3.38 m、梁行 2.50 m、面積は 8.47 m² であるが、本来は桁・梁ともに大きかった可能性もある。主軸は N - 53° - E である。遺物は出土していない。柱穴の埋土から、時期は中世で、P 3 の切り合いから掘立柱建物 5 より古い可能性がある。(米田)



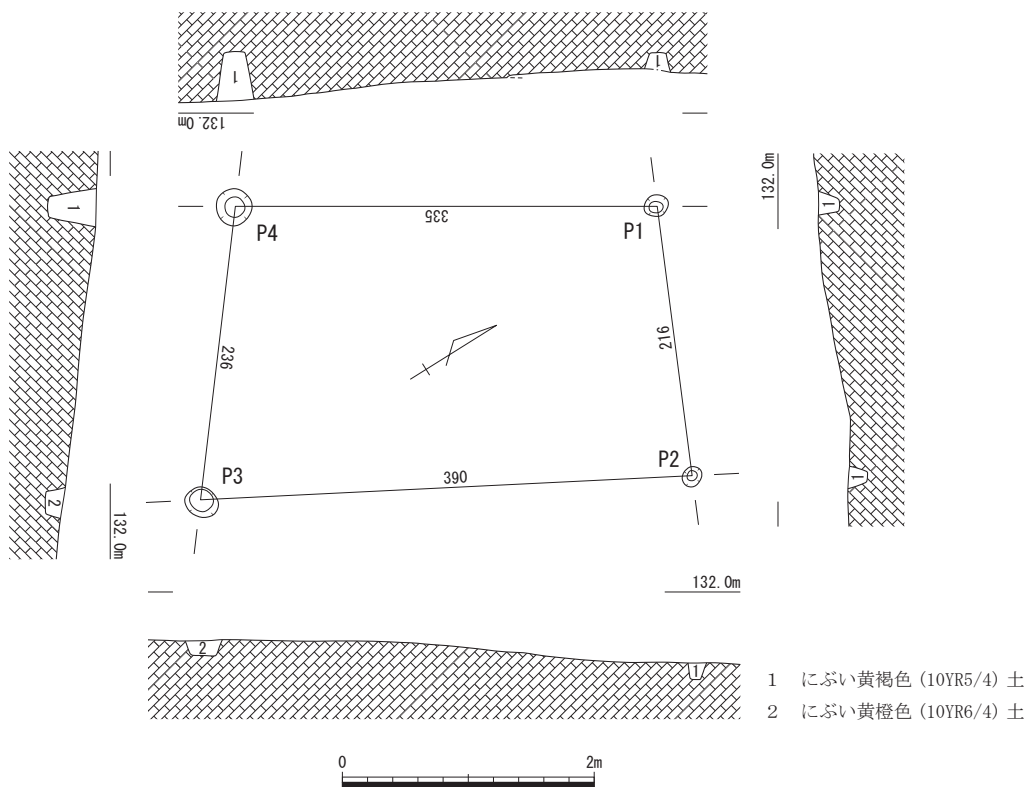
1 にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) 土 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土

第 102 図 掘立柱建物 6 (1/60)

掘立柱建物 7

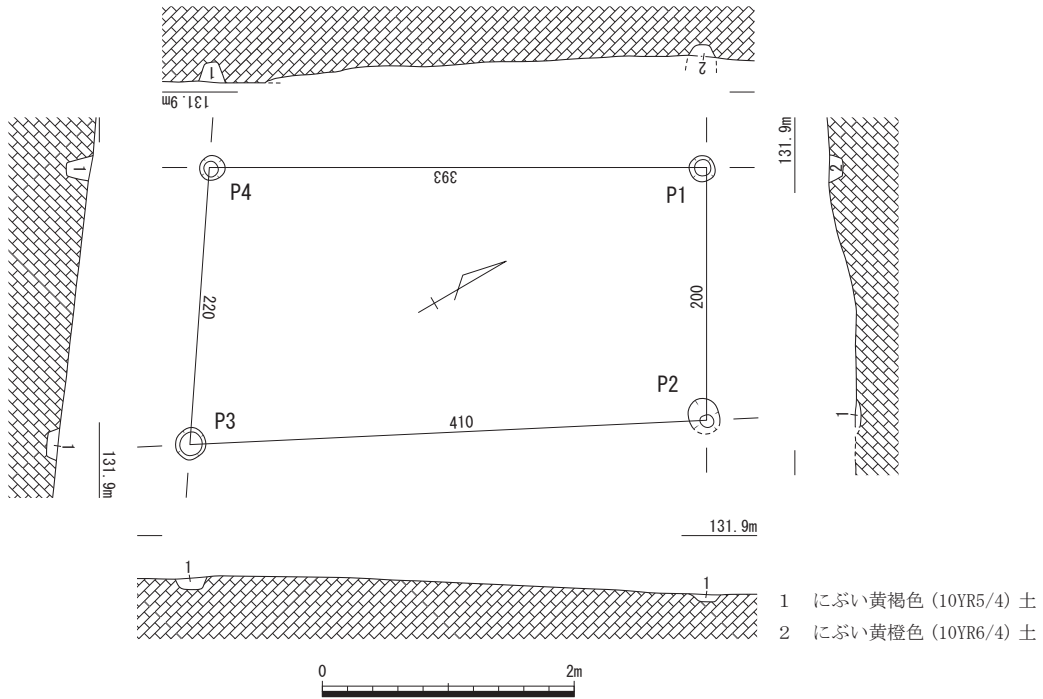
(第 103 図、図版 32・34)

4 区の北西、整地面 1 の南側に位置し、掘立柱建物 5・8 と重複する。4 本の柱穴で構成される。規模は 1 間 × 1 間で、桁行 3.90 m、梁



1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土
2 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 土

第 103 図 掘立柱建物 7 (1/60)



第104図 掘立柱建物8 (1/60)

行 2.36 m、面積は 8.12 m² である。主軸は N-30°-E である。柱穴から遺物は出土していない。柱穴の埋土から時期は中世で、配置状況から掘立柱建物 5 より新しく、掘立柱建物 8 より古いと推測される。(米田)

掘立柱建物 8 (第104図、図版 32・34)

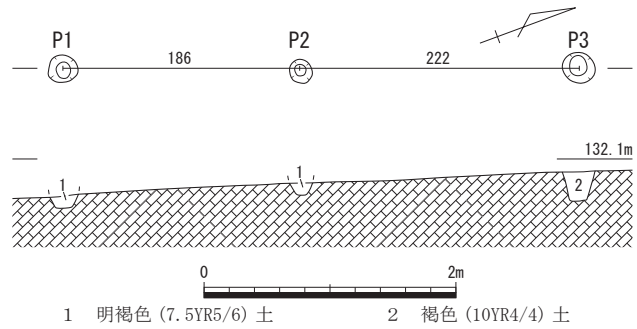
4区の北西、整地面 1 の南側に位置し、掘立柱建物 5・7 と重複する。4本の柱穴で構成される掘立柱建物である。規模は 1間×1間で、桁行 4.10 m、梁行 2.20 m、面積は 8.48 m² である。主軸は N-27°-E である。出土遺物はない。本建物は掘立柱建物 9 と重複し、主軸や規模が近いことから、時期は中世で、掘立柱建物 7 の次に造られた可能性がある。(米田)

柱穴列 7 (第105図、図版 34)

4区の北西、整地面 1 の中央に位置し、段状遺構 30 を切る。3本の柱穴 (P1~3) で構成される。残存する規模は 2間、全長 4.08 m であるが、柱穴列 7~21 と同様に掘立柱建物の一部である可能性がある。主軸は N-20°-E である。時期は埋土から中世と考えられる。(米田)

柱穴列 8 (第106図)

3区の南西端、整地面 1 の中央に位置し、柱穴列 7・9 の間にある。4本の柱穴からなる。規模は 3間で、全長 6.33 m である。主軸は N-21°-E を示す。柱間は 161~285 cm と不規則である。埋土から時期は中世と捉えられる。(米田)



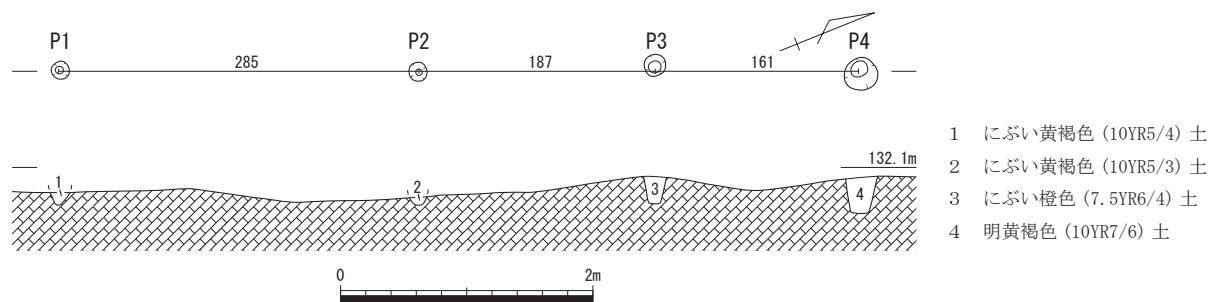
第105図 柱穴列7 (1/60)

柱穴列9 (第107図)

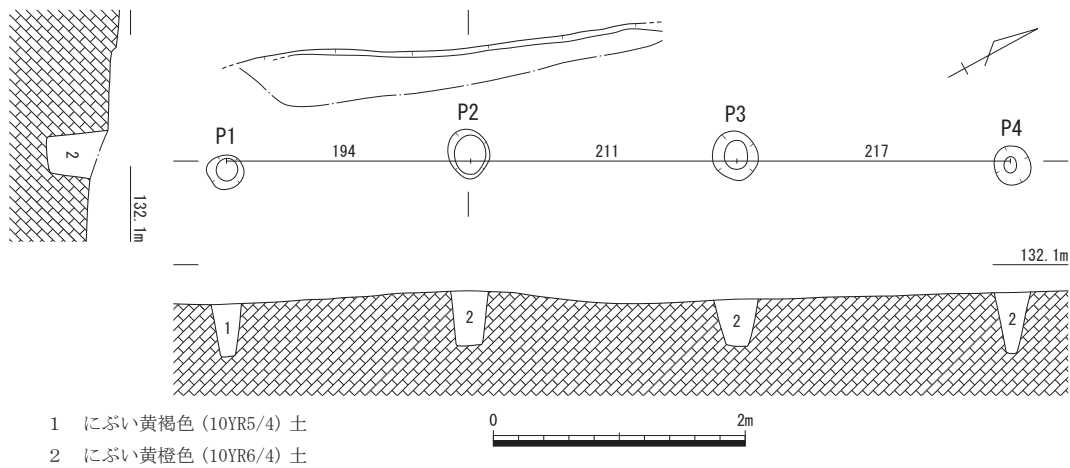
3・4区西側にまたがる整地面1中央で見つかった。P1～4の柱穴が並ぶ。主軸はN-29°-Eに向き、全長6.33m、柱間寸法は194～217cmである。一部床面が残存する。近接する遺構としては柱穴列8と柱穴列10が挙げられる。主軸方向や全長規模等が比較的類似しており、これら遺構の前後の時期に位置付けられる可能性がある。柱穴列10の時期を踏まえ、12世紀頃と考えられる。(西村)

柱穴列10 (第108図)

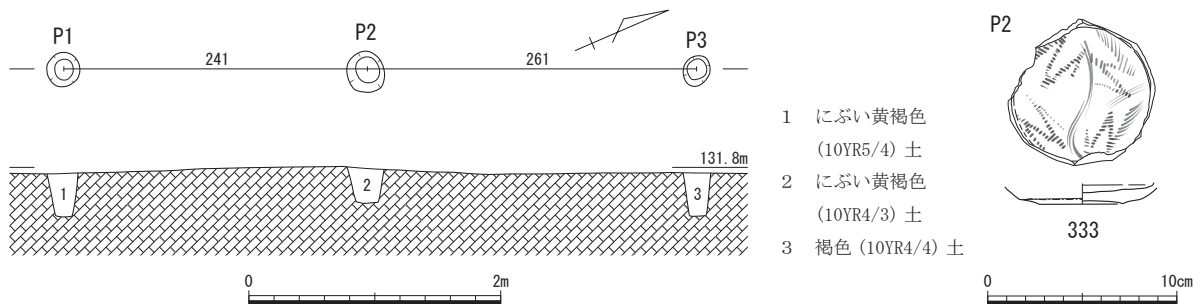
3区の南西端、整地面1の中央に位置し、柱穴列9の東隣にある。P1～3の柱穴は直線的に並ぶ。規模は2間で、全長5.02mである。主軸はN-23°-Eを指す。柱間は250cm前後で等間隔に近い。中央のP2から同安窯系の青磁皿333が出土した。333の内面には片切り彫りによる文様や櫛目のジグザグ状の点描文が認められる。時期は中世前半の12世紀前後と考えられる。(米田)



第106図 柱穴列8 (1/60)



第107図 柱穴列9 (1/60)



第108図 柱穴列10 (1/60)、出土遺物 (1/4)

柱穴列 11 (第 109 図、図版 33・34)

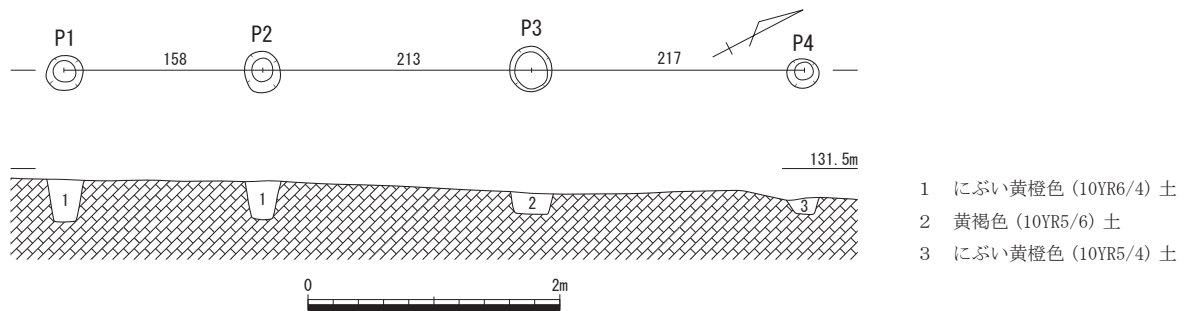
3 区の南西と 4 区北西の境、整地面 1 の中央に位置し、掘立柱建物 2・3 と重複する。直線的に並ぶ 4 本の柱穴 (P 1～4) で構成される。規模は 3 間で、全長 5.88 m である。主軸は N-27°-E である。柱間は 161～285 cm と不規則である。埋土から時期は中世と推測される。(米田)

柱穴列 12 (第 110 図、図版 32～34、55)

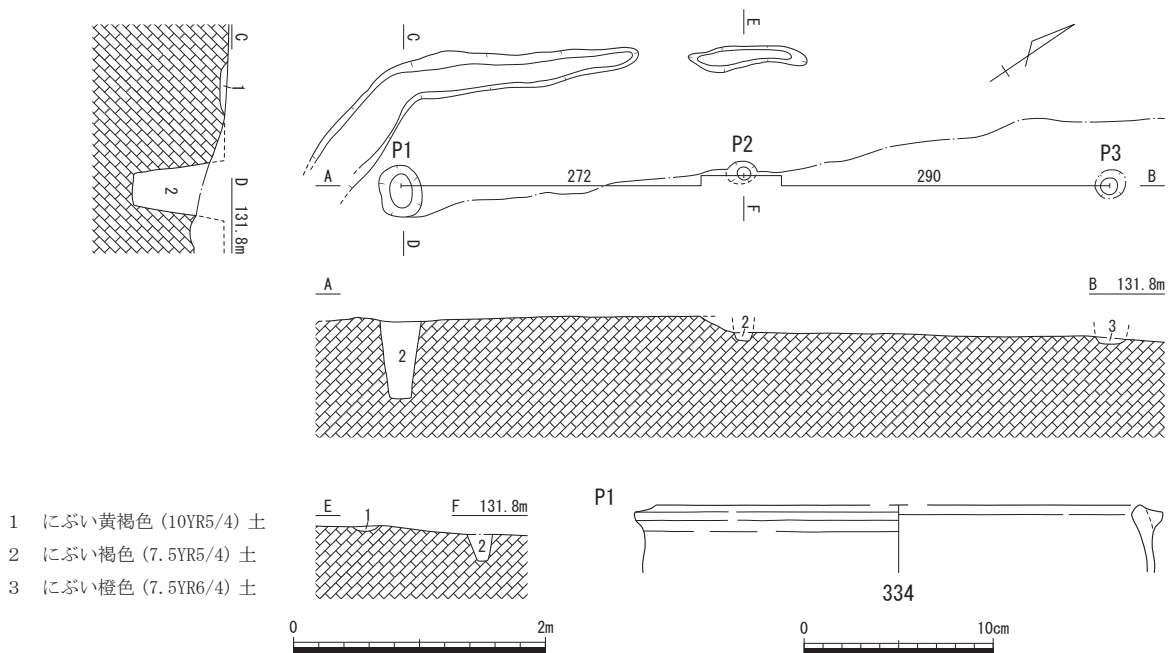
4 区北西の整地面 1 の中央西寄りに位置する。柱穴 P 1～3 が並び、南西側に溝がめぐる。掘立柱建物 2 に切られており、柱穴の位置が重複することから、掘立柱建物 2 の建て替え前に存在した建物の一部である可能性もある。規模は 2 間で、全長 5.62 m、柱間寸法は 272 cm、290 cm、主軸は N-35°-E である。遺物は P 1 から瓦質土器羽釜 334 が出土している。この他に瓦質土器片、土師器片が出土しているが小片のため図化しえなかった。出土遺物から時期は 14 世紀頃と考えられる。(山口)

柱穴列 13 (第 111 図、図版 32～34)

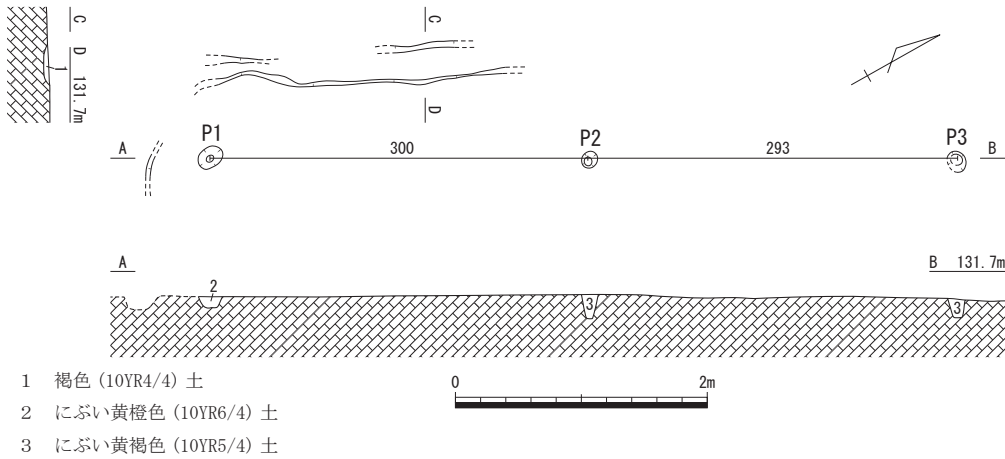
4 区北西の整地面 1 の中央に柱穴 P 1～3 が並び、南西側に溝が一部残存する。掘立柱建物 2・3 と重複しており、本来は建物であった可能性がある。規模は 2 間で、全長 5.93 m、柱間寸法は 293 cm、300cm、主軸は N-30°-E である。遺構配置や埋土から時期は中世と考えられる。(山口)



第 109 図 柱穴列 11 (1/60)



第 110 図 柱穴列 12 (1/60)、出土遺物 (1/4)

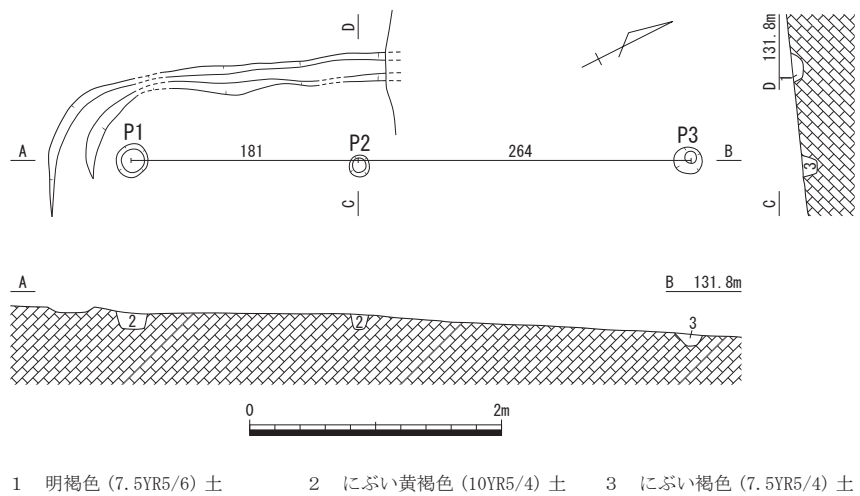


第111図 柱穴列13 (1/60)

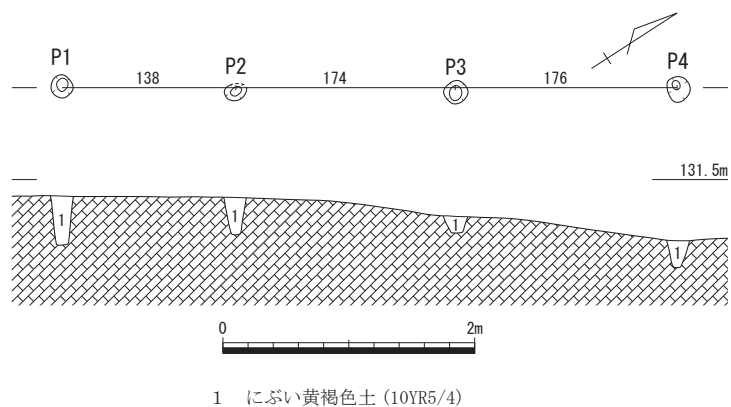
柱穴列14

(第112図、図版32)

4区北西の整地面1の中央南寄りに柱穴P1～3が並び、南西側に溝が一部残存する。掘立柱建物2・3・5・7・8と重複しており、本来は南東側へ展開する掘立柱建物の可能性がある。掘立柱建物4や柱穴列13、土坑15にも近接するため、同時併存はしていないと考えられる。規模は2間で、全長4.45m、柱間寸法は181cm、264cm、主軸はN-28°-Eである。遺物は柱穴から土師器片が1点出土したが、小片のため実測しえなかった。遺物や遺構配置、埋土から時期は中世と考えられる。(山口)



第112図 柱穴列14 (1/60)



第113図 柱穴列15 (1/60)

柱穴列15 (第113図、図版32)

4区の北西、整地面1の中央に位置し、掘立柱建物3と重複する。直線的に並ぶ柱穴P1～4を確認したが、全体は明らかでない。規模は3間で、全長4.88mである。主軸はN-33°-E、柱間寸法

は175 cm前後が多い。遺物は認められないが、時期は中世で、配置状況から掘立柱建物3よりも新しいと推測される。(米田)

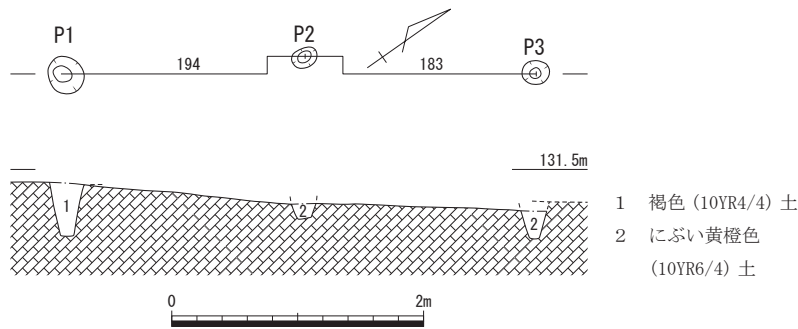
柱穴列 16 (第114図、図版32)

4区の西、整地面1の中央に位置し、柱穴列17と重複する。柱穴P1～3は直線的に並ぶ。現状では規模は2間、全長3.77 mと復元される。主軸はN-35°-Eである。柱間寸法は190 cm前後である。出土遺物はないが、柱穴の埋土から時期は中世と考えられる。(米田)

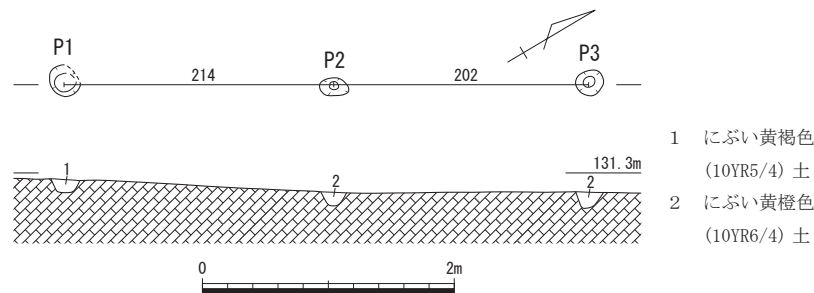
柱穴列 17 (第115図、図版32)

3区の南西と4区北西の境、整地面1の中央に位置する。3本の柱穴(P1～3)は直線的に並ぶ。

規模は2間で、全長4.16 mである。主軸はN-30°-Eを指す。柱間は210 cm前後とほぼ等しい。埋土から時期は中世で、配置状況から掘立柱建物4～6より新しいと推測される。(米田)



第114図 柱穴列16 (1/60)



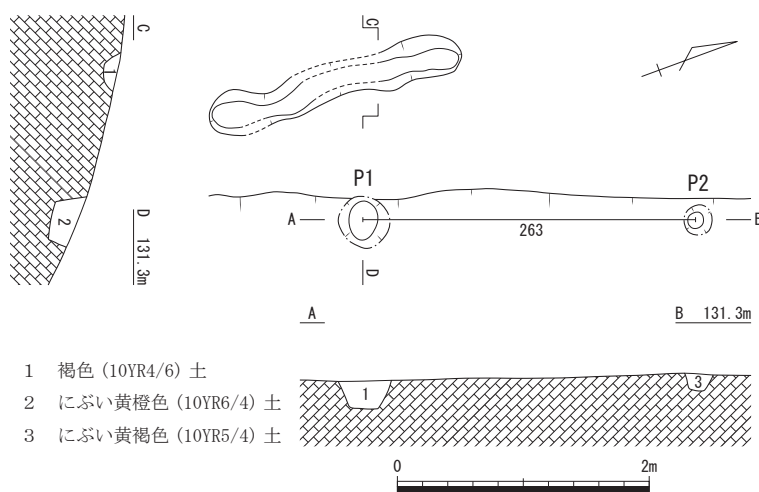
第115図 柱穴列17 (1/60)

柱穴列 18 (第116図)

4区北西の整地面1の東端に柱穴P1・2が並び、南西側に溝が一部残存する。この柱穴列は整地面1端部の急斜面にかろうじて残存しているような状態であり、本来は北東側に展開する掘立柱建物であった可能性がある。おそらく旧地形の斜面を削平して整地面2を造る際に、遺構の大部分が失われたとみられる。規模は1間で全長2.63 m、主軸はN-21°-Eである。遺物は出土していないが、遺構配置や埋土から時期は中世と考えられる。(山口)

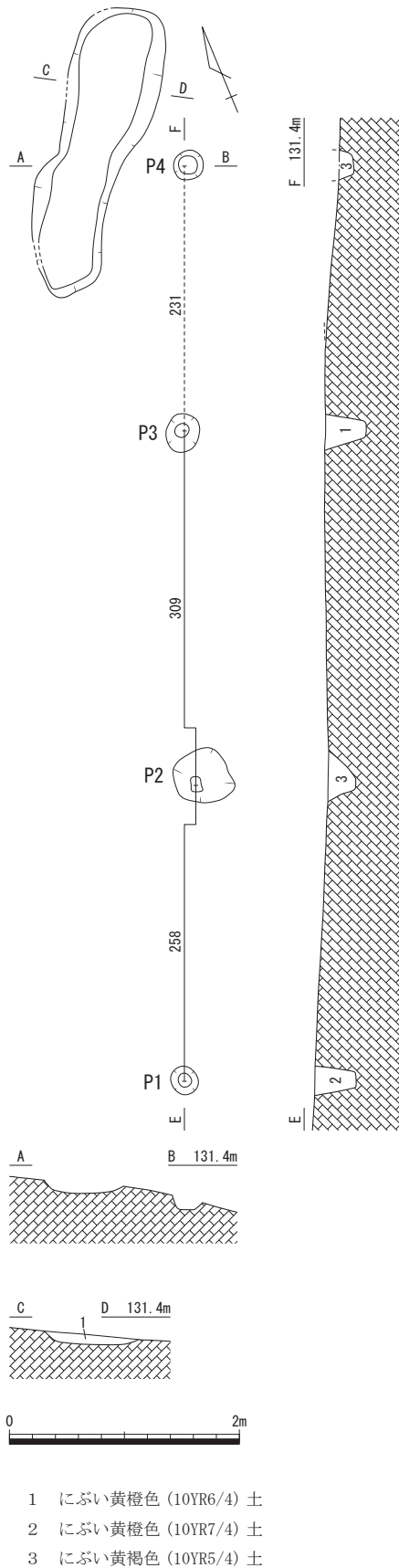
柱穴列 19 (第117図)

4区の整地面1東端で見つかった。P1～4の柱穴が並び、溝を伴う。主軸はN-21°-Eに向き、柱間寸法は231～309cmである。斜面上



- 1 褐色(10YR4/6)土
- 2 にぶい黄橙色(10YR6/4)土
- 3 にぶい黄褐色(10YR5/4)土

第116図 柱穴列18 (1/60)



第117図 柱穴列 19 (1/60)

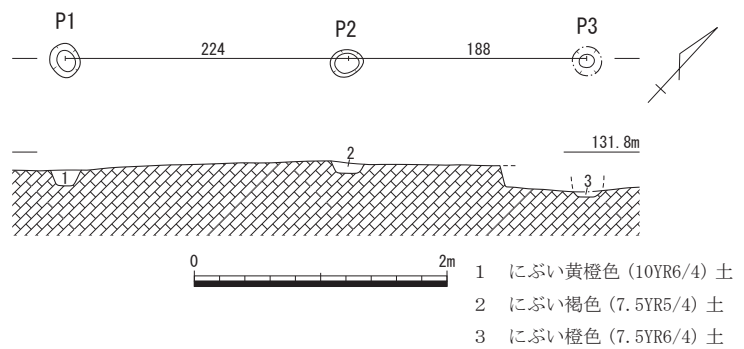
方側には幅約80cm、深さ約10cmの壁体溝を伴う。東側は整地面2の造成によって急斜面を呈するが、本遺構が整地面2の造成以前に存在した場合、建物として柱穴列が以東に続いていた可能性がある。(西村)

柱穴列 20 (第118図)

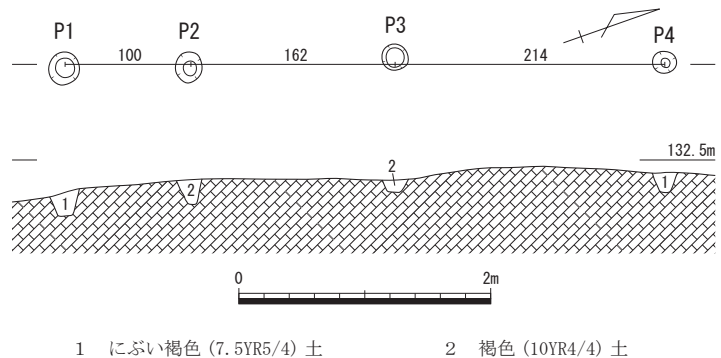
4区の西端、整地面1の南端に位置し、掘立柱建物5の南東、柱穴列19の南西隣にある。3本の柱穴(P1~3)で構成され、主軸はN-48°-Eである。規模は2間で、全長4.12mである。埋土から時期は中世と考えられ、配置状況から柵や塀であったと推測される。(米田)

柱穴列 21 (第119図)

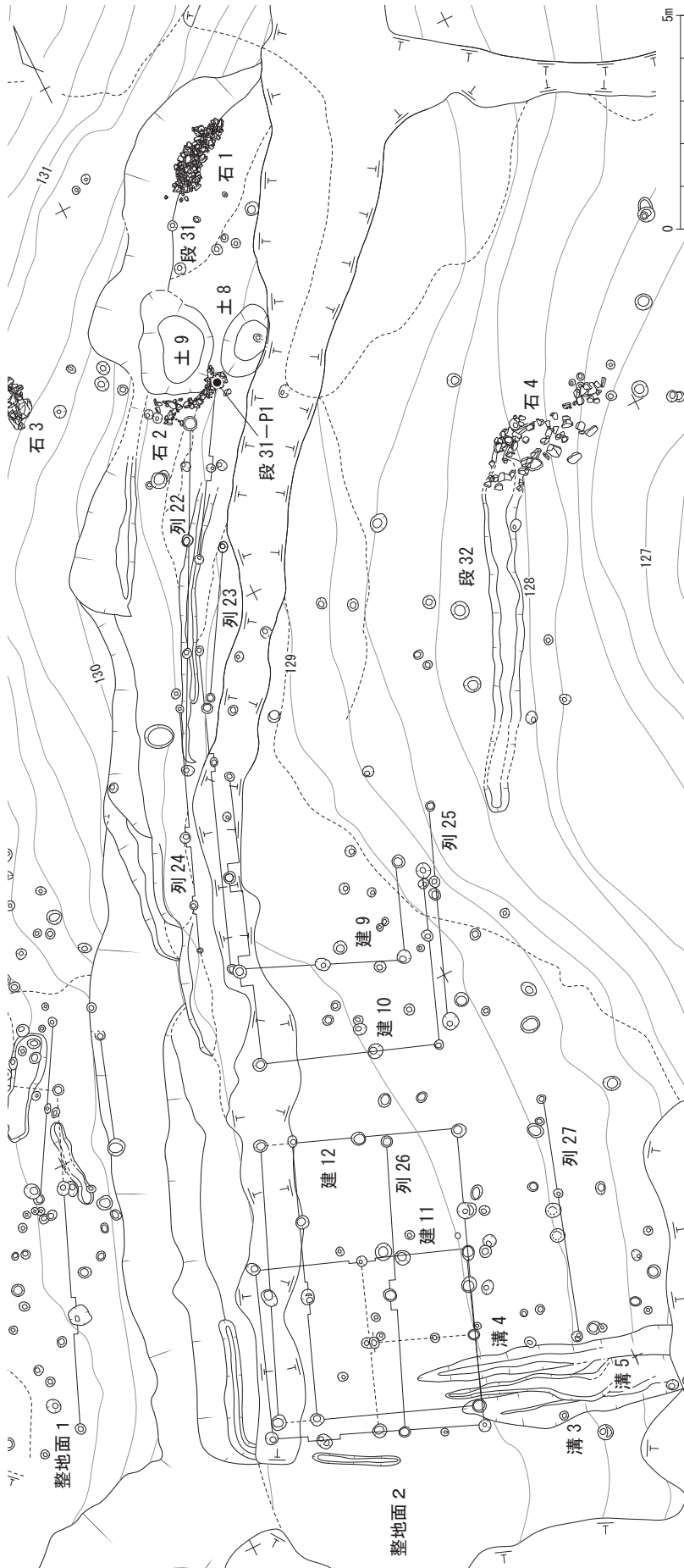
4区の西端、整地面1の南端に位置し、掘立柱建物5の南、柱穴列20の西隣にある。直線的に並ぶP1~4で構成される。主軸はN-21°-Eである。現状では、規模は3間で、全長4.76mであるが、P2を省いた2間であった可能性も残る。埋土から時期は中世と考えられる。配置状況から西の調査区外に続く掘立柱建物の東辺にあたる可能性がある。(米田)



第118図 柱穴列 20 (1/60)



第119図 柱穴列 21 (1/60)



第120図 整地面2遺構配置図(1/150)

整地面2 (第93～95・120～122図、写真11、図版30・31・35・36・55・59)

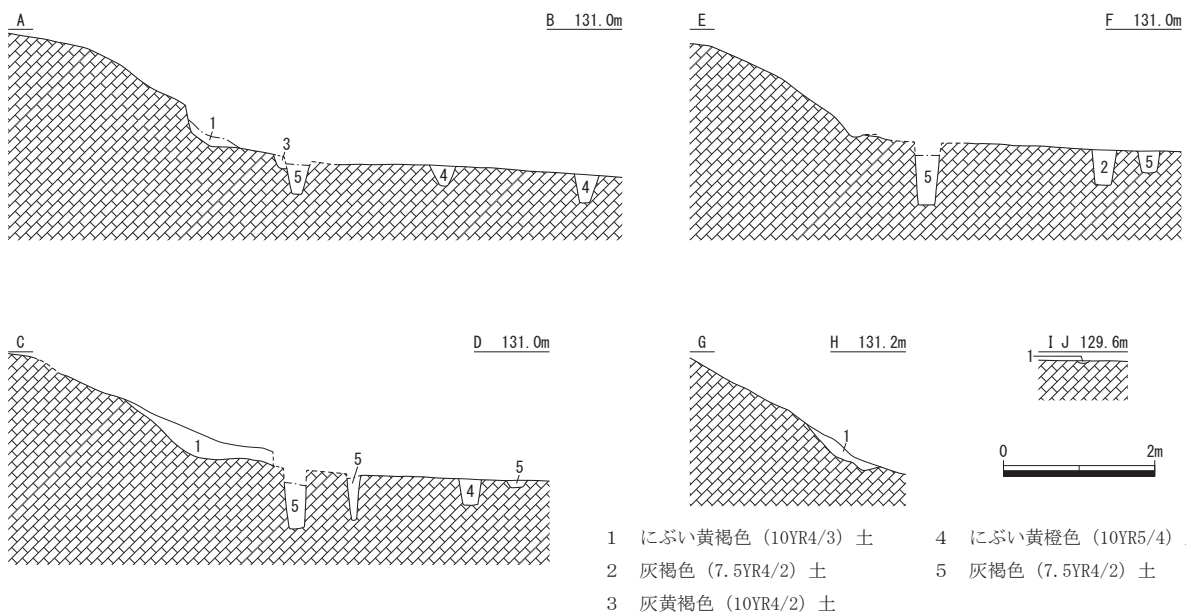
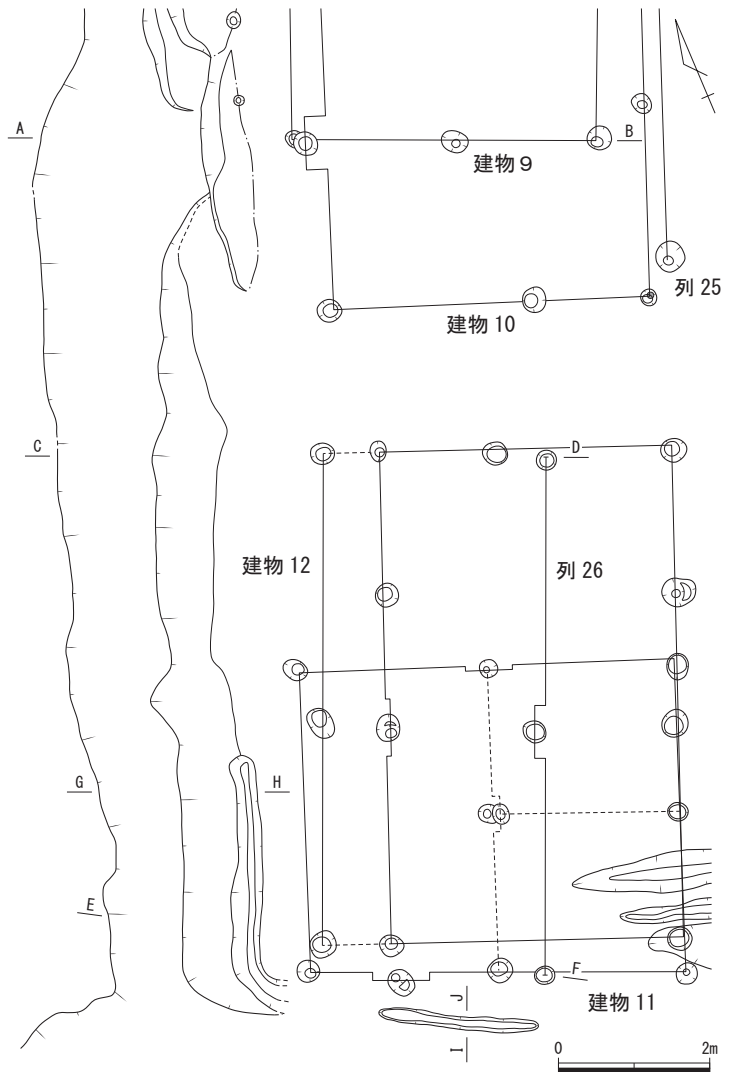
3・4区中央で確認した整地面で、整地面1・3の間に造られた。整地面2は3区南側の斜面や谷部の包含層1の弥生時代～古代の堆積土(第196図－第10・12層)を削平し、標高129mあたりを平坦に整地している。

整地面2の北端は後世の削平が著しいが、段状遺構31の範囲に近いと考えられる。南端は掘立柱建物11・12や溝3付近と考えられ、上方の西端は柱穴列18がある標高130mあたりから掘削されている。西端の掘削にあたっては、柱穴列24の西側のように段状遺構状の掘削面が斜めに連続して認められたことや、掘立柱建物11・12の西側のように掘削面が少し西に張り出すことから、整地面2の掘削の単位や拡張を示しているのかもしれない。一方、東端は整地面3との間が後世の改変が著しいために厳密ではないが、標高128m付近の削平ラインや段状遺構32より上

の標高 128.5 mあたりに相当すると考えられる。これらのことを勘案すると、整地面 2 の規模は南北 33 m、東西 13 m になると見込まれる。

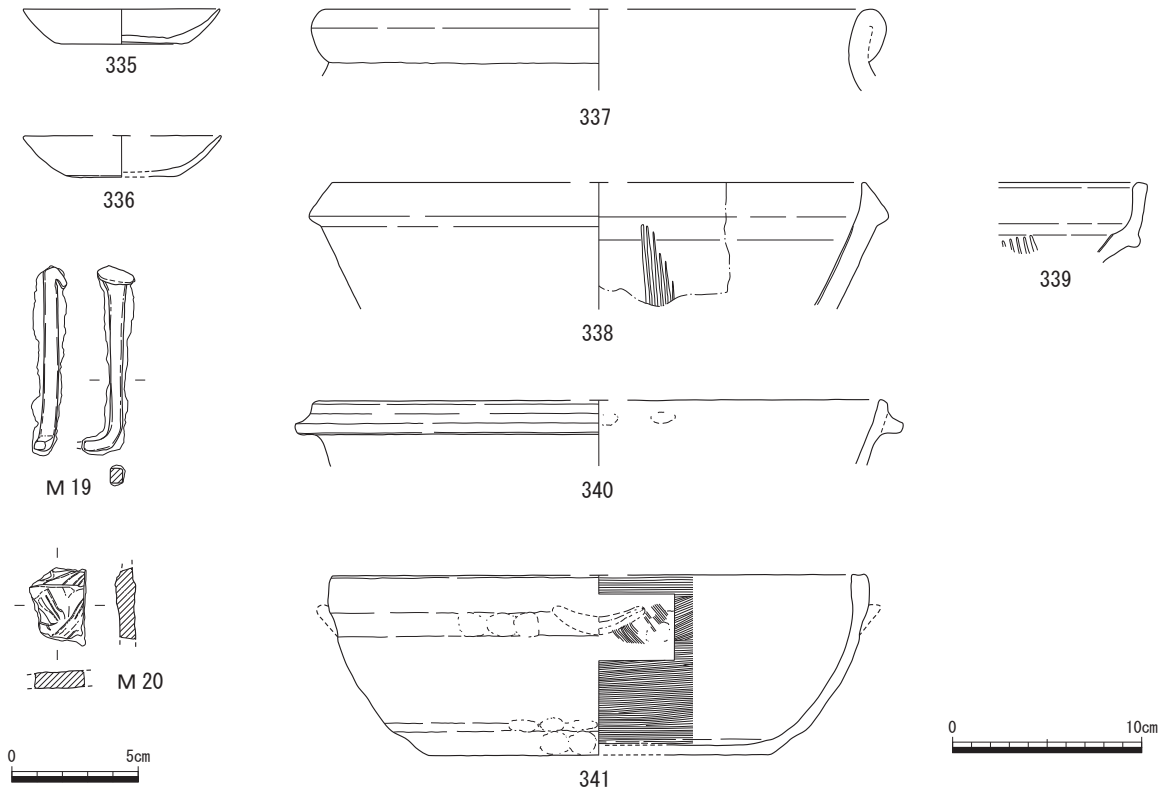
整地面 2 では、北側に段状遺構 31 が配置され、鏡像 M 24 が埋納された P 1 や集石 1 が伴うほか、段状遺構 31 の廃絶後には集石 2 や土坑 8・9 が造られた。中央には掘立柱建物 9・10 や柱穴列 22～25、南側は掘立柱建物 11・12、柱列穴 26・27、溝 3～5 が配置された。このうち、配置状況や切り合い関係から、掘立柱建物 9→10、11→12 の順で建て替えられた可能性がある。さらに、建物の構造や主軸から、掘立柱建物 9・11、掘立柱建物 10・12 は併存したことが想察される。

整地面 2 では掘り下げ中や遺構検出で、土師器の皿 335・336、備前焼の甕 337、播鉢 338・339、瓦質土器の羽釜 340、鍋 341、鉄釘 M 19、銅滓 M 20 が出土した。338 は IV A 期、



第 121 図 整地面 2 南半 (1/100)

337・339はIVB期に分類される。340は14世紀後半の可能性がある。これらの遺物から、整地面2は14世紀後半から15世紀に機能したと考えられる。(米田)



第122図 整地面2出土遺物(1/4・1/3)



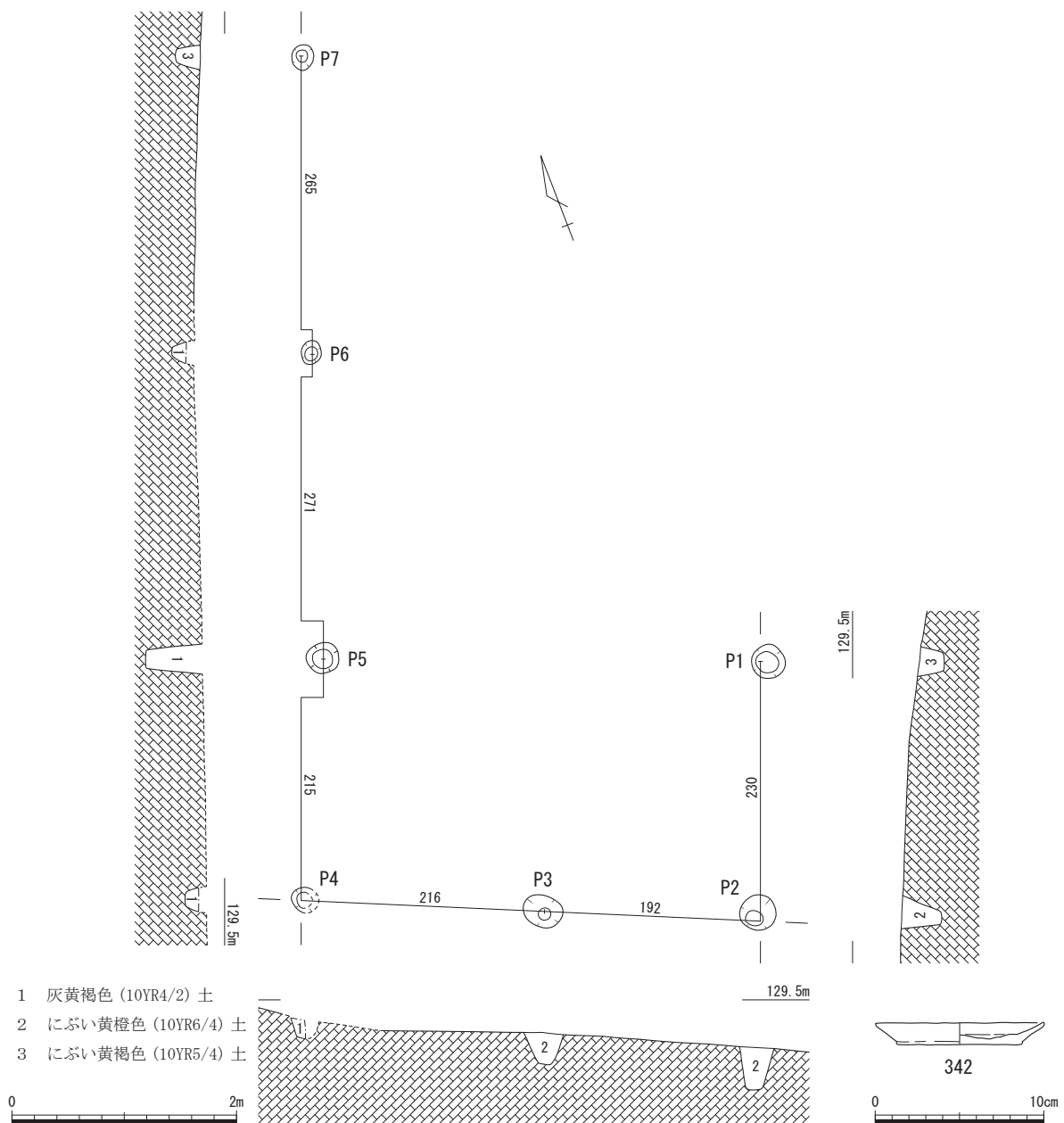
写真11 整地面1・2オルソ画像(1/300) [※白線は加工]

掘立柱建物9 (第123図、図版35・36)

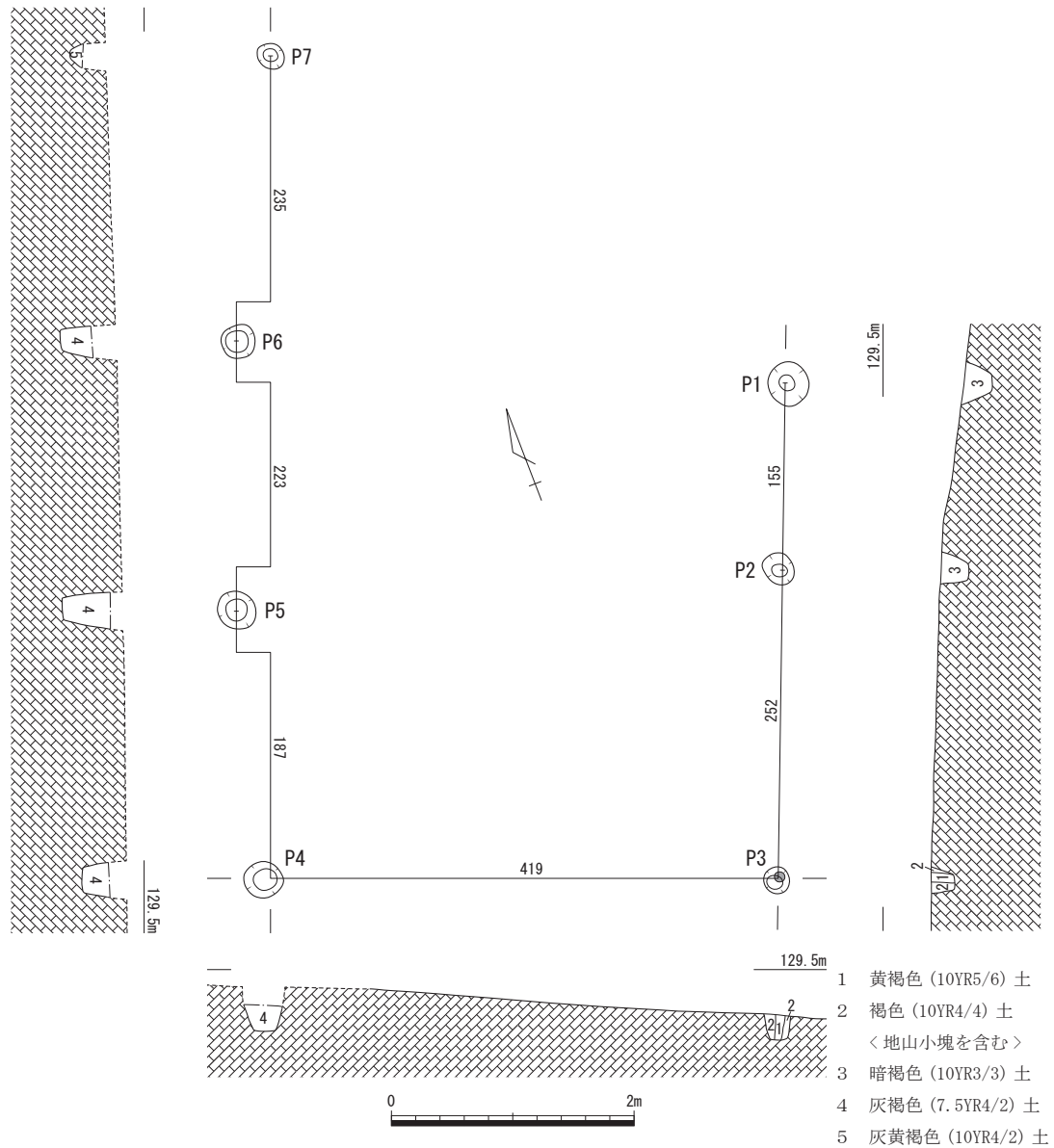
3区の南端中央、整地面2の中央に位置し、掘立柱建物10と重複する。南・西辺では7本の柱穴(P1～7)を確認したが、北・東辺は地形が下がるため、柱穴が残存しておらず、全体は明らかでない。現状の規模は2間×3間で、桁行7.51m、梁行4.08m、面積は30.44㎡である。主軸はN-22°-Eで、南北棟である。柱間寸法は桁が215～271cm、梁が192～216cmで、桁はやや不規則であるが、梁はほぼ等間隔に近い。柱穴のうち、P5は掘立柱建物12に踏襲されている可能性がある。深さはP2が36cmで最も深い。P3から土師器の皿342が出土した。342は二次的な被熱を受けている。時期は中世で、配置状況から掘立柱建物10より古いと推測される。(米田)

掘立柱建物10 (第124図、図版35・36)

3区の南端中央、整地面2の南端に位置し、掘立柱建物9と重複する。現状では7本の柱穴(P1



第123図 掘立柱建物9 (1/60)、出土遺物 (1/4)



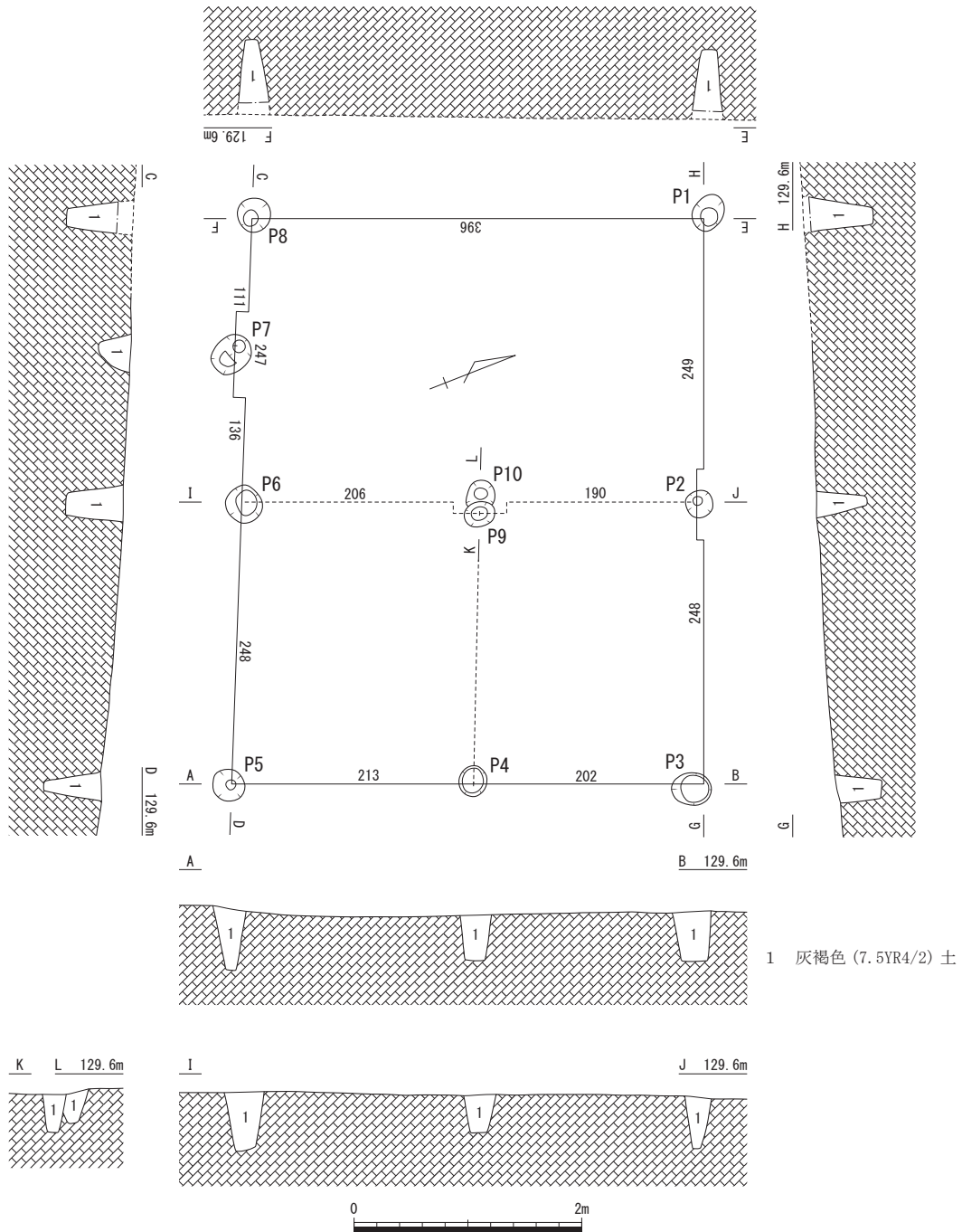
第124図 掘立柱建物10 (1/60)

～7)を確認したが、北辺と東辺の一部は地形が下がるため、柱穴が残存していなかった。全体は明らかでないが、現状の規模は1間×3間で、桁行6.45m、梁行4.19m、面積は29.18㎡である。主軸はN-22°-Eで、南北棟である。桁の柱間寸法は155～252cmで不規則である。柱穴は円形や不整形で、径23～36cm、深さは検出面から20～50cmと様々である。P3は柱痕が残っていたが、柱痕の径が約7cmと細い。埋土から時期は中世で、配置状況から掘立柱建物9より新しい可能性がある。

(米田)

掘立柱建物11 (第125図、図版35・36)

4区の北端中央、整地面2の中央に位置し、掘立柱建物12と重複する。P1～6・8の柱穴で構成される側柱建物あるいはP9・10を加えた総柱建物である。規模は2間×3間で、桁行4.97m、梁行4.15m、面積は20.22㎡である。主軸はN-67°-Wで、本遺跡では唯一の南北棟の建物である。P1～6・8は径24～33cm、深さ40～60cmで、いずれもしっかりしている。柱間寸法は桁247～

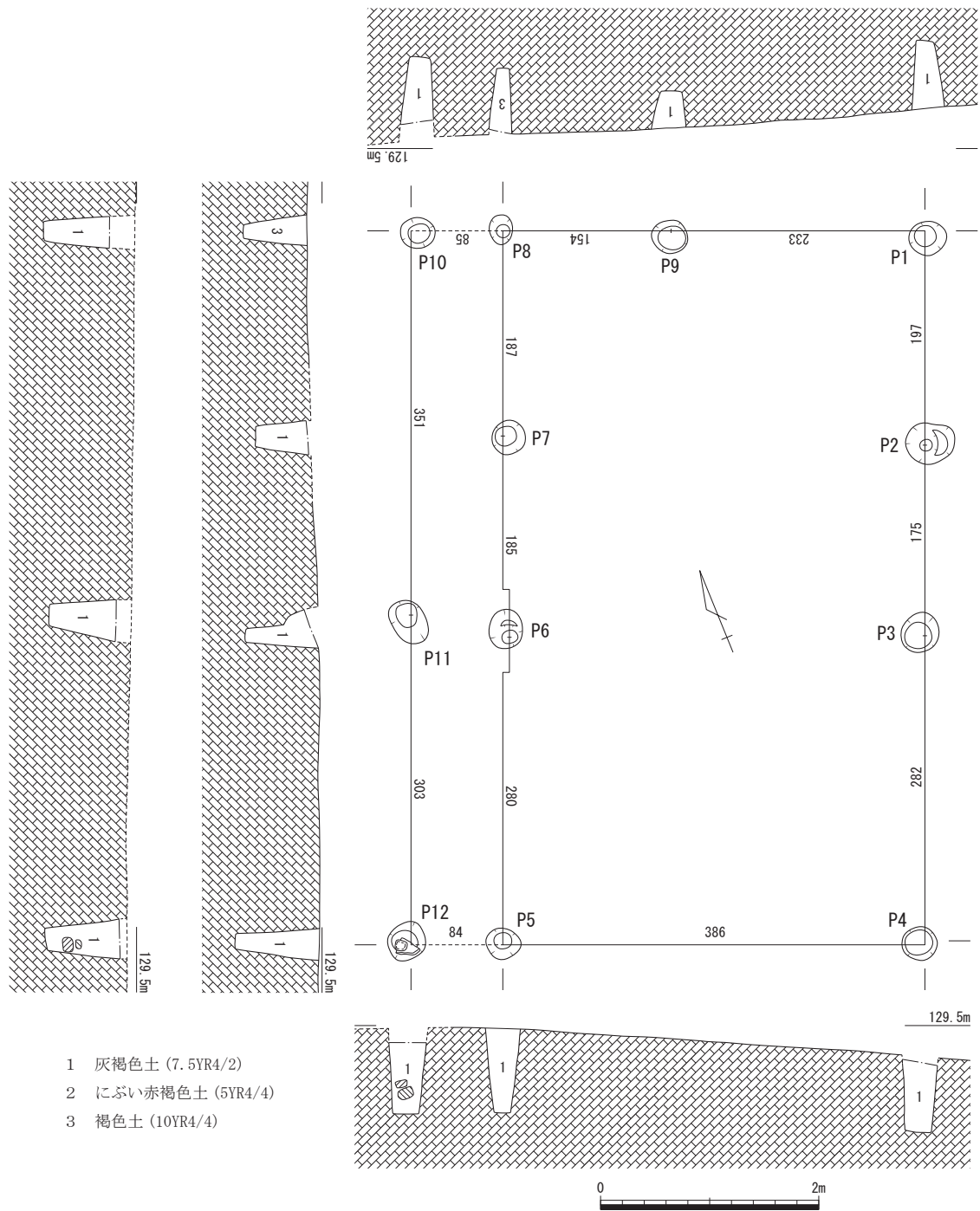


第125図 掘立柱建物11 (1/60)

248 cm、梁 202 ~ 213 cmで、桁・梁それぞれ等間隔である。P 7はP 6・8間の補助的な柱、建物中央のP 9・10は間仕切の柱と考えられる。出土遺物はP 2・4から備前焼、P 6から土師器と瓦質土器、P 10から土師器が出土したが、細片のために図示できなかった。時期は出土遺物や柱穴の埋土から中世と考えられ、配置状況から掘立柱建物12より古いことが推測される。(米田)

掘立柱建物12 (第126・127図、図版35・36・41)

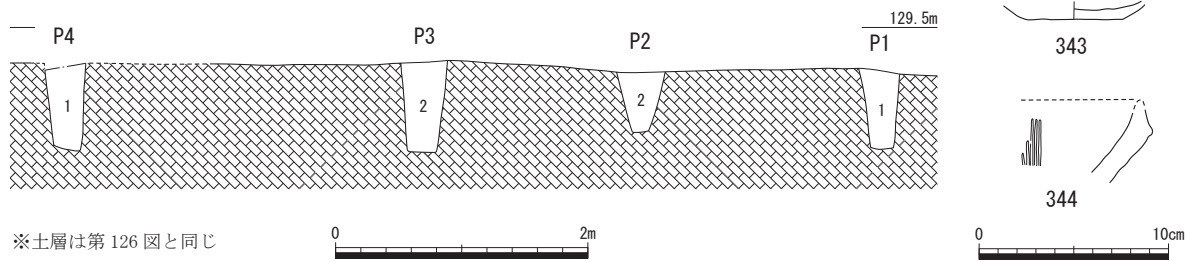
4区の北端中央、整地面2の中央に位置し、掘立柱建物11と重複する。柱穴P 1~12で構成される西廂付側柱建物、あるいは西面に塀を伴う掘立柱建物と考えられる。P 10~12を廂と仮定した場合、規模は2間×3間と1面で、桁行6.54 m、梁行4.72 m、面積は30.80 m²である。又は、P 10



第126図 掘立柱建物12 (1/60)

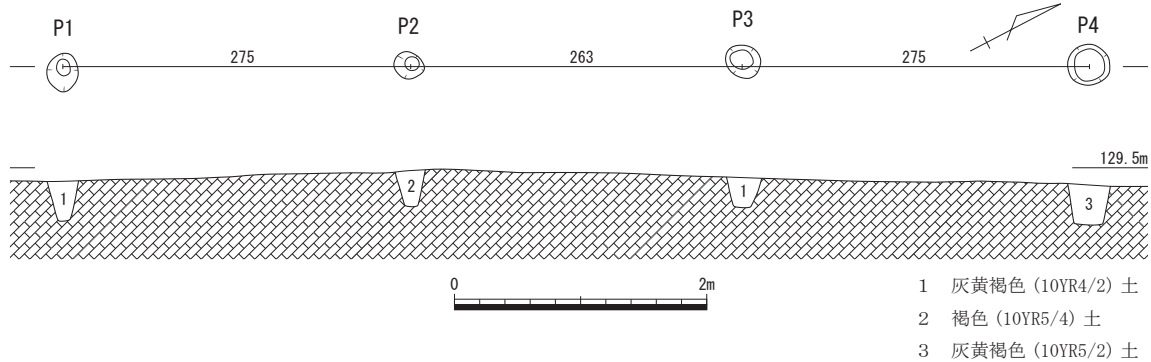
～12が塀で、P1～10で掘立柱建物を構成する場合、規模は2間×3間で、桁行654cm、梁行387cm、面積は25.31㎡である。いずれにしても、主軸はN-22°-Wで、南北棟である。柱間寸法は桁175～282cm、梁154～233cmとやや不規則である。桁行は南側の柱間がやや広く、中央がやや狭い。また、梁行は北辺が2間であるが、南辺は1間である。柱穴P1～9は径25～45cm、深さ34～75cmと全体的にしっかりしている。

一方、P10～12は西面に付く廂、あるいは塀を構成するものと考えられる。ただ、廂とする場合、西面は山側上方を向き、整地面2の法面が近いので、検討の余地がある。柱間寸法は303～351cmと



※土層は第126図と同じ

第127図 掘立柱建物12断面(1/60)、出土遺物(1/4)



第128図 柱穴列22(1/60)

等間隔に近い。これらの柱穴は径28～42cm、検出面からの深さ60～67cmである。このうち、P12は底面から15cmほど上で2個の石が見つかったが、根石とは考えにくい。

遺物は、P3から土師器の小皿343、備前焼の播鉢344、P9から青磁の細片が出土した。344はIV A-2期に分類され、14世紀第4四半期に比定される。配置状況や建物の棟方向から掘立柱建物11より後出することが推測される。(米田)

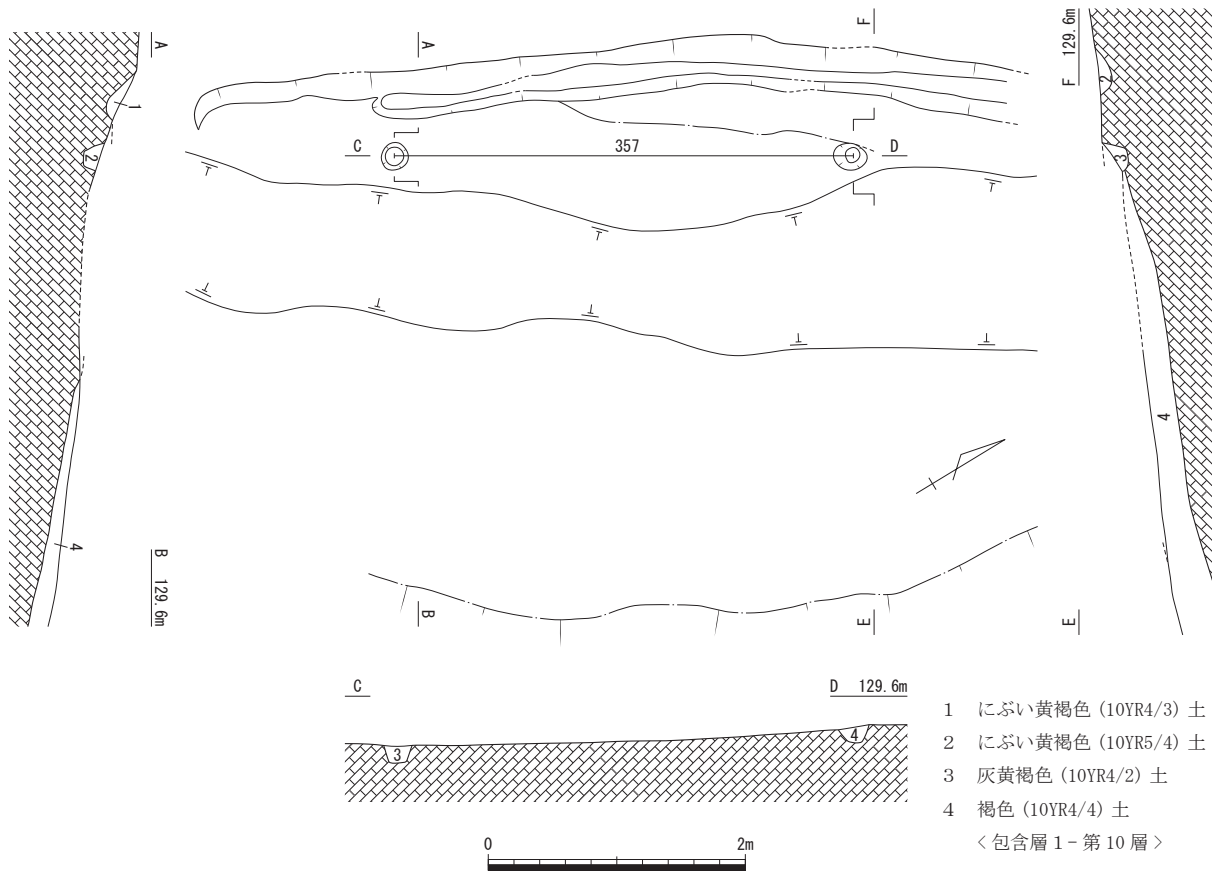
柱穴列22(第128図、図版44)

3区の南側、整地面2の中央西寄りに位置し、柱穴列23や段状遺構31と重複する。柱穴P1～4で構成され、直線的に並ぶ。規模は3間で、全長8.13mである。柱間寸法は263～275cmで、ほぼ等間隔である。主軸はN-26°-Eである。切り合い関係は複雑で、段状遺構31の床面で検出したことから、時期は中世と考えられる。柱穴列23との前後関係は明らかでない。(米田)

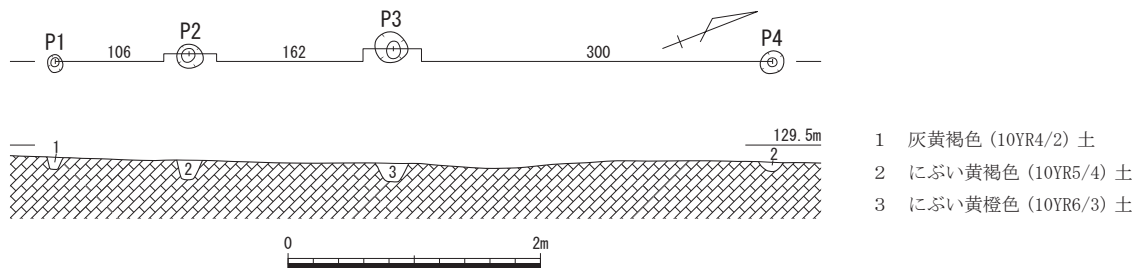
柱穴列23(第129図、図版44)

3区の南側、整地面2の中央西寄りに位置し、柱穴列22や段状遺構31と重複する。溝状遺構と2個の柱穴で構成され、本来は掘立柱建物であった可能性がある。溝状遺構の北端は残存していなかった。柱穴列の西側にある溝状遺構は残存長630cm、幅39cm、深さ10cmである。柱穴は径21～25cm、深さ16～18cmと小さい。規模は1間以上で、全長3.57m以上である。主軸はN-32°-Eである。また、柱穴列から東へ3.5mほどの斜面下方では傾斜変換点を確認できたことから、この間は包含層1の古墳時代の堆積層(第130図-第4層、第196図-第10層)を削平して緩斜面に整地していた可能性が高い。

遺物は出土していないが、段状遺構31の床面の一部を切っており、時期は中世と考えられる。なお、柱穴列22との前後関係は不明である。(米田)



第 129 図 柱穴列 23 (1/60)



第 130 図 柱穴列 24 (1/60)

柱穴列 24 (第 130 図)

3区南側、整地面2の中央西寄りで確認し、掘立柱建物9の西隣、柱穴列22・23の南隣に位置する。直線的に並ぶ柱穴P1～4で構成される。規模は3間、全長5.68mであるが、柱間寸法は106～300cmと不規則であることから、P1・3・4で構成された可能性も残る。主軸はN-21°-Eである。本柱穴列は掘立柱建物の一部、あるいは掘立柱建物9に伴う柵や塀であったことが想像される。P1から瓦質土器の細片が出土したことから、時期は中世に比定される。(米田)

柱穴列 25 (第 131 図、図版 35・36)

3区の南側、整地面2の中央にあり、掘立柱建物9・10の東隣に位置する。柱穴P1～3で構成され、直線的に並ぶ。規模は2間、全長5.13mであるが、柱間寸法は178～335cmと不規則である。主軸はN-22°-Eである。柱穴のうち、P1は径40cm、深さ53cmとやや規模が大きい。P2から

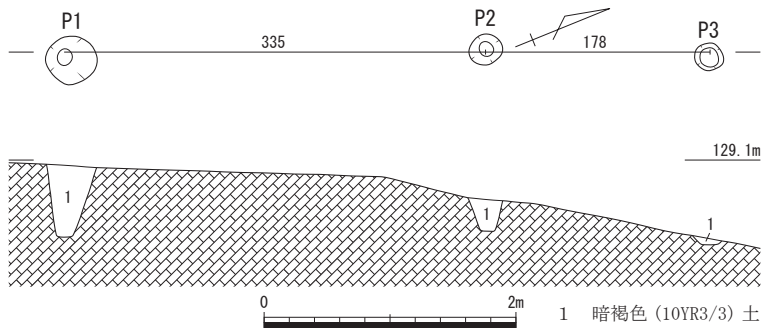
土師器の細片が出土した。時期は中世と考えられる。(米田)

柱穴列 26 (第 132 図、図版 35・36)

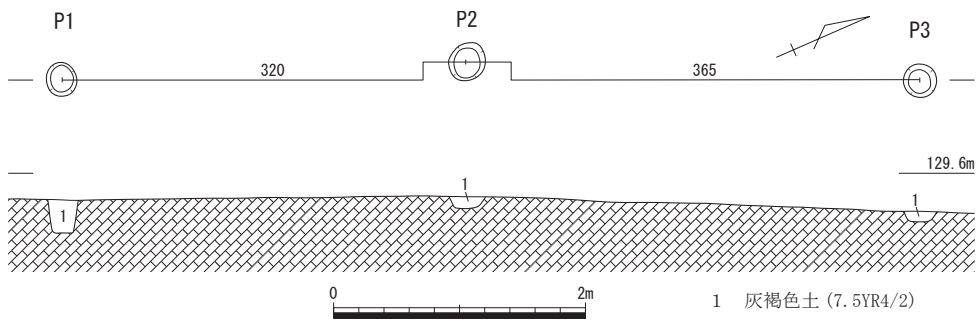
3 区の南端中央、整地面 2 の南端に位置し、掘立柱建物 11・12 と重複する。直線的に並ぶ柱穴 P1～3 で構成される。規模は 2 間、全長 6.85 m である。柱間寸法は 320 cm、365 cm とやや等間隔ではない。主軸は N-25°-E である。遺物は出土していないが、埋土や配置状況から時期は中世の可能性はある。ただし、掘立柱建物 11・12 との前後関係は明らかでない。(米田)

柱穴列 27 (第 133 図、図版 35)

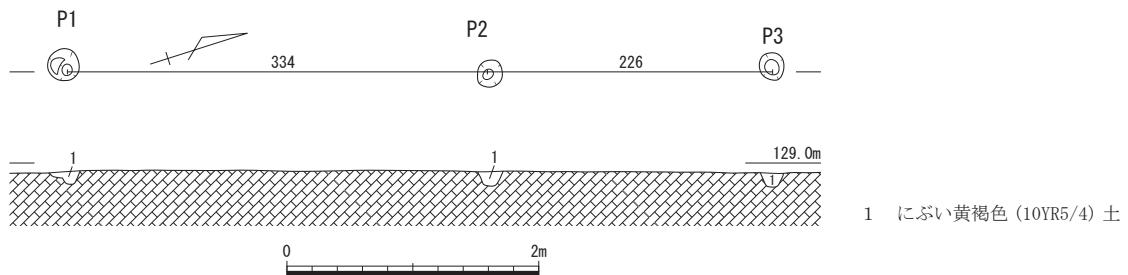
3 区の南端中央、整地面 2 の南端に位置する。柱穴 P1～3 で構成される。規模は 2 間、全長 5.60 m である。柱間寸法は 334 cm、226 cm と等間隔ではない。主軸は N-50°-E である。遺物は出土していないが、埋土や配置状況から時期は中世と推測される。(米田)



第 131 図 柱穴列 25 (1/60)



第 132 図 柱穴列 26 (1/60)



第 133 図 柱穴列 27 (1/60)

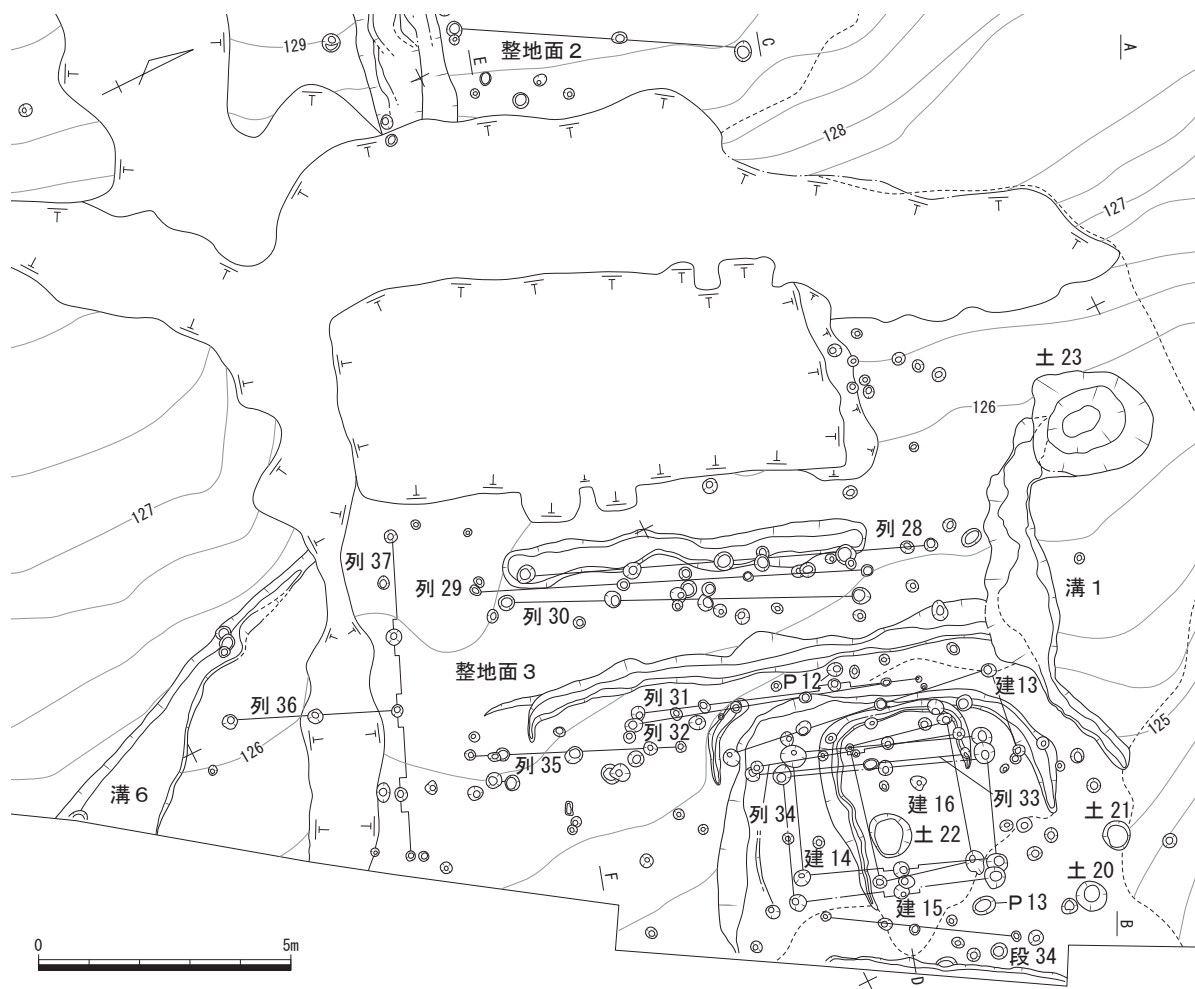
整地面3（第93・134・135図、図版30・31・37・38・41）

3区の南東から4区の北東にかけて位置する整地面で、整地面2の下段に造られた。整地面3は包含層1が堆積していた谷部南側の緩斜面を削平して、標高125～126mあたりを平坦に整地している。この整地面の西側は近現代の墓地によって著しく削平されているが、本来の西端は標高127m前後であったと推測される。また、整地面の北端は溝1、南端は溝6があり、区画と排水を兼ね備えていたと考えられる。東端は調査区外の東側へ少し続くとみられるが、後世の地形改変が著しい。現状かつ調査区内での整地面3の規模は、南北19m、東西23m以上になると見込まれる。

整地面3では、掘立柱建物13～16、柱穴列28～37、段状遺構34、土坑20～23、溝1・6を確認した。整地面の北端には土坑23と溝1、南端に溝6と柱穴列36・37が配置された。整地面2の西側は削平が著しいなか、柱穴列28～30が残存していた。また、その東側では柱穴列31～35を確認した。これらの柱穴列は、本来は掘立柱建物の一部であった可能性がある。さらに、整地面3の北東側では掘立柱建物13～16が重複して見つかると、配置状況や切り合い関係から、掘立柱建物13→14→15→16の順で建て替えられた可能性がある。（米田）

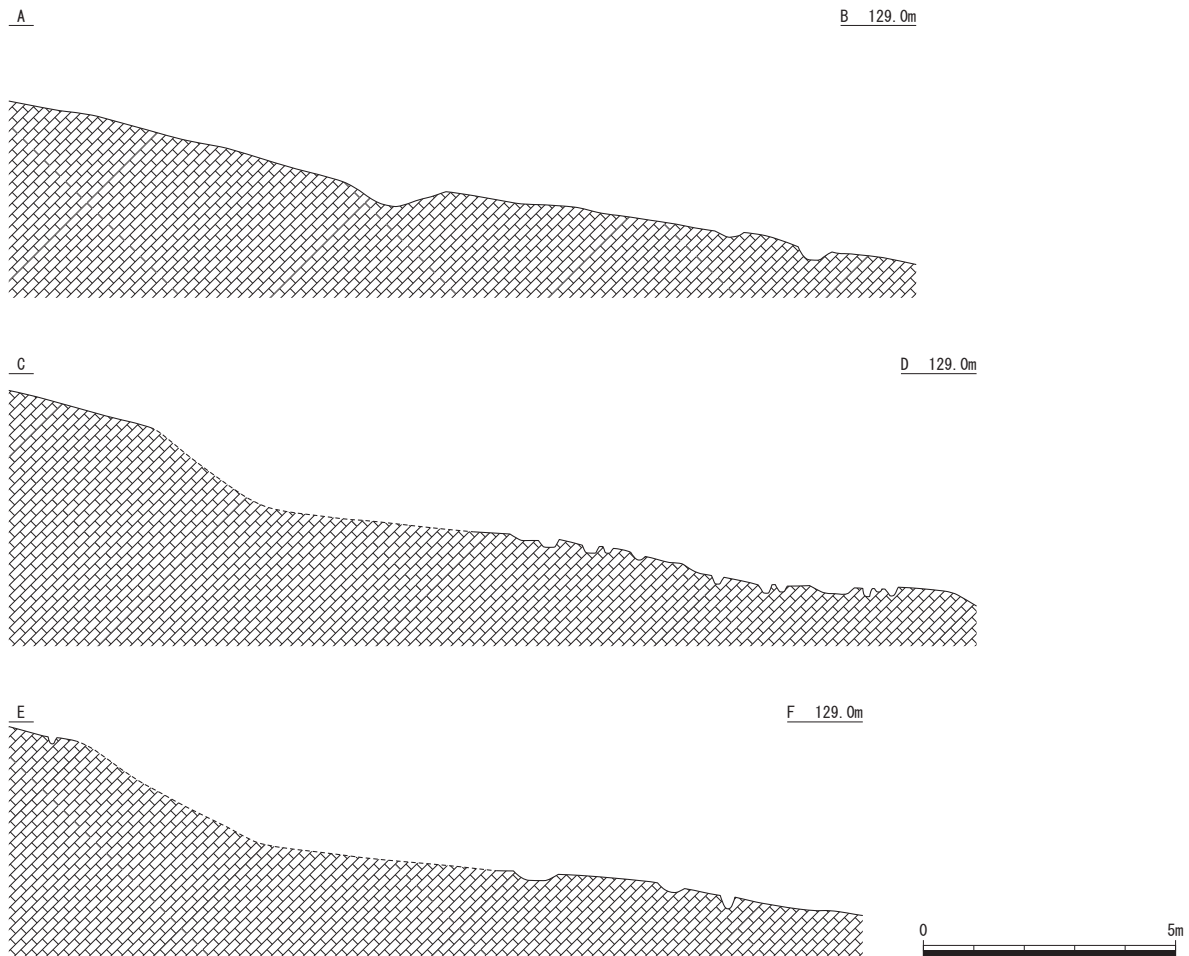
掘立柱建物13（第136図、図版37・38）

3区の南東、整地面3の北側中央に位置し、掘立柱建物14～16と重複する。現状では5本の柱穴（P1～5）が残存していた。全体は明らかでないが、現状の規模は1間×3間で、桁行5.45m、梁

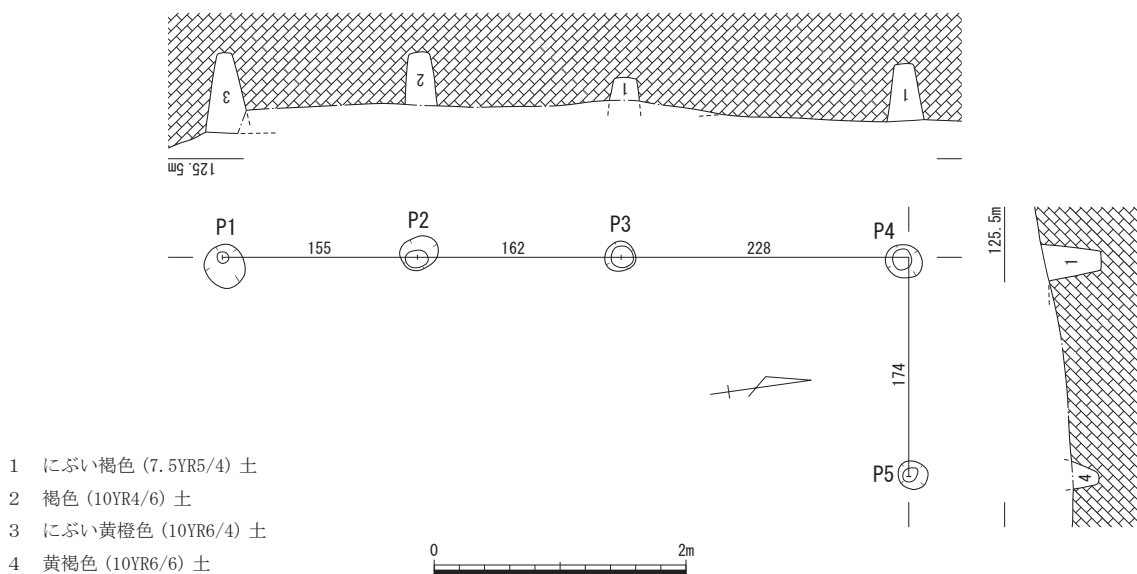


第134図 整地面3遺構配置図 (1/150)

行 1.74 m、面積は 9.52 m²である。主軸はN-7°-Eで、南北棟である。桁の柱間寸法は 155 ~ 228 cm、梁は 174 cmである。柱穴は径 25 ~ 35 cm、深さは検出面から 15 ~ 62 cmである。出土遺物はない。埋土から時期は中世に比定され、配置状況から掘立柱建物 14 ~ 16 より古い可能性がある。(米田)



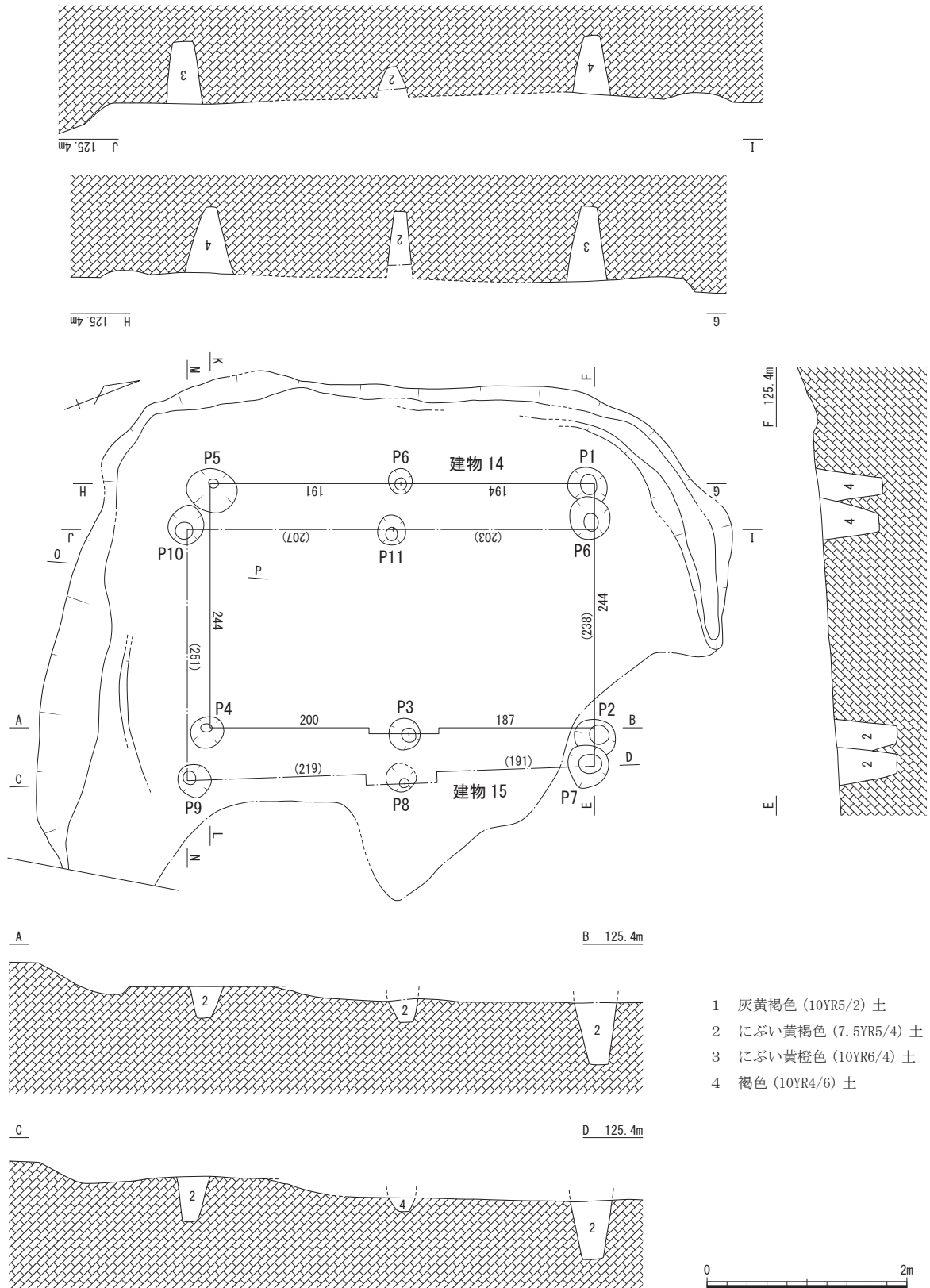
第 135 図 整地面 3 断面 (1/150)



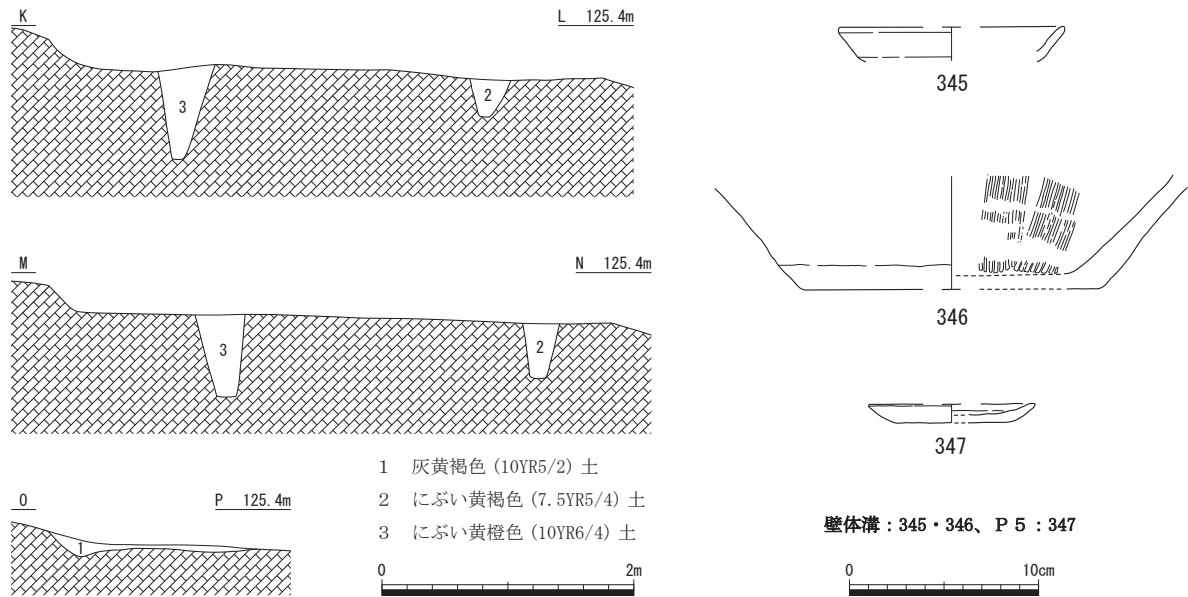
第 136 図 掘立柱建物 13 (1/60)

掘立柱建物 14 (第 137・138 図、図版 37・38)

3区南端から4区北東にわたる整地面3に位置し、西側に柱穴列33・34があり掘立柱建物15・16と重複する。本建物を囲うように山側の斜面を隅丸方形に切り、平坦地を造り出している。山側には



第 137 図 掘立柱建物 14・15 (1/60)



第138図 掘立柱建物14・15断面(1/60)、出土遺物(1/4)

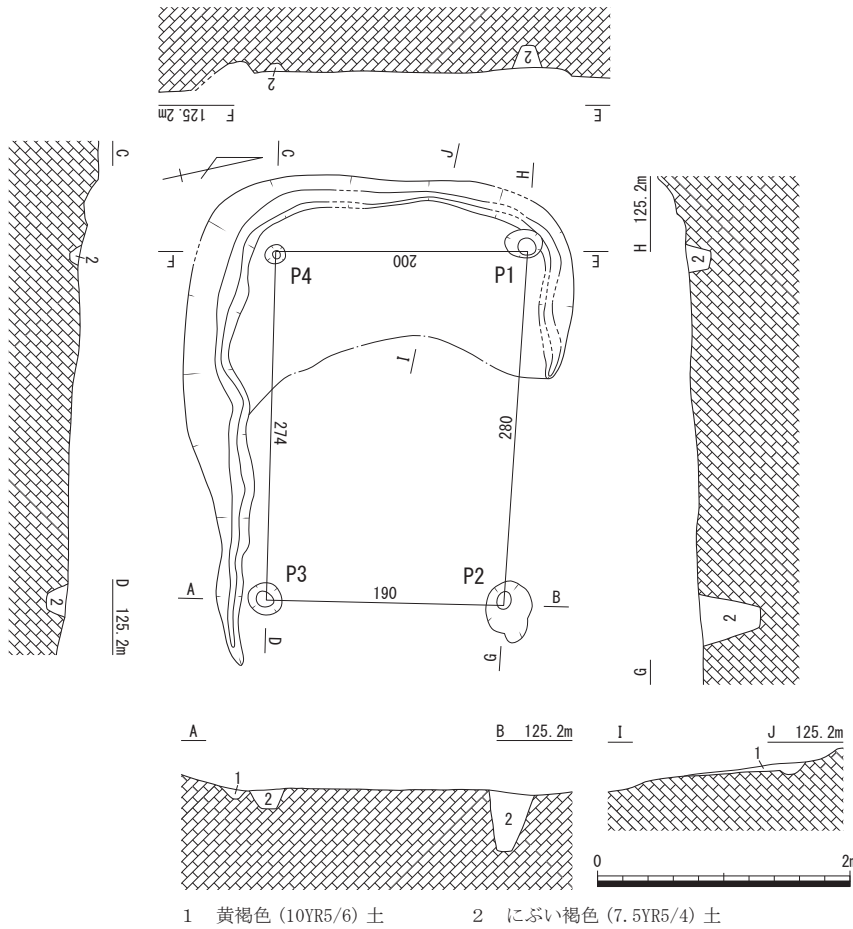
壁体溝のような幅約50cm、深さ約10cmの浅い溝が北側と南側の一部で確認でき、建物周辺の排水を意識して造られたものと考えられる。建物東側は斜面のため、本来盛土による造成が行われたと想定されるが、失われている。この削り出された平坦面を利用して、2間×1間の規模の掘立柱建物が建てられている。規模は桁行3.87m、梁行2.44mを測る。柱穴の平面形は円形または不整な円形を呈し、大きさは直径30～50cm、深いところでは検出面から約65cm掘り込まれている。東側桁行の中間柱は、柱通りより若干外側に位置し、他の柱穴よりも検出面からの深さが浅い。いずれの柱穴も柱痕は確認できなかった。掘立柱建物14・15の柱穴が建物北側のP1とP6、P2とP7の2か所で切り合っており、土層の状況から、掘立柱建物14の後に掘立柱建物15が建てられたと考えられる。(樋口)

掘立柱建物15 (第137・138図、図版37・38)

3区南端から4区北東の整地面3に位置し、掘立柱建物14と重複する場所に建てられた2間×1間の同じ規模の建物である。桁行4.10m、梁行2.51mを測る。柱穴の平面形は円形又は不整な円形を呈し、大きさは直径25～50cm、深いところでは検出面から60cmほど掘り込まれている。東側桁行の中間柱は柱通りより若干外側に位置し、他の柱穴に比べて浅い。また、柱穴内に柱痕は確認できなかった。掘立柱建物14・15の柱穴がP1とP6、P2とP7の北東側2か所で切り合っており、土層の状況から掘立柱建物14の後に掘立柱建物15が建てられたことがわかる。かなり重複した場所で同じ規模の建物であることから、建て替えて使用されたものと想定される。また、この平坦面から小片であるが青磁皿の口縁部345と備前焼の播鉢底部346、P5から土師器小皿347が出土していることから、両建物は14～15世紀のものと考えられる。(樋口)

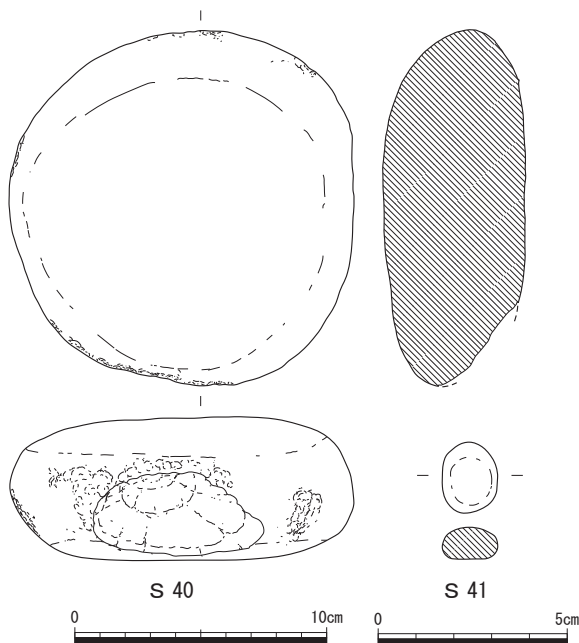
掘立柱建物16 (第139・140図、図版37・38・58)

3区南端から4区北東にわたる整地面3に位置し、掘立柱建物14・15及び土坑22と重複した場所にある。建物の山側には周囲を囲うように隅丸方形を呈する壁体溝と考えられる浅い溝が巡っており、この中央に建物は位置している。壁体溝は本来建物周囲を囲っていたと想定できるが、東北部は斜面のため失われている。掘立柱建物16は、1間×1間で東西の長辺が2.74～2.80m、南北の短辺が



第139図 掘立柱建物16 (1/60)

1.90～2.00 mを測る。柱穴の平面形は円形、又は不整な円形を呈し、大きさは直径15～50 cm、検出面からの深さも6～50 cmと柱穴の規模に大小がある。柱穴内に柱痕は確認できなかった。掘立柱建物14・15を囲う溝を切るように掘立柱建物16の周囲の溝があることから、掘立柱建物14・15の後に建てられたと考えられる。出土遺物としては敲打痕のある花崗岩の円礫S40と砂岩の小円礫S41が出土している。このほか瓦質土器の碎片が柱穴より出土していることから、建物の時期は室町時代と考えられる。(樋口)



第140図 掘立柱建物16出土遺物 (1/3・1/2)

柱穴列28 (第141図、図版37)

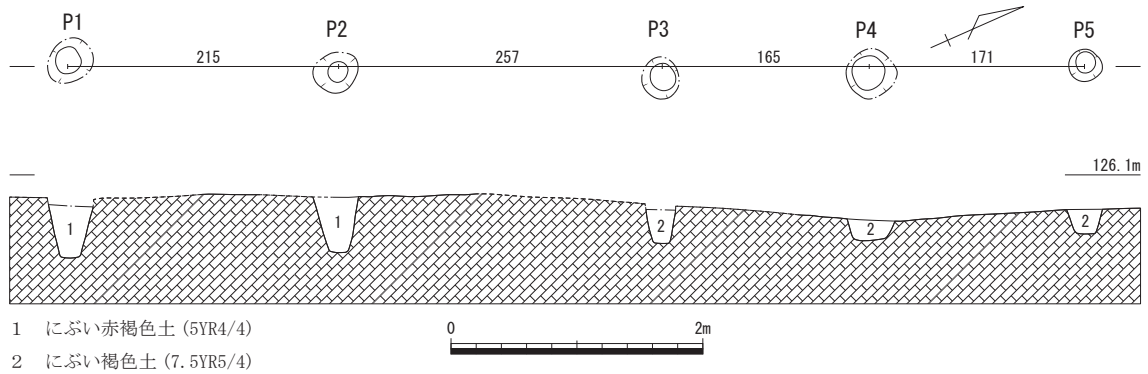
3区の南東、整地面3の中央に位置し、柱穴列29・30と重複する。柱穴の多くは柱穴列30の溝状遺構に切られる。P1～5で構成され、本来は掘立柱建物であった可能性がある。規模は4間で、全長8.08 mである。柱間寸法は165～257 cmと、北半は狭く、南半は広い。主軸はN-24°-Eである。P5から土師器の細片が見つかった。時期は中世で、切り合い関係や配置状況から柱穴列29・30より古いと考えられる。(米田)

柱穴列29 (第142図、図版37)

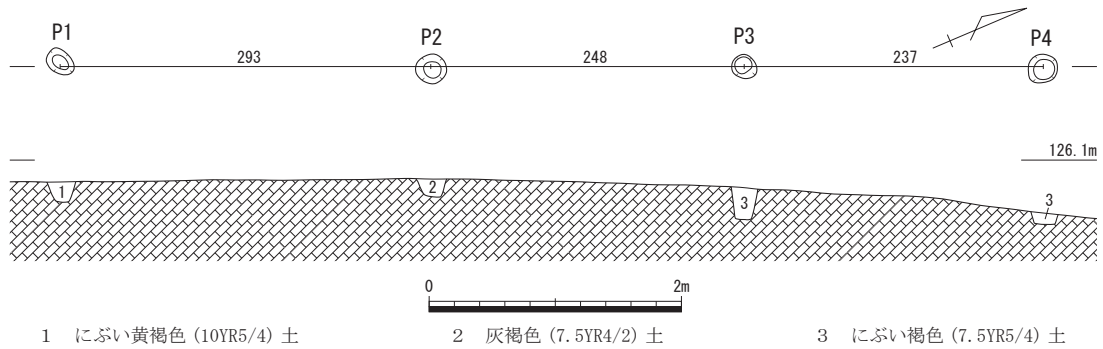
3区の南東、整地面3の中央に位置し、柱穴列28・30の間で確認した。柱穴P1～4で構成される。規模は3間で、全長7.78 mである。柱間寸法は237～293 cmである。主軸はN-23°-Eを指す。出土遺物はない。埋土や配置状況から、時期は中世に比定され、柱穴列28より新しく、柱穴列30より古いと推測される。(米田)

柱穴列 30 (第 143 図、図版 37・38)

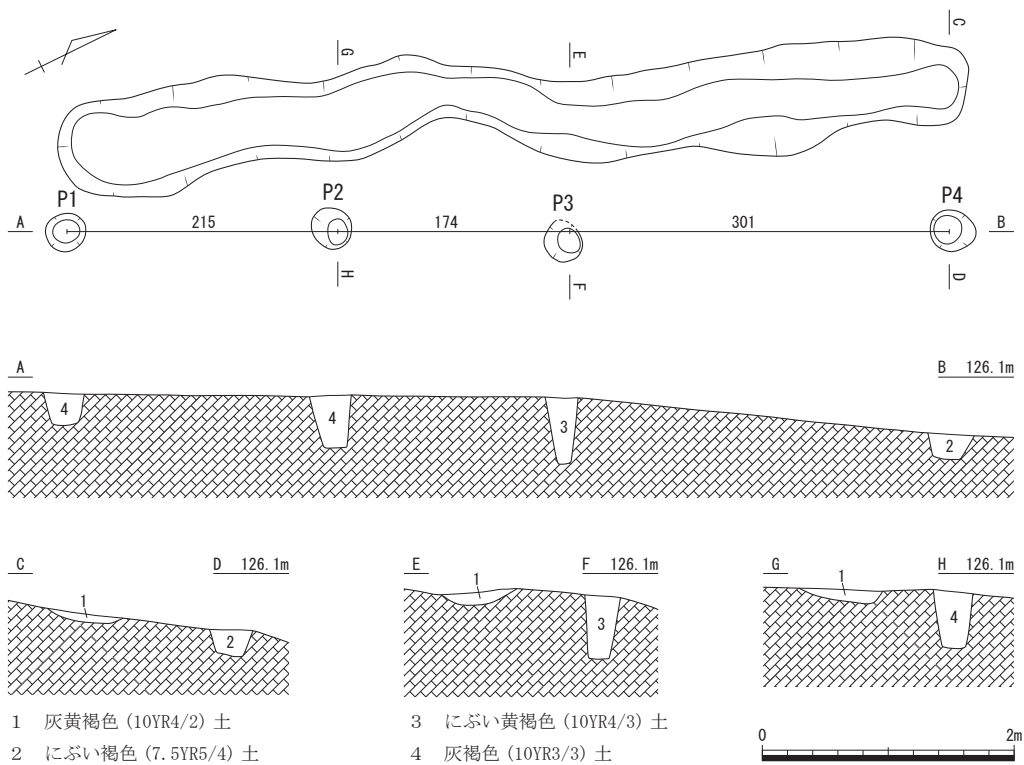
3 区の南東、整地面 3 の中央に位置し、柱穴列 28・29 の東隣、柱穴列 31・32 の西隣で確認した。なお、整地面 3 では柱穴列 28 より西側は遺構が残存していない。溝状遺構と柱穴 P 1～4 で構成され、



第 141 図 柱穴列 28 (1/60)



第 142 図 柱穴列 29 (1/60)



第 143 図 柱穴列 30 (1/60)

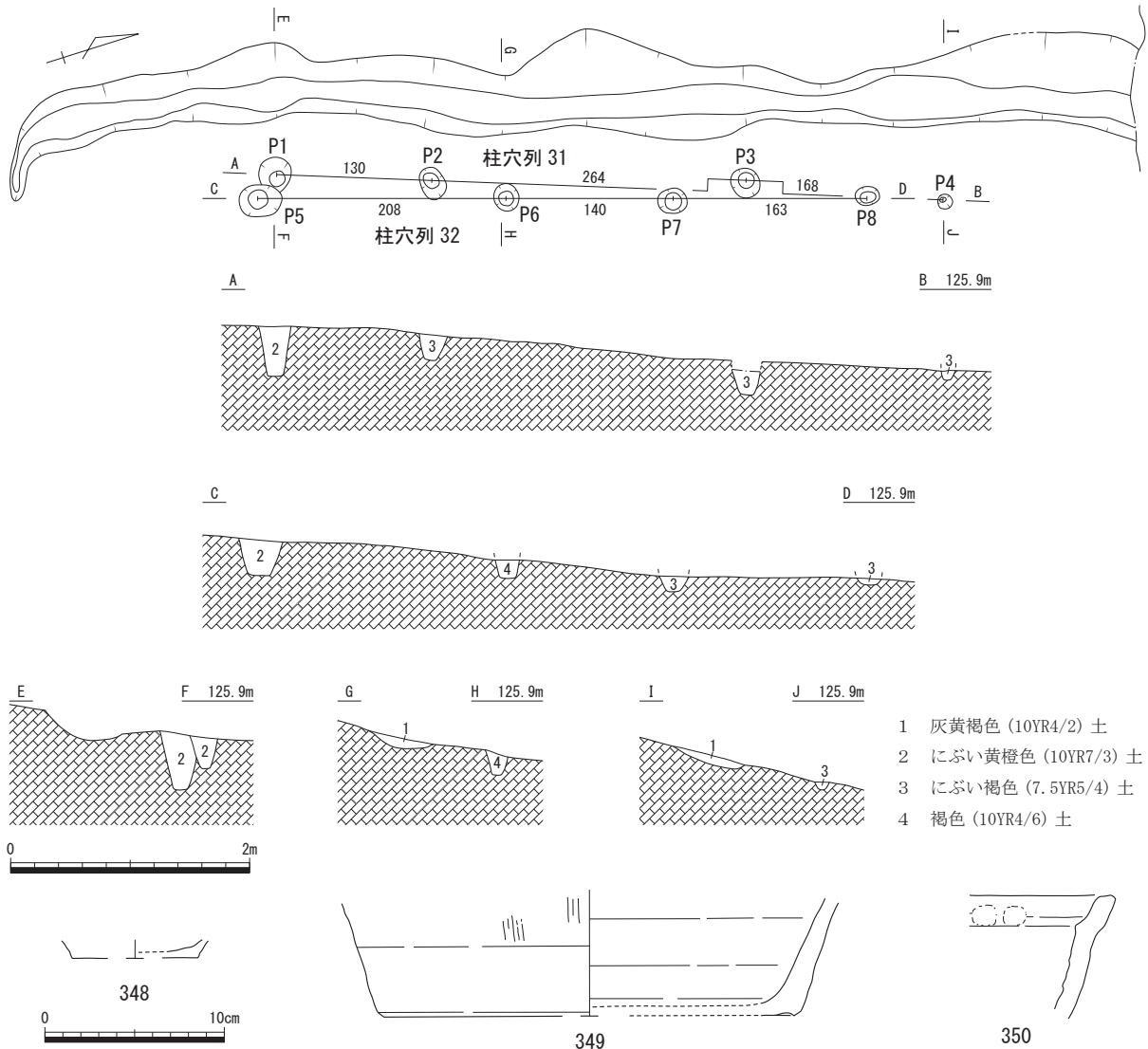
本来は掘立柱建物であった可能性がある。溝状遺構は長さ7.26m、幅86cm、深さ11cmで、概ね南北方向に延びる。柱穴列は溝状遺構から25～65cmほど東へ離れたところに南北方向に認められた。柱穴列の規模は3間で、全長6.90mである。柱間寸法は174～301cmと不規則で、主軸はN-26°-Eで、溝状遺構に沿う。P1から瓦質土器の細片が出土した。時期は中世とみられ、切り合い関係や配置状況から柱穴列28・29より新しいと考えられる。(米田)

柱穴列 31 (第144図、図版37・38)

3区の南東、整地面3の中央に位置し、柱穴列28～30の東隣、掘立柱建物14・15の西隣で確認した。柱穴列32と重複するが、溝状遺構は共有した可能性がある。柱穴P1～4で構成され、もとは掘立柱建物であった可能性が高い。規模は3間で、全長5.62mである。柱間寸法は130～264cmで、両端がやや狭く、中央がやや広い。主軸はN-30°-Eである。P2から瓦質土器の細片が出土した。時期は中世の13世紀代とみられ、切り合い関係から柱穴列32より古い。(米田)

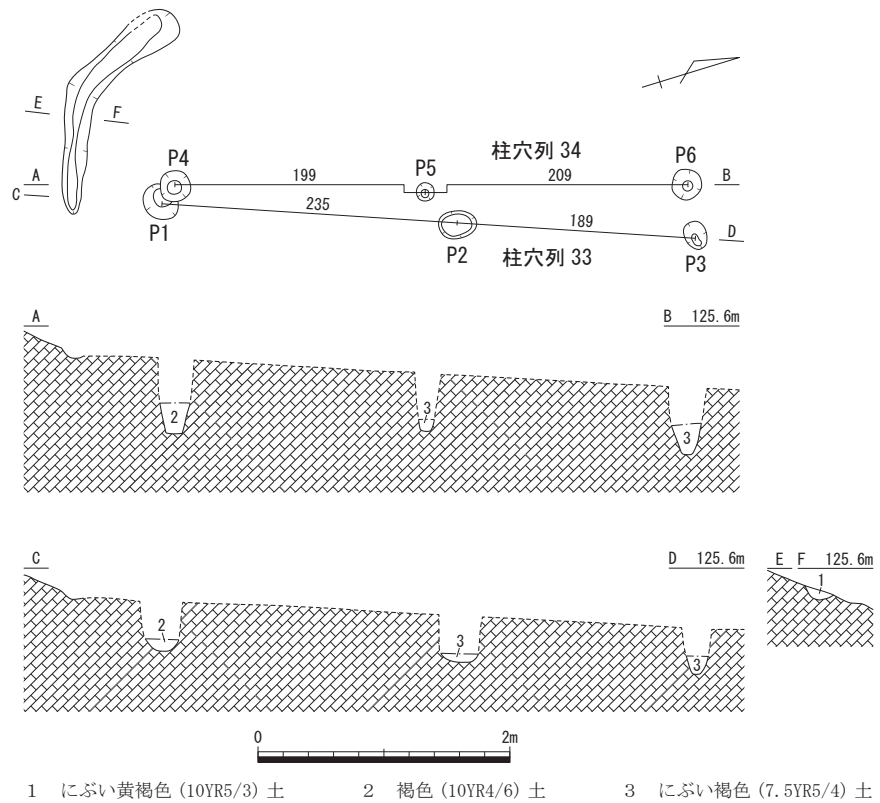
柱穴列 32 (第144図、図版37、38)

3区の南東、整地面3の中央に位置し、柱穴列28～30の東隣、掘立柱建物14・15の西隣で確認した。柱穴列31と重複する。溝状遺構と柱穴P5～8で構成され、柱穴列31とともに、本来は掘立



第144図 柱穴列31・32 (1/60)、出土遺物 (1/4)

柱建物であったと推測される。溝状遺構は南北方向に延び、残存長 9.31 m、幅 81 cm、深さ 28 cm である。溝状遺構の南端は東に少し屈曲する一方、北端は溝 1 に切られる、あるいは繋がる。柱穴列 32 は溝状遺構から 40 cm ほど離れたところに南北方向に認められた。柱穴列 32 の規模は 3 間で、全長 511 cm である。柱間寸法は 140 ~ 208 cm でやや不規則である。主軸は N - 29° - E で、溝状遺構に沿う。溝状遺構

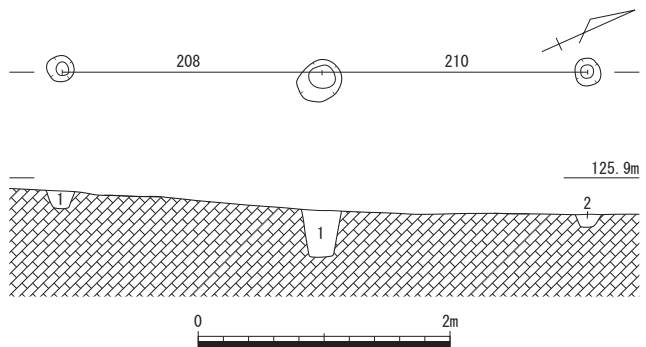


1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 2 褐色 (10YR4/6) 土 3 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 土

第 145 図 柱穴列 33・34 (1/60)

構からは土師器皿 348、備前焼の甕 349、瓦質土器の鍋 350 が出土した。時期は中世で 13 世紀後半ごろとみられ、切り合い関係から柱穴列 31 より新しい。(米田)
柱穴列 33・34 (第 145 図、図版 37・38)

3 区の南東、整地面 3 の北東に位置し、掘立柱建物 14 ~ 16 に柱穴上面を切られる。柱穴列 33・34 はともに溝状遺構を伴う。柱穴列 33 は P 1 ~ 3 で構成され、規模は 2 間で、全長 4.24 m である。柱



1 にぶい黄褐色 (5YR4/4) 土 2 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 土

第 146 図 柱穴列 35 (1/60)

間寸法は 189 ~ 235 cm とやや不規則である。主軸は N - 20° - E を指す。P 2 から土師器片が出土した。

一方、柱穴列 34 は P 4 ~ 6 で構成され、規模は 2 間で、全長 4.08 m である。柱間寸法は 199 ~ 209 cm とほぼ等間隔である。主軸は N - 17° - E である。柱穴列 33・34 の時期は中世で、切り合い関係から掘立柱建物 14 ~ 16 より古く、柱穴列 33 → 34 の順で造られたと推測される。(米田)

柱穴列 35 (第 146 図、図版 37・38)

3 区の南東、整地面 3 の東側中央に位置し、柱穴列 31・32 の南東隣にあたる。3 個の柱穴で構成される。規模は 2 間で、全長 4.18 m である。柱間寸法は 208 ~ 210 cm とほぼ等間隔である。主軸は N - 25° - E である。遺物は出土していない。埋土や配置状況から、時期は中世の可能性がある。

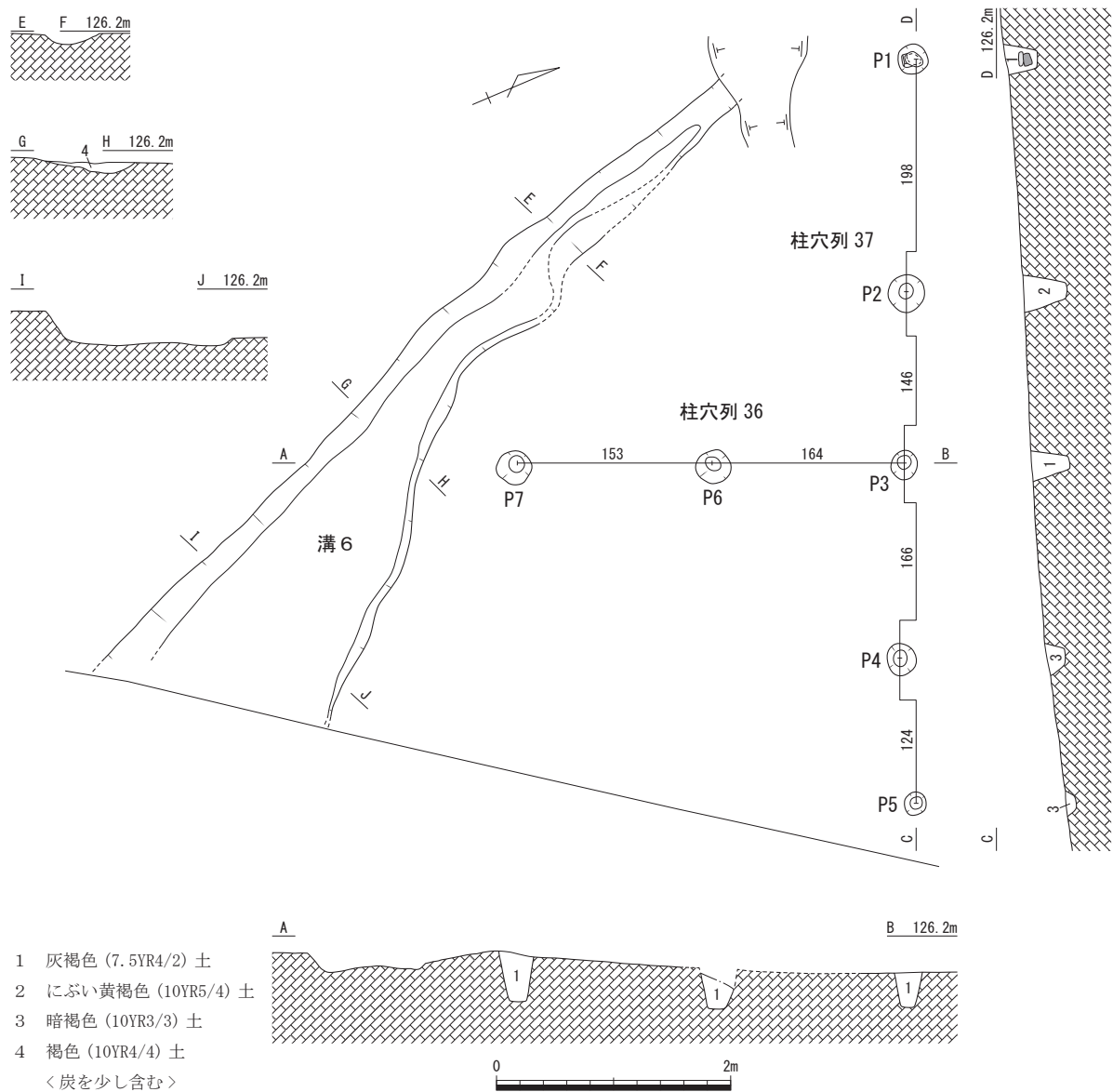
(米田)

柱穴列 36・37 (第 147 図)

4 区の北東、整地面の南端に位置し、溝 6 の北隣で確認した。柱穴列 36 は東西方向の P 1～5、柱穴列 37 は南北方向の P 3・6・7 で構成され、両者は P 3 で繋がり、「T」字状を呈する塀か柵であったと推測される。柱穴列 36 は規模が 2 間、全長 317 cm である。柱間寸法は 153～164 cm で、ほぼ等間隔である。主軸は N-21°-E を指す。一方、柱穴列 37 は規模が 4 間、全長 6.34 m である。柱間寸法は 124～198 cm でやや不規則である。主軸は N-69°-W である。遺物は見つかっていない。埋土や配置状況から、柱穴列 36・37 の南隣にある溝 6 と同時併存していた可能性があることから、時期は中世で、15 世紀第 3 四半期頃に比定されよう。(米田)

整地面 4 (第 93・148 図、図版 30・39～41)

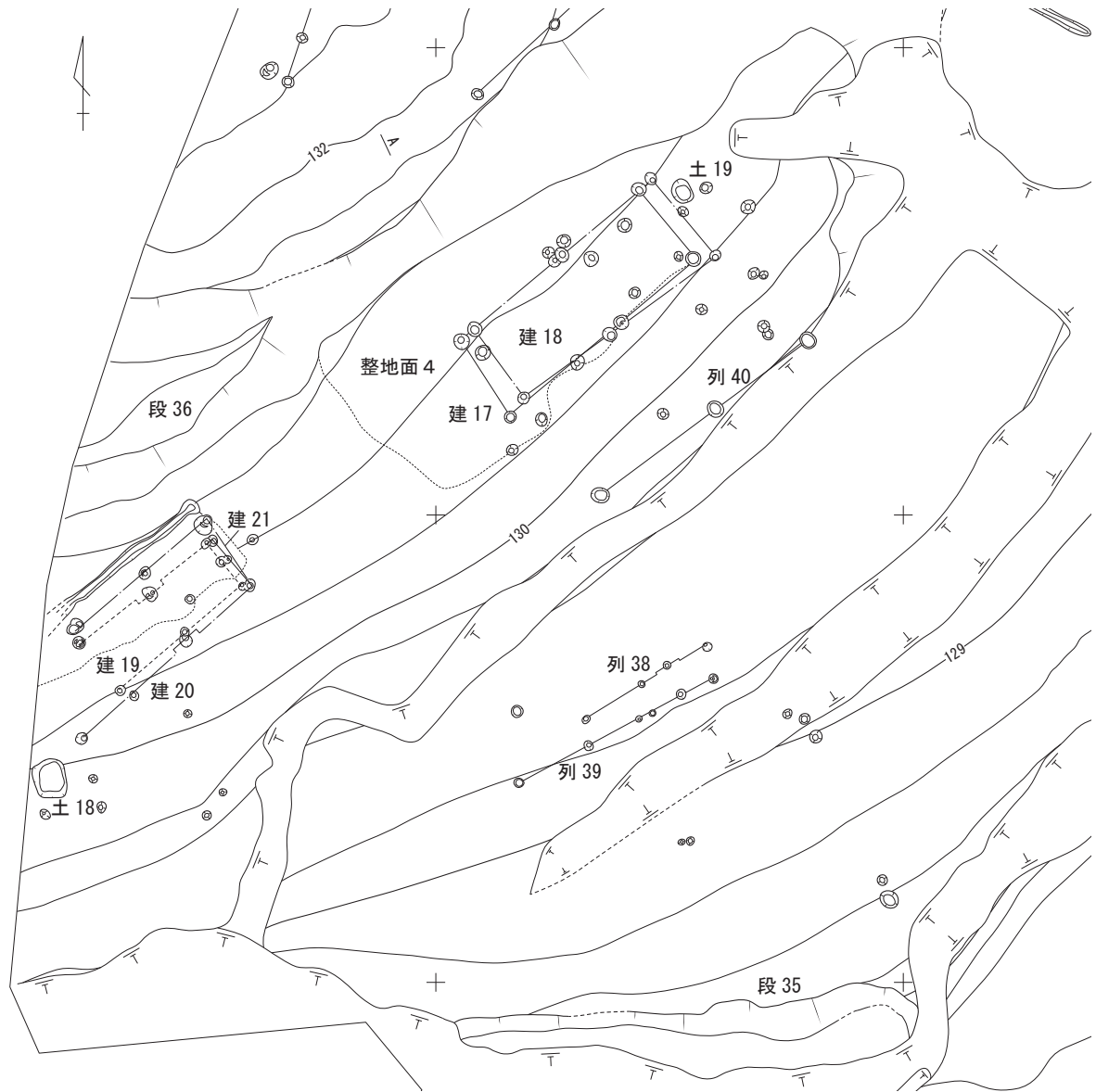
4 区の南西に位置する整地面で、整地面 1 の南下段、整地面 2 の南西に造られた。やや南向きの緩斜面を削平して、標高 130～131 m あたりを平坦に整地している。整地面 4 の北端は標高 131 m 前後、



第 147 図 柱穴列 36・37、溝 6 (1/60)

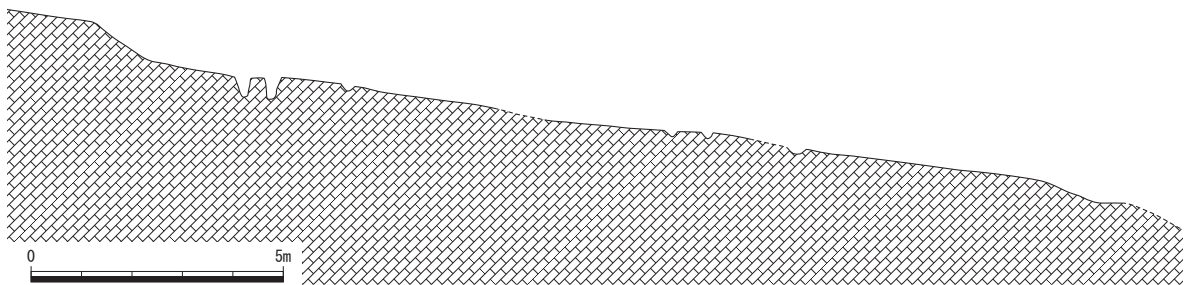
東端は土坑 19 の少し北東、南端は標高 129.75 m あたり、西端は調査区外の西へ続くとみられる。現状かつ調査区内での規模は、南北 9 m、東西 23 m 以上と推測される。

整地面 4 では掘立柱建物 17 ~ 21、柱穴列 38 ~ 40 を確認し、整地面 1 ~ 3 より遺構密度は低い。



A

B 133.0m

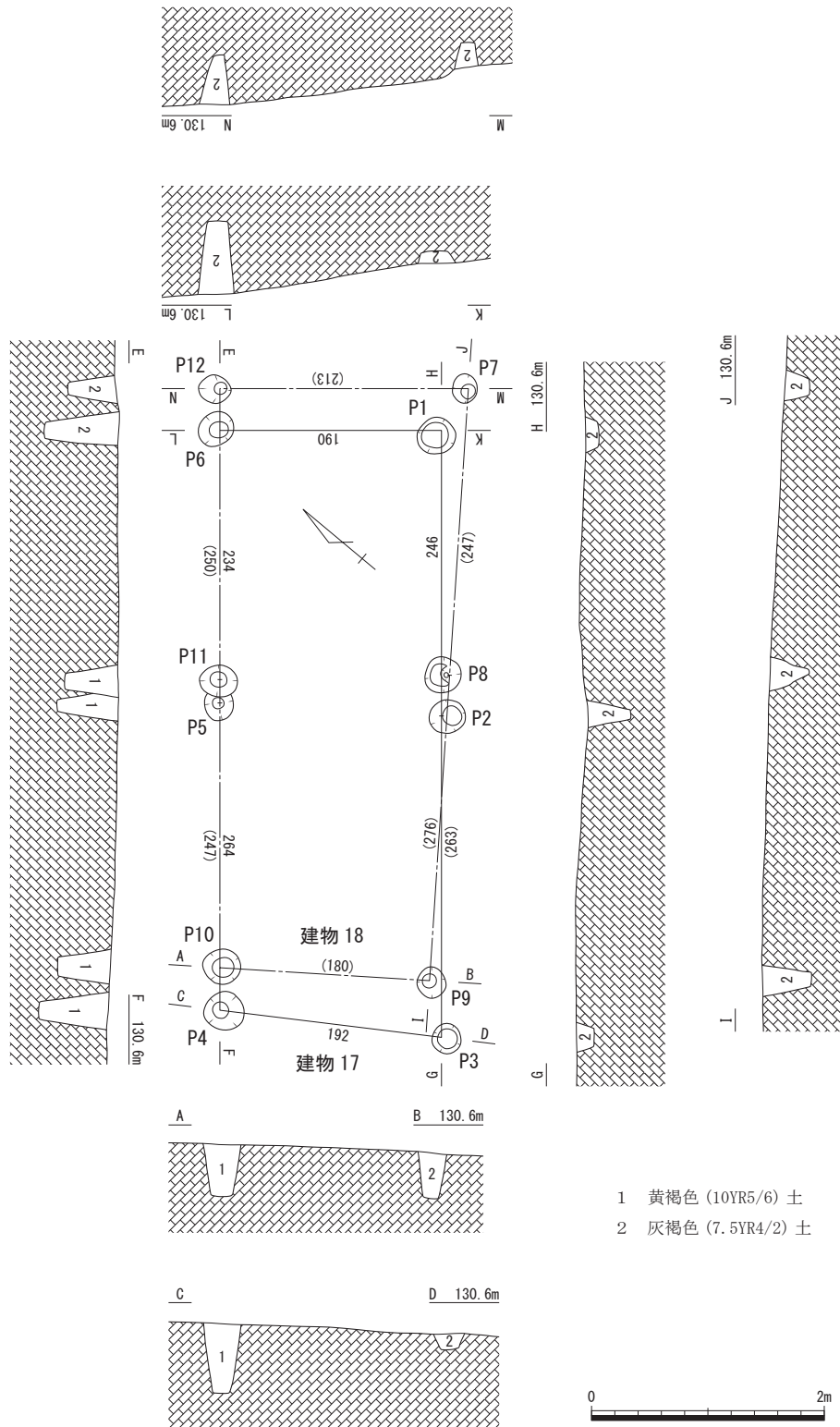


第 148 図 整地面 4 遺構配置図 (1/150)

整地面の東側では掘立柱建物 17・18、土坑 19、その東に柱穴列 40 が配置されている。一方、西側は掘立柱建物 19～21 が重複しており、連続して建て替えられたと考えられる。(米田)

掘立柱建物 17 (第 149・150 図、図版 39・40・55・59)

4 区の中央西寄り、整地面 4 の北側に位置する。掘立柱建物 18 と重複し、柱穴列 40 の西隣にある。柱穴 P 1～6 で構成される側柱建物である。規模は 1 間×2 間、桁行 5.22 m、梁行 1.92 m、面積は



第 149 図 掘立柱建物 17・18 (1/60)

9.72 m²である。主軸はN-50°-Eである。P 1～6は径25～35 cm、深さ11～65 cmで、特にP 4～6の残存状況は良好であった。柱間寸法は桁234～276 cm、梁190～192 cmで、等間隔に近い。柱穴からの出土遺物はないが、掘立柱建物17・18の検出時において、備前焼の播鉢351、青磁の皿352、鉄製の楔M 21、叩石S 42が出土した。351はVB期に分類される。これらの遺物から掘立柱建物17の時期は概ね16世紀後半に比定され、掘立柱建物18より古い。(米田)

掘立柱建物18 (第149・150図、図版39・40・55・59)

4区の中央西寄り、整地面4の北側に位置し、掘立柱建物17と重複し、柱穴列40の西隣にある。柱穴P 7～12で構成される側柱建物である。規模は1間×2間、桁行4.97 m、梁行1.92 m、面積は9.93 m²で、掘立柱建物17と同規模である。主軸はN-54°-Eである。P 7～12は径25～33 cm、深さ21～46 cmで、特にP 4～6は良好に残存していた。柱間寸法は桁247～263 cm、梁180～213 cmで、ほぼ等間隔である。柱穴から遺物は出土していないが、時期は切り合いから掘立柱建物17の後に建て替えられたとみられる。(米田)

掘立柱建物19 (第151図、図版41)

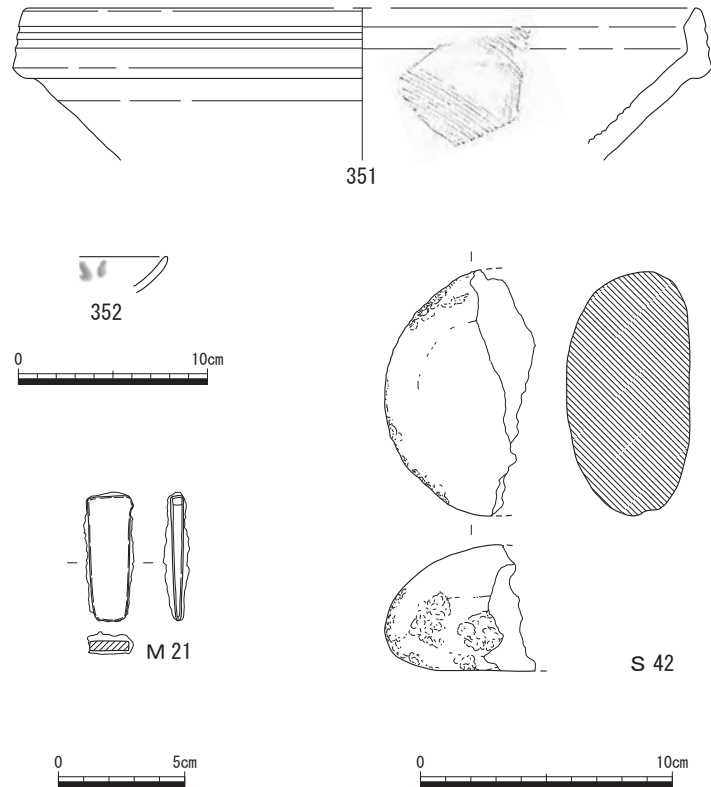
4区中央、整地面4の調査区西端に位置する。3棟の掘立柱建物19～21が重複しており、掘立柱建物19は最初に建てられた建物である。

柱穴P 1～6で構成される側柱建物で、規模は1間×2間、桁行3.63 m、梁行1.15 m、面積は4.16 m²、主軸はN-49°-Eである。柱穴は径20～25 cm、深さ13～34 cm、柱間寸法は桁160～193 cm、梁115 cmである。斜面上方である北西側の柱穴P 4・5は掘立柱建物20の柱穴によって掘り直されているほか、南東側の柱穴P 1・2はP 7・8によって切られる。また斜面上方の柱穴P 4～6はP 1～3に対して浅くなっている。これは後続する掘立柱建物20・21が造られる際に、平坦面を拡張したことで削平を受けた可能性がある。

掘立柱建物19～21に伴う出土遺物として青磁皿353がある。底部の小片で底径6.0 cm、釉薬は明るい灰みの黄色を呈する。出土遺物から掘立柱建物19～21の時期は中世と考えられる。(四田)

掘立柱建物20 (第151図、図版41)

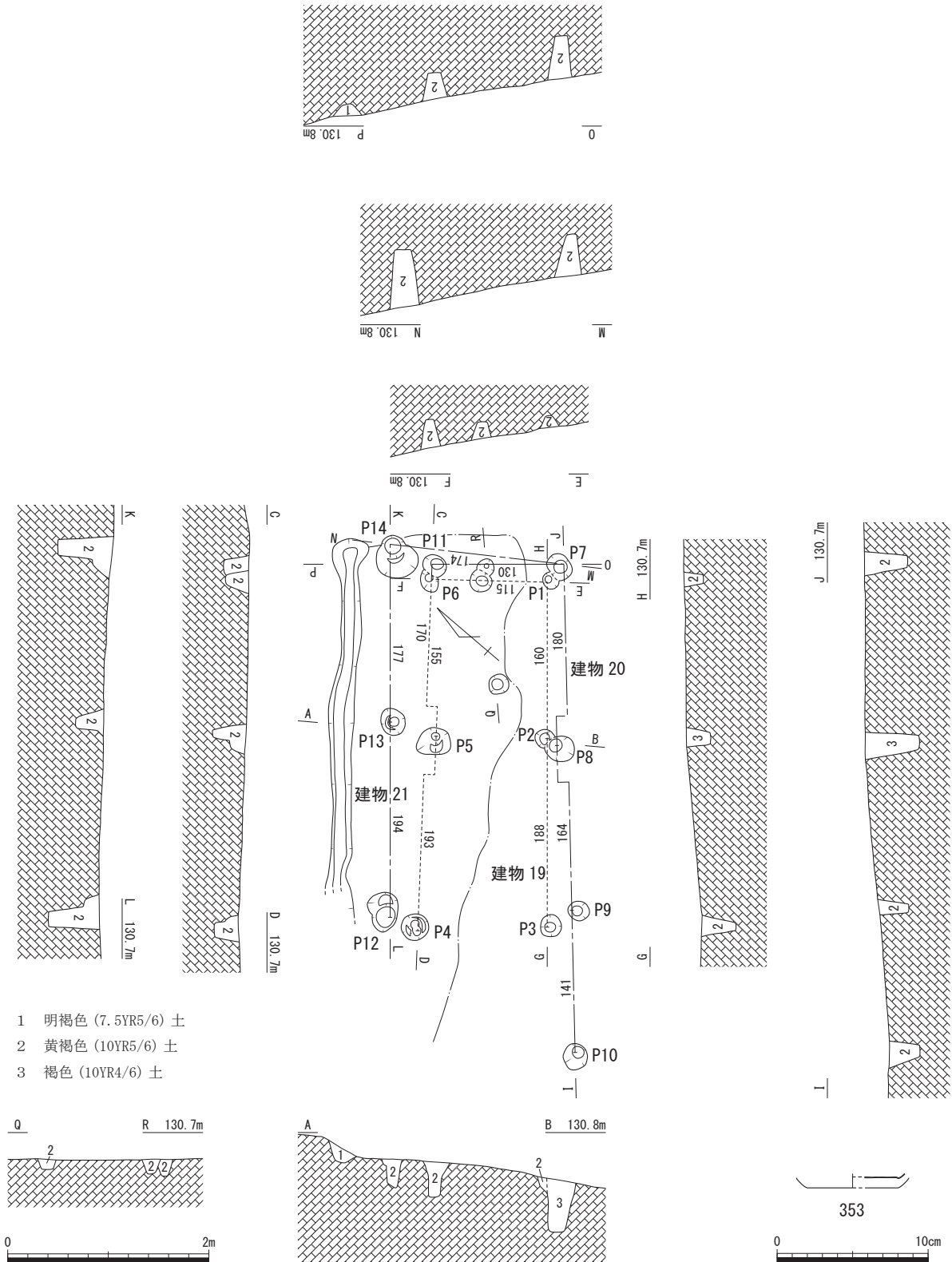
掘立柱建物19を拡張して造られた建物である。柱穴P 4・5・7～11によって構成される側柱建物で、規模は1間×3間、桁行4.85 m、梁行1.30 m、床面積は6.23 m²、主軸は掘立柱建物19とほ



第150図 掘立柱建物17・18出土遺物(1/4・1/3)

ぼ同様のN-48°-Eである。

柱穴は径19~29cm、深さ25~54cm、柱間寸法は桁141~193cm、梁130cmである。柱穴P4・5には掘り直した状況が認められることから、掘立柱建物19の柱穴を再利用して斜面下方へ建物を拡張したと考えられる。
(四田)



第151図 掘立柱建物19~21 (1/60)、出土遺物 (1/4)

掘立柱建物 21 (第 151 図、図版 41)

掘立柱建物 20 を拡張して造られた建物である。柱穴 P 7 ~ 10・12 ~ 14 によって構成される側柱建物で、規模は 1 間 × 3 間、桁行は掘立柱建物 20 と同じく 4.85 m、梁行 1.74 m、面積は 8.23 m²、主軸は N - 60° - E である。斜面上側には建物の主軸に平行する雨落ち溝が伴う。確認できた範囲で長軸 3.84 m、幅 26cm、深さ 21cm を測る。柱穴は径 19 ~ 42cm、深さ 25 ~ 54cm、柱間寸法は桁 141 ~ 194m、梁 174cm である。

この建物に確実に伴う遺物はなく正確な時期は限定しがたいが、南東側の柱穴を掘立柱建物 20 と共有することから掘立柱建物 20 の次に連続して建て替えられたと考えられる。(四田)

柱穴列 38・39 (第 152 図、図版 39)

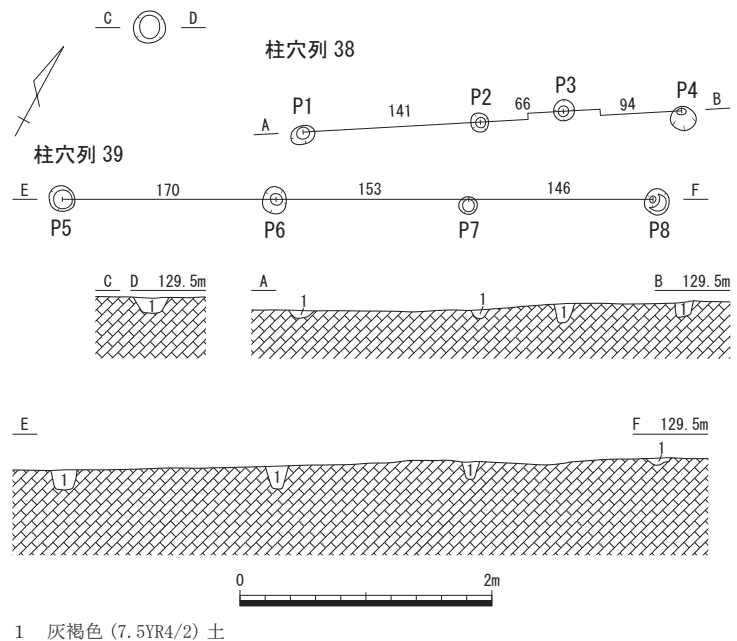
4 区の中央南西寄りに位置する。柱穴列 38 は北側の P 1 ~ 4、柱穴列 39 は南側の P 5 ~ 8 で構成される。柱穴列 38 の規模は 3 間で、全長 3.01 m である。柱間寸法は 66 ~ 141 cm とやや不規則である。主軸は N - 58° - E を指す。一方、柱穴列 39 は 3 間で、全長 4.69 m である。柱間寸法は 146 ~ 170 cm と等間隔に近い。主軸は N - 61° - E である。大半の柱穴は小さくて浅いが、P 8 は深さが 45 cm もある。柱穴から遺物は出土していない。埋土や配置状況から、時期は中世と考えられる。(米田)

柱穴列 40

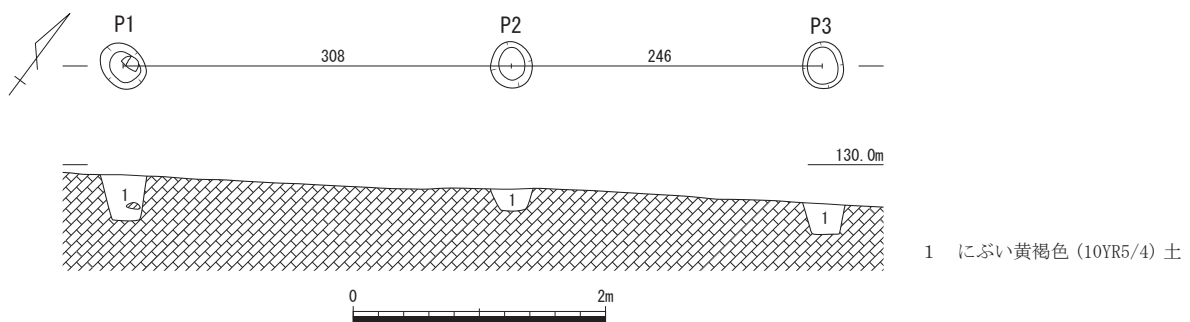
(第 153 図、図版 39・40)

4 区の中央西寄りに位置し、整地面 4 の北側に位置する。掘立柱建物 17・18 の東隣にあたる。柱穴 P 1 ~ 3 で構成され、主軸は N - 53° - E である。規模は 2 間、全長 5.54 m である。柱間寸法は 246 ~ 308 cm である。柱穴の規模や柱穴寸法、主軸は掘立柱建物 17・18 と酷似していることから、本来は掘立柱建物であった可能性が高く、時期は中世とみられる。

(米田)



第 152 図 柱穴列 38・39 (1/60)



第 153 図 柱穴列 40 (1/60)

2 段状遺構

段状遺構 28 (第 154 図、図版 42)

2区段状遺構 27 の西側に接する。段状遺構 27 と切り合いがあり、当遺構の方が新しいと見受けられた。長さ 5.14 m、幅 0.55 m 以上、深さ最大 25cm を測る壁体溝のみ残存し、南端に 10 ~ 50cm 大の 10 個の角礫からなる集石部分が存在する。埋土は平面で見ると黒色土と褐色土の混ざった土で、遺物は出土しなかったが、東にある柱穴列の時期に近い中世の可能性が高い。(氏平)

段状遺構 29 (第 155 図、図版 42)

3区西端中央に位置し、溝 2 の北隣で確認した。現状では段状遺構の東端を確認したに過ぎず、大半は調査区外の西側に続く。遺構の全体が分からないため、段状遺構として報告するが、調査区外の西側に広がる整地面の東端に相当する可能性もある。規模は長軸 3.6 m 以上、短軸 2.05 m、深さ 63 cm である。床面ではピットが認められた。時期は埋土から中世と考えられる。(米田)

段状遺構 30 (第 156 図)

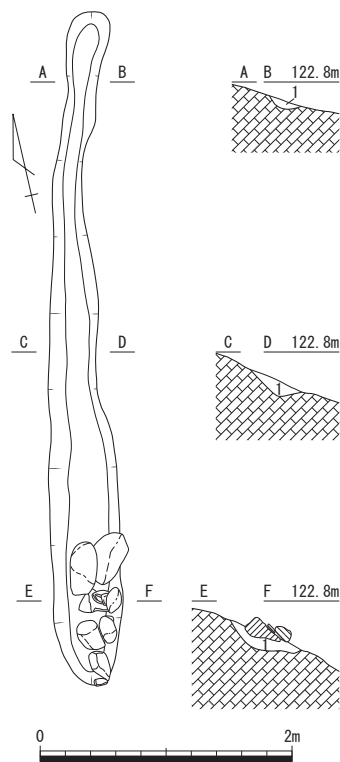
3区の南西、整地面 1 の西端中央に位置し、柱穴列 9 に切られる。現状では長さ 145 cm、幅 30 cm、深さ 7 cm の溝状遺構のみを確認し、大半は調査区外の西側へ続く。掘立柱建物に伴う溝状遺構の一部である可能性があるが、柱穴の特定はできなかった。埋土から時期は中世の可能性はある。(米田)

段状遺構 31 (第 157 ~ 166 図、写真 12・13、図版 42 ~ 45・55・60)

3区中央に位置し、整地面 2 の北側で確認した。標高 129 ~ 130 m あたりの斜面を造成して、やや規模の大きな段状遺構を造っている。規模は長軸 12.95 m、短軸 2.31 m、深さ 1.03 m である。壁面

の北側では溝は認められなかったが、南側では延長 3.15 m ほど溝状を呈していた。床面は北半では幅 1.5 m、南半では 1 m ほど残存していた。

段状遺構 31 の南半は、



1 黒褐色 (10YR2/3) 土 (炭を少し含む)

第 154 図 段状遺構 28 (1/60)



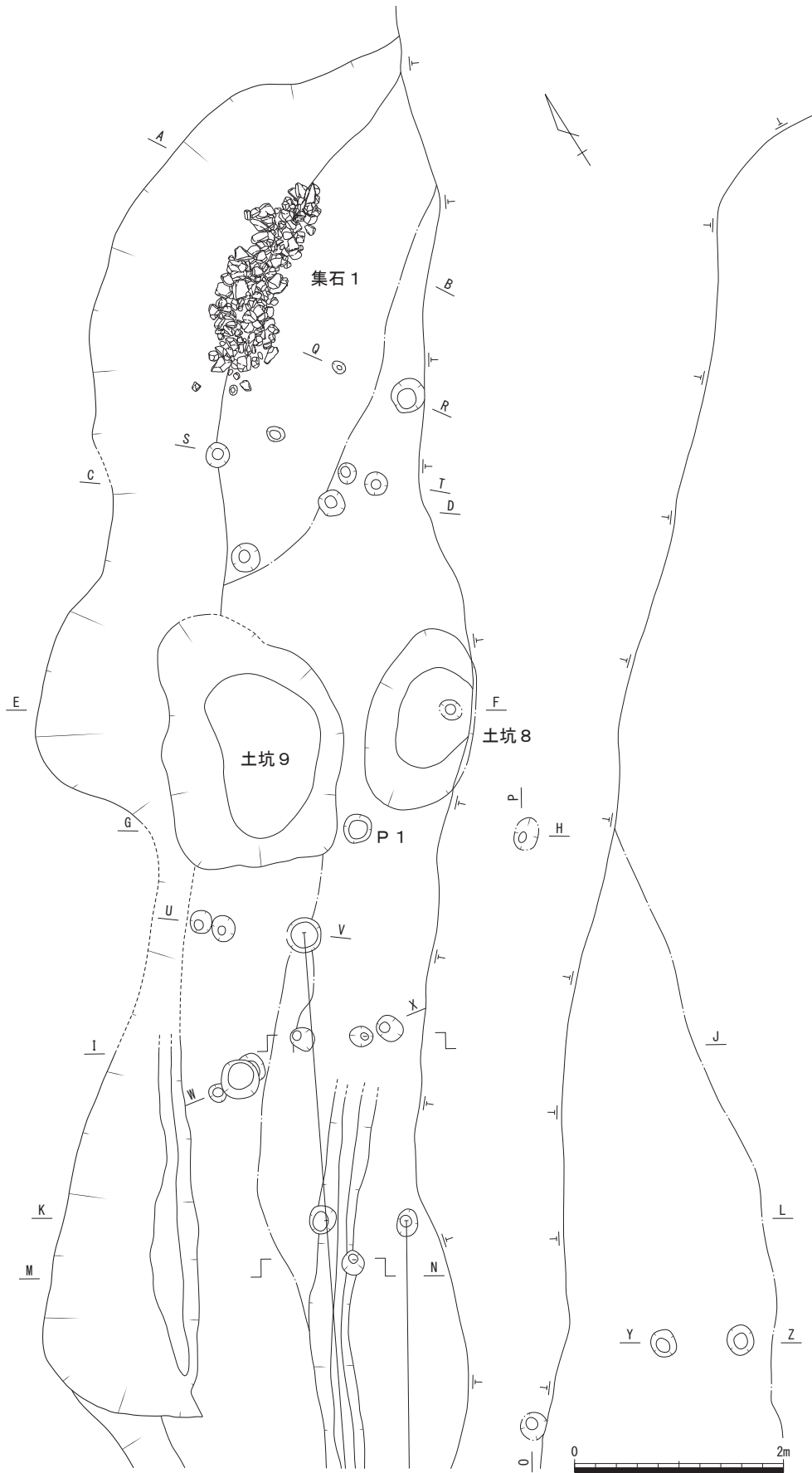
1 黄褐色 (2.5Y5/1) 土

第 155 図 段状遺構 29 (1/60)

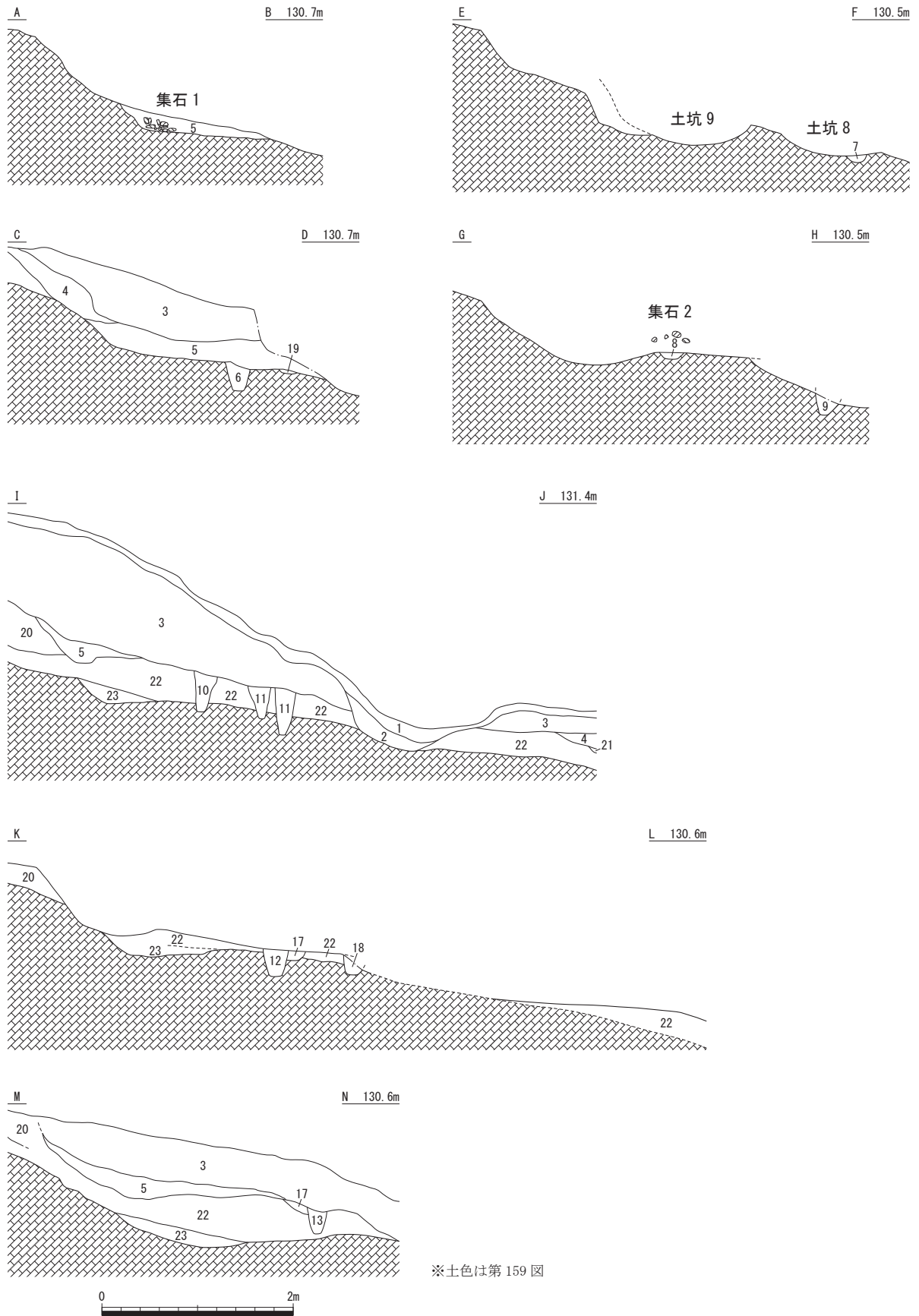


1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土

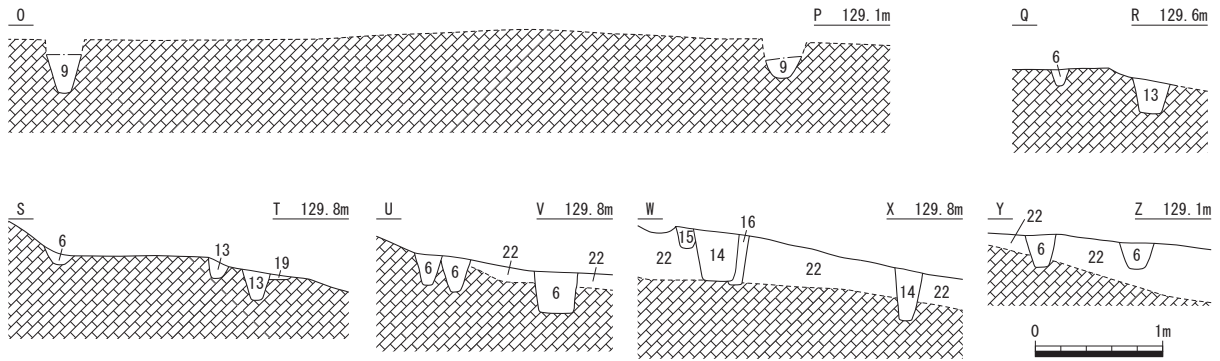
第 156 図 段状遺構 30 (1/60)



第157図 段状遺構 31、集石 1 (1/60)



第158図 段状遺構31断面① (1/60)



- | | |
|------------------------------------|---|
| 1 <表土> | 12 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 |
| 2 黒褐色 (10YR3/4) 土 (ゆるい) | 13 褐色 (10YR4/4) 土 |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土<中世の包含層> | 14 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 |
| 4 明黄褐色 (10YR6/6) 土 (炭を含む) <中世の包含層> | 15 褐色 (10YR4/4) 土 |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 土 (炭を少し含む) | 16 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 |
| <段状遺構 31> | 17 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 |
| 6 褐色 (10YR4/4) 土 | 18 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 |
| 7 褐灰色 (10YR6/1) 土 | 19 黒褐色 (10YR3/2) 土<段状遺構 7> |
| 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土<段状遺構 31-P1> | 20 褐色 (7.5YR4/4) 土<中世の包含層> |
| 9 褐色 (10YR5/1) 土 | 21 暗褐色 (10YR3/4) 土 (固くしまる。炭を含む) <古墳時代後期～古代の包含層> |
| 10 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土<中世のピット> | 22 暗褐色 (10YR3/4) 土 (固くしまる。炭を含む) <古墳時代後期～古代の包含層> |
| 11 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土<中世のピット> | 23 黒褐色 (10YR3/2) 土<段状遺構 7> |

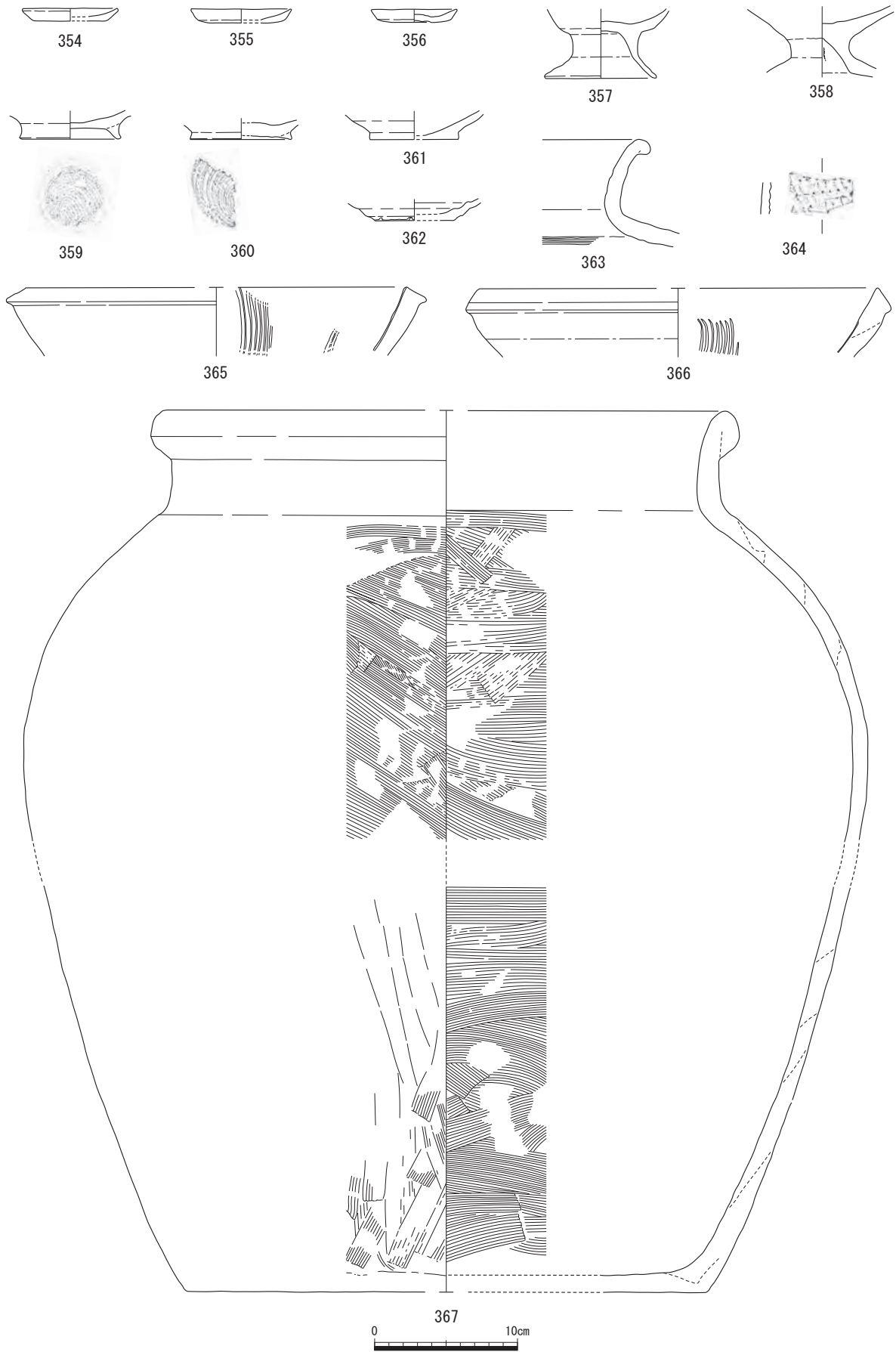
第 159 図 段状遺構 31 断面② (1/60)

段状遺構 7、柱穴列 22・23、土坑 8・9、集石 2、谷部の包含層 1 と複雑に重なることもあり、遺構の検出や覆土の掘り下げは難渋した。この段状遺構は谷部の包含層 1 の堆積層のうち、中世の包含層であるにぶい黄褐色土 (第 158・196 図一第 3 層) の下面で検出した。段状遺構 31 の床面北半は地山であるが、床面南半下は旧地形が谷部となることもあり、包含層 1 の古墳時代包含層にあたる暗褐色土 (第 158 図一第 22 層、第 196 図一第 10 層) が堆積していた。また、段状遺構 31 の埋土はにぶい黄褐色土 (第 158・196 図一第 5 層) であり、包含層 1 の中世包含層にあたる褐色土 (第 158 図一第 20 層、第 196 図一第 9 層) が堆積した後に造られたと考えられる。

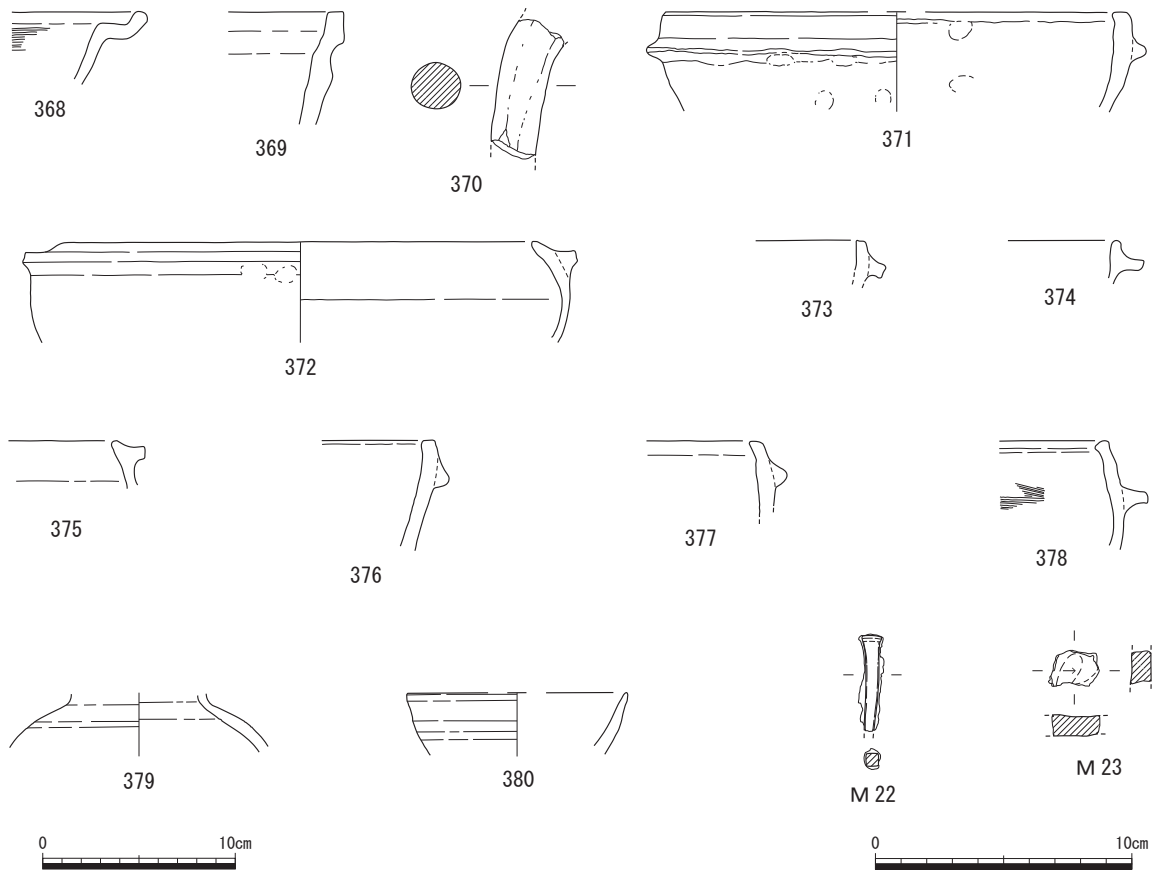
段状遺構 31 の埋没後は、北半では壁面に沿うように中世の遺物を含む明黄褐色土 (第 158 図一第 4 層) が堆積していた。さらに、段状遺構 31 の中央では集石 2、土坑 8・9 が確認されたが、集石 2 は段状遺構 31 - P 1 が埋没した後、その上に造られた。土坑 9 は段状遺構 31 の埋土である明褐色土 (第 174 図一第 4 層) を切っているうえ、集石 2 が土坑 9 を切るように配置されていたことから、段状遺構 31 が埋没し、集石 2 が設けられた後に造られたとみられる。土坑 8 は段状遺構 31 の床面で検出したが、配置状況から土坑 9 と同様に段状遺構 31 が埋没した後に造られたと推測される。

段状遺構 31 の床面では、北端で集石 1 が認められたほか、床面全体にピットが散在していた。ピットは 24 個を確認したが、浅いものが多いうえ、掘立柱建物の柱穴のような整然とした配置ではなかった。そうしたなか、床面中央に位置する P 1 では青銅製の鏡像 M 24 が埋納されていた。

段状遺構 31 の埋土や集石 1 では遺物が比較的多く包含していた。遺物として、土師器の小皿 354 ~ 356、高杯 357・358、勝間田焼の椀 359 ~ 362、甕 363・364、備前焼の播鉢 365・366、甕 367、瓦質土器の鍋 368 ~ 370、羽釜 371 ~ 378、褐釉陶器の壺 379、瀬戸・美濃焼の天目碗 380、鉄釘 M 22、銅滓 M 23 がある。出土層位をみると、356 ~ 358・360・365 ~ 367・369・370・372・380 は埋土上位、



第160図 段状遺構31出土遺物①(1/4)



第 161 図 段状遺構 31 出土遺物② (1/4・1/3)

354・355・359・361・363・375～377・M 22・M 23 は埋土下位、364・373・374 は床面付近から出土した。勝間田焼の椀 359・360 は美作国府跡の I 期、361 は I 2～II 2 期、362 は II 1～III 1 期に分類され、12 世紀から 13 世紀前葉まで幅がある。備前焼の摺鉢 365 は IV A 期、366 は IV A 期に分類され、14 世紀第 3 四半期～第 4 四半期に位置付けられる。備前焼の甕 367 は IV B 期で、15 世紀前半に比定される。褐釉陶器の壺 379 は 14～15 世紀に比定される。瓦質土器の鍋は、368 は 14 世紀前半、369 は 16 世紀代の可能性がある。瓦質土器の羽釜 371～378 は 13～14 世紀代の範疇で捉えられる。天目茶碗 380 は D 類で、16 世紀前半に比定される。このほか、段状遺構 31 一集石 1 内からも遺物が出土しており、段状遺構 31 が機能した時期に近い可能性がある。これらの遺物や出土状況から、段状遺構 31 が使用された時期は 14 世紀後半と考えられる。(米田)

段状遺構 31 - P 1 (第 162～164 図、写真 12、巻頭図版 4・図版 45・60)

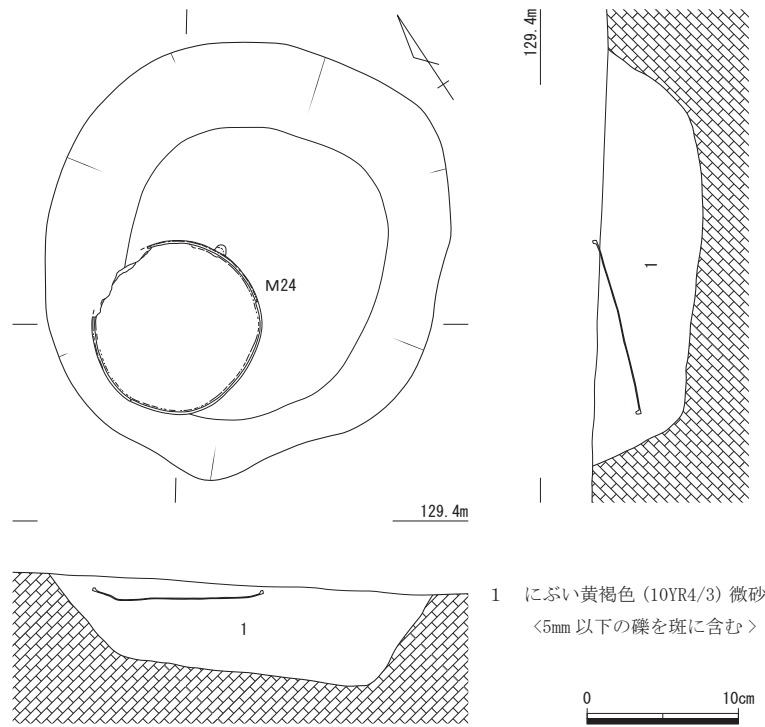
段状遺構 31 の床面中央に配置されたピットである。P 1 は径 26.4～29.1 cm の不整円形を呈し、深さ 6.7 cm である。掘り方の東寄り上面では、青銅製の鏡像 M 24 が水平に置かれた状態で見つかった。発掘調査の段階では鏡像の表面には土砂が付着し、全体は錆が覆われていたために、菩薩像が線刻されていたことは未確認であった。ただ、ピットの北側を半裁して掘り下げはじめてすぐに何らかの青銅製品であることが確認できたことから、慎重に掘り進めた。青銅製品の上面が見えるように精査したところ、一部に緑青が付着し、平面形は円形板状で、周りに幅 3 mm の縁がめぐり、縁の一部に半環状の鈕が付くことが認められたことから、調査の早い段階で銅鏡、あるいは鏡像や懸仏などの御正体

である可能性を念頭におくことができた。

鏡像の出土状況を復元すると、ピット上面において、菩薩像が線刻された鏡面を下、背面を上に向けて、鏡体をほぼ水平に置いた状態であることが分かり、丁寧に埋納されたとみられる。鏡像の横断面はほぼ水平であるのに対し、縦断面は15°ほど傾いていた。鏡像はピットの底面より3～5cmほど上で、ピットの上面及び段状遺構31の床面付近で確認した。出土した状態では、鏡像の右上側は欠損し、右半が土圧により著しく歪んでいた。また鏡像は一見すると形態を保っていたが、厚さが1mm前後と

非常に薄いうえ、表面に微細なヒビが随所に認められて、極めて脆弱な状態であった。なお、鏡像の表裏面や設置面となる埋土を精査したが、有機物や布目のような痕跡は確認することができなかった。

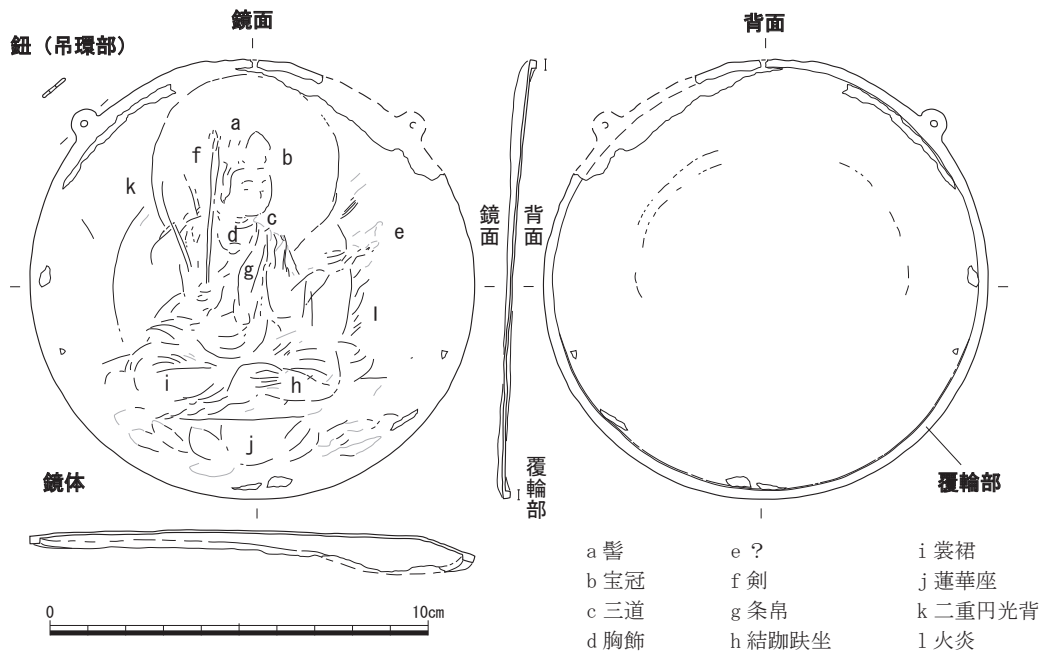
鏡像M24は青銅製で非常に脆かったため、取り上げ後、(公財)元興寺文化財研究所に保存処理を委託して行った。処理前の調査では遺物の構造や劣化状態、墨書の有無を確認するため、X線透過撮影及び赤外線撮影を行った。



第162図 段状遺構31-P1 (1/5)



第163図 段状遺構31-P1出土遺物 (1/2)



第 164 図 鏡像・尊像各部名称 (1/2)



写真 12 鏡像M 24 赤外線写真（拡大）

クリーニングは、実体顕微鏡で観察し、墨書、木質などの付着物に注意しながら進められた。その後、洗浄、防錆処理、養生、樹脂含浸、樹脂塗布、接合、補填、補強などの復元、補彩などの仕上げを行った。こうした保存処理とともに、材質分析、三次元計測も実施した。保存処理の結果、鏡体に菩薩像が線刻されていることが確認され、鏡像であることが明らかになった。

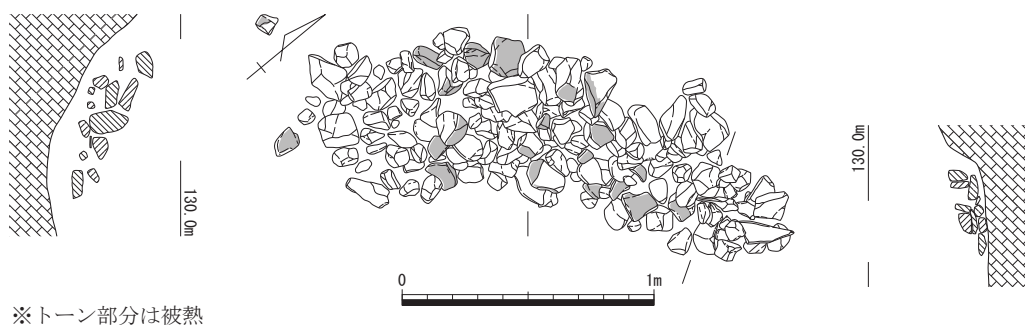
鏡像M 24は青銅製で、蛍光X線分析による材質分析（第5章－第6節）の結果、鉄、銅、鉛、スズと微量成分としてヒ素が検出された。なお、彩色に由来する元素は確認されていない。

鏡像は直径11.8cmの円形板状で、左上の縁には懸垂のための鈕が残存する。また、現状では右上の周縁部は欠損しているが、この辺りにも本来は鈕が付いていたことが想定される。背面の周りには幅3mmの覆輪部がめぐる。厚さは、鏡板が1mm前後、覆輪部が2mmと極めて薄い。鈕は直径8mmの半環状で、中央に直径1.5mmの孔がある。鏡板、覆輪部、鈕は一鑄されている。また、X線透過撮影では鏡体の中央に直径7.2cm程度の円形の痕跡が認められるが、鑄込みの際の痕跡だろうか。

鏡面には左斜めを向いた坐像が極細の線で刻まれている。像高は10.3cmである。線刻された尊像の頭部は、髻を結び、宝冠を付け、顔相は穏やかで、眼、まゆ毛、鼻が表現されている。首元には三道、胸飾が簡素に表され、上半身に条帛を着ている。左手は曲げて手の平を上に向け、右手は持物として剣を立てて持つように表現されている。下半身は裳裙をはき、結跏趺坐により蓮華座に坐している。光背は二重円光背で、左側には火炎のような表現も認められる。以上のような特徴から、線刻された尊像は、文殊菩薩像、又は虚空蔵菩薩像であった可能性があり、形態や製作技術をみると、この鏡像は平安時代後期から鎌倉時代初期に製作されたものと考えられる（第5章－第4・5）。P 1に鏡像が埋納された時期は、段状遺構31が使用された14世紀後半と考えられる。このことから、この鏡像は製作されてから150年以上も長く信仰されたとみられる。なお、墨書や彩色は肉眼観察及び赤外線撮影では確認できなかった。（米田）

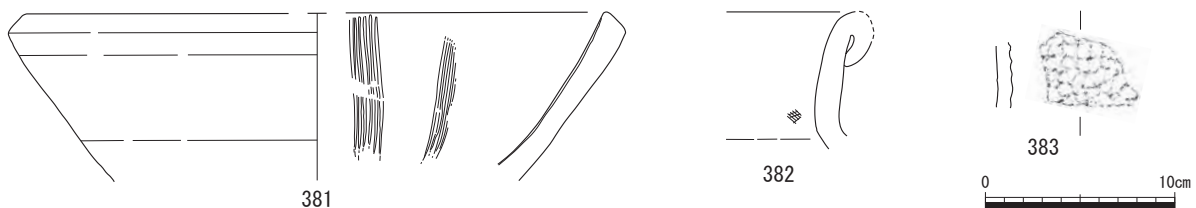
段状遺構31－集石1（第165・166・188図、写真13、図版42・49・55）

3区の中央、段状遺構31の北端に位置する。集石1は段状遺構31北端の床面付近で確認したこと



※トーン部分は被熱

第165図 段状遺構31－集石1（1/30）



第166図 段状遺構31－集石1出土遺物（1/4）

から、段状遺構 31 が機能していた時に備えられたと考えられる。集石の規模は長軸 204 cm、短軸 72 cm、高さ 19 cm である。石は不規則ながらも一定の範囲内に密集して集められていた。石は計 237 個あり、大きさは 6 ~ 21 cm、重量はおよそ 0.1 ~ 3kg と様々である。

集石には被熱を受けた石が認められたが、被熱痕のある石は散在しているうえ、集石内や周辺では焼土や炭は認められなかったため、別の地点で石を用いて何らかの作業で



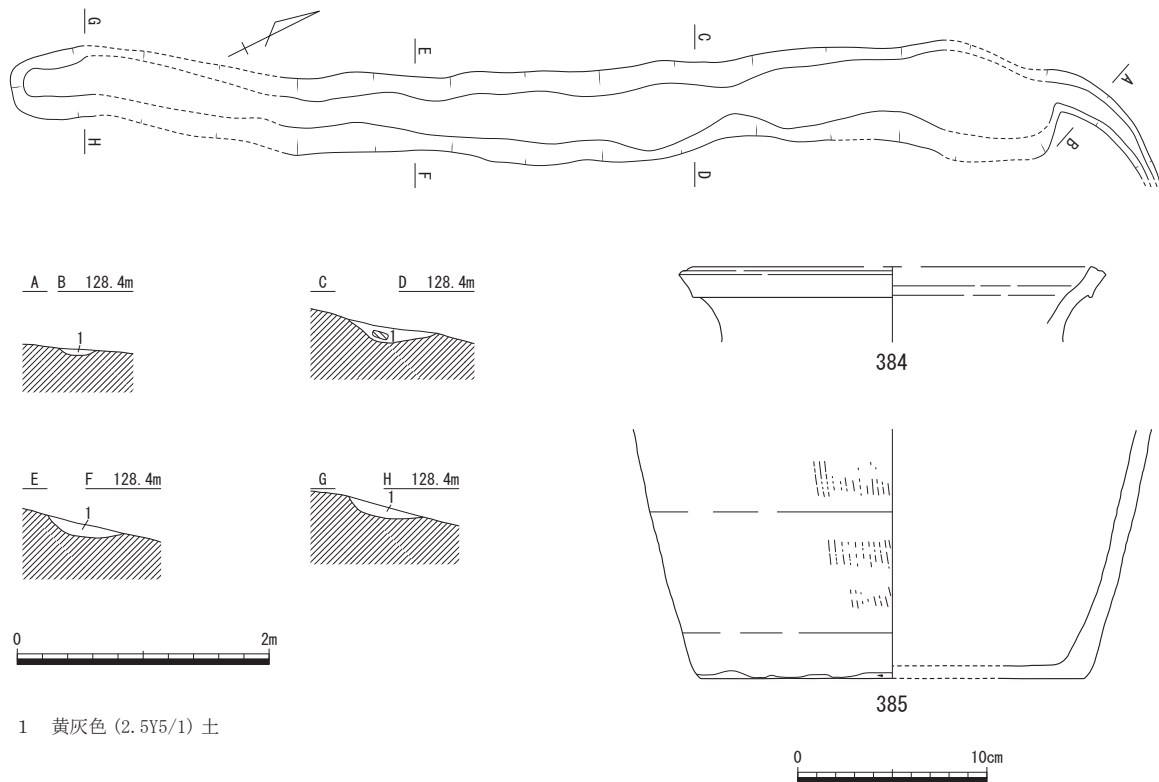
写真 13 段状遺構 31 - 集石 1 (南東から)

被熱を受けたのちに二次的に石を集積したものと推測される。集石内からは備前焼の播鉢 381、甕 382、勝間田焼の甕 383 が出土した。このうち、381・382 は IV A 期で、14 世紀第 3 四半期に位置付けられる。段状遺構 31 が使用された時期と同様に、石が集積された時期は 14 世紀後半と考えられる。

(米田)

段状遺構 32 (第 167 図、図版 46)

3 区中央に位置し、谷部で確認した包含層 1 の中層 (第 196 図 - 第 10 層) 上面で確認した。斜面地に造られたため、溝状遺構のみを確認したに過ぎず、平坦面は残存していなかった。溝状遺構の規模は長さ 8.95 m、幅 0.75 m、深さ 17 cm である。北端は溝が細くなって湾曲する。現状では柱穴は確認していない。遺物は須恵器の甕 384、備前焼の甕 385 が出土した。時期は中世に比定される。(米田)

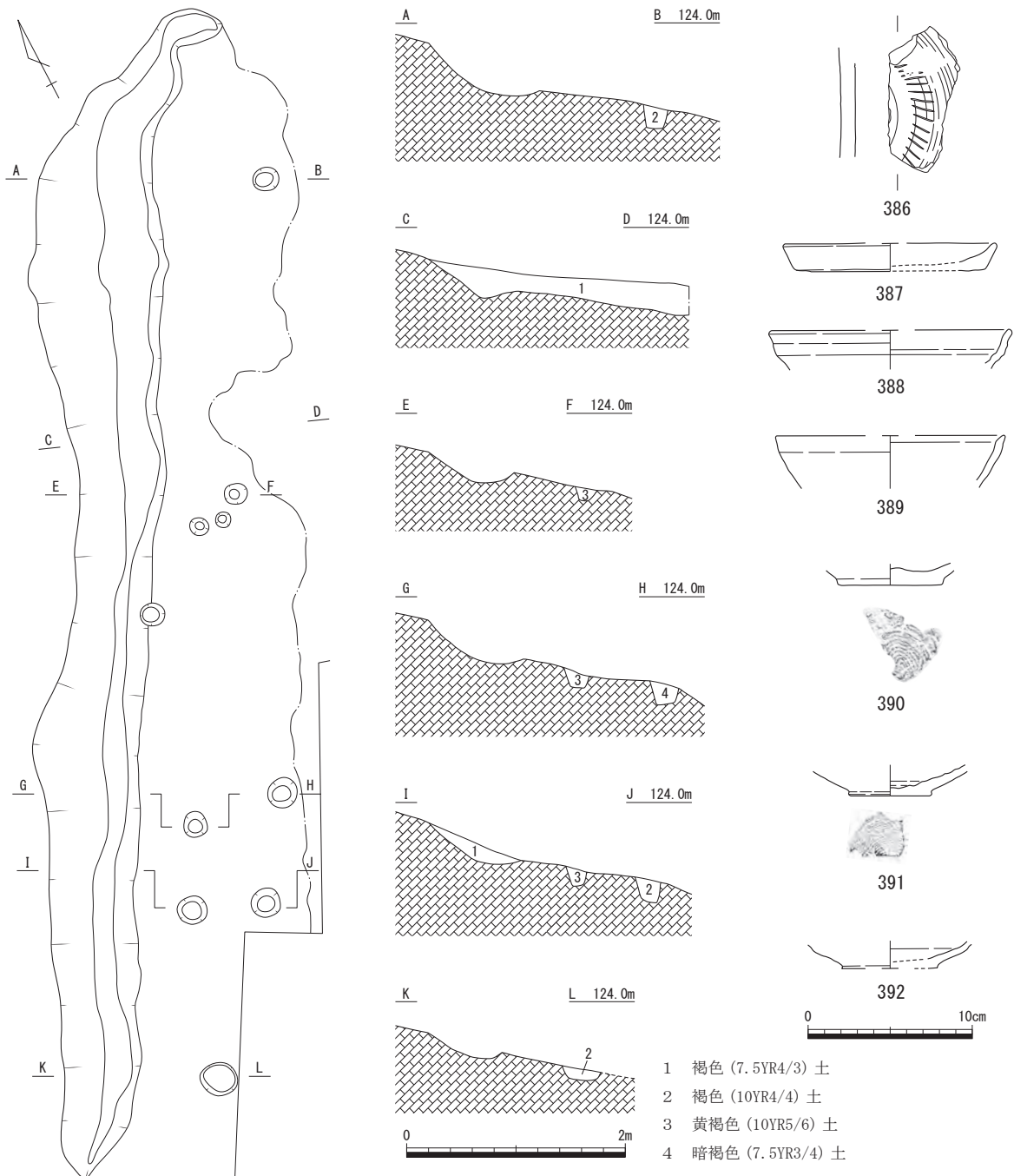


1 黄灰色 (2.5Y5/1) 土

第 167 図 段状遺構 32 (1/60)、出土遺物 (1/4)

段状遺構 33 (第 168 図、図版 46)

3 区の北東に位置する。整地面 3 から北東 18 m あたりの斜面で確認した。長軸 10.45 m、短軸 1.63 m、深さ 27 cm である。西側には幅 70 ~ 130 cm の溝がめぐる。溝の東側は最大幅 160 cm の平坦面が残存していた。床面では南半を中心にピットが散在していたが、掘立柱建物を構成するような整然とした配置ではない。遺物は埋土から須恵器の提瓶 386、土師器の皿 387、勝間田焼の椀 388 ~ 392 が出土した。このうち、387・389・390 は下位から出土した。時期は中世で、12 世紀代と考えられる。(米田)



第 168 図 段状遺構 33 (1/60)、出土遺物 (1/4)

段状遺構 34 (第 169 図)

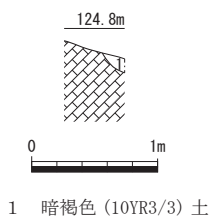
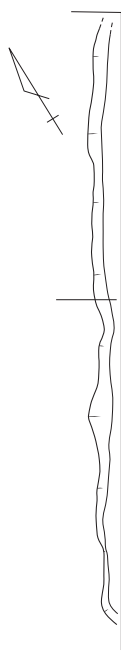
3 区の南東端、整地面 3 の東側中央に位置する。現状では調査区東端で段状遺構の上端を確認したに過ぎず、大半は調査区外の東側へ続く。確認した規模は長軸 4.62 m、短軸 0.28 m、深さ 13 cm 以上である。遺物は出土していなが、埋土から時期は中世に比定される。(米田)

段状遺構 35 (第 170 図、図版 46・56)

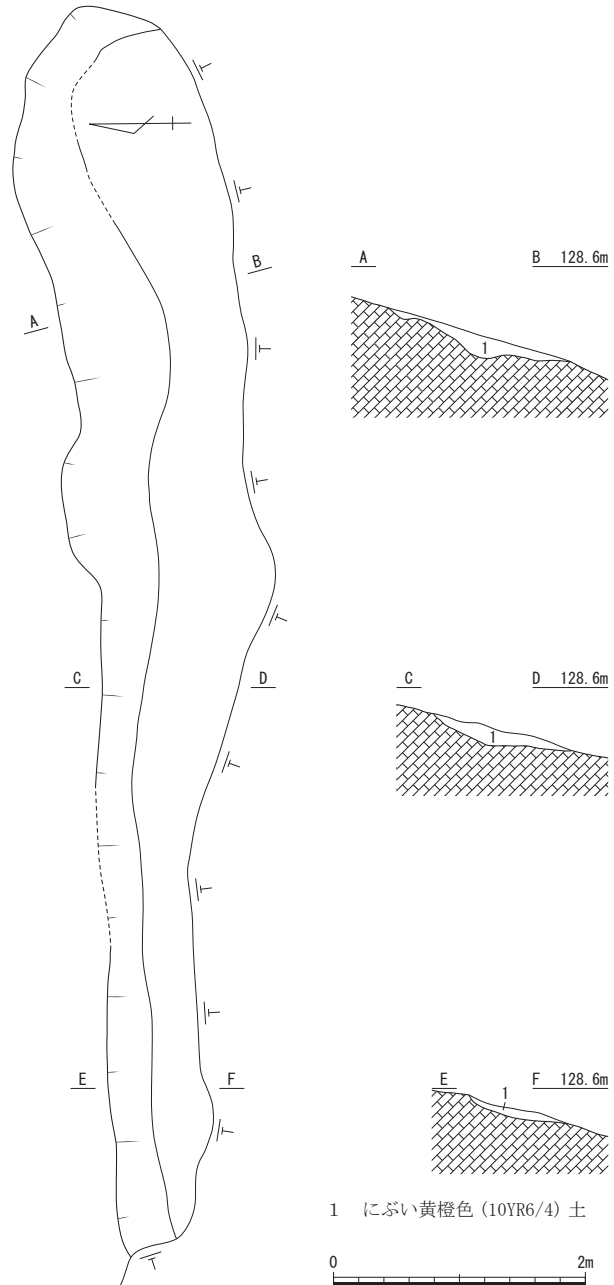
4 区の南側に位置し、整地面 4 より南側の緩斜面で確認した。残存する規模は長軸 9.60 m、短軸 0.93 m、深さ 26 cm である。西端と南端は削平されている。平坦面の最大幅 105 cm ほど残存する。溝やピットは確認していない。埋土から瓦質土器の羽釜 393 が出土した。時期は中世で、14 世紀である。(米田)

段状遺構 36 (第 171 図)

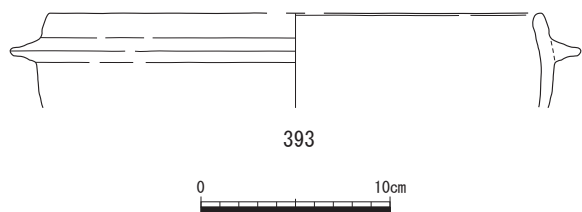
4 区西端中央に位置し、整地面 1・4 の間で確認した。現状では段状遺構の東端を確認したに過ぎず、大半は調査区外



第 169 図 段状遺構 34 (1/60)



1 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 土



第 170 図 段状遺構 35 (1/60)、出土遺物 (1/4)

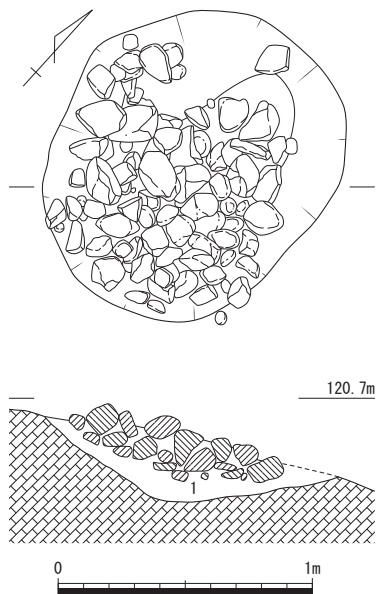


第171図 段状遺構36 (1/60)

の西側に続く。規模は長軸3.6m以上、短軸2.0m、深さ66cmである。段状遺構29と同じく、本書では段状遺構として報告するが、調査区外の西側に広がるのが予想される整地面の東端にあたる可能性がある。時期は埋土や配置状況から中世と考えられる。(米田)

3 土坑

土坑7 (第172図、図版47)



1 黄褐色(10Y5/6)土(炭を含む)

第172図 土坑7 (1/30)

2区西側の斜面からの傾斜が緩くなる地点で、柱穴列3～6の南に位置する。検出時に礫の集中部分が認められたことで認識した。このとき、集中部分北側の礫が一部外されたため、図化できていない。埋土は基盤層より若干灰色がかかった色調で、炭化物を含んでいる。土坑の平面はやや楕円形で、長軸126cm、短軸109cm、深さは32cmを測る。礫群は土坑底面から10cm浮いた位置に密集して分布していた。礫は5～20cmの大きさで、ほとんどが角礫であった。また、どの礫にも熱影響は認められなかった。出土遺物は確認できなかったが、中世の可能性が高い。(氏平)

土坑8 (第173図、図版47)

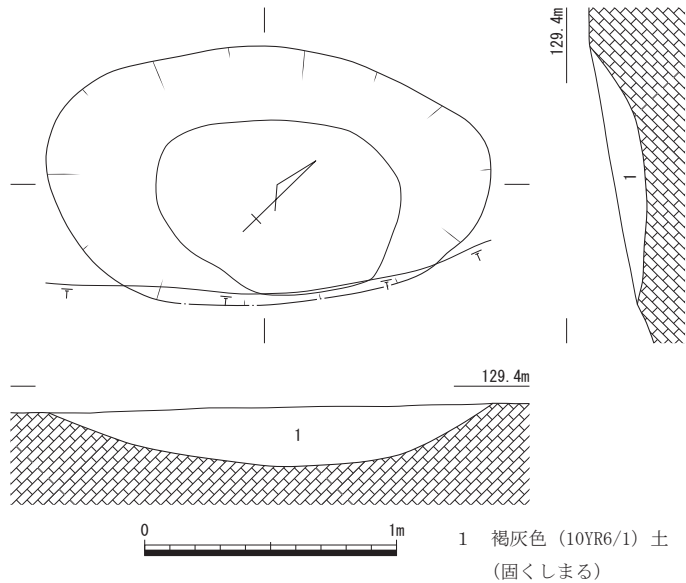
3区の中央よりやや西に位置し、土坑9の東に近接している。長軸177cm、短軸103cmを測り、平面は楕円形を呈し、断面形は腕形となっている。検出面からの深さは23cmである。詳細な時期を特定できる遺物は出土していないが、周囲の遺構配置から中世の土坑と考えられる。(樋口)

土坑9 (第174図、図版47)

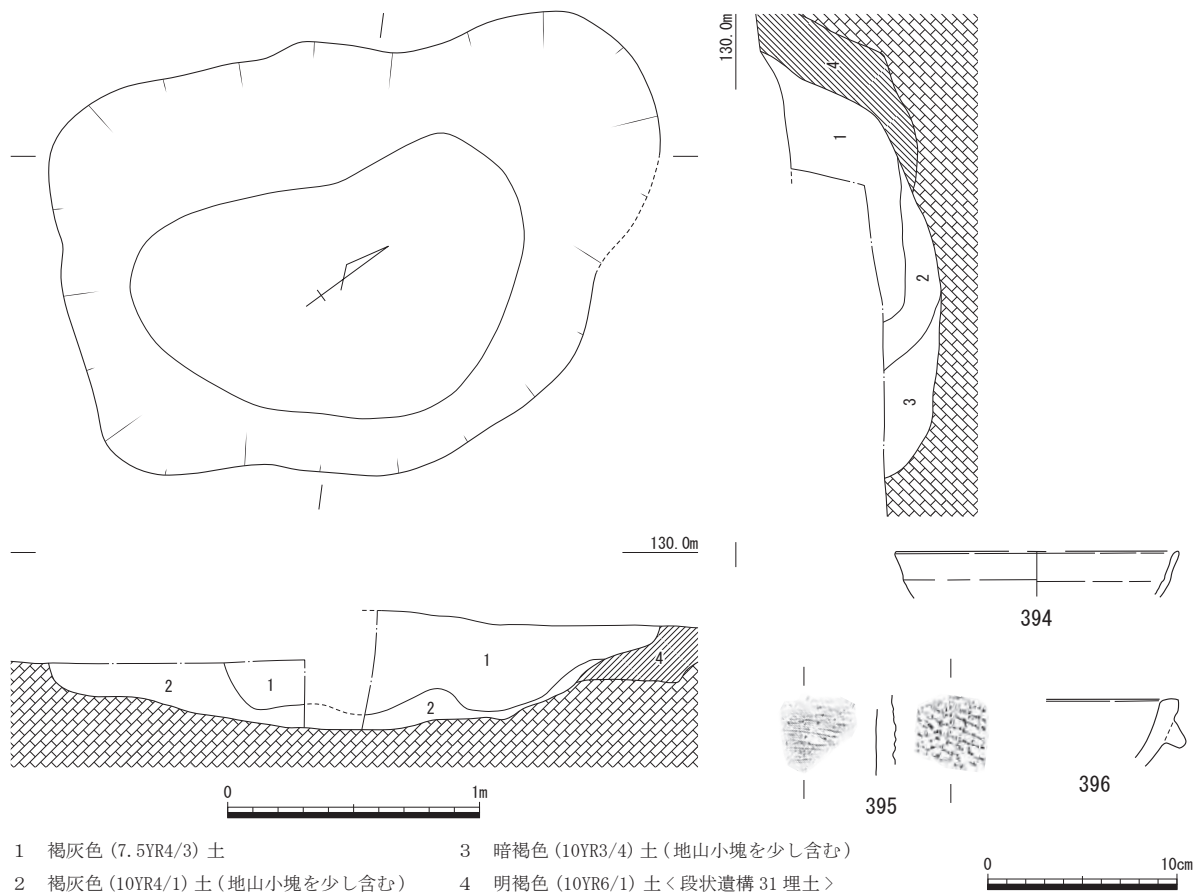
3区の中央よりやや西に位置し、土坑8と集石2に近接し、段状遺構31と重複する場所にある。長軸258cm、短軸175cmを測り、平面が不整楕円形を呈した土坑で、断面形も不整碗形である。検出面からの深さは71cmとなる。出土遺物は、土坑の埋土から勝間田焼椀394、勝間田焼甕395、瓦質土器羽釜396の破片が出土しており、これらは12～13世紀に比定される。ただし、土層断面から、段状遺構31の埋土を掘り込む形で土坑が掘られていることより、段状遺構31よりも新しい時期の土坑である。(樋口)

土坑10 (第175図、図版47)

4区北西の整地面1の中央西寄りに位置する。土坑の東半は柱穴列12に伴う溝及び土坑11に切られる。平面形は方形、断面形は皿形で、規模は長軸173cm、短軸の残存長152cmを測る。深さ8cmと浅く、本来の遺構上面が大きく削平されていることが想定され



第173図 土坑8 (1/30)



第174図 土坑9 (1/30)、出土遺物 (1/4)

る。埋土が周辺の遺構と異なることも踏まえると、斜面の整地前など、中世の中でも古い段階の遺構である可能性が高い。(山口)

土坑 11 (第 175 図、図版 47)

4区北西の整地面 1 の北西寄り、土坑 10 の東側に位置する。土坑の北西側を柱穴列 12 に伴う溝に切られる。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は長軸 104cm、短軸 66cm、深さ 11cm を測る。遺物は出土していないが、遺構配置や埋土から時期は中世と考えられる。(山口)

土坑 12 (第 176 図、図版 47)

4区北西の整地面 1 の北西、土坑 10 の西側に隣接する。平面形は方形、断面形は箱形である。規模は長軸 96cm、短軸 91cm、深さ 41cm を測る。遺構配置や埋土から時期は中世と考えられる。(山口)

土坑 13 (第 177 図)

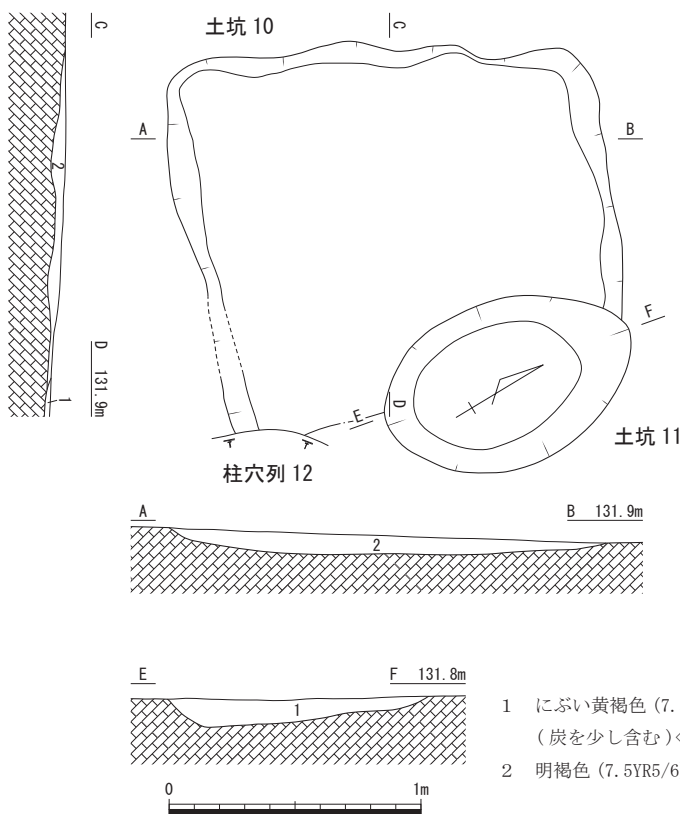
4区北西の整地面 1 の中央に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は長軸 115cm、短軸 77cm である。深さ 6cm であり、重複する掘立柱建物 2～4 により上面を削平された可能性が高い。土坑 14 と埋土が類似することから、同様の時期とみられる。(山口)

土坑 14 (第 177 図、図版 47)

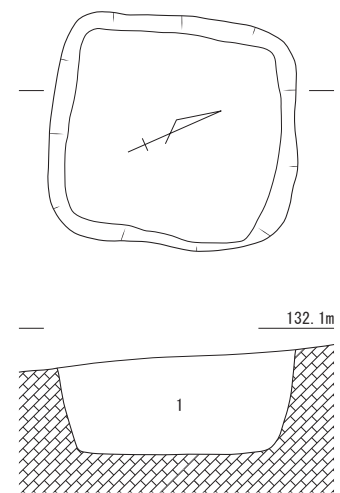
4区北西の整地面 1 の南西側に位置し、掘立柱建物 5 と重複する。平面形は方形、断面形は逆台形である。規模は長軸 91cm、短軸 88cm、深さ 18cm を測る。遺物は備前焼の播鉢 397 が出土しており、時期は中世と考えられる。(山口)

土坑 15 (第 177 図、図版 47)

4区北西の整地面 1 の南側に位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は長軸 217cm、



第 175 図 土坑 10・11 (1/30)



1 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 土

- 1 にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) 土
(炭を少し含む) <土坑 11>
- 2 明褐色 (7.5YR5/6) 土 <土坑 10>

第 176 図 土坑 12 (1/30)

短軸 139cm、深さ 10cm を測る。重複する掘立柱建物 5・7・10 により上面を削平された可能性が高い。土坑 14 と埋土が類似することから、同様の時期とみられる。

(山口)

土坑 16 (第 177 図、図版 48)

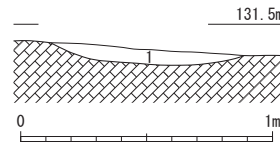
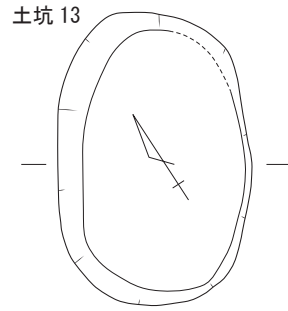
4 区北西の整地面 1 の南端付近に位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は長軸 182cm、短軸 118cm、深さ 18cm を測る。遺物は鉄釘 M 25 が出土している。遺構配置や埋土から時期は中世と考えられる。

(山口)

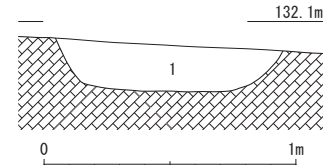
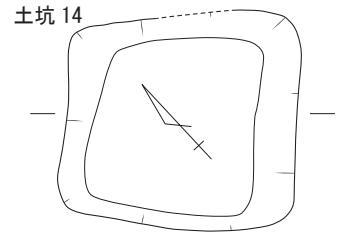
土坑 17 (第 178 図、図版 48・59)

4 区北西の整地面 1 の南端付近に位置し、掘立柱建物 5 及び土坑 16 に切られる。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は長軸 176cm、短軸 94cm、深さ 10cm を測る。遺物は瓦質土器の羽釜 398、鉄釘 M 26 が出土している。出土遺物から時期は 14 世紀頃と考えられる。

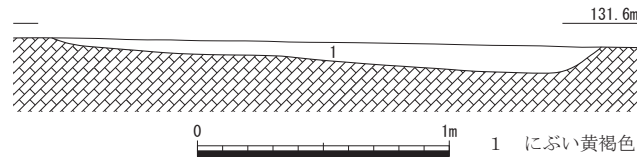
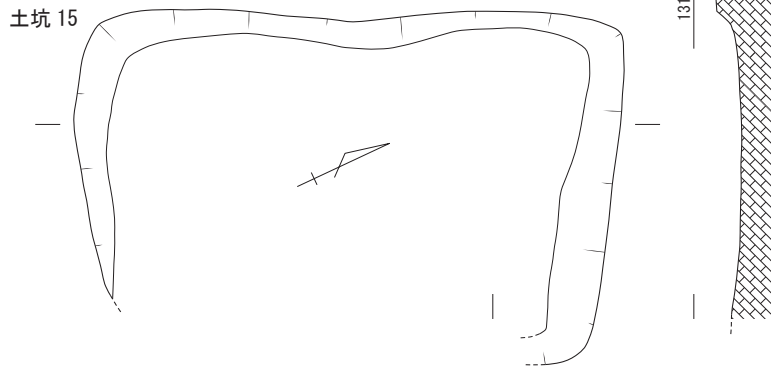
(山口)



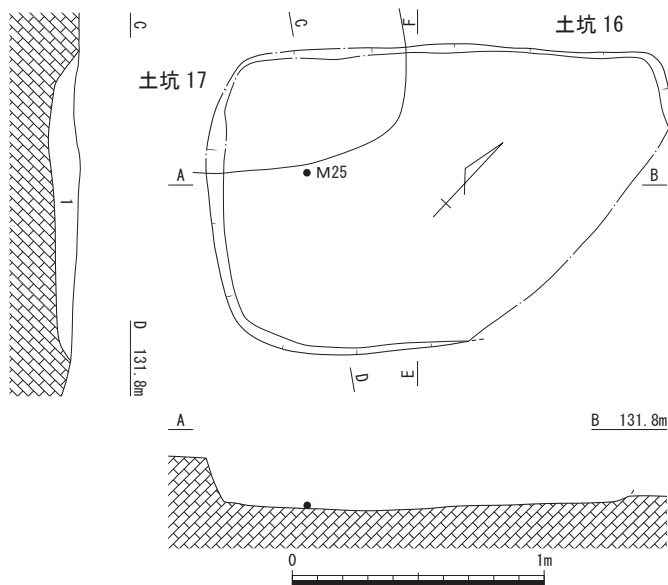
1 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 土 <地山塊を多く含む>



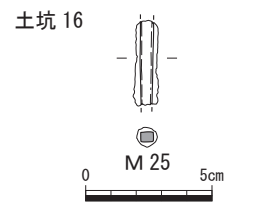
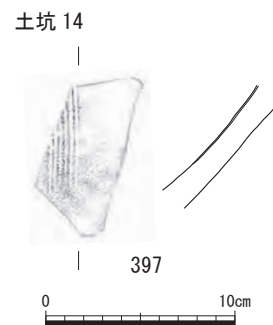
1 にぶい褐色 (7.5YR5/4) 土 <地山塊を多く含む>



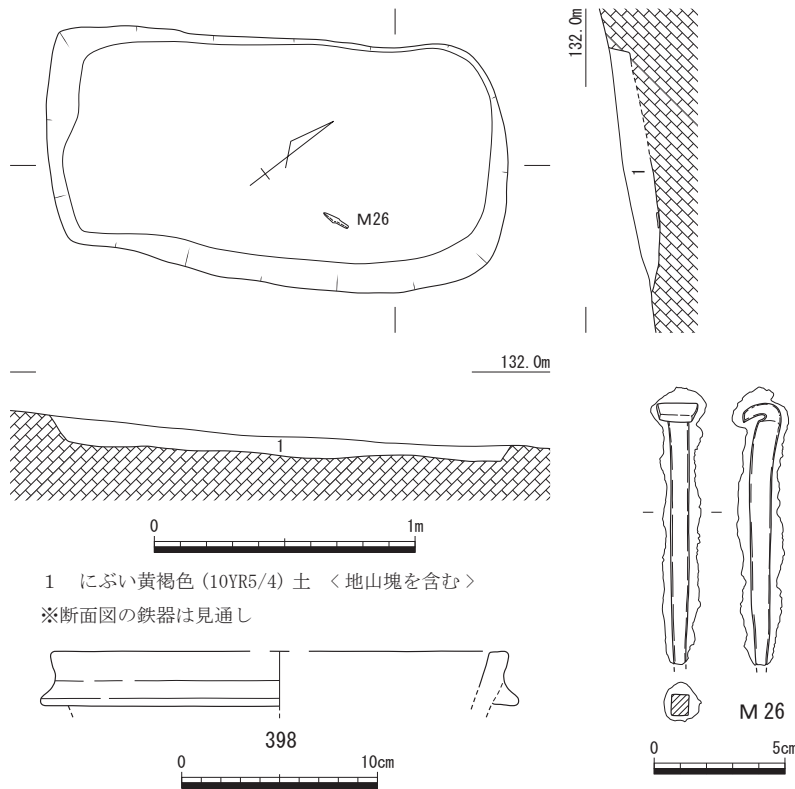
1 にぶい黄褐色 (7.5YR5/4) 土 <地山塊を多く含む>



1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土

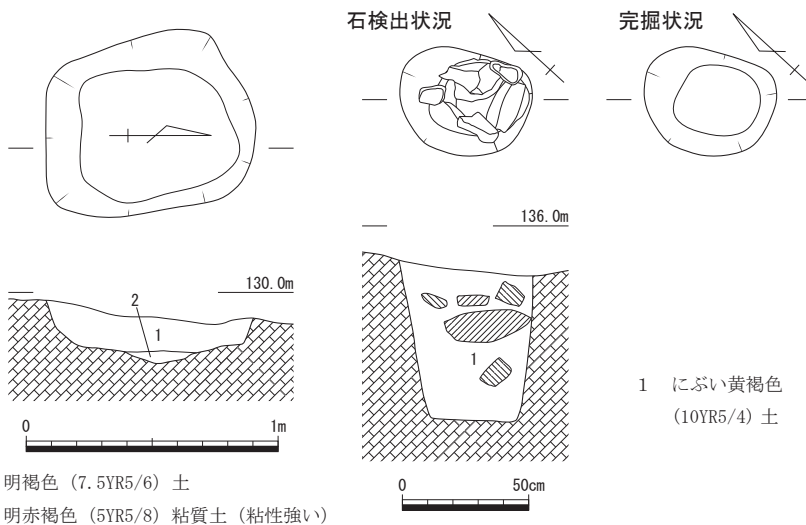


第 177 図 土坑 13 ~ 16 (1/30)、土坑 14・16 出土遺物 (1/4・1/3)



1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 <地山塊を含む>
※断面図の鉄器は見通し

第178図 土坑 17 (1/30)、出土遺物 (1/4・1/3)



1 明褐色 (7.5YR5/6) 土
2 明赤褐色 (5YR5/8) 粘質土 (粘性強い)

第179図 土坑 18 (1/30)

第180図 土坑 19 (1/30)

土坑 18 (第179図)

4区中央、整地面4の西側調査区端に位置し、掘立柱建物19～21に隣接する。平面形は不整形、断面は不整逆台形を呈し、規模は長軸82cm、短軸69cm、深さ26cmである。出土遺物はなく時期・性格は判然としないが、埋土及び掘立柱建物19～21から中世の遺構の可能性がある。(四田)

土坑 19

(第180図、図版48)

4区中央、整地面4の北端に位置し、掘立柱建物23・24の北隣で確認した。平面形は不整楕円形で、断面形は箱形である。規模は長径51cm、短径41cm、深さ63cmである。上層には長さ10～35cm大の円礫や角礫が8個程度まとまって廃棄されていた。周辺では掘立柱建物を構成するような他の柱穴が認められない。遺物は出土していない。埋土から中世の可能性ある。(米田)

土坑 20 (第181図、図版48)

3区の南東、整地面3の北端に位置し、土坑21の東隣にある。平面形は円形、断面形は不整逆台形である。規模は径60cm、深さ31cmである。土坑の下半では角礫が3個ほど認められた。遺物は瓦質土器の羽釜399が出土した。時期は14世紀と考えられる。(米田)

土坑 21 (第181図)

3区の南東、整地面3の北端に位置し、土坑20の西隣で確認した。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。規模は径56cm、深さ29cmである。遺物は認められなかった。時期は埋土や配置状況か

ら中世と推測される。

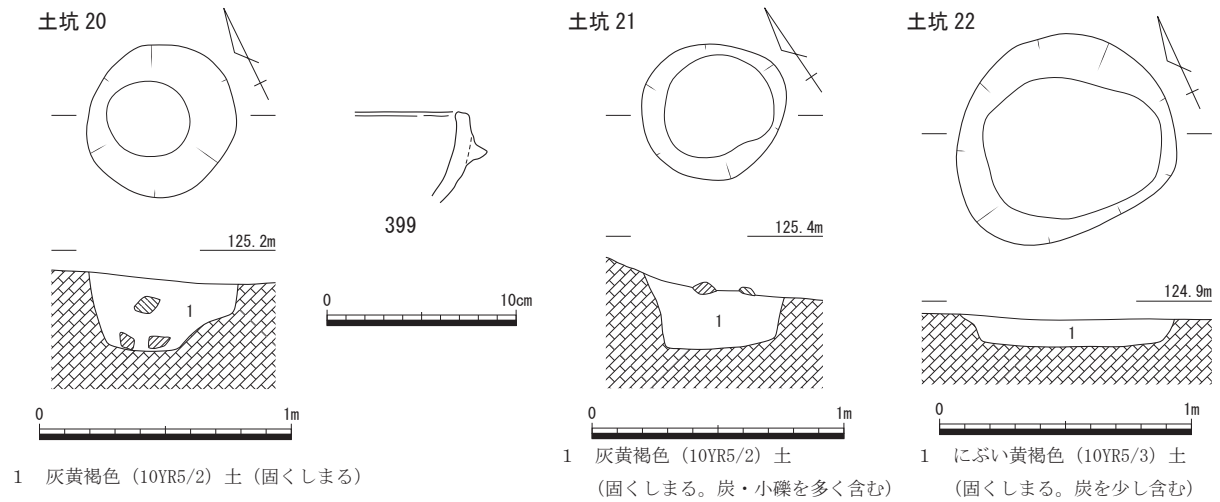
(米田)

土坑 22 (第 181 図)

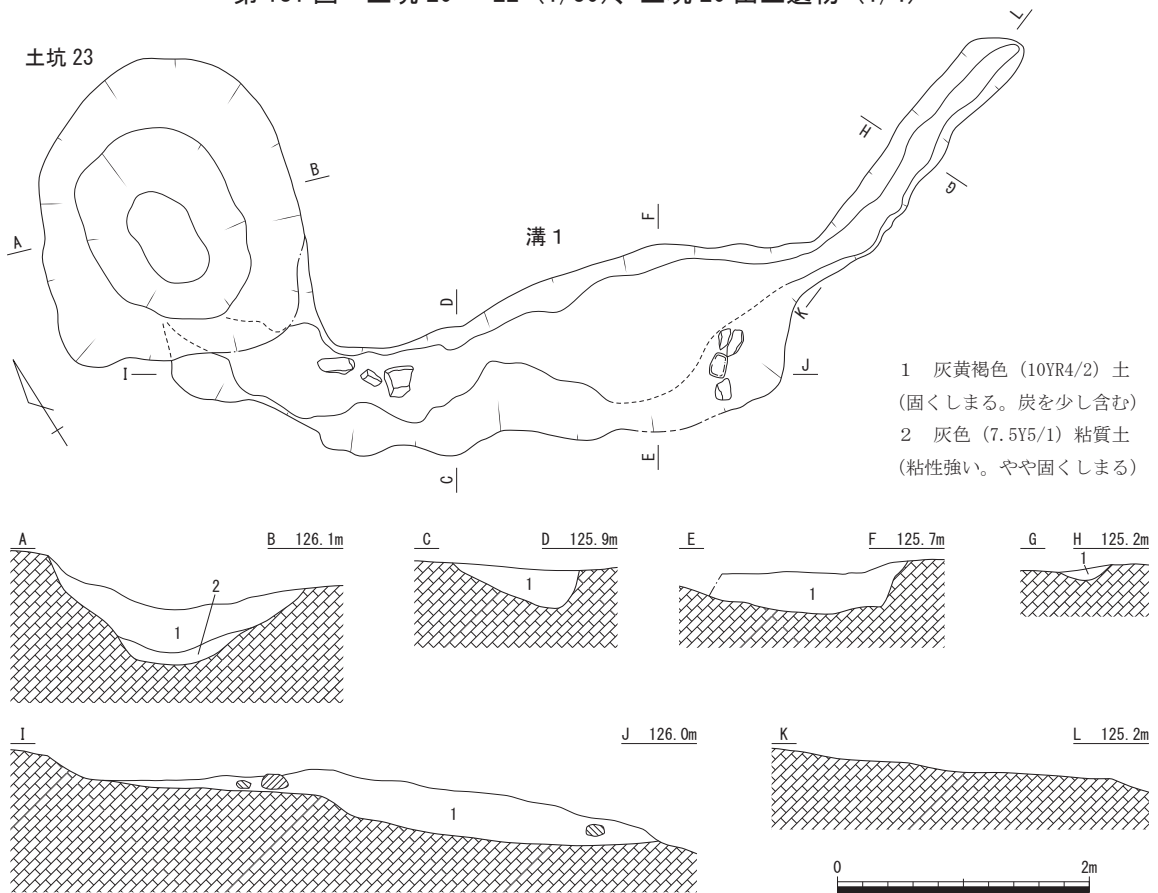
3区の南東、整地面3の中央、掘立柱建物16の床面で確認した。掘立柱建物16に伴う可能性もあるが、個別の土坑として報告する。平面形は不整円形、断面形は皿形である。規模は長径90cm、短径79cm、深さ11cmである。出土遺物はないが、時期は埋土や配置状況から中世に比定される。(米田)

土坑 23 (第 182・183 図、図版 48)

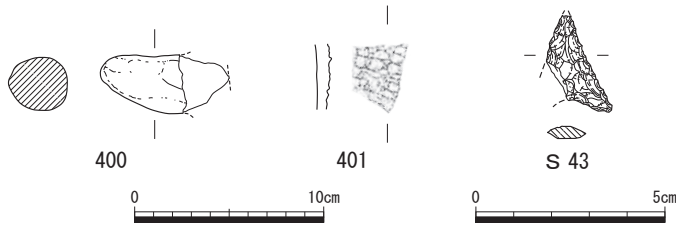
3区の南東、整地面3の北西、柱穴列28～30の北隣で確認した。土坑23の南側は溝1と連結し、



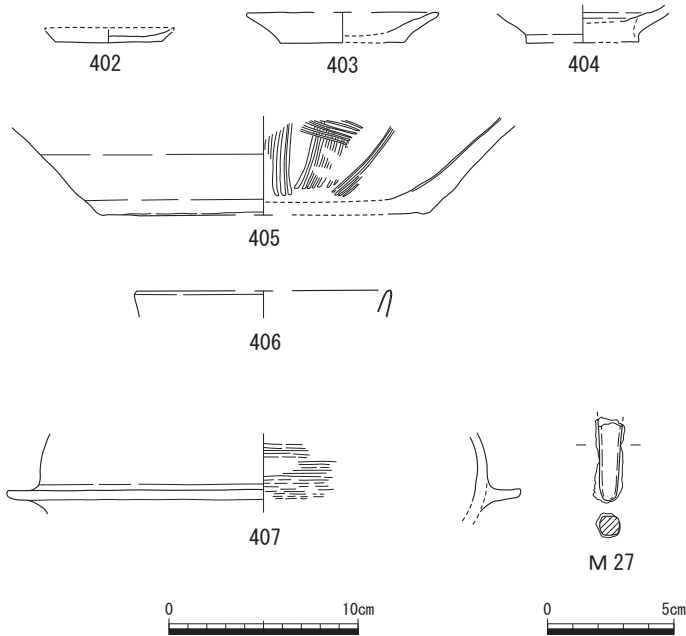
第 181 図 土坑 20～22 (1/30)、土坑 20 出土遺物 (1/4)



第 182 図 土坑 23、溝 1 (1/60)



第183図 土坑23出土遺物 (1/4・1/2)



第184図 溝1出土遺物 (1/4・1/3)

埋土は同じであったことから、同時併存して有機的な関係にあったことが推測される。平面形は不整円形、断面形は不整逆台形である。規模は長径244cm、短径208cm、深さ86cmであり、本遺跡の中世の土坑としては最も大きい。埋土は2層に分かれ、第2層は灰色粘質土で粘性が強いことから、本土坑が機能していたときは底面に10cmほど水が溜まっていた可能性がある。遺物は第1層から土師器の甑400、勝間田焼の甕401、サヌカイト製石鏃S 43が出土した。時期は中世と考えられる。

(米田)

4 溝

溝1 (第182・184図、写真14・15、図版48)

3区の南東、整地面3の北西、柱穴列28～30の北隣で確認した。前述したとおり、この溝は土坑23と連結する。溝は東に延びて、先端は

北東に屈曲する。溝は延長6.5m程度である。幅は、土坑23との連結部では123cm、中央では150cmと幅広く、東側は40cmと狭くなる。底面は東に向かって徐々に下がる。また、溝の東側と中央南肩の2か所では13～25cm大の石が3～4個ずつまとまって認められた。遺物は土師器の小皿402・403、勝間田焼の椀404、備前焼の挿鉢405、青磁の碗406、瓦質土器の羽釜407、鉄釘M 27が出土した。時期は出土遺物から14世紀後半頃に比定される。

(米田)



写真14 溝1土層断面 (南西から)



写真15 溝1完掘状況 (東から)

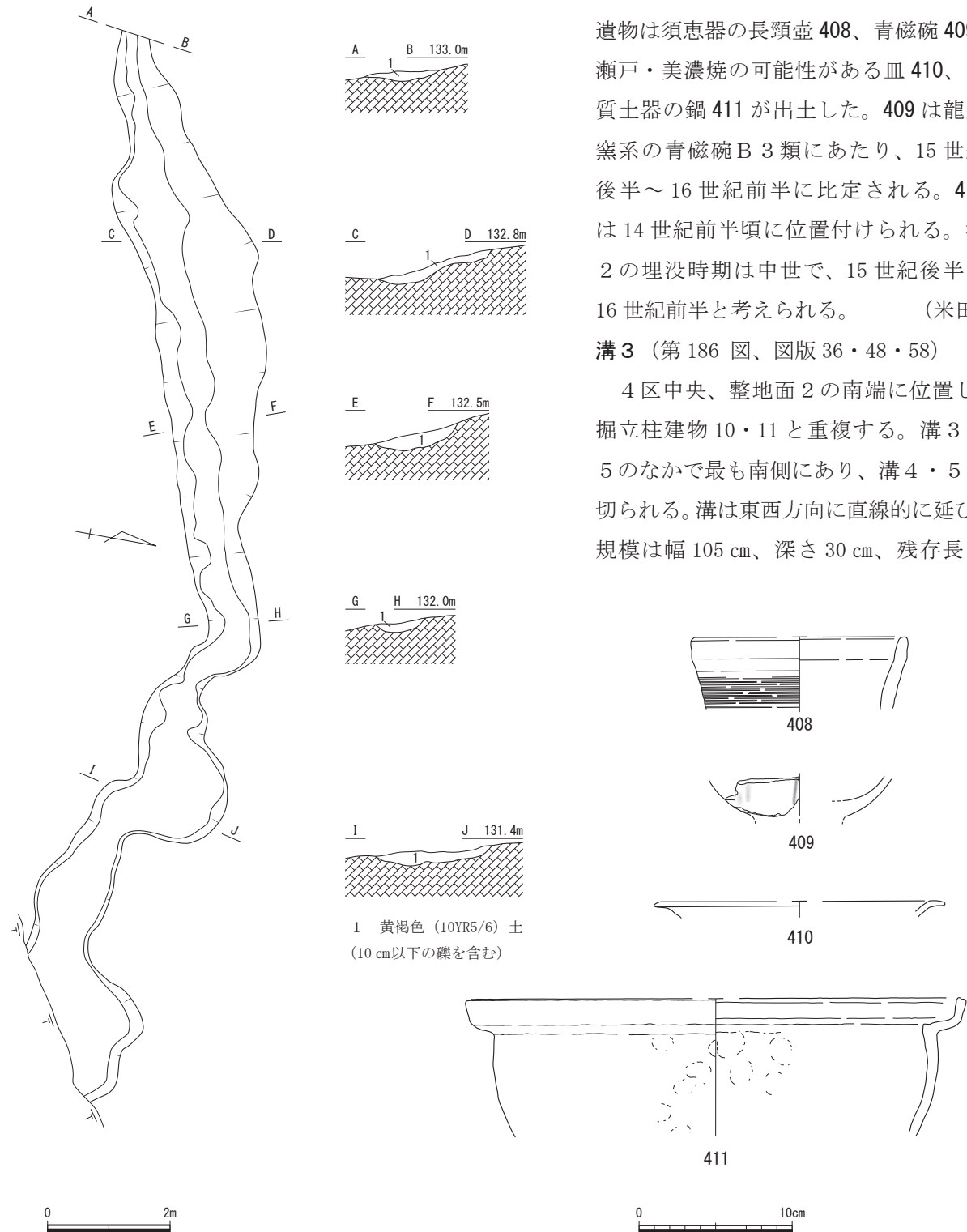
溝2 (第185図、図版48・56)

3区の西側中央、整地面1の北端、段状遺構29の南隣に位置する。延長17.4m、幅2.5m前後、深さ25cmの溝である。西半は直線的に伸び、東半は堅穴住居5付近の標高131.9mあたりでやや東へ屈曲する。西端は調査区外へ続き、東端は130.5mあたりで削平されている。この溝は整地面1の北側に沿うように配置されており、排水などの機能を果たしたことが推測される。

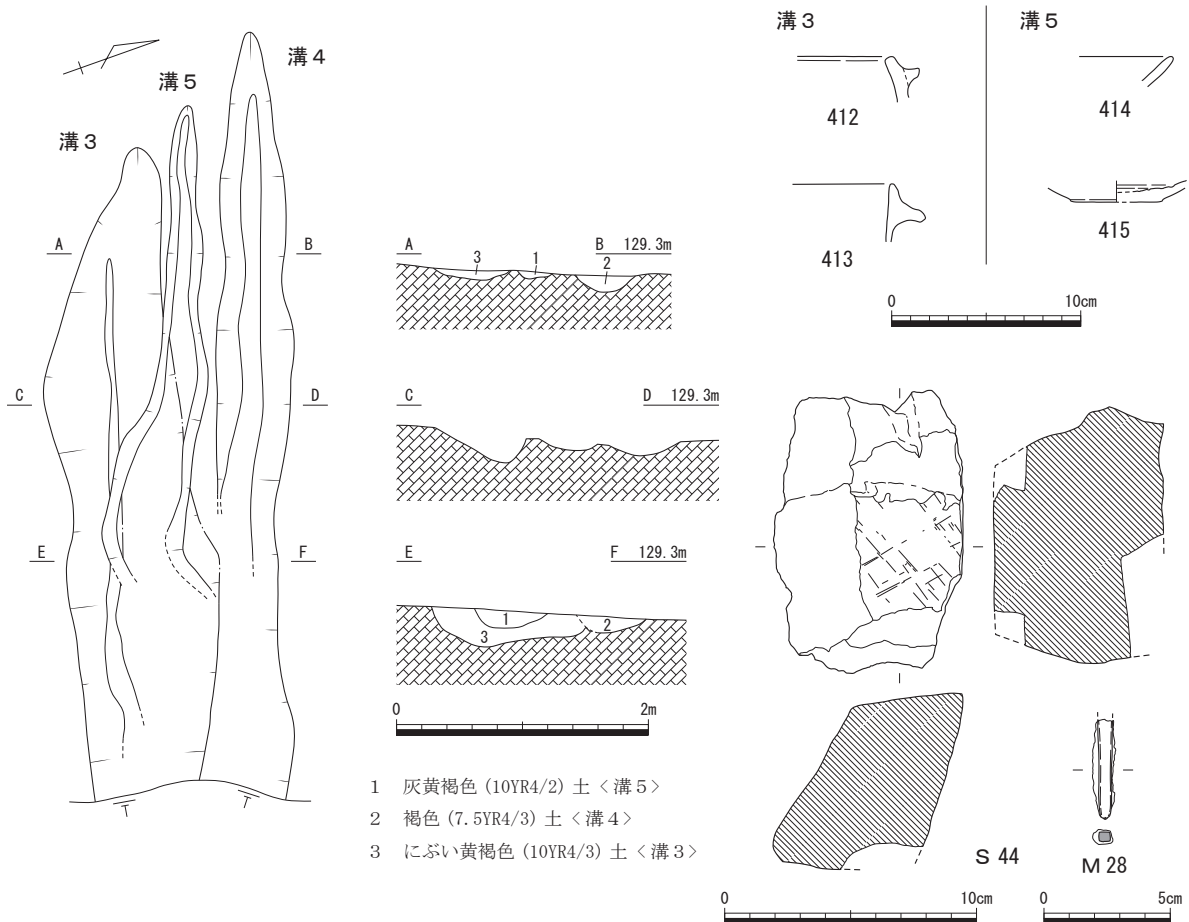
遺物は須恵器の長頸壺408、青磁碗409、瀬戸・美濃焼の可能性がある皿410、瓦質土器の鍋411が出土した。409は龍泉窯系の青磁碗B3類にあたり、15世紀後半～16世紀前半に比定される。411は14世紀前半頃に位置付けられる。溝2の埋没時期は中世で、15世紀後半～16世紀前半と考えられる。(米田)

溝3 (第186図、図版36・48・58)

4区中央、整地面2の南端に位置し、掘立柱建物10・11と重複する。溝3～5のなかで最も南側にあり、溝4・5に切られる。溝は東西方向に直線的に伸び、規模は幅105cm、深さ30cm、残存長は



第185図 溝2 (1/100)、出土遺物 (1/4)



第186図 溝3～5 (1/60)、溝3・5出土遺物 (1/4・1/3)

5.15 mで、東端は削平されている。断面形は楕形を呈する。埋土から瓦質土器の羽釜412・413、流紋岩製砥石S 44、鉄釘M 28が出土した。時期は14世紀代の可能性があり、溝4・5より古い。(米田) 溝4 (第186図、図版36・48)

4区中央、整地面2の南端に位置し、掘立柱建物10・11と重複する。溝3～5のなかで最も北側にあり、溝3を切り、溝5に切られる。東西方向に直線的に伸び、溝3・5と流走方向はほぼ同じである。規模は幅65 cm、深さ45 cmで、残存長は5.98 mで、東端は削平されている。断面形は楕形を呈する。出土遺物はない。時期は埋土や配置状況から中世の可能性があり、溝3・4より新しい。(米田)

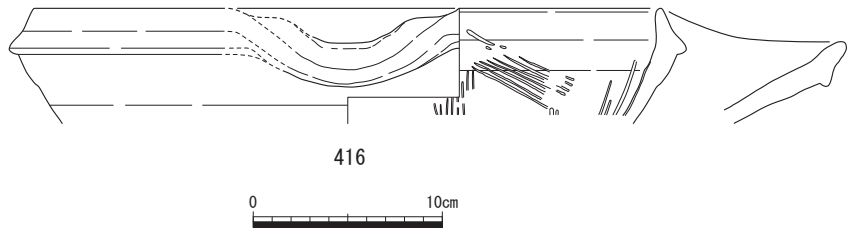
溝5 (第186図、図版36・48)

4区中央、整地面2の南端に位置し、掘立柱建物10・11と重複する。溝3～5の中央にあたり、溝3・4を切る。東西方向に直線的に伸び、規模は幅62 cm、深さ23 cmで、溝3・4より浅い。残存長は3.85 mで、東端は浅くなって収束する。断面形は楕形を呈する。出土遺物は土師器の小皿414、勝間田焼の椀415がある。時期は中世と考えられ、溝3より新しく、溝5より古い。(米田)

溝6 (第147・187図、図版41)

4区北東端、整地面3の南端に位置する。北西から南東に直線的に伸びる溝である。残存長は6.90 mで、北端は攪乱により削平、南端は調査区外へ続く。規模は、北端の幅26 cm、深さ8 cm、南端の幅175 cm、深さ30 cmであり、南東に向かって徐々に幅広く、深くなる。断面形は皿形を呈する。埋土から出土した備前焼の播鉢416はIV B期に分類され、15世紀第3四半期に比定される。溝6は整地

面4の南端を画するとともに、排水の機能を有していたと考えられるほか、配置状況から柱穴列36・37と併存していた可能性がある。(米田)

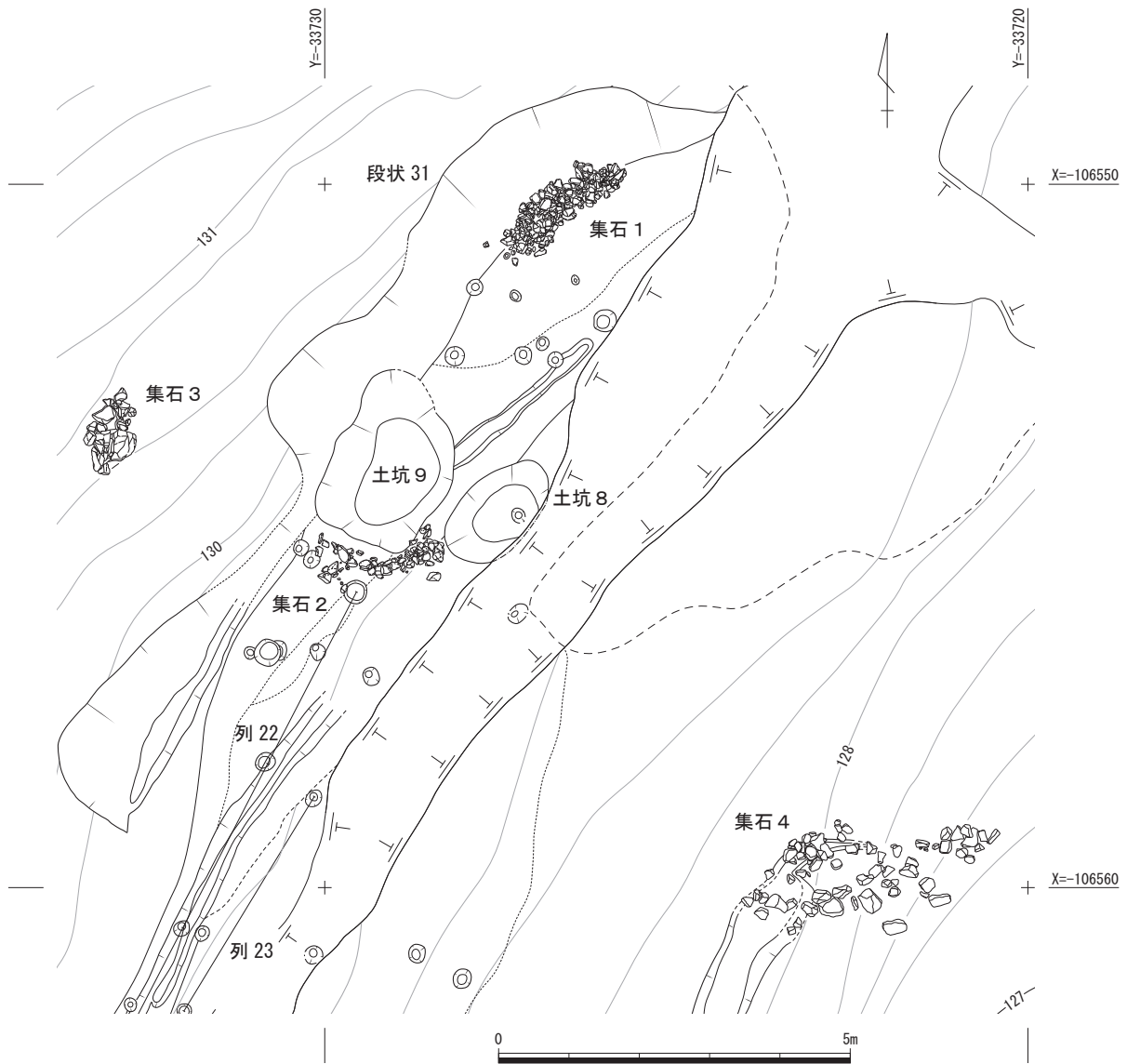


第187図 溝6出土遺物 (1/4)

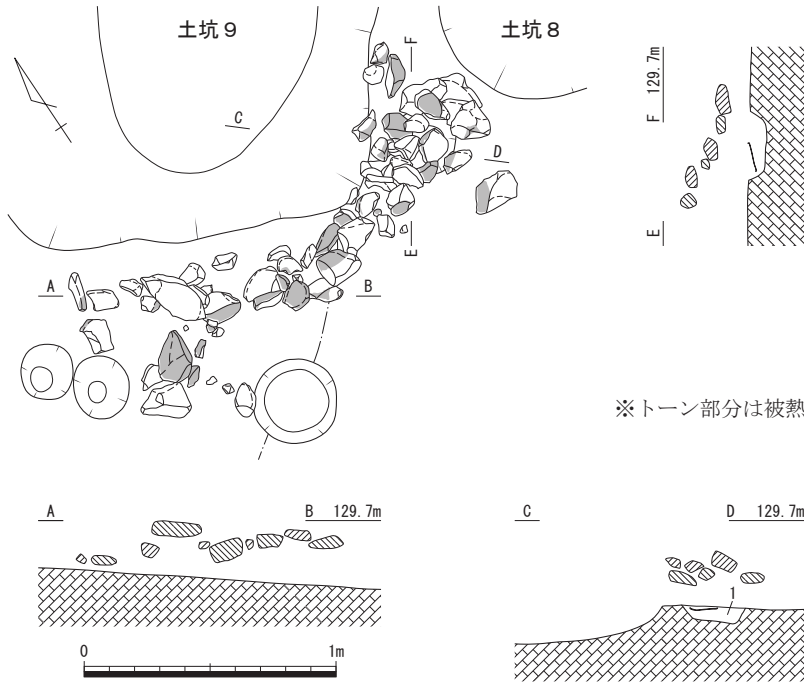
5 集石

集石2 (第188・189図、図版42・49)

3区の中央、段状遺構31の中央に位置する。集石2は段状遺構31-P1の上、段状遺構31の床面より3~14cmより上で確認した。層位的には第158図のI-J断面の第3層中にあたる。集石の規模は長軸185cm、短軸82cm、高さ15cmで、平面的に東西に細長い。集石の東半は石が密集してい

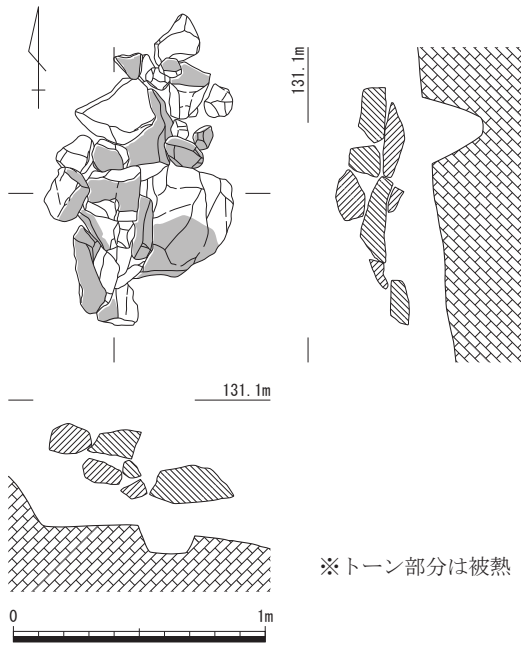


第188図 集石1~4配置図 (1/100)



1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 微砂 (5mm程度のレキをまばらに含む)

第189図 集石2 (1/30)



第190図 集石3 (1/30)

たが、西半はやや散在していた。石は計67個あり、大きさは2～30cm、重量は約0.1～5.75kgと様々である。被熱した石は全体にわたって認められたが、周辺では焼土や炭は認められず、二次的に石を集積したとみられる。集石2は土坑9の南隣で確認したが、土坑9の範囲では石は認められなかったから、集石2は段状遺構31が埋没する過程で備えられ、土坑9よりも古い可能性がある。さらに、青銅製の鏡像M24が埋納された段状遺構31

※トーン部分は被熱

—P1より集石2の範囲が大きく、P1上面より6～20cmほど上で集石2が確認されたことから、段状遺構31—P1と集石2の相関関係を見出すことは難しい。出土遺物はないが、時期は中世に比定され、切り合い関係から段状遺構31より新しく、土坑9より古いと考えられる。(米田)

集石3 (第188・190図、図版49)

3区の中央西寄り、段状遺構10の南端上に位置する。層位的には包含層1の上層(第196図—第9層)中、古墳時代後期の段状遺構10の床面より10cmほど上で確認した。集石の規模は長軸126cm、短軸72cm、高さ27cmで、石は密集していた。石は計30個あり、大きさは10～50cm、重量は約0.35～39kgと幅がある。被熱した石は全体にわたって認められたが、周辺では焼土や炭

※トーン部分は被熱

は認められなかったことから、二次的に石を集積したものと推測される。集石内から遺物は見つからない。時期は古墳時代後期以降で、中世の可能性はある。(米田)

集石4 (第188・191図、図版49・56)

3区の中央に位置する。包含層1の上層(第191図—第2層、第196図—第3層)内で確認した。集石の規模は長軸380cm、短軸136cm、高さ16cmで、石は散在していた。石は計75個あり、大きさは5～34cm、重量は約0.15～14kgと様々である。被熱した石は全体にわたって散在した状態であ

ったが、周辺では焼土や炭は認められず、二次的に石が集積した可能性が高い。石の直下では備前焼の播鉢 417 が出土した。これはⅢB期で、14世紀第2四半期に比定される。(米田)

6 その他

ピット7～13

(第90・94・134・192図)

2～4区のP7～13から中世の遺物が見つかった。各ピットの位置は第90・94・134図に示したとおりである。

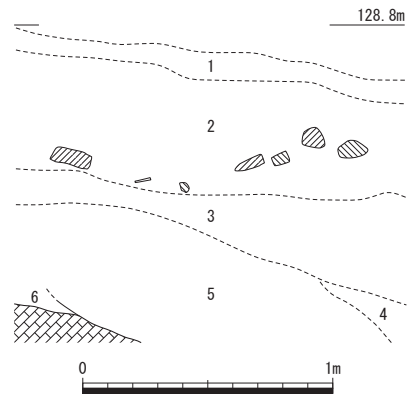
P7から土師器の小皿 418、P8から土師器の小皿 419、P9から土師器の皿 420、白磁碗 421、P10から土師器の小皿 422、P11から備前焼の播鉢 423、P12から土師器の小皿 424、P13から備前焼の播鉢 425 が出土した。(米田)

遺構に伴わない遺物

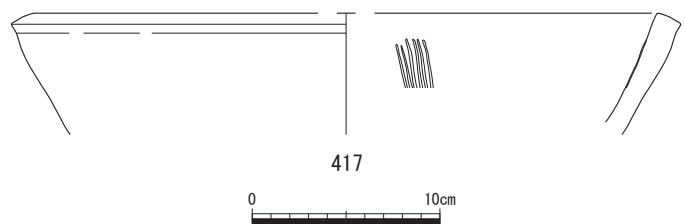
(第193・194図、図版59)

遺構外から出土した中世の遺物を第193・194図にまとめた。

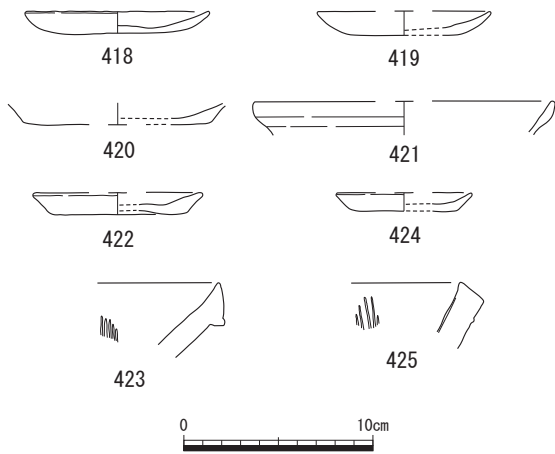
426～431は勝間田焼の椀である。426・427は貼付高台をもつ。428～431の底部は回転糸切り痕が残る。432・433は勝間田焼の甕で、外面は格子目タタキによる。434は勝間田焼の皿である。435は備前焼の壺で、やや外反する小さな玉縁状の口縁部をもつ。436は備前焼の播鉢の底部である。437・438は備前焼の甕である。439は勝間田焼の鉢、440～443は青磁の碗である。440は龍泉窯系の束口碗で14世紀以降、441は龍泉窯系で15世紀代とみられる。444は天目茶碗で、内外面に鉄釉が施されている。肉眼観察では胎土は380と似ており、瀬戸・美



- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土く表土 > (第196図 - 第1層)
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土く中世包含層 > (第196図 - 第3層)
- 3 褐色 (10YR4/4) 土く中世包含層 > (第196図 - 第4層)
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 土く古墳時代～古代包含層 > (第196図 - 第10層)
- 5 黒褐色 (10YR3/2) 土く土坑5 > (第196図 - 第11層)
- 6 黒褐色 (10YR3/2) 土く弥生時代包含層 > (第196図 - 第12層)



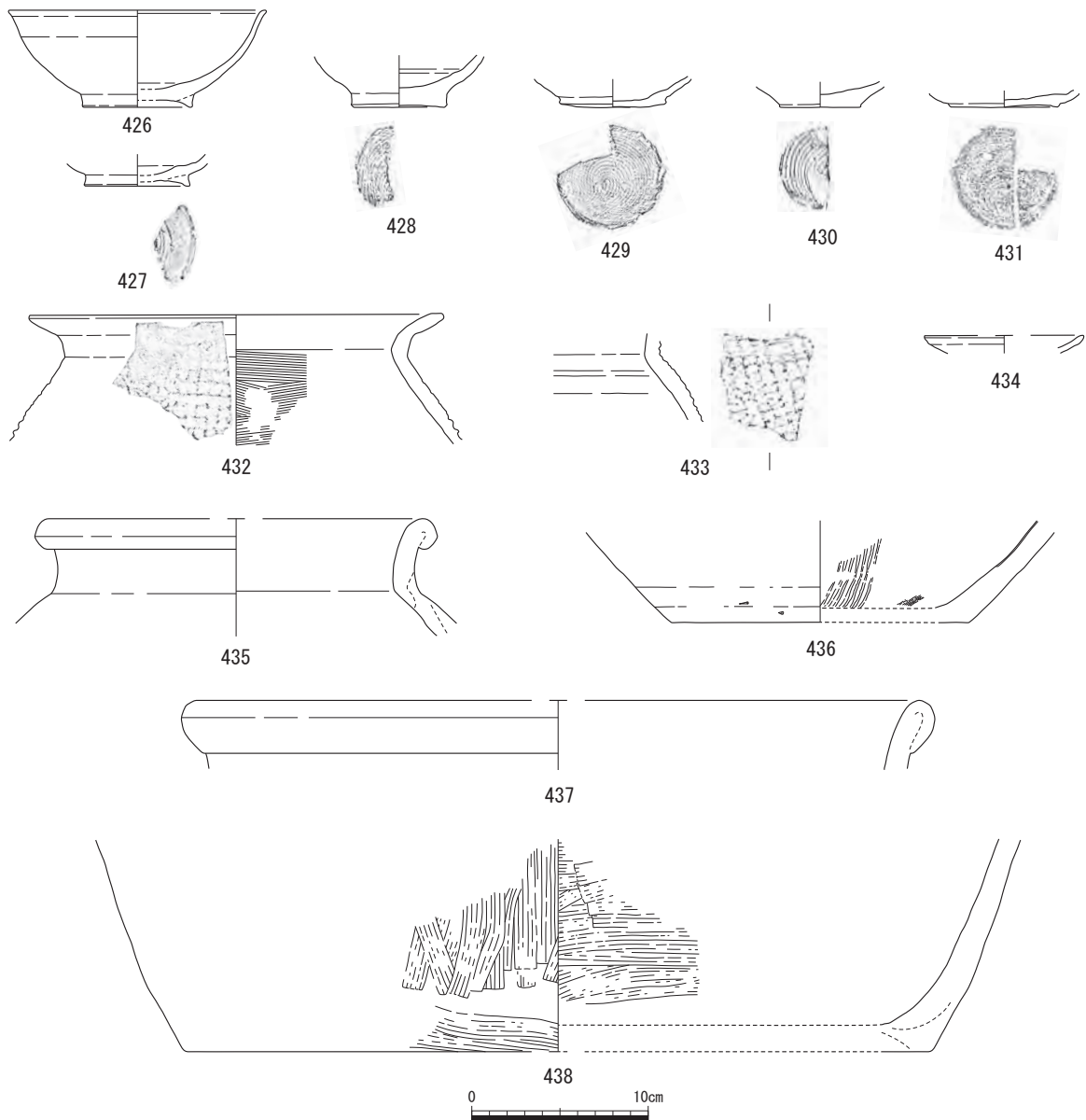
第191図 集石4 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第192図 ピット7～13出土遺物(1/4)

濃焼の可能性がある。15世紀後半～16世紀前半に比定される。445は灰釉陶器の山茶椀である。446は瀬戸・美濃焼の瓶である。447・448は瓦質土器の羽釜、449は把手付の鍋である。450は甕の口縁部である。

M 29～M 36は鉄器である。M 29・M 30は楔で、ともに頭部がやや潰れている。M 31は小刀の可能性があり、茎付近の破片である。片関で、目釘穴の一部が残存する。M 32は板状で、円孔がある。M 33～36は鉄釘で、M 33・M 34は頭巻釘、M 35・36は切釘である。M

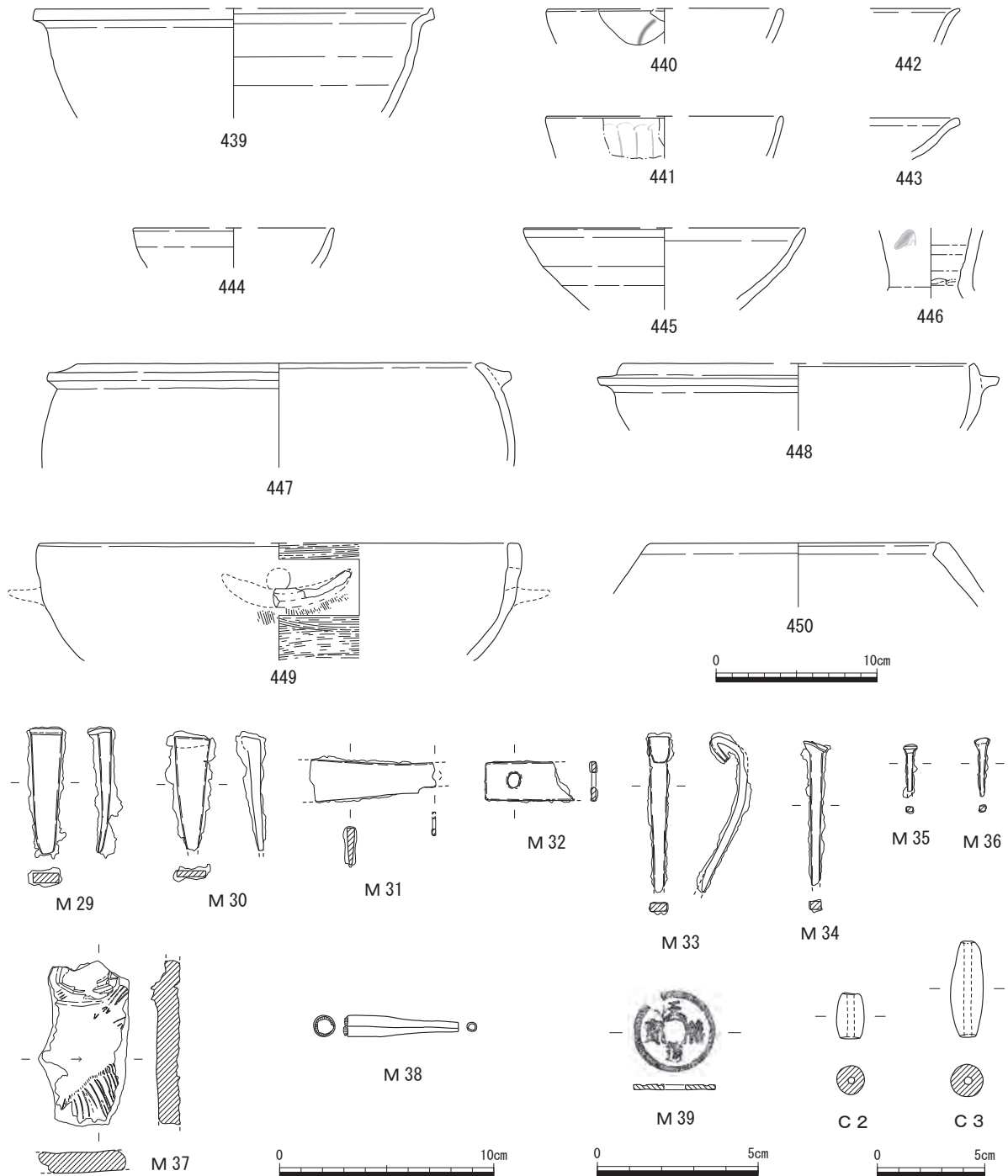


第193図 遺構に伴わない遺物①(1/4)

37は銅滓である。M 38は青銅製の煙管の吸口で、羅字の一部とみられる木質が残存する。形態から18世紀後半に比定される。M 39は銅銭で、天禧通寶である。C 2・3は管状土錘である。（米田）

註

(1) 原田倫子 2005「中国地方における中世遺跡出土の硯」『古文化談叢』第53集 九州古文化研究会



第194図 遺構に伴わない遺物② (1/4・1/3・1/2)

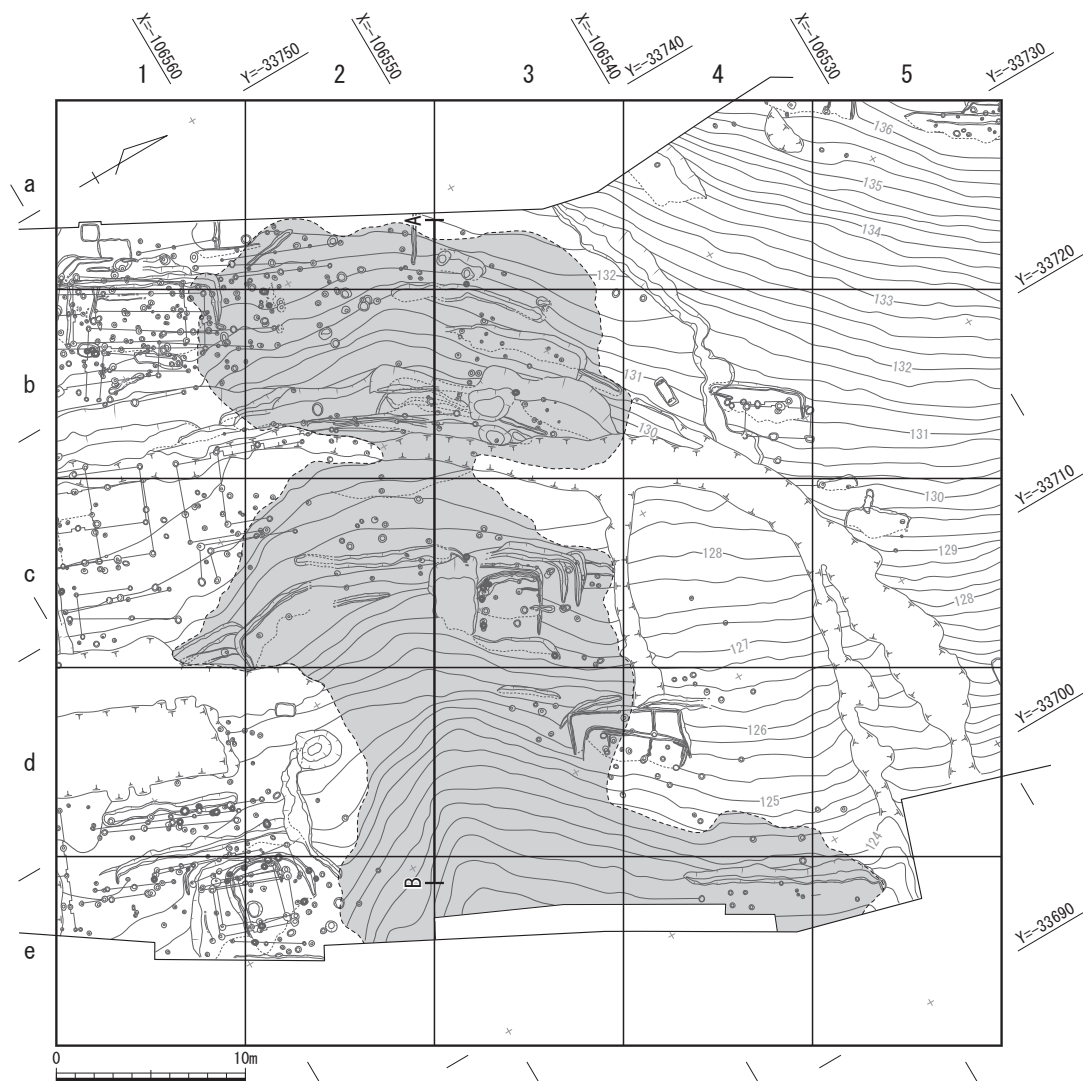
第5節 谷部の包含層

1 包含層

包含層1（第195～213図、写真16、図版49・50・56～59）

3区中央は谷部になっており、ここに長期間にわたって堆積した土のなかに弥生時代中期から中世の遺物が包含されていた。包含層の範囲は第195図のとおり、概ね東西38m、南北29mに及ぶ。微地形や後世の削平により、いびつな範囲となっている。包含層の堆積土は、範囲の境が浅く、谷部の最深部となるA-B断面のラインに向かって厚い。包含層1の土層断面は第196図に示した。谷部の最深部の地山は、調査区内で延長約35mを確認し、高低差は約8.85m、勾配は14°であった。

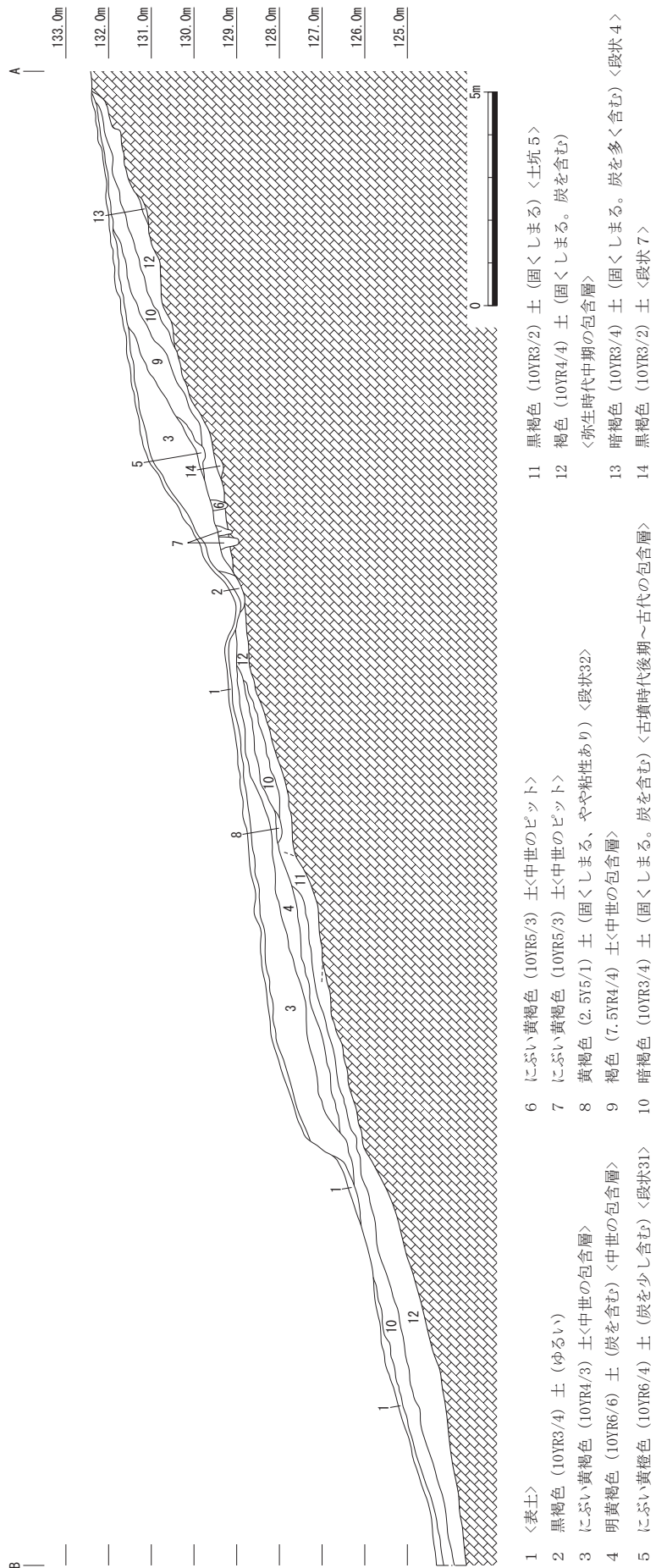
表土下では中世の遺物を多く含むにぶい黄褐色土（第3層）や明褐色土（第4層）、褐色土（第9層）



第195図 包含層1の範囲・グリッド (1/400)

が広範囲かつ厚く堆積していた。その範囲(第195図)は2・3-b・c区、4・5-e区に及ぶ。2・3-b・c区はそれぞれ西半が著しく削平されていたが、最大厚105cmも堆積していた。第3層は2・3-b・c区、第4層は2・3-c区、第9層は2・3-b区を中心に堆積していた。第3・4層は後世の削平により2・3-d・e区には残存していなかったが、4-e区では第3層が確認できたことから、本来は広く堆積していた可能性がある。第3層中では3-b区で集石2・3、3-c区で集石4が認められた。第3層下では段状遺構31、第4層下では段状遺構32を確認し、2・3-b区では谷部の最深部で褐色土(第9層)を切るように段状遺構31が造られていた。段状遺構31・32の間は第10層の上面が平坦に近く、中世になって谷部に堆積した第10層を削平して整地面2を造った可能性が高い。

古墳時代～古代の遺物は、暗褐色土(第10層)に多く包含していた。その範囲は1～3-a～e区と広いが、当該期の遺物は2・3-b・c区で多く認められた。包含層1の範囲内で



第196図 包含層1断面 (1/150)

は竪穴住居6・7・8・10、段状遺構10・12～17・19～24、土坑5は第10層下面で確認した。

弥生時代の遺物は褐色土（第12層）に多く包含していた。第12層は2・3-a～e区に広く堆積していたが、2・3-b区の東半は中世の遺構に削平されていた。当該期の遺物は2・3-b・c区で特に多かった。2・3-a・b区の第12層下面では、段状遺構4・7、土坑3・4を検出した。

なお、遺物の取り上げにあたっては、中世の遺物を多く含む第3・4・9層を上層、古墳時代後期～古代の遺物を多く含む第10層を中層、弥生時代中期の遺物を多く含む第12層を下層として扱った。各遺物の出土したグリッド、層位については、本書の遺物観察表（315～338頁）に記した。

包含層1から出土した遺物は、弥生土器、土師器、円筒埴輪、須恵器、緑釉陶器、備前焼、勝間田焼、青磁、瀬戸・美濃系の陶器、瓦質土器、弥生時代の石器、石器未成品、剥片、砥石、叩石、火打石、基石、台石、土器円板の加工途中品、陶棺、炉壁、土錘、鉄器、銅銭、鉄滓、銅滓、平瓦がある。

451～518は弥生土器である。451～459・464～466は広口壺、460・461は無頸壺、462・463は壺の肩部、467～472は短頸壺である。これらは円形浮文、貼付突帯、斜格子文、櫛描文、凹線文、刻目文などで加飾されている。473～478は壺の底部である。479～499は甕である。底部499には焼成後穿孔が認められる。500は台付鉢の底部である。501・502は蓋で、501の口縁部には2個一対の孔が穿たれている。503～511は高杯である。512～518は器台である。これらの弥生土器は弥生時代中期中葉～後葉に位置付けられ、集落の存続期間を考えるうえで参考になろう。

519～555は古墳時代の土師器である。519は甕で、退化した複合口縁をもつ。520は小形の壺、521～525は甕、526～538は高杯である。540は鍋、541は鍋か甑である。542～554は甑か鍋の把手である。555は竈形土器で、焚口右側の庇付近の破片である。556～559は中世の土師器である。

560～562は円筒埴輪である。560は低いタガがあり、焼成は良くない。561・562は焼成良好である。

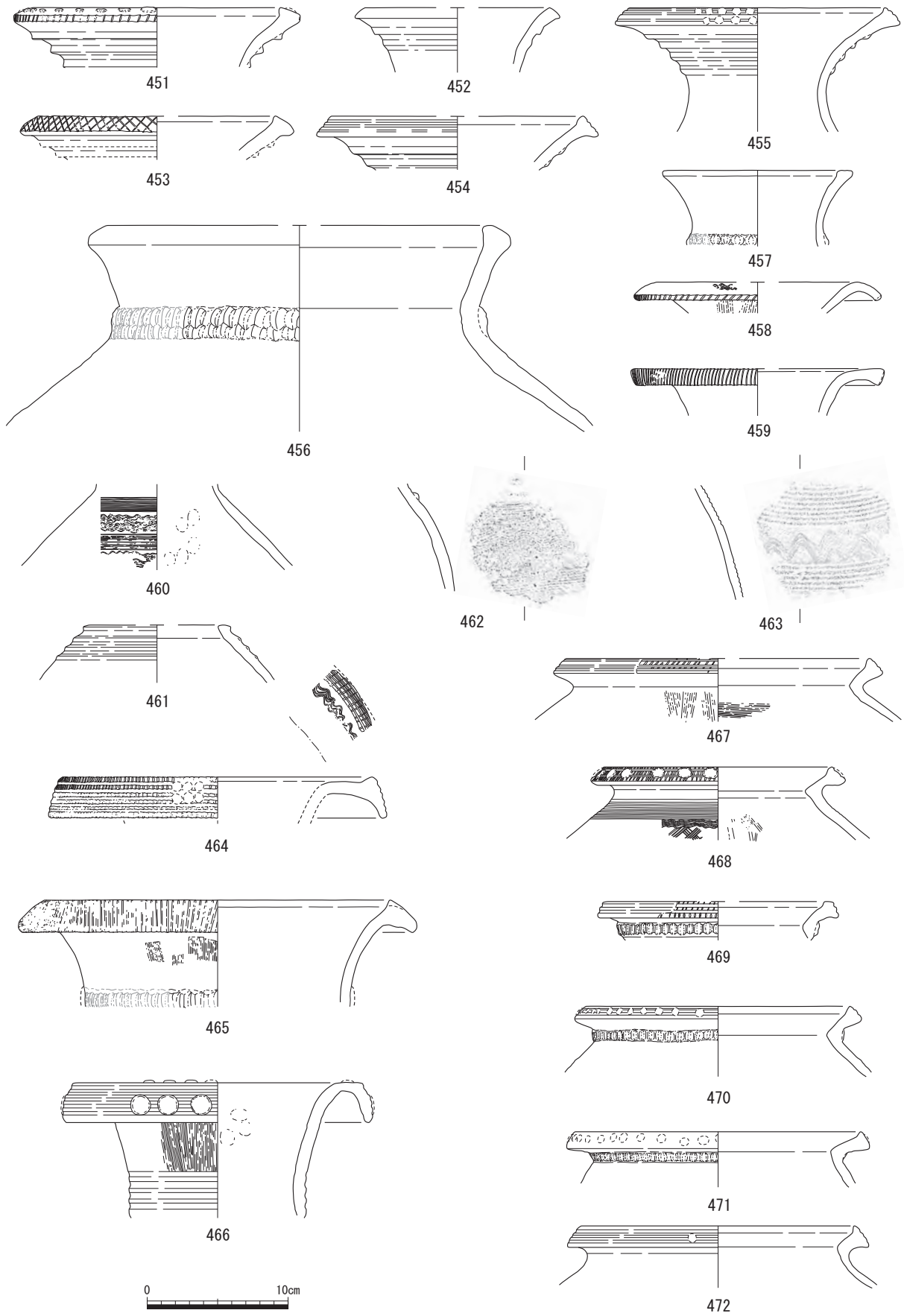
563～622は古墳時代の須恵器である。563～568は杯蓋、569～583は杯身である。このうち、569・570・573は焼成が不良である。これらはTK43～209型式に相当するものが大半を占める。584・585は有蓋高杯の蓋、586～593は高杯である。594～599は甕である。600は蓋で、天井部にヘラ記号が認められる。601～603は装飾付須恵器に伴う小形の蓋と考えられる。604・605は細片のため、器種や部位の特定が難しいが、蓋の可能性がある。606は装飾付壺、607・608は長頸壺、609・610は壺、611は台付壺の脚部である。612は椀形の器台形高杯とみられ、体部に櫛描波状文が施されている。613～616は提瓶、617は壺、618～620は甕、621は横瓶である。622は器台である。

623～628は古代の須恵器である。623は蓋、624～626は高台付の杯、627は皿である。628は壺の底部で、にぶい赤褐色（2.5YR4/4）の有機物が内面に付着しており、材質分析によって酸化鉄を含む赤色顔料であることが明らかとなった（第5章第5節）。629は緑釉陶器の椀の破片であり、内外面の釉薬はくすんだ黄緑色（5GY5/5）を呈する。

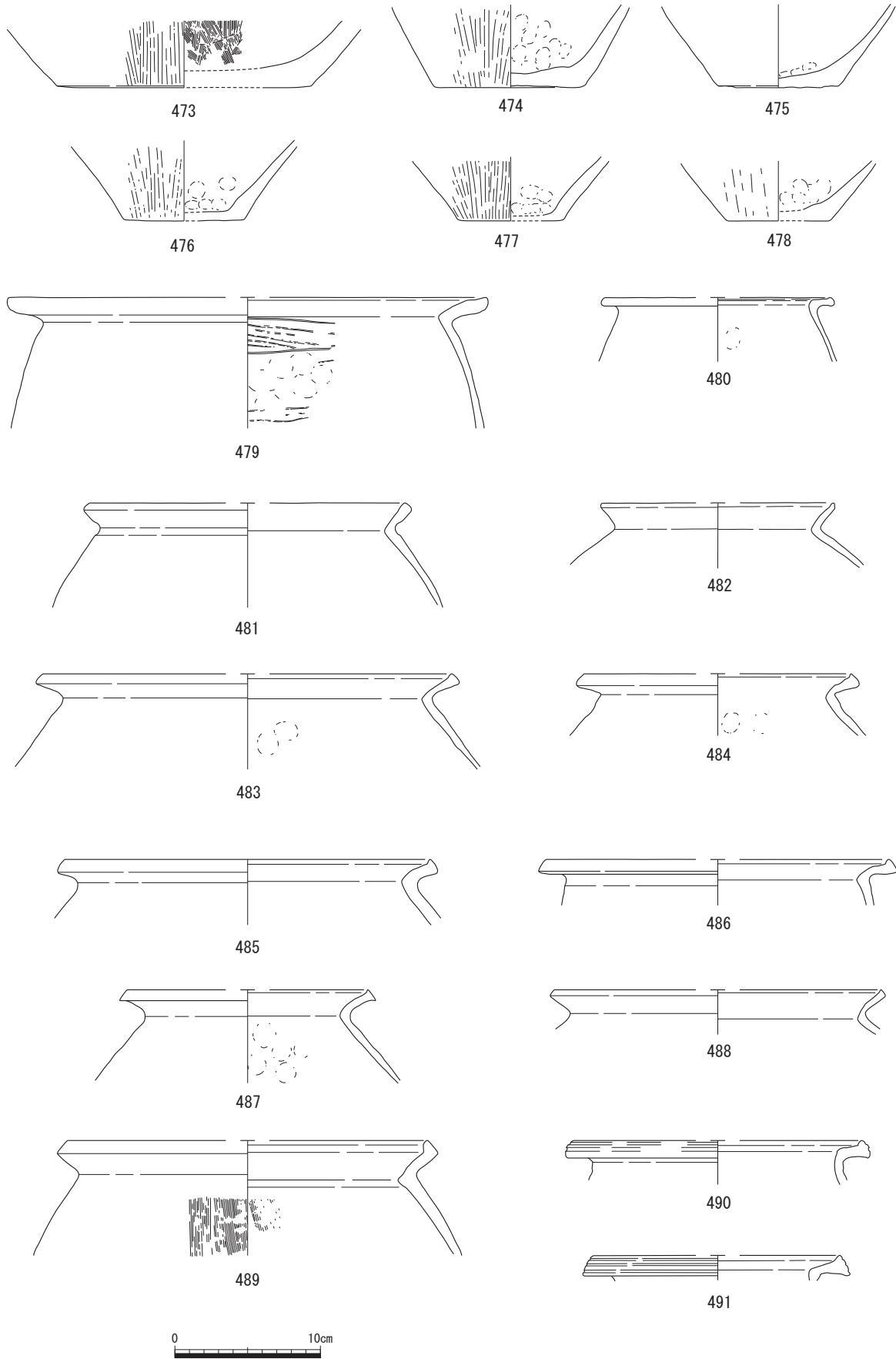
630～652は備前焼である。630は片口壺、631は壺、632～635は播鉢、636～639は甕である。

653～668は勝間田焼である。653～664は椀で、底部は回転糸切り、655～659は貼付高台がある。656～659は焼成が良くない。665は皿で、底部は回転糸切りによる。666は播鉢で、底部内面に格子目の卸目が認められる。667・668は甕で、外面は格子目のタタキによって調整されている。

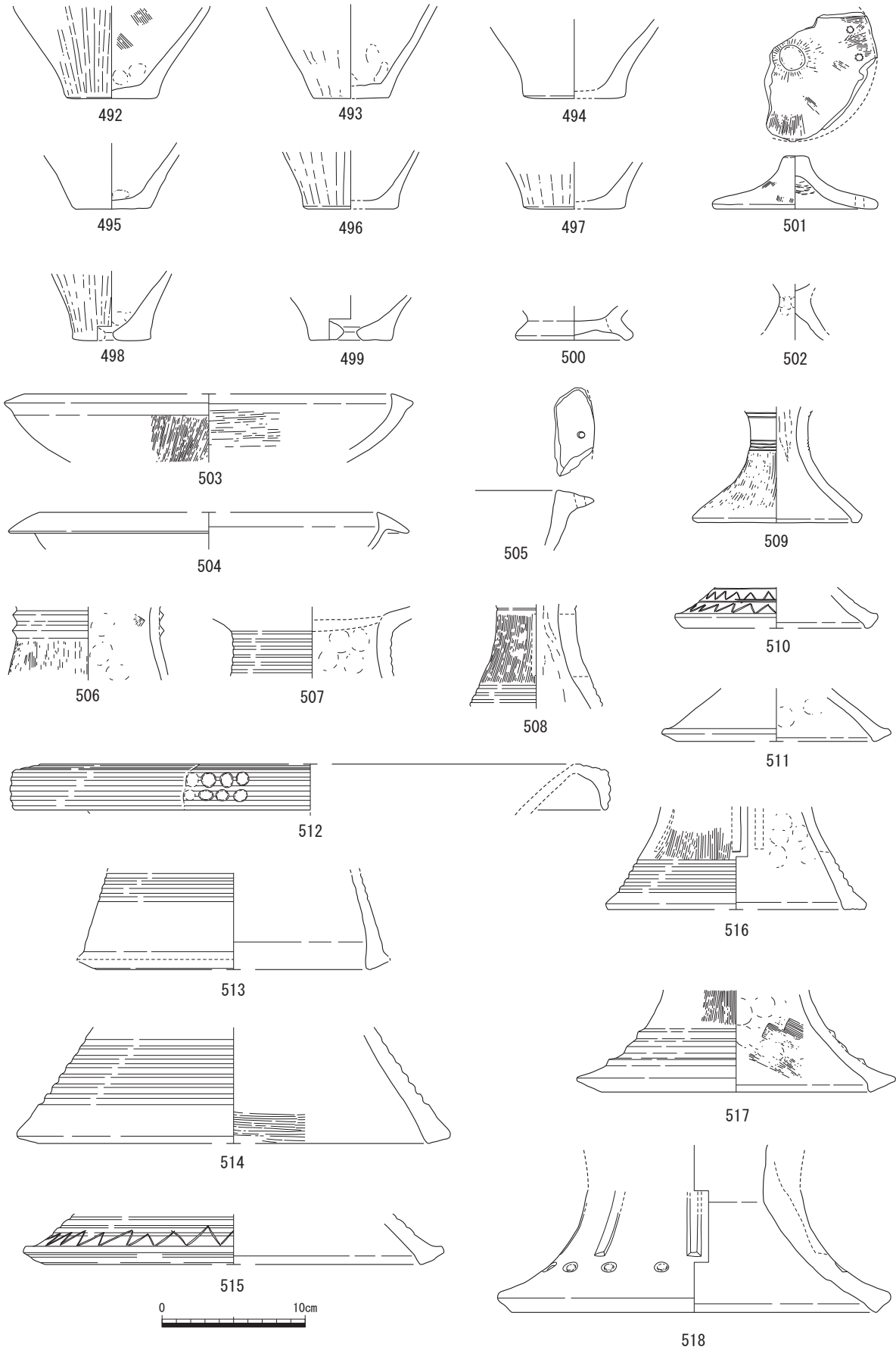
669～674は青磁である。669～673は碗、674は瓶である。669は龍泉窯系で、内面に劃花文を施し、13世紀に位置付けられる。670は内面に草花文があり、13～14世紀に比定される。675は瀬戸・美濃系の陶器で、天目茶碗である。676は瀬戸系とみられる陶器で、香炉形の茶入である。



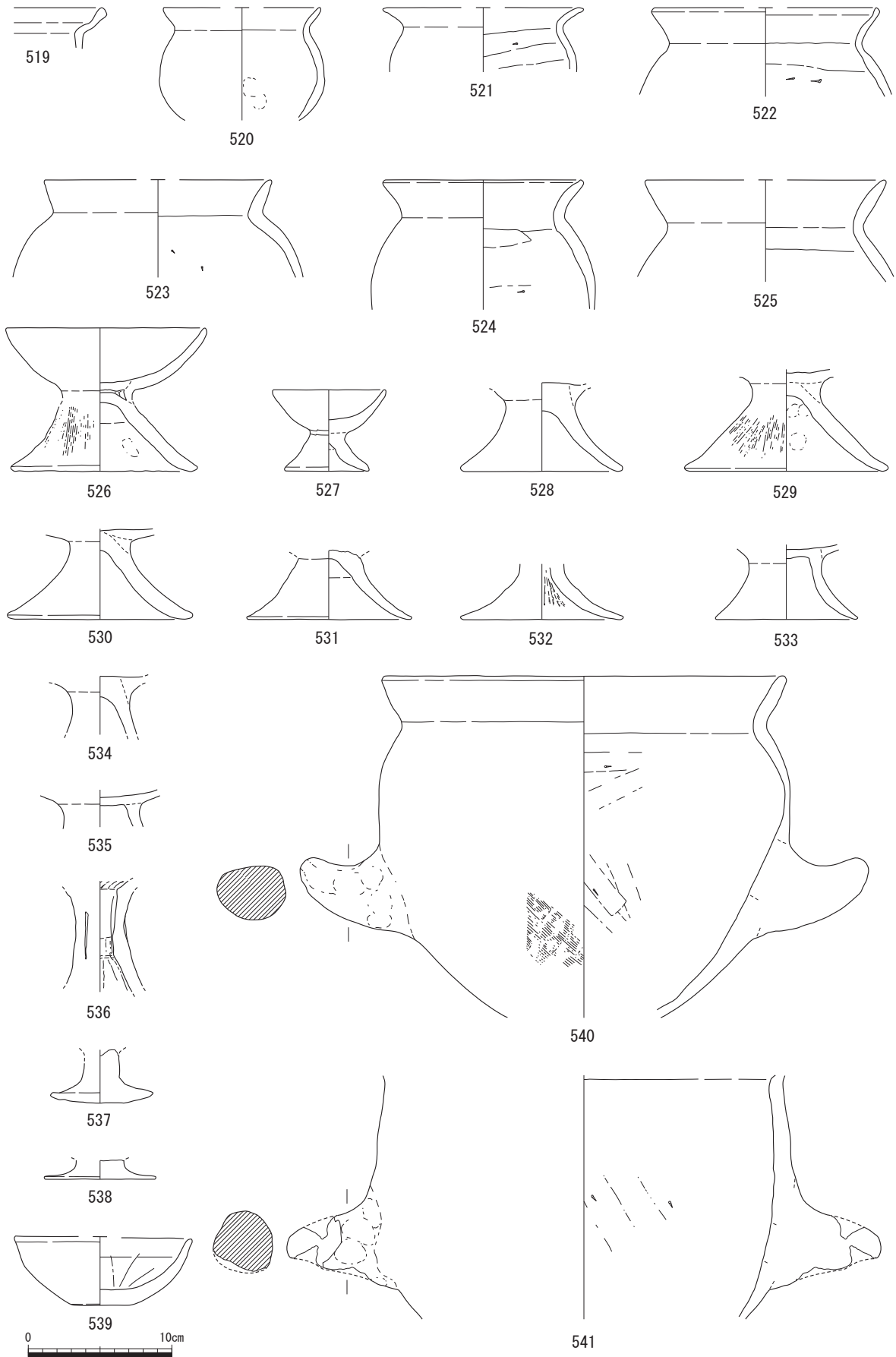
第197図 包含層1出土遺物① (1/4)



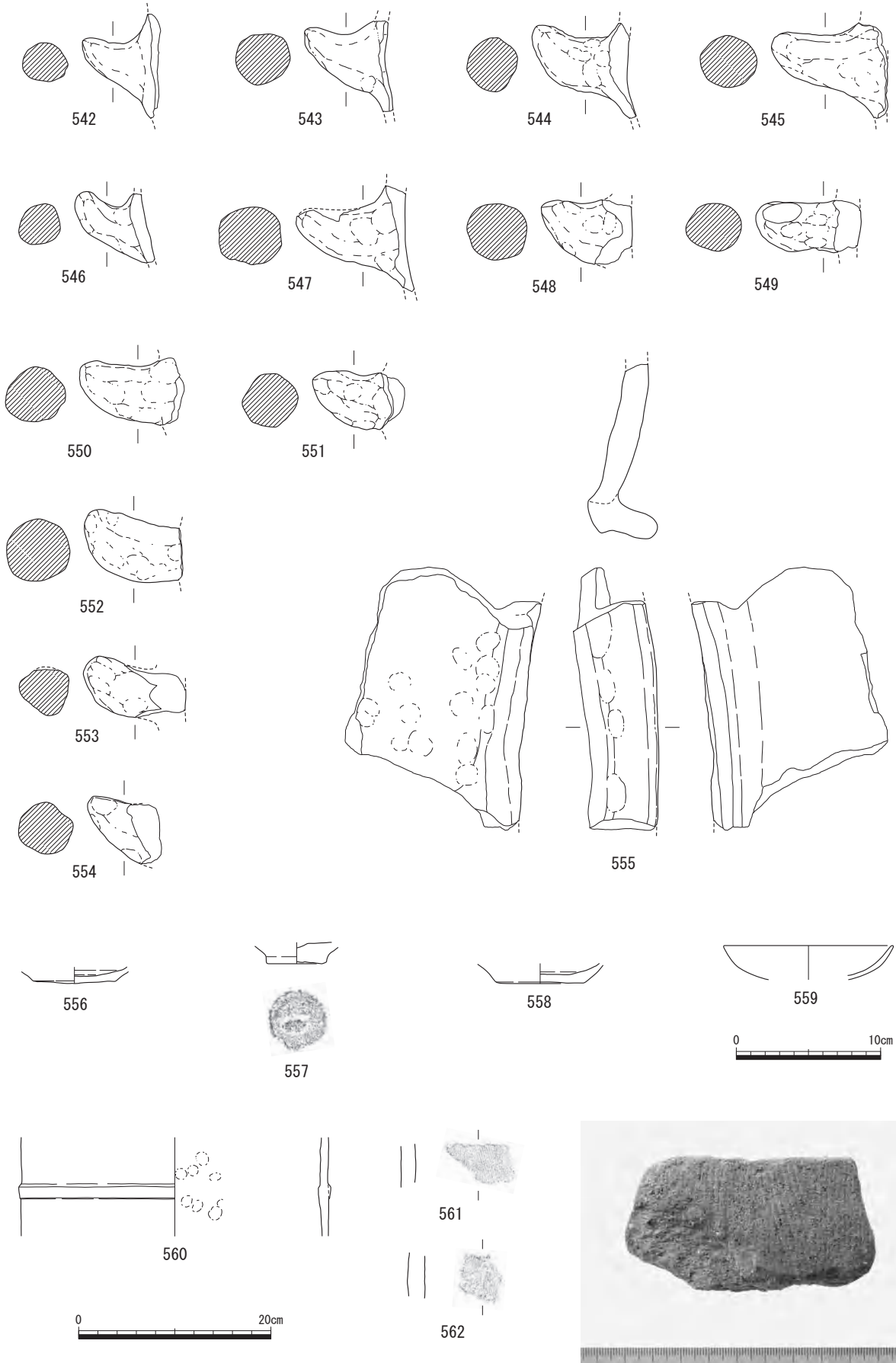
第198図 包含層1出土遺物② (1/4)



第199図 包含層1出土遺物③ (1/4)

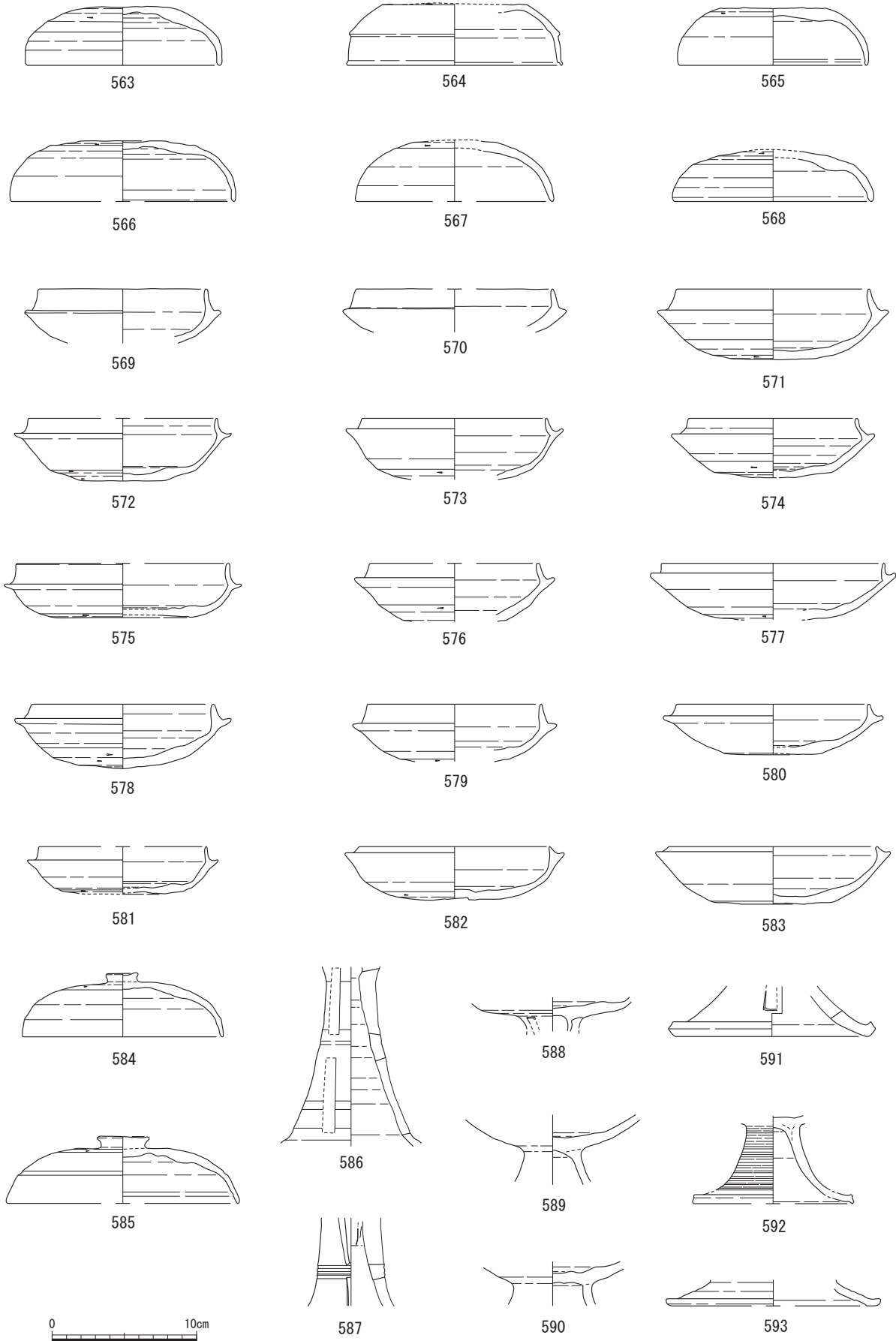


第200図 包含層1出土遺物④ (1/4)

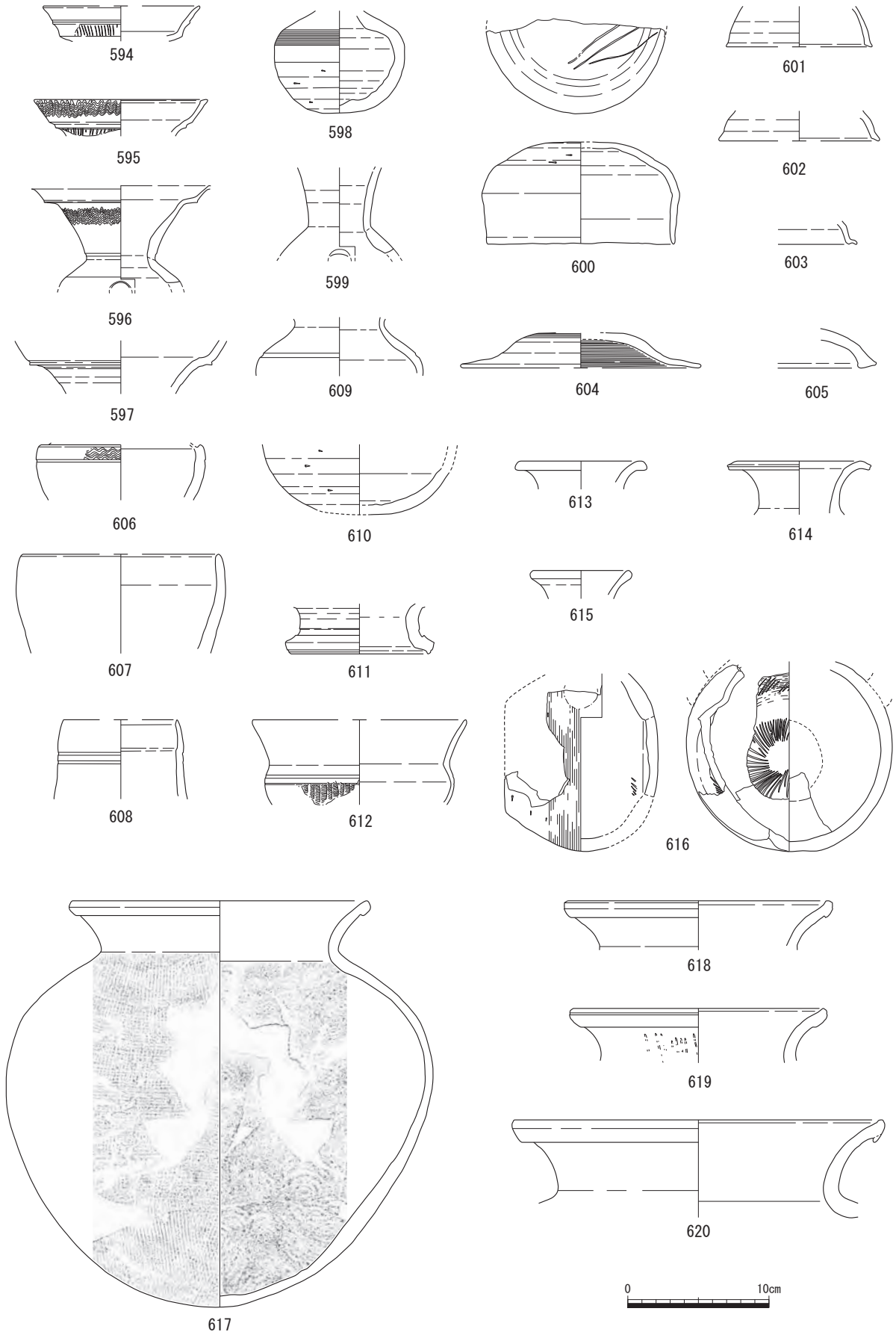


第201図 包含層1出土遺物⑤ (1/4・1/6)

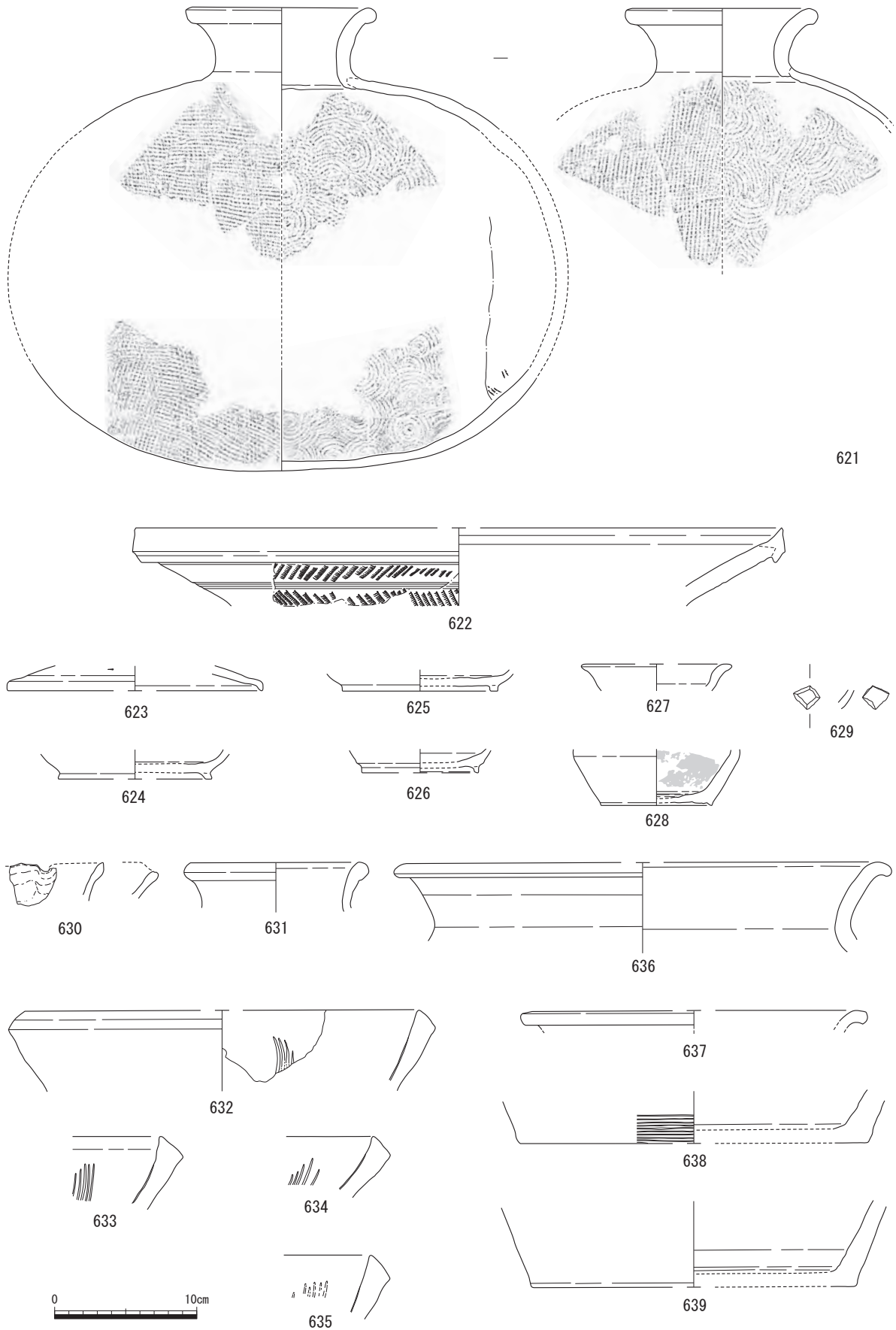
写真16 埴輪561



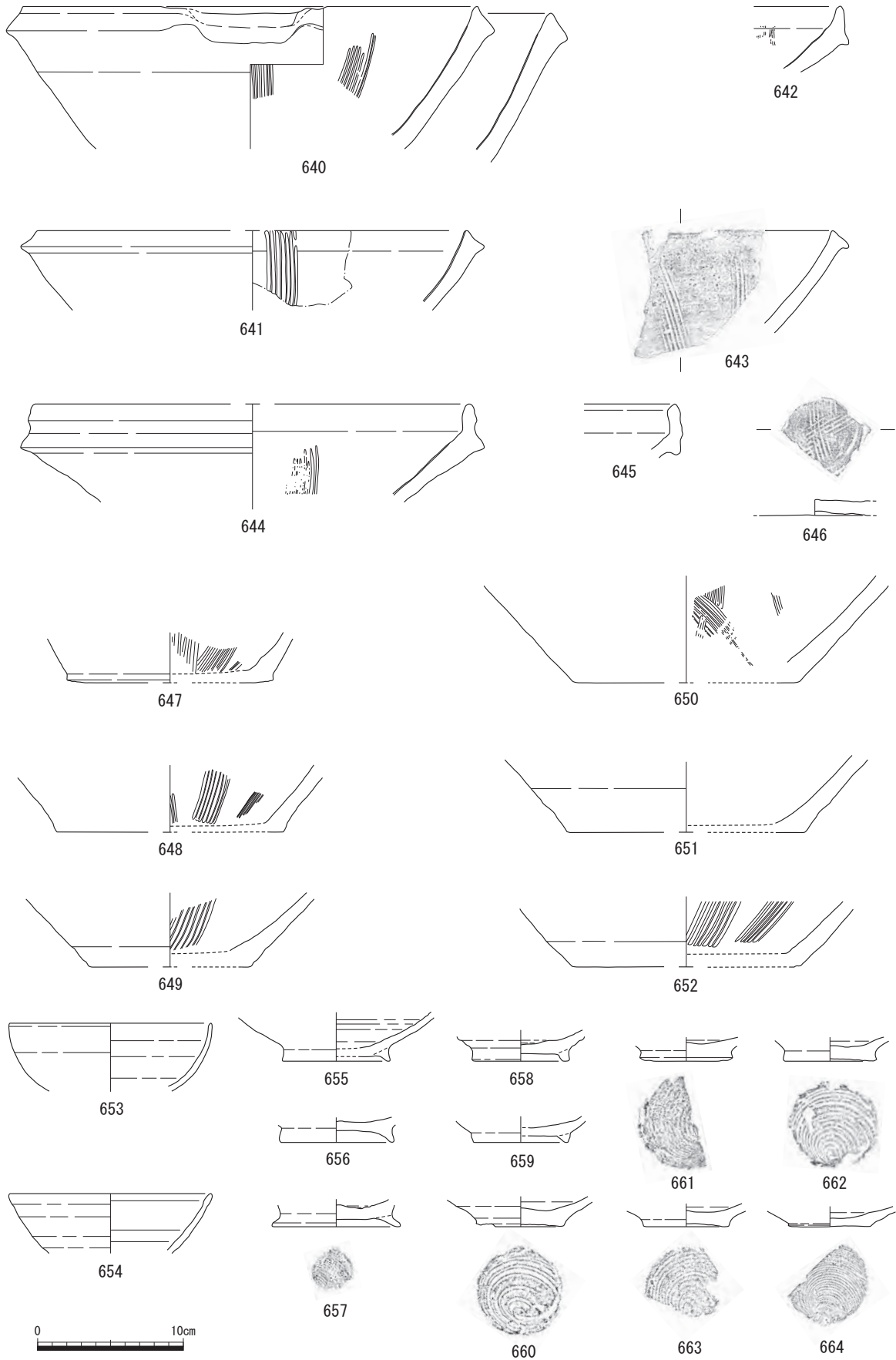
第202図 包含層1出土遺物⑥ (1/4)



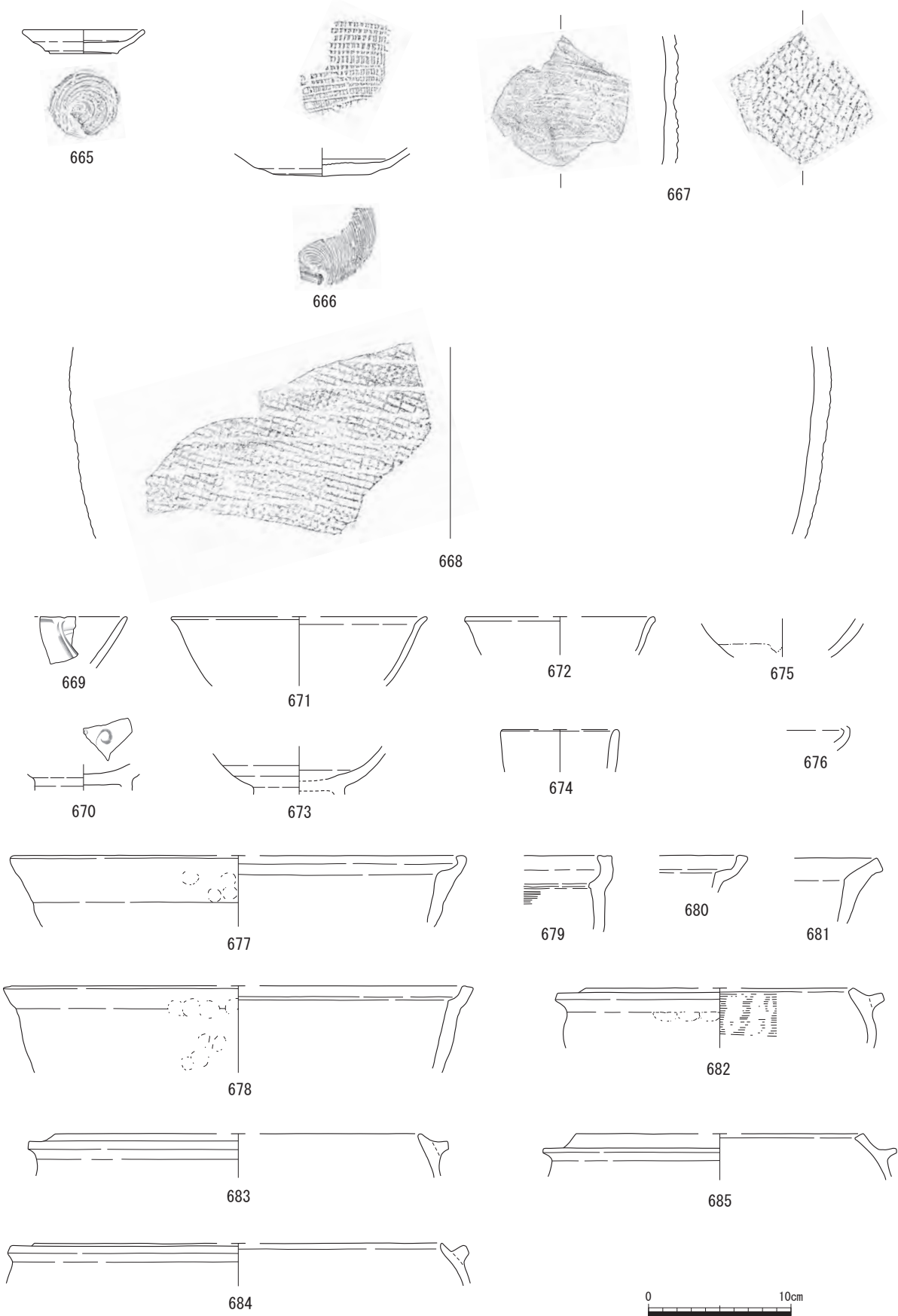
第203図 包含層1出土遺物⑦(1/4)



第204図 包含層1出土遺物⑧(1/4)



第205図 包含層1出土遺物⑨ (1/4)



第206図 包含層1出土遺物⑩ (1/4)

677～685は瓦質土器である。677～681は鍋、682～685は羽釜である。

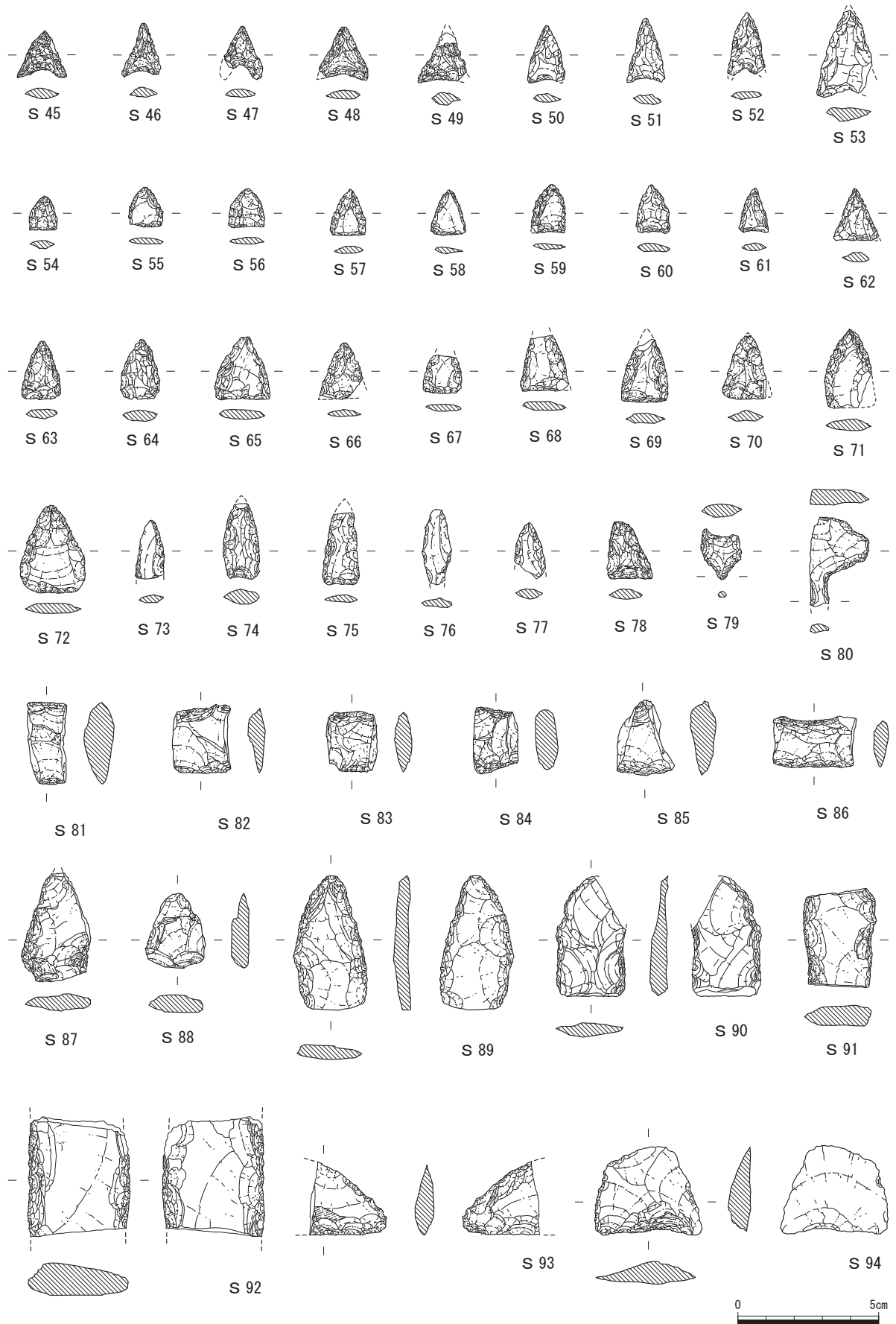
S 45～S 120は弥生時代の石器である。S 45は黒曜石製、S 46～S 100はサヌカイト製である。S 45～S 78は石鏃で、S 45～S 53は凹基式、S 54～S 75は平基式である。S 79・80は石錐である。S 81～S 86は楔形石器で、両側面に裁断面が認められる。S 87～S 90は上端が尖るように両側縁を調整しており、石鏃未成品の可能性はある。S 91は上下端を欠き、厚さ8.5mmの板状剥片で、両側面に二次調整が認められる。S 92は上下端が欠損して全体の形は明確でないが、厚さ11.5mmの剥片で、両側縁に平行する細かな二次調整が施されていることから、石剣の破片であろうか。S 93は下辺に直線的な刃部があり、上端は湾曲する。周縁は大まかな調整剥離があり、表面の一部に研磨痕が認められる。サヌカイト製であるが、磨製石鎌、あるいは磨製石包丁を目的とした未成品であった可能性がある。S 94・S 95・S 97～S 100は剥片で、二次調整が認められる。S 96は左右端を欠くが、表裏面に光沢がある摩滅痕が認められることから、打製石包丁の破片と考えられる。

S 101～S 108は磨製石包丁の破片である。石材はS 101・S 104が緑色片岩、S 102・S 105～S 107が粘板岩、S 103が結晶片岩、S 108が泥岩である。いずれも破損が著しい。このうち、S 102・S 106は同一個体である可能性がある。S 109～S 111は緑色片岩製の磨製石包丁の未成品である。S 109は表裏面に研磨痕と敲打による穿孔痕が認められる。穿孔痕は表裏面で各2か所認められ、いずれも未貫通である。S 110は左端に細かい調整剥離が認められるが、研磨痕は認められない。S 111は裏面は主要剥離面で、調整剥離や研磨痕は認められないことから、素材剥片とみられる。

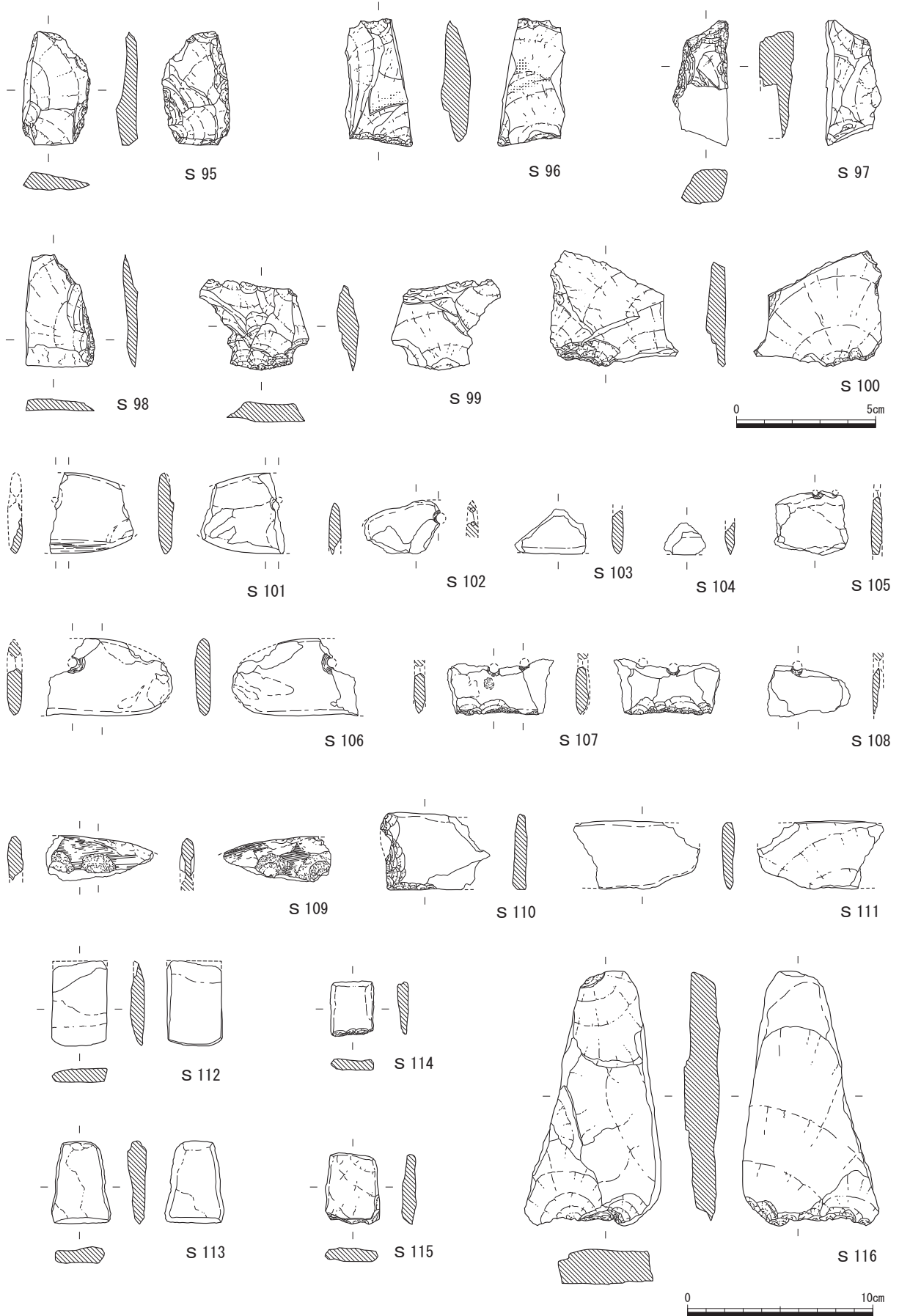
S 112・S 113は緑色片岩製の扁平片刃石斧で、長さ4cm、幅3cm、厚さ1cm前後の小形である。S 112は両側面は研磨で整形し、下端は刃部を研いでいる。表裏面の整形は十分ではない。S 113は表裏面や側面は整形されておらず、下端の刃部のみ研磨している。S 114～S 117は扁平片刃石斧の未成品と考えられる。S 114～S 116は緑色片岩製、S 117は流紋岩製である。S 114・S 115は長さ3cm、幅2.5cm、厚さ7mm前後の長方形板状を呈する素材剥片である。ともに表裏面は未調整である。S 114は下端面に二次調整を施すのに対し、S 115は側面は二次調整は認められないが、S 112・S 113のような刃部のみ整形した扁平片刃石斧を目的とした可能性がある。S 116は裏面は主要剥離面で、下端のみ二次調整が施されており、扁平片刃石斧の剥離工程未成品と考えられる。S 117は横長の剥片で、扁平片刃石斧の素材剥片の可能性はある。S 118は緑色片岩製の鑿状片刃石斧で、基部を欠き、全体的に丁寧に研磨されている。S 119・S 120は、安山岩製の太型蛤刃石斧の破片である。

S 121～S 123は砥石で、古墳時代の土器を多く含む第10層から出土した。S 121は粘板岩製、他は流紋岩製である。各々湾曲した作業面が多く、主に鉄器を研いだと考えられる。S 124～S 128は叩石で、いずれも上層の第3・4・9層から出土しており、時期の特定が難しい。S 124は泥岩製で、平面形が倒卵形を呈する。下端は被熱し、滓が付着している。S 125～128は周縁に敲打痕があり、使い込まれている。S 129は緑青色のチャート製で、火打石の破片である。S 130は円形扁平な細粒砂岩製の小円礫で、赤灰色を呈し、基石の可能性はある。S 129・S 130は上層から出土し、中世に比定される。S 131・S 132は台石である。S 131は下層から出土し、弥生時代に属する。

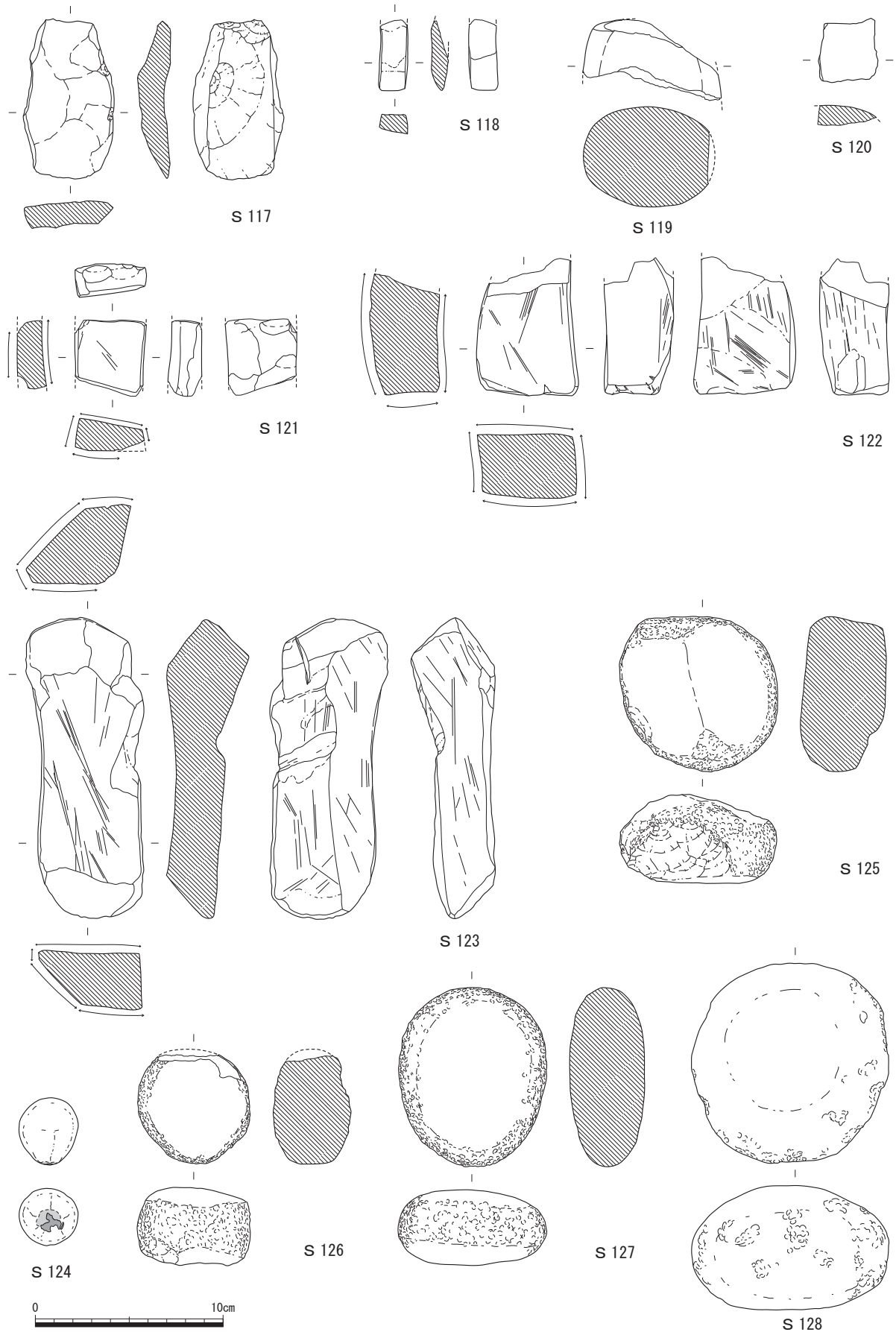
C 4～C 6は円形に再加工した弥生土器の破片で、孔はないが、土器円板を目的とした製作途中品と考えられる。いずれも下層から出土した。C 7～C 9は陶棺で、C 7は蓋の突起、C 8は蓋、C 9は身の破片である。C 8・C 9は胎土が似ており、C 7とは異なる。C 7は中層、C 8・C 9は上層から出土した。これらの陶棺の破片は、高尾北ヤシキ古墳出土陶棺とは別個体であり、調査地周辺に



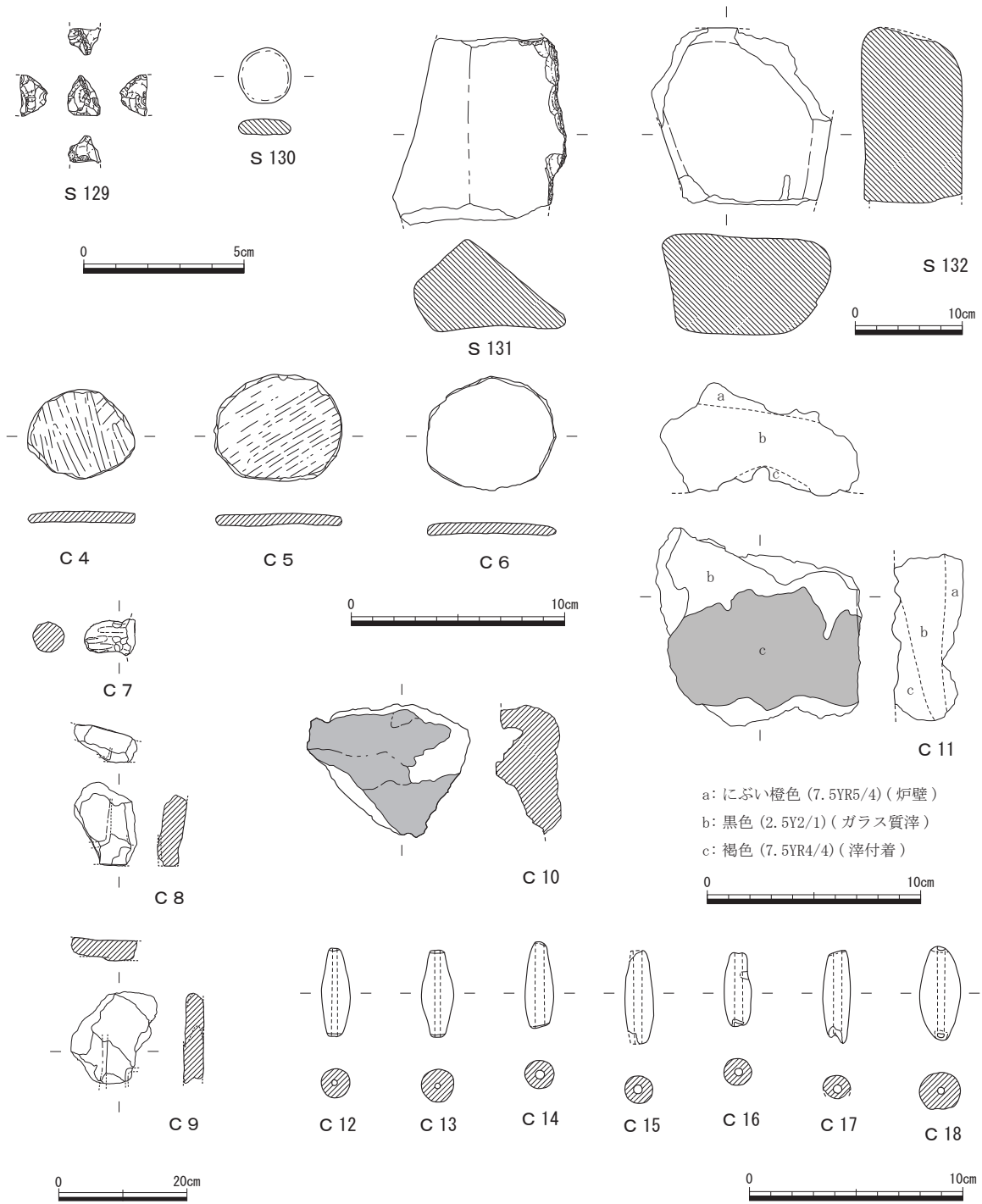
第 207 図 包含層 1 出土遺物⑪ (1/2)



第 208 図 包含層 1 出土遺物⑫ (1/2・1/3)



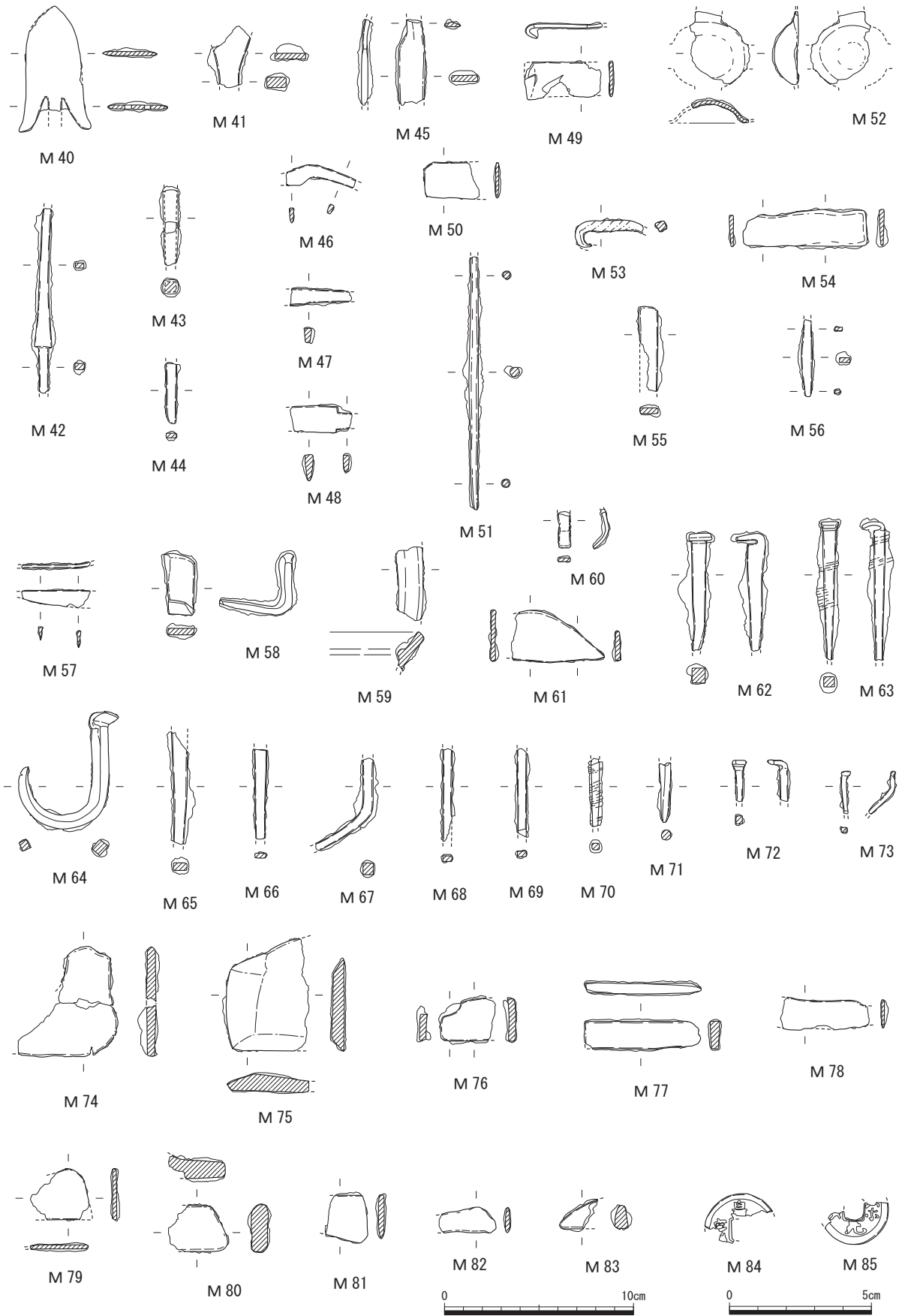
第 209 図 包含層 1 出土遺物⑬ (1/3)



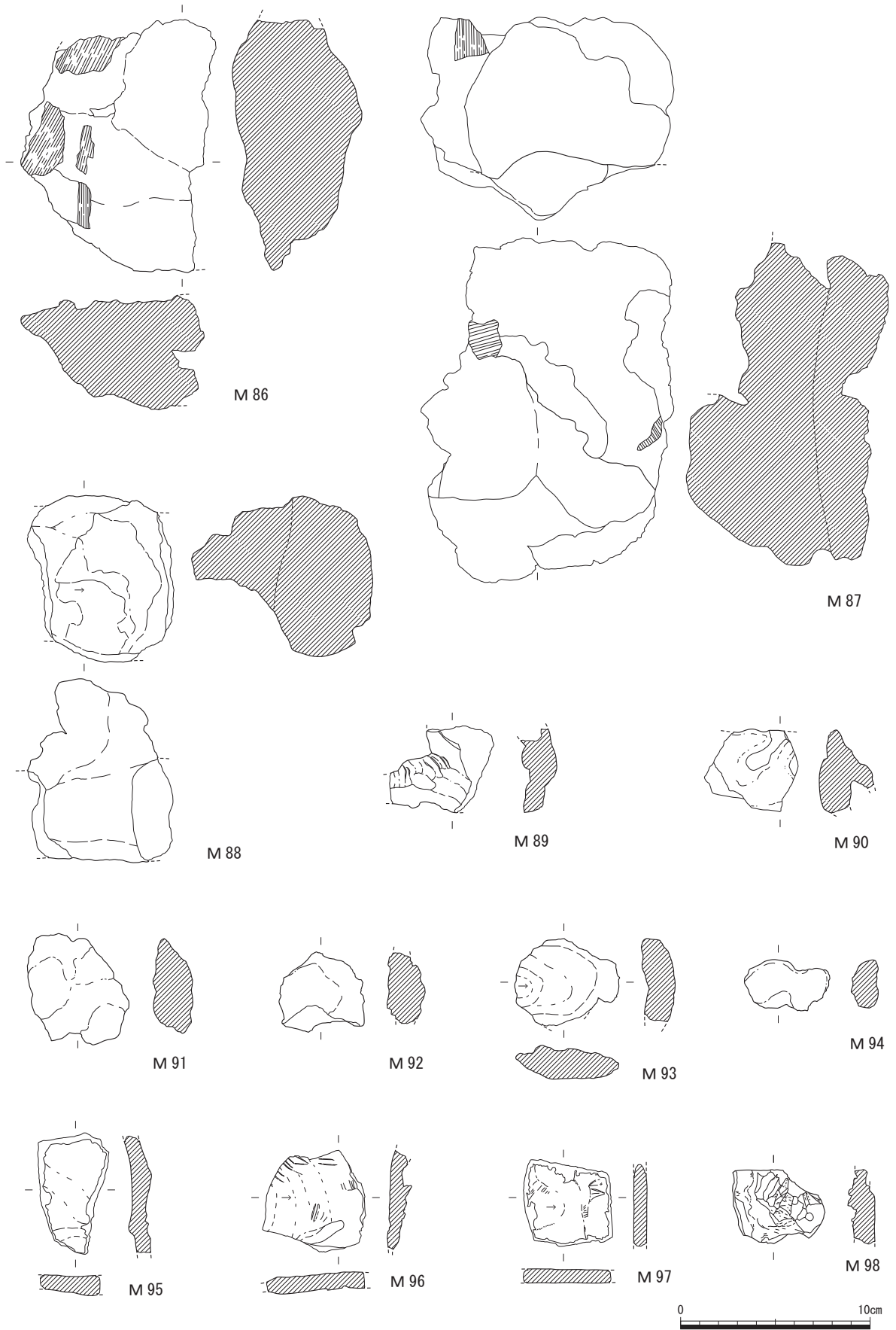
第210図 包含層1出土遺物⑭ (1/2・1/6・1/3・1/10)

かつて陶棺を伴う古墳が存在し、包含層1に流れ込んだことが想像される。

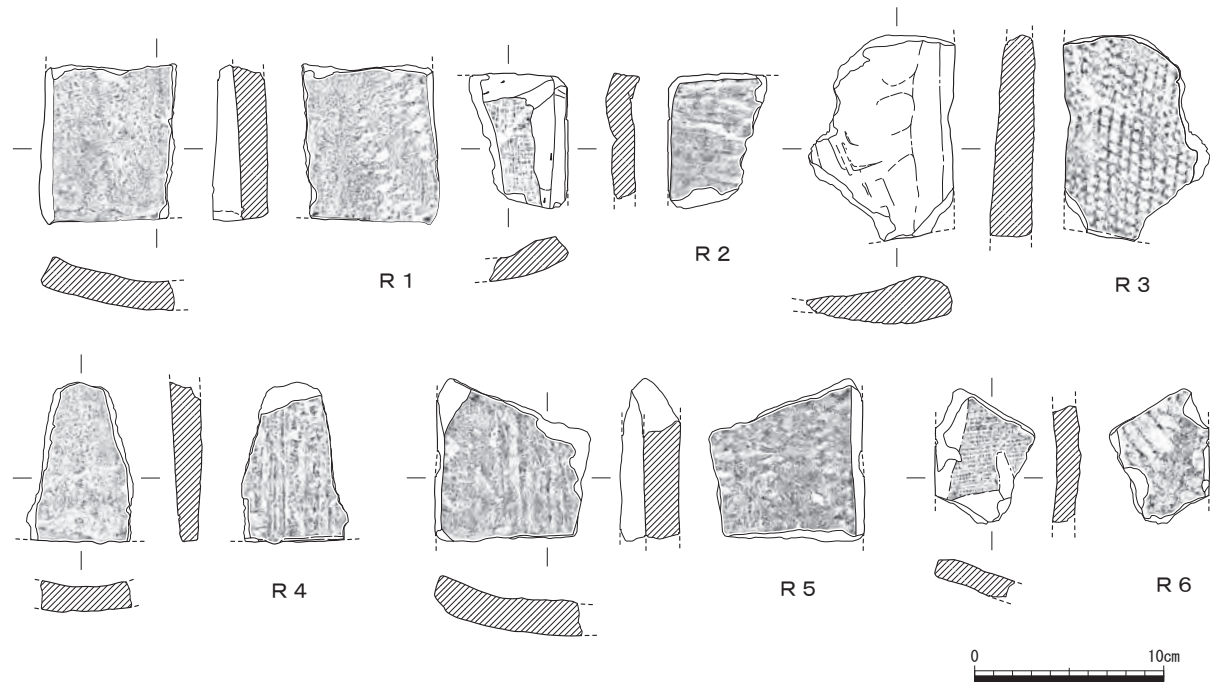
包含層1からは製鉄に伴う炉壁が計4,164.2gほど出土した。出土層位は上層が766.4g、中層が3,304.0g、下層が93.8gであることから、古墳時代後期～古代に帰属する可能性が高い。このうち、炉壁はC 10・C 11を図示し、内面は溶解してガラス質滓が付着している。C 10は分析(第5章第3節)を行い、耐火度が1160℃とやや低い耐火性状との結果が得られた。C 12～C 18は管状土錘で、C 17以外の6点は上層から出土しており、中世に属するものと考えられる。



第211図 包含層1出土遺物⑮ (1/3・1/2)



第 212 図 包含層 1 出土遺物⑩ (1/3)



第 213 図 包含層 1 出土遺物⑰ (1/4)

M 40～M 83 は鉄器である。M 40～M 56 は形態と大多数が中層から出土していることから、古墳時代後期に帰属する可能性がある。M 40～M 44 は鍬で、M 40 は腸袂三角形鍬群、M 41 は方頭式に分類される。M 45 は鉋？、M 46～M 48 は刀子、M 49 は摘鎌、M 50 は鎌？、M 51 は紡錘車に伴う紡茎である。M 52～M 56 は器種の特定が難しい。M 52 は半球状で、上下左右の 4 方向に突起が延びる。馬具の可能性も考えられなくもないが、全体的に小形で華奢である。M 53 は振りがあり、長楕円形の半環状を呈する。M 54・M 55 は板状、M 56 は棒状で、全体は明らかでない。

M 57～M 85 は中層～上層で出土し、大半が中世に比定されよう。M 57 は刀子、M 58 は楔である。M 59 は鑄造の鉄鍋、M 60 は毛抜形？、M 61 は火打金である。M 62～M 73 は鉄釘で、M 63・M 70 には木質が残る。M 62・M 63・M 64・M 72 は頭巻釘、M 73 は切釘に分類される。M 74・M 75 は板状で、器種は不明である。M 74 は鍛造、M 75 は鑄造による。M 76 は火打金、M 77 は楔、M 78 は鎌の可能性はある。M 79～M 83 は板状の破片で、器種は定かではない。M 84・M 85 は銅銭で、M 84 は皇宋元寶か皇宋通寶、M 85 は皇宋元寶、大宋元寶、聖宋元寶のいずれかであろうか。

包含層 1 では鉄滓が計 24,005.8 g ほど出土した。出土層位は上層 4,176.9 g、中層 19,755.7 g、下層 73.2 g で、中層が大多数を占めることから、古墳時代後期から古代に帰属する可能性がある。鉄滓のうち、製錬滓は 23,328.1 g、鍛冶滓は 677.7 g に分けられる。製錬滓では炉内滓 M 86、炉壁付きの製錬滓 M 87、流出孔滓 M 88、流動滓 M 89・M 90、鍛冶滓では極小形の椀形鍛冶滓 M 91～M 93、鍛冶滓 M 94 を図示した。このうち、M 89・M 91・M 92・M 94 を分析した（第 5 章第 3 節）。

銅滓(カラム)は上層から 363.5 g、中層から 23.7 g の計 387.2 g が出土した。これらは出土層位から、中世に属することが推測される。銅滓 M 95～M 98 は薄板状で、色沢は紫黒色を呈する。分析の結果、銅製錬に伴うものと反応副生物との結果が得られた（第 5 章第 3 節）。

平瓦 R 1～R 6 は上層から出土し、中世に比定される。いずれも薄手で、凹面は布目痕、凸面にタタキ痕が認められる。なお、本調査では軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦は出土していない。（米田）

第6節 その他の遺構・遺物

1 段状遺構

段状遺構 37 (第 214 図)

2区の東端に位置する。壁体溝のみが検出できた段状遺構で、高尾北ヤシキ古墳の周溝により切られている。埋土中から須恵器杯蓋 686 が出土したが、伴うものか確証はない。(小嶋)

2 墓

墓 2 (第 215 図)

3区の南東、整地面 3の西端に位置する。平面形は長方形を呈する。規模は長軸 110 cm、短軸 70 cm、深さ 21 cmである。土坑の形態や規模から近世の土坑墓と考えられる。(米田)

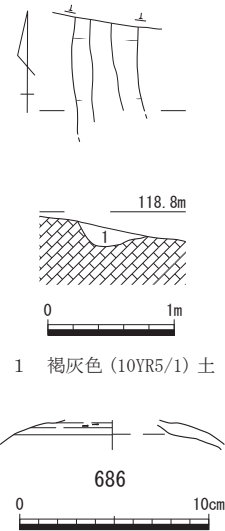
墓 3 (第 215 図)

4区南端に位置する。平面形は長方形、規模は長軸 119 cm、短軸 82 cm、深さ 46 cmである。棺金具 M 99 ~ M 102 より近世の土坑墓と考えられる。(四田)

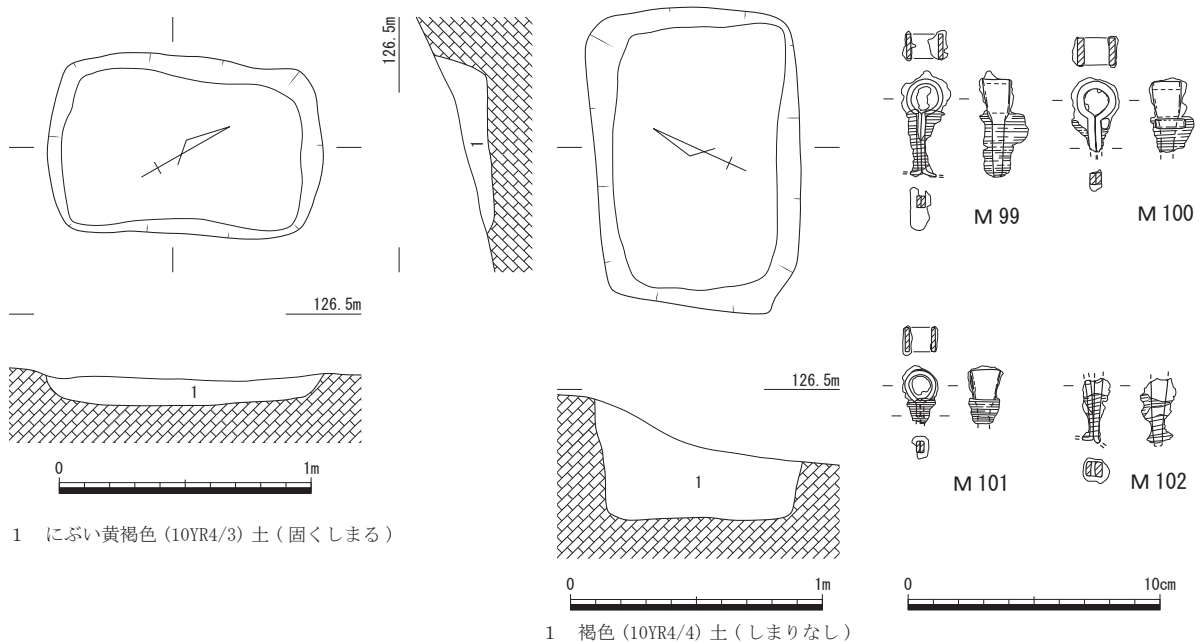
3 土坑

土坑 24 ~ 26 (第 215 図)

土坑 24 は 1 区の南西端に位置している土坑で、東側は削平を受けていた。底面は北側を除きテラス面を持ち、中央部が一

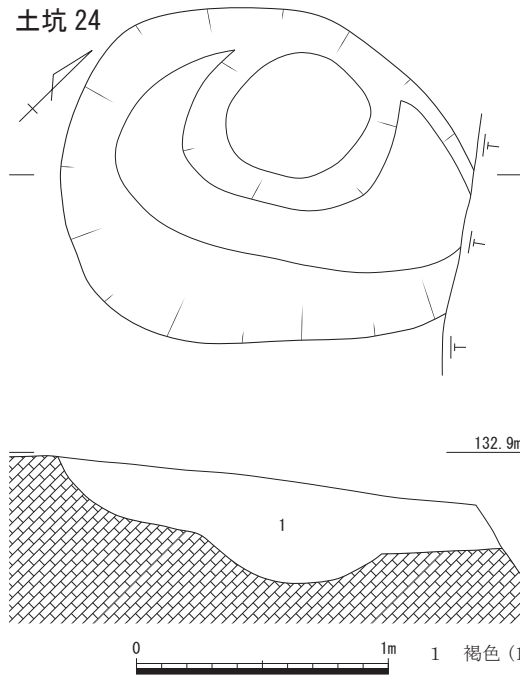


第 214 図 段状遺構 37 (1/60)、出土遺物 (1/4)

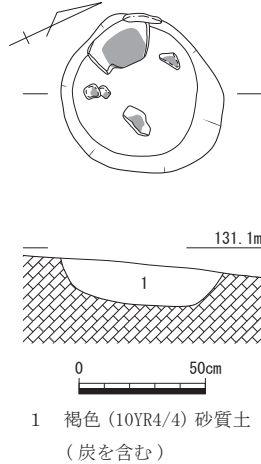


第 215 図 墓 2・3 (1/30)、墓 3 出土遺物 (1/3)

土坑 24



土坑 25



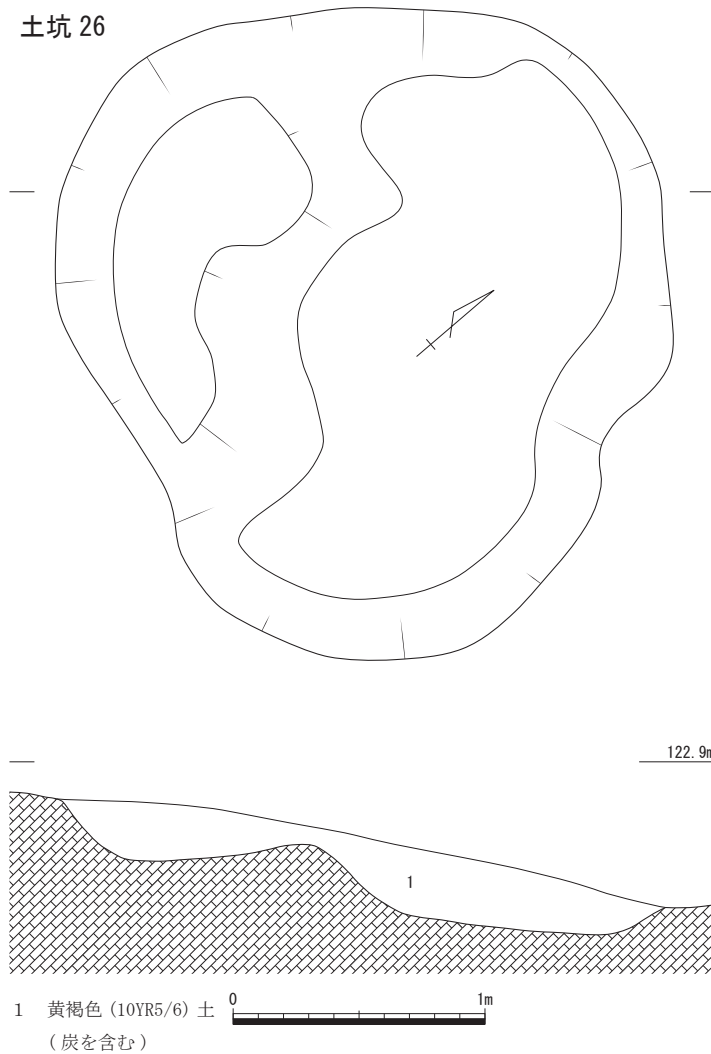
段深く掘削されている。被熱痕跡は認められないが、埋土中に炭・焼土粒を含んでいた。

土坑 25 は、1 区の南半中央部で検出した土坑である。埋土中に炭を含み、底面の石には図示している部分に被熱赤化が認められた。

土坑 24 の東側に隣接している土坑 26 は、底面の西側にテラス面を持ち、そこから約 30cm 深く掘削されている。

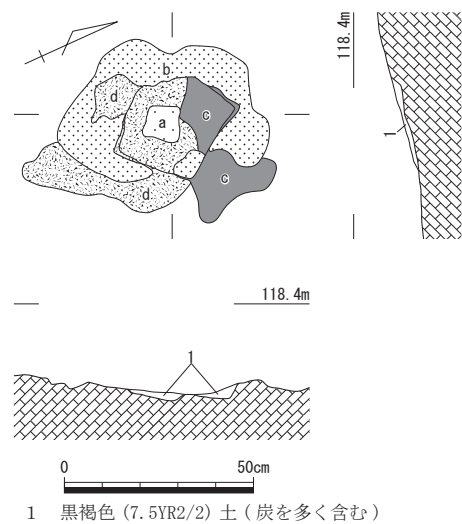
これらの土坑からは遺物の出土がなく、時期の比定ができない。(小嶋)

土坑 26



炉 1 (第 217 図)

1 区南東に位置する。平面形は不整形で、長軸 65 cm、短軸 45 cm である。強い熱を受けており、埋土は多量の炭を含む。時期は不明だが鍛冶等に関わる炉か。(四田)



被熱

- a 赤褐色 (2.5YR4/8)
- b 赤褐色 (10R6/8)
- c 明青灰色 (10BG7/1) <還元>
- d 赤黒色 (7.5R2/1) <吸炭>

第 216 図 土坑 24 ~ 26 (1/30)

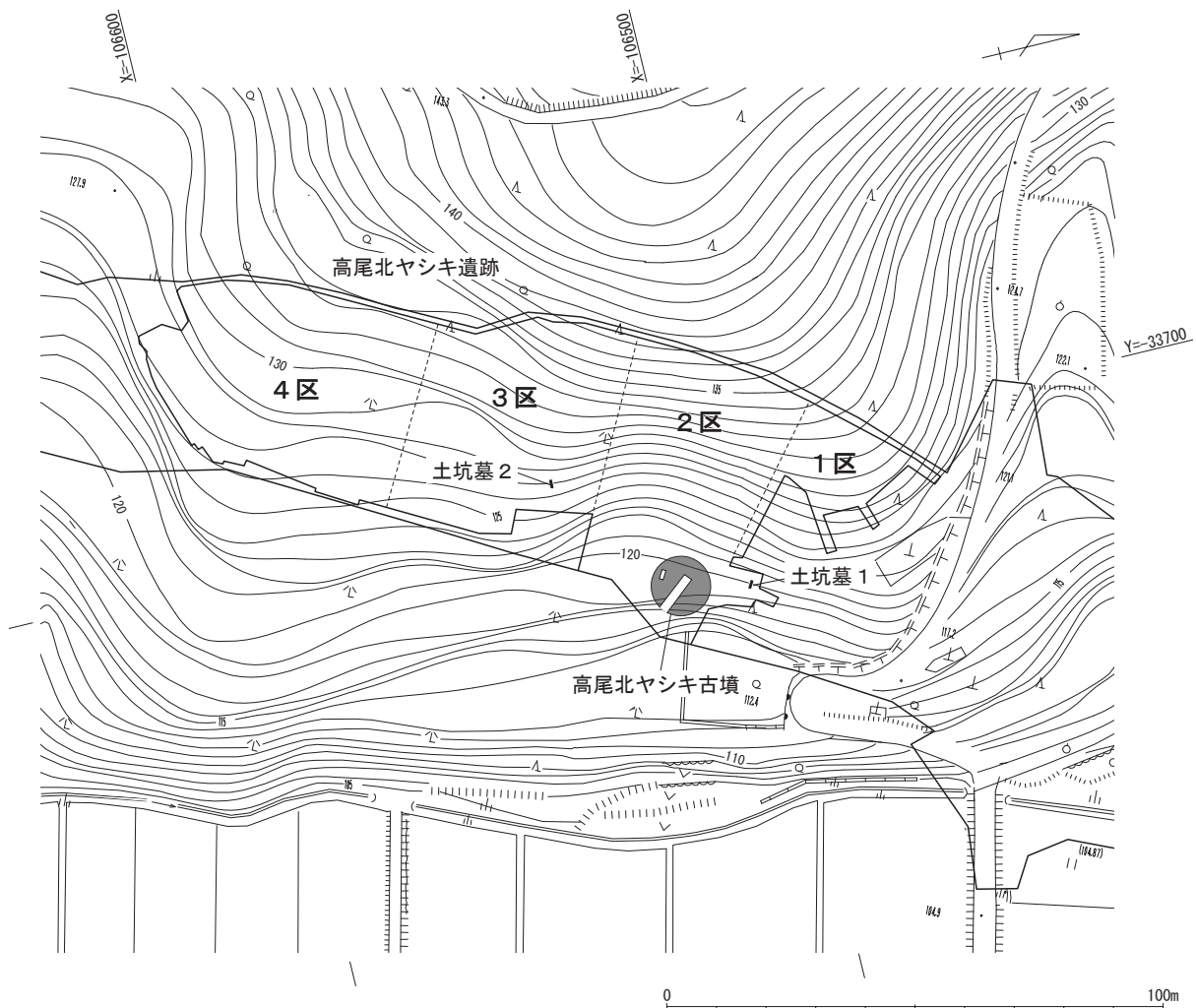
第 217 図 炉 1 (1/20)

第4章 高尾北ヤシキ古墳

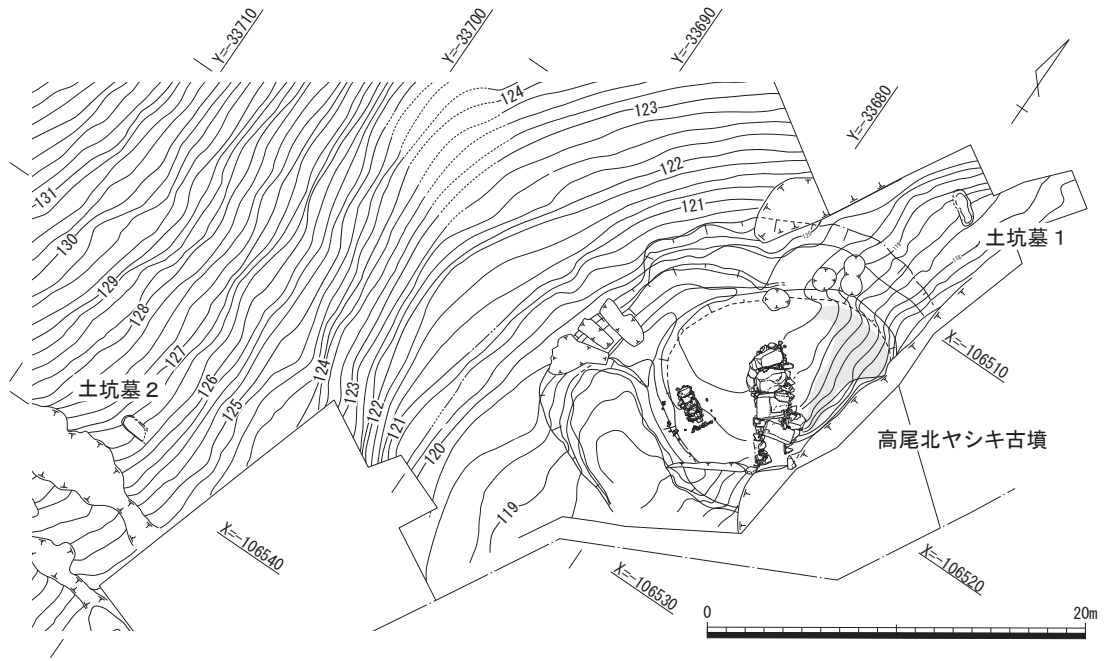
第1節 立地と調査前の状況

高尾北ヤシキ古墳は、標高約290mの嵯峨山東麓、丘陵先端部のやや窪んだ部分に単独で立地する(第218図、図版2)。北側の丘陵には、弁慶岩古墳群と正京茶畑古墳がある。眼下には皿川により形成された南北に細長い平野が広がる(巻頭図版1、図版1)。高尾北ヤシキ古墳の周囲では、土坑墓が北側に近接して1基、南西側にやや離れた場所に1基が確認できた(第219図)。

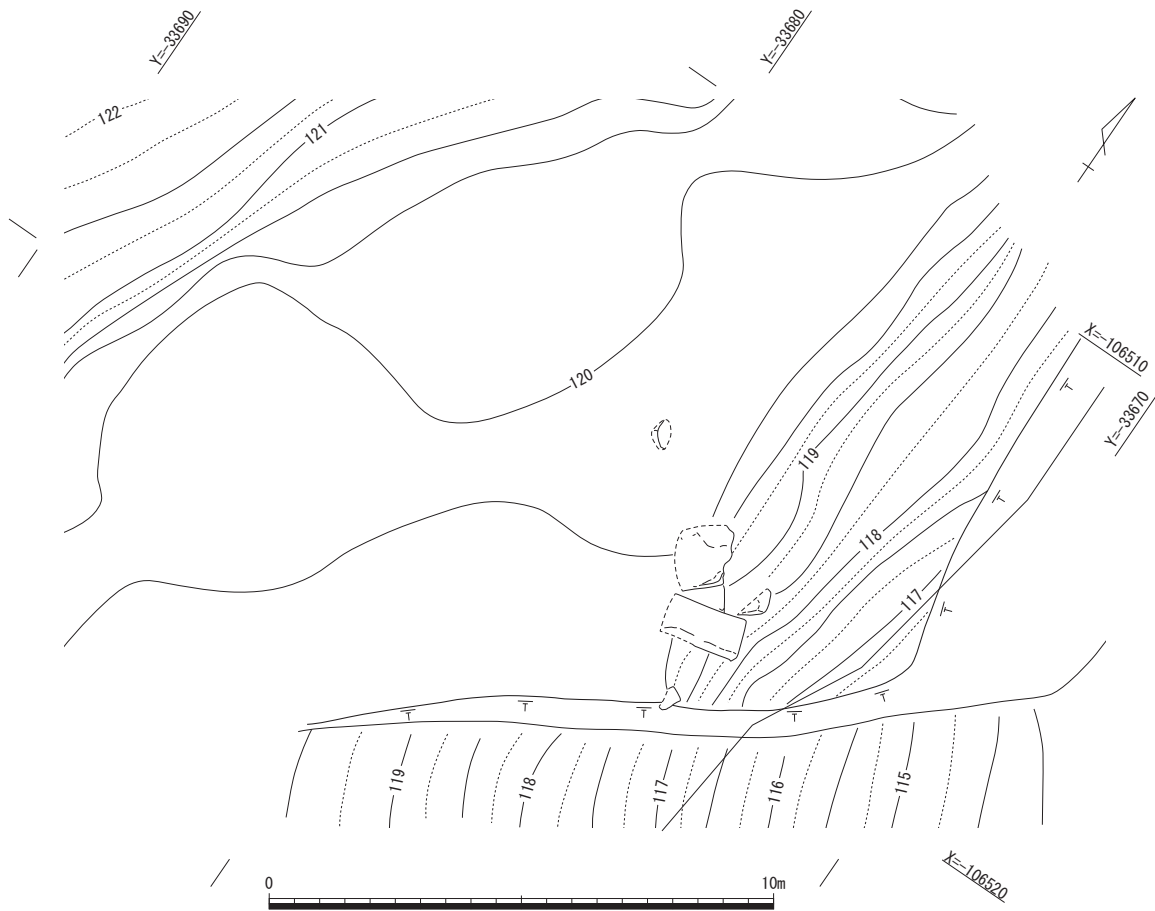
調査前の古墳は、後世の造成により墳丘西半は平坦にならされ、東半は削平を受けたことにより内部の横穴式石室の一部が削り取られていた。南側も山道によって削られ、横穴式石室の入口付近は滅失し、山道の法面に側壁が露出していた(図版61-3)。横穴式石室内部は天井石から約20cm下まで土で埋まっており、天井石の一部が地表に露出する状況であった。そのような状況であったため、調査前には墳形や規模を推定することはできなかった(第220図・図版61-1)。(藤井)



第218図 高尾北ヤシキ古墳周辺図(1/1,500)



第219図 高尾北ヤシキ古墳・土坑墓全体図 (1/400)

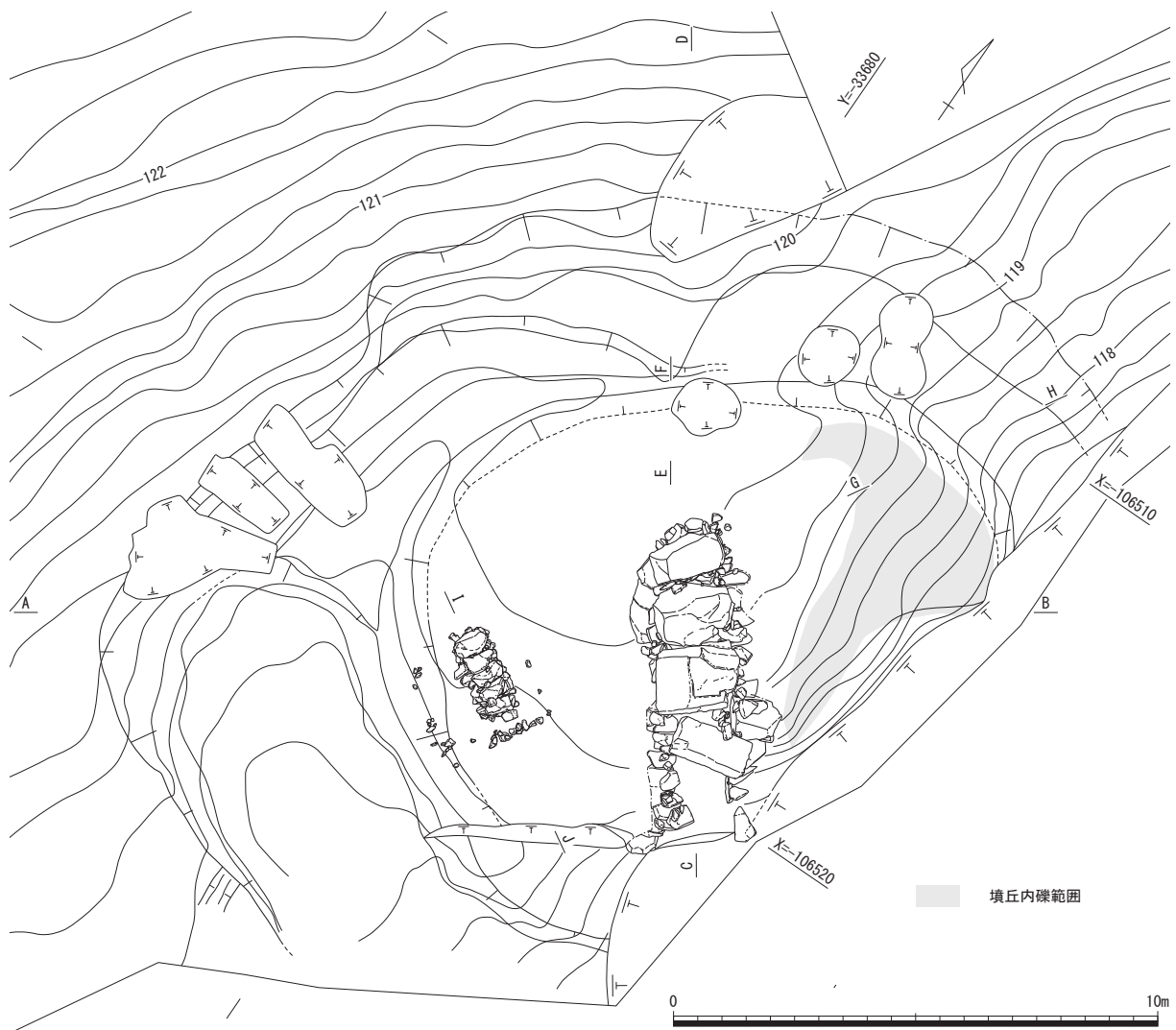


第220図 調査前の地形 (1/150)

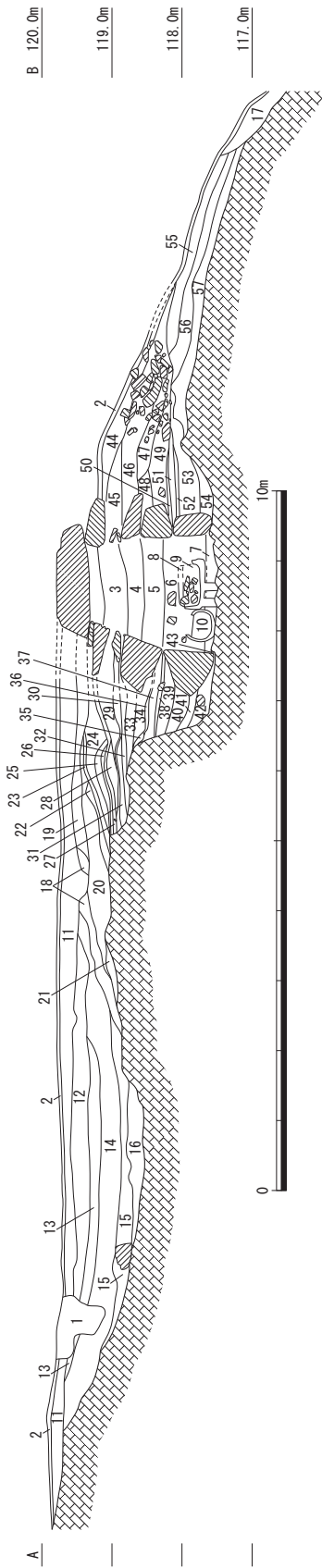
第2節 墳丘と周溝

墳丘（第221図）は、前述のように後世に大規模な削平を受けていた。墳丘頂部は、内部の横穴式石室の天井石が露出する高さまで削り取られ、残存高は約1mである。また墳丘東半は完全に破壊されていた。A-B断面、C-D断面、E-F断面、G-H断面の成果（第222・223図）から墳丘は約13.7mの円墳に復元できる。墳丘は横穴式石室の基底石設置後に盛られている。墳丘の盛土は、横穴式石室を構築しながら天井石の下端までやや小規模な墳丘を築く段階（以下「一次工程」と呼ぶ）とその後に全体に盛土を施し、最終的な墳丘を完成させる段階（以下「二次工程」と呼ぶ）にわかれることが確認できた（第222図）。また山裾側の墳丘の東半には礫が多く確認でき（第221図、図版68-3、69-1）、盛土の流出を防ぐための土留めだと推察される。このような墳丘の構築技術は、高尾北ヤシキ古墳から北に250～300m離れた桑山南1・3号墳でも認められる⁽¹⁾。

埋葬施設は、横穴式石室と竪穴式石室を確認した（巻頭図版5、図版62-1）。竪穴式石室は未盗掘で天井石がすべて残っていた。その上には二次工程の墳丘盛土が載っていた（第223図I-J断面）。

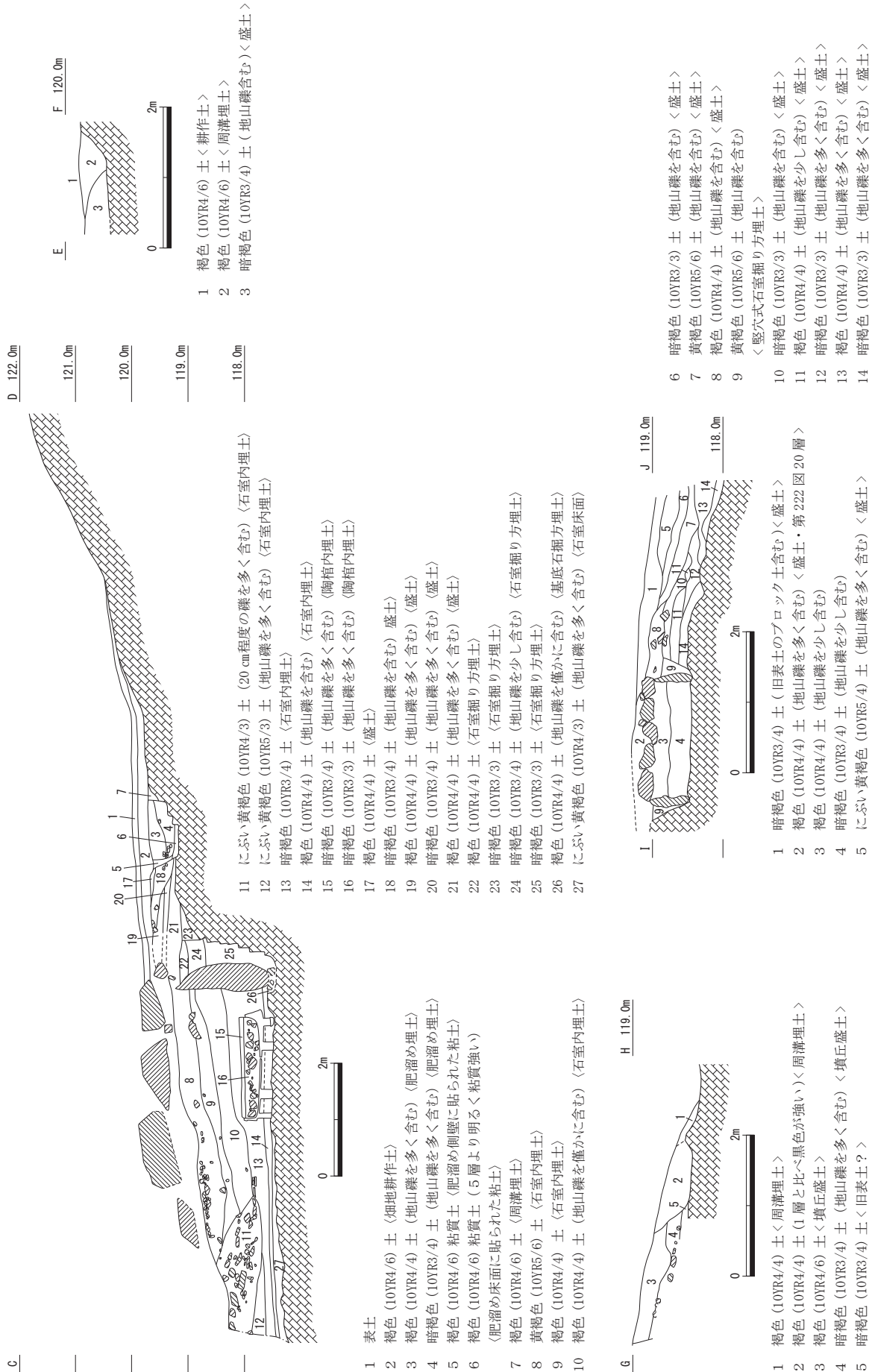


第221図 高尾北ヤシキ古墳墳丘 (1/150)

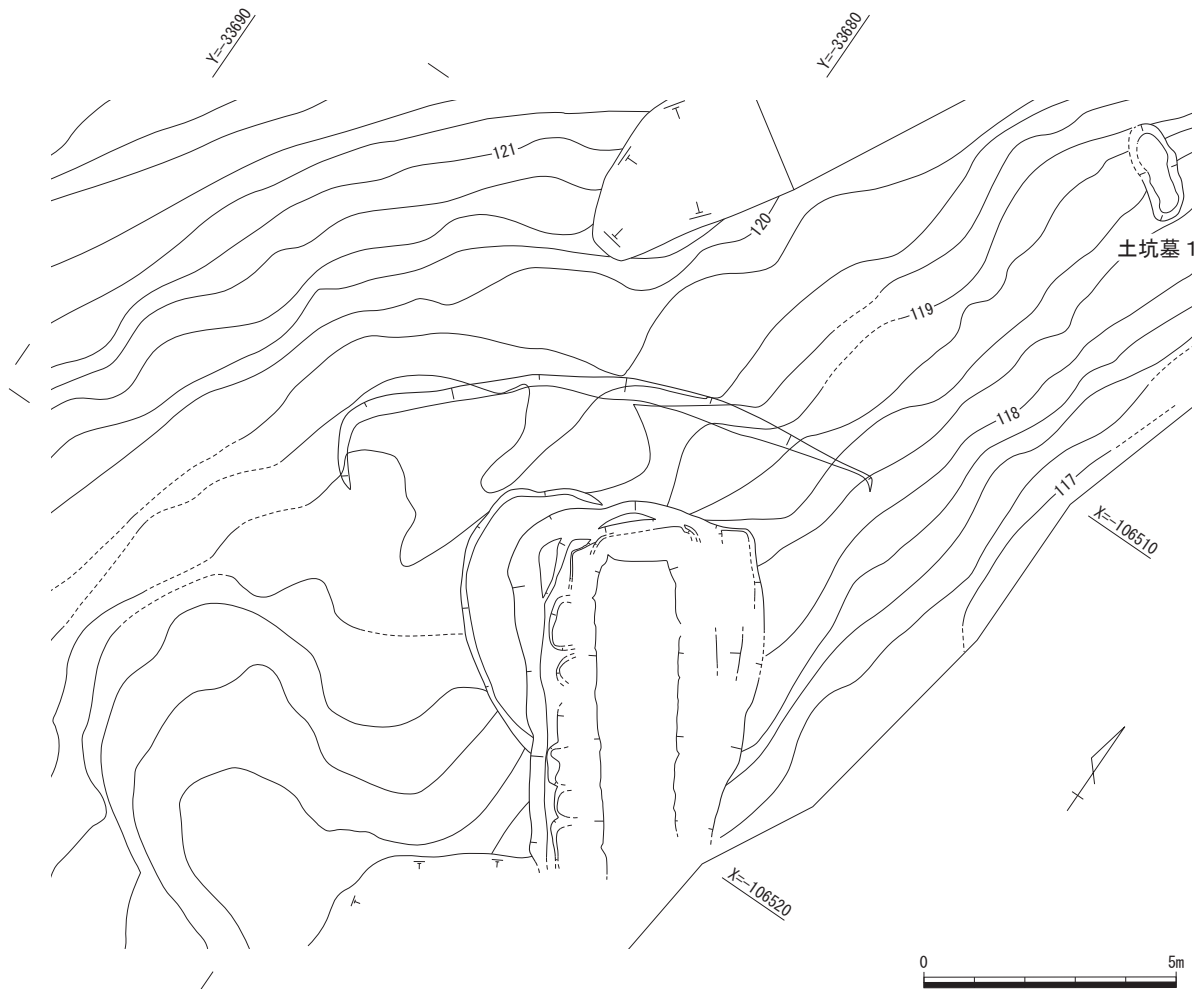


- | | | | | | |
|----|---|----|---------------------------------------|----|---------------------------------------|
| 1 | 褐色 (10YR4/4) 土と明黄褐色 (10YR6/6) 土 (攪乱土) | 20 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を多く含む) (盛土) | 40 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を含む) (石室裏込土) |
| 2 | 表土 | 21 | 黄褐色 (10YR5/6) 土 (地山礫を含む) (盛土) | 41 | 褐色 (10YR4/6) 土 (石室裏込土) |
| 3 | 黄褐色 (10YR5/6) 土 (石室内埋土) | 22 | 黄褐色 (10YR5/6) 土 (地山礫を含む) (盛土) | 42 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を含む) (石室裏込土) |
| 4 | 褐色 (10YR4/4) 土 (石室内埋土) | 23 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を多く含む) (盛土) | 43 | 褐色 (10YR4/4) 土 (基底石掘り方埋土) |
| 5 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を含む) (石室内埋土) | 24 | 暗褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を多く含む) (盛土) | 44 | 褐色 (10YR4/6) 土 (盛土) |
| 6 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (石室内埋土) | 25 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を多く含む) (盛土) | 45 | 褐色 (10YR4/4) 土 (盛土) |
| 7 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を含む) (石室内埋土) | 26 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を含む) (盛土) | 46 | 褐色 (10YR4/4) 土 (旧表土が混じる) (盛土) |
| 8 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を多く含む) (陶棺内埋土) | 27 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を含む) (盛土) | 47 | 褐色 (10YR4/6) 土 (盛土) |
| 9 | 暗褐色 (10YR3/3) 土 (100mm以上の礫を非常に多く含む) (陶棺内埋土) | 28 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を少し含む) (盛土) | 48 | 褐色 (10YR4/4) 土 (盛土) |
| 10 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を含む) (筒形土製品内埋土) | 29 | 褐色 (10YR4/6) 土 (地山礫を少し含む) (盛土) | 49 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (旧表土が混じる) (盛土) |
| 11 | 褐色 (10YR4/6) 土 (畑地耕作土) | 30 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を少し含む) (盛土) | 50 | 黄褐色 (10YR5/6) 土 (石室裏込土) |
| 12 | 褐色 (10YR4/4) 粘質土 (周溝埋土) | 31 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を少し含む) (盛土) | 51 | 暗褐色 (10YR3/3) 土 (石室裏込土) |
| 13 | 褐色 (10YR4/4) 粘質土 (12層と比べてやや薄い色調) (周溝埋土) | 32 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 (地山礫を少し含む) (盛土) | 52 | 黄褐色 (10YR5/6) 土 (石室裏込土) |
| 14 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 (周溝埋土) | 33 | 褐色 (10YR4/6) 土 (石室裏込土) | 53 | 褐色 (10YR4/4) 土 (旧表土が混じるブロック土) (石室裏込土) |
| 15 | 褐色 (10YR4/6) 土 (周溝埋土) | 34 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を少し含む) (石室裏込土) | 54 | 褐色 (10YR4/6) 土 (石室裏込土) |
| 16 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 地山ブロック土含む (周溝埋土) | 35 | にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 (地山礫を少し含む) (石室裏込土) | 55 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山土が若干混じる) (流土) |
| 17 | 褐色 (10YR4/6) 土 (流土) | 36 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を少し含む) (石室裏込土) | 56 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山土が若干混じる) (流土) |
| 18 | 褐色 (10YR4/4) 土 (盛土) | 37 | 黄褐色 (10YR5/6) 土 (地山礫を少し含む) (石室裏込土) | 57 | 暗褐色 (10YR3/3) 土 (旧表土) |
| 19 | 黄褐色 (10YR5/6) 土 (地山礫を多く含む) (盛土) | 38 | 暗褐色 (10YR3/4) 土 (地山礫を少し含む) (石室裏込土) | | |
| | | 39 | 褐色 (10YR4/4) 土 (地山礫を少し含む) (石室裏込土) | | |

第222図 高尾北ヤシキ古墳墳丘・石室内土層断面①(1/100)



第223図 高尾北ヤシキ古墳墳丘・石室内土層断面② (1/100・1/80)



第 224 図 横穴式石室掘り方・墳丘構築前地山整形段 (1/150)

このことから竪穴式石室は、一次工程が完了し、二次工程が着工される前に埋葬が終えられていたことがわかった。

周溝は後世の削平の影響を受けていない部分で確認できた。A－B断面で幅約 7.45 m、深さ約 1.18 mを測る。滅失していた東側に周溝が巡っていたのかは不明であるが、排水の観点から考えると平野に面する東側には周溝はなかった可能性が考えられる。

また墳丘下の地山面では標高の高い部分を削り、方形の平坦面を整形した段が認められた（第 224 図）。横穴式石室の掘り方と平行になるようであり、横穴式石室の構築にあたって、平坦面をつくるために削平されたものとする。また、横穴式石室の掘り方西側には、等高線に直行するような 10～20 cm程度の段が認められ、当初はこちらを横穴式石室の掘り方として掘削していたのかもしれない。本節の内容を踏まえた古墳の築造過程については別章で考察する（第 6 章第 5 節）。（藤井）

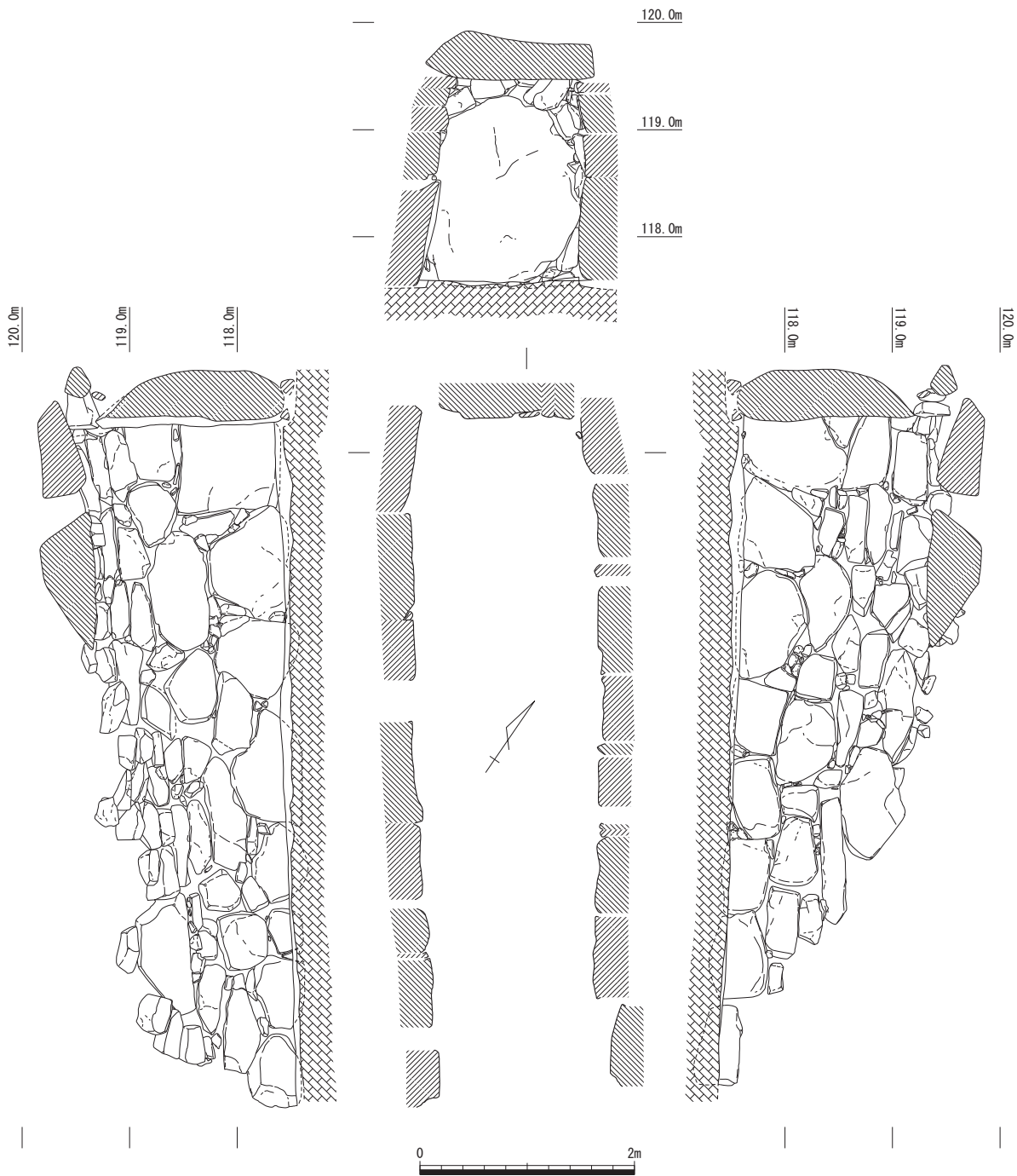
註

(1) 岡山県教育委員会 2022『桑山南古墳群・細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255

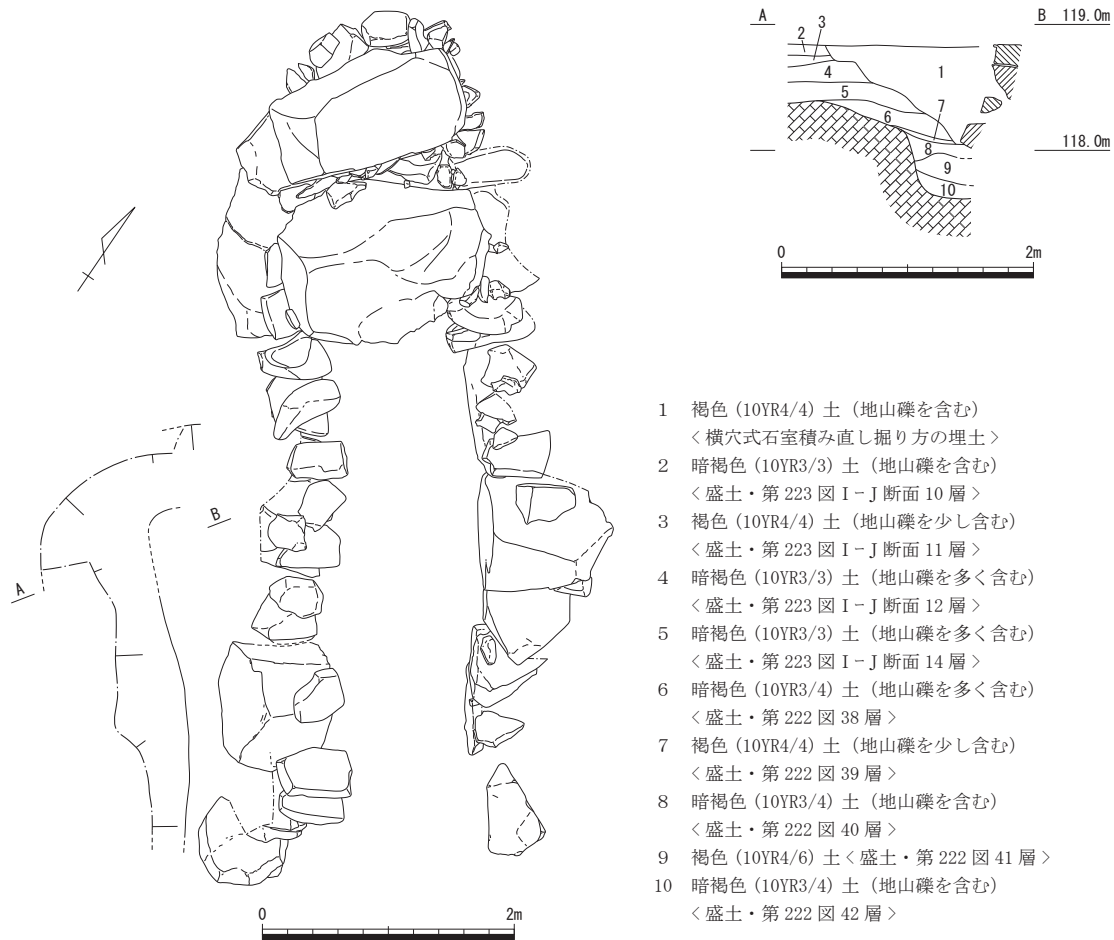
第3節 横穴式石室

1 横穴式石室

横穴式石室は墳丘のほぼ中央に築かれていた。墳丘盛土に先行して、横穴式石室の掘り方を方形に掘り、基底石を掘り窪めて据えている（第224図）。掘り方の深さは、奥壁側では約1.9mに達し、これは奥壁の大部分を占める基底石の上端まで埋まる深さである（第223図）。左側壁側⁽¹⁾は地山を



第225図 高尾北ヤシキ古墳横穴式石室 (1/60)



第226図 横穴式石室積み直し掘り方・土層断面 (1/60)

約1.1m掘っている。右側壁側では旧表土が残り、その上から約0.7m掘り込まれていた(第222図)。奥壁は掘り方に沿うように据えられ、側壁は両側とも掘り方から余裕を持たせて設置されている。

横穴式石室は無袖式で、規模は残存長6.5m、奥壁幅1.48m、最大幅1.7m、最大高1.9mである(第225図)。南南東方向に開口しており、石室主軸方向はN-35°-Wである。当初天井石は4石が残存していたが、入口に一番近い天井石は動いていた(第221図、図版61-2)。入口から2石目も原位置に近い位置ではあるが動いている可能性が考えられ、残りの天井石も安全上の不安があったためすべての天井石を調査の初期段階で撤去した。奥壁は垂直に立ち、大部分を基底石1石で占めるが、上部1割ほどは30~40cmの石材を詰めている(図版63-2)。右側壁は、基底石に大型の石材を用いている。中でも奥壁に接する石材が一番大きく、入口側に向かって徐々に小さくなっていく(図版64-1)。石材はおおむね5段になるように積み重ねられている。下から2石目には基底石と同じような大きさの石材も用いるが、それより上段では基本的には基底石の半分以下の大きさの石材を用いている。縦目地は奥壁付近では通るものの他の部分では通らず、千鳥に積むように意識されている。横目地は、奥壁と接する両側壁基底石の上辺付近、奥壁基底石の上辺付近で通るようである。左側壁も同じような用石方法で積み重ねられている(図版64-2)が、奥壁側から約2.9mの地点より入口側で、床面より3石目以上の高さの範囲で積み直されていた(第226図、図版69-2)。開口部付近は、前述のとおり削平により依存しておらず、閉塞施設などは確認できなかった。(藤井)

2 横穴式石室内棺

横穴式石室内からは陶棺が1基出土した(第227図、巻頭図版6)。棺身は、石室主軸よりやや斜めに振れるものの石室中央に据え置かれ、奥壁との間はわずか16cmという位置で出土していることから、原位置を保っていると考えられる。しかし身の口縁部付近と蓋は、人為的に破壊されていた。身の中には、礫がびっしりと詰め込まれ、その間に陶棺片も含まれていた(第223図、図版67-2)。陶棺の周囲からは礫が相対的に多く出土していないこと、礫の間から後述する中世前半の土器が出土したことから、中世以降に人為的に詰め込まれたものと考えられる。また横穴式石室に土が堆積した後(第223図C-D断面の第13層上面付近)で陶棺片が散乱したようである(図版67-1)。

また陶棺の横で横倒しの状態で見つかった筒形土製品は棺であった可能性も考えられるが、内部から出土遺物が見つからず、蓋のようなものも出土しなかった⁽²⁾ため副葬品として石室内に持ち込まれた可能性もある。(藤井)

3 横穴式石室内遺物出土状況

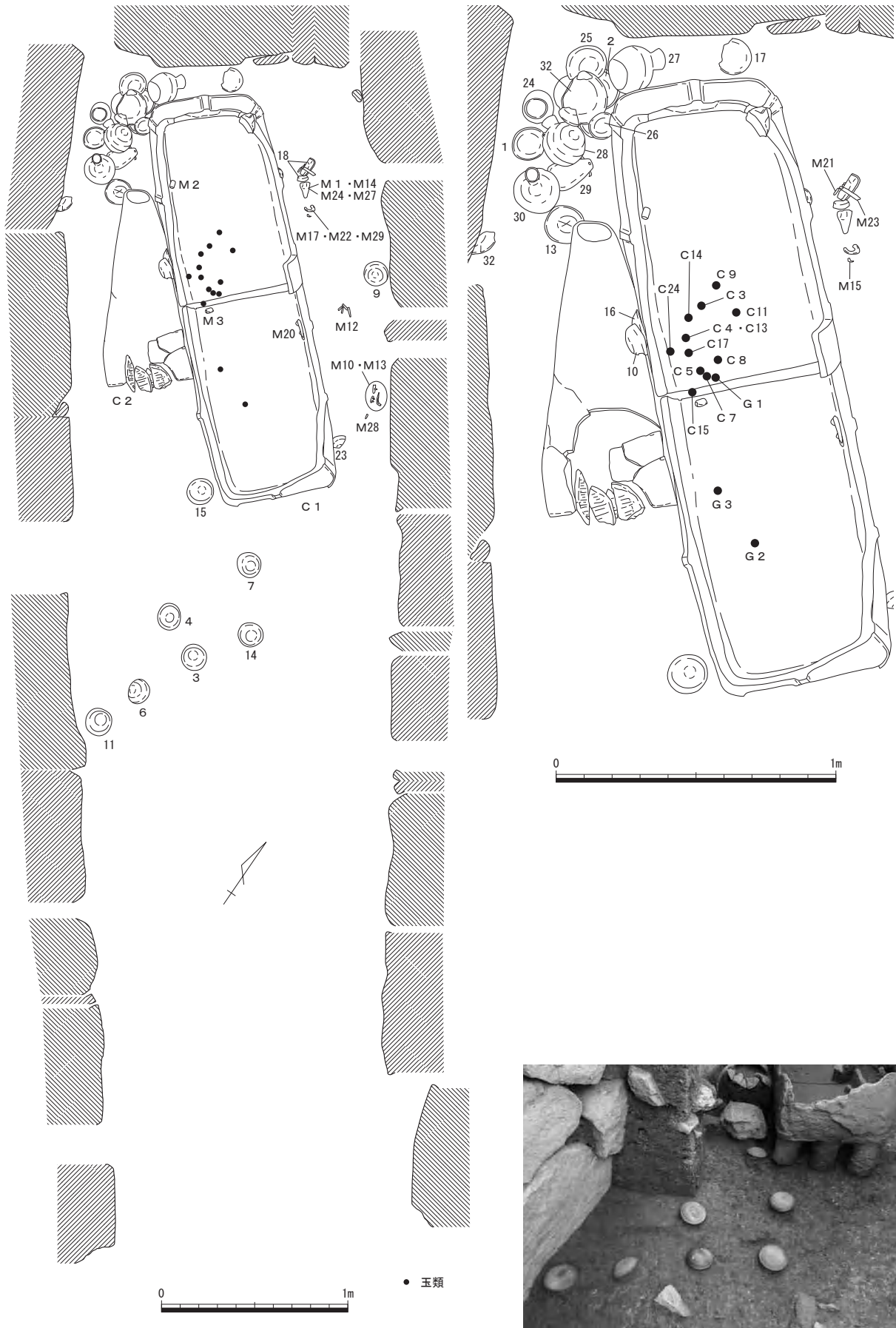
陶棺内の副葬品としては、棺底面から出土した刀装具(M2・M3)、刀子(M20)、ガラス小玉(G1~G3)、土玉(C3~C5・C7~C9・C11・C13~C15・C17・C24)がある(第227図)。陶棺内は前述のとおり、礫や陶棺片が詰められていたが、上記の遺物は底面に直接乗っていることから、原位置に近い位置であると考えられる。柄頭(M2)が奥壁側で、鞘尻(M3)が入口側で出土していることから、頭部は奥壁側に向けて埋葬されたと考えられる。ガラス小玉・土玉は陶棺内の南西側に偏って出土しており、刀装具の出土位置と比較すると、被葬者の右手付近に付けられていたものの可能性が高い。また礫の間からは水晶製の切子玉(S1)⁽³⁾や馬鈴(M11)、中世前半の土師器の小皿(33・34)、高台付皿(37)が出土している。

棺外の遺物の中で床面付近から出土したものは、大きく分けて陶棺と左側壁間の奥壁際、陶棺と右側壁との間、陶棺の手前付近で集中して見つかった。

陶棺と左側壁間の奥壁際では、筒形土製品や須恵器・土師器などの土器類が出土した。筒形土製品(C2)は底部付近が破損している状態であった。破片の一部は筒形土製品内の堆積土の上に押し込まれていた(図版67-6)。また堆積土の上に裏返して置かれた破片もあり、その上からは川原石⁽⁴⁾が出土した(図版67-4・5)。このことから、埋葬後に時がたち内部に土が詰まった後で割られ、破片は人為的に再配置されていたことがわかる。

陶棺と右側壁の間では鉄器が多く出土した。鉄器の多くは形が明確でない状態で固まって見つかった。刀片(M1)と馬具(M14)、雛形鉄器(M24)、「Y」字形の不明鉄器(M27)などは一塊になって出土し、検出した時はサビにより形状を捉えることができなかった。鋌(M17)、棒状の不明鉄器(M29)は、U字形鋤鋤先の雛形鉄器(M22)の直下で出土した。他の鉄器も副葬された位置からは動いているようだが、鉄器類は陶棺と右側壁の間に置かれていたことは間違いないだろう。

陶棺の下からは須恵器などが出土している(第228図)。杯蓋(8)と壺蓋(22)は口縁を上にして置かれ、その上に陶棺の足が乗っていた(図版67-3)。双方とも口縁を上に向けていたことから、棺台として設置されたのではなく、陶棺設置前に行われた儀礼に用いられたものだと考える。高杯(20)は杯部を下にした状態で見つかった。有蓋高杯の蓋(18)は口縁部が割られ、天井部のみで出土した。



第227図 横穴式石室遺物出土状況① (1/30・1/20)

写真17 陶棺手前須恵器出土状況(南東から)

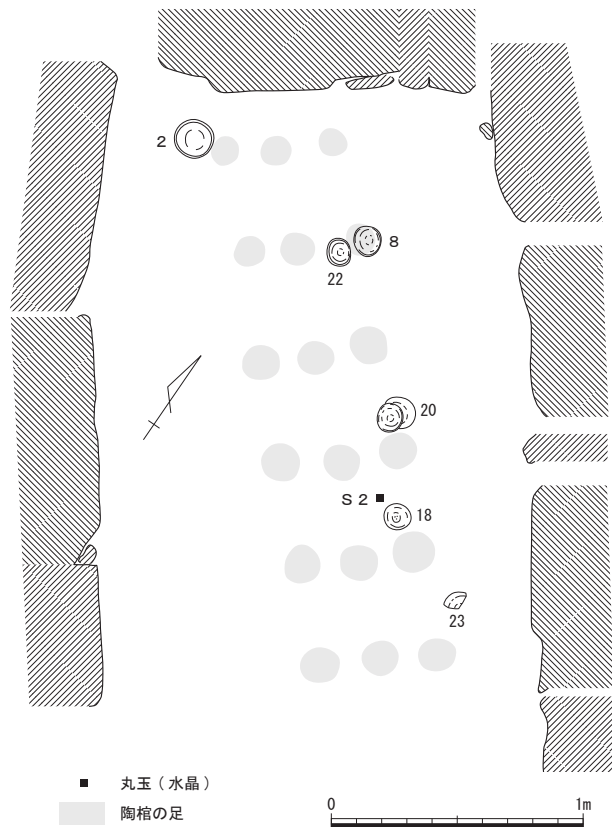
陶棺の手前付近では、須恵器の蓋杯（3・4・6・7・11・14・15）が口縁を下にして伏せられた状態で見つかった。これらはおおむね30 cm程度の間隔で均等に並べられていた。副葬後に再配置された可能性も排除できないが、棺台などの用途で設置されたものかもしれない。この付近の床面より20 cm上の高い位置では蓋杯（5・12）が伏せた状態で出土した。また、鉄鏃（M4）もこの付近で床面から20 cm上で出土している。

石室内からは鉄釘も出土しているが、大半が陶棺が完全に埋没した後の堆積土（第223図C-D断面の第10層より上）から出土し、低い高さから出土したもので陶棺の棺身と同じ高さで出土したことから、中世以降のものとする。銅銭も釘と同様な出土状況であった。留金具（M61）は石室内最上層（第223図C-D断面の第8層）から出土し、近現代のものである可能性がある。（藤井）

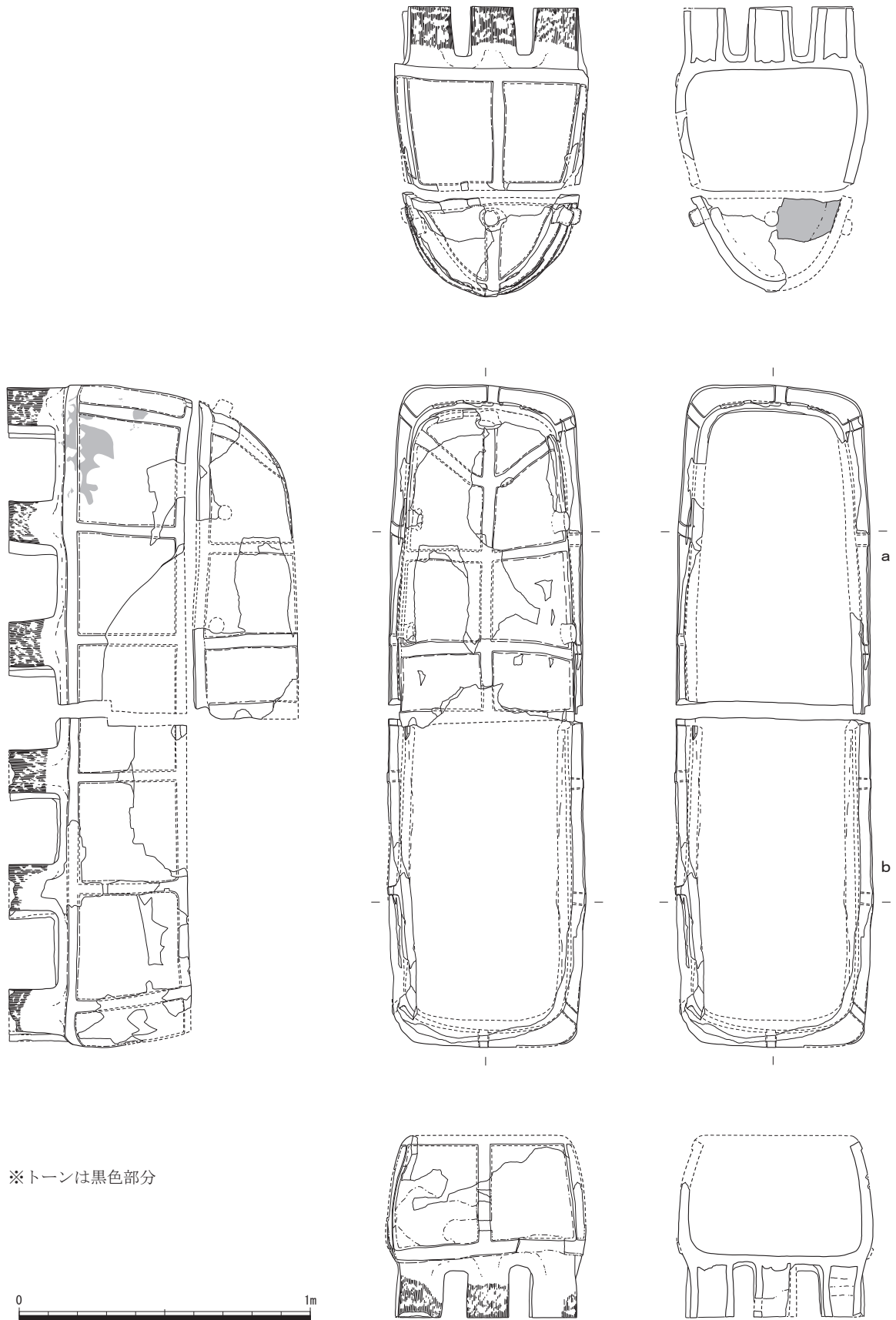
4 横穴式石室内出土遺物

陶棺（第229・230図、巻頭図版7、図版70）

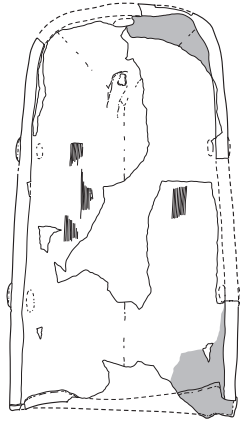
C1は蓋身一体造りの土師質亀甲型陶棺である。組み合わせ時は全長220.8 cm、最大幅67.0 cm、最大高99.0 cmを測る。片側のみ復元できた蓋は、長さ108.8 cm、高さ36.0 cm、厚さ3.2 cmである。蓋の合わせ目には、かぶせ部が設けられている。側面に付けられた円柱状の突起は、長辺に2つずつ、小口に1つが取り付けられていたようであり、反対側の蓋を合わせて当初は10個付いていたと考えられる。小口の突起は突帯上に設置されているが、長辺側の突起は突帯とずれた位置に取り付けられている。内面には成形時についたものとする木材の痕跡が認められる。棺身は長さが奥壁側（a）が112.8 cm、羨道側（b）が113.2 cm、高さは63.0 cmで、厚さは側面3.8 cm、底部2.8 cmを測る。棺身を左右に分割する際に両側壁にクランクを設けている。脚は3行6列である。脚の間には長軸と直交する板の痕跡が認められ、製作時に棺身を載せた台の痕跡であるとする。脚内部には棺身側から粘土塊が押し込まれ、周りの柔らかい粘土が内側に押し込まれている（第230図A・B）が、脚の下側から粘土塊を貼り付けている部分（第230図C）もある。また、陶棺の内外には汚れが付着したような黒色をした部分が認められる。このような黒色部分は他の陶棺でも確認されており、黒色顔料の可能性が指摘される⁽⁵⁾。調査時にはそのような認識を持っていなかったため、出土状況の写真撮影時に行った水洗により流れ落としてしまった部分もあると考えられる。



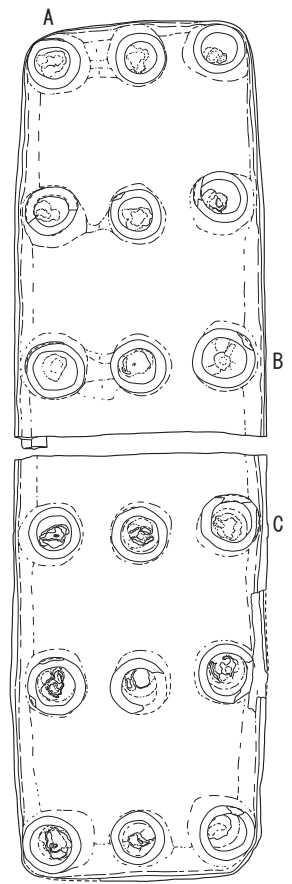
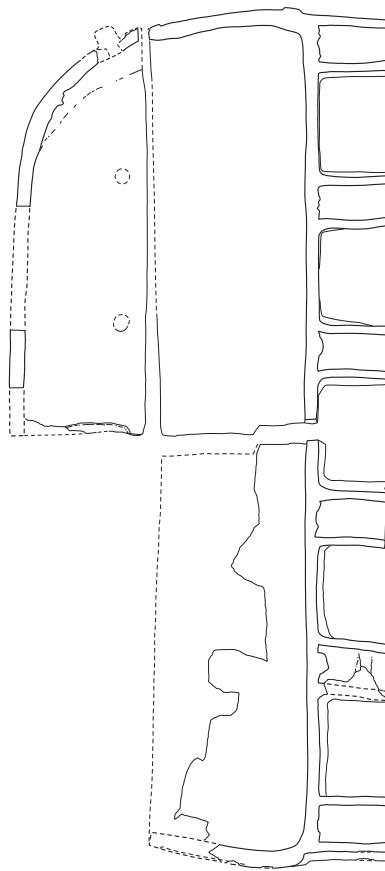
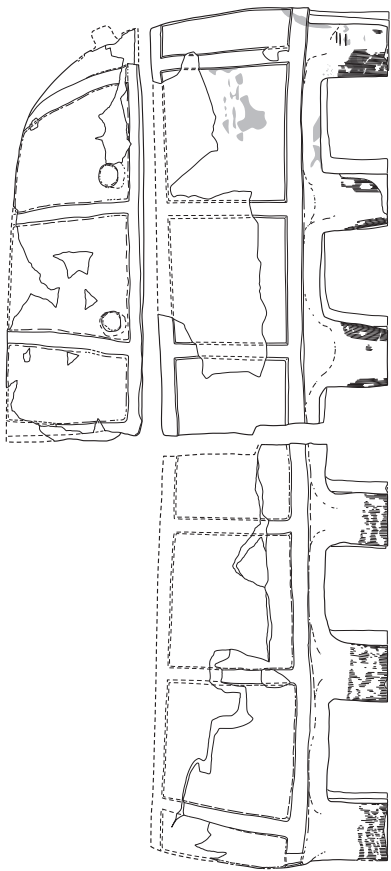
第228図 横穴式石室遺物出土状況② (1/30)



第229図 横穴式石室出土陶棺① (1/20)



身底部の板痕跡



0 1m

C 1



脚 (A) 内部

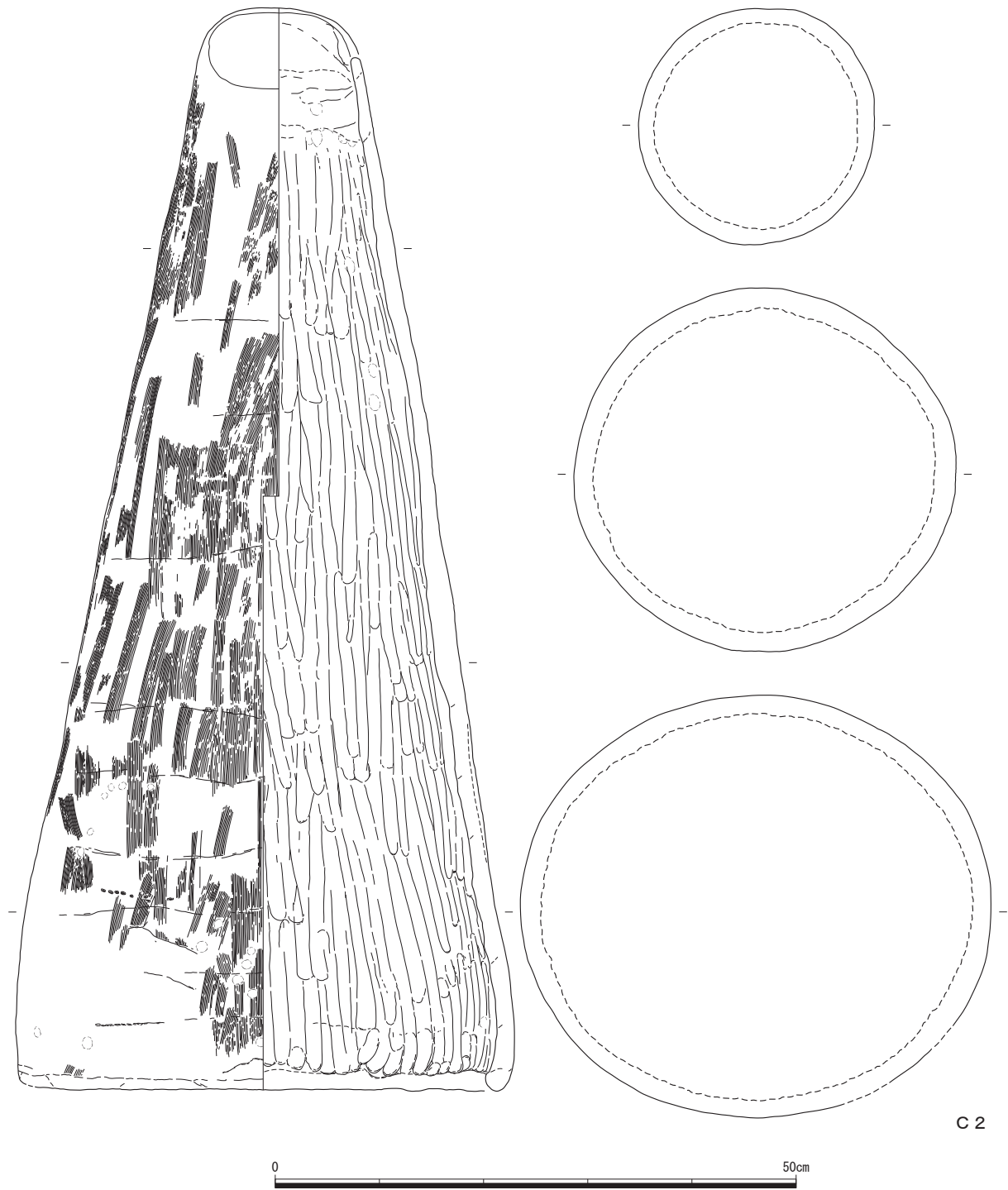


脚 (B) 内部



脚 (C) 内部

第230図 横穴式石室出土陶棺② (1/20)



第 231 図 横穴式石室出土筒形土製品① (1/6)

筒形土製品 (第 231・232 図、巻頭図版 8、図版 71)

C 2 は筒形土製品である。器高 104.2 cm、底径 44.8 cm の円錐形である。上端部は斜めに開口し、径は 14.6 cm である。外面はタテハケで調整がされている。断面を観察すると、表面の一部に白い化粧土のようなものを塗りつけているようである。また黒斑が広い範囲に広がっており、野焼きで焼成したことがわかる。底部の一部には縄のものと考えられる痕跡が確認できる。内面には、縦方向の強いユビナデが全面に施されており、上端部付近では、その後に横ナデで強いナデの痕跡を消している。



第232図 横穴式石室出土筒形土製品② (1/6)

形状から煙突としての用途が考えられるが、内面にはススなどの痕跡は確認できない。

土器 (第233・234図、巻頭図版8、図版71～73)

横穴式石室内から出土した古墳時代の土器は、図示し得たもので須恵器31個体、土師器1個体である。また古墳時代以外の土器として、中世の土師器6個体がある。

須恵器の杯蓋(1・3・5～10)は、口径12.0～13.6cm、器高3.8～4.7cmの幅が認められる。口縁端部は丸くおさめる。天井部と口縁部の境には明瞭な稜は認められず、丸く仕上げられている。

1・5の天井部には「×」のヘラ記号が描かれる。天井部内面に当て具痕を残すものも認められない。杯身(2・4・11～16)は、口径11.0～12.5cm、器高3.3～3.8cmの幅が認められる。口縁端部は丸くおさめる。2・12・13の底部には「×」のヘラ記号が描かれる。11の内面にはナデ消された当て具痕がある。17・18は有蓋高杯の蓋で、天井部に扁平なつまみがつく。17は口縁端部は丸くおさめ、天井部と口縁部の境ははっきりしない。18は口縁端部は丸くおさめ、天井部と口縁部の境に凹線が1条巡る。19～21は無蓋高杯である。20は短脚で、脚部中央には沈線を施す。22・23は壺蓋である。22は天井部と口縁部の境には稜がつくられており、口縁端部は面を有する。23は天井部と口縁部の境の稜は不明瞭であり、丸く仕上げられている。口縁端部は丸くおさめる。24・25は短頸壺である。24の頸部はわずかに外反し、体部はそろばん玉状に膨らむ。膨らんだ頂部に2条の凹線が巡る。25は頸部が垂直に立ち上がる。体部はそろばん玉状に膨らむ。全体の形状は24よりも扁平な形状を呈する。膨らんだ頂部には1条の浅い沈線が巡る。壺(26)は口縁が外反して開き、端部に浅い沈線が1条巡る。頸部にはシボリの痕跡が認められ、肩部付近に沈線1条が巡る。長頸壺(27)の口頸端部は丸くおさめられている。体部は肩の稜は不明確で、その上には刻み目文が施される。底部は扁平に仕上げられており、百済系の要素と考えられる⁽⁶⁾。提瓶(28)は口頸部がやや外側に開き、口縁端部は丸くおさめる。また片方の肩に鍵形の把手があるが、その反対側には取り付けられた痕跡は認められない。29は動物の胃袋形の水筒と提瓶を折衷した皮袋形瓶である。口縁部から底部に向けて丸く膨らむが、厚みは大きく変わらず、扁平である。口縁部直下の正面と裏面の双方に幅5mm、高さ2mmの孔が穿たれている。また口縁部直下の両脇には鍵形の吊り手が付けられている。口縁内部にヘラを挿入し、周囲を削っていることが確認できる。底部は外側から粘土板で塞いだ痕跡が認められ、底部は底が空いた状態で作られ最後に塞いだと考えられる。平瓶は、底部が平たく口頸部が斜めに取り付けられるもの(30)と体部が丸みを帯び口頸部は垂直に取り付けられるもの(31)がある。土師器の高杯(32)は杯部が浅い椀形を呈し、脚裾部が開く。須恵器の形状はTK 209型式に併行するものが大半を占め、一部蓋杯(10・14～16)がTK 217型式に併行すると考える。近接する桑山南古墳群・細畝古墳群で検討された編年⁽⁷⁾に当てはめると3期・5期にあたり、埋葬は6世紀末葉～7世紀中葉に1度行われたと考える。なお須恵器の胎土は砂粒を多く含むものが多い。

また、中世前半の小皿(33・34)、皿(35)高台付皿(36・37)、羽釜(38)が出土している。

武器(第235図、図版73)

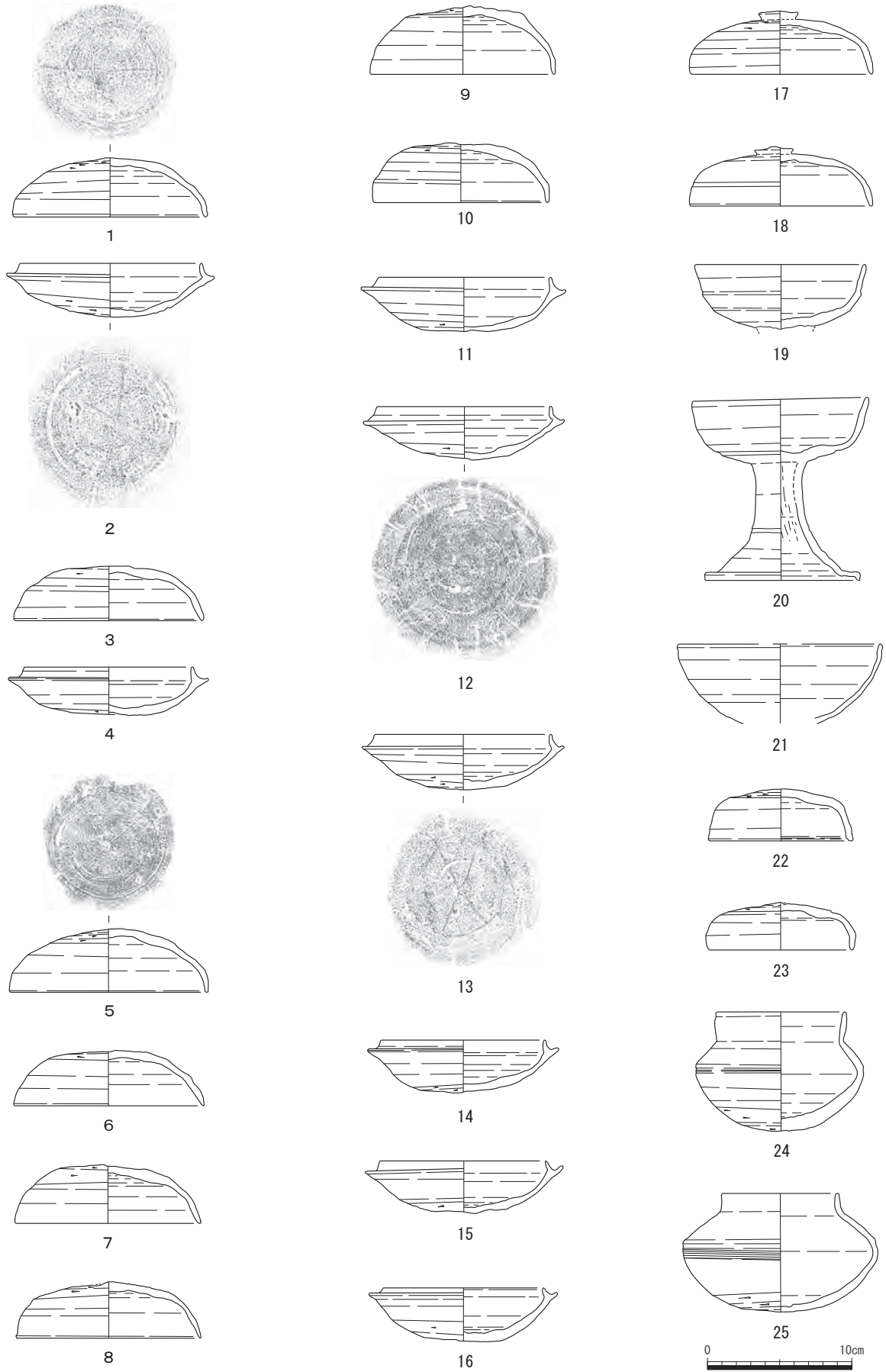
横穴式石室内から出土した武器は刀と弓矢がある。刀(M1)は切先部分のみの遺存である。柄頭(M2)は長さ3.3cmで佩裏から柄木に留めるための鉤が打ち込まれている。鞘尻(M3)は長さ4.4cmで、広い幅の端部は外側に折りかえしている。外面の一部には布目痕跡が残存している。M4は平根方頭式の鉄鏃である。弓金具は両頭金具(M5～M8)がある。

馬具(第235図、図版73)

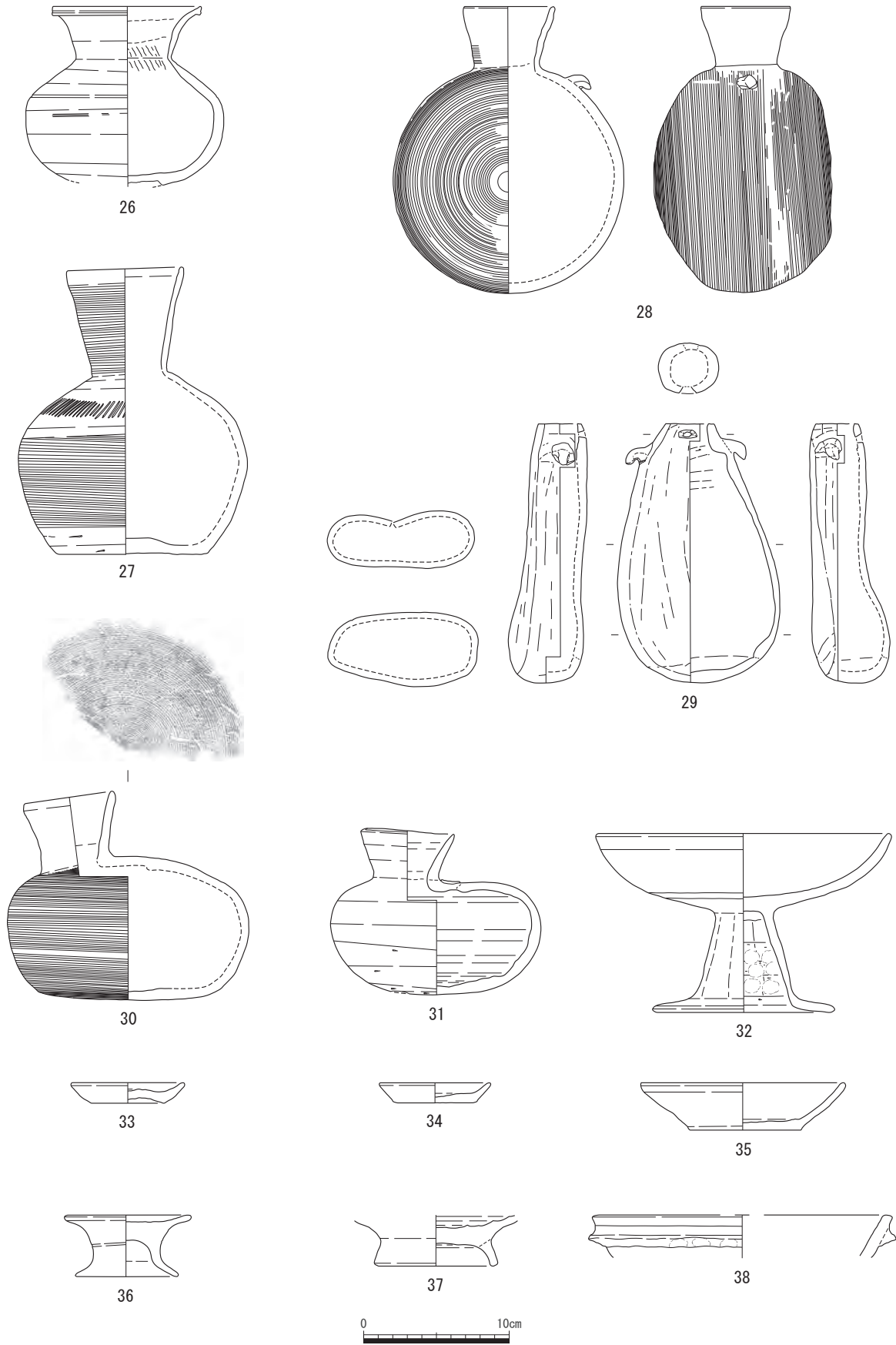
馬具は鞍(M9・M10)、馬鈴(M11)、鉸具(M12)、雲珠または辻金具の脚部(M14)が出土している。雲珠または辻金具の脚部(M14)は鉄地金銅貼で爪形を呈し、2つの鉤が打ち込まれている。また鉤単体でも4点(M15～M18)出土している。鉤はいずれも頭部が半球形をなしている。M16は金銅貼の痕跡を留める。M19は復元直径2.9cmになる円形の鉄片で飾り金具の一部だと考えられる。

農工具(第235図、図版73)

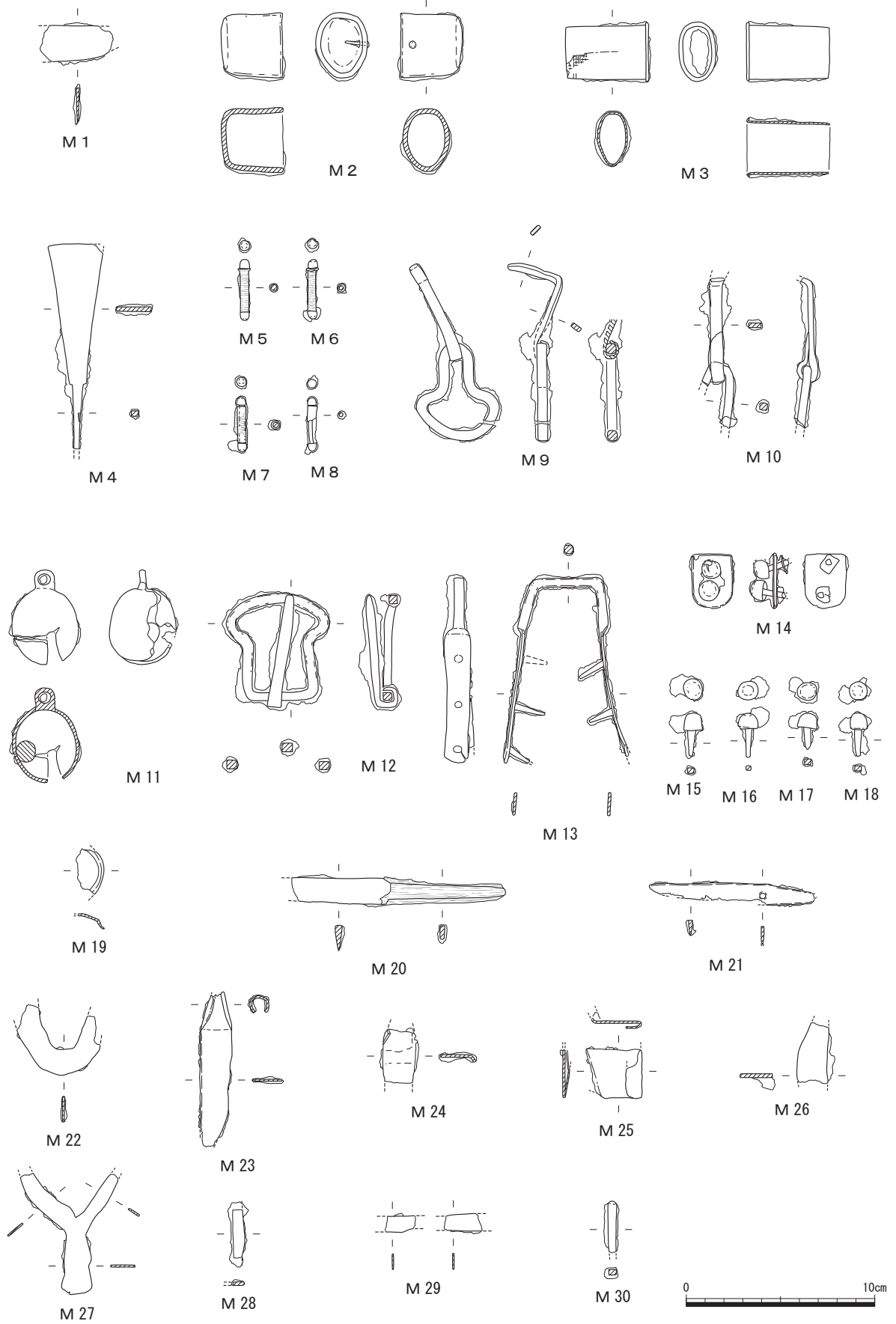
工具として、刀子2点がある。M20は残存長11.4cm、刃部幅1.4cmである。関は両関で、茎には



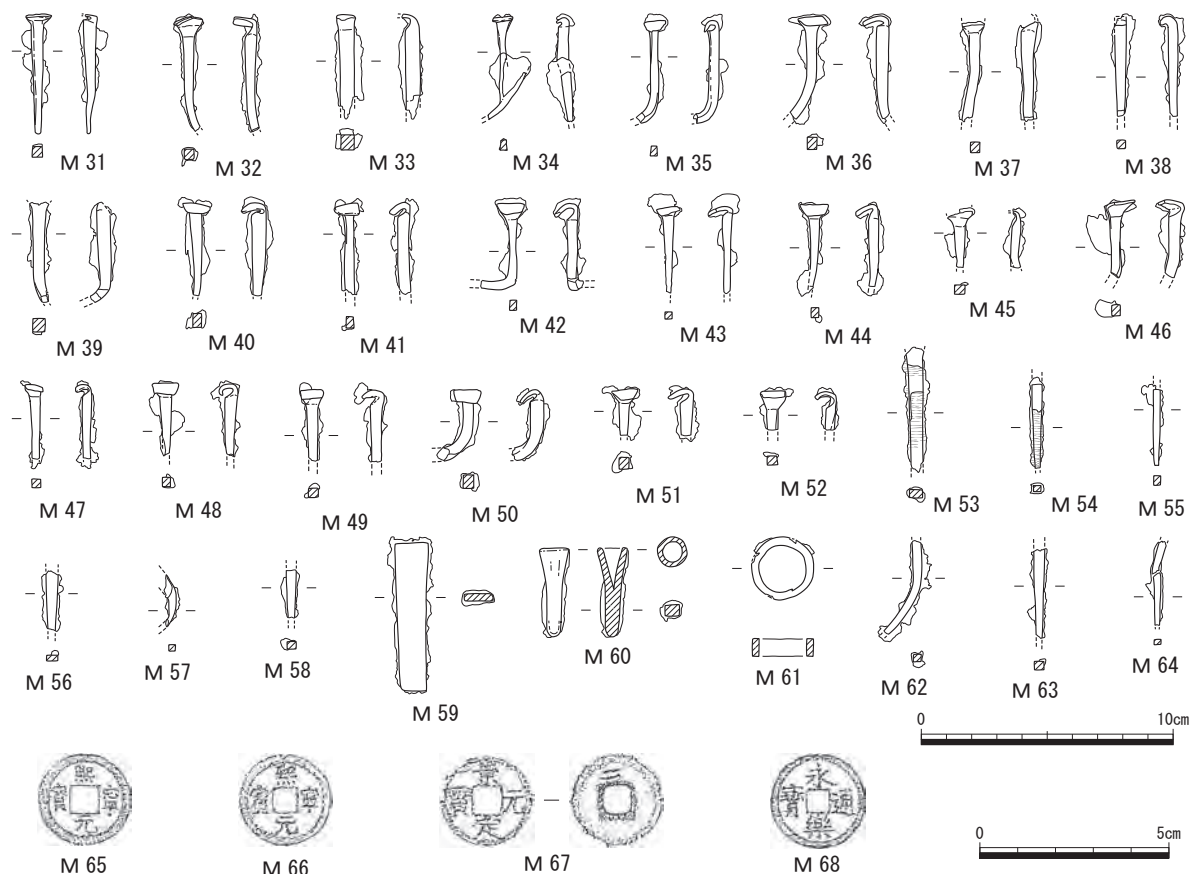
第 233 図 横穴式石室内出土遺物① (1/4)



第 234 図 横穴式石室内出土遺物② (1/4)



第 235 图 横穴式石室内出土遺物③ (1/3)



第 236 図 横穴式石室内出土遺物④ (1/3・1/2)

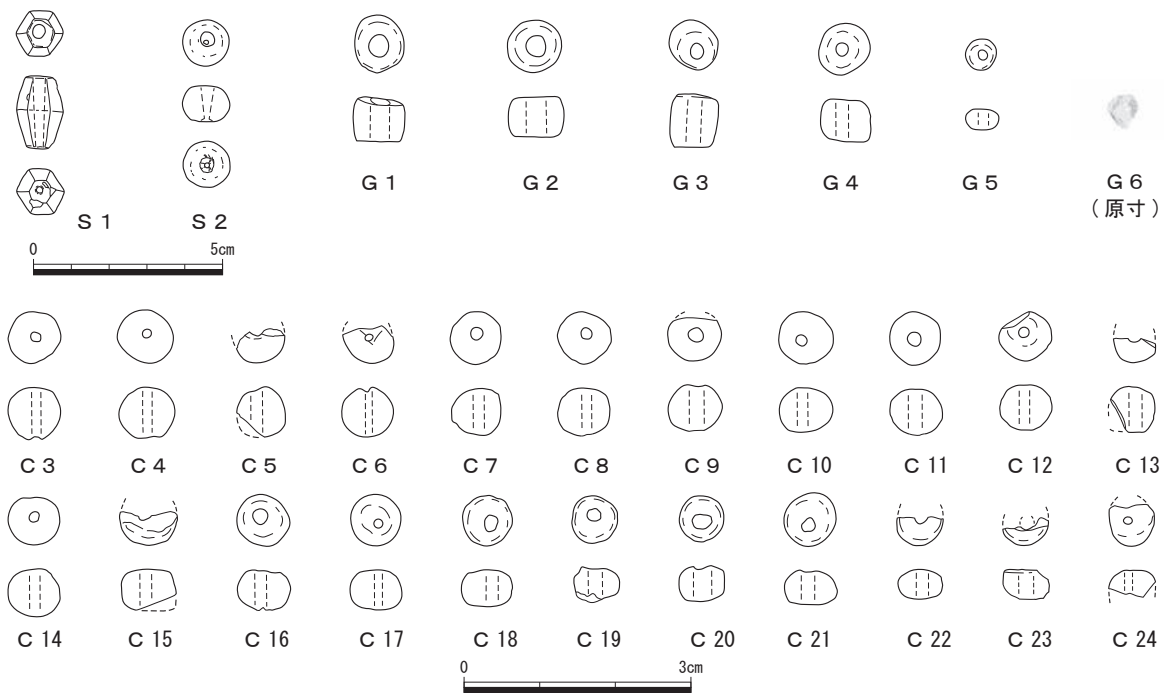
木質が遺存している。M 21 は刃側の欠損が著しい。茎には目釘孔が 1 つ確認できる。

雛形鉄器 (第 235 図、図版 73)

M 22 は U 字形鍬鋤先の雛形鉄器である。刃は付けられておらず、断面長方形の薄い板状である。M 23 は一枚の鉄板状の素材から作られている。刃部は先端付近で片側から幅が急激に狭くなり刀の切先のような形に加工されていたようであり、袋部は折り返し成形されている。この形状から刀子または農工具を模した雛形鉄器であると考えられる。M 24 は、端部は両側とも欠損している。長辺が内側に短く折り曲げられる形状から有袋鉄斧の模造品であると考えられる。摘鎌 (M 25) は厚さ 1.3 mm で、刃部は作り出されていないことから、実用品でなく雛形鉄器の一種と考える。M 26 は薄く細長い形状の鉄板である。片側から幅が途中から急激に狭くなり刀の切先のような形状を呈するが、刃部は作られていない。そのため、刀子または U 字形鍬鋤先を模した雛形鉄器であると考えられる。M 27 は厚さ 1 mm で先端が欠損した扁平な「Y」字形の不明鉄器である。M 28・M 29 は薄い板状の鉄片で用途は不明であるが、雛形鉄器の一部である可能性もある。

古墳時代以降の金属器 (第 236 図、図版 73)

鉄釘は頭部付近が残存するもので 22 点が出土している。頭部はすべて直角に折り曲げた鉄釘である。M 31 は頭部の一部が欠損するが、全長は 4.7 cm であったことが分かる。M 53・M 54 の表面には木材が付着しており、横方向の木目が認められる。楔 (M 59) は床面より約 80 cm 上で出土し、中世以降のものである可能性がある。尖頭状鉄器 (M 60) の上部はソケット状で、柄のようなものが挿入できる。第 223 図 C-D 断面 10 層から出土し、中世以降の遺物である可能性がある。留金具 (M 61)



第237図 横穴式石室内出土遺物⑤ (1/2・1/1)

は、石室内の表土付近で出土し、近現代の遺物である可能性が高い。M 62～M 64 は棒状鉄器である。用途は明確でないが、釘もしくは鉄鏟の一部である可能性が考えられる。銭は熙寧元寶 (M 65・M 66)、景定元寶 (M 67)、永樂通寶 (M 68) が出土した。景定元寶 (M 67) は背文字に「二」がある。**装身具** (第237図、巻頭図版8、図版73)

装身具は玉類が30点出土している。水晶製のものが2点、ガラス製のものが6点、土製のものは22点以上が副葬されていたと考えられる。水晶製切子玉 (S 1) は、全体が研磨されており、稜線はややにぶい。穿孔は片面穿孔である。水晶製丸玉 (S 2) は全体が研磨され、表面の一部で敲打痕が認められる。穿孔は片面穿孔で、端部で割れ円錐が確認できる。ガラス製の玉は、暗い紫みの青色の小玉 (G 1～G 5) とわかみどり色の破片 (G 6) が出土した。土玉は、表面は全面が丁寧にナデられており、光沢がある。形状は丸形のもの (C 3～C 12・C 14) と扁平なもの (C 15～C 24) が認められる。丸形が扁平なものより長さや幅の双方で大きい傾向がある。(藤井)

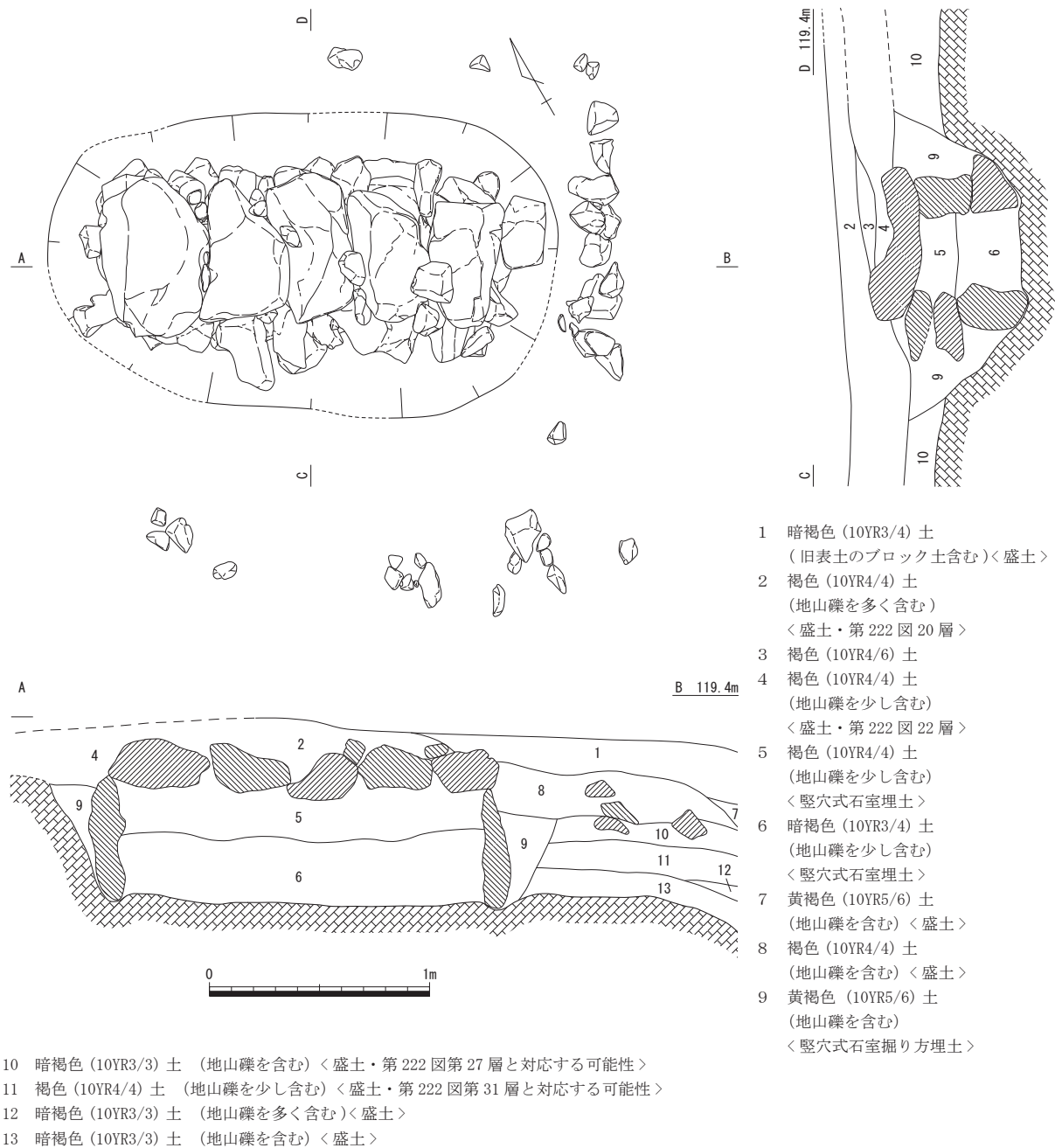
註

- (1) 横穴式石室の側壁の左右は、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき—各種遺跡調査編—』2013 に従い、入口から奥壁をみた場合を左右とした。
- (2) 筒形土製品の底部前に石材が出土しており、これが蓋であった可能性も否定できない (巻頭図版6-2)。
- (3) 原位置ではないが、入口側の棺身南西側で出土しており、他の玉類と同じような傾向を示している。
- (4) 横穴式石室内で出土した川原石はこの1石のみで、いずれかの時期に別途運びこまれたものと考えられる。
- (5) 宇垣匡雅 2021「陶棺の装飾」『岡山県立博物館研究報告』第41号 岡山県立博物館
- (6) 亀田修一氏にご教授いただいた。
- (7) 尾上元規 2022「古墳群の構成と形成過程」『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255 (以下、尾上編年)

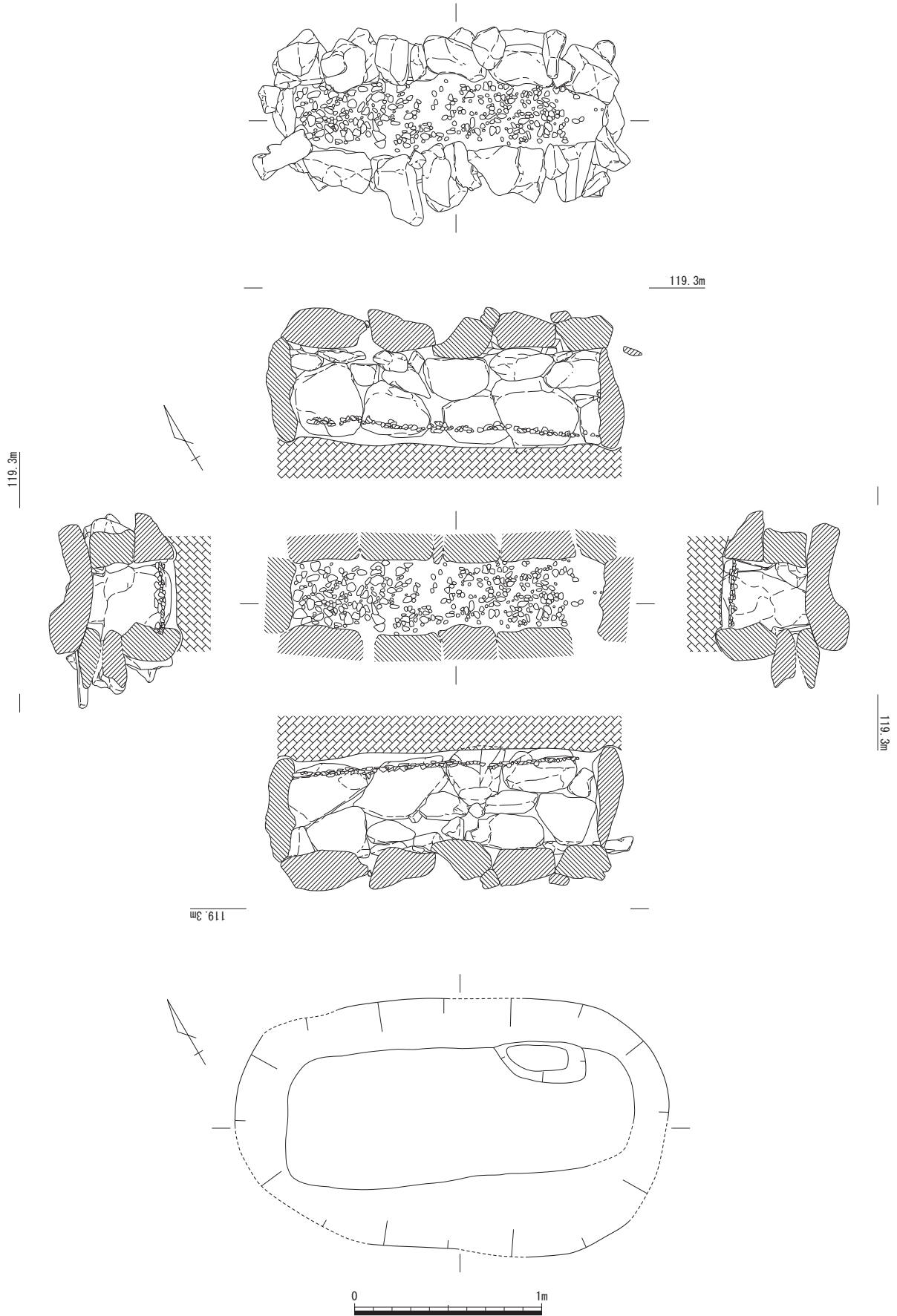
第4節 竪穴式石室

1 竪穴式石室

竪穴式石室は、横穴式石室の南西側、墳丘の端に立地している。竪穴式石室の掘り方は、横穴式石室の構築に伴う整地の際の盛土（第238図第10～13層）の上から掘られている。掘り方の規模は石室長軸方向で約230cm、幅は約135cm、深さは約50cmであり、底面には基底石を据えるための穴が掘られている（第239図）。掘り方が掘り込まれる盛土層からは、竪穴式石室を囲むように礫が出土した。



第238図 竪穴式石室天井石検出状況・土層断面 (1/30)



第239図 竪穴式石室・掘り方 (1/30)



写真 18 竪穴式石室作業風景（南東から）

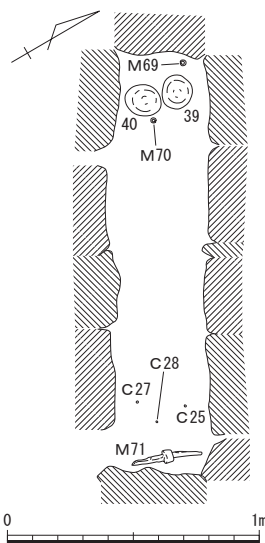
これらすべてが人為的に配置されたものではないかもしれないが、少なくとも南東小口側の北東－南西方向の石列は竪穴式石室を意識して配置された可能性があると考えられる（図版 65－1）。

石室は、長軸を北西－南東方向に向け（N－60°－W）、規模は内法で長さ1.64m、幅0.4m、深さ0.5mである。石室壁面の両小口側は板状石材の1石で構成される（第239図、図版65－3）。側壁の基底石は上段の石材よりも大きな石材を用いている。2段目以上の石材は横に寝かせて長手積みと小口積みを併用して組み上げている。縦方向の目地は基本的に通らず、千鳥に積むように意識されている。石室床面には礫が敷かれていた。礫は角がある山石を使用し、大きさは2～7cm程度のものが使われていた。礫の大きさは西側の小口付近と東側小口付近でやや異なる傾向がある。埋葬人数は後述する耳環が1組出土していることから単葬であると考えられる。

天井石は5石で構成され、隙間には小ぶりの石材を詰めている（第238図、図版65－1）。竪穴式石室を封じた天井石の上には「二次工程」の墳丘盛土が盛られていた。この状況から、この竪穴式石室は墳丘の盛土が盛られた後に掘削され、横穴式石室の天井石が盛土で覆われる前に埋葬が終わっていたことが分かる。（藤井）

2 竪穴式石室内遺物出土状況

竪穴式石室内の礫床上からは須恵器の壺蓋と杯蓋、耳環、鉄芯紡錘車、土玉が出土した（第240図、図版65－2）。石室は天井石で密閉されていたため、副葬品は原位置に近い状態で保たれていた。北西小口には須恵器の杯身（39）と壺蓋（40）が口縁を下にして伏せた状態で、小口とほぼ平行に並んで出土した。この出土状況から須恵器は枕として使用されたと考えられ、北西方向に頭を向けていた



第240図 竪穴式石室
遺物出土状況（1/30）



写真 19 竪穴式石室作業風景（北西から）

ことが分かる。また、杯身(39)と小口の間からは耳環(M 69)が、壺蓋(40)の東側で耳環(M 70)が見つかった。この出土状況から耳環は被葬者の耳に付けられていたと推定できる。足元側になる南東小口に沿わせて鉄芯紡錘車(M 71)が置かれていた。その北西側では土玉(C 25・C 27・C 28)が見つかり、この出土位置から足首に付けられていたものである可能性が考えられる。(藤井)

3 竪穴式石室内出土遺物

土器(第241図、図版74)

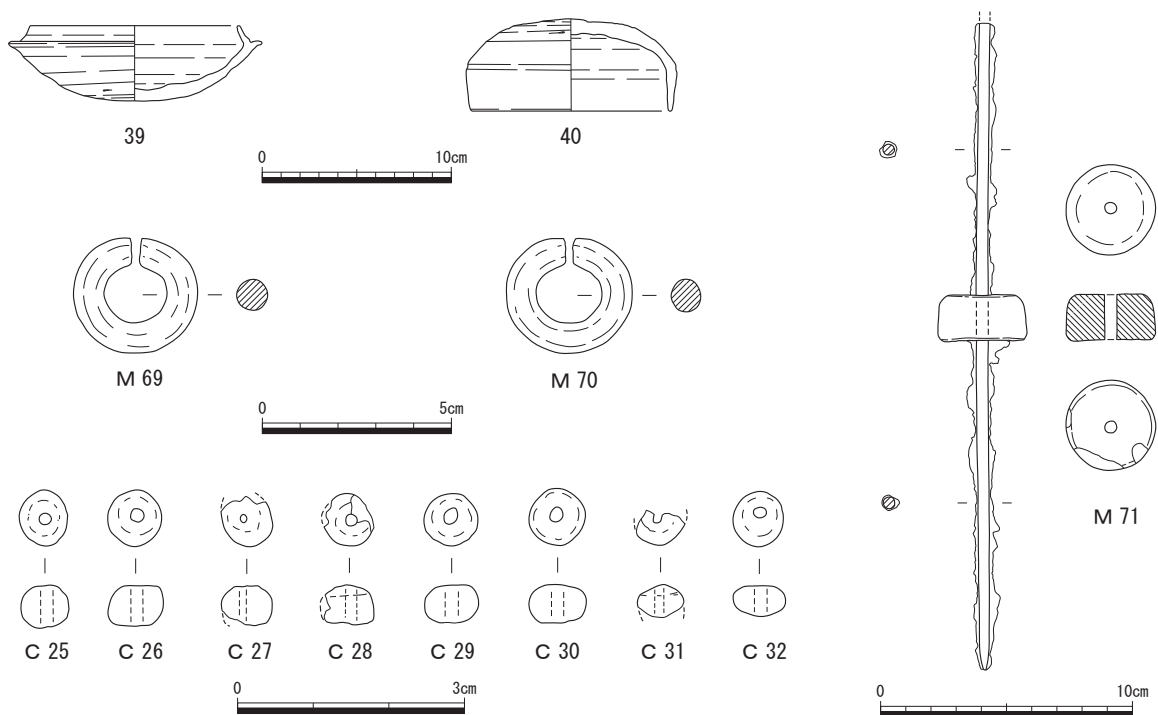
竪穴式石室からは須恵器の杯身(39)と壺蓋(40)が出土した。杯身(39)は口径11.0cm、器高4.0cmである。回転ヘラ削りは1/2以上の範囲に施されている。胎土は横穴式石室内の須恵器と異なり、小さい砂粒が含まれた粘土を使用している。口縁端部は丸くおさめる。壺蓋(40)は径10.5cm、器高4.9cmである。天井部と体部の境には凹線が1条巡る。口縁端部は丸くおさめる。時期は、尾上編年では5期(TK 217型式併行)になるが、杯身の立ち上がりの角度や形態などからTK 209型式併行期であると考えられる。また壺蓋は、横穴式石室出土のものより古く位置づけられると考える。

農工具(第241図、図版74)

農工具として鉄芯紡錘車(M 71)が出土している。石製の紡輪に鉄製の紡茎が取り付けられた状態で出土した。紡輪は直径が広面で3.2cmと狭面で2.7cmであり、厚さは1.9cmで断面は台形である。施文は認められない。紡茎は径4.5mm、残存長25.7cmである。

装身具(第241図、巻頭図版8、図版74)

装身具は耳環(M 69・M 70)と土玉(C 25～C 32)が出土した。耳環(M 69・M 70)は銅地銀貼である。銀貼りは良く遺存している。土玉は、表面は全面が丁寧にナデられており、光沢がある。形状は丸形のもの(C 25)もあるが扁平なもの(C 26～C 32)が多く認められる。(藤井)



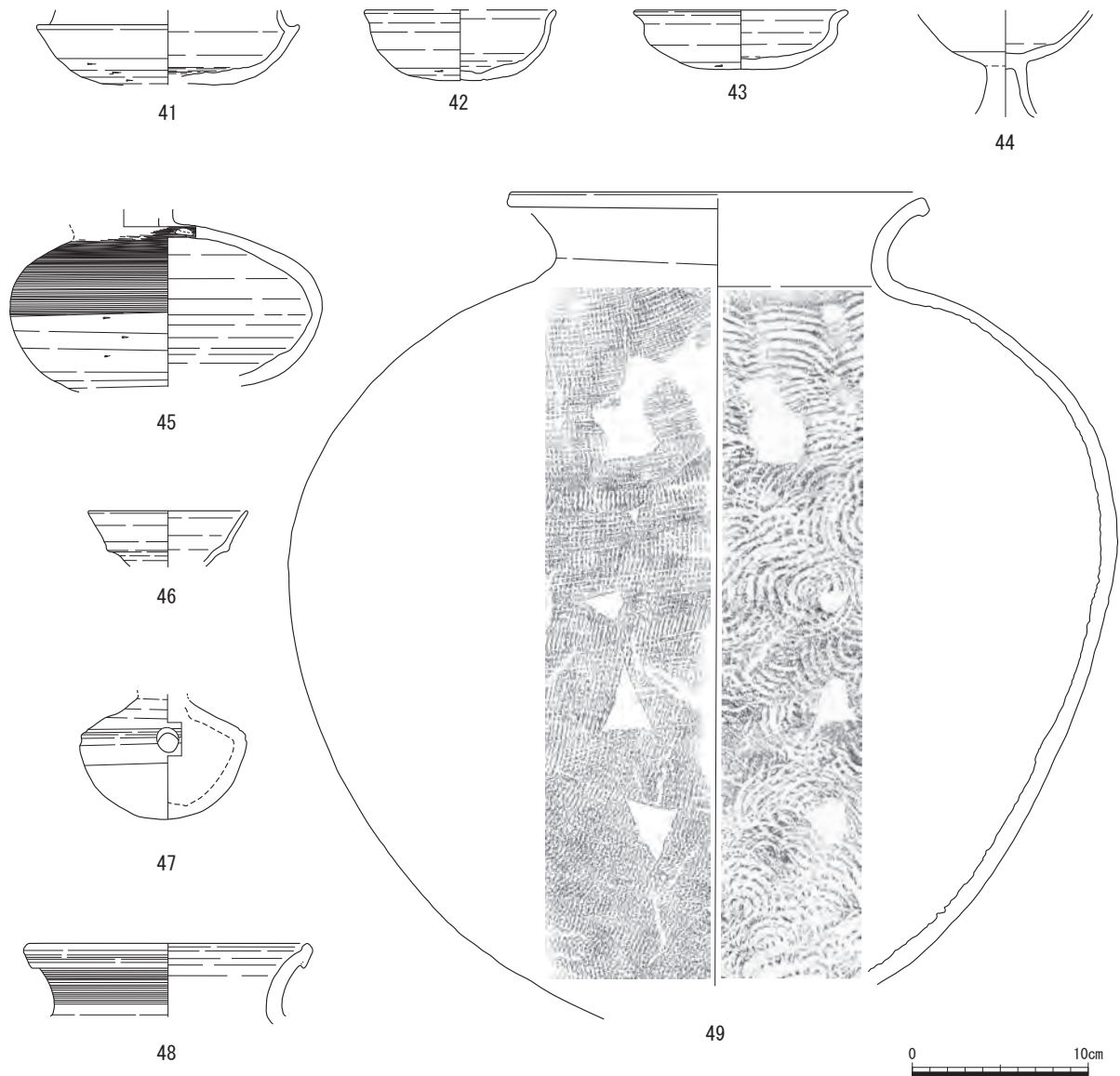
第241図 竪穴式石室出土遺物(1/4・1/2・1/1・1/3)

第5節 周溝内出土遺物

周溝内からは、須恵器・土師器・刀子・鉄鏃・雛形鉄器・鉄釘・鉛玉・銅銭が出土した。図示していないが遺物の多くは墳丘の南西側（第221図）から出土している。

土器（第242・243図、図版74）

須恵器は蓋杯の杯身（41）、杯（42・43）、高杯（44）、平瓶（45）、甕（46・47）、壺（48）甕（49）が出土した。42は口縁部が外反し、底部は丸みをおびている。43は口縁部が42よりも強く外反している。底部は42よりも平たく、全体的に扁平である。平瓶（45）は扁平な体部を持つ。体部にはカキ目が認められ、下半部はその上にヘラ削りが施されている。上部には2つの円形浮文が付けられている。46は甕の外反する口頸部の端部付近で、段が整形されている。47は甕の体部である。体部の最大径は体部の上1/3前後で、肩が張っている。肩には2条の沈線が巡る。壺（48）は口頸部にカキメが施される。甕（49）は多くの破片から復元している。破片の多くは周溝から出土したが、横穴式石

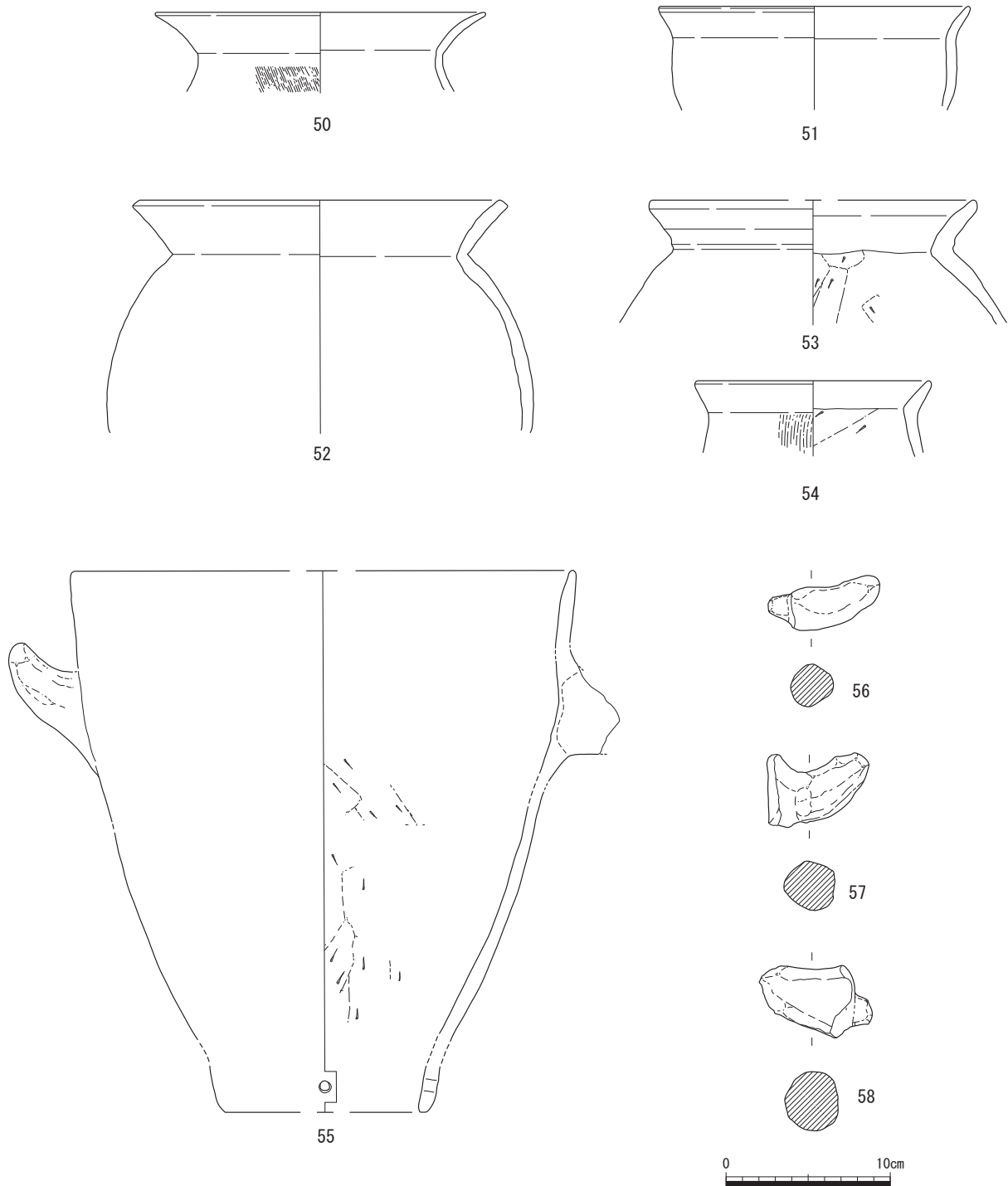


第242図 周溝出土遺物① (1/4)

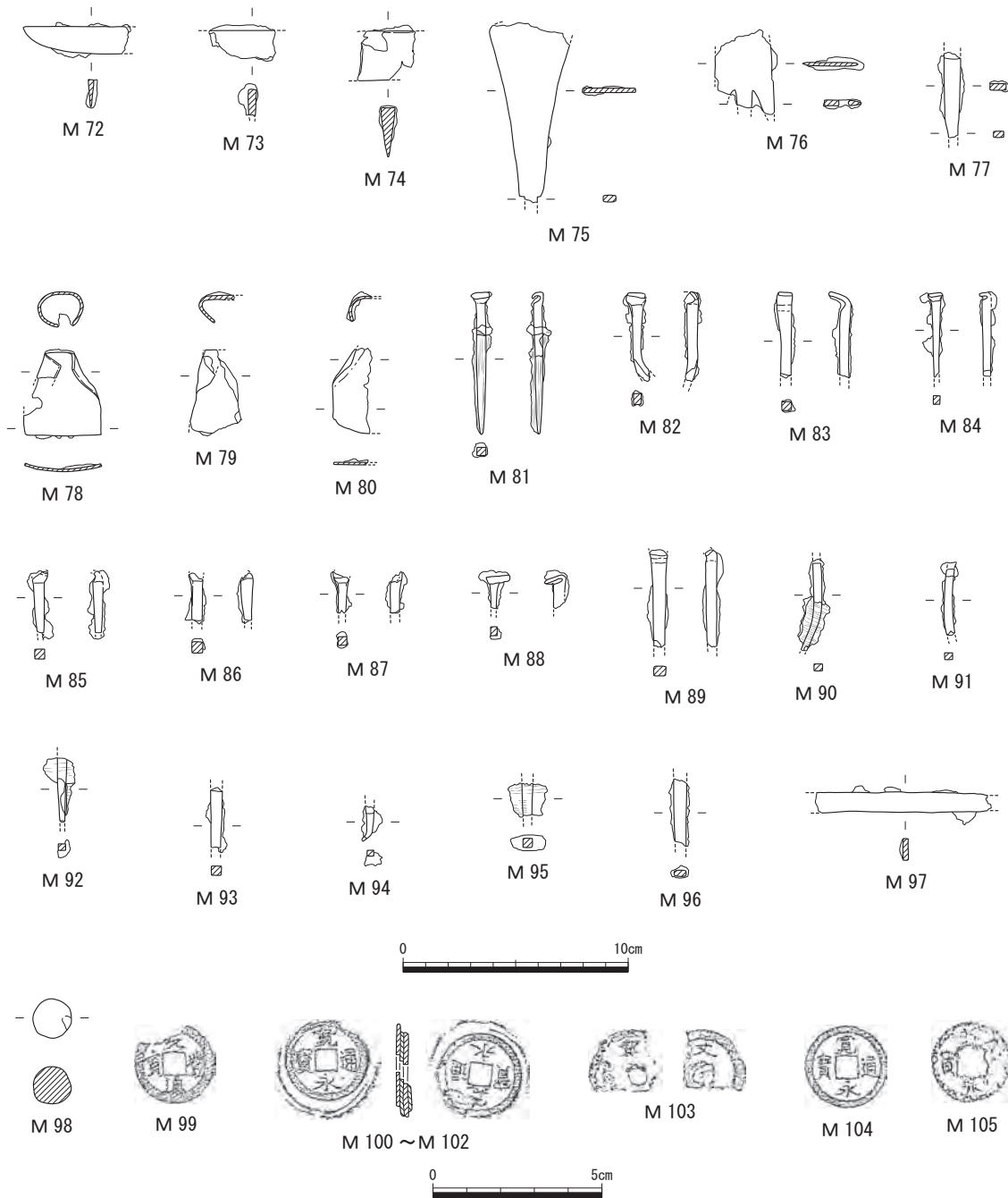
室内の埋土から出土したものもあり、本来は墳丘上に置かれていた可能性がある。土師器は甕（50～54）、甗（55）、甗か鍋の把手（56～58）が出土した。甗（55）は破片から復元実測した。底部はつつぬけになっており、底部下端付近に小円孔が穿たれている。甗か鍋の把手はすべて牛角状で、接合方法には挿入して取り付けるもの（56・58）と貼り付け法（55・57）の2種類が確認できる。

金属器（第244図、図版74）

刀子（M72）はフクラ形の切先を持つ。刀（M73・M74）は刃部の一部のみが遺存している。鉄鍬は、平根系の方頭式（M75）と腸袂柳葉式（M76）、頸部と茎部の一部のみ残存したもの（M77）が出土



第243図 周溝出土遺物② (1/4)



第244図 周溝出土遺物③ (1/3・1/2)

した。雛形鉄器 (M 78 ~ M 80) は有袋鉄斧の模造品で、厚さ 1 ~ 2 mm の方形鉄板の両上端隅を折り曲げて袋部が作られている。またどれも刃はつけられていない。鉄釘は、頭部付近が残存するもので 9 点が出土している。見つかった鉄釘はすべて頭部を直角に折り曲げた鉄釘である。M 81 は全長 6.3 cm で、頭頂部から 1.7 cm 下から木質が良好に残る。木目は木質の上部 2 mm は横方向、それ以下は縦方向である。M 90 と M 95 には横方向の木質が遺存している。M 92 も横方向の木目が認められるが、上半部と下半部で木質の付着している面が異なっている。銃弾 (鉛玉) M 98 は径 11.1 ~ 11.3 mm で銃弾として用いられたものと考えられる。銅銭は元豊通寶 (M 99) と寛永通寶 (M 100・M 102 ~ M 105) が出土した。M 100 ~ M 102 は癒着しているため、M 101 の銭種は不明である。 (藤井)

第6節 土坑墓

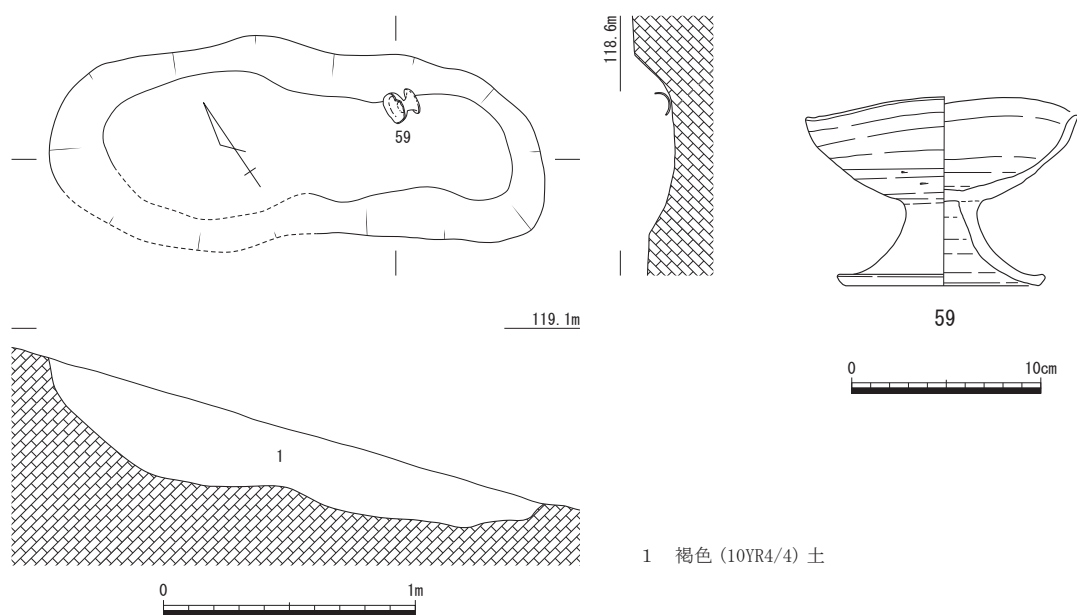
1 概要

高尾北ヤシキ古墳に近接する埋葬遺構として、2基の土坑墓が確認できた。土坑墓1は高尾北ヤシキ古墳の北側に近接し、土坑墓2は南西に20mほど離れて立地する。両土坑墓はやや距離が離れているが、付近には他の古墳や土坑墓などは確認されていないこと、埋葬された時期が連続していることから、同一集団の墓域であったと考える。副葬された須恵器から考えると、土坑墓は古墳より先行して埋葬が行われているようであり、埋葬は土坑墓2→土坑墓1→高尾北ヤシキ古墳の順に行われたと考える。土坑墓1は高尾北ヤシキ古墳築造の直前に埋葬され、かつ竪穴式石室と同じ主軸方向を意識していると推察でき、被葬者間の関係性を窺わせる。(藤井)

2 土坑墓

土坑墓1 (第245図、写真20、図版69・74)

高尾北ヤシキ古墳の周溝端から4mほど北に離れた、標高118.25m～119mの地点に立地する。内法は長軸約1.96m、幅約0.74m、残存する深さ約0.52mである。等高線に対して直行するように掘削されている。長軸は北西-南東方向に向け、主軸方向はN-55°-Wであり、高尾北ヤシキ古墳の竪穴式石室(N-60°-W)と同じ主軸を意識していると推測できる。床面は北西側が高くなっていることから、頭位を西に向けて埋葬した可能性も推察できる。副葬品としては、須恵器の無蓋高杯(59)が1点出土している。無蓋高杯(59)は器高10cm、底部径10.1cmである。杯部は楕円形に大きくひしゃげているが、杯蓋を転用したような形状を意図していたものと考えられる。脚部は太く短い形状で、透かしは穿たれていない。TK43～TK209型式に併行すると考えられ、尾上編年で



第245図 土坑墓1 (1/30)、出土遺物 (1/4)



写真 20 土坑墓 1 (北東から)



写真 21 土坑墓 2 遺物出土状況 (東から)

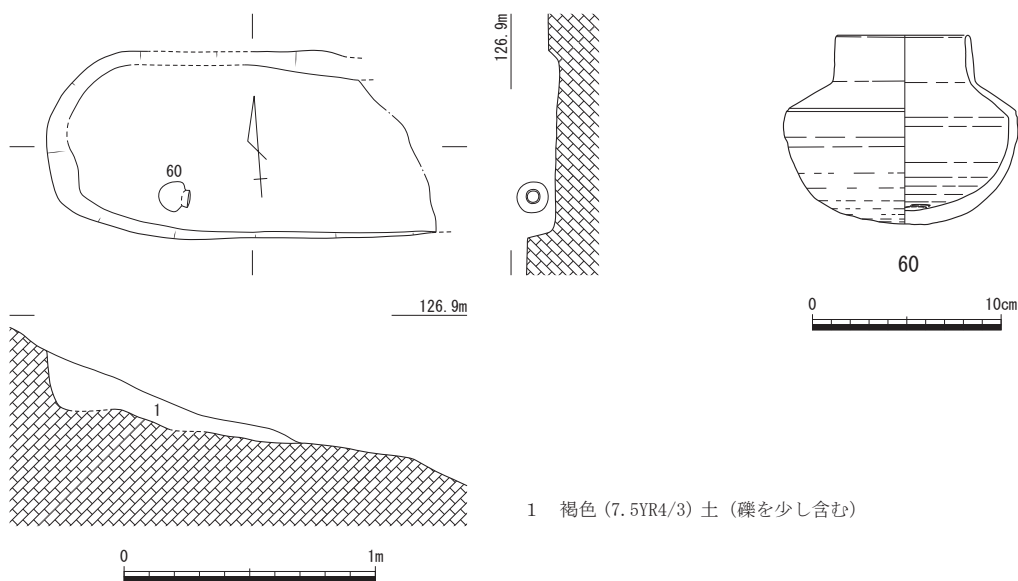
は2～3期に相当であり、6世紀後半～末葉の時期があたえられる。(藤井)

土坑墓 2

(第 246 図、写真 21、図版 69・74)

高尾北ヤシキ古墳から約 20 m 離れた、3 区東端の尾根部に位置し、標高は約 118 m である。主軸は $N-5^{\circ}-W$ を向き、等高線に対して概ね直交している。残存する長軸は 145cm、短軸は 84cm、深さは 24cm である。東端は後世の流出によって残存していなかった。底面が東に向かって下がることから、頭位は西側に向けられていた可能性がある。

中央南寄りの位置では、底面近くで須恵器の短頸壺 60 が見つかった。短頸壺は口縁を東に向けて倒れた状態で見つかったが、元々正位置で置かれていたと考えられる。肩部が張り、口縁部が直立している。TK 10 型式に併行すると考えられ、6 世紀中葉頃である。(西村)



第 246 図 土坑墓 2 (1/30)、出土遺物 (1/4)

第5章 自然科学的分析・鑑定

第1節 高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土遺物の胎土分析

岡山理科大学 白石 純

1 はじめに

この胎土分析では、高尾北ヤシキ古墳および遺跡から出土した須恵器、土師器、陶棺、天目茶碗の胎土分析を実施しこれらの生産地や胎土の特徴について検討した。分析は蛍光X線分析法で行った。

2 分析方法・試料

蛍光X線分析法は、胎土の元素濃度を測定し、その元素濃度から分析した須恵器、陶棺の胎土的差異について検討する方法である。測定した元素は、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 、 Rb_2O 、 SrO 、 ZrO_2 の13元素である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：エレメントアナライザー JSX-3203EV(日本電子)を使用した。

測定条件：X線照射径 3mm、電流 1.00mA、電圧 30kV、測定時間 300 秒、測定室は真空の条件で測定した。

定量値は、ファンダメンタル・パラメーター法により算出した。毎回の定量値の再現性があることを確認するため、地質調査所の標準試料 JA-1(安山岩)、JG-1a(花崗岩)、JB-1a(玄武岩)の3試料の定量値を求めて、装置の安定性を確認している。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢(タングステンカーバイト製)で粉末(100～200メッシュ)にしたものを加圧成形機で約 10^7 の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較(差異)は、有意な差がみられる元素を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。なお、高尾北ヤシキ遺跡の天目茶碗は茶碗の破断面を非破壊分析で測定した。

分析試料は、第3表に示している高尾北ヤシキ古墳、遺跡出土の須恵器、土師器、陶棺等30点である。

3 分析結果

この分析では CaO (酸化カルシウム)、 K_2O (酸化カリウム)、 Rb_2O (ルビジウム)、 SrO (ストロンチウム)、 ZrO_2 (ジルコニウム)5元素で散布図を作成し検討した。

須恵器について

高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土の25点について生産地の推定を行った。その結果、第247図では、小屋谷窯跡、陶邑窯跡の領域とほぼ重なり識別ができなかった。また、第248図では、陶邑領域と一部重なった。そして、第249図の Rb_2O - ZrO_2 散布図では小屋谷窯跡、陶邑窯跡の領域とは重ならず

識別できた。このことより、今回比較した生産地とは異なり、高尾北ヤシキの須恵器は産地がはっきりしない結果となった。

次に、第250～252図では一般国道53号線の改修工事で調査された桑山南古墳群、細畝古墳群、桑山古墳群から出土した須恵器と比較した。すると、高尾北ヤシキ古墳・遺跡の須恵器は、他の各古墳群の須恵器と胎土は異なることはなくほぼ同じであった。

土師器・筒形土製品について

高尾北ヤシキ古墳出土の土師器・筒形土製品は、第247図では須恵器に比べCaO、K₂Oがやや多く含まれているが、第248・249図では須恵器の分布領域に入っており差異はみられない。

陶棺について

高尾北ヤシキ古墳出土の陶棺2点と、これまでに分析している桑山南1・3号墳、細畝1・2号墳と津山市内出土陶棺との比較を行った。

その結果、第253・254図より大きく二つのグループ(A・B)に分類できる。つまり、Aグループには桑山南1・3号墳がBグループには高尾北ヤシキ古墳、桑山南1号墳、細畝1・2号墳、津山市内の陶棺が分布する。また、高尾北ヤシキ遺跡の陶棺はBグループに入った。

一般国道53号線の改修工事で調査された桑山南古墳群、細畝古墳群から出土した陶棺は、桑山南1号墳(報告書掲載番号、桑C1)・3号墳(桑C6)のAグループと桑山南1号墳(桑C4)・3号墳(桑C5)、細畝1号墳(細C1)・2号墳(細C4)のBグループの二つの胎土に分類でき、高尾北ヤシキ遺跡の陶棺はBグループに入る結果となった。

天目茶碗について

天目茶碗の分析では、南山城跡で出土した試料と比較した。その結果、第255・256図のように、国内産と中国産に識別できる散布図から、高尾北ヤシキ遺跡出土のものは、日本産の領域に分布した。

4 まとめ

高尾北ヤシキ古墳、遺跡出土の須恵器、土師器、陶棺、天目茶碗の胎土分析を実施し、以下のことが推定された。

(1) 須恵器の分析では、高尾北ヤシキ古墳・遺跡の両方ともほぼ一つにまとまるが生産地の小屋谷窯跡、大阪陶邑窯跡とは胎土が異なっていた。また、これまでに分析した桑山南古墳群、細畝古墳群、桑山古墳群との比較では、ほぼ同じ胎土であった。以上のことから高尾北ヤシキ古墳・遺跡、桑山南古墳群、細畝古墳群、桑山古墳群の各遺跡出土須恵器は、同じ胎土にまとまることから新たな生産地があると推定される。

(2) 土師器、筒形土師器の胎土についても、須恵器やこれまでに分析した土師器とも胎土が同じであった。

(3) 桑山南古墳群、細畝古墳群や津山市内の陶棺との比較を行ったが、高尾北ヤシキの陶棺は細畝1・2号墳の陶棺と胎土が類似していた。つまり、高尾北ヤシキ古墳、桑山南古墳群、細畝古墳群出土の陶棺には複数の胎土があることが推定された。

(4) 高尾北ヤシキ遺跡出土の天目茶碗の胎土分析では、南山城跡で分析したものと比較した。その結果、南山城跡、中島遺跡のものと胎土がほぼ一致した。

引用・参考文献

- (1) 岡山県教育委員会 2022『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255
- (2) 岡山県教育委員会 2022『南山城跡 南山明地古墳群 南山明地遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 257
- (3) 岡山県教育委員会 2022『勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 262

第3表 高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土遺物の胎土分析結果(%)

番号	遺跡名	種別	器種	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂
1	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	杯蓋	60.65	1.57	25.99	8.06	0.05	0.00	0.47	0.20	2.69	0.19	0.0357	0.0186	0.0738
2	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	杯蓋	66.03	1.01	21.94	7.34	0.04	0.00	0.51	0.43	2.28	0.28	0.0270	0.0197	0.0654
3	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	有蓋 高杯蓋	54.76	1.07	22.85	17.49	0.06	0.02	0.62	0.56	2.25	0.19	0.0351	0.0238	0.0646
4	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	高杯	61.89	1.45	25.34	7.63	0.08	0.15	0.74	0.33	2.02	0.25	0.0304	0.0192	0.0636
5	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	高杯	62.18	2.07	19.48	13.53	0.06	0.00	0.46	0.18	1.69	0.22	0.0243	0.0145	0.0857
6	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	高杯	65.49	1.51	23.68	6.87	0.04	0.00	0.39	0.00	1.72	0.18	0.0219	0.0089	0.0786
7	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	有蓋 高杯蓋	57.09	1.50	26.21	11.43	0.04	0.11	0.71	0.48	2.10	0.19	0.0314	0.0310	0.0700
8	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	有蓋 高杯蓋	59.32	1.25	24.67	10.42	0.04	0.01	0.80	0.61	2.52	0.22	0.0376	0.0325	0.0793
9	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	平瓶	65.27	1.46	17.71	12.20	0.06	0.06	0.85	0.41	1.60	0.23	0.0226	0.0357	0.0916
10	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	壺	61.75	1.31	23.05	11.38	0.06	0.00	0.54	0.00	1.62	0.16	0.0284	0.0155	0.0727
11	高尾北ヤシキ古墳	土師器	高杯	52.71	1.58	21.57	18.32	0.07	0.27	1.09	1.38	2.26	0.56	0.0246	0.0327	0.1155
12	高尾北ヤシキ古墳	筒形 土製品	煙突	64.94	1.34	19.66	8.48	0.05	0.00	0.84	0.71	3.14	0.68	0.0378	0.0321	0.0864
13	高尾北ヤシキ古墳	陶棺	身	61.12	1.66	21.25	11.56	0.08	0.07	0.66	0.86	2.35	0.28	0.0252	0.0222	0.0654
14	高尾北ヤシキ古墳	陶棺	蓋突起	63.77	1.62	17.63	13.55	0.07	0.06	0.63	0.27	1.86	0.41	0.0253	0.0231	0.0659
15	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	杯蓋	64.81	1.96	23.12	7.68	0.04	0.00	0.25	0.00	1.79	0.24	0.0226	0.0126	0.0737
16	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	杯蓋	58.12	1.65	20.86	15.56	0.07	0.05	0.46	0.42	2.38	0.25	0.0355	0.0205	0.0959
17	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	杯蓋	62.44	1.29	22.41	11.20	0.06	0.00	0.39	0.30	1.55	0.24	0.0263	0.0118	0.0723
18	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	杯身	61.02	1.54	26.94	6.39	0.04	0.02	0.54	0.49	2.70	0.17	0.0369	0.0242	0.0670
19	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	杯身	66.16	1.46	20.70	8.36	0.03	0.00	0.23	0.70	1.99	0.24	0.0249	0.0154	0.0843
20	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	杯身	64.55	1.49	23.45	7.71	0.04	0.01	0.18	0.19	2.01	0.26	0.0218	0.0128	0.0836
21	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	高杯	72.11	1.93	18.10	5.28	0.04	0.00	0.50	0.25	1.36	0.31	0.0173	0.0190	0.0917
22	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	有蓋 高杯蓋	72.08	1.38	15.05	9.20	0.07	0.00	0.38	0.32	1.14	0.28	0.0116	0.0161	0.0750
23	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	有蓋 高杯蓋	68.02	1.35	18.79	8.85	0.06	0.00	0.55	0.09	1.79	0.36	0.0254	0.0172	0.0804
24	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	提瓶	63.13	1.29	20.91	10.80	0.05	0.11	0.21	0.38	2.75	0.24	0.0391	0.0170	0.0648
25	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	長頸壺	60.53	1.59	25.58	7.91	0.07	0.04	0.63	0.60	2.64	0.28	0.0397	0.0232	0.0739
26	高尾北ヤシキ古墳	須恵器	短頸壺	59.79	1.40	23.19	11.25	0.05	0.00	0.48	0.52	2.94	0.23	0.0402	0.0244	0.0589
27	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	短頸壺	59.51	1.65	28.33	6.72	0.04	0.01	0.45	0.50	2.43	0.23	0.0339	0.0218	0.0704
28	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	短頸壺	59.10	1.55	27.61	8.73	0.04	0.00	0.35	0.00	2.27	0.21	0.0350	0.0194	0.0713
29	高尾北ヤシキ遺跡	須恵器	横瓶	65.28	1.57	18.82	12.30	0.05	0.13	0.39	0.02	1.05	0.24	0.0161	0.0139	0.1038
30	高尾北ヤシキ遺跡	陶器	天目茶碗	71.98	1.47	19.65	2.91	0.03	0.00	0.10	0.06	3.50	0.17	0.0334	0.0098	0.0791

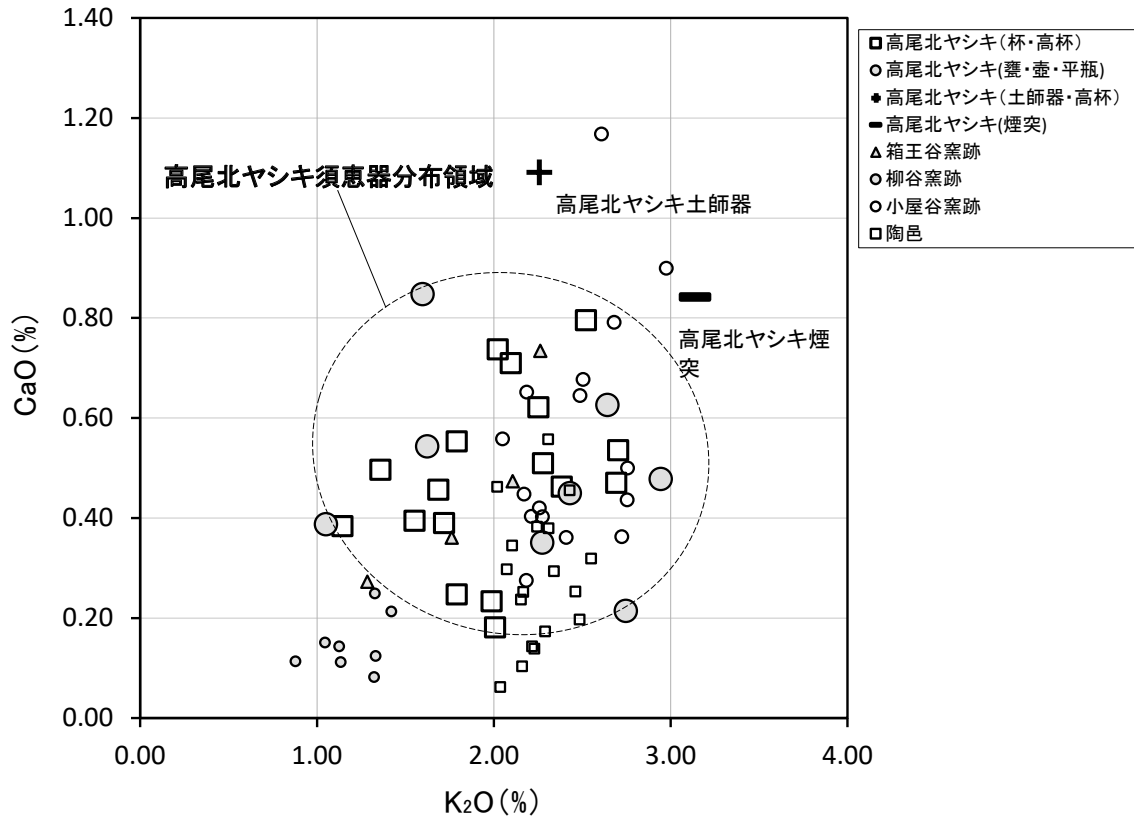
<高尾北ヤシキ古墳>

試料番号 1 = 第 233 図 - 9
 試料番号 2 = 第 233 図 - 10
 試料番号 3 = 第 233 図 - 8
 試料番号 4 = 第 233 図 - 21
 試料番号 5 = 第 233 図 - 19
 試料番号 6 = 第 245 図 - 59
 試料番号 7 = 第 233 図 - 17
 試料番号 8 = 第 233 図 - 18

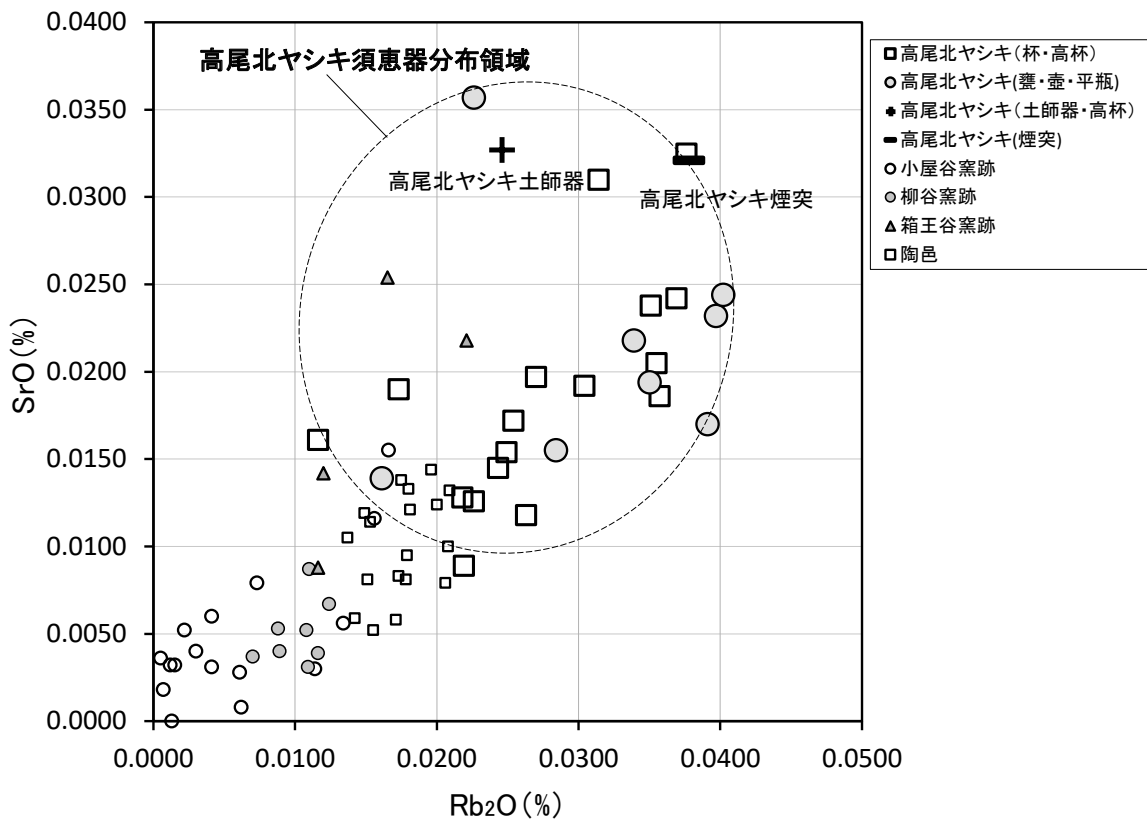
試料番号 9 = 第 234 図 - 31
 試料番号 10 = 第 243 図 - 49
 試料番号 11 = 第 234 図 - 32
 試料番号 12 = 第 231・232 図 - C 2
 試料番号 13 = 第 229・230 図 - C 1 身
 試料番号 14 = 第 229・230 図 - C 1 蓋
 試料番号 26 = 第 246 図 - 60

<高尾北ヤシキ遺跡>

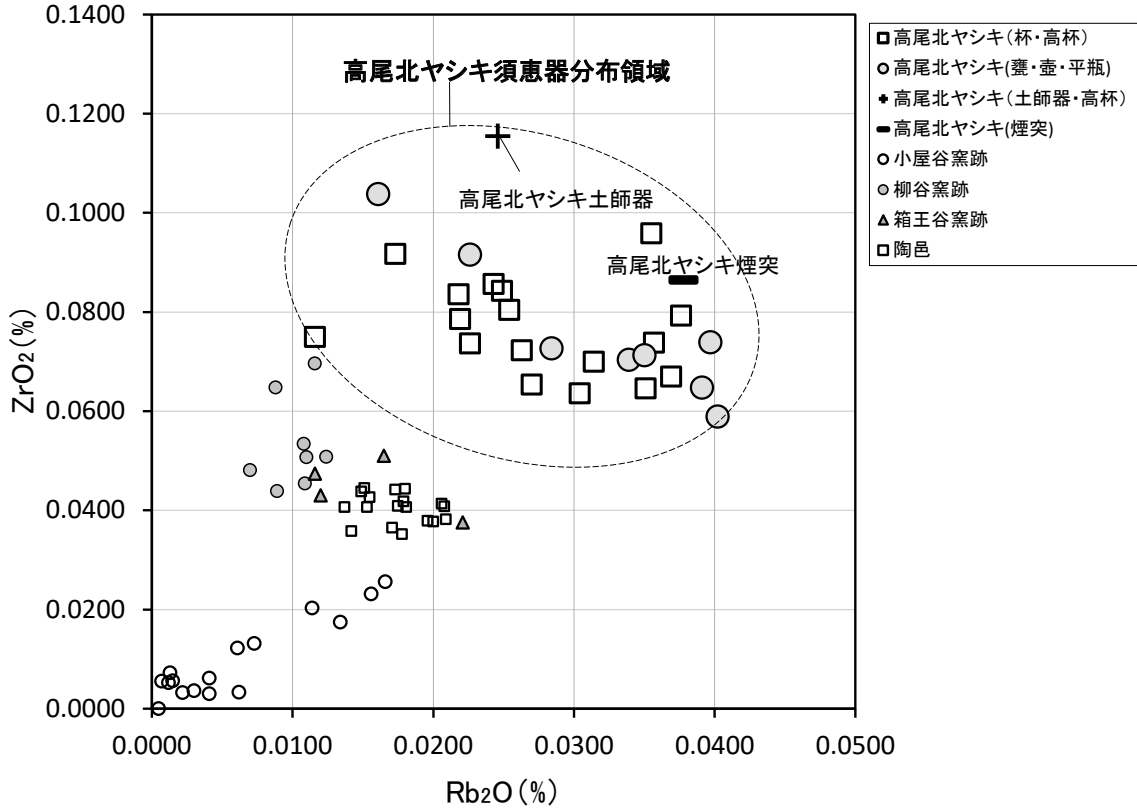
試料番号 15 = 第 85 図 - 308
 試料番号 16 = 第 50 図 - 150
 試料番号 17 = 第 50 図 - 148
 試料番号 18 = 第 46 図 - 130
 試料番号 19 = 第 78 図 - 284
 試料番号 20 = 第 67 図 - 235
 試料番号 21 = 第 70 図 - 254
 試料番号 22 = 第 85 図 - 311
 試料番号 23 = 第 70 図 - 250
 試料番号 24 = 第 85 図 - 319
 試料番号 25 = 第 42 図 - 124
 試料番号 27 = 第 71 図 - 159
 試料番号 28 = 第 67 図 - 239
 試料番号 29 = 第 39 図 - 110
 試料番号 30 = 第 162 図 - 380



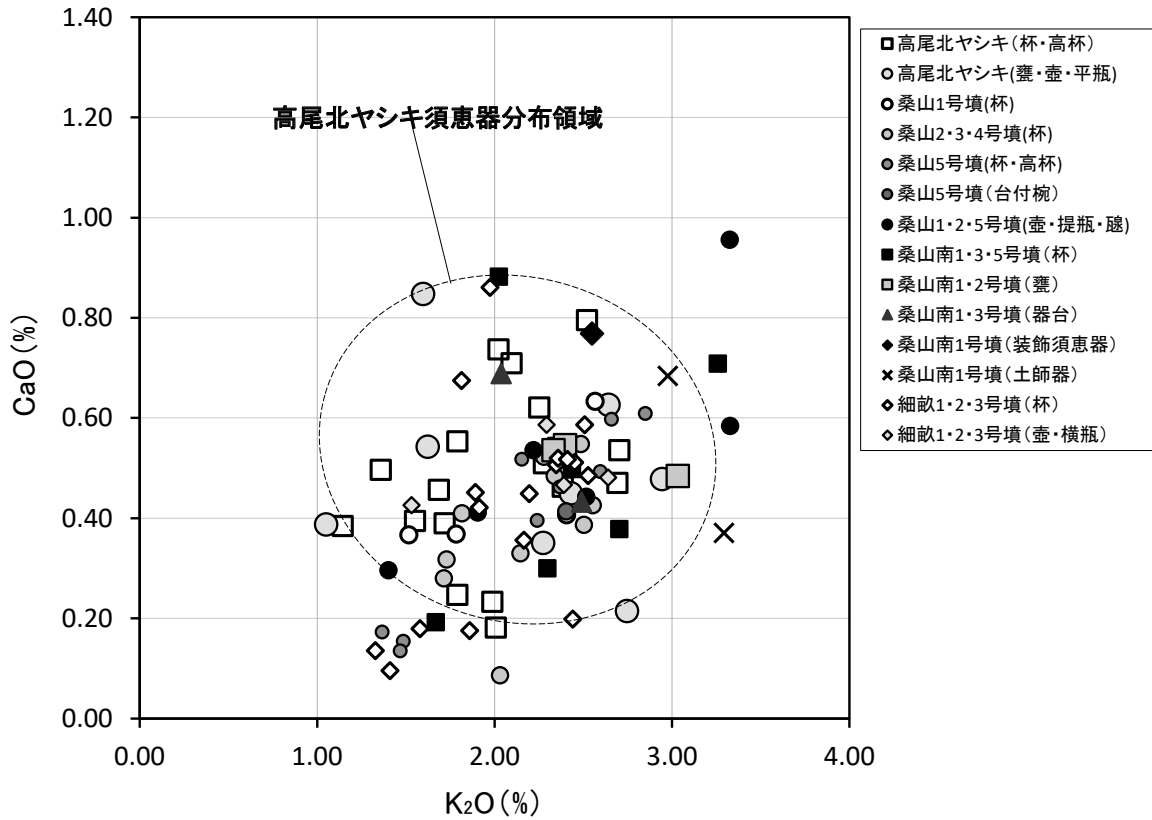
第247図 高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土須恵器の産地推定①



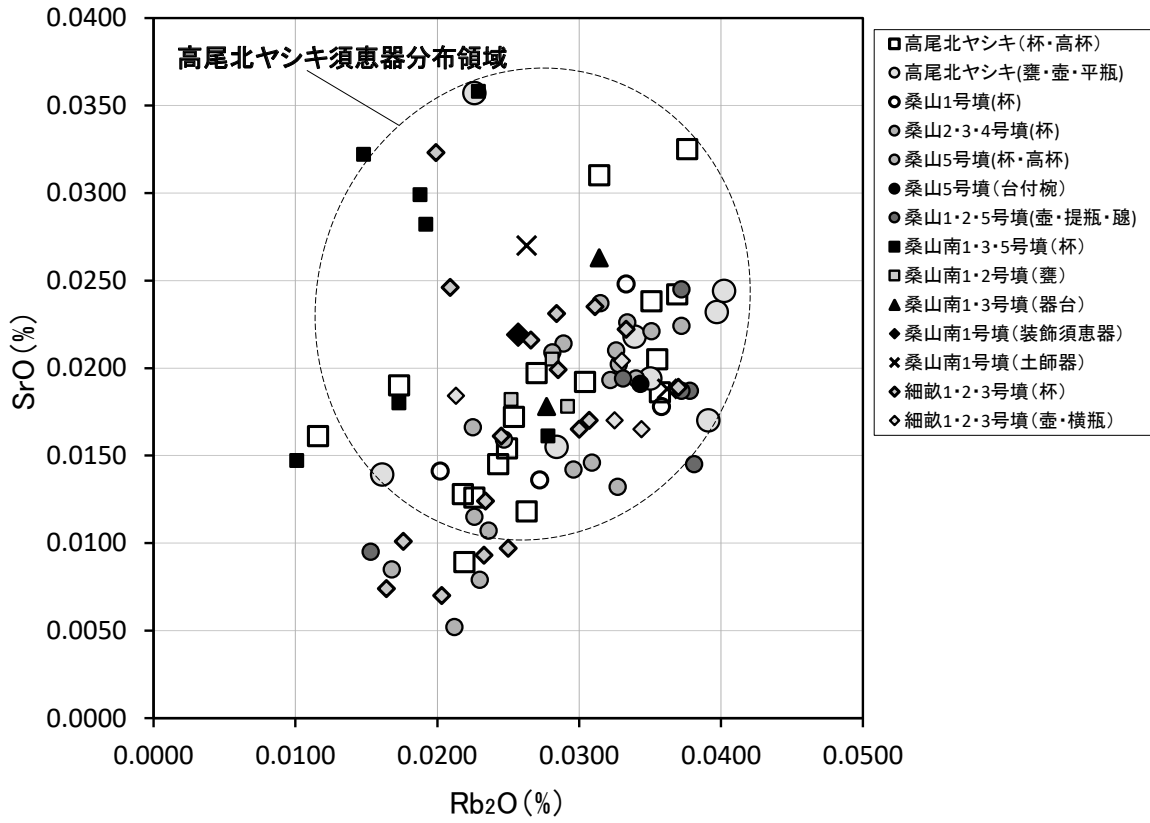
第248図 高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土須恵器の産地推定②



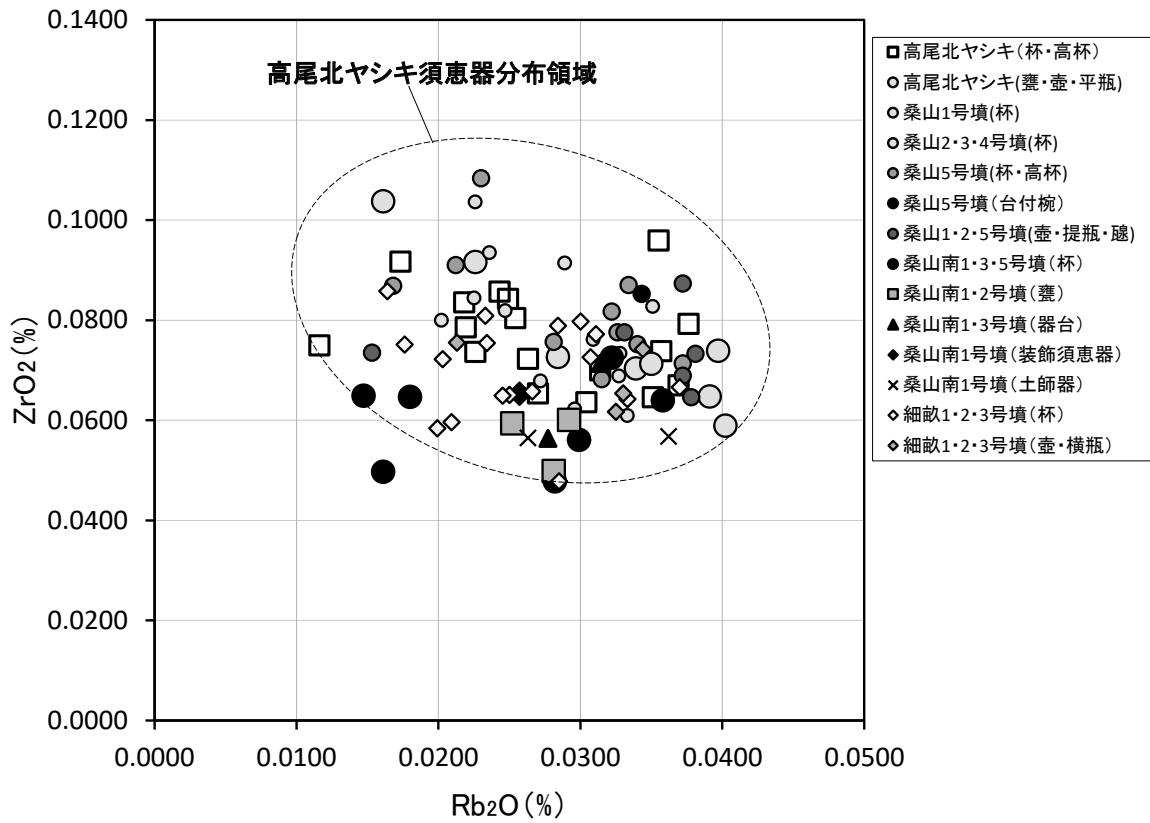
第249図 高尾北ヤシキ古墳・遺跡出土須恵器の産地推定③



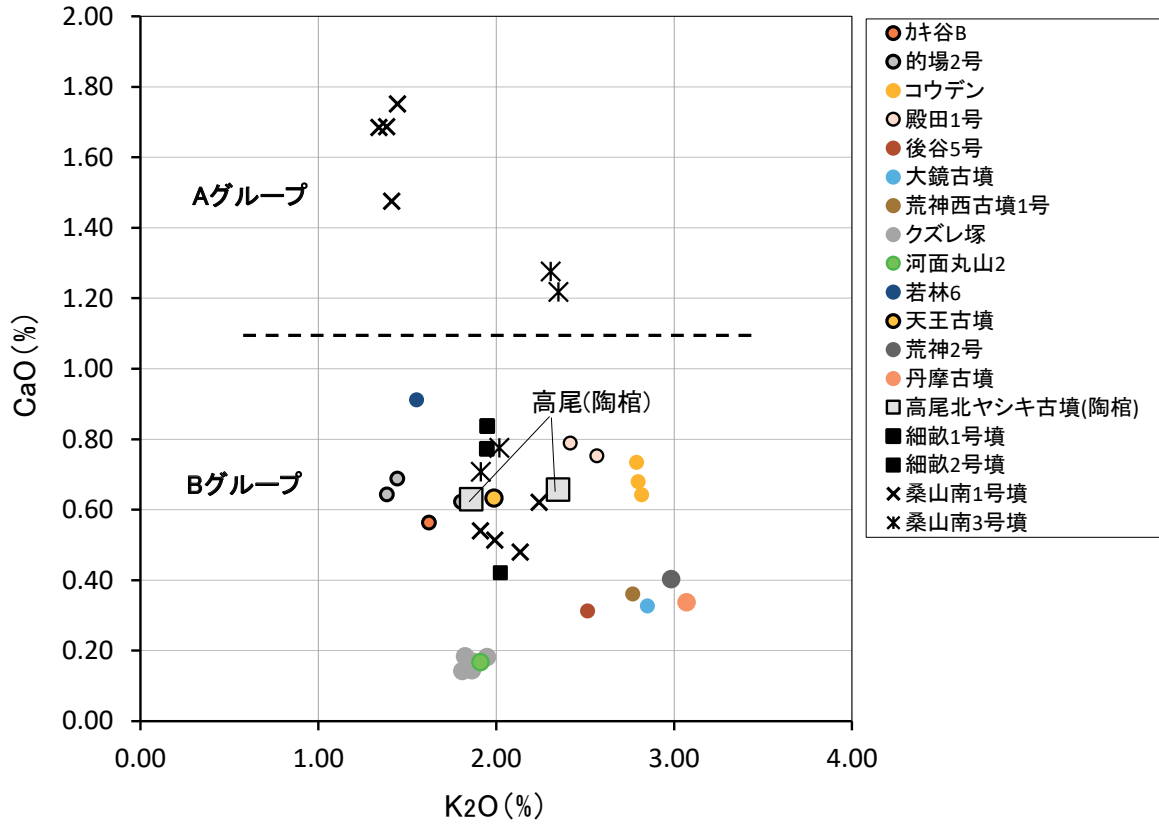
第250図 各遺跡出土須恵器の比較①



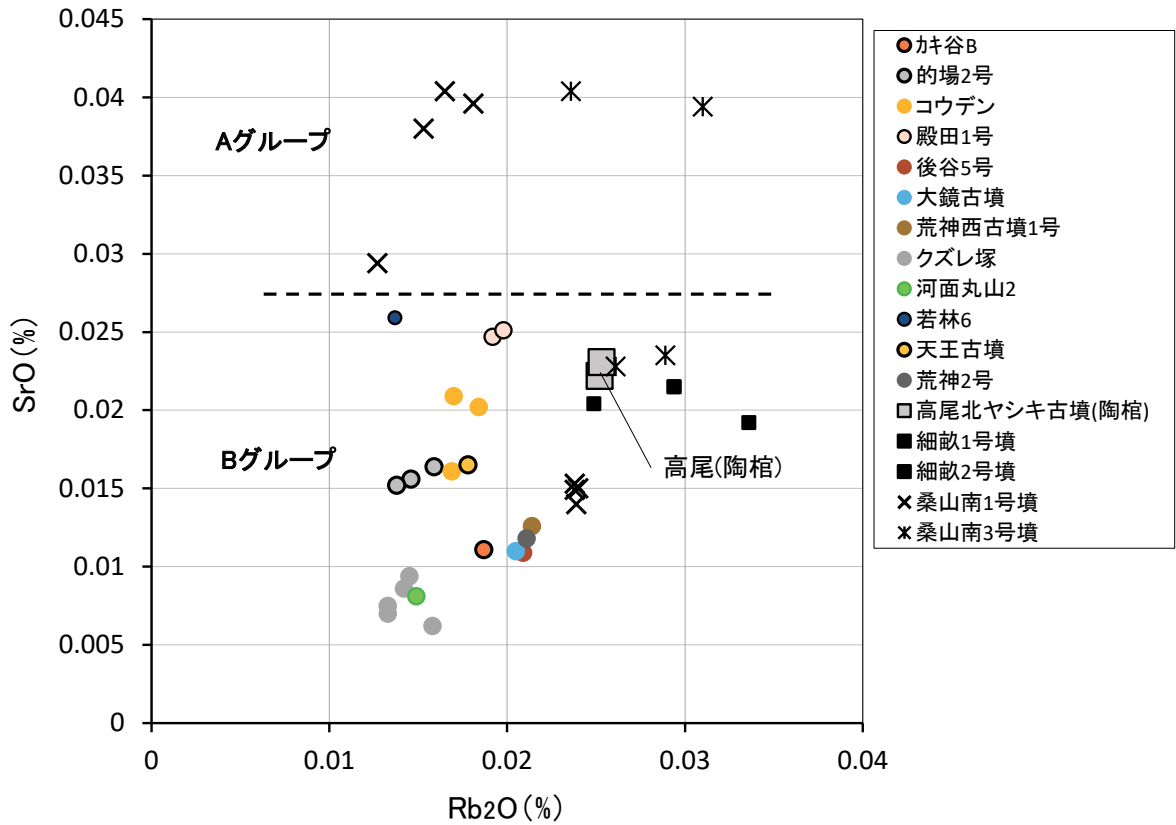
第 251 図 各遺跡出土須恵器の比較②



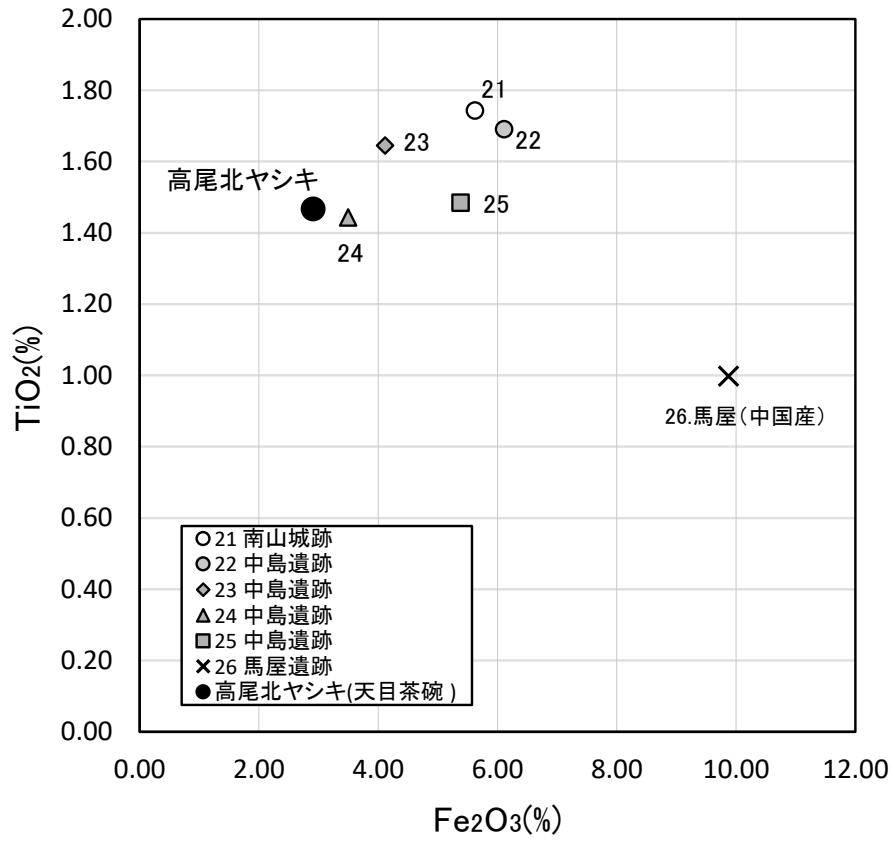
第 252 図 各遺跡出土須恵器の比較③



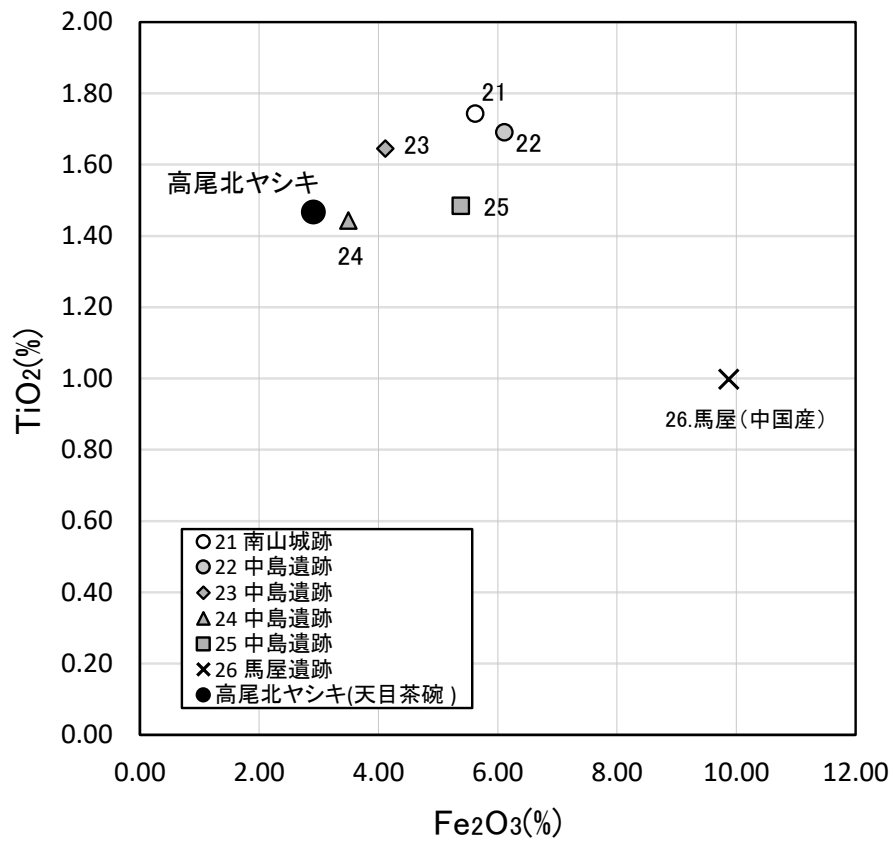
第 253 図 高尾北ヤシキ古墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較①



第 254 図 高尾北ヤシキ古墳出土陶棺と津山市内陶棺の比較②



第 255 図 高尾北ヤシキ遺跡出土天目茶碗と他地域の胎土比較①



第 256 図 高尾北ヤシキ遺跡出土天目茶碗と他地域の胎土比較②

第2節 高尾北ヤシキ遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

岡山県津山市の高尾北ヤシキ遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて種実同定および樹種同定が行われている（本章第3・4節の種実同定、樹種同定を参照）。

2 試料と方法

試料は、3区の土坑5から出土した炭化種実（試料No. 1：PLD-47523）、竪穴住居9の底面北側から出土した炭化材（試料No. 2：PLD-47524）、同じく竪穴住居9の底面中央から出土した炭化材（試料No. 3：PLD-47525）の、計3点である。

種実同定の結果、試料No. 1はモモ核、樹種同定の結果試料No. 2はサカキ、試料No. 3はコナラ属クヌギ節であった。炭化材試料は、いずれも最終形成年輪が残っていた。発掘調査所見では、いずれの遺構も古墳時代後期と考えられている。測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第4表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-47523	試料No. 1 調査区：3区 遺構：土坑5 位置：北端	種類：炭化種実（モモ核） 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-47524	試料No. 2 調査区：3区 遺構：竪穴住居9 位置：底面北側	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)
PLD-47525	試料No. 3 調査区：3区 遺構：竪穴住居9 位置：底面中央	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L)

3 結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第257図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-47523 試料 No. 1 土坑 5	-24.45±0.34	1552±19	1550±20	441-450 cal AD (8.66%) 456-459 cal AD (2.20%) 478-496 cal AD (18.24%) 535-564 cal AD (39.16%)	434-467 cal AD (20.76%) 474-520 cal AD (28.37%) 526-574 cal AD (46.32%)
PLD-47524 試料 No. 2 竪穴住居 9	-24.94±0.25	1547±19	1545±20	442-448 cal AD (5.19%) 479-494 cal AD (14.48%) 536-568 cal AD (48.59%)	435-466 cal AD (16.21%) 474-518 cal AD (22.91%) 528-583 cal AD (56.33%)
PLD-47525 試料 No. 3 竪穴住居 9	-27.40±0.24	1463±19	1465±20	591-610 cal AD (31.61%) 618-640 cal AD (36.66%)	574-644 cal AD (95.45%)

4 考察

以下、2σ暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。

土坑5では、試料No. 1(PLD-47523)は、434-467 cal AD (20.76%)、474-520 cal AD (28.37%)、526-574 cal AD (46.32%)で、5世紀前半～6世紀後半の暦年代を示した。これは、古墳時代中期～後期に相当する。なお、試料は炭化種実であり、測定結果は結実年代を示す。

竪穴住居9は、試料No. 2(PLD-47524)は、435-466 cal AD (16.21%)、474-518 cal AD (22.91%)、528-583 cal AD (56.33%)で、5世紀前半～6世紀後半の暦年代を示した。これは、古墳時代中期～後期に相当する。

また試料No. 3(PLD-47525)は、574-644 cal AD (95.45%)で、6世紀後半～7世紀中頃の暦年代を示した。これらは、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。竪穴住居9の試料はいずれも炭化材で最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

発掘調査所見では、各遺構は古墳時代後期と考えられており、調査所見と測定結果は整合的である。ただし竪穴住居9の炭化材では、試料No. 2は5世紀前半～6世紀後半、試料No. 3は6世紀後半～

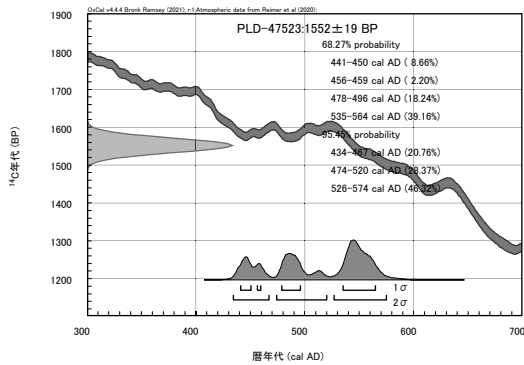
7世紀中頃の暦年代を示し、測定結果に差異がみられた。竪穴住居9は、6世紀後半～7世紀中頃に中心的に使用され、何らかの要因で5世紀前半～6世紀後半頃の炭化材が再堆積した、と考えられる。

参考文献

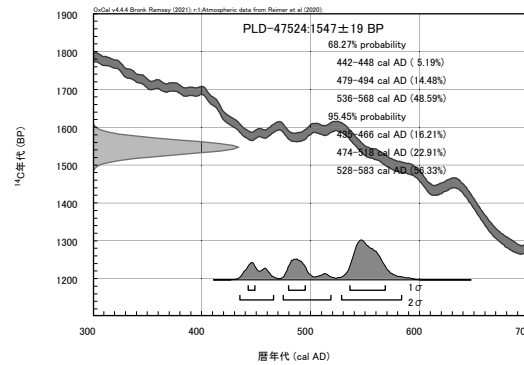
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

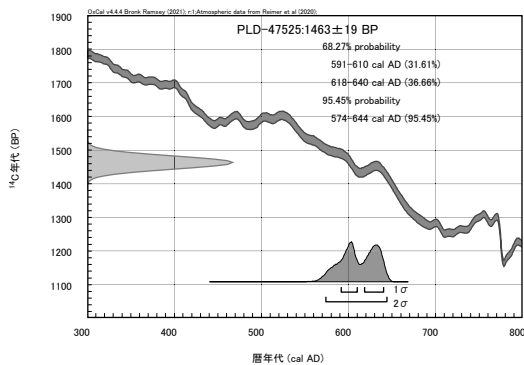
Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., Manning, S. W., Muscheler, R., Palmer, J. G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Turney, C. S. M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S. M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



試料No. 1 (土坑5出土土モモ核)



試料No. 2 (竪穴住居9出土炭化材A)



試料No. 3 (竪穴住居9出土炭化材B)

第257図 暦年較正結果

第3節 高尾北ヤシキ遺跡から出土した炭化種実

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

高屋北ヤシキ遺跡は、津山市街から約5km南西の皿川の左岸、嵯峨山の南東麓に立地する集落跡である。ここでは、古墳時代後期の土坑から得られた炭化種実の同定結果を報告し、当時の利用植物について検討した。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（本章第2・4節の放射性炭素年代測定、樹種同定を参照）。

2 試料と方法

分析試料は、3区の土坑5北端において、発掘調査中に肉眼で確認され、採取された1試料である。試料は、岡山県古代吉備文化財センターによって採取され、保管されている。

同定および計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

3 結果

同定の結果、試料は木本植物のモモ核であった（第6表）。

以下に、得られた分類群の記載を行い、写真22に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠した。

(1) モモ *Prunus persica* (L.) Batsch 炭化核
バラ科

完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。表面に不規則な深い皺がある。また、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。最大の破片は、残存高18.4mm、残存幅15.7mm。

4 考察

古墳時代後期の土坑5北端から出土した炭化種実を同定した結果、栽培植物で果樹のモモであった。これらのモモ核は、果肉を食べた後に、食用にならない核の部分が燃やされ、廃棄された可能性が考えられる。

引用文献

米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

第6表 高尾北ヤシキ遺跡から出土した炭化種実

分類群	炭化核	調査区	3区
		出土遺構	土坑5北端
		時期	古墳後期
モモ			(5)

括弧内は破片数



1・2 モモ炭化核

写真22 高尾北ヤシキ遺跡出土の炭化種実

第4節 高尾北ヤシキ遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

岡山県津山市の高尾北ヤシキ遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（本章第2節の放射性炭素年代測定を参照）。

2 試料と方法

試料は、古墳時代後期の竪穴住居跡である、竪穴住居9の床面北側と中央から出土した炭化材2点である。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-IT200）にて検鏡および写真撮影を行った。

3 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）とサカキの2分類群がみられた。いずれも各1点であった。同定結果を第7表に示す。

第7表 高尾北ヤシキ遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	調査区	出土遺構	種類	樹種	時期
2	3区	竪穴住居9床面北側	炭化材	サカキ	古墳時代後期
3	3区	竪穴住居9床面中央	炭化材	コナラ属クヌギ節	古墳時代後期

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 写真 23 1a-1c (No. 3)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(2) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. モッコク科 写真 23 2a-2c (No. 2)

小型の道管が、ほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管の穿孔は20～40段程度の階段穿孔となる。放射組織は上下端1～4列が直立する異性で、単列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

4 考察

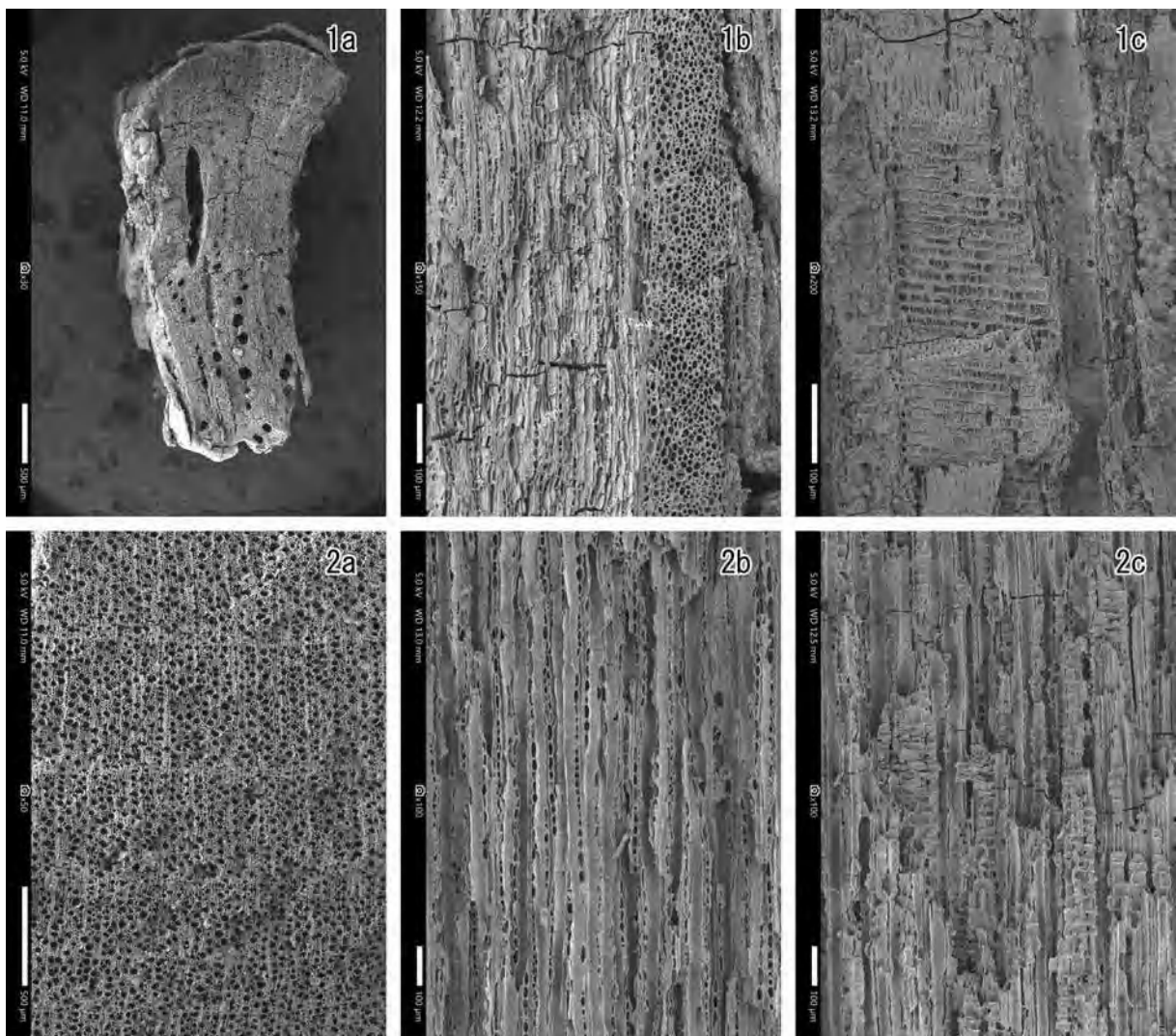
古墳時代後期の堅穴住居9の炭化材は、クヌギ節とサカキであった。試料は堅穴住居跡の床面から出土しており、焼けた建築材である可能性が考えられている。クヌギ節とサカキは堅硬な樹種であり、建築材としても有用な樹種である（伊東ほか、2011）。堅穴住居跡の建築材には、堅硬な樹種を選択利用していた可能性が考えられる。

岡山県内の古墳時代頃の建築材では、クヌギ節やコナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属などの健康な樹種が多く利用されており（伊東・山田編、2012）、堅硬な材を利用するという点では傾向は一致する。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌. 238p, 海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.



1a-1c. コナラ属クヌギ節 (No. 3)、2a-2c. サカキ (No. 2)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

写真 23 高尾北ヤシキ遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第5節 高尾北ヤシキ遺跡出土須恵器の赤色付着物の材質分析

株式会社パレオ・ラボ

1 はじめに

岡山県高尾北ヤシキ遺跡の調査において、内面に赤色物が付着した須恵器が出土した。この赤色付着物は、須恵器破片の内面全体に層状に付着し、漆を含む可能性が考えられた。この赤色付着物の材質を調べるために、赤外分光分析と蛍光X線分析を行った。

2 試料と方法

分析試料は、須恵器（第204図-628）内面に付着する赤色付着物1点である（第8表）。

第8表 須恵器内面付着物の特徴

分析No.	種類	器種	時期	調査区	出土層位	遺物No.	付着物の特徴
1	内面付着物	須恵器壺	古代	3区	包含層1-第4層	628	にぶい赤褐色 (2.5YR 4/4)、層状、光沢無し

赤外分光分析は、手術用メスを用いて赤色物から少量（0.2mm角程度）を採取し、ダイヤモンドセルに挟んで薄く圧延した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光株式会社製 FT/IR-4X、IRT-5200-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。材料の検討は、市販の生漆の赤外吸収スペクトルと比較した。

また、無機成分を調べるために蛍光X線分析計（株式会社堀場製作所製 XGT-9000）で多点分析を行った。測定は、X線管球 100 μ m、電圧 50kV、電流自動設定、測定時間 300 秒である。定量分析は、標準試料を用いない FP 法（ファンダメンタルパラメータ法）で定量計算を行った。

3 結果および考察

以下に、試料の特徴と分析結果について述べる。なお、第258図の赤外吸収スペクトル図の縦軸は透過率(%T)、横軸は波数(Wavenumber (cm^{-1});カイザー)である。第258図の赤外吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す（第9表）。

[分析 No. 1（須恵器内面の赤色付着物）]

試料は、須恵器内面の全体に層状に付着する、光沢の無い赤色物である（写真 24-1・2）。

赤外分光分析では、炭化水素の吸収（生漆の吸収 No.1 と 2）は認められなかった。また、生漆を特徴

第9表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

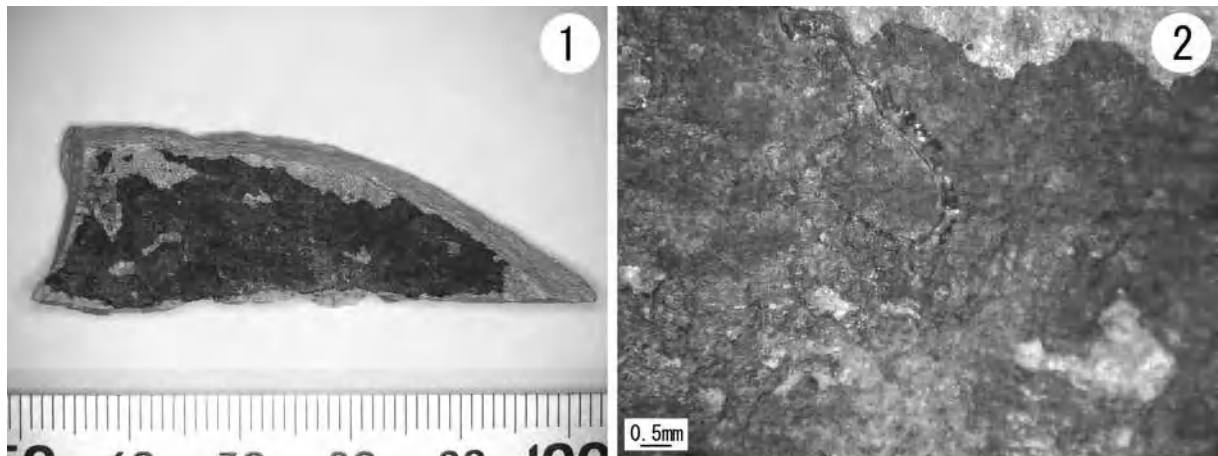
づけるウルシオール（吸収 No. 6～8）も確認されなかった（第258図）。この結果から、この赤色付着物は無機物である。

蛍光X線分析では、酸化鉄（ Fe_2O_3 ）が平均81.98%含まれ、その他に酸化ケイ素（ SiO_2 ）が平均8.61%、酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）が5.87%、酸化リン（ P_2O_5 ）が平均3.11%などであった（第10表）。

この赤色付着物は、漆の混和を否定できないが、鉄含有量が高いため、赤色顔料などの材料が固化したものと推定される。

第10表 内面付着物の化学組成（単位：重量%）

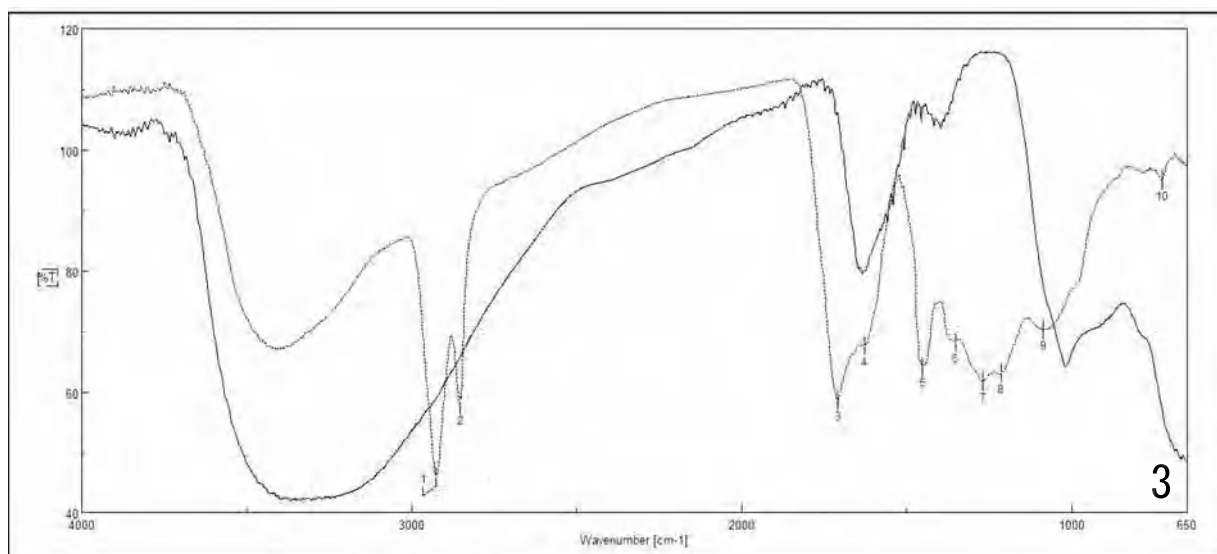
点No.	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Mn ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	ZnO	As ₂ O ₃	合計
1	0.00	0.17	8.85	11.94	2.54	0.14	0.08	0.08	0.03	76.12	0.02	0.03	100.00
2	0.02	0.15	5.29	7.91	3.27	0.06	0.06	0.05	0.03	83.11	0.02	0.04	100.00
3	0.00	0.01	4.97	7.75	3.30	0.06	0.08	0.06	0.05	83.66	0.02	0.04	100.00
4	0.04	0.05	4.40	6.85	3.32	0.06	0.08	0.07	0.04	85.04	0.02	0.04	100.00
平均値	0.02	0.09	5.87	8.61	3.11	0.08	0.07	0.06	0.04	81.98	0.02	0.04	



1 付着状況（分析No.1）

2 付着物の拡大写真

写真24 分析試料



（実線：分析試料、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）

第258図 赤色付着物の赤外分光スペクトル図

第6節 高尾北ヤシキ遺跡・桑山遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物 および銅生産関連遺物の調査

日鉄テクノロジー株式会社 九州事業所 鈴木瑞穂

1 調査対象

高尾北ヤシキ遺跡、桑山遺跡は岡山県津山市に所在する。ともに古墳時代後期の製鉄～鍛冶関連遺物が複数出土している。さらに高尾北ヤシキ遺跡では中世の銅滓と推定される遺物も出土した。そこで各時期の生産の実態を検討するため、第11表の遺物計18点を調査した。

2 調査方法

(1) 外観観察

調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

調査する位置から試料を採取した後、その断面をエメリー研磨紙の#150、#320、#600、#1000、およびダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で順を追って研磨して、全体像を撮影した。

(3) 顕微鏡組織

光学顕微鏡を用いて断面観察後、代表的・特徴的な視野を撮影した。また金属鉄部の組織観察には、腐食に3%ナイトル（硝酸アルコール液）を用いた。

(4) EPMA 調査

EPMA（日本電子(株)製 JXA-8230）を用い、鉄滓や鉄中非金属介在物の組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧：15kV、照射電流（分析電流）：2.00E-8A。

(5) X線回折

試料を粉体にして、理学電気株式会社製 SmartLab 3 k WR（管電圧40kV、管電流30mA）を用いX線回折パターンを測定した。

(6) 化学組成分析

測定方法は以下の通りである。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）：燃焼容量法、硫黄（S）：燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（ SiO_2 ）、酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（ K_2O ）、酸化ナトリウム（ Na_2O ）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（ TiO_2 ）、酸化クロム（ Cr_2O_3 ）、五酸化磷（ P_2O_5 ）、バナジウム（V）二酸化ジルコニウム（ ZrO_2 ）、銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）、亜鉛（Zn）、銀（Ag）、砒素（As）、アンチモン（Sb）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

(7) 耐火度

胎土からゼーゲルコーン（三角錐の試験片）を作り、1分間当り 10°C の速度で温度 1000°C まで上昇

させた後、4℃に昇温速度を落とし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

3 調査結果

3-1. 高尾北ヤシキ出土製鉄～鍛冶関連遺物

No.1 : 炉壁

(1) 外観観察：強い熱影響を受けて内面が黒色ガラス質化した、製鉄炉の炉壁破片（121.0g）と推測される。また内面表層には、長さ4～5cmの大形の木炭痕が3箇所確認される。その周囲には黄褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄が付着する。この部分には着磁性はあるが金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。また外面側には薄く炉壁胎土が残存する。色調は灰白色で、真砂（花崗岩の風化砂）や短く切ったスサが混和されている。

(2) 顕微鏡組織：写真25①～③に示す。内面表層部を断面観察した。素地の暗灰色部はガラス質滓で、内部には熱影響を受けた石英・長石類などの砂粒が点在する。滓中の微細な不定形明灰色～青灰色部は錆化鉄で、②はその拡大である。また③中央の微小白色部は金属鉄である。3%ナイトルで腐食しても変化がなく、炭素量の推定は困難な状態であった。

(3) 化学組成分析：第12表に示す。外面側の炉壁胎土を供試材とした。強熱減量(Ig loss)は1.96%であった。強い熱影響を受けて結晶構造水が飛散した状態である。軟化性成分の鉄分(Total Fe)が5.55%が高めであった。また耐火性に有利なアルミナ(Al_2O_3)の割合は17.64%であった。通常の粘土の範囲内(約15～18%程度)である。

(4) 耐火度：第12表に示す。1,160℃であった。古墳時代後期の製鉄炉の炉壁としても、やや低い耐火性状である。

No.2 : 鉄鉱石（塊鉄）

(1) 外観観察：やや大形で塊状の鉄鉱石の破片（499.1g）である。素地は黒灰色で着磁性が強く、磁鉄鉱と推定される。また磁鉄鉱以外に、白色・茶褐色の脈石鉱物も少量確認される。

(2) 顕微鏡組織：写真25④～⑥に示す。灰褐色部は磁鉄鉱(Magnetite： $FeO \cdot Fe_2O_3$)、暗灰色部は光を透過する脈石鉱物である。また⑥の中央の微細な黄白色鉱物は磁硫鉄鉱(Pyrrhotite： $Fe_{1-x}S$)などの硫化鉄と推測される。

(3) 化学組成分析：第12表に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は64.63%と高い。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.39%、酸化第1鉄(FeO)が23.85%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)65.34%であった。製鉄原料とした場合の造滓成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$)の割合は9.14%と低めで、このうち塩基性成分($CaO + MgO$)は3.12%である。また二酸化チタン(TiO_2)は<0.01%、バナジウム(V)も<0.01%と低値であった。酸化マンガン(MnO)は1.08%と高めである。さらに銅(Cu)は<0.01%、硫黄(S)も<0.01%と低値であった。

当遺物は鉄分の割合が高い、磁鉄鉱主体の鉄鉱石であった。またライム(CaO)、酸化マンガンもやや高め傾向を示す。この特徴から、岡山県下の製鉄遺跡でよく利用されている、スカルン鉄床(注1)で採取された鉄鉱石と判断される。

No.3 製鍊滓（流動滓）

(1) 外観観察：やや小形で偏平な製鍊滓の破片（47.8g）と推定される。複数条の細い流動状の滓が接着している。製鉄炉の操業中、炉外に排出されて凝固した滓と考えられる。下面には灰褐色の炉壁粘土の小破片が付着する。色調は黒灰色で着磁性はごく弱い。破面には大小の気孔が点在するが緻密である。

(2) 顕微鏡組織：写真26①～③に示す。滓中には微細な白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite： FeO ）、暗灰色多角形結晶ヘルシナイト（Hercynite： $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ ）、発達した淡灰色結晶ファヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）が晶出する。砂鉄（含チタン鉄鉱）に起因する鉄チタン酸化物はなく、鉄鉱石を原料とした製鍊滓の晶癖といえる。

(3) ビッカース断面硬度：写真26③の淡灰色結晶の硬度を測定した。硬度値は612、647Hvであった。ファヤライトの文献硬度値（約600～700Hv）の範囲内で、ファヤライトと推定される。また暗灰色多角形結晶の硬度値は953、1042Hvと非常に硬質であった。ヘルシナイトと推定される（注2）。

(4) 化学組成分析：第12表に示す。全鉄分（Total Fe）45.20%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.32%、酸化第1鉄（ FeO ）が51.24%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）7.222%の割合であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）の割合は39.98%と高く、このうち塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）は5.18%とやや高めであった。二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.35%、バナジウム（V）< 0.01%と低値である。また酸化マンガン（ MnO ）は0.40%、銅（Cu）は0.02%であった。

当鉄滓は塩基性成分（ CaO 、 MgO ）の割合がやや高く、通常砂鉄製鍊滓に含まれるチタニア（ TiO_2 ）はごく微量であった。この特徴から、鉄鉱石（塊鉄）を製鉄原料とした製鍊滓と推定される。

No.4：製鍊滓（炉内滓）

(1) 外観観察：やや小形の製鍊滓の破片（58.7g）と推定される。上面は比較的平坦である。側面から下面には細かい凹凸があり、微細な炉壁粘土破片が点々と付着する。さらに長さ2cm程の大形の木炭痕が1箇所残存する。滓の色調は暗灰色で、着磁性はほとんどない。また表面の気孔は少ないが、全体にやや軽い質感の滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真26④～⑥に示す。④の上側の暗灰色部はガラス質滓である。内部には熱影響を受けた石英・長石類などの砂粒が点在しており、炉壁粘土の溶融物と推定される。素地の灰褐色部は製鍊滓で、⑤⑥はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネル（Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）とヘルシナイト（Hercynite： $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ ）を主な端成分とする固溶体と推定される。さらに淡灰色柱状ファヤライトが晶出する。

(3) ビッカース断面硬度：写真26⑤の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は698、702、711Hvであった。ウルボスピネル（Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）の硬度は通常600台であり、やや硬質傾向を示す。このためアルミナ（ Al_2O_3 ）を固溶している可能性が高いと考えられる。

また淡灰色柱状結晶の硬度値は618、632、714Hvであった。ばらつきが大きくファヤライトとしてはやや硬質の箇所もみられた。一部マグネシア（ MgO ）などを少量固溶する可能性があるが、結晶の色調と形状から、ファヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）と推測される。

(4) 化学組成分析：第12表に示す。全鉄分（Total Fe）39.09%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.28%、酸化第1鉄（ FeO ）が41.86%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）8.968%の割合であった。造滓成分（ SiO_2

+ Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)の割合は38.54%と高い。このうち塩基性成分(CaO + MgO)は3.79%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱(注3))起源の二酸化チタン(TiO₂)は6.60%、バナジウム(V)が0.12%と高めであった。酸化マンガン(MnO)も1.00%と高め傾向を示す。また二酸化ジルコニウム(ZrO₂)も0.26%と高値であった。銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は砂鉄(含チタン鉄鉱)起原の脈石成分(TiO₂、V)が高めであり、砂鉄製錬滓と推定される。

No.5 : 製錬滓

(1) 外観観察 : やや大形で不規則な凹凸がある製錬滓(195.8g)である。色調は灰褐色で、着磁性はほとんどない。気孔は少なく緻密である。また表面に炉壁粘土が点々と付着する。

(2) 顕微鏡組織 : 写真27①~③に示す。発達した淡灰色結晶ファヤライトが晶出する。さらに暗灰色多角形結晶はヘルシナイト、その周囲の微小灰褐色結晶はマグネタイトと推測される。鉄鉱石(塊鉄)を原料とする製錬滓の晶癖といえる。

(3) ビッカース断面硬度 : 写真27③の淡灰色結晶の硬度を測定した。硬度値は660、744Hvであった。測定値はばらつきが大きく、後者はファヤライトとしてはやや硬質であった。このため硬質の箇所はマグネシア(MgO)などを少量固溶する可能性がある。しかし結晶の色調と形状から、ファヤライト(Fayalite : 2FeO · SiO₂)主体の組成と推測される。また暗灰色多角形結晶の硬度値は1175、1317Hvと非常に硬質であった。ヘルシナイト(Hercynite : FeO · Al₂O₃)と推定される。

(4) 化学組成分析 : 第12表に示す。全鉄分(Total Fe)37.36%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.18%、酸化第1鉄(FeO)が38.06%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)10.86%の割合であった。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)の割合は46.50%と高い。このうち塩基性成分(CaO + MgO)は3.91%であった。また二酸化チタン(TiO₂)は0.47%、バナジウム(V)が<0.01%と低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.27%と低めである。銅(Cu)は0.01%であった。

当鉄滓は製錬滓(No.3)と類似した組成で、チタニア(TiO₂)はごく微量であった。この特徴から鉄鉱石(塊鉄)を製鉄原料とした製錬滓と推定される。

No.6 鍛冶滓(含鉄)

(1) 外観観察 : やや大形の鉄滓(139.3g)破片である。広い範囲で黄褐色の土砂や褐色の錆化鉄が薄く付着する。表面には長さ25mm程のやや大形の木炭痕が1箇所確認される。また着磁性は強いが金属探知器反応はなく、内部に金属鉄は残存しないと考えられる。滓の色調は灰褐色で、気孔は少なく緻密である。

(2) 顕微鏡組織 : 写真27④~⑥に示す。観察面では10×7mm程の錆化鉄粒が確認された。④の左下はその拡大である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素量の推定等は困難な状態であった。④の右上は木炭破片で、⑤はその拡大である。木炭内部には多数の導管が確認された。広葉樹材の黒炭と推定される。また④の右側は滓部で⑥はその拡大である。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色結晶ファヤライトが晶出する。

(3) ビッカース断面硬度 : 写真27⑥の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は406Hvであった。ウスタイトの文献硬度値(約450~500Hv)よりもやや軟質であるが、結晶の色調や形状からウスタイト(Wustite : FeO)と推測される。また淡灰色結晶の硬度値は533、699、710Hvであった。硬度値

のばらつきが大きく、色調もわずかに濃淡がみられる。ほぼファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 組成であるが、一部ライム (CaO) やマグネシア (MgO) など少量含む箇所があり硬度にばらつきが生じていると推測される。

(4) 化学組成分析: 第12表に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合は58.27%と高めであった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.05%、酸化第1鉄 (FeO) が38.70%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 40.23%であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 15.37%と低めで、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) も1.19%と低値であった。また二酸化チタン (TiO_2) は0.11%、バナジウム (V) が<0.01%と低値である。さらに酸化マンガン (MnO) は0.19%、銅 (Cu) も<0.01%と低値であった。

当鉄滓は主に鉄酸化物と炉材粘土の溶融物 (SiO_2 主成分) からなり、製鉄原料起源の脈石成分〔鉄鉱石 (塊鉄): CaO, MgO, 砂鉄 (含チタン鉄鉱): TiO_2 , V〕はいずれも微量であった。鍛錬鍛冶滓と推測される。また滓中には小形の銹化鉄粒が確認された。ただし金属組織痕跡は不明瞭で、炭素量の推定等はできなかった。

No. 7: 鍛冶滓 (含鉄)

(1) 外観観察: やや小形で偏平な鍛冶滓 (33.0g) と推測される。表層には黄褐色の土砂や褐色の銹化鉄が付着する。目視で観察可能な表層部の大半は暗灰色の鉄滓である。その一方で、広い範囲に金属探知器反応があり、内部に金属鉄が含まれると推測される。

(2) マクロ・顕微鏡組織: 写真28①～③に示す。①は試料断面の全体像である。素地部分は鍛冶滓であった。また滓中に多数散在する不定形明白色部は金属鉄である。②の左下の暗灰色部は鍛冶滓で、白色粒状結晶ウスタイト・淡灰色結晶ファヤライトが晶出する。②の明白色部は金属鉄である。素地は白色のフェライト (Ferrite: α 鉄) で、少量黒色のパーライトが析出する。また③も金属鉄部の拡大である。素地はベイナイト (Bainite) で針状フェライトが析出する。これらの金属組織から、炭素量は最大でも0.2%程度の軟鉄と推定される。

(3) ビッカース断面硬度: 写真28②の金属鉄部 (フェライト・少量パーライト) の硬度値は81、91Hvと低値であった。さらに③の金属鉄部 (針状フェライト・ベイナイト) は、針状フェライトが析出する箇所の硬度値は123、125Hv、ベイナイト部分は152、182Hvであった。炭素量の高い箇所ほど硬質で、組織に見合った値である。

(4) EPMA調査: 写真28④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色粒状結晶の定量分析値は96.2%FeO (分析点1) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) と推定される。淡灰色結晶の定量分析値は59.1%FeO - 6.6%MgO - 1.0%CaO - 30.4% SiO_2 (分析点2) であった。ファヤライトでマグネシア (MgO)、ライム (CaO) を少量固溶する。また黒色結晶の定量分析値は17.4% K_2O - 24.2% Al_2O_3 - 57.5% SiO_2 (分析点3) であった。オルソクレース (Orthoclase: KAlSi_3O_8) と推測される。

さらにもう1視野、鉄中非金属介在物の組成を調査した。写真27⑤に反射電子像 (COMP) を示す。55.0% SiO_2 - 15.3% Al_2O_3 - 11.3%CaO - 8.0%MgO - 3.1% K_2O - 4.3%FeO (分析点4) であった。非晶質珪酸塩である。

当鉄滓はウスタイト・ファヤライト組成であった。この特徴から鍛錬鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。

No.8 椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：やや扁平な椀形鍛冶滓の破片 (52.0g) と推測される。表層には黄褐色の土砂や褐色の錆化鉄が薄く付着するが、金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。上面は比較的平坦で、端部に薄く黒色ガラス質滓が付着する。羽口先端の粘土溶融物と推測される。下面側は細かい木炭痕による凹凸が著しい。また側面は全面破面である。

(2) 顕微鏡組織：写真 29 ①～③に示す。①の上側の明灰色部は錆化鉄で、②はその拡大である。内部には層状のパーライト組織の痕跡が残存する。炭素量は 0.2% 以下の軟鉄と推測される。また素地部分は鍛冶滓で③はその拡大である。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(3) ビッカース断面硬度：写真 29 ①～③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は 452、477、505Hv であった。ウスタイトの文献硬度値と近似しており、ウスタイトと推定される。さらに淡灰色柱状結晶の硬度値は 630、693Hv であった。ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：第 12 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 50.25% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.09%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 50.90%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 15.15% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) の割合は 31.35% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 4.48% と高めであった。また二酸化チタン (TiO_2) は 0.21%、バナジウム (V) が < 0.01% と低値であった。酸化マンガン (MnO) は 0.81% と高めで、銅 (Cu) は < 0.01% と低値であった。

当鉄滓は主に鉄酸化物と炉材粘土の溶融物 (SiO_2 主成分) からなるが、鉄鉱石 (塊鉄) 起原の脈石成分 (CaO 、 MgO) が高めであった。この特徴から鉄鉱石 (塊鉄) を始発原料とする精錬鍛冶滓と推定される。鍛冶原料 (製鉄塊系遺物) の不純物除去作業に伴う反応副生物である。

No.9 椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：椀形鍛冶滓の破片 (73.6g) と推測される。層には黄褐色の土砂や褐色の錆化鉄が薄く付着するが、金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。上面は比較的平坦で 1 箇所ガラス質滓が付着する。羽口先端の粘土溶融物と推測される。側面 1 面は破面で、中小の気孔が散在するが緻密である。

(2) 顕微鏡組織：写真 29 ④～⑥に示す。滓中には、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また⑥中央の微小明白色粒は金属鉄である。

(3) ビッカース断面硬度：写真 29 ⑤の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は 443、462、474Hv であった。ウスタイトの文献硬度値と近似しており、ウスタイトと推定される。さらに淡灰色柱状結晶の硬度値は 607、630Hv であった。ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：第 12 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 54.17% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.05%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 56.77%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 14.29% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は 26.16% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) 3.34% であった。二酸化チタン (TiO_2) は 0.19%、バナジウム (V) が < 0.01% と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は 0.31%、銅 (Cu) は < 0.01% と低値であった。

当鉄滓も椀形鍛冶滓 (No.8) と同様、主に鉄酸化物と炉材粘土の溶融物 (SiO_2 主成分) からなるが、鉄鉱石 (塊鉄) 起原の脈石成分 (CaO 、 MgO) が高めであった。鉄鉱石 (塊鉄) を始発原料とする精錬

鍛冶滓と推定される。

3-2. 高尾北ヤシキ出土銅滓

No.10：銅滓

(1) 外観観察：やや小形で扁平な鋳滓破片(45.6g)である。上面は比較的平滑で、微細な皴状の凹凸がある。下面も流動状であるが皴状の凹凸が目立つ。側面は全面破面で気孔が少なく緻密である。

(2) 顕微鏡組織：写真30①～③に示す。滓中には淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また②の黄褐色粒は銅鍍(Copper matte： $x\text{Cu}_2\text{S} \cdot y\text{FeS}$)、③の明灰色粒は白鍍(Cu_2S)と推定される。ともに銅製錬に伴う人工的な硫化物である(注4)。

(3) ビッカース断面硬度：写真30②の銅鍍の硬度値は173、207Hv、③の白鍍の硬度値は153、177Hvであった。鉄を含有する銅鍍の方が高値傾向を呈する。

(4) EPMA調査：写真30④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。滓中の微小淡橙色粒は、特性X線像では銅(Cu)に強い反応がある。定量分析値は93.1%Cu(分析点5)であった。金属銅と推定される。その周囲の黄褐色部は特性X線像では銅(Cu)、硫黄(S)に反応がある。定量分析値は57.4%Cu - 14.9%Fe - 26.0%S(分析点6)であった。銅鍍($x\text{Cu}_2\text{S} \cdot y\text{FeS}$)と推定される。また流動滓の接合面に晶出する微細な灰褐色結晶の定量分析値は88.0%FeO - 1.3%Al₂O₃(分析点7)であった。マグネタイト(Magnetite： $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$)で、アルミナ(Al₂O₃)を少量固溶する。淡灰色柱状結晶の定量分析値は61.6%FeO - 4.7%MgO - 30.4%SiO₂(分析点8)であった。ファヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)で、マグネシア(MgO)を少量固溶する。暗灰色結晶の定量分析値は43.2%FeO - 3.9%MgO - 43.3%SiO₂ - 6.8%Al₂O₃(分析点9)であった。

さらに滓中の鍍(matte)の組成を調査した。写真31①に写真30②と同じ粒の反射電子像(COMP)を示す。素地の黄褐色部の定量分析値は57.1%Cu - 13.6%Fe - 26.3%S(分析点10)であった。銅鍍($x\text{Cu}_2\text{S} \cdot y\text{FeS}$)と推定される。また外側に点在する黄白色部の定量分析値は70.2%Cu - 5.2%Fe - 22.8%S(分析点11)であった。鉄分を少量含むが白鍍(Cu_2S)に近い組成である。内部に点在する明白色部の定量分析値は73.7%As - 22.8%Fe - 3.7%Cu - 2.8%Ni - 1.9%Co(分析点12)、78.1%Pb - 7.5%Cu - 2.0%Fe - 13.8%S(分析点13)であった。前者は砒化鉄、後者は鉛主体の硫化物と推定される。

もう1箇所、写真30③と同じ粒の組成を調査した。写真31②に反射電子像(COMP)を示す。写真30②左側の淡紅色粒の定量分析値は60.2%Cu - 33.9%As - 2.5%Sb(分析点14)、74.8%Bi - 21.4%As - 6.8%Cu - 5.5%Fe(分析点15)であった。前者は砒化銅、後者はビスマス(Bi)が主成分の砒化物であった。また右側の灰白色粒の定量分析値は21.6%Cu - 20.9%Fe - 47.5%As(分析点16)、49.0%Pb - 9.8%Fe - 4.9%Cu - 28.6%As(分析点17)であった。前者は主に銅-鉄系、後者は鉛主体の砒化物であった。素地部分の定量分析値は71.7%Cu - 3.7%Fe - 20.6%S(分析点18)であった。鉄分を少量含むが白鍍(Cu_2S)に近い組成である。

(5) X線回折：写真31下段に示す。主要鋳物(化合物)はファヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)であった。

(6) 化学組成分析：第12表に示す。全鉄分(Total Fe)33.53%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.38%、酸化第1鉄(FeO)が31.47%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)12.42%の割合であった。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)の割合は53.80%と高い。このうち塩基性成分(CaO + MgO)3.08%

であった。また銅 (Cu) は 0.51%、錫 (Sn) 0.042%、鉛 (Pb) 0.37%、亜鉛 (Zn) 0.63% であった。さらに砒素 (As) 0.02%、アンチモン (Sb) 0.02%、硫黄 (S) 0.51% であった。

当鉍滓中には、微細な銅鉍 ($x\text{Cu}_2\text{S} \cdot y\text{FeS}$)、白鉍 (Cu_2S) および金属銅が確認された。銅製錬に伴う反応副生物と推定される。

3-3. 桑山遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物

No.11: 炉壁

(1) 外観観察：製鉄炉上側の炉壁破片 (59.8g) と推測される。内面表層はごく薄くガラス質化しているが、作業時の熱影響は小さい。炉壁粘土の色調は灰色～淡褐色で、砂粒および細かい植物質の混和物が多量に確認される。

(2) 顕微鏡組織：写真 32 ①～③に示す。炉壁内面を観察した。①の上側の表層部は、熱影響を受けてガラス質滓化している。これに対して①の下側はあまり熱影響がみられない。②は表層の被熱砂鉄 (含チタン鉄鉍) の拡大である。強い熱影響を受けて、分解・滓化が進んでいる。また③の微小白色部は金属鉄である。ほとんど炭素を含まないフェライト (Ferrite: α 鉄) 単相の組織であった。

(3) 化学組成分析：第 12 表に示す。外面側の炉壁胎土を供試材とした。強熱減量 (Ig loss) は 6.603% であった。熱影響が少なく、結晶構造水が比較的保たれている。軟化性成分の鉄分 (Total Fe) は 2.81% であった。また耐火性に有利なアルミナ (Al_2O_3) の割合は 17.76% であった。通常の粘土の範囲内 (約 15～18% 程度) である。

(4) 耐火度：第 12 表に示す。1,410℃であった。古墳時代後期の製鉄炉の炉壁としては、高い耐火性状である。

当炉壁内面表層には、被熱砂鉄 (含チタン鉄鉍) 粒子が確認された。これが製錬時に炉内に装入されたものであれば、砂鉄製錬に用いられた炉壁破片である。ただし、多数の砂鉄が溶着した状態ではなく、作業前から炉壁粘土内に含まれていた可能性も考えられる。

No.12: 炉壁

(1) 外観観察：強い熱影響を受けて内面が厚く黒色ガラス質化した、製鉄炉の炉壁破片 (158.8g) である。またガラス質滓表層には暗灰色の鉄滓が付着する。この鉄滓は着磁性が強く、磁鉄鉍 (マグネタイト) を含むものと推測される。また炉壁粘土の色調は淡褐色～淡橙色で、砂粒および細かい植物質の混和物が多量に確認される。

(2) 顕微鏡組織：写真 32 ④～⑥に示す。④の暗灰色部は炉壁内面が熔融したガラス質滓である。一方、滓中の灰褐色結晶はマグネタイト (Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) で、⑤⑥はその拡大である。さらに⑤左下の黄白色部は磁硫鉄鉍 (Pyrrhotite: Fe_{1-x}S) などの硫化物と推測される。製鉄炉内に装入された鉄鉍石 (塊鉍) が熱影響を受けて分解・滓化したものと推測される。

(3) 化学組成分析：第 12 表に示す。外面側の炉壁胎土を供試材とした。強熱減量 (Ig loss) 2.859% であった。強い熱影響を受けてかなり結晶構造水が飛散した状態である。軟化性成分の鉄分 (Total Fe) は 4.15% とやや高めであった。また耐火性に有利なアルミナ (Al_2O_3) の割合は 18.47% であった。通常の粘土の範囲内であるが、他の高尾北ヤシキ出土炉壁 (No.1)、桑山遺跡出土炉壁 (No.11) よりもわずかに高めであった。

(4) 耐火度：第12表に示す。1,435℃であった。古墳時代後期の製鉄炉の炉壁としては、高い耐火性状である。

当炉壁の内面表層には、広い範囲でマグネタイトが凝集していた。この特徴から、鉄鉱石（塊鉱：磁鉄鉱）の製錬に用いられた可能性が高いと考えられる。

No.13：鉄鉱石（塊鉱）

(1) 外観観察：小形の鉄鉱石の破片（15.8g）である。素地は黒灰色で着磁性が強く、磁鉄鉱と推定される。また磁鉄鉱以外に、白色・茶褐色の脈石鉱物も少量確認される。

(2) 顕微鏡組織：写真33①～③に示す。灰褐色部は磁鉄鉱（Magnetite： $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$ ）、暗灰色部は光を透過する脈石鉱物である。

(3) 化学組成分析：第12表に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は52.69%とやや低めであった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.04%、酸化第1鉄（FeO）が17.28%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）56.07%であった。製鉄原料とした場合の造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）は25.01%と高めである。このうち塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）の割合が10.23%と高く、特にライム（CaO）の高値傾向が著しい。また二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.02%、バナジウム（V）<0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）は0.84%と高め、銅（Cu）は<0.01%、硫黄（S）も<0.01%と低値であった。

当試料は鉄鉱石（塊鉱：磁鉄鉱）で、鉄分以外の脈石成分はライム（CaO）の割合が非常に高い。この特徴から、当遺跡にはスカルン鉱床で採取された鉄鉱石が搬入されたと推測される。

No.14 製錬滓（流動滓）

(1) 外観観察：ごく小形の製錬滓の破片（10.4g）である。ごく細い流動滓が3条並んだ状態で凝固している。製鉄炉の操業時、炉外に排出された滓と推定される。色調は黒灰色で、着磁性はほとんどない。破面の気孔は少なく緻密で、やや軽い質感の滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真33④～⑥に示す。滓中には、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(3) ビッカース断面硬度：写真33⑤の淡灰色柱状結晶の硬度を測定した。硬度値は635、688Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内で、ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：第12表に示す。全鉄分（Total Fe）40.48%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.03%、酸化第1鉄（FeO）が41.43%、酸化第2鉄（ Fe_2O_3 ）11.79%の割合であった。造滓成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）の割合は45.06%と高く、このうち塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）も6.13%と高めであった。また二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.44%、バナジウム（V）が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.25%、銅（Cu）は<0.01%と低値であった。

当鉄滓は鉄鉱石（塊鉱）起原の脈石成分（CaO、MgO）の割合が高く、鉄鉱石を原料とした砂鉄製錬滓と推定される。

No.15：製錬滓（炉内滓）

(1) 外観観察：やや大形で厚手の製錬滓の破片（141.2g）である。上面側には被熱した砂粒を含む黒色ガラス質滓が付着する。炉材粘土の溶融物と推測される。下面には淡褐色の炉床土が全面に付着する。これらの付着物から、炉壁内面表層に近い位置で生じた可能性が高いと考えられる。また滓

の色調は暗灰色で着磁性が強い。破面には上下方向に伸びる気孔が複数散在するが、緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真 34 ①～③に示す。滓中には淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡褐色片状結晶シュードブルッカイト (Pseudobrookite : $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$) が晶出する。高温下で生じた砂鉄製錬滓の晶癖といえる。また②下側の灰褐色粒は、熱影響を受けて外周部が分解・滓化しかけた砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子である。

(3) ビッカース断面硬度：写真 34 ②の被熱砂鉄の硬度値は 650 ～ 666Hv であった。マグネタイト (約 500 ～ 60Hv) よりも硬質で、含チタン鉄鉱と判断される。さらに左上の淡褐色片状結晶の硬度値は 761Hv であった。被熱砂鉄よりもさらに硬質であり、チタニアの含有割合のより高いシュードブルッカイト (Pseudobrookite : $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$) と推測される。

さらに③の淡茶褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 601、631Hv であった。ウルボスピネル (Ulvöspinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) と推定される。

(4) 化学組成分析：第 12 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 32.09% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.27%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 31.26%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 10.75% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 27.25% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 2.65% であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 23.15%、バナジウム (V) が 0.37% と高値であった。酸化マンガン (MnO) も 1.26% と高値である。銅 (Cu) は < 0.01% と低値であった。

当鉄滓は砂鉄製錬滓と推定される。チタニア (TiO_2) の含有割合が非常に高く、滓中には被熱砂鉄 (含チタン鉄鉱) 粒子も確認された。

No. 16 : 椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：ごく小形の椀形鍛冶滓の破片 (24.0g) と推定される。表面には薄く黄褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄が付着する。金属探知器反応はなく、まとまった鉄部はみられない。滓の色調は暗灰色で着磁性は強い。気孔は少なく緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真 34 ④～⑥に示す。淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネル、またはマグネタイトとの中間組成のチタン磁鉄鉱と推測される。さらに暗灰色多角形結晶ヘルシナイト、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) ビッカース断面硬度：写真 34 ⑥の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は 396、408Hv であった。ウスタイトの文献硬度値よりもやや軟質である。しかし結晶の形状や色調の特徴からウスタイトと推測される。

(4) 化学組成分析：第 12 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 46.51% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.06%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 43.50%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 18.07% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 33.40% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 2.22% であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 1.11%、バナジウム (V) が 0.02% とやや高めであった。また酸化マンガン (MnO) は 0.10%、銅 (Cu) は < 0.01% と低値であった。

当鉄滓は始発 (製鉄) 原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) に起因する、チタニア (TiO_2) の影響が確認された。この特徴から、鍛冶原料 (製錬鉄塊系遺物) の不純物除去作業で副生した精錬鍛冶滓と判断される。

No. 17：鉄塊系遺物

(1) 外観観察：ごく小形でやや扁平な鉄塊系遺物 (14.2g) である。表面全体が茶褐色の錆化鉄で覆われており、錆化 (腐食) に伴う放射割れも生じている。表層には暗灰色の鉄滓が薄く付着するが、強い金属探知器があり鉄主体の遺物と推測される。

(2) マクロ・顕微鏡組織：写真 35 ①②に示す。①は試料断面全体像である。表層は錆化しているが、金属鉄が良好に残存する。内部には不定形の気孔が散在する。金属鉄部の素地はパーライトで、白色針状のセメンタイト (Cementite: Fe_3C) が析出する。さらに②のように蜂の巣状のレデブライト (Ledeburite) も部分的に確認された。炭素量の高い過共析 ($\text{C} > 0.77\%$) 組織～亜共晶組成白鑄鉄組織 ($\text{C} < 4.26\%$) の鉄塊であった。

(3) ビッカース断面硬度：写真 35 ②の金属鉄部の硬度を測定した。パーライト素地に針状セメンタイトが析出する箇所の硬度値は 398、406Hv、レデブライトの硬度値は 563Hv であった。全体に硬質で、組織に見合った値である。

(4) EPMA 調査：写真 35 ③に鉄中非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。中央の微小黄褐色粒は、特性 X 線像では硫黄 (S) に反応がある。定量分析値は 63.8%Fe - 34.6%S (分析点 19) であった。硫化鉄 (FeS) と推定される。その周囲の点状灰色部の定量分析値は 83.7%Fe - 9.9%P (分析点 20) であった。ステダイト (Steadite: $\text{Fe} - \text{Fe}_3\text{C} - \text{Fe}_3\text{P}$) と推定される。

さらに表層付着滓の組成も調査した。写真 35 ④に反射電子像 (COMP) を示す。淡灰色結晶は、特性 X 線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si) に反応がある。定量分析値は 60.4%FeO - 32.2% SiO_2 (分析点 21) であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) と推定される。また素地部分の定量分析値は 38.9% SiO_2 - 14.8% Al_2O_3 - 10.1%CaO - 5.1% K_2O - 24.6%FeO (分析点 22) であった。非晶質珪酸塩である。

当試料中には不定形の気孔が多数確認されることから、鍛打加工前の鉄塊 (鍛冶原料) と推定される。付着滓はファヤライト組成で、ウルボスピネルなどの鉄チタン酸化物がみられない。この特徴から、始発原料は鉄鉱石 (塊鉄) であった可能性が高いと考えられる。また金属鉄部はほぼ過共析組織の高炭素鋼で、部分的に鑄鉄組織も確認された。

No. 18：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：やや大形の椀形鍛冶滓 (83.7g) である。上面側には黒色ガラス質滓が広い範囲で確認される。ガラス質滓中には熱影響を受けた砂粒が混在しており、羽口先端の熔融物と推測される。また素地は暗灰色で着磁性のある鉄滓である。また下面表層は全面灰褐色の鍛冶炉床土が付着する。

(2) 顕微鏡組織：写真 35 ⑤⑥に示す。⑤の暗灰色部はガラス質滓である。また明灰色部は鍛冶滓で、⑥はその拡大である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(3) ビッカース断面硬度：写真 35 ⑥の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 403、433Hv であった。ウスタイトの文献硬度値よりもやや軟質であるが、形状や色調の特徴からウスタイトと推測される。また淡灰色結晶の硬度値は 561、678Hv であった。前者はファヤライトとしてはやや軟質であるが、形状や色調の特徴からファヤライトと推測される。

(4) 化学組成分析：第 12 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 39.15% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.02%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 41.46%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 9.870% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) の割合は 46.97% と高く、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 2.26%

であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（ TiO_2 ）は0.34%、バナジウム（V）が<0.01%と低値であった。また酸化マンガン（ MnO ）は0.12%、銅（Cu）も<0.01%と低値である。

当鉄滓は鍛錬鍛冶滓と推測される。製鉄原料起源の脈石成分〔鉄鉱石（塊鉄）：CaO、MgO、砂鉄（含チタン鉄鉱）： TiO_2 、V〕はいずれも微量であった。そのなかでも炉材粘土の溶融物（ SiO_2 主成分）の割合が高い滓であった。

4 まとめ

高尾北ヤシキ・桑山遺跡から出土した、古墳時代後期の遺物を調査した結果、2遺跡とも製鉄原料に鉄鉱石（塊鉄：磁鉄鉱）と砂鉄（含チタン鉄鉱）を用いていたことが明らかとなった。こうした鉄鉱石（塊鉄）と砂鉄の双方を製鉄原料に利用した例は複数あり、津山市周辺では美作市下坂遺跡が挙げられる（注6）。また2遺跡とも製鉄～鍛冶作業が連続して行われていたことも判明した。

さらに高尾北ヤシキ遺跡から出土した中世後期の銅滓は製錬滓と推定される。遺跡周辺で銅生産が行われたと考えられる。詳細は以下の通りである。

4-1. 高尾北ヤシキ遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物

（1）炉壁（No.1）の耐火度は<1,160℃であった。古墳時代後期の製鉄炉としても、耐火性の高い性状ではなかった。軟化性成分の鉄分（Total Fe：5.55%）の影響と考えられる。ただし、炉内面表層に錆化鉄が多数確認されている。化学分析および耐火度の試料は、外面側から採取したが、製錬時に生じた鉄分が内部に浸透して二次的に影響した可能性もある。

（2）鉄鉱石（No.2）は、磁鉄鉱で、鉄分以外にライム（CaO：1.96%）、マグネシア（MgO：3.22%）を含有する。スカルン鉄床で採取された鉄鉱石（塊鉄）と判断される。これは岡山県下の古墳時代後期～古代の製鉄遺跡で出土した鉄鉱石に広く共通する特徴といえる（注7）。

（3）鉄滓7点のうち3点（No.3～5）は製錬滓と推定される。このうちNo.3、5はファヤライト（Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）組成で、ライム、マグネシアの割合がやや高め（CaO：1.96%、1.50%、MgO：3.22%、2.41%）であった。この特徴から、鉄鉱石（塊鉄）を製錬した反応副生物と考えられる。これに対して、No.4はチタニアの割合が高め（ TiO_2 ：6.60%）で、製鉄原料は砂鉄と推定される。

（4）鉄滓2点（No.8、9）は精錬鍛冶滓と推定される。滓中には発達したウスタイト（Wustite：FeO）が晶出する。またライム、マグネシアの割合が高め（CaO：3.69%、2.75%、MgO：0.79%、0.59%）であった。鍛冶原料（製錬鉄塊系遺物）の不純物除去で生じた滓で、始発原料は鉄鉱石（塊鉄）と考えられる。鉄滓2点（No.6、7）は鍛錬鍛冶滓と推定される。このうち製鉄原料起源の脈石成分〔鉄鉱石（塊鉄）：CaO、MgO、砂鉄（含チタン鉄鉱）： TiO_2 、V〕はいずれも微量であった。またNo.7中には、微細な金属鉄が多数確認された。

4-2. 高尾北ヤシキ遺跡出土銅滓

銅滓（No.10）は銅製錬滓であった。ファヤライト（Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）組成で、内部微細な銅鉞（ $\text{Cu}_2\text{S} \cdot \text{FeS}$ ）、白鉞（ Cu_2S ）および金属銅が確認された。銅鉞石〔黄銅鉞（Chalcopyrite： CuFeS_2 ）〕を酸化製錬した反応副生物である。また銅鉞・白鉞中には、鉛（Pb）、砒素（As）、ビスマス（Bi）などが検出された。

4-3. 桑山遺跡出土製鉄～鍛冶関連遺物

(1) 炉壁2点 (No. 11, 12) は、ともに耐火性の高い性状であった。耐火度は1,410、1,435°Cであった。また炉壁内面表層部を顕微鏡観察した結果、No. 11 に被熱砂鉄 (含チタン鉄鉱)、No. 12 にはマグネタイト (Magnetite : $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) が確認された。これらが製鉄炉内に装入された原料によるものであれば、No. 11 は砂鉄、No. 12 は鉄鉱石 (塊鉄 : 磁鉄鉱) 製錬に用いられた可能性が考えられる。

(2) 鉄鉱石 (No. 13) は磁鉄鉱で、鉄分以外にライムの含有割合が非常に高い (CaO : 10.17%) ことが確認された。スカルン鉄床で採取された鉄鉱石と判断される。

(3) 鉄滓4点のうち2点 (No. 14, 15) は製錬滓であった。このうちNo. 14 はライム、マグネシア (CaO : 3.06%、 MgO : 3.07%) の割合が高く、製鉄原料は鉄鉱石 (塊鉄 : 磁鉄鉱) と推定される。これに対して、No. 15 はチタニアの割合が非常に高く (TiO_2 : 23.15%)、製鉄原料は火山岩起原の砂鉄と推定される。

(4) 鉄滓1点 (No. 16) は精錬鍛冶滓と推定される。滓中には砂鉄 (含チタン鉄鉱) に起因するチタニアの影響が確認された (TiO_2 : 1.11%)。また1点 (No. 18) は鍛錬鍛冶滓と推定される。製鉄原料起原の脈石成分 [鉄鉱石 (塊鉄) : CaO 、 MgO 、砂鉄 (含チタン鉄鉱) : TiO_2 、V] はいずれも微量で、炉材粘土の溶融物の割合が高い滓であった。

(5) 鉄塊系遺物 (No. 17) は、鍛打加工前の鉄塊 (鍛冶原料) と推定される。付着滓はファイヤライト組成で、ウルボスピネルなどの鉄チタン酸化物がみられない。この特徴から、始発原料は鉄鉱石 (塊鉄) であった可能性が高いと考えられる。また金属鉄部はほぼ過共析組織の高炭素鋼で、部分的に鑄鉄組織も確認された。

(注)

(1) スカルン (skarn) とは、石灰岩や苦灰岩などの炭酸塩岩中に、花崗岩などのマグマが貫入した際、その接触部付近にできる鉱物の集合体 (接触変成岩の一種) である。マグマから珪酸や鉄などが、石灰岩や苦灰岩の方に移動しカルシウムやマグネシウムと反応して、カルシウム、鉄、マグネシウムなどに富む珪酸塩鉱物 (スカルン鉱物) ができる。

(2) 日刊工業新聞社 1968『焼結鉄組織写真および識別法』

ウスタイトは約450～500Hv、マグネタイトは約500～600Hv、ファイヤライトは約600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネル (Ulvöspinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) の硬度値範囲の明記はないが、マグネタイト (Magnetite : $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) と同じスピネル類の化合物で、チタニアを固溶するためマグネタイトよりも硬質である。ウルボスピネル組成であれば通常600Hv以上の値を示す。ヘルシナイト (Hercynite : $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) はさらに硬質で1000Hvを超える。

(3) 木下亀城・小川留太郎 1995『岩石鉱物』保育社

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略) チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。

チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略) このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。

(4) 伊藤尚 1983『金属通論』実教出版株式会社

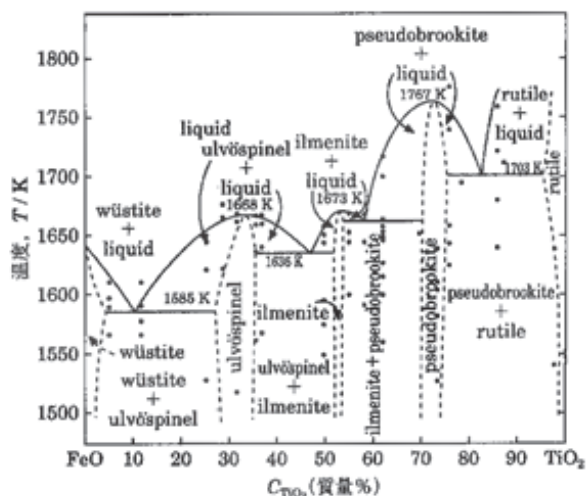
銅製錬中途の硫化銅と硫化鉄の混合物 ($x\text{Cu}_2\text{S}\cdot y\text{FeS}$) をマツト (鉞) と呼ぶ。できた鉞はさらに酸化製錬され、まず FeS が除去される。次に残った白鉞 (Cu₂S) が酸化されると銅 (Cu) から硫黄 (S) がとり除かれて金属銅が得られる。

(5) J. B. Mac chesney and A. Murau, 1961. American Mineralogist 46, 572.

[イルメナイト (Ilmenite : $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$)、シュードブルックタイト (Pseudobrookite : $\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{TiO}_2$) の晶出は $\text{FeO} - \text{TiO}_2$ 二元平衡状態図から高温化操業が推定される。]

(6) 岡山県教育委員会 2008『大河内遺跡 稲穂遺跡 下坂遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 216

(7) 鈴木瑞穂 2016「韓・日の製鉄技術分析結果の比較研究」『古代製鉄技術研究における融・複合研究の現状と課題』国立中原文化財研究所〔韓国〕



第 259 図 FeO-TiO₂ 二元平衡状態図

第 11 表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	地区	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器 反応	調査項目						備考
						大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ 組織	顕微鏡 組織	ピッカース 断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	
1	高尾北ヤシキ	3区	包含層1 北半	炉壁	古墳時代 後期	77 × 64 × 42	121.0	錆化 (Δ)		○			○	○	第 210 図-C 10
2			堅穴住居 10 南側 (第 1 層)	鉄鉱石		80 × 65 × 48	499.1	なし		○			○		第 50 図-S 27
3			包含層1 南半	製錬滓 (流動滓)		41 × 47 × 19	47.8	なし		○	○		○		第 212 図-M 89
4			段状遺構 10	製錬滓 (炉内滓)		49 × 39 × 31	58.7	なし		○	○		○		第 74 図-M 12
5			段状遺構 15	製錬滓		77 × 59 × 51	195.8	なし		○	○		○		第 77 図-M 15
6			土坑5	鍛冶滓 (含鉄)		59 × 54 × 41	139.3	なし		○	○		○		第 86 図-M 17
7			包含層1 北側サツレ	鍛冶滓 (含鉄)		43 × 26 × 14	33.0	L (●)	○	○	○		○		第 212 図-M 94
8			包含層1 北半	椀形鍛冶滓		45 × 38 × 20	52.0	なし		○	○		○		第 212 図-M 92
9			包含層1 南半	椀形鍛冶滓		57 × 46 × 20	73.6	なし		○	○		○		第 212 図-M 91
10			包含層1 北半	銅滓		室町時代 ごろ	47 × 39 × 14	45.6	なし	○	○	○	○	○	
11	桑山	西区	2号墳 周溝内	炉壁	古墳時代 後期	60 × 35 × 38	59.8	なし		○			○	○	※1
12			2号墳 周溝付近	炉壁		80 × 69 × 31	158.8	なし		○			○	○	
13		南西区	3号墳 流土	鉄鉱石		24 × 19 × 15	15.8	なし		○			○		
14			4号墳 周溝	製錬滓 (流動滓)		33 × 22 × 8	10.4	なし		○	○		○		
15		3区	段状遺構4	製錬滓 (炉内滓)		59 × 34 × 44	141.2	なし		○	○		○		
16		南西区	4号墳 周溝	椀形鍛冶滓		42 × 28 × 17	24.0	なし		○	○		○		
17		北西区	4号墳 周溝埋土	鉄塊系遺物		30 × 23 × 16	14.2	L (●)	○	○	○		○		
18			4号墳 周溝埋土	椀形鍛冶滓		53 × 54 × 31	83.7	なし		○	○		○		

※1 岡山県教育委員会 2023『勝負峠遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 262

第12表 供試材の化学組成

(1) 鉄滓

符号	遺跡名	地区	遺構名	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	二酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	バナジウム (V)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	銅 (Cu)	砒素 (As)	造滓成分	
2	高尾北ヤンキ	3区	竪穴住居10南側(第1層)	鉄鉱石	古墳時代後期	64.63	0.39	23.85	65.34	5.49	0.53	2.93	0.19	<0.01	<0.01	1.08	<0.01	0.08	<0.01	0.04	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	9.14
3			包含層1 南半	製錬滓(流動滓)		45.20	0.32	51.24	7.222	27.54	6.25	1.96	3.22	0.90	0.11	0.40	0.35	0.09	0.02	0.25	<0.01	0.02	<0.01	<0.01	39.98	
4			段状遺構10	製錬滓(炉内滓)		39.09	0.28	41.86	8.968	26.73	6.58	2.62	1.17	0.98	0.46	1.00	6.60	0.06	0.03	0.46	0.12	<0.01	<0.01	<0.01	38.54	
5			段状遺構15	製錬滓		37.36	0.18	38.06	10.86	32.38	9.30	1.50	2.41	0.72	0.19	0.27	0.47	0.05	0.02	0.20	<0.01	<0.01	0.01	<0.01	46.50	
6			土坑5	鍛冶滓(含鉄)		58.27	0.05	38.70	40.23	10.95	3.11	0.86	0.33	0.10	0.02	0.19	0.11	0.03	0.04	0.15	<0.01	<0.01	0.04	<0.01	15.37	
8			包含層1 北半	焼形鍛冶滓		50.25	0.09	50.90	15.15	20.83	5.10	3.69	0.79	0.83	0.11	0.81	0.21	0.03	0.02	0.18	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	31.35	
9			包含層1 南半	焼形鍛冶滓		54.17	0.05	56.77	14.29	18.24	3.87	2.75	0.59	0.63	0.08	0.31	0.19	0.02	0.02	0.28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	26.16	
13	桑山	南西区	3号墳 流土	鉄鉱石	古墳時代後期	52.69	0.04	17.28	56.07	14.18	0.60	10.17	0.06	<0.01	<0.01	0.84	0.02	0.03	<0.01	0.03	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	25.01	
14			4号墳 周溝	製錬滓(流動滓)		40.48	0.03	41.43	11.79	30.70	7.02	3.06	3.07	1.11	0.10	0.25	0.44	0.04	0.05	0.23	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	45.06	
15		3区	段状遺構4	製錬滓(炉内滓)		32.09	0.27	31.26	10.75	18.67	4.83	1.81	0.84	0.96	0.14	1.26	23.15	0.06	0.08	0.16	0.37	0.03	<0.01	<0.01	27.25	
16		南西区	4号墳 周溝	焼形鍛冶滓		46.51	0.06	43.50	18.07	24.36	6.29	1.68	0.54	0.49	0.04	0.10	1.11	0.02	0.04	0.21	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	33.40	
18		北西区	4号墳 周溝埋土	焼形鍛冶滓		39.15	0.02	41.46	9.870	34.37	8.18	1.61	0.65	1.87	0.29	0.12	0.34	0.02	0.03	0.19	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	46.97	

(2) 銅滓

符号	遺跡名	地区	遺構名	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	二酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	バナジウム (V)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	銅 (Cu)	錫 (Sn)	鉛 (Pb)	亜鉛 (Zn)	銀 (Ag)	砒素 (As)	アンチモン (Sb)	造滓成分
10	高尾北ヤンキ	3区	包含層1 北半	銅滓	室町時代ごろ	33.53	0.38	31.47	12.42	40.27	9.86	0.82	2.26	0.50	0.09	0.63	0.52	0.14	0.51	0.46	0.02	<0.01	0.51	0.042	0.37	0.63	0.001	0.02	0.02	53.80

(3) 炉壁

符号	遺跡名	地区	遺構名	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	二酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	強熱減量 (loss)	バナジウム (V)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	銅 (Cu)	耐火度 (°C)	造滓成分
1	高尾北ヤンキ	3区	包含層1 北半	炉壁	古墳時代後期	5.55	0.24	1.43	6.003	65.35	17.64	0.47	0.63	2.07	0.77	0.10	0.62	0.12	0.02	0.12	1.960	<0.01	<0.01	<0.01	1160	86.93
11	桑山	西区	2号墳 周溝内	炉壁	古墳時代後期	2.81	0.10	1.59	2.108	63.21	17.76	0.18	0.26	1.11	0.11	0.02	1.14	0.05	0.14	0.03	6.603	<0.01	<0.01	<0.01	1410	82.63
12			2号墳 周溝付近	炉壁		4.15	0.18	1.18	4.365	66.73	18.47	0.15	0.34	1.13	0.06	0.02	1.15	0.11	0.01	0.03	2.859	<0.01	<0.01	<0.01	1435	86.88

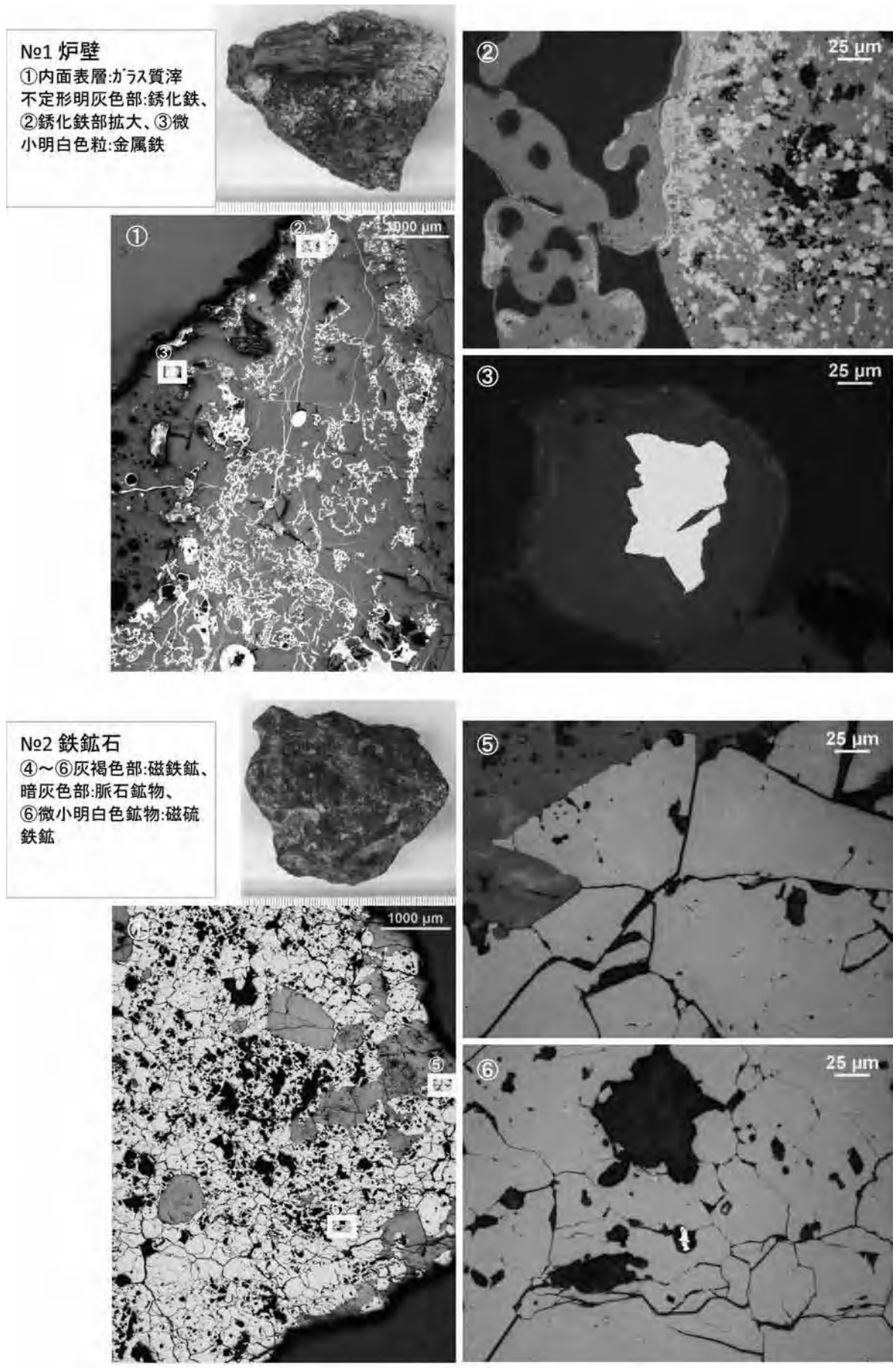


写真 25 炉壁・鉄鉱石の顕微鏡組織

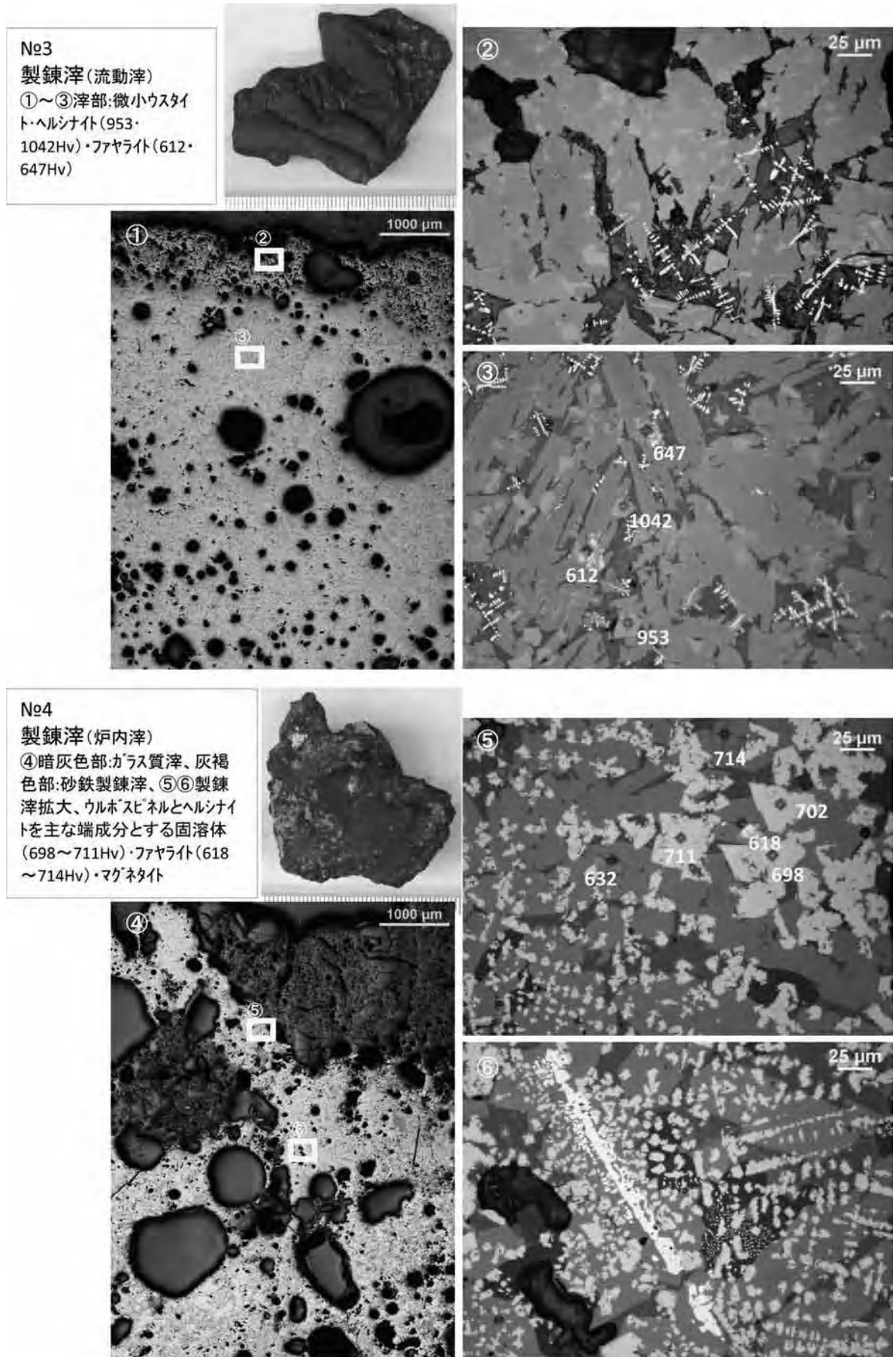


写真 26 製錬滓の顕微鏡組織

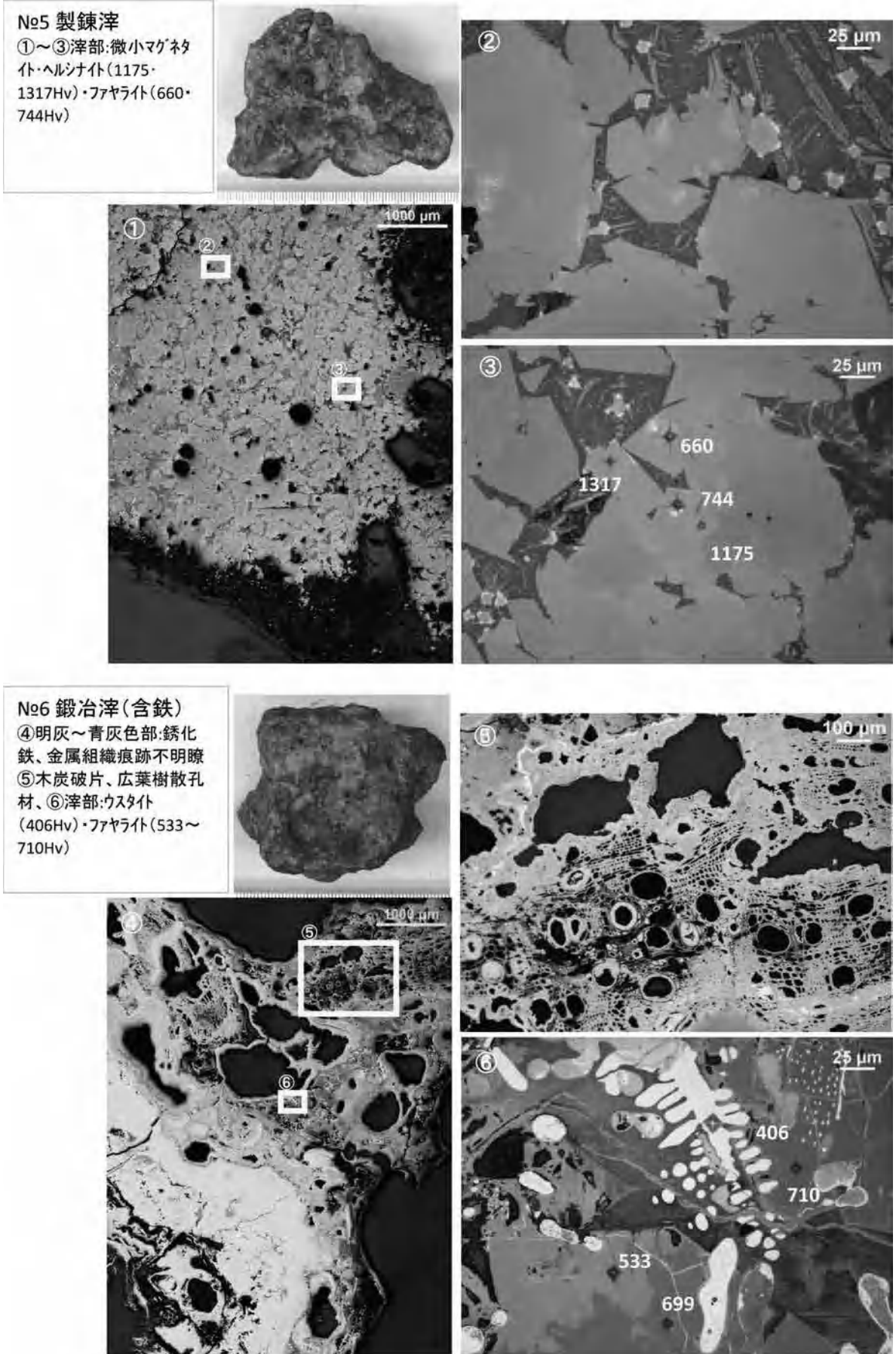


写真 27 製錬滓・鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

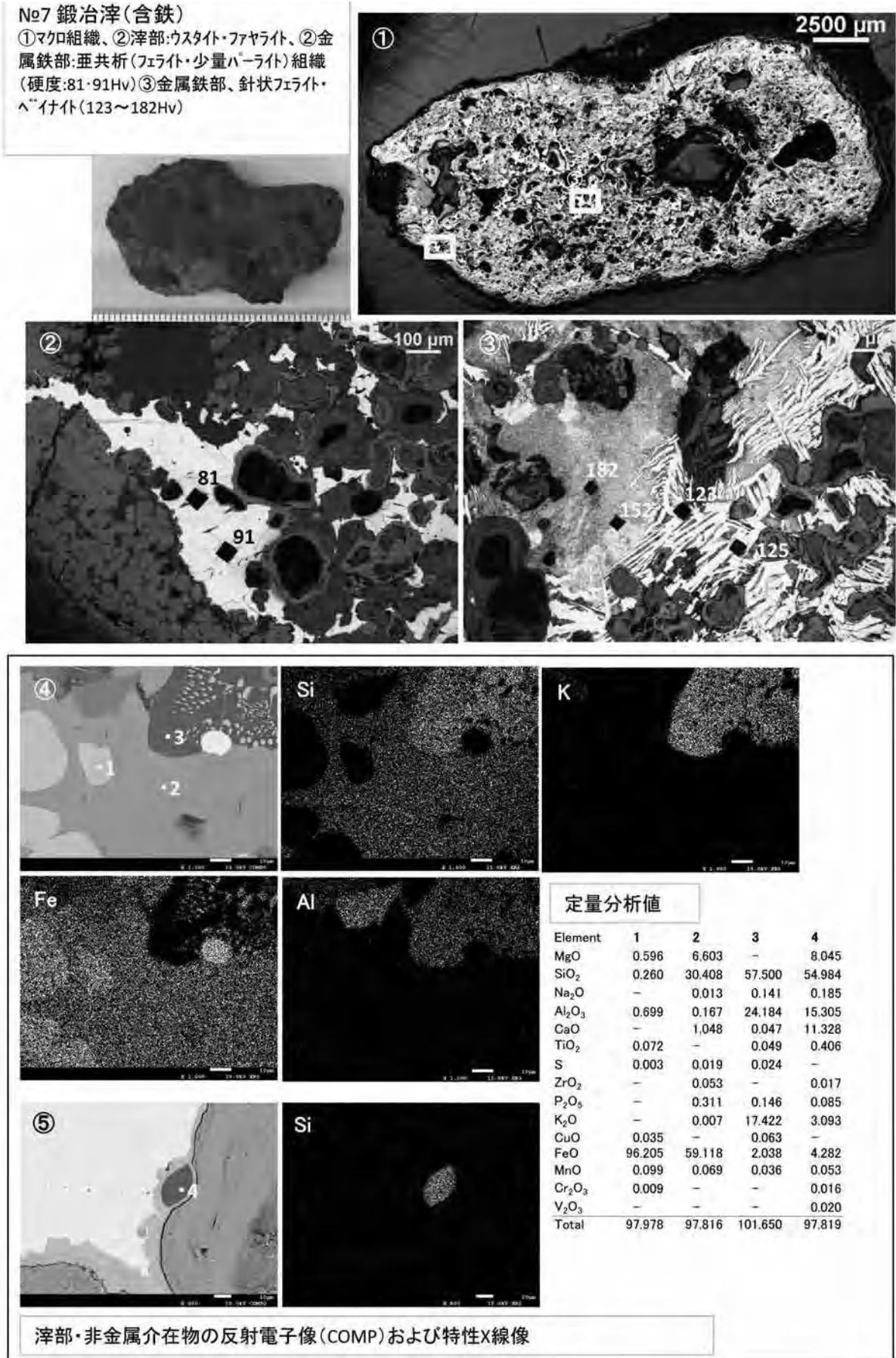


写真 28 鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織・EPMA調査

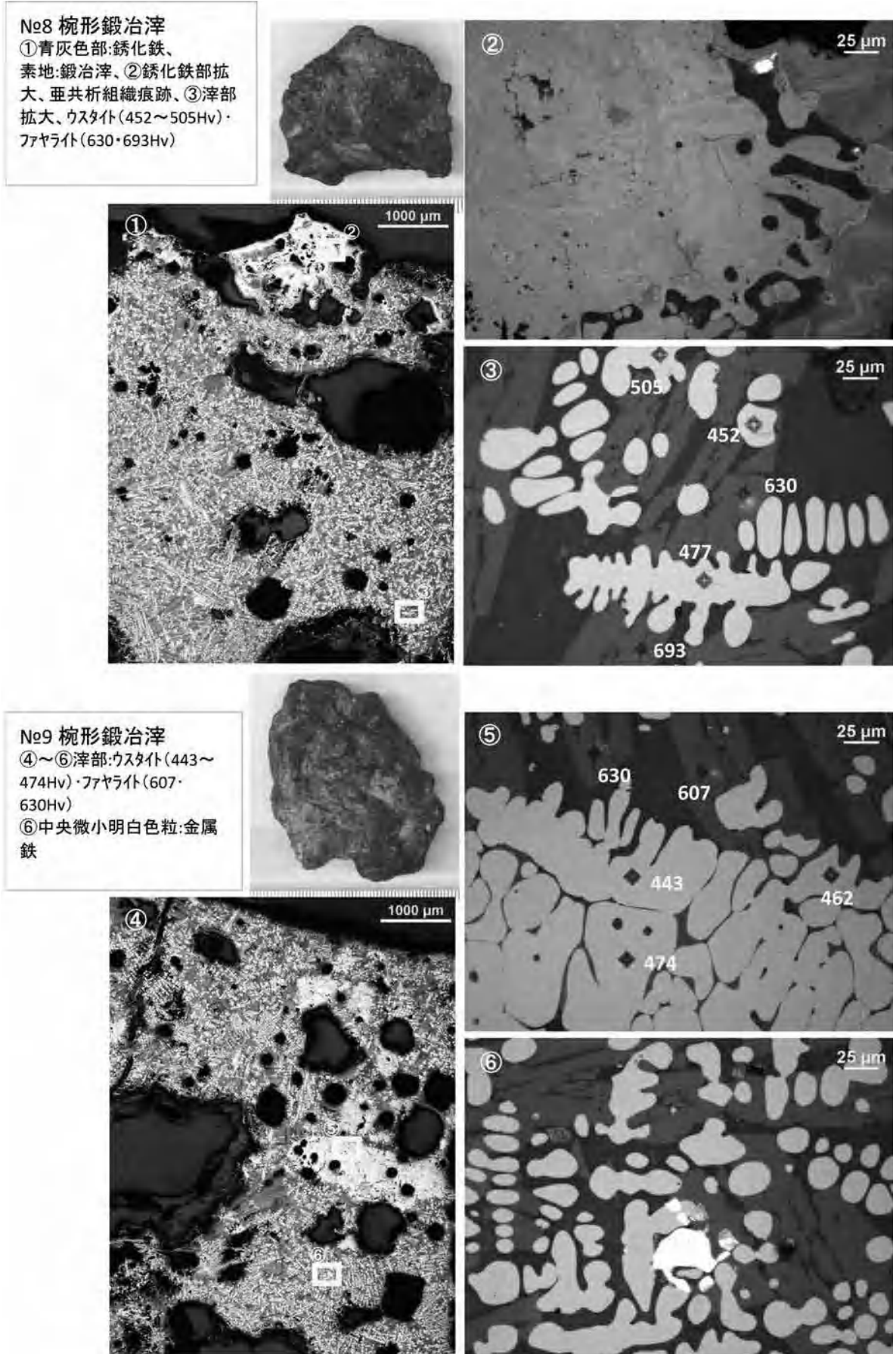


写真 29 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

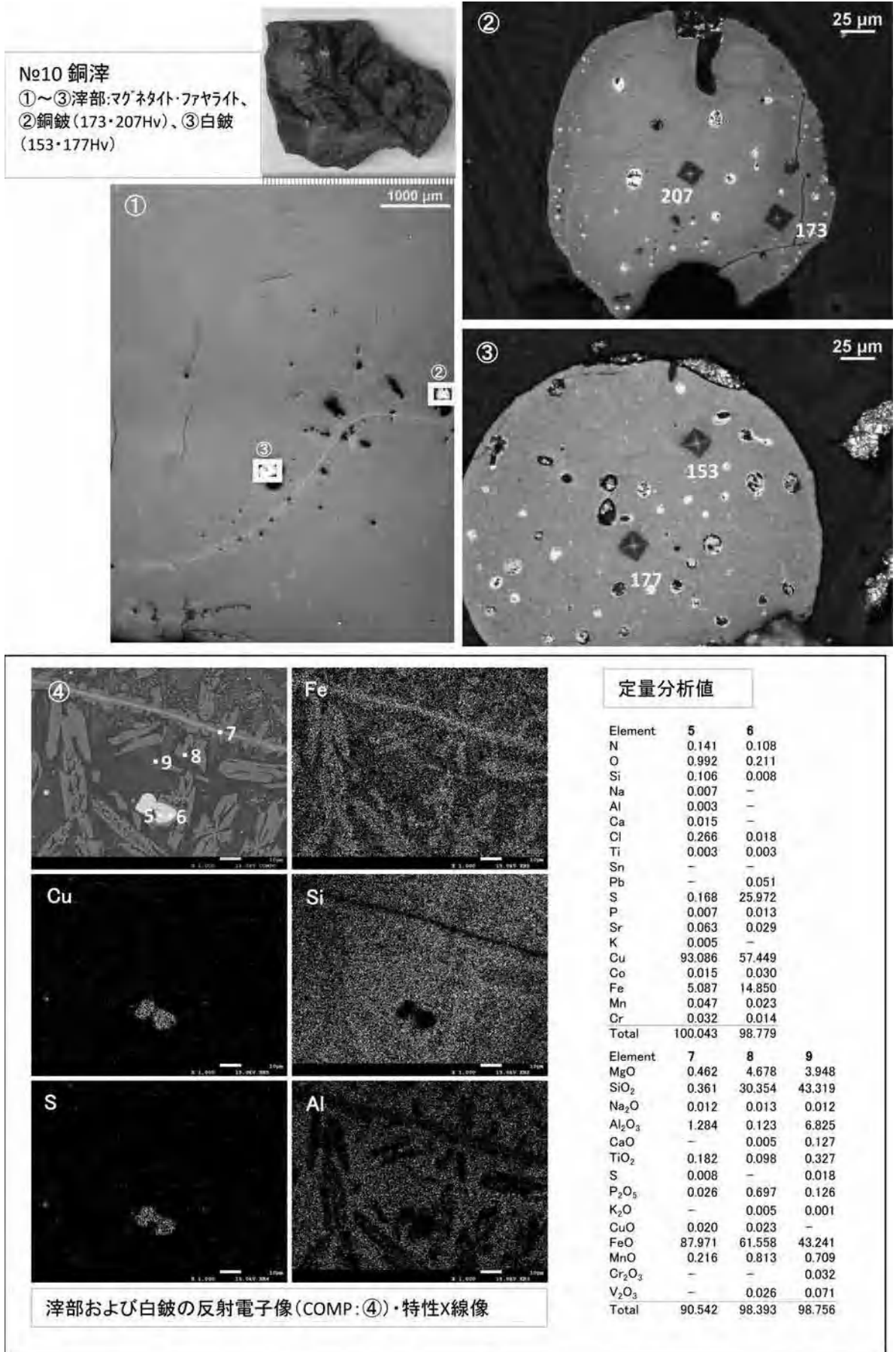


写真 30 銅滓の顕微鏡組織・EPMA調査

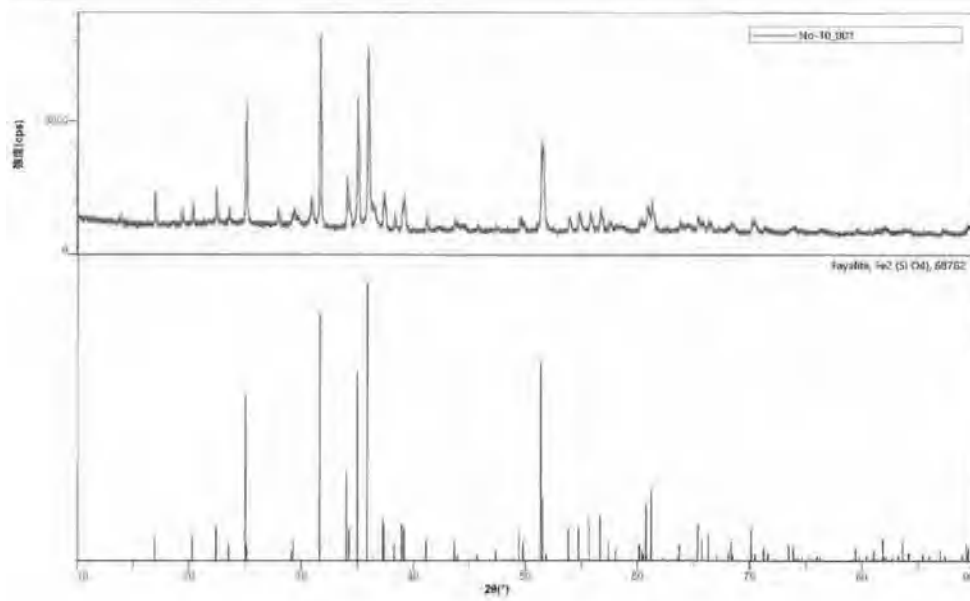
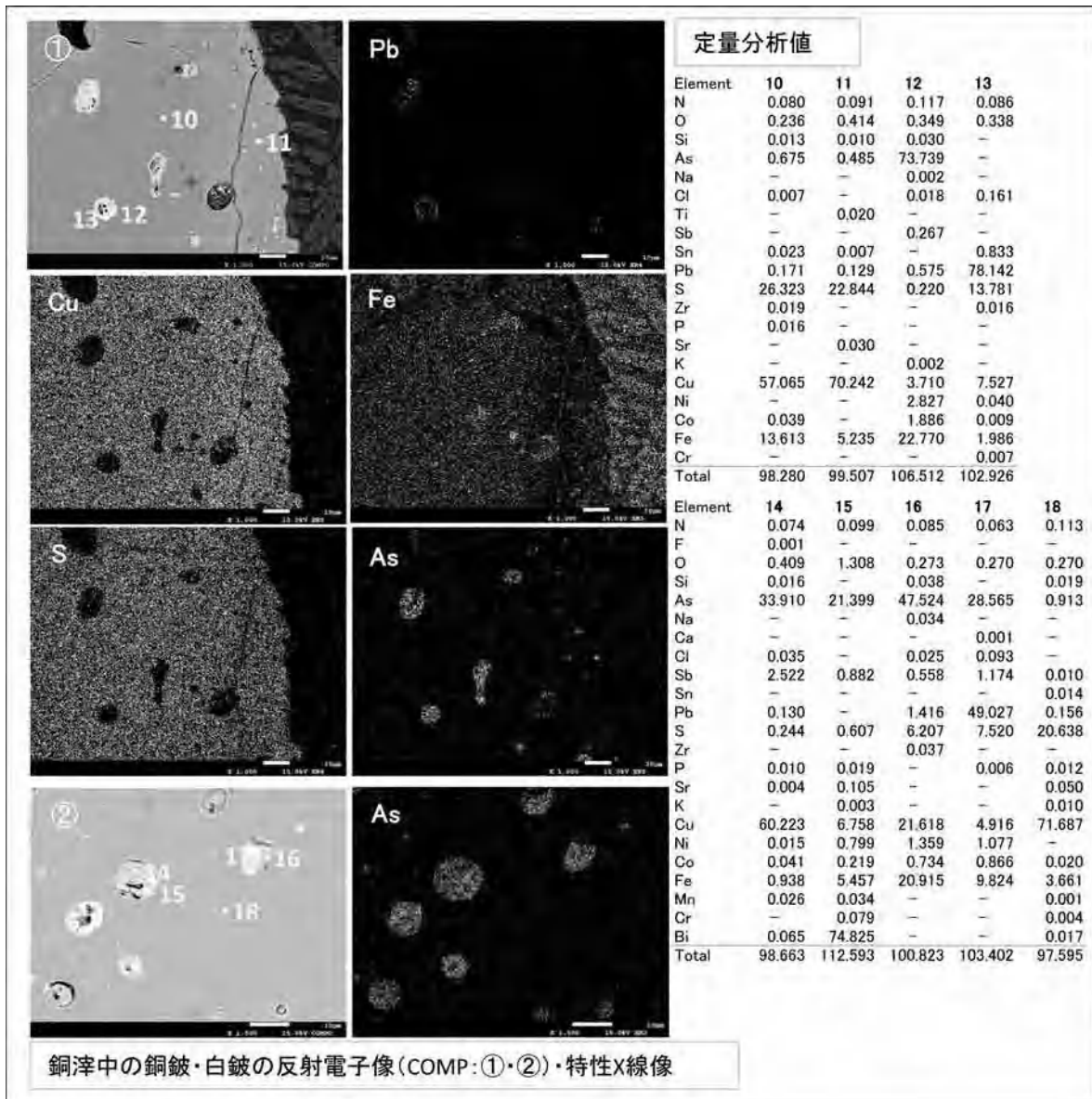
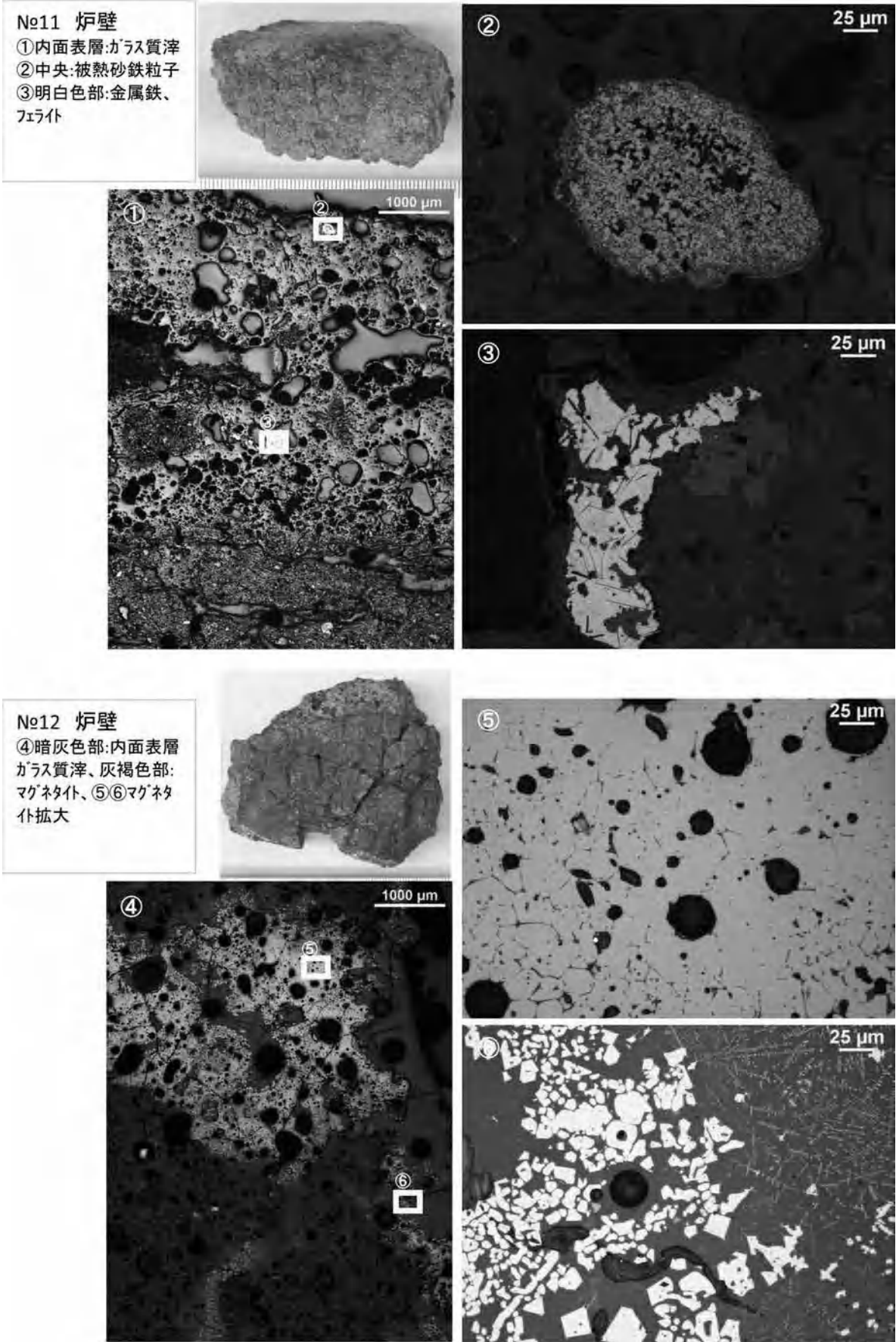


写真 31 銅滓の EPMA 調査・X線回析測定



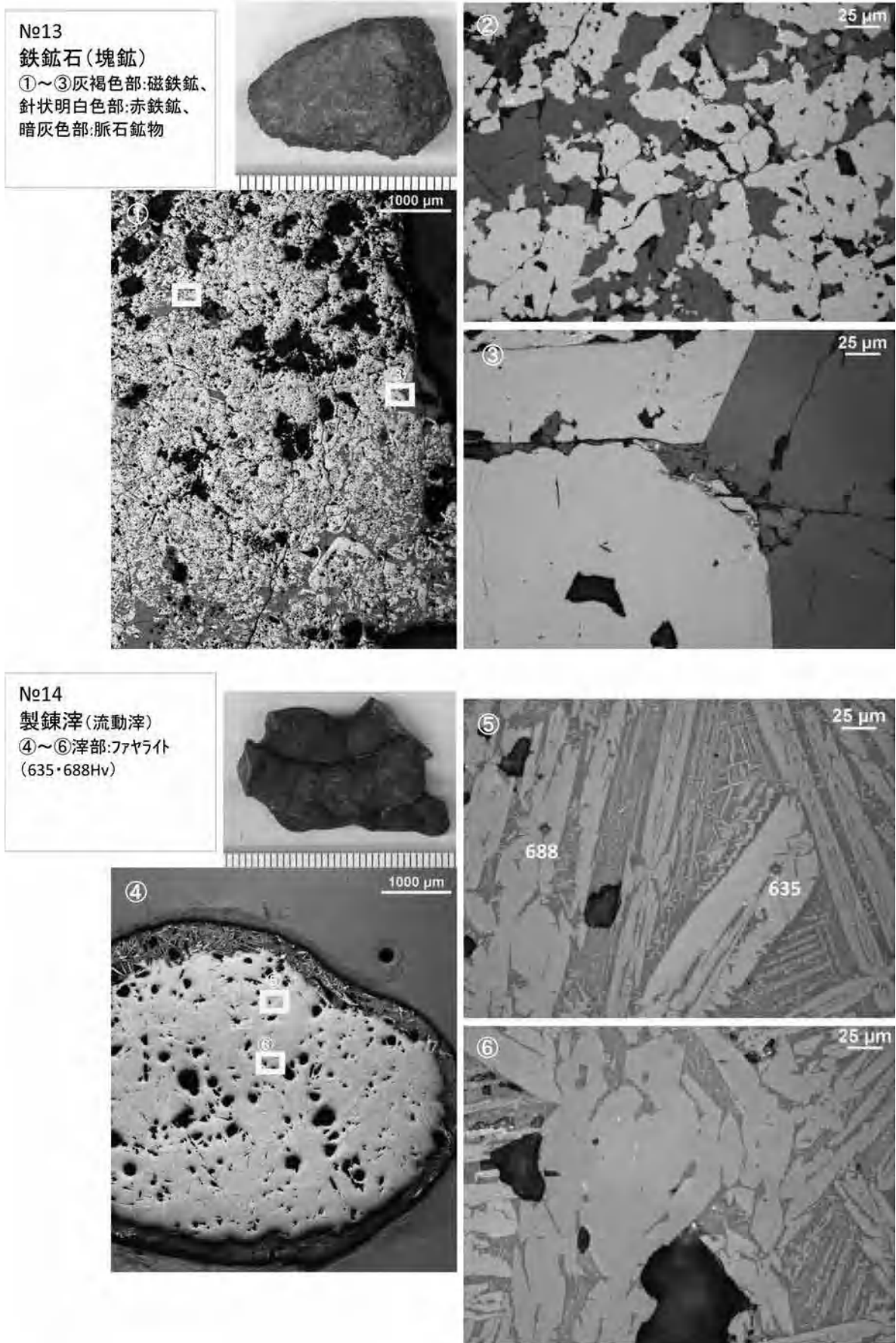


写真 33 鉄鉱石・製鍊滓の顕微鏡組織

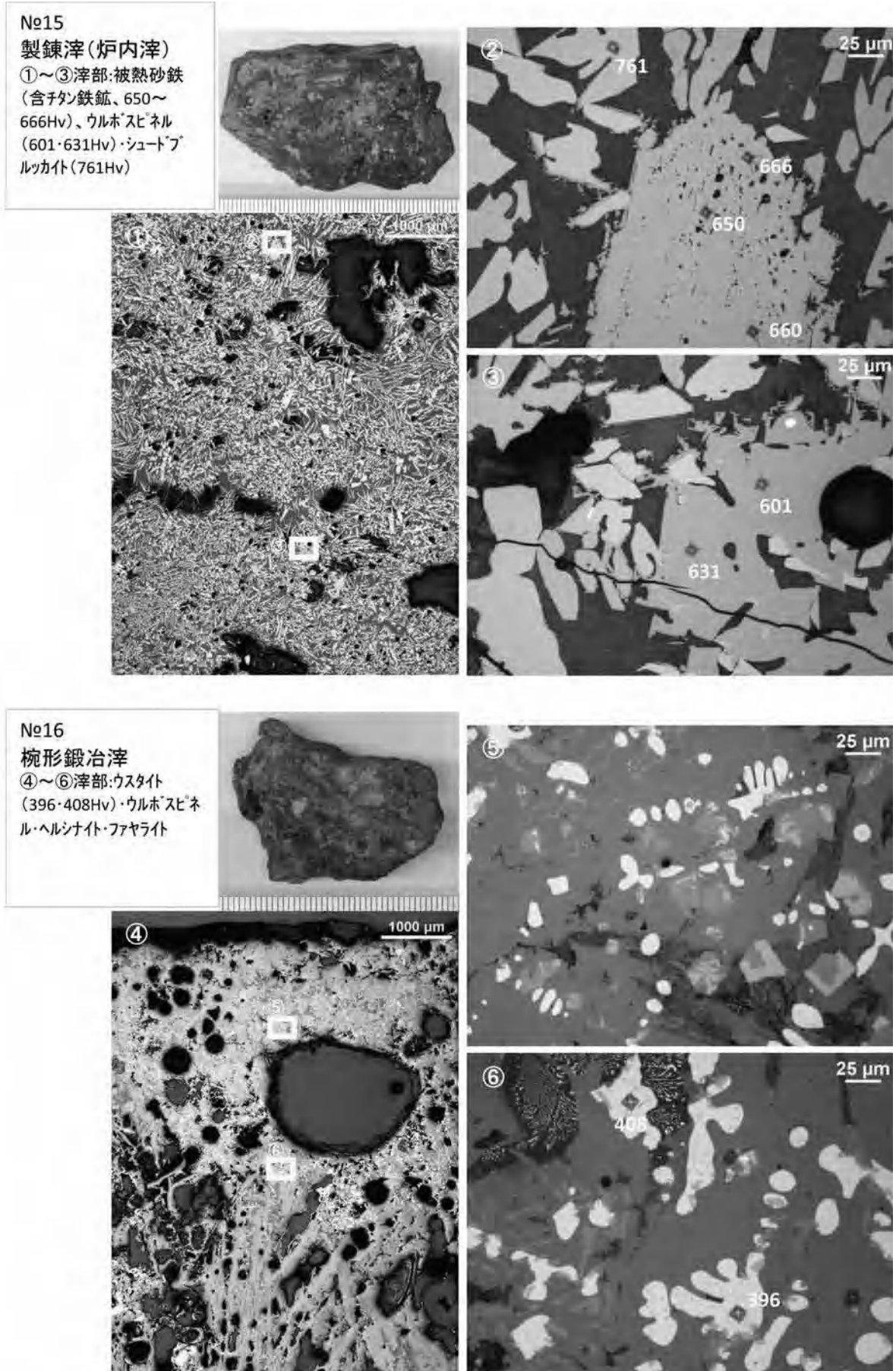
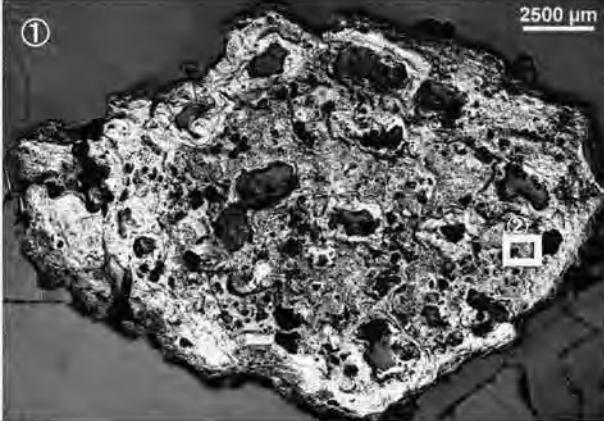
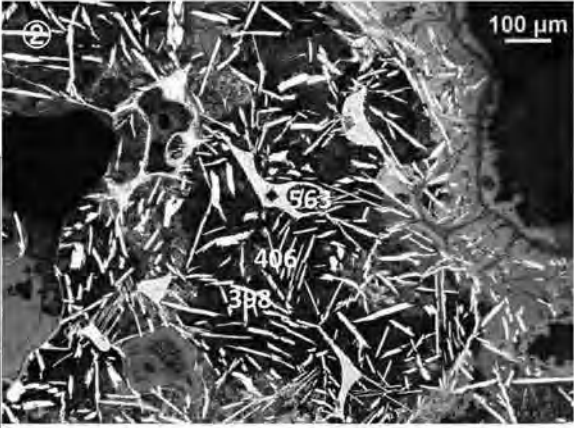
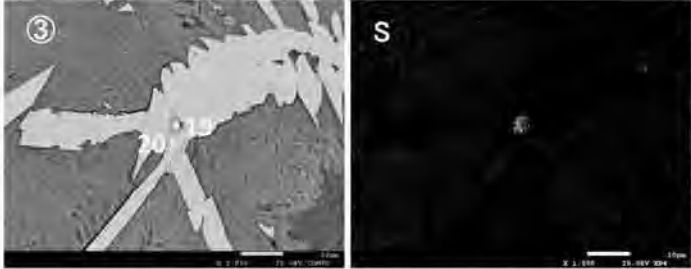
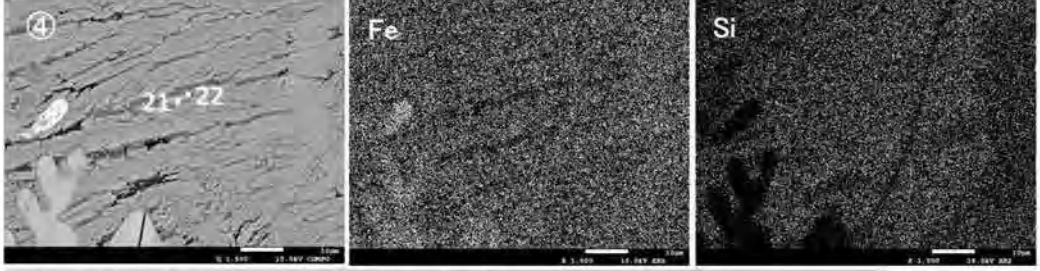


写真 34 製錬滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

No17 鉄塊系遺物
 ①マクロ組織、②金属鉄部:過共析組織(398・406Hv)～亜共晶組成白鑄鉄組織(563Hv)

Element	19	20	定量分析値		
N	0.109	0.105			
O	0.640	1.494			
Si	-	0.013			
As	0.038	0.038	Element	21	22
Na	0.001	-	MgO	0.353	-
Mg	0.020	-	SiO ₂	32.180	38.857
Cl	0.008	0.013	Na ₂ O	0.069	0.252
Ti	0.018	-	Al ₂ O ₃	4.687	14.794
Sb	0.010	-	CaO	2.856	10.101
Sn	-	0.034	TiO ₂	0.696	0.698
Pb	0.115	-	S	0.019	0.175
S	34.608	0.869	ZrO ₂	0.058	0.003
Zr	-	0.075	P ₂ O ₅	0.569	1.486
P	0.072	9.926	K ₂ O	1.475	5.083
Cu	0.453	0.051	FeO	60.380	24.563
Ni	0.039	0.142	MnO	0.172	0.057
Co	0.146	0.202	Cr ₂ O ₃	0.031	0.030
Fe	63.830	83.691	V ₂ O ₅	0.022	0.037
Mn	0.013	-			
Cr	0.006	0.012			
Total	100.126	96.665	Total	103.567	96.136

鉄中非金属介在物・付着滓の反射電子像(COMP:③④)・特性X線像

No18 椀形鍛冶滓
 ⑤灰色部:ガラス質滓、⑤⑥滓部:ウスタイト(403・443Hv)・ﾌﾞﾗｲﾄ(561・678Hv)


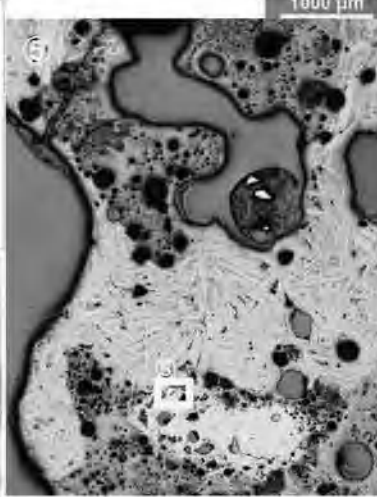
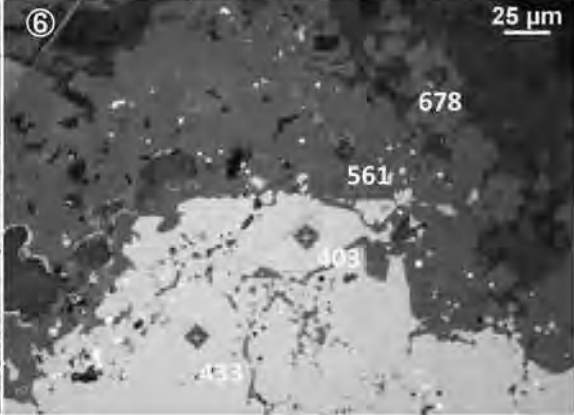




写真 35 鉄塊系遺物の顕微鏡組織・EPMA調査・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

第7節 高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像について

大阪市立美術館 内藤 栄

1 制作年代

鏡像の作例は平安時代中期（10世紀後半）より確認できる。初期の作品は実際の鏡にタガネで尊像を線刻しており、図像は曼荼羅などの密教像や修験道の蔵王権現像が多く見られる。平安時代後期（12世紀）より鏡に擬した銅板を用いることが増え、表される尊像は仏教像にあわせて神像も多く見られるようになった。この頃より、上部の縁二箇所吊金具を有する例が現われる。また、平安時代後期より半肉状の尊像を銅板などで作り、鏡板に添付する例も登場した。この形式の作品を懸仏と呼んで区別している。平安時代後期は線刻像（鏡像）と半肉像（懸仏）が共存する期間があったようであるが、鎌倉時代以降は懸仏が主流となる。鎌倉時代には丸彫りに近い尊像を銅板に添付する懸仏も現れ、大型化が顕著となる。室町時代に入ると、木板に銅板を貼り付けた鏡板に稚拙な作風の尊像を貼る懸仏が顕著となる。

高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像は、鏡に擬した銅板に尊像をタガネで線刻している。縁はやや厚く作られ、両肩に吊金具を有する（右方は欠失）。縁、吊金具を含め、全体を一回で鑄造している。線刻は細部を省略した簡略化された表現で、彫りはきわめて浅い。裏面は特に造作はない。

縁、吊金具、鏡面を一回で鑄造した鏡像で、本鏡像と比較的形狀の近いものに、嘉禄三年（1227）銘の十一面観音鏡像（東京国立博物館所蔵）【写真36】がある。また、鏡に擬した銅板に簡略化された尊像を線刻した例は平安時代後期に多く見られる。以上より、本鏡像の製作時期は平安時代後期（12世紀）から鎌倉時代初期（13世紀）に推定することができる。

2 尊像表現

蓮華座に坐した菩薩像を斜めから描いている。右手は立てた剣を握り、左手は肩あたりに挙げて横長の薄いものを持つ。頭光と身光を円弧で表現しているが、火焰とおぼしき線刻が認められる。

二臂の菩薩で、右手に剣を持つ像に文殊菩薩と虚空蔵菩薩がある。虚空蔵菩薩像は左手で蓮枝を持ち、その上に宝珠をのせる例が一般的である。一方、文殊菩薩は左手で経典を載せた蓮枝を持つものと、直接経典を載せる例がある。本鏡像の尊像は左手に横長の薄い品を載せるが、持物として可能性が高いのは経巻か折本装の経典であろう。したがって、本像の図像は右手に剣を執り、左手に直接経典を持つ文殊菩薩がふさわしいように思われる。

3 考察

左手に経典を執る文殊菩薩は一般的ではなく、奈良・春日大社の若宮の本地仏である文殊菩薩像に用いられることが多い。春日大社は本殿の四社に若宮を加えた五社があり、五社の神にそれぞれ本地仏が当てられている。若宮は文殊菩薩を本地とするのが一般的であるが、その姿は左手を肩の高さに挙げ、経巻もしくは折本装の経典を持つ姿で表されることが多い（経典を載せる蓮枝を持つ姿で表し

た例もある)。しかも、若宮本地仏は文殊菩薩の特徴である獅子座に坐らず、蓮華座に坐す、もしくは立つ例が多い。本鏡像の尊像に獅子座が表されていないことも、若宮本地仏の文殊菩薩像と考えれば矛盾がない。

左手に経典を持つ若宮本地仏の文殊菩薩像の例に下記の作例がある。

- ・文殊菩薩立像（東京国立博物館所蔵、鎌倉時代前期、13世紀前半）【写真37】
- ・文殊菩薩鏡像（個人蔵、旧若宮社神主家の千鳥家の庭にある、祠の地面より出土。鎌倉時代、13世紀）
- ・春日本地仏曼荼羅（東京国立博物館所蔵、鎌倉時代、13～14世紀）【写真38】
- ・春日鹿曼荼羅（奈良国立博物館所蔵、鎌倉時代、13世紀）【写真39】
- ・五尊懸仏（奈良国立博物館所蔵、鎌倉時代、13～14世紀）【写真40】



写真36 十一面観音鏡像 表・裏
(東京国立博物館、嘉禄3(1227)年)



写真37 文殊菩薩立像
(東京国立博物館、
鎌倉時代前期、13世紀)



写真 38 春日本地仏曼荼羅 部分（東京国立博物館所蔵、鎌倉時代、13～14世紀）



写真 39 春日鹿曼荼羅 部分（奈良国立博物館所蔵、鎌倉時代、13世紀）



写真 40 五尊懸仏 部分（奈良国立博物館所蔵、鎌倉時代、13～14世紀）

写真出典

国立文化財機構所蔵品統合検索システム (<https://colbase.nich.go.jp/>)

※写真 36～40 は、「国立文化財機構所蔵品統合検索システム」(<https://colbase.nich.go.jp/>) を加工して作成

第8節 高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像（懸仏）に関する所見

公益財団法人 元興寺文化財研究所 高橋平明

1 鏡像（懸仏）の構造・制作技法の変遷概要

古代に始まる神仏習合が進展して本地垂迹説が普及すると、鏡面中に神の本地仏の姿を見出して礼拝するようになった。平安時代の中ごろ10世紀末には、花蝶文八陵鏡などの鏡面に仏像を線刻で表現した遺例が知られ、鏡を社殿に架けたようすをあらわした日吉山王曼荼羅図（奈良・大和文華館蔵）などの中世絵画も知られる。仏像を鏡体に現したものを、「鏡像（懸仏）」あるいは「御正体」と呼んでいる（以後、「鏡像（懸仏）」として表記）。

その後、鏡像（懸仏）は本尊仏像の立体化が志向され、12世紀後半には仏像と光背台座を鏡体とは別の銅板に線刻あるいは打刻し、形抜したものを制作して鏡面に鋳留めされるものが現れる。仏像は浮彫のように鏡面からやや膨らみをあらわして、さらに立体的な表現へと移行する。また、鏡体もごく薄く作られ、背面には木体を当てて周囲に覆輪を施すものも現れる。当初は吊環を鏡体とともに造るが、鏡体径の大型化にともない環座を別に造り、吊環を付ける形式となる。環座も鋳造された花卉形から銅板製の獅子嚙形へと移行する。鏡像（懸仏）の盛期と考えられる13世紀には本尊仏像は背面まで造形して鋳造した、いわゆる金銅仏を付けるものも出現したが、鋳造した蓮台・花卉は木体の葺軸部に釘留めされている。唐草文や火炎を型抜した光背と天蓋前半部は銅板で造られる。華瓶も銅板を型抜したものを鏡面鋳留し、銅板と銅線で作った蓮華・蓮茎を指し込むように、写実的な表現につくり、鏡径も大型化する。

ところが、まもなく13世紀後半には、本尊像は背面の造形を省略して、鏡体部にホゾ留めするようになり、蓮台は、木体を銅板で覆うような簡略化されたものが現れ、鏡板と木体も分割され、華瓶や光輪・笠鋳・三鈷杵形などにみるように、懸仏全体が銅板細工により現されるものとなる。さらに、獅子嚙や挿花などは彩色で表現されて、平面化・簡略化が進行する。室町時代15世紀になると、打刻・ケガキによる簡略化された鏡像（懸仏）は鏡径が小型化する。また、一方では鏡面部一尺前後としながらも、木体素地のままとして銅板を用いず、本尊像を木彫とした鏡像（懸仏）も出現して江戸時代に至る。さらには、焼成された鏡像（懸仏）例もみられるようになる。

2 高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像（懸仏）の制作技法

以上のような鏡像（懸仏）制作と表現技法の変遷から本例（第163図—M24）を考えると、鏡板と覆輪部・吊環は共鋳されており、鏡面部は本来の鏡に近い形態を示しているといえよう。特に、銅製の薄板を鏡面とすることについては、岐阜・那比新宮（国指定重要文化財）所蔵の懸仏群のうちにある虚空蔵菩薩鏡像（懸仏）（13世紀）の鏡板でもX線透過撮影画像から鋳造時の前後型を固定する「筭」が確認されるので、鏡板は鍛造あるいは圧延によって制作していたのではなく、あくまで古代以来の鏡を強く意識して制作技法を踏襲したものであることが推測されている⁽¹⁾。

残念ながら、本例では明確な筭の痕跡は判然としないものの、覆輪部や吊部まで共鋳していることが明らかな本例でも、同様な技法が用いられた可能性は高いであろう。残存する環孔には座割りがな

されているようである。原形は蜜臘による制作が推定されよう。鏡面には錫、覆輪・吊座部には金が施されていた可能性もある⁽²⁾。

3 高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像（懸仏）の本尊像表現技法と制作年代

鉄筆ようによるケガキとみられるもので、概略ながら的確な線描である。頭部は、髻を結び上げ、宝冠の前立てを表す。正面向きではなく、面部をやや左向きとしたのは、輪郭線だけで立体感を現すためであり、手慣れたようすで鼻も簡略に描いている。目眉・口唇のケガキはないので、墨描きあるいは朱彩が施されていた可能性も捨てきれない⁽³⁾。胸部には首から垂れる瓔珞をあらわさない。着衣は、左肩から条帛を右腹下へと廻し懸けて、裳裙を着ける。頭光・身光を線描し、一部には火炎の表現も確認され、蓮華座上に右足を上にして結跏趺坐したさまにあらわしている。髻・宝冠・条帛・胸飾などからして本像は「菩薩」形となり、右手に宝剣を持して腰に当てる。左手は屈臂して掌上には、現状では横線が数条確認されるので、これを経巻あるいは経冊の表現とすれば、尊格は文殊菩薩となろう。右手に宝剣を執り左手には経巻を持ち、蓮華座上に坐する文殊菩薩の類例は絵画・彫刻を検見しても少なく、願主が密教図像に通じたことも知られよう。あるいは、宝珠形ようを捧げるものとすれば、虚空蔵菩薩像の姿をあらわしたものととも考えられる。鏡像（懸仏）が神仏習合の遺物であることからすれば、むしろ本地仏としては虚空蔵菩薩が適当か。その場合には左手の持物は基台のみケガキして宝珠・火炎部は身光部とともに彩色して描いた可能性もあろう⁽⁴⁾。加えて、横方向の線條も描像尊格に関わるものか検討を要しよう。先端の尖ったさまをあらわした蓮弁は、受華の花弁を大きく、反花を小さくして立体感を表現するのに成功している。ケガキ線は絶妙に蓮弁のさまを表現している。描線は手慣れて自在であり、ケガキないしは、ヘラ描などに通じた絵に巧みな工人によることを想像させるに十分なものである。当初は、鏡面は錫メッキされて銀色に輝き、線刻彩色の虚空蔵菩薩像が現されていたものであろう⁽⁵⁾。

制作年代については、その鏡体の形状やケガキされた本尊像の描線のようにすから、平安時代末から鎌倉時代初期ころが推測されよう。

註

(1) 雨森久晃 2003「那比新宮信仰資料の新たな知見—懸仏を中心に—」『月刊文化財』476号、pp.20-23

(2)～(5) 蛍光X線分析(本章第9節)では、可能性として挙げた技法等を裏付ける結果は得られていない。



第260図 高尾北ヤシキ遺跡出土懸仏（鏡像）の線描と合成画像

第9節 高尾北ヤシキ遺跡出土鏡像（懸仏）の材質分析

公益財団法人 元興寺文化財研究所 植田直見

1 分析対象

鏡像（懸仏） 1点（第163図-M24）

2 分析内容

鏡像（懸仏）の材質を調べるため、蛍光X線分析（以下XRF）による元素分析を行った。分析箇所を写真41に示す。No. 1（唇）とNo. 2（宝珠）は虚空蔵菩薩の唇と宝珠部分にあたり、彩色されていた可能性が考えられるため、測定ポイントを増やして分析した。No. 3は有機質付着物、No. 4～No. 6は色味の異なる部分、No. 8、No. 9は金属光沢が残っている部分、No. 7、No. 8、No. 10、は覆輪部である。

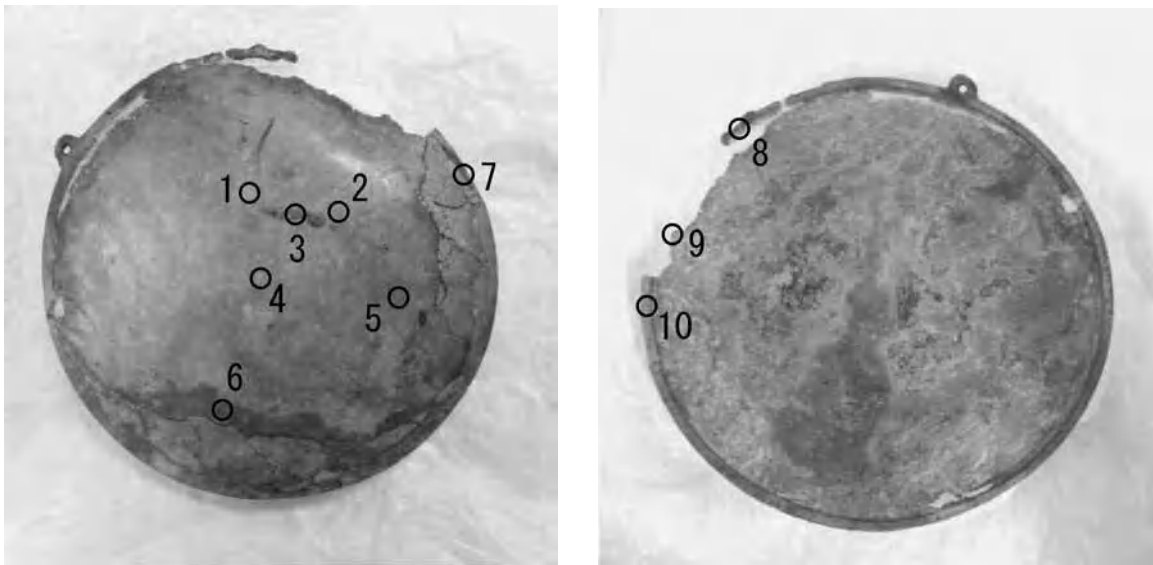


写真41 分析箇所（○：蛍光X線分析箇所）

3 分析方法及び使用機器

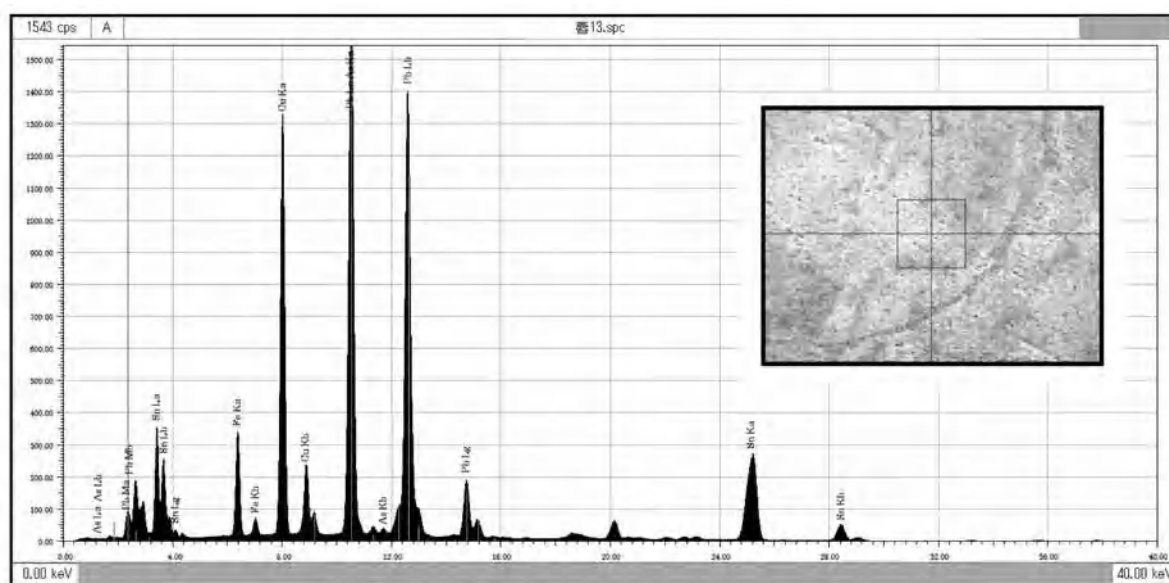
XRFによる金属の材質分析では、試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定することができる。

測定はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日立ハイテクサイエンス製：EA6000VX）を使用し、大気中、ロジウム（Rh）製のX線管球を用い、管電圧50 kV、コリメータ1.2mm×1.2mmで120秒間照射した。

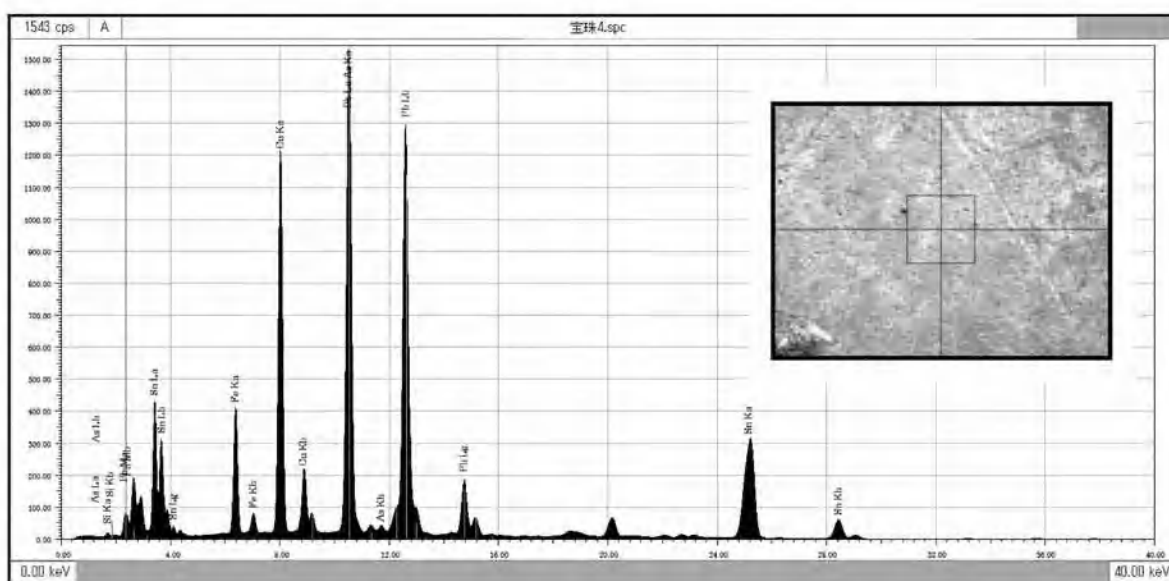
4 結果および考察

仏像が彫られている面の分析箇所1と2について、それぞれ彩色がされている可能性の高いと思われる箇所を複数回測定した。代表的なスペクトルを第261・262図に示した。いずれもほぼ同じ結

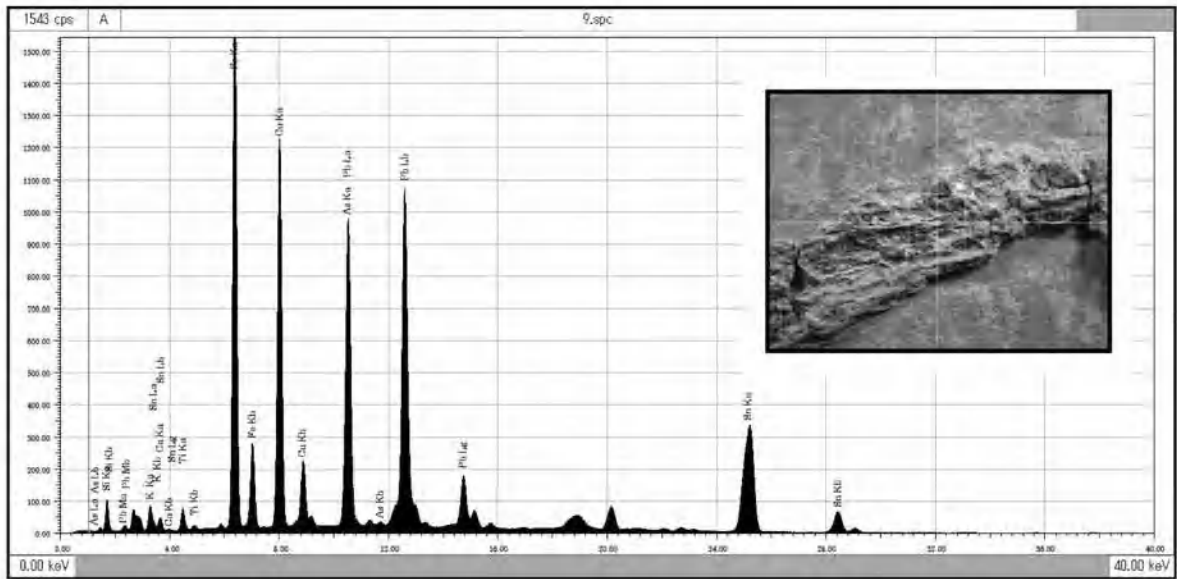
果で、鉄 (Fe)、銅 (Cu)、鉛 (Pb)、スズ (Sn) と微量成分としてヒ素 (As) が検出された。しかし、彩色に由来すると推測される元素は確認できなかった。次に、同じ面の分析箇所3における付着物は鉄 (Fe)、銅 (Cu)、鉛 (Pb)、スズ (Sn) と微量成分としてヒ素 (As)、さらに土壌成分に由来するケイ素 (Si)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti) が検出された (第 263 図)。白色箇所4および濃色箇所5、6はいずれも鉄 (Fe)、銅 (Cu)、鉛 (Pb)、スズ (Sn) と微量成分としてヒ素 (As) が検出された (第 264 ~ 266 図)。これらの箇所では検出元素やピーク強度に大きな差はなく、いずれもほぼ同じスペクトルで、鉛のピークがいずれも強く検出され、Pbの腐食物が選択的に鏡の表面に析出し劣化が進行していると考えられた。さらに、覆輪部7、10もこれまでの測定箇所と検出元素に違いは見られず、鉛のピーク強度は高いが、これまでと比べて、幾分スズのピークが高いことが観察された (第 267・270 図)。最後に一部に金属光沢が見られる覆輪部8と断面が見られる9では検出元素はこれまでと同様であるが銅のピークが強く検出され比較的健全な状態であることが分かった (第 268・269 図)。



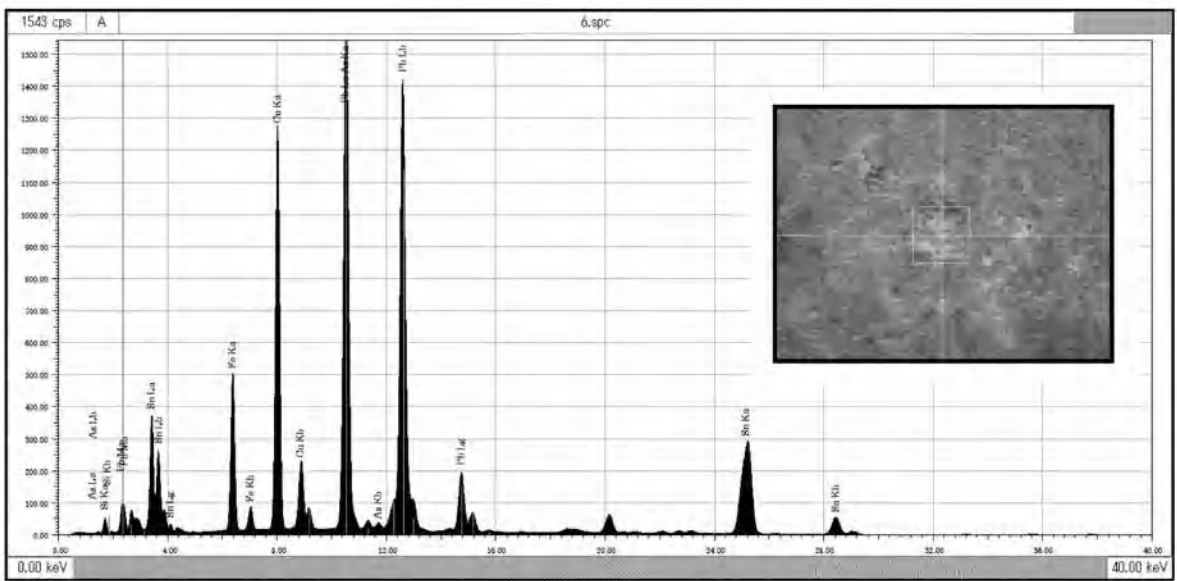
第 261 図 分析箇所 1 の XRF スペクトル



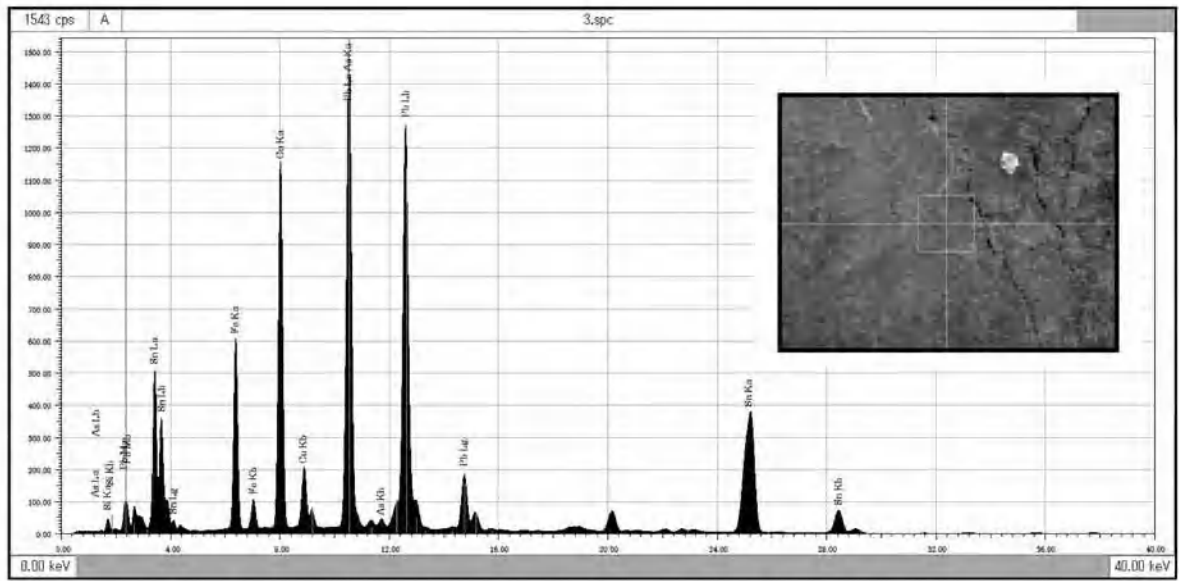
第 262 図 分析箇所 2 の XRF スペクトル



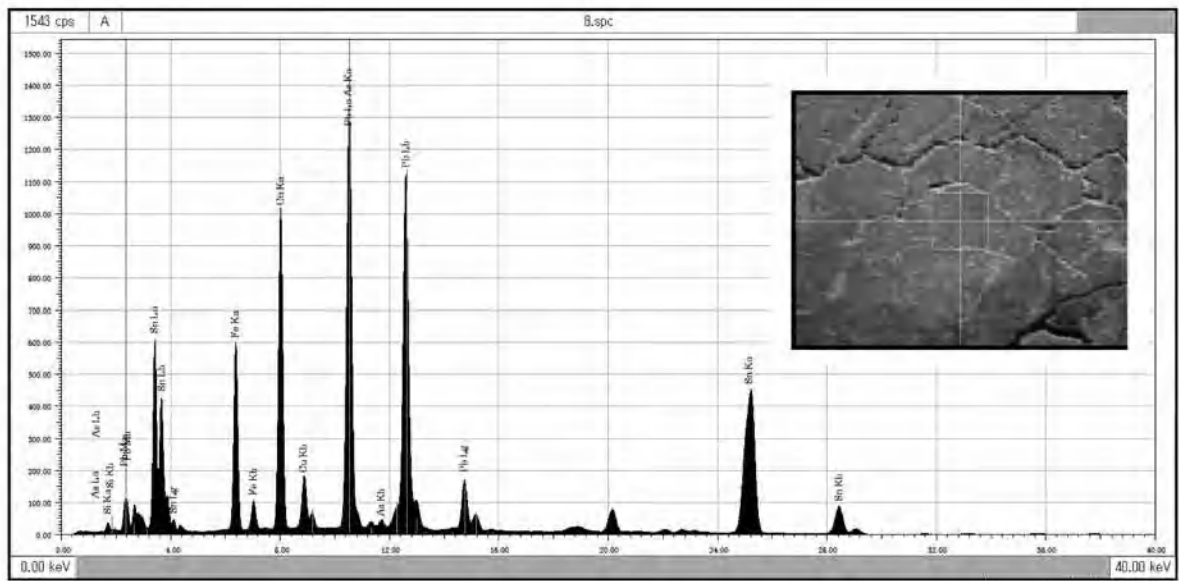
第 263 図 分析箇所 3 の XRF スペクトル



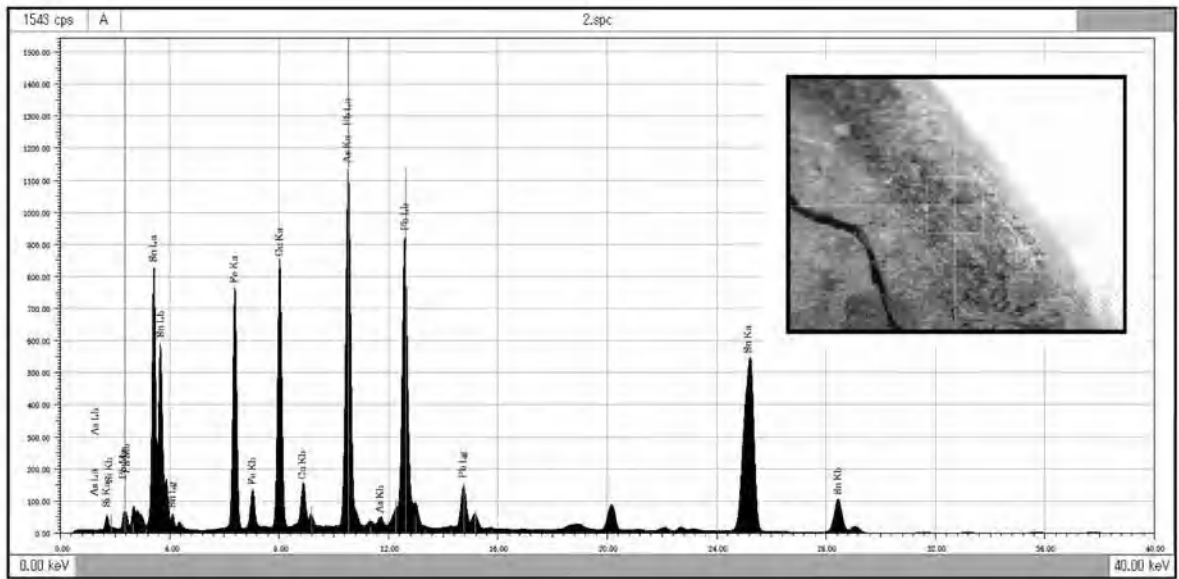
第 264 図 分析箇所 4 の XRF スペクトル



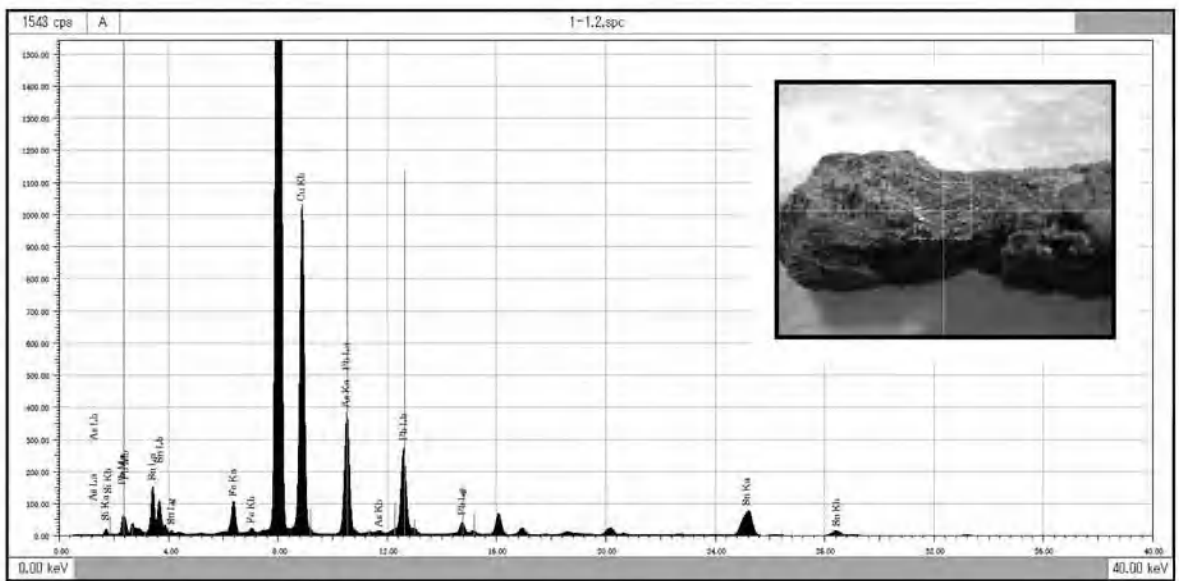
第 265 図 分析箇所 5 の XRF スペクトル



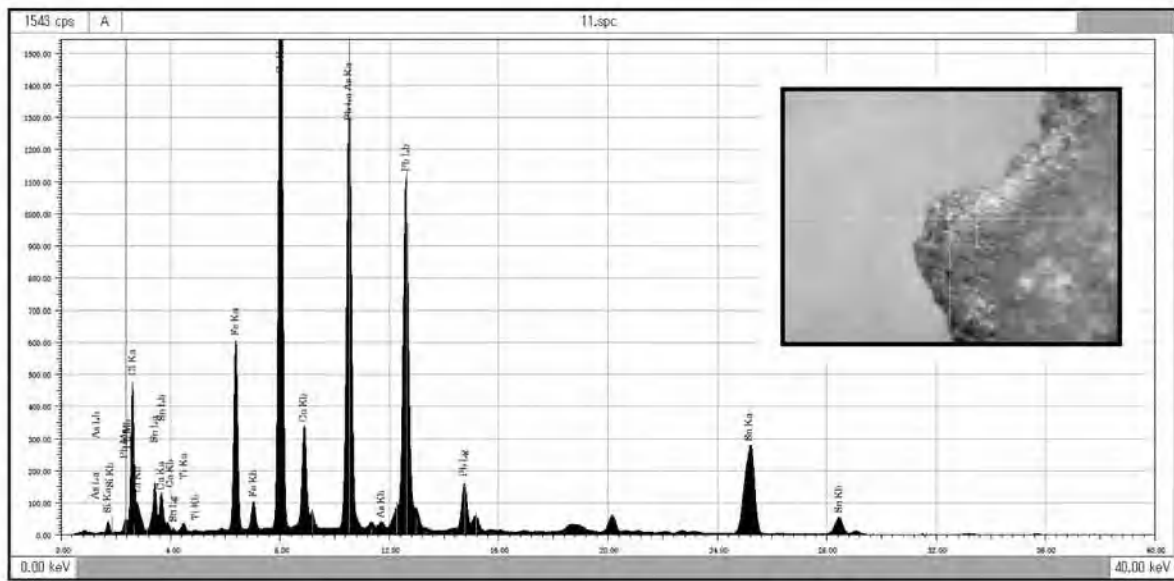
第 266 図 分析箇所 6 の XRF スペクトル



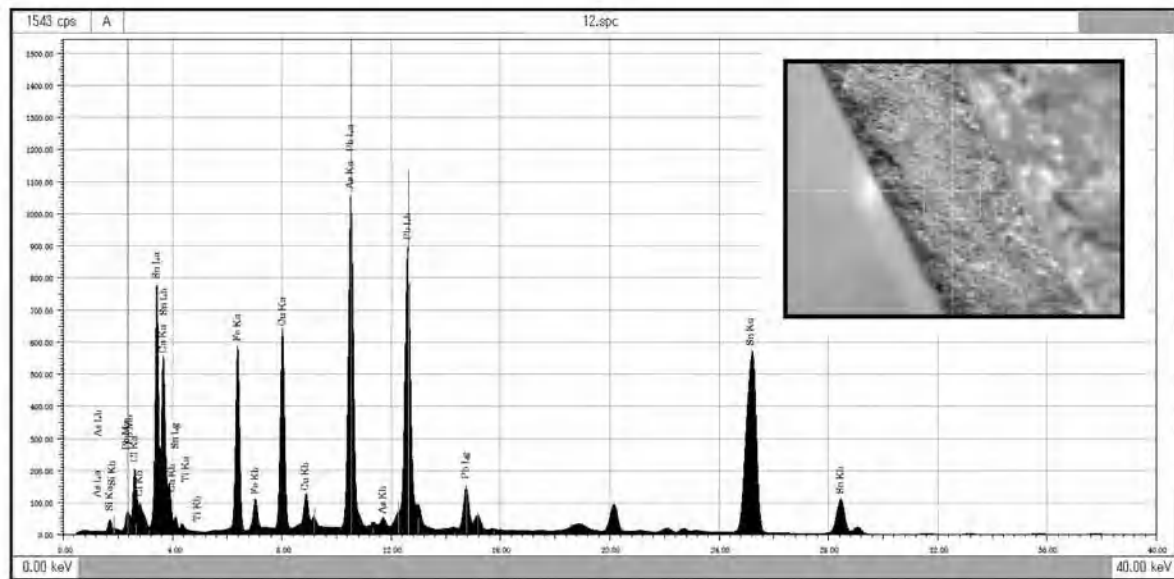
第 267 図 分析箇所 7 の XRF スペクトル



第 268 図 分析箇所 8 の XRF スペクトル



第 269 図 分析箇所 9 の XRF スペクトル



第 270 図 分析箇所 10 の XRF スペクトル

第6章 総括

第1節 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳の変遷

本調査では、高尾北ヤシキ遺跡で弥生時代～中世の集落跡、高尾北ヤシキ古墳では古墳1基と土坑墓2基を確認した。本節では、遺構の変遷、集落構造、主要あるいは特徴的な遺物を時代ごとにまとめる。遺構の変遷については第271図、各時代の主要な遺構と遺物は第273・274図に示した。

1 弥生時代

弥生時代の掘立柱建物1棟、柱穴列1棟、段状遺構7面、土坑4基、木棺墓1基、土器溜まり1か所、被熱面1面を確認した。これらの遺構は2区東半から3区北半にかけて配置されている。調査区内で確認した弥生時代の遺構は限られるが、3区南側の谷部に堆積した包含層1では弥生時代の遺物が多く出土したことから、2・3区の調査区外の西側上方にも当該期の集落が広がる可能性や、中世の整地面の造成によって弥生時代の遺構が削られたことが推測される。

集落を構成する居住遺構として、1間×2間の掘立柱建物1、段状遺構1～5がある。このうち、段状遺構1～3はほぼ同一地点に連続的に造り替えられており、配置場所がほぼ限定的である。また、3区中央の谷部に面して、段状遺構4・5や墓1が配置されている。墓1は木棺墓の構造をもつ。本調査では墓は1基しか確認できなかったため、単独で配置されたか、後世に削平された墓1以東の斜面に別の墓が存在していたかは不明と言わざるを得ない。ただ、段状遺構4・5がある居住空間に近いところに木棺墓を配置する点は時期が異なるかもしれないが、注意しておく必要がある。本遺跡では竪穴住居が確認されていないが、調査区内の丘陵斜面が20°前後と急勾配であることが造られなかった要因の一つかもしれない。

弥生時代の遺構から出土した遺物は、弥生土器、石器、土製品がある。段状遺構1～5・7、土坑1・3・4、土器溜まり1、包含層1から出土した弥生土器は、弥生時代中期中葉～後葉⁽¹⁾の範疇に収まり、弥生時代の集落は短期間に営まれたと考えられる。

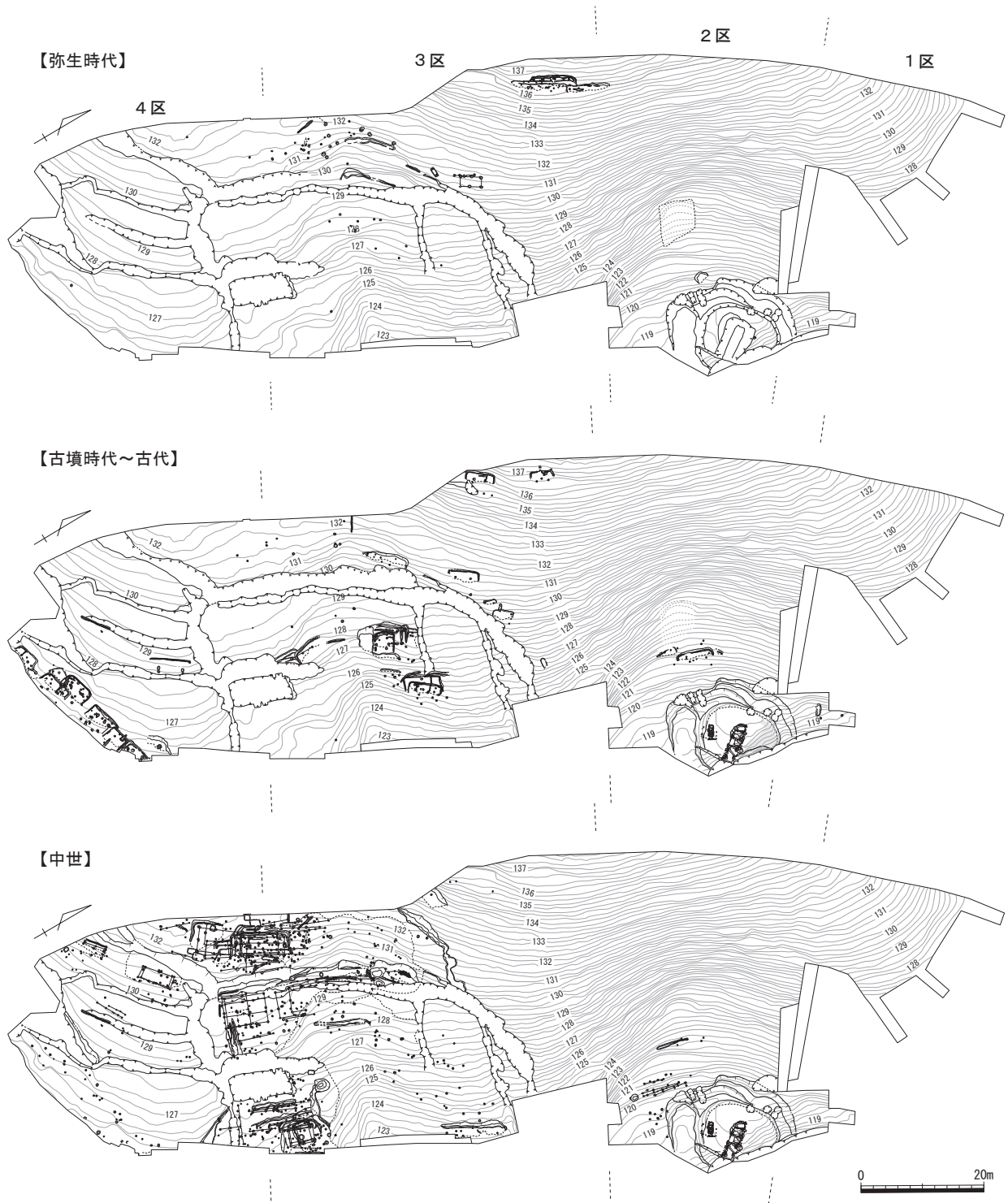
弥生土器は広口壺、無頸壺、短頸壺、蓋、甕、高杯、器台、回転台形土器がある。壺や器台は櫛描文、凹線文、貼付突帯、円形浮文などが施されているものが多く、加飾性が高い。類例が限られる回転台形土器は2点あり、82は台座部分が長径25.9cmと大形で、半分ほど残存していた。

石器については、出土数や組成を第13表、第272図、石器石材の剥片の集計を337頁にまとめた。

磨製石器は太型蛤刃石斧2点、扁平片刃石斧9点（未成品7点、製品2点）、鑿状片刃石斧1点、磨製石包丁14点（未成品2点、製品12点）、磨製石鎌未成品1点の計27点がある。磨製石包丁や扁平片刃石斧は比率が高く、未成品が一定数認められることから、集落内で生産されたと考えられる。

打製石器は石鏃62点、楔形石器6点、石錐2点、その他2点の計72点がある。これらはサヌカイト製がほとんどであるが、石鏃のなかに黒曜石製が1点認められる。サヌカイトは石器・未成品は計72点（掲載66点、非掲載6点）、総重量158.36g、剥片は計449点（掲載11点、非掲載438点）、

総重量 722.88 g が出土した。遺跡全体ではサヌカイトは総重量 881.24 g である。また、近隣に位置する桑山南古墳群⁽²⁾では弥生時代中期後葉の土器以外に、長さ 6.8 cm、幅 10.4 cm、厚さ 2.1 cm のサヌカイト石核 1 点 (145.5 g) が出土しており、サヌカイトの素材獲得の形態を考えるうえで注目される。サヌカイトの総重量や石核の出土状況から、高尾北ヤシキ遺跡周辺は津山盆地のなかでもサヌカイトの保有が高い集落群であったと推測される⁽³⁾。



第 271 図 高尾北ヤシキ遺跡・古墳における遺構の変遷 (1/1,000)

津山盆地西部では久米川流域の宮尾遺跡で前期末から集落がいち早く営まれる。皿川・倭文川流域では中期前葉以前の集落は今のところ確認されていないが、中期中葉～後葉は皿川下流域では勝負峪遺跡、桑山遺跡⁽⁴⁾、高尾北ヤシキ遺跡、高尾宮ノ前遺跡⁽⁵⁾、倭文川流域では法事坊遺跡、椋山遺跡、荒神西遺跡、荒神遺跡、釜田遺跡、釜田南遺跡⁽⁶⁾、曾根田遺跡⁽⁷⁾、隠地東遺跡⁽⁸⁾で集落が営まれるようになり、津山盆地で集落が広範囲にわたって拡大し、急速に増加した頃にあたる。その後、倭文川流域では法事坊遺跡、釜田遺跡、釜田南遺跡、落山遺跡、荒神遺跡で後期以降も集落が継続、あるいは断続的に営まれるが、皿川下流域の嵯峨山東麓では中期後葉をもって高尾北ヤシキ遺跡、桑山遺跡、勝負峪遺跡の集落が衰退する。

2 古墳時代

高尾北ヤシキ遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居 21 軒、柱穴列 1 列、段

状遺構 18 面、土坑 2 基を確認した。集落を構成する遺構は 2～4 区を中心に認められた。2 区や 3 区北西は散在した状態であるが、3 区中央や 4 区西端は竪穴住居や段状遺構が集中かつ重複していた。また、2 区東側では高尾北ヤシキ古墳が見つかり、その南北に土坑墓 1・2 がそれぞれ点在していた。

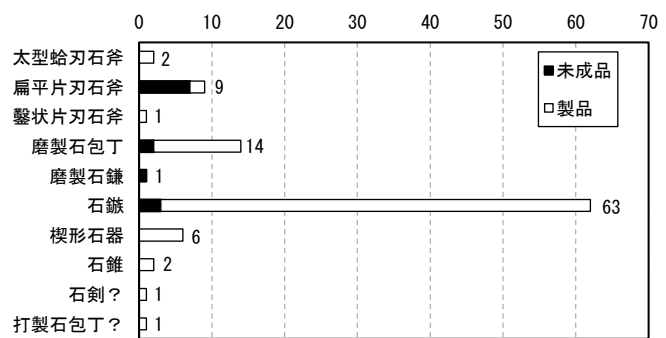
竪穴住居は 3～4 区の 8 か所に配置されていた。21 軒のうち、竪穴住居 6・7、8～10、13～16、17～21 は各地点で 1～4 回の建て替えが行われたのに対し、竪穴住居 1～5・11・16 は単独で配置されて集落内に散在する傾向にある。また、竪穴住居 21 軒のうち、竪穴住居 1・4・7・12・19 の 5 軒は造り付けのカマドを伴う（本章第 2 節）。なかでも、竪穴住居 19 のカマドでは廃絶に際して、須恵器杯身や火を用いた祭祀が執り行われた痕跡を確認した。このほか、焼失した竪穴住居 9 の炭化材 2 点について、樹種同定及び放射性炭化年代測定を行ったところ、サカキやコナラ属クヌギ節と同定されて堅硬な樹種が建築部材として選択されたほか、枯死あるいは伐採年代が 6 世紀後半～7 世紀中頃の暦年代を示し、出土土器の年代観と近い（第 5 章第 2・4 節）。

段状遺構 18 面のうち、段状遺構 10～24 が 3 区に配置されており、竪穴住居に近接している。段状遺構の多くは単独で配置されたものが多いが、段状遺構 12～15 は 3 区中央に重複するように造り替えられた。また、本遺跡では古墳時代の土坑が少ないなか、3 区中央の谷部に配置された土坑 5 は、

第 13 表 高尾北ヤシキ遺跡の弥生時代石器の出土数

種別	器種	石材	未成品	製品 (完成品)	計	比率
磨製石器	大型蛤刃石斧	安山岩		2	2	2.0%
	扁平片刃石斧	粘板岩 ホルンフェルス	1		9	9.1%
		緑色片岩	5	2		
		流紋岩※	1			
	鑿状片刃石斧	緑色片岩		1	1	1.0%
	磨製石包丁	緑色片岩	2	5	14	14.2%
		粘板岩		4		
結晶片岩			2			
泥質片岩※			1			
磨製石鎌	サヌカイト	1		1	1.0%	
打製石器	石鎌	黒曜石		1	62	62.6%
		サヌカイト	3	58		
	楔形石器	サヌカイト		6	6	6.1%
	石錐	サヌカイト		2	2	2.0%
	石剣？	サヌカイト		1	1	1.0%
打製石包丁？	サヌカイト		1	1	1.0%	

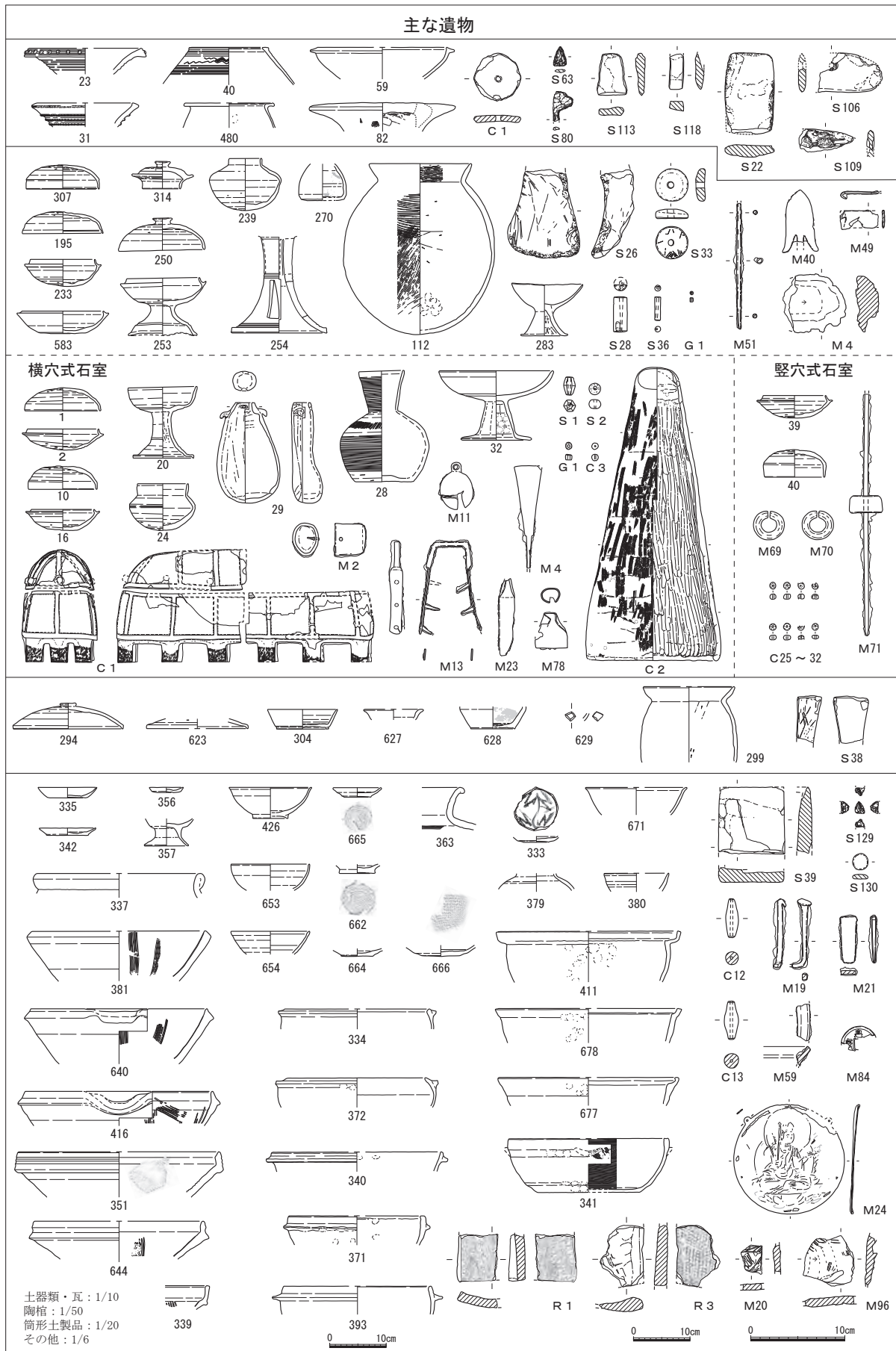
※砥石・叩石は含まない。



第 272 図 高尾北ヤシキ遺跡の弥生時代石器の出土数

	主な遺構	竪穴住居・掘立柱建物・段状遺構・古墳	土坑・墓
弥生時代	掘立柱建物 1棟 柱穴列 1棟 段状遺構 7面 土坑 4基 木棺墓 1基 土器溜まり 1か所 被熱面 1面	建物 1 段状 2・3	墓 1
古墳時代	【遺跡】 竪穴住居 21軒 柱穴列 1列 段状遺構 18面 土坑 2基 【古墳】 古墳(円墳) 1基 横穴式石室 1基 竪穴式石室 1基 土坑墓 2基	遺跡(集落) 住居 1, 4, 7, 12, 19, 2, 11, 15, 8・9, 16 段状 9, 10, 12~15 (古墳)	土坑 5 土坑墓 1, 2
古代	段状遺構 2面	段状 26, 27	
中世	整地面 4面 掘立柱建物 20棟 柱穴列 38列 段状遺構 9面 土坑 17基 溝 6条 集石 4基	建物 2, 3, 5, 7, 8, 11, 12, 14・15, 16, 17・18, 19~21 段状 31, 33 土坑 8, 9 段状 31-P 1	土坑 17, 23 土坑墓 1, 2 土坑・墓: 1/100 ピット: 1/30

第 273 図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳総括図①



第274図 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳総括図②

大規模であることに加え、土師器、須恵器、ガラス小玉、モモ核などの多様な遺物が出土した。須恵器のなかには長頸壺の蓋 314 や装飾小型壺 315、提瓶 317～319 が含まれ、ガラス小玉やモモ核が伴うことから、祭祀に関わるような遺物が二次的に廃棄された可能性がある。

古墳時代の遺物として、土師器、須恵器、埴輪、陶棺、砥石、紡錘車、鉄器、玉類、製鉄・鍛冶関連遺物、モモ核などが出土した。これらの遺物から、古墳時代集落は6世紀中葉～後葉の短期間に営まれたと考えられる。高尾北ヤシキ遺跡出土須恵器については、高尾北ヤシキ古墳と合わせて計15点ほど胎土分析を行った結果、桑山南古墳群、細畝古墳群、桑山古墳群出土須恵器とほぼ同じ胎土にまとまる一方、小屋谷窯跡や大阪府陶邑古窯址群とは胎土が異なることが明らかにされたことから、未知の生産地が推定された(第5章第1節)。このほか、鉄器を研いだ砥石 S 26・S 29、蛇紋岩製紡錘車 S 33、製鉄・鍛冶関連遺物 (S 27、M 3～M 5・M 9・M 10・M 12・M 15・M 17 など) は本遺跡や周辺の手工業生産を考えるうえで、示唆に富む資料と言える(本章第3節)。

これまで皿川下流域の佐良山地区では、170基を超える後期古墳が群集することはよく知られていたが、古墳時代後期の集落は実態が不明であった。そうしたなか、高尾北ヤシキ遺跡で見つかった古墳時代後期の集落は、皿川下流域の嵯峨山東麓では初例であるとともに、同地区の群集墳とも時期や空間が重なる点で意義深い(本章第4節)。

調査地の北東、2区東端では高尾北ヤシキ古墳を確認した。この古墳は直径約13.7m、墳丘の残存高1mの円墳で、埋葬施設として横穴式石室と竪穴式石室を1基ずつ確認した。墳丘及び周溝は後世の削平によって残存状況がよくなかったが、墳形は円墳と考えられる。周溝は古墳の西半で確認し、いびつな平面形で幅7.45m、深さ1.18mである。

竪穴式石室は墳丘盛土内で見つかったことから、横穴式石室や盛土の構築途中で造られ、被葬者が埋葬されたと考えられるほか、2基の古墳が重複した可能性が想定された(本章第5節)。竪穴式石室は内法で全長1.64m、幅0.4m、深さ0.5mで、板状石材を小口積みして構築されている。竪穴式石室の西端には須恵器の杯身 39 と蓋 40 が並べて置かれ、枕に転用された可能性がある。その周辺では耳環が一組出土した。また、石室の東端には、鉄製の紡茎を伴う石製紡錘 M 71 が配置されたほか、土製の丸玉が散在していた。竪穴式石室の埋葬時期は6世紀末～7世紀初頭で、横穴式石室への埋葬に先行する。

一方、横穴式石室は無袖式で、残存する全長6.5m、奥壁幅1.48m、最大幅1.7m、最大高1.9mである。横穴式石室の中央には陶棺1基(C 1)が安置されていた。陶棺の南隣に置かれた円筒形土製品 C 2 は朝鮮半島に系譜をもつ煙突と想定され、県内では初例となる(本章第6節)。しかも、集落で使用することなく、未使用のまま古墳へ副葬されたもので希少な事例と言える。また、陶棺の周辺には多量の須恵器、土師器が伴献された。ただ、石室内は中世に再利用されており、埋葬や副葬品の出土状況は整然としたものではなかった。

横穴式石室の副葬品は、土師器(高杯)、須恵器(蓋杯・高杯・壺・短頸壺・提瓶・皮袋形瓶など)、玉類(水晶製切子玉・丸玉、ガラス製小玉、土製丸玉)、鉄製品(刀・刀子・刀装具・鉄鎌・馬具・雛形鉄器)がある。このうち、須恵器の皮袋形瓶 29 は動物の胃袋形の水筒と提瓶を折衷した異形で、個性的な意匠である。また、雛形鉄器は計9点(M 22～M 27・M 78～M 80)があり、鍬鋤先・穂積具・鉄斧形を呈する。このような雛形鉄器は、池山洞古墳群、万樹里古墳群、福泉洞古墳群、新鳳洞古墳群をはじめとして朝鮮半島南部で出土例が増加しつつあるほか、日本列島では4世紀後半～7世紀初頭に福岡県古寺墳墓群、池の上墳墓群、佐賀県山王山古墳、経塚山古墳、目貫古墳群(ST01古墳)、

愛媛県出作遺跡、岡山県上相遺跡、奈良県寺口忍海古墳群などで類例があり、渡来文化や鍛冶集団との関連が想定されている^(9~14)。高尾北ヤシキ古墳の横穴式石室の被葬者像は、円筒形土器、異形の皮袋形瓶、雛形鉄器などから渡来文化と深く関わった人物であったことが推測される。

高尾北ヤシキ古墳は6世紀末～7世紀中葉に築造され、横穴式石室は初葬のみの可能性がある。また、古墳の南北に造られた土坑墓1・2は、土坑墓2が6世紀中葉で古墳に先行するのに対し、土坑墓1は古墳とほぼ同時期と考えられる。高尾北ヤシキ古墳は高尾北ヤシキ遺跡で古墳時代集落が衰退した直後に集落の北東端に築かれており、6世紀末頃に集落域から造墓域に移行した様子が窺える。

3 古代

古代の遺構は段状遺構26・27のみで、2区東側と4区南東隅に1面ずつ配置されている。段状遺構26は7世紀末から8世紀中葉、段状遺構27は8世紀後半ごろに比定されることから、古墳時代後期の集落が7世紀になって規模が大幅に縮小し、断続的に営まれた可能性がある。遺物は土師器や須恵器が大半である。このうち須恵器壺628の底部内面の赤色付着物について材質分析を行ったところ、酸化鉄を多く含む赤色顔料などが固化したものと推定された(第5章第5節)。

近隣の桑山遺跡では7世紀の可能性のある製炭窯1基、古代の段状遺構6・7、土坑3、埋葬遺構1が確認された⁽¹⁵⁾。製炭窯1は全長10.5mで、焚口から煙道まではほぼ残存していたが、天井部を欠き、横口の残存状況も部分的であった。桑山1・2号墳周辺では8～9世紀代の須恵器、桑山3号墳の周溝では泥岩製銚帯(丸轡)が出土した。これらのことから、桑山遺跡では古墳時代後期末から古代は製鉄、古代には公人が関わる集落が展開していたと考えられる。この集落の存続時期は天長3(826)年に佐良庄⁽¹⁶⁾などが神護寺に寄進された前後の時期と重なり、関連も示唆されよう。

4 中世

中世の遺構は2区東側、3区、4区西側で確認した。中世の遺構は、整地面4面、掘立柱建物20棟、柱穴列38列、段状遺構9面、土坑17基、溝6条、集石4基、ピットなどがあり、掘立柱建物が主体である。これらの多くは、3区と4区西側において、丘陵斜面を大規模に造成した整地面1～4で確認した。整地面1は3区西側の斜面上段、整地面2は3区中央の中段、整地面3は3区東側の下段、整地面4は4区西側に計画的に配置され、各整地面では掘立柱建物や柱穴列の建て替えが著しい。

整地面1では、掘立柱建物2～8、柱穴列7～21、土坑10～17が重複かつ集中して配置された。掘立柱建物6→5、7→8、柱穴列12→掘立柱建物2→3→4の順に各々建て替えられたことが想定される。また、整地面2では、北側で段状遺構31、中央で掘立柱建物9・10や柱穴列22～25、南側で掘立柱建物11・12、柱穴列26・27、溝3～5を確認した。このうち、掘立柱建物9→10、11→12、柱穴列22→23の順で各々建て替えられた可能性がある。続いて、整地面3では、掘立柱建物13～16、柱穴列28～37、段状遺構34、土坑20～23、溝1・6を確認した。このうち、掘立柱建物13→14→15→16の順で建て替えられたことが推測される。さらに整地面4では、東側で掘立柱建物17・18、土坑19、柱穴列40、西側で掘立柱建物19～21を確認した。

遺構に伴う遺物は少なく、限られた情報のなかで遺構の時期を捉えると、整地面1～4を中心に12～16世紀に集落が営まれたと考えられる。整地面1は12～16世紀前半の長期にわたって継続して利用されたのに対し、整地面2は14世紀、整地面3は13～15世紀、整地面4は16世紀後半と主

要な時期が異なる。また、段状遺構 33 は 12 世紀代、段状遺構 35 は 14 世紀代に整地面 1～4 からやや離れたところに単独で配置されたようである。特に 14 世紀中頃～後半には整地面 1～3 が併存し、建物の棟数が 5 棟程度に増えるとともに、段状遺構 31・35 も造られるなど、集落が最盛期を迎える。また、15 世紀から 16 世紀前半は集落が縮小傾向にあるが、16 世紀後半に整地面 4 が新たに造られており、集落が再編された可能性がある。

整地面 1～4 で確認された掘立柱建物 20 棟のうち、残存状況が良い 18 棟は、間取りが 2 間×3 間、2 間×2 間、1 間×2 間、1 間×1 間と様々であり、床面積は 10 m²未満が 9 棟、10～20 m²が 2 棟、20～30 m²が 6 棟、最大の 30.4 m²が 1 棟あり、全体的に小規模の建物が大半を占める。掘立柱建物の構造をみると、ほとんどの建物が側柱であるが、掘立柱建物 11 は総柱建物 (20 m²) の可能性があること、掘立柱建物 12 は庇付の可能性のある側柱建物 (25 m²) であることから、両建物は集落内ではやや規模が大きく、特別な存在であったことが想定される。各整地面では結果的に多くの柱穴が検出されたが、掘立柱建物や柱穴列としてのまとまりや建て替えを考えると、各整地面では 1、2 棟の掘立柱建物があり、1～4 回ほど建て替えを繰り返していたことが考えられる。

中世の遺物として、土師器、勝間田焼、備前焼、瀬戸・美濃焼、青磁、白磁、瓦、砥石、石硯、火打石、基石状の小円礫、鉄器、青銅製の鏡像、銅銭、土錘、銅滓などが出土した。土師器は皿・小皿が主体で、まれに高杯がある。勝間田焼は椀や甕が大半を占め、鉢や摺鉢もわずかに認められた。備前焼は摺鉢や甕が多いなか、壺が少数ある。瀬戸・美濃焼は天目茶碗 (380・444・675)、瓶 446、茶入 676 があり、出土数は限られる。陶磁器は青磁が 16 点とやや多く、白磁は碗 421 のみで、青花などの染付は認められない。青磁は碗と皿が大半を占め、龍泉窯系 (409・440・441・669) がやや多く、同安窯系 (333) が 1 点認められる。瓦質土器は鍋、羽釜があり、細片で図示できなかつたものも少なくない。

石製品では粘板岩製の石硯 S 39 が注目される。掘立柱建物 2 周辺から出土した石硯 S 39 は、原田倫子氏⁽¹⁷⁾による長方形硯 3 B c (中型・幅中) に分類でき、16 世紀前半～17 世紀の年代観が与えられている。また、発火具では緑青色チャート製の火打石 S 129 や火打金 M 18 がある。

金属製品は釘、楔、鍋などの鉄器、鏡像や銅銭などの青銅製品が出土した。なかでも、青銅製の鏡像 M 24 が特筆される。鏡像は段状遺構 31 に伴う P 1 の上面で、背面を上に向けて水平に置かれた状態で見つかった。鏡像は直径 11.8 cm、厚さ 1 mm 前後の円形板状で、周りに細い縁がめぐり、一部に吊り手がある。仏像は左斜めを向いた坐像が極めて細い線で刻まれ、宝冠、条帛、胸飾などの表現や右手に剣を立てて持つことから、文殊菩薩像、あるいは虚空蔵菩薩像の可能性が考えられる (第 5 章第 7・8 節)。この鏡像は、形態や製作技術により平安時代後期～鎌倉時代初期 (13 世紀前後) に作られ、出土状況から室町時代前半 (14 世紀後半) に埋納されたことから、長期間にわたって信仰されたと考えられ、美作地域における中世の信仰を考えるうえで意義深い資料と言える。

このほか、銅滓 (M 20・M 23・M 37・M 95～M 98) は整地面 2、段状遺構 31、包含層 1 の上・中層を中心に計 24 点 (掲載 7 点、非掲載 17 点)、計 750.5 g が出土した。これらは銅製錬滓と分析された (第 5 章第 6 節)。銅滓は少量ながら、中世に遺跡周辺で銅生産が行われたことが推測される。

中世の集落は、本章第 7 節でまとめたように、12～16 世紀にかけて長期にわたって継続的に営まれ、14 世紀代に最盛期を迎えた。集落内の区画は明確でないが、整地面 1～3 では部分的に画する溝が認められたほか、14 世紀以降は整地面 1～4 に掘立柱建物を配置して計画性が窺える。掘立柱建物の構造や規模をみると、小規模な建物が数棟で構成される集落であることから、下層農民層⁽¹⁸⁾による村

落としての性格が推測されるが、出土遺物のなかには青磁や白磁、瀬戸・美濃系の天目茶碗、香炉か茶入、石硯などが含まれることから、一部には経済力や教養のある階層者の存在も見受けられる。さらに、段状遺構 31 の P 1 に埋納された菩薩像を線刻した鏡像は、神仏習合が当地域に広がっていたことを示し、長期にわたって信仰心の厚い村落であったことも窺える。(米田)

註

- (1) 河合 2015 による中期Ⅱ-2～中期Ⅲ-1 にあたる。
河合忍 2015 「中国・四国」『弥生土器』考古調査ハンドブック 12 ニューサイエンス社
- (2) 岡山県教育委員会 2022 『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255
- (3) 調査範囲は限られるが、美作地域の弥生時代集落でのサヌカイトの総重量は、津山市山ノ奥遺跡で 369.2 g、真庭市樋ヶ鼻遺跡で 506.15 g の出土がある(岡山県教育委員会 2004a・b)。また、津山盆地では津山市男戸嶋遺跡(津山市教育委員会 1999)でもサヌカイトが比較的多く出土している。
岡山県教育委員会 2004a 『山ノ奥遺跡 池東・途田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 180
岡山県教育委員会 2004b 『樋ヶ鼻遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 183
津山市教育委員会 1999 『有元遺跡 男戸嶋遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 65 集
- (4) 岡山県教育委員会 2023 『勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 262
- (5) 四田寛人 2022 「高尾北ヤシキ遺跡・高尾宮ノ前遺跡」『岡山県古代吉備文化財センター年報 1 <令和 3 年度>』岡山県古代吉備文化財センター
山口香織 2023 「高尾宮ノ前遺跡」『岡山県古代吉備文化財センター年報 2 <令和 4 年度>』岡山県古代吉備文化財センター
- (6) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979 『稼山遺跡群』I
- (7) 久米町教育委員会 2005 『曾根田遺跡 半太遺跡 稗田遺跡 久保田遺跡』
- (8) 津山市教育委員会 2006 『せんご遺跡 隠地東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 77 集
- (9) 安順天 1996 「小形鉄製模型農工具副葬の意義—大伽耶古墳の埋葬儀礼と関連して—」『嶺南考古学』18 嶺南考古学会
- (10) 門田誠一 1999 「古墳時代の鉄製模型農工具と渡来系集団」『史学論集』佛教大学文学部史学科創設 30 周年記念論集刊行会
- (11) 坂靖 2005 「小型鉄製農工具の系譜—ミニチュア農工具再考—」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』18 奈良県立橿原考古学研究所
- (12) 三木弘 1986 「古墳出土の鉄製雛型農工具について」『史学研究集録』11 國學院大学史学大学院会
- (13) 佐賀県教育委員会 2006 『大江前遺跡・目貫古墳群・赤野遺跡・袈裟丸城跡・岩根遺跡』
- (14) 村上恭通 2016 「上相遺跡掘立柱建物 24 出土鉄生産関連遺物の評価」『大河内遺跡 及遺跡 小池谷遺跡 小池谷 8 号墳 小池谷 B 遺跡 上相遺跡 小中遺跡 小中古墳群 鍛冶屋途遺跡 鍛冶屋途古墳群』岡山県教育委員会
- (15) 註 4 文献
- (16) 津山市 1972 『津山市史』第 1 巻 原始・古代
- (17) 原田倫子 2005 「中国地方における中世遺跡出土の硯」『古文化談叢』第 53 集 九州古文化研究会
- (18) 広瀬和雄 1986 「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6 岩波書店

第2節 古墳時代のカマドについて

1 高尾北ヤシキ遺跡における古墳時代のカマド

高尾北ヤシキ遺跡では古墳時代後期の竪穴住居を21軒確認した。このうち、竪穴住居1・4・7・12・19は作り付けカマドを伴い、3・4区に散在して見つかった。古墳時代集落は6世紀中葉～後葉に営まれ、竪穴住居1・7・12・19は6世紀後葉、竪穴住居4は6世紀後半に比定される。

カマドは、竪穴住居1・7・19では斜面上方の壁際中央、竪穴住居7・12では斜面側の北壁中央に設けられた。いずれも煙道が屋外に伸び、袖部は認められない点が共通する。竪穴住居1・19は焚口となる被熱面を確認したが、その他は残存していなかった。このほか、竪穴住居12・19では焚口の両脇にピットが配置されており、竪穴住居12のピットには石が立てられていた。注目されることとして、竪穴住居1では焚口右側で壁体溝に繋がる弧状の溝と複数の小穴を確認し、オンドル状遺構であった可能性があることや煙道の残存状態が良好であったこと、竪穴住居4では焚口やその周辺に土師器甕が原位置を保って見つかったこと、竪穴住居19ではカマドの廃絶に際して須恵器蓋杯や火を用いた祭祀が執り行われた痕跡を確認したことがあげられる。さらに、高尾北ヤシキ遺跡に隣接して築かれた高尾北ヤシキ古墳には円筒形土器が副葬され、カマドとの関連を考えるうえで注目される。

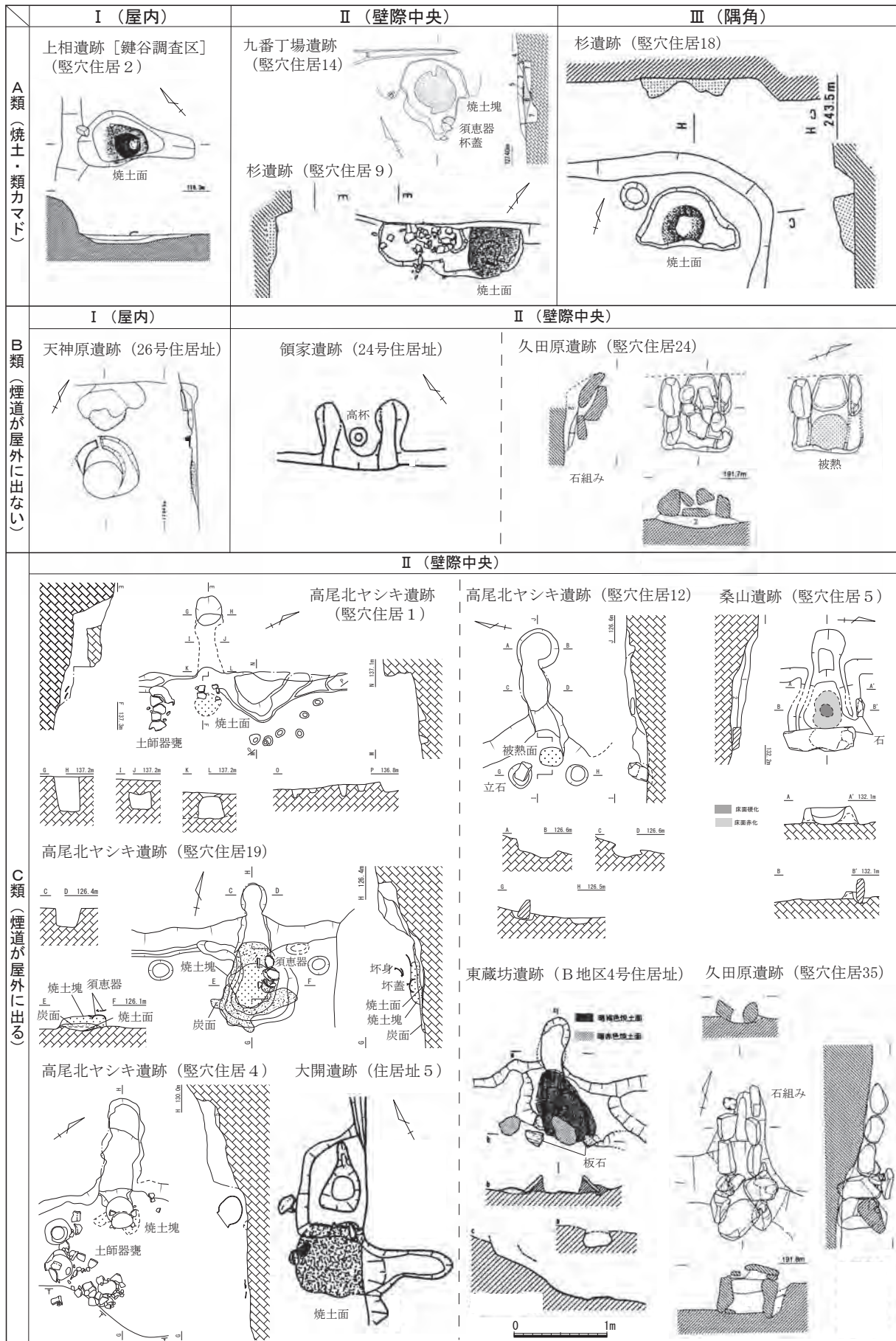
2 美作地域における古墳時代～古代のカマド

美作地域のカマドは13遺跡29例が知られる（第14表）。その分布は吉井川上流

第14表 美作地域における古墳時代～古代のカマド一覧

遺跡名	所在地	遺構名	時期	竪穴住居		カマド					分類	文献
				平面形	規模 (m)	敷設位置	焚口被熱	袖	煙道	その他		
領家遺跡	津山市領家	14号住居址	7世紀前半	方	一辺4.5	北壁中央	○	盛土?	?		B II	3～5
		24号住居址	6世紀後半	方	4.65 × 4.85	南壁中央	○	盛土?	×	高杯を支脚	B II	
		32号住居址	6世紀後葉	方	一辺6.5	北壁中央	?	○		粘土を支脚?	C II	
大開遺跡	津山市二宮	住居址5	6世紀後葉	長方	約4 × 5	東壁中央	○		○		C II	6
		住居址6	6世紀後葉	方	一辺約5	北壁中央	○	○	○		C II	
		住居址7	6世紀後半?	方	一辺約5.5	北壁中央	○	○			C II	
桑山遺跡	津山市平福	竪穴住居5	7世紀	方	一辺約5	西壁中央	○	盛土・石	○	石囲い	C II	7
		竪穴住居1	6世紀後葉	方	3.7 × (0.75)	西壁中央	○		○	弧状の溝・小穴	C II	
高尾北ヤシキ遺跡	津山市高尾	竪穴住居4	6世紀後半	方	3.2 × (1.49)	西壁中央南寄			○		C II	本書
		竪穴住居7	6世紀後葉	方	(3.3) × (2.9)	北壁中央			○	炭面	C II	
		竪穴住居12	6世紀後葉	方	3.5 × (2.3)	東壁中央?		立石・ピット	○		C II	
		竪穴住居19	6世紀後葉	方	3.03 × (2.46)	北壁中央	○	ピット	○	焚口上に焼土・須恵器	C II	
天神原遺跡	津山市河辺	26号住居址	7世紀	隅丸長方	4 × 5	北壁中央付近	○	盛土	×		B I	8
		20号住居址	7世紀	隅丸方	4.5 × 3.5	北壁中央	○	盛土	×		B II	
大畑遺跡	津山市瓜生原	住居址8	7世紀前半	隅丸方	一辺5弱	西壁中央	○		×		A II	9
		住居址21	7世紀前半	隅丸方	一辺約3.5	東壁中央	○		○		C II	
東蔵坊遺跡	津山市草加部	4号住居址	6世紀末～7世紀初	方	一辺約4	北西壁中央	○	盛土?		焚口両脇に板石	C II	10
下湯原B遺跡	真庭市下湯原	竪穴住居6	6世紀末	方	3.9 × 3.4	北壁中央	○	石?	○		C II?	11
杉遺跡	鏡野町杉	竪穴住居9	7世紀中葉	隅丸方	5.25 × 4.42	北壁中央	○		×	粘土を支脚?	A II	12
		竪穴住居18	7世紀前葉	隅丸方	3.58 × 3.6	北東隅角	○		×	被熱は環状	A III	
九番丁場遺跡	鏡野町布原	竪穴住居10	7世紀	方	5 × 5	北壁中央	○				A II	13
		竪穴住居14	6世紀末	方	(4.7) × (3.2)	北壁中央?	○				A II	
久田原遺跡	鏡野町久田下原	竪穴住居24	7世紀中葉	方	8 × 6	西壁中央	○	石	×	石組み	B II	14
		竪穴住居29	後期	方	4.62 × 4.3	西壁中央	○	石	○	石組み	C II	
		竪穴住居35	7世紀末～8世紀初	楕円	4.75 × 4.23	北壁中央	?	石	○	石組み	C II	
勝中央核工業団地内	勝央町植月中	第II区住居址	6世紀中葉～後葉	方	一辺約5.3	南壁中央	○		?		C II?	15
上相遺跡(鍵谷)	勝央町黒土	竪穴住居2	7世紀	方	4.75 × (3.7)	西壁中央	○		×		A II	16
上相遺跡	美作市上相	2号住居址	6世紀後半	長方	6.1 × (4.9)	西壁中央	?	盛土	?		C II	17
		1号住居址	6世紀後葉	方	7.4 × 7.1	西壁中央	○	盛土	?		C II	

※分類は註1文献に準ずる。



第275図 美作地域における古墳時代～古代のカマド (1/60)

域の津山盆地を中心に、旭川・吉野川上流域にも点在する。時期は6世紀後半が17例、7世紀が12例であり、6世紀後葉になって美作地域各地にカマドが急に普及したとみられる。カマドを設けた竪穴住居は、平面形が方形を呈するものが大半を占め、規模は久田原遺跡の竪穴住居24が一辺8m、上相遺跡の1号住居址が一辺7mとやや突出するほかは、一辺3～6mの竪穴住居が大多数である。

カマドの構造は、A類（焼土のみ）、B類（煙道が屋外に出ない）、C類（煙道が屋外に出る）、さらに敷設位置はⅠ類（屋内）、Ⅱ類（壁面中央）、Ⅲ類（隅角）に分類される⁽¹⁾。この分類を参考にすると、美作地域のカマドはAⅡ類が5例、AⅢ類が1例、BⅠ類が1例、BⅡ類が4例、CⅡ類が18例に分けられる（第275図）。6世紀後半はCⅡ類が大半を占め、7世紀はAⅡ類やBⅡ類が多い。中四国地方で6世紀後半以降にCⅡ類が多くなることは亀田修一氏⁽²⁾も示唆されており、美作地域でも同じ傾向を示す。カマドの袖部は未確認が半数以上、有するものは8例と限られる。また、桑山遺跡では石囲い、久田原遺跡は石組み、高尾北ヤシキ遺跡では焚口の脇に立石、東蔵坊遺跡では焚口の両脇に板石を用いる。袖部が無く、石を用いるカマドが一定数認められる点は美作の地域の特徴であろう。また、大開遺跡、桑山遺跡、高尾北ヤシキ遺跡、天神原遺跡、大畑遺跡、上相遺跡では鉄滓が出土し、カマドを備える竪穴住居は製鉄・鍛冶関連遺跡やその周辺で比率が高いことも追認できる。

カマドに関わる課題は、その構造以外にも土師器の甕や甑、支脚、円筒形土器、竈形土器との関連、カマドの使用や廃棄に伴う遺物や祭祀など多岐にわたるが、別稿に期したい。（米田）

註・表文献・図出典

- (1) 埋蔵文化財研究会 1992「凡例」『古墳時代の竈を考える』第3分冊—追加資料・発表要旨—
- (2) 亀田修一 1992「中国・四国地方のカマド」『古墳時代の竈を考える』第3分冊 埋蔵文化財研究会
- (3) 岡山県教育委員会 1975『高本遺跡 平遺跡 沼古墳群 領家遺跡 下河内調査区 穴塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8
- (4) 小郷利幸 1992「領家遺跡」『古墳時代の竈を考える』第1分冊 埋蔵文化財研究会
- (5) 河本清 2017「竈—カマド—雑感—領家遺跡の報告書から—」『津山市史だより』第9号 津山市史編さん室
- (6) 津山市教育委員会 1993『大開古墳群 大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告51
- (7) 岡山県教育委員会 2023『勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告262
- (8) 岡山県教育委員会 1975『狼谷遺跡 小中古墳群 小中遺跡 天神原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7
- (9) 津山市教育委員会 1993『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告47
- (10) 津山市教育委員会 1981『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告9
- (11) 岡山県教育委員会 2002『下湯原B遺跡 藪途山城跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告165
- (12) 奥津町教育委員会 1999『杉遺跡』奥津町埋蔵文化財発掘調査報告4
- (13) 岡山県教育委員会 2002『立石遺跡 大開遺跡 六番丁場遺跡 九番丁場遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告165
- (14) 岡山県教育委員会 2004『久田原遺跡 久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184
- (15) 勝央町教育委員会 1976『勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- (16) 岡山県教育委員会 2016『大河内遺跡 及び遺跡 小池谷遺跡 小池谷8号墳 小池谷B遺跡 上相遺跡 小中遺跡 小中古墳群 鍛冶屋途遺跡 鍛冶屋途古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告242
- (17) 岡山県教育委員会 1974『赤野遺跡 下市瀬遺跡 志戸部調査区 野介代遺跡 押入西遺跡 梶原遺跡 上相遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告242

第3節 皿川下流域周辺における6～8世紀の手工業生産について

1 高尾北ヤシキ遺跡・高尾北ヤシキ古墳出土の紡錘、製鉄・鍛冶関連遺物

高尾北ヤシキ遺跡、高尾北ヤシキ古墳では、紡錘、製鉄・鍛冶関連遺物が出土した。本節ではこれらの時期や特徴を整理し、皿川下流域周辺の古墳時代から古代の手工業生産についてまとめる。

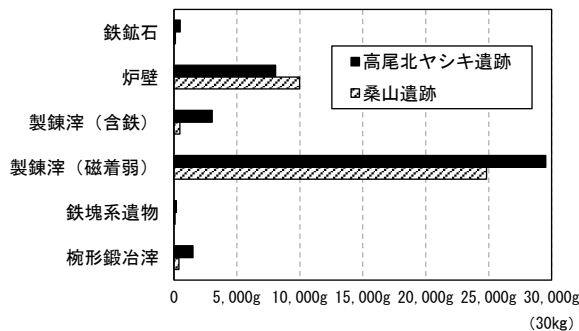
高尾北ヤシキ遺跡の堅穴住居 16 では石製紡錘車 S 33、包含層 1 では鉄製紡茎 M 51 が出土したほか、高尾北ヤシキ古墳の堅穴式石室には鉄製紡茎と組み合う石製紡輪 M 71 が被葬者の足元と想定される石室東端に供献・副葬された。こうした出土状況から、高尾北ヤシキ遺跡では6世紀後葉に紡糸が行われたほか、6世紀末～7世初頭には高尾北ヤシキ古墳の堅穴式石室の副葬品として紡錘を祭器として扱われたか、あるいは紡糸に関わった被葬者であったことが推測される。

高尾北ヤシキ遺跡、同古墳では鉄鉱石、炉壁、鉄滓などの製鉄・鍛冶関連遺物（以下、関連遺物）が計 42,849.5 g（約 42.8kg）出土した。種別は鉄鉱石 498.5 g（1.2%）、炉壁 8,084 g（18.9%）、製錬滓 3,2581.5g（76.0%）、鉄塊系遺物 187.3 g（0.4%）、椀形鍛冶滓 1,497.9 g（3.5%）で、製鉄関連遺物が大半を占める（第 15 表）。なお、鍛冶関連遺物は椀形鍛冶滓や鍛冶滓のみで、羽口は皆無である。また、椀形鍛冶滓は小形や極小形がほとんどである。こうした出土量や種別の比率から、製鉄や鍛冶は調査地からやや離れたところで行われたことや、鍛冶よりも製鉄の比重が高かったこと、鍛冶は精錬鍛冶よりも鍛錬鍛冶が主体であった可能性がある。

関連遺物は古墳時代の堅穴住居 2・5・7・9・10・12・15・16・21、段状遺構 10・11・15・20・26・27、土坑 5、包含層 1、中近世の遺構、高尾北ヤシキ古墳の墳丘盛土、堅穴式石室、周溝から出土し、遺構別に出土量を集計した（340 頁）。出土状況を見ると、高尾北ヤシキ遺跡では 1 区 310.1 g、2 区 6,083.2g、3 区 34,920.6g、4 区 1,535.6g と、全体の 81.5% が 3 区からの出土である。これは 3 区が谷地形で調査地の上方から関連遺物が流れ込みやすかったことが要因であろう。関連遺物の出土量が多い遺構は、古墳時代後期の土坑 5 で約 1.8 kg と最も多く、次いで古墳時代後期の堅穴住居 10・15 で 800～900 g、古墳時代後期の堅穴住居 7、段状遺構 10・15、中世の段状遺構 31 は 500 g 前後であり、いずれも 3 区中央の谷部に位置する。調査地内では製鉄炉や明確な鍛冶炉は確認しておらず、これらの関連遺物は調査地西側の丘陵上方からの流れ込みと考えられる。

第 15 表 高尾北ヤシキ遺跡・桑山遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物集計表

種別	高尾北ヤシキ遺跡		桑山遺跡	
	重量	重量比	重量	重量比
鉄鉱石	499g	1.2%	104g	0.3%
炉壁	8,084g	18.9%	9,991g	27.9%
製錬滓（含鉄）	3,045g	7.1%	462g	1.3%
製錬滓（磁着弱）	29,536g	68.9%	24,826g	69.2%
鉄塊系遺物	187g	0.4%	91g	0.2%
椀形鍛冶滓	1,498g	3.5%	400g	1.1%
計	42,849g	100.0%	35,874g	100.0%



第 276 図 高尾北ヤシキ遺跡・桑山遺跡の製鉄・鍛冶関連遺物出土量

関連遺物が多く出土した土坑5、竪穴住居7・10・15は6世紀後葉に比定されることから、積極的に評価すれば、その頃に周辺で製鉄・鍛冶が行われた可能性があるが、各遺構では埋土の上層からの出土が多かったことから、関連遺物が帰属する時期は6世紀後葉以降と捉えておく。また、3区中央の谷部に堆積した包含層1では各層から多様かつ多量の遺物が出土した。このうち、関連遺物は計28,243.2gが見つかった。層位ごとにみると、上層5,016.5g、中層23,059.7g、下層167.0gで、古墳時代後期の遺物を多く含む中層（第196図―第10層）からの出土が大半を占める。

一方、高尾北ヤシキ古墳では周溝から4,677.1g、墳丘盛土から炉壁と製錬滓667g、竪穴式石室から製錬滓13gの計5,357.7gの関連遺物が出土した。周溝からの出土は流れ込みの可能性はあるが、墳丘盛土や竪穴式石室からの出土は古墳築造や埋葬の時期に周辺で製鉄が行われたことを裏付ける。

高尾北ヤシキ遺跡出土の製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的分析によると、製鉄原料はスカルン鉱床で採取された鉄鉱石とチタン鉄鉱を含む砂鉄の用いていること、分析した炉壁は古墳時代後期の製鉄炉としては耐火性が高くないこと、鍛冶滓には精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓があり、周辺では製鉄、精錬・鍛錬鍛冶まで連続した操業が行われた可能性があることなどが明らかにされた（第5章第6節）。

2 皿川下流域周辺における6～8世紀の手工業生産

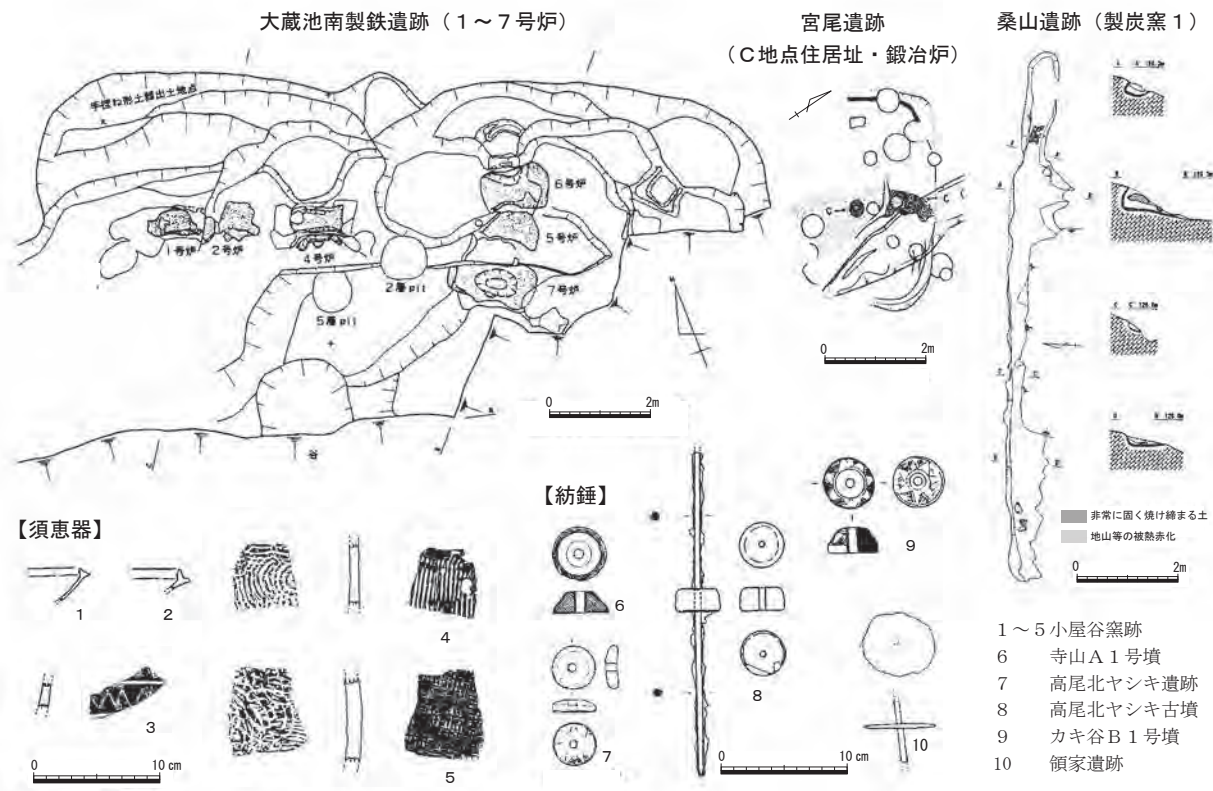
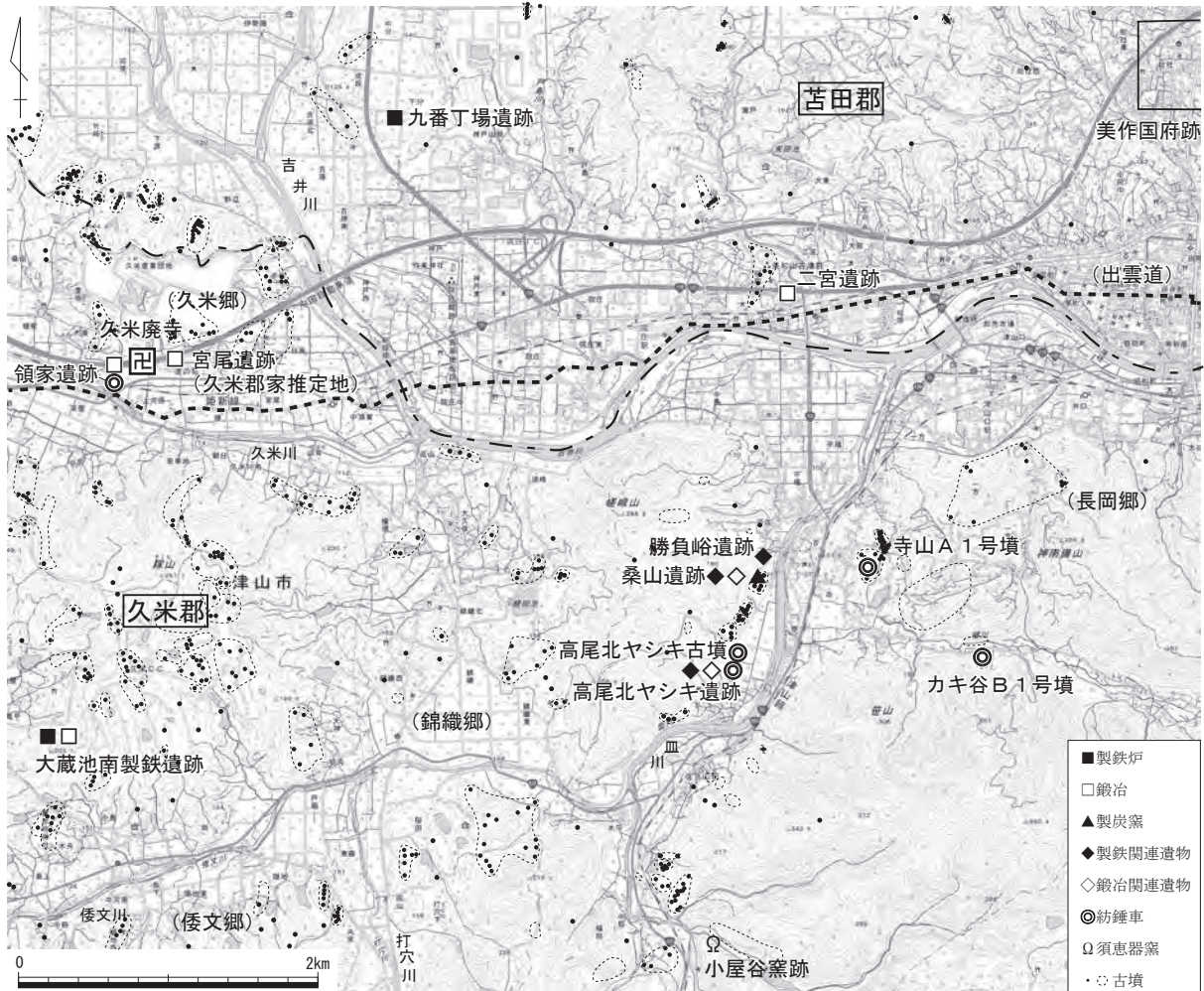
高尾北ヤシキ遺跡、同古墳における手工業関連遺物の位置付けを試みるため、皿川下流域周辺の古墳時代後期から古代の手工業生産を検討する。調査地周辺の皿川・久米川下流域周辺は、律令期には久米郡⁽¹⁾に属し、『和名抄』は大井、倭文、錦織、長岡、賀茂（賀美）、弓削、久米の七郷を記す。

(1) 紡錘

6～8世紀の皿川下流域周辺では高尾北ヤシキ遺跡、高尾北ヤシキ古墳、寺山A1号墳、カキ谷B1号墳、領家遺跡で紡輪3点や紡錘2点が出土している（第277図）。6世紀前半の寺山A1号墳⁽²⁾には竪穴式石室に滑石製紡輪（6）が副葬され、側面に鋸歯文が施されている。また、カキ谷B1号墳⁽³⁾の横穴式石室には7世紀前葉の滑石製紡錘車（9）が副葬され、側面と下面に鋸歯文が線刻されている。さらに、領家遺跡⁽⁴⁾では包含層から鉄製紡錘（10）が見つかるが、紡輪の断面形が扁平であることから、古墳時代後期から古代に主体となる形状⁽⁵⁾を示す。

美作地域では古墳時代から古代の紡錘は、本調査を含めると集落5例、古墳・墓12例が知られる^(6・7)。このうち、鉄製紡錘を伴う石製紡輪は、高尾北ヤシキ古墳の竪穴式石室以外に、勝央町小中遺跡の3区土壙墓1（TK43）、津山市狐塚遺跡の竪穴住居10（TK209）に出土例があり、6世紀後葉から7世紀初頭に認められる。このように紡錘の素材が木製から鉄製へ変化したことについて、東村純子氏は紡糸が手で転がす方法から手押台と手押木を用いた使用法へ変化したことを示唆した⁽⁸⁾。

以上のように、調査地周辺では、古墳時代後期は皿川下流域の古墳や集落、古代は久米川下流域の集落に紡輪や紡錘が出土する傾向がある。律令期の久米郡には、機織りの倭文部や錦織部、武器製作の弓削部などの品部が設定されたが、品部の設定以前にそれぞれの技術をもつ集団が存在したことが吉田晶氏により説かれている⁽⁹⁾。皿川の支流倭文川流域にはかつて倭文郷や錦織郷があり、それぞれの品部の遺称地だけでなく、秦氏との関わりも深い地域として伝えられる。紡錘のなかでも、特に鉄製紡錘は中央政権が直接関わるミヤケ、瓦・須恵器・鉄の生産遺跡に見られる傾向があり、ミヤケが織物生産の拠点となったことが推定されている⁽¹⁰⁾。皿川下流域周辺は美作地域のなかでも紡錘が偏在する地域で、久米郡家推定地に近隣する領家遺跡からは鉄製紡錘が出土した。この地域で6世紀



第 277 図 皿川下流域周辺における6～8世紀の生産遺跡の分布と関連資料 (1/50,000・1/150・1/6)

後半から紡糸・織物生産が積極的に行われたことは、品部やミヤケの設定とも無関係ではなからう。

(2) 製鉄・鍛冶

高尾北ヤシキ遺跡より北 480 m に所在する桑山遺跡では、7 世紀代の可能性のある横口付の製炭窯が 1 基確認された。上柙武氏の分類⁽¹¹⁾に従えば、この製炭窯は B 3 型で、7 世紀後半から 8 世紀に見られるという。また、桑山遺跡では計約 35.8 kg の製鉄・鍛冶関連遺物、その北隣の勝負峪遺跡では計約 4.5 kg の製鉄関連遺物⁽¹²⁾が見つかり、両遺跡の西側上方に製鉄炉の存在が推測された（第 15 表）。

皿川の支流倭文川流域では、椋山南麓の大蔵池南製鉄遺跡⁽¹³⁾で 7 基の製鉄炉が重複して見つかり、6 世紀後半から 7 世紀初頭にかけて製鉄が行われた。また、鍛冶炉 1 基も確認された。この遺跡は 1 作業面につき製鉄炉 1 基の操業で、集落構成員が使用する鉄の生産や有力者へ素材供給を主な目的とした「私採」の製鉄遺跡として位置付けられた⁽¹⁴⁾。操業時期については、最終作業面からは TK 217 型式の須恵器が出土したほか、下層の様相から 6 世紀後半まで遡るとこれまで考えられてきた^(15・16)が、尾上元規氏は吉備地域の製鉄遺跡の動向を整理したうえで、TK 209 型式期を開始期と捉えている⁽¹⁷⁾。近接する椋山古墳群は大蔵池南製鉄遺跡と同時期に形成され、発掘調査された古墳 17 基のうち 9 基で鉄滓が出土したほか、三足壺や平底壺、鳥形瓶、馬具を装着した馬の埋葬などが確認されていることから、亀田修一氏は渡来系の人々が同遺跡の製鉄に関与したことを推測されている⁽¹⁸⁾。

鍛冶遺跡は、久米川下流域の宮尾遺跡⁽¹⁹⁾、領家遺跡が知られる。宮尾遺跡は律令期の久米郡家に推定されている遺跡で、7 世紀代の V 区 C 地点堅穴住居址で鍛冶炉 3 基が重複するように確認された。鍛冶操業は 3 時期にわたり、遺跡内からは鉄滓、羽口、鉄器や砥石が出土した。また、領家遺跡は宮尾遺跡、久米廃寺に近接し、古墳時代の鍛冶炉 5 基（うち 2 基は後期か）、奈良時代末～平安時代の鍛冶炉 3 基が確認された。鉄滓と羽口は 6 世紀後半から 7 世紀前半の住居址や包含層、奈良時代末から平安時代の包含層から多量に出土したようである。このほか、宮尾遺跡と領家遺跡に挟まれるように位置する久米廃寺では、鉄滓や銅滓が出土しており、金属器生産が行われた可能性が考えられる⁽²⁰⁾。

(3) 窯業

皿川下流域では須恵器窯跡として小屋谷窯跡⁽²¹⁾が知られる。この窯跡は分布調査や磁気探査によって確認された須恵器の窯跡で、7 世紀前半ごろの杯身・甕などの須恵器片や窯壁片が採集された。

また、本事業の一連の発掘調査では、桑山古墳群、桑山南古墳群、細畝古墳群、高尾北ヤシキ古墳、高尾北ヤシキ遺跡から出土した古墳時代の土器、埴輪、陶棺などについて白石純氏^(22～24)によって胎土分析が行われた結果、須恵器、埴輪、陶棺はそれぞれ 3 グループの胎土に分けられ、須恵器は津山市小屋谷窯跡、柳谷窯跡、箱王谷窯跡、大阪府陶邑古窯跡群、埴輪は赤磐市土井窯跡と類似する資料のほか、新たな生産地を示唆する資料が含まれることが分かった。加えて、佐良山古墳群に特殊須恵器が集中する点に着目した尾上元規氏は、これらが在地で生産されて、その周辺で消費されることが多いことや桑山南 2 号墳出土子持器台は周辺地域で製作されたことを示唆した⁽²⁵⁾。

以上のように、皿川・久米川下流域周辺は、古墳時代後期から古代にかけて、紡織、製鉄・鍛冶、須恵器生産が行われたことを示す資料が蓄積されつつあり、複合的な手工業生産が行われた地域と言える。同地域では製鉄は倭文川流域の椋山南麓、鍛冶は久米川流域の宮尾遺跡周辺で行われたことが知られていたが、本事業の一連の調査により、高尾北ヤシキ遺跡、高尾北ヤシキ古墳、桑山遺跡、勝負峪遺跡で古墳時代後期から古代の範疇の可能性のある鉄滓や炉壁が出土したほか、桑山遺跡では古代の製炭窯が見つかったことにより、嵯峨山東麓でも製鉄・鍛冶が行われた可能性が高まった。（米田）

註

- (1) 和同6（713）年に備前国から久米郡を含む6郡を割いて美作国が分国された。
- (2) 河本清 1969「美作津山市寺山A1号墳」『古代吉備』第6集 古代吉備研究会
- (3) カキ谷B古墳群1号墳埋蔵文化財発掘調査委員会 1987『カキ谷B古墳群1号墳』
- (4) 岡山県教育委員会 1975「領家遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8
- (5) 東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- (6) 豊島雪絵 2001「古墳時代における石製紡錘車の性格—中国・近畿地方出土例を中心に—」『古代吉備』第23集 古代吉備研究会
- (7) 團奈歩 2022「集落から出土する弥生～古墳時代の紡錘車について—岡山県の事例から—」『紀要』第2号 岡山県古代吉備文化財センター
- (8) 註5文献と同じ
- (9) 吉田晶 1995「吉備地方における国造制の成立」『吉備古代史の展開』塙書房
- (10) 註5と同じ
- (11) 上梶武 2001「横口式窯跡の基礎的研究」『たたら研究』第41号 たたら研究会
- (12) 藤井雅大 2023「遺跡の変遷について」『勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告262 岡山県教育委員会
- (13) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1982『椋山遺跡群IV』
- (14) 上梶武 2013「古代吉備の鉄生産」『古文化談叢』第70集 九州古文化研究会
- (15) 光永真一 1992「製鉄と鍛冶」『吉備の考古学的研究』下巻 山陽新聞社
光永真一 2013『たたら製鉄』吉備人出版
- (16) 註14文献と同じ
- (17) 尾上元規 2023「吉備における6、7世紀の画期」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター
- (18) 亀田修一 2000「鉄と渡来人—古墳時代の吉備を対象として—」『福岡大学総合研究所報』第240号（総合科学編第3号）福岡大学総合研究所
- (19) 岡山県教育委員会 1974「宮尾遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4
- (20) 岡山県教育委員会 1974「久米廃寺」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2』註19文献と同じ
- (21) 小郷利幸 2020「小屋谷窯跡」『新修津山市史』資料編考古 津山市
- (22) 白石純 2022「桑山南古墳群・細畝古墳群出土遺物の胎土分析」『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告255 岡山県教育委員会
- (23) 白石純 2023「桑山古墳群出土遺物の胎土分析」『勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群』註12と同じ
- (24) 本書第5章第1節
- (25) 尾上元規・小嶋善邦・藤井雅大 2023「特徴的な副葬品」『桑山南古墳群 細畝古墳群』註23と同じ

図出典

第277図は註2～4・12・13・19・21をもとに作成。

第4節 佐良山古墳群の展開と集落遺跡について

1 佐良山古墳群の展開の画期について

高尾北ヤシキ遺跡では古墳時代後期の集落を確認した。この周辺丘陵上では高尾北ヤシキ古墳や桑山古墳群など佐良山古墳群の支群として知られる古墳群が複数形成される。本節では佐良山古墳群と集落・生産遺跡の展開について検討し、この時期の佐良山地域の遺跡動態について考察する。佐良山古墳群は北流する皿川東西の丘陵上に築造された南北約3.5km、東西約3kmの範囲にある複数の古墳群から構成される（第278図）。本節では『佐良山古墳群の研究』⁽¹⁾を参考に、各古墳の分布や地形から大きく5グループに分け、発掘調査例のある以下の3グループを中心として検討を行っていく。

グループ1 「笹山高鉢山西南西地域（笹山古墳群）」とされているグループで、約50基からなる。中宮1号墳や高野山根古墳群、剣戸古墳群などからなり、大型の前方後円墳や帆立貝形古墳が集中することから佐良山古墳群でもより有力な集団と思われる。

グループ2 「嵯峨山東面地域（嵯峨山東面古墳群）」とされているグループで、桑山古墳群や桑山南古墳群、細畝古墳群、高尾北ヤシキ古墳など約30基からなる。これまでに15基以上の発掘調査が実施され、佐良山古墳群中で最も内容が判明している一群である。

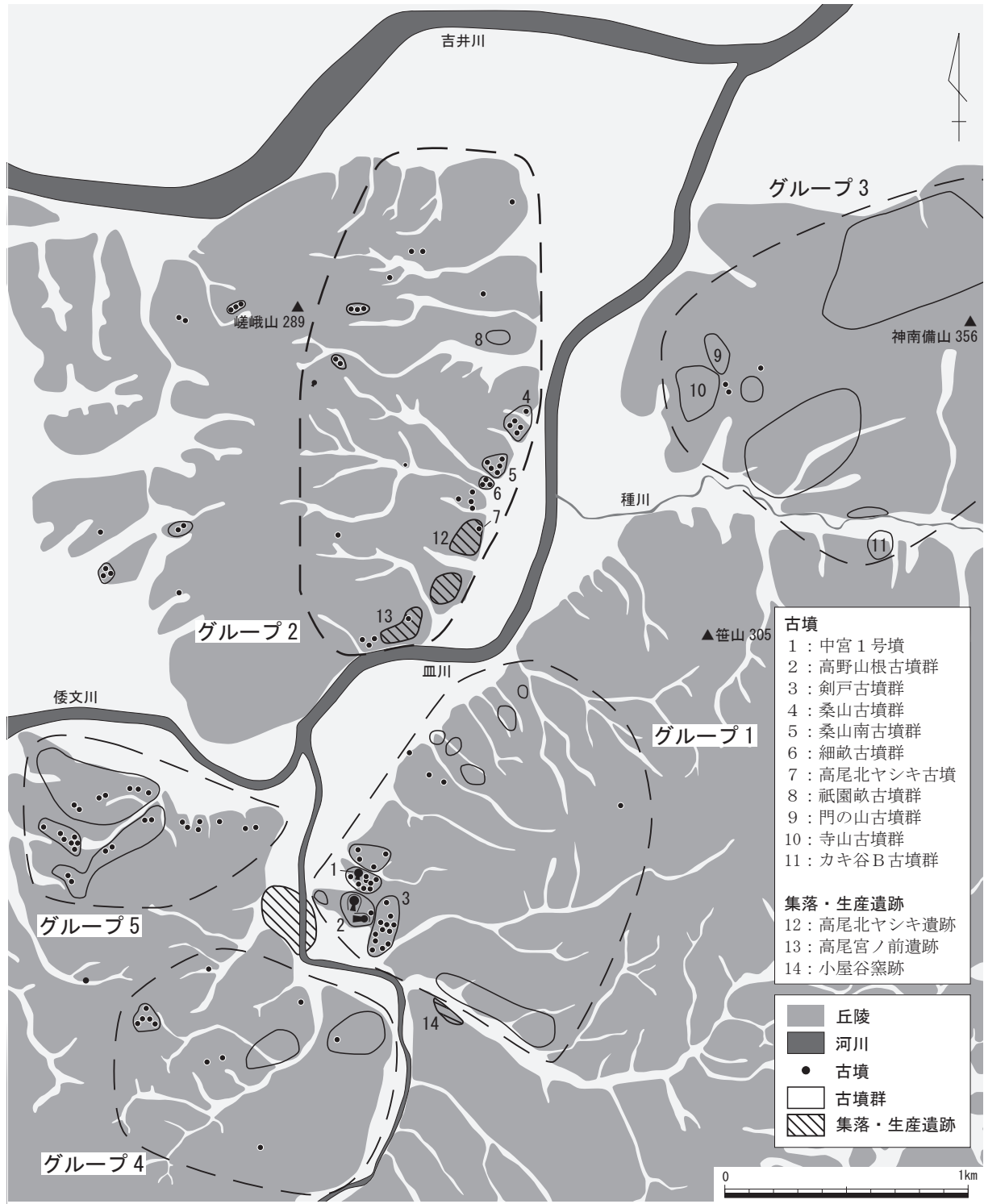
発掘調査が行われた古墳のうち、最も早く古墳が築造されるのは桑山古墳群（1～5号墳）や桑山南古墳群（2・4・5号墳）である。時期はいずれも6世紀中葉で、埋葬施設は竪穴系と横穴式石室の両者がみられる。6世紀後半～末には細畝古墳群や高尾北ヤシキ古墳が築造され、より墓域が拡大したとみられる。そのほか、尾上4期頃に位置づけられる祇園畝古墳群（2基）が1951年に近藤義郎氏らによって発掘調査されており、2号墳は陶棺2基が伴う横穴式石室であることが判明した。

グループ3 「神南備山西方地域（神南備山古墳群）」とされているグループで、門の山古墳群や寺山古墳群が属する。このグループでは竪穴系埋葬施設をもつ低平な墳丘の古墳が丘陵上に築造され、出土須恵器からこれらは5世紀後半に位置づけられる。6世紀中頃の古墳は知られていない。6世紀後半以降に再び古墳の築造が再開し、種川に面する丘陵裾部にカキ谷A・B古墳群などが築造される。

グループ4は「大平山東面地域（大平山東面古墳群）」とされている一群に相当する。グループ5は倭文川に面する丘陵上に位置する一群で、『佐良山古墳群の研究』では掲載されていないが、30基以上の古墳が知られている。

第279図に上記グループ1～3における古墳の築造と使用期間、集落・生産遺跡の活動時期を示した。古墳の時期については尾上元規氏による時期区分⁽²⁾に従い、5世紀段階については陶邑古窯跡群における須恵器編年によっている。

佐良山古墳群の形成過程は、古墳の築造時期や使用期間から大きく以下の3時期に区分できる。5世紀後半～6世紀前半（須恵器TK23・47～MT15型式）は横穴式石室導入以前の段階であり、竪穴系埋葬施設をもつ低平な古墳が築造される。6世紀中葉～後半（尾上1～2期）は横穴式石室が導入される段階であり、前方後円墳や帆立貝形古墳などの大型古墳が築造される。6世紀末（尾上3～4期）以降は前方後円墳の築造が終了し、また大型の墳丘をもつ古墳がほぼ見られなくなる段階である。横穴式石室は中型以下のものが殆どであり、またこの時期から陶棺が一般的に使用され始める。



第 278 図 佐良山地域の地形と遺跡 (1/25,000)

2 佐良山地域における墓域と集落の動態について

佐良山地域における遺跡の動態は、墓域としての展開が先行する。5世紀後半～6世紀前半にはグループ3で、6世紀中葉～後半はグループ1・2で墓域が形成される。これらの段階の古墳は特定の丘陵上や尾根に築造されるという特徴があり、墓域の範囲は限定されたものだったと考えられる。6

	遺跡名	時期									文献
		TK 47	MT 15	TK 10 (尾上1期)	TK 43 (尾上2期)	TK 209古 (尾上3期)	TK 209新 (尾上4期)	TK 217 (尾上5期)	TK 217 (尾上6期)	TK 217 (尾上7期)	
グループ1	中宮1号墳			■							1
	高野山根古墳群	1号墳		▨							4
		2号墳		▨							
	剣戸古墳群	13号墳					▨				4
14号墳							▨				
グループ2	桑山古墳群	1号墳		■							5
		2号墳		■							
		3号墳		■							
		4号墳		■	■						
		5号墳		■	■						
	桑山南古墳群	1号墳			■		■	■	■	■	6
		2号墳			■						
		3号墳			■			■	■	■	
		4号墳			■						
		5号墳			■						
	細畝古墳群	1号墳					■	■	■	■	6
		2号墳					■	■	■	■	
		3号墳				■	■	■	■	■	
	高尾北ヤシキ古墳						■			本書	
	祇園畝古墳群	2号墳					■	■		4	
グループ3	門の山古墳群	8号墳	■							7	
		12号墳		■							
		14号墳		■							
	寺山古墳群	A1号墳		■						8	
	カキ谷B古墳群	1号墳					■	■	■	9	
集落遺跡	高尾北ヤシキ遺跡			■ ■ ■	■					本書	
	高尾宮ノ前遺跡					▨				10	
生産遺跡	小屋谷窯跡					■				4	

古墳の場合、濃い色は築造時期を示し、薄い色は追葬期間を示す。斜線は未発掘もしくは調査中で年代が不確定なものを示す。

第 279 図 佐良山地域における遺跡の動態

世紀末以降には対象地域全体で古墳が築造されるようになり、急激な墓域の拡大が指摘できる。

集落は6世紀後半から開始される。最も集落の様相が明らかとなっているのはグループ2であり、高尾北ヤシキ遺跡がおおむね尾上2期（TK 43 型式段階）に、高尾宮ノ前遺跡は尾上3～4期に展開するとみられる⁽³⁾。そのほかグループ1・4の周辺では、小屋谷窯跡で7世紀前半に須恵器の生産が行われている。なお、高尾北ヤシキ遺跡では竪穴住居21軒、段状遺構20面が検出されているが、建物から出土する土器類はいずれも6世紀後半頃のものであり、継続期間の短い集落であったことが判明している。集落が形成され始める6世紀後半頃は、古墳の築造・使用が低調となる時期である（第279図）。グループ2ではこの時期に築造された可能性がある古墳は細畝3号墳のみであり、そのほかには桑山5号墳などの追葬を挙げるにとどまる。このことは、6世紀中葉～後半段階の古墳被葬者層と手工業生産を営んだ集落に居住していた人々が必ずしも同一ではないことを示唆するかもしれない。また、6世紀後半段階までの古墳と集落は同一の斜面上には存在せず、墓域と集落域は区別され

ていたものと考えられる。

続く6世紀末以降は、墓域・集落域がともに拡大する段階である。この段階の古墳の特徴としては、多くが中型（石室全長6～7m程度）以下の横穴式石室であること、副葬品に紡錘車（高尾北ヤシキ古墳・カキ谷B古墳群1号墳）など集落でも出土する手工業生産に関わる道具類を含むことが挙げられる。またこの段階に形成される墓域は、集落域との区別がなくなることも指摘できる。高尾北ヤシキ古墳は高尾北ヤシキ遺跡の居住終了と間を置かず築造され、高尾宮ノ前遺跡では集落と同一の丘陵斜面に古墳が築造されている。以上の特徴は、6世紀末以降の古墳被葬者層に集落で手工業生産を営んだ人々が含まれていること、被葬者層の増加・多様化に伴って墓域が拡大したことを示し、その結果として墓域と集落域が隣接するようになったと考えられる。

以上、佐良山古墳群の展開が大きく3段階に分けられること、6世紀末以降墓域が大きく拡大し、その理由として古墳の被葬者層が多様化したことを述べた。その背景としては、6世紀後半～7世紀における手工業生産の拡大があると考えられる。また、佐良山古墳群に認められる画期について、いわゆる新式群集墳とされる古墳群にも、6世紀中葉～後半（TK 10～43型式段階）と6世紀末～7世紀前半（TK 209～217型式段階）に画期があることは、岡山県南部の群集墳⁽¹¹⁾でも認められるほか、列島の広範囲で同様の例を見出すことができる。（四田）

註・文献

- (1) 近藤義郎編 1952『佐良山古墳群の研究』津山市教育委員会
- (2) 尾上元規 2022「古墳群の構成と形成過程」『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255 岡山県教育委員会
- (3) 高尾宮ノ前遺跡の発掘調査ではTK 209型式段階に位置づけられる集落にほぼ接して同時期の古墳が築造されていることが明らかとなっている。
- (4) 津山市史編さん委員会編 2020『新修 津山市史』資料編「考古」津山市
- (5) 岡山県教育委員会 2023『勝負峪遺跡 桑山遺跡 桑山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』262
- (6) 岡山県教育委員会 2022『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255
- (7) 佐良山門の山古墳群発掘調査委員会編 1992『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集 津山市教育委員会
- (8) 河本 清 1969「美作津山市寺山A1号墳」『古代吉備』第6集 古代吉備研究会
- (9) 平井泰男編 1987『カキ谷B古墳群1号墳』カキ谷B古墳群1号墳埋蔵文化財発掘調査委員会
- (10) 岡山県古代吉備文化財センター 2023「高尾宮ノ前遺跡」『所報吉備』第75号
- (11) TK 10型式段階に展開を開始する古墳群としては岡山市北区西山古墳群を、TK 209～TK 217型式段階にピークをもつものには総社市三因千塚古墳群を例として挙げるができる。

第5節 高尾北ヤシキ古墳の築造方法について

高尾北ヤシキ古墳では横穴式石室と竪穴式石室の2つの埋葬施設を持ち、かつ竪穴式石室が横穴式石室の完成前に埋葬を終えているという特徴を確認した(第4章)。本節では、両石室の掘り方、土層断面、墳丘の平面プランなどから、高尾北ヤシキ古墳の構築順序の復元を試みる。復元に際しては、諸々の要素を踏まえて検討を試み、2つの復元案を想定した。1つは同じ古墳に横穴式石室と竪穴式石室が造られたと考える案(以下「同一墳丘案」)で、2案目は当初別に造られた古墳を取り込む形で高尾北ヤシキ古墳が造られたと考える案(以下「取込案」)を復元した。以下、それぞれの復元案を見ていく。

1 古墳の立地

終末期古墳には風水思想によって選地された古墳の存在が指摘されている⁽¹⁾。この風水的選地は畿内だけでなく、畿内から離れた高知平野でも複数の古墳で確認され⁽²⁾、県南部の総社平野でも風水的立地が指摘される古墳⁽³⁾がある。高尾北ヤシキ古墳は先学の研究で指摘されている類型と明確に一致するものは認められないが、近接する古墳が群を成す中で、単独で丘陵先端部のやや窪んだ斜面を選地していること(第218図)から、何らかの影響を受けた可能性も否定できない。

2 同一墳丘案による築造過程

本項では、土層と掘り方に注目して復元した「同一墳丘案」について考察する(第280・281図)。

①横穴式石室の掘り方掘削

横穴式石室の掘り方を掘削する⁽⁴⁾。幅は石室の幅よりも広く余裕を持たせて設定する。深さは奥壁側と右側壁側のそれぞれ基底石が埋まる高さまで掘り下げる。また、作業をする為の平坦面を造り出すために高所部の斜面を削り、段を整形する。

②横穴式石室基底石の設置

横穴式石室の掘り方の底部に基底石を据えつける。据え付け時には設置に必要な分だけ掘り方の底部を掘り窪める。奥壁基底石は掘り方に沿うように設置し、両側壁は掘り方から離して配置する。その後、基底石の裏に裏込め土を入れる。右側壁側の掘り方はこの時に埋まる。

③一次墳丘の構築(一次工程)

横穴式石室を構築しながら、石室最上段付近まで小規模な墳丘を構築する。掘り方が埋まってしまった右側壁側は盛り土流出を防ぐために礫で土留めを行いながら盛り上げる。左側壁側の入り口側にも盛土を施していく。奥壁と側壁を最上段まで構築した後に天井石を設置する⁽⁵⁾。

④竪穴式石室の構築と埋葬

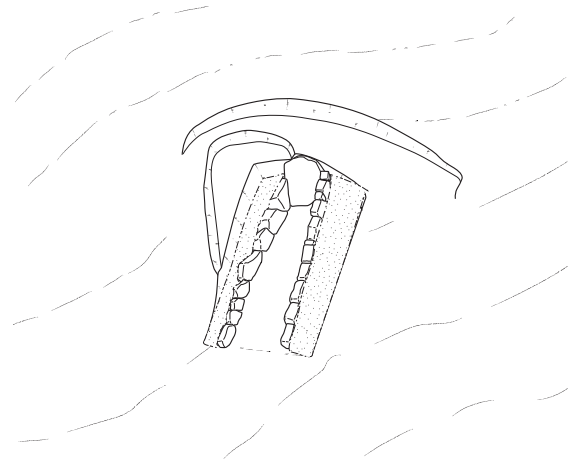
横穴式石室の南西側の地山と盛土の境界付近に等高線に直交するように掘り方を掘削し、竪穴式石室を構築する。その後、竪穴式石室で埋葬を行い天井石で密閉する。

⑤墳丘の完成(二次工程)

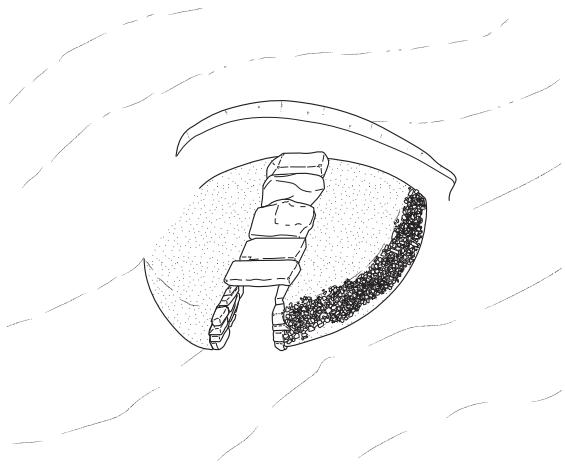
周溝を掘削し、その土などを用いて竪穴式石室の天井石を埋め、続いて横穴式石室の天井石上にも盛土を施し、墳丘を完成させる。その後、横穴式石室での埋葬を行う。



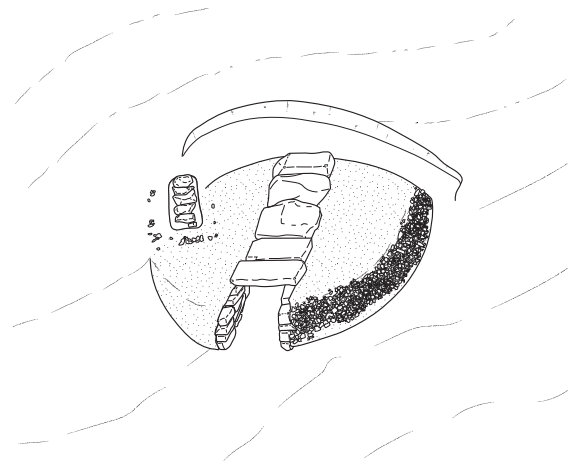
① 横穴式石室の掘り方掘削



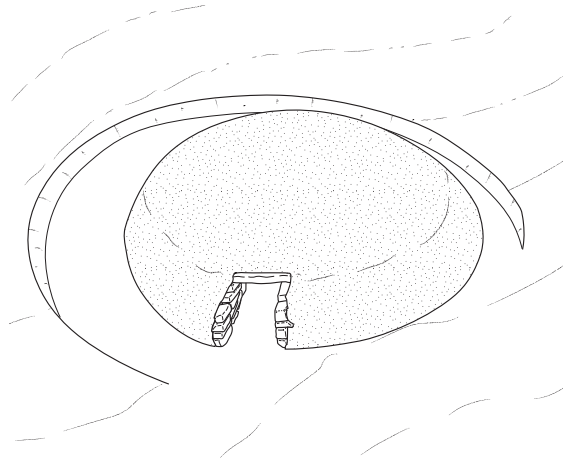
② 横穴式石室基底石の設置



③ 一次墳丘の構築（一次工程）

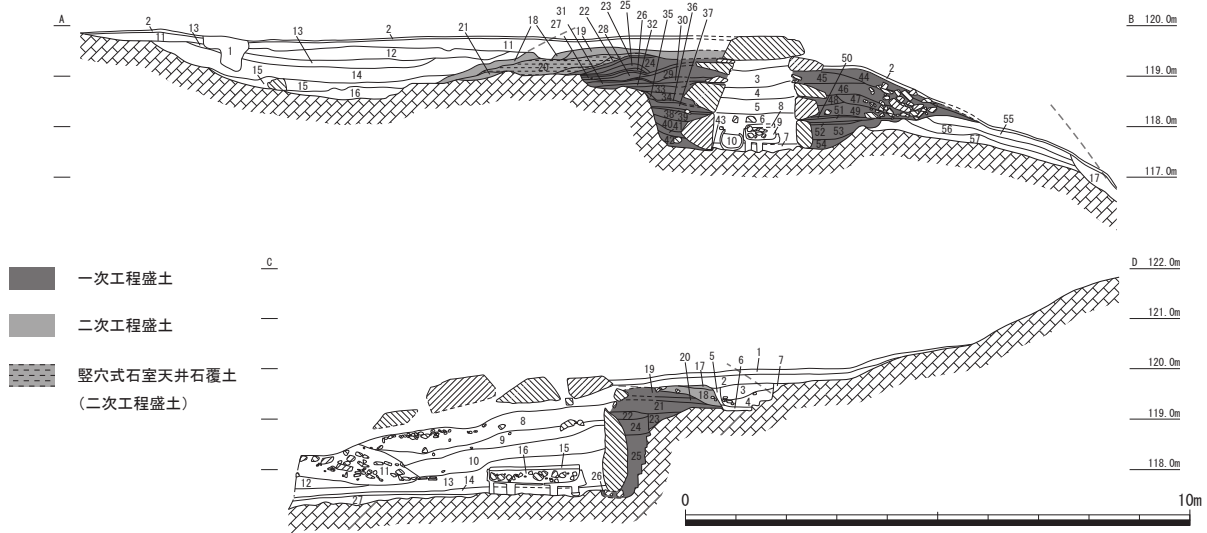


④ 縦穴式石室の構築と埋葬



⑤ 墳丘の完成（二次工程）

第280図 同一墳丘案築造工程模式図



第281図 高尾北ヤシキ古墳墳丘構築過程 (1/150)

3 取込案による築造過程

前項で、土層断面や掘り方などから高尾北ヤシキ古墳の築造過程を復元した。しかしながら、同一墳丘案の復元には、①堅穴式石室と横穴式石室の主軸が異なる点、②堅穴式石室が墳丘の端に寄りすぎている点、③追葬が容易である横穴式石室が完成間近であるにもかかわらず、同一墳丘内にわざわざ堅穴式石室を構築する点、④周溝がいびつな平面形となる点などの疑問点が生じる。

そこで周溝の形状などの古墳全体の平面プランから考えられる築造過程を提示しておきたいと思う。高尾北ヤシキ古墳の周溝を見てみると、墳丘西側で段になる中辺があることがわかる。この中辺は南側の周溝上辺と連続するようにも見受けられ、その場合、径約14.5mの半円形になる。そして、その円の中心に堅穴式石室が位置している(第282図)。この平面プランを重視すると、堅穴式石室を埋葬施設とする周溝外縁までの範囲が径約14.5mの円墳が先に築かれ、その古墳を取り込んで横穴式石室を埋葬施設とする高尾北ヤシキ古墳が築造されたと考えることもできる。

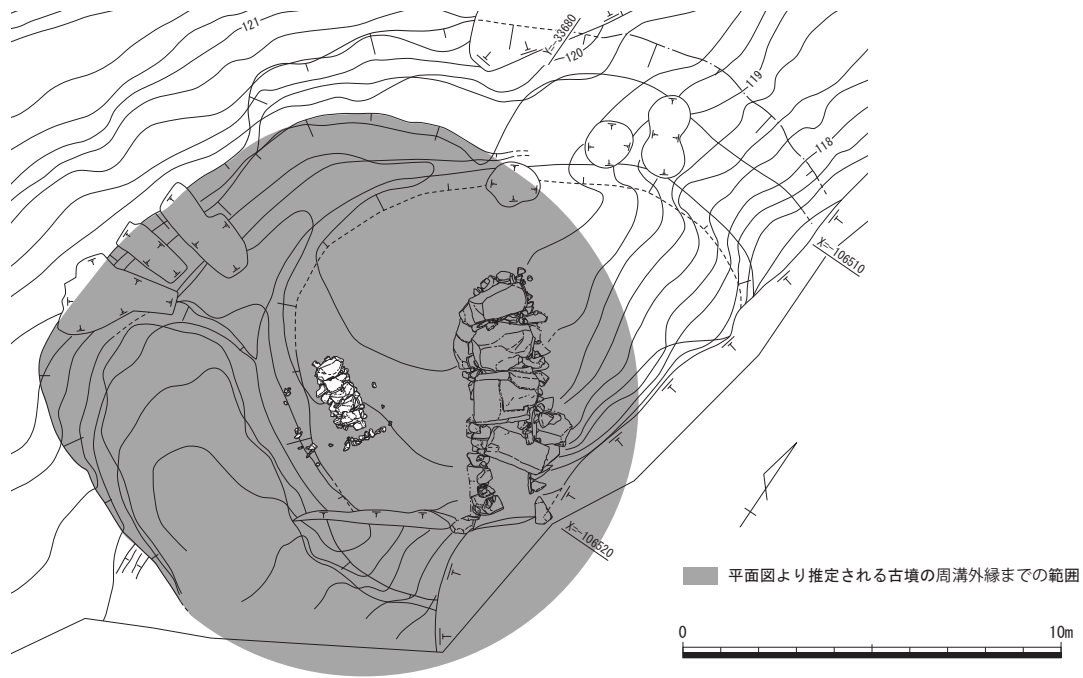
4 2つの築造過程案の検討

上記の項で提示した2つの築造過程案について、本項では現状でどちらが妥当か検討を試みる。

まず、同一墳丘案に対する疑問点は以下のように考えることで、疑問が和らぐかもしれない。①両石室の主軸が異なる点に関しては、横穴式石室の掘り方西側で堅穴式石室と同じ主軸とも考えられる段が認められ、これを当初に掘削され始めた掘り方の痕跡(第224図、第280図①)と仮定するならば、当初は同じ主軸での築造を試みたが、掘削途中に何らかの事情で急遽主軸を変更したと考えることもできる。②堅穴式石室が墳丘の端に寄る点は、堅穴式石室築造時には周溝が未掘削で、二次工程で周溝を掘削しながら墳丘を盛る作業を行う際に意図せず端に寄ったと考えることもできよう。

次に取込案についてであるが、こちらは堅穴式石室の天井石の上に乗る土(第222図一第20・22層)が、横穴式石室の裏込土やその上の一次工程の小規模墳丘の盛土層(第222図一第24～42層)の上に盛られているという土層状況からは矛盾してしまう(第281図)。

以上のことから、取込案で構築された可能性は現状では低いと考える。しかし、同一墳丘案は特異な復元案であるため、今後の更なる検討を行う上で、検討材料となるよう取込案も提示した。



第282図 別古墳の周溝外縁推定範囲 (1/200)

5 横穴式石室と竪穴式石室の被葬者間の関係性

以上の考察から、竪穴式石室は横穴式石室の構築中に造られ埋葬が行われたと考えた。この復元案の最大の疑問点は、横穴式石室が完成間近であるにも関わらず、同一墳丘内に竪穴式石室を新たに造り埋葬を行っている点であろう。これは同一石室に埋葬するほど親密な関係ではないが、別に墳丘を設けるまたは墳丘外に埋葬するほど疎遠な間柄でもないという人間関係を示すのではないかと考える。取込案を採用しても、同型式の須恵器が出土するほぼ同時期の古墳をわざわざ取り込む選択をすることから親密な関係を想起させるが、一方で改葬して両者を横穴式石室に合葬することは認められないことから同一墳丘案の場合と似た被葬者間の関係を想像させる。

両石室の被葬者は、同一墳丘に埋葬されるほど親密であるが、同一石室に合葬できない間柄であると指摘でき、横穴式石室墳の埋葬原理を考える上で貴重な資料であることは確実であろう。（藤井）

註

- (1) 河上邦彦 1997「終末期古墳の立地と風水思想」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
来村多加史 2004『風水と天皇陵』講談社
- (2) 清家章 2012「1 高知市朝倉古墳の立地と選地」『古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係』高知大学考古学調査研究報告第10冊 高知大学人文学部考古学研究室
- (3) 四田寛人 2019「古墳時代後期の吉備における鳶尾塚古墳の歴史的位置」『鳶尾塚古墳Ⅰ』—墳丘測量調査・石室実測調査報告— 岡山大学考古学研究室
- (4) 横穴式石室の掘り方西側に等高線と直交するような楕円形の段が認められる（第224図）。この段が当初に想定されていた横穴式石室の掘り方で、その後に主軸が変更された可能性もある。
- (5) 天井石設置前に竪穴式石室での埋葬が終えられていた可能性もあるが、天井石を設置する作業効率を考えると、作業空間を広く取ることができる竪穴式石室構築前に行われたと考えられる。

第6節 筒形土製品について

1 はじめに

高尾北ヤシキ古墳の横穴式石室からは、筒形土製品C2が出土している。その形態は、底部がなく、内部が空洞となっている円筒形を呈するもので、煙突形（状）土製品、円筒形土製品などとも呼ばれている。この土製品の機能や用途、さらに系譜については様々な案が提示⁽¹⁾されているが、本墳で出土したような形状を呈するものは炉やカマドなどの高温を発生させる遺構に伴う排煙具（煙突）とする案が強い。また、系譜については朝鮮半島に起源があり、渡来系集団との関わりを示す「朝鮮半島系考古資料」⁽²⁾と認識されている。本節ではこの土製品の検討から、本墳の被葬者像について考えてみたい。

2 筒形土製品の概要

この土製品が出土している遺跡は中国・近畿地方及び石川県で管見の限り43遺跡で、その点数は151点を数える⁽³⁾（第16表、第283～285図）。これらの多くは破片であるため全体形が把握可能な資料が限られているものの、その外形は、逆漏斗状に開く底部から直線的な体部が伸びるもの、口径と底径の差があまり無く直線的な体部で円筒状を呈するもの、口径と底径の差が大きく「ハ」字状に底部に向かって開くものという大まかに3つに分類できるが、細部の形態をみると、口縁部付近に鐙状の凸帯が巡るものや、体部に牛角把手・環状把手・円形把手や凸帯が付くものなどもあり、その形



第283図 筒形土製品出土遺跡の分布（番号は第16表と対応）

態は多様である。材質には土師質・須恵質・瓦質が認められ、土師質のものが出土している遺跡が全体の約3/4を占める。調整は、土師質が在来の土師器調整に認められるハケメやナデ、須恵質が内外面にタタキが施されるものが多い。

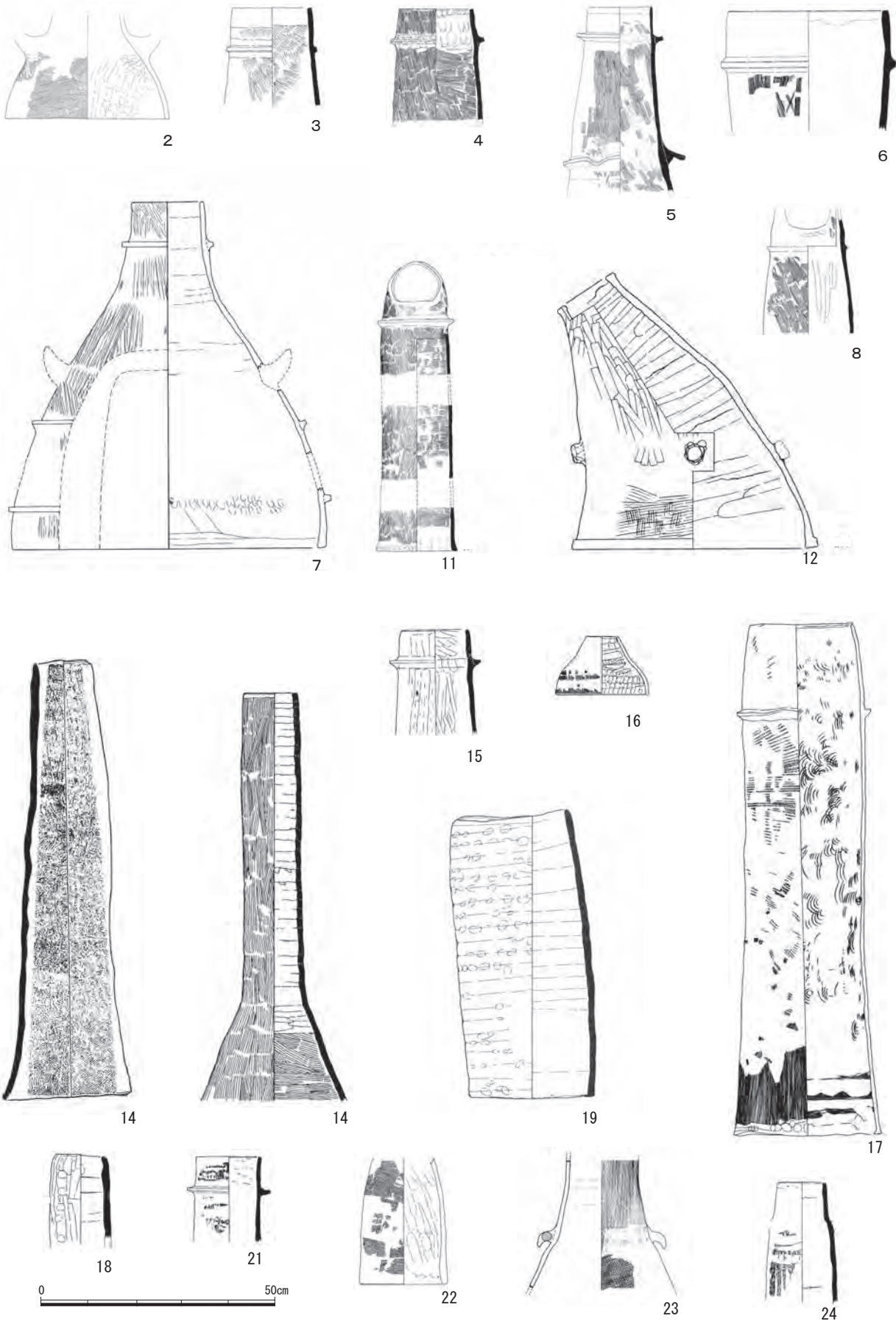
3 出土遺跡の様相

まず、本例と同様な墳墓からの出土例をみてみたい。今回の集成で墳墓出土例は、6遺跡を数える。原山4号古墳は、長方形を呈する主体部内に骨蔵器と考えられる土釜状の須恵質有蓋土器が2点埋葬

第16表 筒形土製品出土遺跡 [番号は第283～285図と対応]

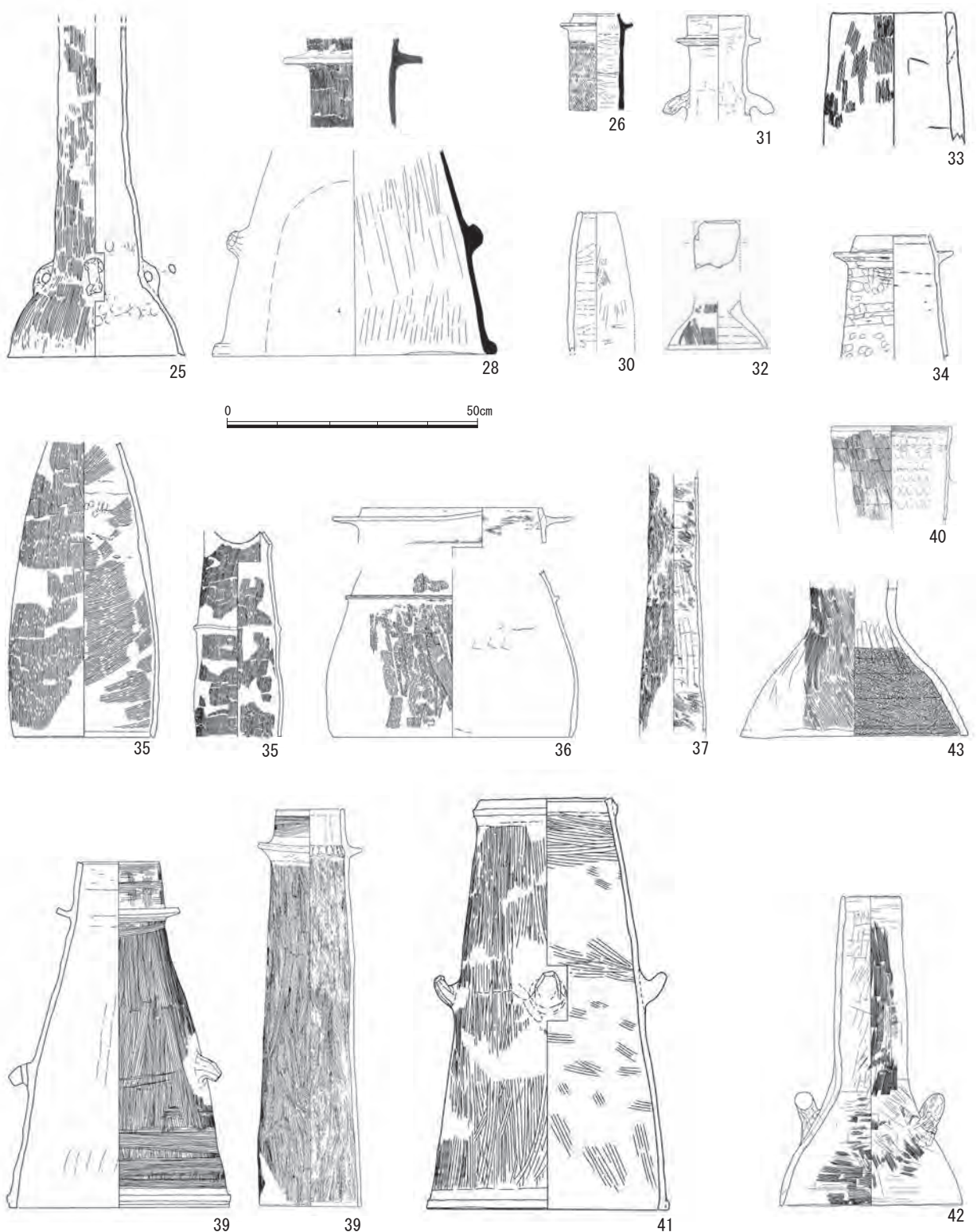
番号	遺跡名	出土地	※1			形態上の特徴	煤付着	年代	備考	文献
			土	須	瓦					
1	高尾北ヤシキ古墳	岡山県津山市	1				7C前半	雛形鉄器共伴。	①	
2	額見町遺跡	石川県小松市	1			環状把手?	○ 7C第3四半期	内面全体に煤付着。L字型カマドを付設する堅穴建物から出土。	②	
3	南滋賀遺跡	滋賀県大津市	1			鏝	○ 不明	内面に炭化物付着。大壁建物を検出	③	
4	穴太遺跡	滋賀県大津市	4		1	鏝	○ 6C後半～8C	出土遺構によって、帰属時期が異なる。内面に煤付着。大壁建物やオンドル状遺構等を検出	④	
5	坂本里坊遺跡	滋賀県大津市	1			鏝・凸帯	古墳時代		⑤	
6	横尾山古墳群	滋賀県大津市	1			鏝	7C前半		⑥	
7	小堤遺跡	滋賀県野洲市	1			鏝・牛角把手・凸帯	7C初頭		⑦	
8	西河原森ノ内遺跡	滋賀県野洲郡中主町	25			鏝・円窓・牛角把手	○ 7C後半～8C前半	内外面に煤付着するものあり。出土した木簡には渡来系氏族の名前を列記。	⑧	
9	光相寺遺跡	滋賀県野洲郡中主町	1			鏝	7C後半～8C	大壁建物やカマド状遺構を検出。	⑨	
10	長岡京跡	京都府長岡京市	1				6C		⑩	
11	内里八丁遺跡	京都府八幡市	2			鏝・円窓	○ 不明	手焙形のようなドーム状の覆いが付く。煤付着。	⑪	
12	細工谷遺跡	大阪府大阪市		1		円形把手	7C後半	金属器生産遺跡。「百済尼」・「百尼」などの墨書土器、鍛冶具や金属器が出土	⑫	
13	難波宮跡	大阪府大阪市	1			鏝	6C末～7C前半	羽口・鍛冶滓など出土	⑬	
14	陶邑伏尾遺跡	大阪府堺市	1	3			5C後半～6C	生産工人集落跡。	⑭	
15	小阪遺跡	大阪府堺市	1	1		鏝	○ 5C～7C	出土遺構によって、帰属時期が異なる。陶工集落跡とされる。内外面に煤付着するものあり。	⑮	
16	陶邑・大庭寺遺跡	大阪府堺市・八尾市	1	2		鏝	5C後半	竈の焚口枠(U字形土製品)出土	⑯	
17	陶器千塚29号墳	大阪府堺市		1		鏝	6C末葉	横穴式木芯粘土室から出土。土器棺に転用されたものか。	⑰	
18	陶器南遺跡	大阪府堺市		3			時期不明		⑱	
19	原山4号古墳	大阪府堺市			15		7C前半		⑲	
20	豊島北遺跡	大阪府豊中市	2			鏝	5C後半	韓式系土器出土。	⑳	
21	嶋上郡衙跡	大阪府高槻市	1			鏝	7C前半		㉑	
22	太田1号墳	大阪府茨木市	2				○ 6C末～7C初頭	内面煤付着。	㉒	
23	八尾南遺跡	大阪府八尾市	1			牛角把手	5C後半	竈の焚口枠(U字形土製品)出土。	㉓	
24	小坂合遺跡	大阪府八尾市		3		鏝	7C代?	竈の焚口枠(U字形土製品)出土。	㉔	
25	楠遺跡	大阪府寝屋川市	1			環状把手	5C後半	初期須恵器や韓式系土器が多量に出土。馬の歯や下顎骨出土。	㉕	
26	寺田遺跡	大阪府和泉市		8		鏝	5C中頃	韓式系土器片・馬歯など出土。	㉖	
27	大泉南遺跡	大阪府柏原市		1		鏝	不明	鉄器生産遺跡。	㉗	
28	高井田遺跡	大阪府柏原市	2	2	1	鏝・円形突起・凸帯	○ 6C後半～8C	煤付着するものあり。出土遺構によって帰属時期が異なる。鉄滓・羽口出土。	㉘	
29	車地遺跡	大阪府羽曳野市		1			7C後半～8C	羽口・埴埴など出土。	㉙	
30	伊賀南遺跡	大阪府羽曳野市		1			7C中葉～8C	青銅滓や焼土を検出。	㉚	
31	大園遺跡	大阪府高石市	2	1		鏝・牛角把手	5C	大壁建物検出。U字形板状土製品(カマド焚き口)出土。	㉛	
32	奈良井遺跡	大阪府四條畷市	1				○ 6C後半	煤付着。韓式系土器出土。	㉜	
33	葦屋北遺跡	大阪府四條畷市	25	4	1		5C後半～6C後半	「河内の馬飼」の拠点とされる。韓式系土器出土。出土遺構によって、帰属時期が異なる。	㉝	
34	私部南遺跡	大阪府交野市		1		鏝	6C後半		㉞	
35	上脇遺跡	兵庫県神戸市	7			鏝・円窓・凸帯	6C後半～7C後半	出土遺構によって、帰属時期が異なる。鉄滓・羽口、韓式系土器出土。	㉟	
36	坂元遺跡	兵庫県加古川市	4			鏝・凸帯	7C前半		㊱	
37	竹万宮ノ前遺跡	兵庫県上郡郡上郡町	1				△ 6C後半	外面に煤付着か。渡来系遺物出土。	㊲	
38	城島遺跡	奈良県桜井市	1			牛角把手	6C中葉	羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土。	㊳	
39	南郷遺跡群 下茶屋カマド遺跡	奈良県葛城市	2			鏝・牛角把手	6C前半	鍛冶・玉生産遺跡。	㊴	
40	高田垣内古墳群 風呂の谷支群	奈良県宇陀郡榛原町	1				5C中葉?		㊵	
41	イノラク12号墳	奈良県高取町	1			牛角把手	6C中葉	煙突形土製品を棺身、把手付き鍋を棺蓋。	㊶	
42	大井聖坂遺跡	鳥取県鳥取市	2			環状把手	○ 7C前半	内外面に煤付着。	㊷	
43	出雲国府跡下層	島根県出雲市	1				5C前半	韓式系土器出土。	㊸	

※1 土：土師質、須：須恵質、瓦：瓦質を示し、数値は報告書掲載点数



第284図 各遺跡出土筒形土製品① (1/12) [番号は第16表と対応]

されていた7世紀後半の古墓である。15点出土した瓦質の筒形土製品は墓坑の短辺側に3本ずつ立てて、残りの9本は墓坑上に横倒しにした状態で置かれていたと想定されている。墓坑内から出土した破碎されていた鴟尾は、被葬者の性格を示唆するものとしている。6世紀末頃に築かれた陶器千塚29号墳は、主体部が横穴式木芯粘土室である。追葬時に土器棺として利用されたと考えられている須恵



第285図 各遺跡出土筒形土製品② (1/12) [番号は第16表と対応]

質の筒形土製品は、その長軸を粘土室主軸と並行させて北西辺に接して置かれていた。被葬者は、須恵器製作集団と密接な関連が想定されている。イノヲク 12 号墳は、破壊された主体部から 6 世紀中頃の遺物が採取されている古墳である。この古墳が所在する高取町では、「朝鮮半島系考古資料」の出土・検出が多く認められ⁽⁴⁾、イノヲク古墳群は「渡来系鍛冶集団の墓域」と評価されている⁽⁵⁾。土師質の筒形土製品は墳丘の造り出し部に設けられた土坑内から横転した状態で出土したようで、一緒に出土した土師器鉢から棺として利用された可能性が指摘されている。そのほかの墳墓はいずれも埋葬施設外からの出土で、横尾山古墳群が 9 号墳下方の斜面から、太田 1 号墳が窪地として残存した周溝内から、高田垣内古墳群風呂の谷支群が ST01 墓坑の周辺からである。

一方、大多数の筒形土製品は集落遺跡から出土している。これら集落遺跡からは、韓式系土器やカマドの焚口枠である U 字形板状土製品などの出土や、大壁建物跡や L 字形カマド（オンドル状遺構）を敷設する住居跡などの検出が認められる。また、これらの遺構・遺物は認められないが、渡来人との関わりが強いとされる職掌（手工業生産や馬の飼育など）に携わった集団が居住していたとされる遺跡から出土している例がある。

時期別の分布傾向をみると、5 世紀代は島根県の 1 例を除くと大阪府内、特に初期の渡来系集団が居住したとされる地域に集中する。6 世紀代は奈良県・兵庫県・京都府まで分布が広がる一方で、大阪府内は少ない。7 世紀代ではさらに分布域が拡大し、石川県・滋賀県・岡山県・鳥取県などでも出土するが、大阪府内でも出土遺跡が増える。

4 本墳出土の筒形土製品の特徴

詳細は第 4 章第 3 節に記載しているとおりであるが、改めて本墳出土の筒形土製品をみてみよう。形態は鏝や把手がなく、やや胴張りを呈しつつ底部に向かって開く円錐形で、その口縁部は斜めに切られており、横から見ると円窓状をなす。体部形態に近似するものは、口縁部を欠くが上脇遺跡（土器群 52202 出土）から出土している。また円窓状をなす口縁部は、内里八丁遺跡、上脇遺跡（SX52403 出土）、西河原森ノ内遺跡で認められる。帰属時期が不明な内里八丁遺跡例を除き両遺跡例とも 7 世紀以降のもので、「朝鮮半島系考古資料」も共伴している。出土遺構は管見の限り初例となる横穴式石室からで、陶棺の南辺に沿うように横転した状態で検出された。石室天井高が約 1.9 m あるため立てて置くことが可能にもかかわらず、横たえていたことから陶器千塚 29 号墳例のように蓋がない棺として使用されたかもしれない。ただし、土製品の内部から人骨や耳環などの副葬品が検出されなかったことから、意図的に横たえて置いた副葬品とも考えられる。

5 被葬者像について

はじめにでも述べたとおり、この土製品と渡来系集団との関わりはすでに多くの方が指摘しているが、本墳に副葬されたその他の遺物からも被葬者像を考えてみたい。

まず目を引くのが 8 点出土している雛形鉄器（小型農工具）である。奈良県内の小型農工具を集成した坂氏は、この農工具は渡来系鍛冶工人と強く関連する遺物であると指摘する⁽⁶⁾。本墳盛土中から製錬滓が、隣接する高尾北ヤシキ遺跡で古墳時代後期に属する竪穴住居 9・10・16 などから椀形鍛冶滓が出土しており、さらに本墳から約 4 km 西には 6 世紀後半～7 世紀前半の製鉄炉や鍛冶炉が検出された大蔵池南遺跡が所在することから、炉の場所は不明であるが本墳近隣でも製鉄や鍛冶が行われて

いたことは想像に難くない。岡山県の小型農工具の状況を把握し切れていないため、坂氏の論をそのまま援用することの是非もあるが、被葬者の周辺に渡来系鍛冶工人集団が存在していた可能性は高いと思われる。

次に皮の縫い目などが表現されていない皮袋形瓶 29 も注目される。尾上氏は佐良山古墳群の性格や造営背景のひとつとして、特殊器種を含む須恵器生産の可能性を指摘している⁽⁷⁾。となれば、被葬者は須恵器生産工人もしくはそれらを取り纏めた人物かもしれない。

以上のことから本墳の被葬者は、他の墳墓（原山4号古墳、陶器千塚29号墳、イノヲク12号墳）と同様に、渡来人もしくは渡来系の生産工人集団と何らかの関わりを持つ人物であった可能性がある。さらに先学諸氏の言うとおりに、この土製品が百済との関わりが深い遺物⁽⁸⁾とした場合、6世紀以降に百済系の「朝鮮半島系考古資料」が美作地域で確認される⁽⁹⁾ことも併せて、百済系の渡来系集団に近い人物であったと言えるかもしれない。

6 さいごに

他遺跡例を実見していないため断定できないが、報告書による限り煤の付着などの使用痕跡が認められるものが11遺跡例に止まることは、この土製品が実用品でなかったもしくは使用頻度が少ない非日常的な使用であったため煤が付着しなかったことが考えられる。また集落域全域を調査した遺跡がなく、出土したすべての破片を報告書に掲載しているとは限らないが、集落遺跡にもかかわらず出土点数が少ないことは、日常的に使用されるもの（実用品）ではなかった可能性もある。これらのことと、先に述べたとおりこの土製品の形態が多様であることから、同じ筒形土製品に分類されながらも、使用方法や用途が異なるものが存在しているのではなかろうか。現状ではそれらを区分する基準を持ち合わせていないが、より詳細な検討によって用途や性格が明らかになるかもしれない。

小稿をなすにあたり、亀田修一、高田貫太、田中清美、行田裕美の諸氏には、現地での指導・助言や関係論文の教示など大変お世話になった。記して謝意を表したい。 (小嶋)

註

(1) 杉井 健訳 2010「百済土製煙筒試論」『文学部論叢』第101号 熊本大学文学部

田中清美 2014「近畿地方出土の煙突形土製品と渡来人」『韓式系土器研究』Ⅷ 韓式系土器研究会

徳網克己 2001「カマドに伴う煙突について」『平成11年度中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第60集 中主町教育委員会

徳網克己 2005「カマドに伴う円筒形土製品について」『龍谷大学考古学論集』Ⅰ 龍谷大学考古学論集刊行会

西垣 遼 2017「古代日韓における筒形土製品小考—その形態を中心として—」『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第17号 帝塚山大学大学院人文科学研究科

西山克己 2013「7世紀前半を中心に科野で用いられた円筒形土製品」『シナノにおける古墳時代社会の発展から律令期への展望』雄山閣

坂 靖 2007「筒形土製品からみた百済地域と日本列島」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』小笠原好彦先生退任記念論集刊行会

第6章 総括

望月精司 2007「額見町遺跡出土の煙突状土製品に関する考察—山陰型甑型土製品と円筒形土製品を繋ぐもの—」『石川県考古学研究会々誌』第50号 石川考古学研究会

崔榮柱 2010「三国・古墳時代における土製煙筒研究—韓半島と日本列島を中心に—」『立命館大学考古学論集』V 立命館大学考古学論集刊行会

(2) 亀田修一 2020「列島各地の渡来系文化・渡来人」『シリーズ古代史をひらく 渡来系移住民—半島・大陸との往来』岩波書店

(3) 坂氏が分類した排煙管（註1坂論文）を中心に、註1の諸論文を参考に集成した。また第16表における点数・材質・煤の付着等の項目については、報告書等に掲載されているもののみを集計している。

筒形土製品は、その形態がいわゆる「山陰型甑形土器」と近似しているが、西垣氏が指摘しているとおりの（下記、西垣2016論文）、「山陰型甑形土器」と筒形土製品は時空間が一致しない。よって現状では両者は別資料であると判断し、弥生時代から古墳時代前半までで、山陰及びその周辺から出土している底部がなく、内部が空洞となっている円筒形を呈するものは集成対象外とした。ただし、先の条件では鳥取県の秋里遺跡（財団法人鳥取市教育福祉振興会1996『秋里遺跡』）、岩吉遺跡（鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団1991『岩吉遺跡Ⅲ』）、小鑄物師遺跡（倉吉市教育委員会1987「小鑄物師遺跡」『倭文遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』倉吉市文化財調査報告書第48集）が集成対象となるが、「山陰型甑形土器」に形態が近いと判断し除外している（ただし、これらについては今後の検討課題となるかもしれない）。なお、「山陰型甑形土器」については、主に次の論文を参照した。

杉井 健 1994「山陰型甑形土器と山陰地方」『古文化談叢』第34集 九州古文化研究会

長川加奈子 2001「山陰型甑形土器」『神女大史学』第18号 神戸女子大学史学会

長友朋子 2008「弥生時代終末期における丸底土器の成立とその歴史的意義」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

西垣 遼 2015「いわゆる“山陰型甑形土器”の基礎的研究—分類と変遷を中心に—」『日本文化史研究』第46号 帝塚山大学奈良学総合文化研究所

西垣 遼 2016「いわゆる“山陰型甑形土器”の再検討—変遷と分類案の再整理及びその分布について—」『帝塚山大学考古学研究所研究報告XⅧ』帝塚山大学考古学研究所

(4) 木場幸弘 2008「高取町周辺の渡来系氏族の遺跡」『ヤマトの開発史』2 奈良女子大学21世紀COEプログラム

(5) 坂 靖 2005「小型鉄製農工具の系譜—ミニチュア農工具再考—」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第28冊 奈良県立橿原考古学研究所

(6) 註5文献

坂 靖 2010「葛城の渡来人～豪族の本拠を支えた人々～」『研究紀要』第15集 由良大和古代文化研究協会

(7) 尾上元規 2021「特殊須恵器」『桑山南古墳群・細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告255 岡山県教育委員会

(8) 註1文献

(9) 亀田修一 2022「美作の渡来人に関する覚書」『人・墓・社会—日本考古学から東アジア考古学へ—』土生田純之先生退職記念事業会

第284・285図・第16表文献

①本書

- ②小松市教育委員会 2007『額見町遺跡 II (B地区及びC地区一部区域の調査) 2』
- ③滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1993『南滋賀遺跡』
- ④大津市教育委員会 1989『穴太遺跡(弥生町地区)発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書15
大津市教育委員会 2011『穴太遺跡(南川原地区)発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書55
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2000『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- ⑤大津市教育委員会 2015「II 坂本里坊遺跡」『埋蔵文化財発掘集報—国庫補助事業(市内遺跡発掘調査等)発掘調査報告書Ⅵ—』大津市埋蔵文化財報告書91
- ⑥滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1988『横尾山古墳群発掘調査報告書』
- ⑦夜須町教育委員会 1987「小堤遺跡」『野洲町内遺跡発掘調査概要』
- ⑧中主町教育委員会 1987『西河原森ノ内遺跡—第1・2次発掘調査概要』中主町文化財調査報告書第9集
- ⑨中主町教育委員会 2001『平成11年度中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第60集
- ⑩財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1998「右京第558次(7 ANIHJ-4地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報—平成8年度—』
- ⑪財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999『京都府遺跡調査報告書』第26冊
- ⑫財団法人大阪市文化財協会 1999『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- ⑬田中清美・絹川一徳 2014「龍造寺谷から出土した煙突形土製品」『葦火』173号
- ⑭大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1990『陶邑・伏尾遺跡A地区』財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第60輯
森村健一 1992「伏尾遺跡検出の粘土貯蔵土坑・土管について」『陶邑・伏尾遺跡ⅡA地区』財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第72輯
- ⑮大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1992『小阪遺跡』
- ⑯大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1990『陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ』
大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1989『陶邑・大庭寺遺跡』財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第41輯
大阪府教育委員会他 1996『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書10
- ⑰堺市教育委員会 1986「陶器千塚29号墳発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第25集
- ⑱大阪府教育委員会 2007『陶器遺跡・陶器千塚・陶器南遺跡』
- ⑲大阪府教育委員会 1990『陶邑Ⅶ』大阪府文化財調査報告7
- ⑳豊中市教育委員会 2015『豊島北遺跡第6次発掘調査報告書』豊中市文化財調査報告第69集
- ㉑高槻市教育委員会 1997『嶋上遺跡群21』高槻市文化財調査概要XXIII
- ㉒公益財団法人大阪府文化財センター 2020『太田遺跡・太田廃寺跡 太田遺跡・太田城跡1』茨木市文化財資料集第73集
- ㉓八尾南遺跡調査会 1981『八尾南遺跡』
- ㉔財団法人大阪府文化財調査研究センター 2000『小阪合遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集

第6章 総括

- ②⑤寝屋川市史編纂委員会 1998「楠遺跡」『寝屋川市史』第1巻
- ②⑥大阪府教育委員会 2007『寺田遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2006-7
大阪府教育委員会 2013『寺田遺跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2012-2
- ②⑦柏原市教育委員会 1994「大県南遺跡」『柏原市遺跡群発掘調査概報－1993年度－』柏原市文化財概報 1993
－VII
- ②⑧柏原市教育委員会 1987『高井田遺跡Ⅱ』柏原市文化財概報 1986－VI
柏原市教育委員会 1989『高井田遺跡Ⅲ』柏原市文化財概報 1988－IV
- ②⑨羽曳野市遺跡調査会 1996『平成8年度市営車地住宅埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ③⑩羽曳野市教育委員会 1995「伊賀南遺跡」『古市遺跡群XVI』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第32
- ③⑪藤田道子 2016「大園遺跡と渡来人」『大阪府教育庁文化財調査事務所年報』20
- ③⑫四條畷市教育委員会 2012『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』
- ③⑬大阪府教育委員会 2010『葦屋北遺跡Ⅰ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2009－3
大阪府教育委員会 2012『葦屋北遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2011－1
- ③⑭財団法人大阪府文化財センター 2011『私部南遺跡Ⅱ2』財団法人大阪府文化財センター調査報告書 207
- ③⑮兵庫県教育委員会 2002『上脇遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第232冊
- ③⑯兵庫県教育委員会 2006『坂元遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第308冊
兵庫県立考古博物館 2009『坂元遺跡2』兵庫県文化財調査報告第366冊
- ③⑰兵庫県教育委員会 2009『竹万宮ノ前遺跡』兵庫県文化財調査報告第357冊
- ③⑱桜井市教育委員会 2001『桜井市平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書第22集
- ③⑲奈良県立橿原考古学研究所 1996「下茶屋（カマ田・サカイ田）遺跡」『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然
記念物調査報告第69冊
- ④⑰奈良県立橿原考古学研究所 1991『高田垣内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 63
- ④⑱高取町教育委員会 1992『イノヲク古墳群第4次発掘調査報告』
- ④⑳財団法人鳥取市文化財団 2005『大井聖坂遺跡・大井家ノ下モ遺跡』
- ④㉑島根県教育委員会 2003『史跡出雲国府跡1』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 14

第7節 高尾北ヤシキ遺跡の中世集落について

高尾北ヤシキ遺跡では、丘陵斜面を造成した整地面1～4を中心に複数の掘立柱建物や柱穴列などの遺構が集中的に配置され、複数回の建て替えによって重複するように見つかった。主要な遺構は、整地面4面、掘立柱建物20棟、柱穴列38列、段状遺構9面、土坑17基、溝5条、集石4基などである。中世の遺構は複雑な様相を呈するが、限られた情報のなかで遺構の変遷や集落構造を整理し、掘立柱建物の配置、構造、規模を周辺の遺跡と比較しながら、中世集落の性格についてまとめる。

1 集落の構造

中世の遺構は、3区西側の上段に整地面1、中央の中段に整地面2、東側の下段に整地面3、4区南西に整地面4を造成して掘立柱建物や柱穴列などが集中的に配置されたほか、2区では柱穴列3～6、3区の北東隅では12世紀に段状遺構33、4区中央では14世紀に段状遺構35が造られた。

整地面1は南北45m前後、東西12mの規模で、掘立柱建物2～8、柱穴列7～21、土坑10～17が重複かつ集中して配置された。遺構の配置や切り合い関係から、掘立柱建物5→6、掘立柱建物7→8、柱穴列12→掘立柱建物2→3→4→柱穴列15・16の順に各々建て替えられたことが想定され、建て替え回数が4回以上と多い。遺構の配置状況から、掘立柱建物2・7は併存した可能性があり、整地面1では一時期に1～2棟の掘立柱建物が建っていたと考えられる。掘立柱建物2～8はいずれも側柱建物で、間取りは1間×2間、1間×1間、2間×2間→2間×3間に拡張する傾向にある。床面積は掘立柱建物4が最大で25.77㎡であるほかは、掘立柱建物3～5が23～24㎡、掘立柱建物2が19㎡、掘立柱建物6～8が8㎡と小規模である。また、長方形や方形の土坑が整地面1に偏って多く認められ、その機能を考えるうえでも注視される。遺物を伴う遺構が少ないが、柱穴列10が12世紀前後、柱穴列12が13世紀、掘立柱建物3が14世紀、掘立柱建物4が14世紀後半、掘立柱建物5が14世紀中頃、溝2は15世紀後半～16世紀前半に位置付けられる。よって、整地面1は12世紀から16世紀前半の長期にわたって使用され、整地面1～4のなかで最も早く造成された。

整地面2は南北33m、東西13mの規模で、北側に段状遺構31、中央に建物9・10や柱穴列22～25、南側に掘立柱建物11・12、柱穴列26・27、溝3～5が配置された。このうち、配置状況や切り合い関係から、掘立柱建物9→10、11→12の順で建て替えられた可能性がある。また、掘立柱建物の構造や主軸から、掘立柱建物9・11、掘立柱建物10・12はそれぞれ併存したことが推測される。掘立柱建物9・10は側柱建物、掘立柱建物11は総柱建物、建物12は西庇を伴う側柱建物の可能性がある。間取りは1間×3間、2間×2間、2間×3間で、床面積は掘立柱建物9が最大で30.44㎡であるほかは、掘立柱建物10は29㎡、掘立柱建物12は25㎡、総柱の掘立柱建物11は20㎡で、小型でもやや規模が大きい。

段状遺構31はP1に鏡像M24が埋納されたほか、北端に集石1を伴うなど、整地面2の北端や谷部に立地することも含めて、居住遺構とは異なった性格をもつ。

整地面2では時期が把握できる遺構に限られ、掘立柱建物12が14世紀第4四半期、段状遺構31が14世紀後半、溝3が14世紀に比定される。また、整地面2出土遺物から14世紀～15世紀第4四半期の幅があり、整地面2の使用期間を示すと考えられる。整地面2は掘立柱建物の規模が中型のみ

で構成され、総柱や庇を伴う可能性がある建物を含むことから、集落内でも特別な空間でやや高位の階層者が居住したことが想像されるほか、建て替えが1回で使用期間は短かったことが考えられる。

整地面3は南北19m、東西23m以上の規模で、掘立柱建物13～16、柱穴列28～37、段状遺構34、土坑20～23、溝1・6が配置された。1間×1間の掘立柱建物13～16は重複して見つかり、配置状況や切り合い関係から、掘立柱建物13→14→15→16の順で建て替えられた可能性がある。出土遺物から柱穴列32は13世紀後半、溝1は14世紀後半、溝6は15世紀第3四半期に比定される。

整地面4は南北9m、東西23m以上の規模で、掘立柱建物17～21、柱穴列40、土坑19が配置された。掘立柱建物17→18、19→20→21の順に建て替えられ、各建物が2棟併存した可能性がある。掘立柱建物18の出土遺物は16世紀後半に比定され、整地面4は整地面1～4のなかで最も新しい。

中世の遺構は整地面1～4に集中して配置され、ほぼ同じ地点で同規模の掘立柱建物が重複するように建て替えられていることから、掘立柱建物の機能に応じて空間を分けて計画的に集落が営まれた可能性が高い。また、屋敷地となる居住域を囲む区画溝が認められない点も注意しておく。

2 集落の変遷

整地面1～4を中心に遺構の配置や時期を整理すると、高尾北ヤシキ遺跡の中世集落は12世紀から16世紀にかけて継続的に営まれ、I～IV期の変遷をたどることが復元できる(第286図)。

I期は12世紀で、整地面1が造成されて柱穴列10が造られたほか、3区北東に段状遺構33が造られた。掘立柱建物の配置は明確ではない。

II期は13世紀で、整地面1に柱穴列12、新たに造成された整地面3に柱穴列31・32が造られた。また、整地面1・3間の緩斜面には段状遺構32が造られた。

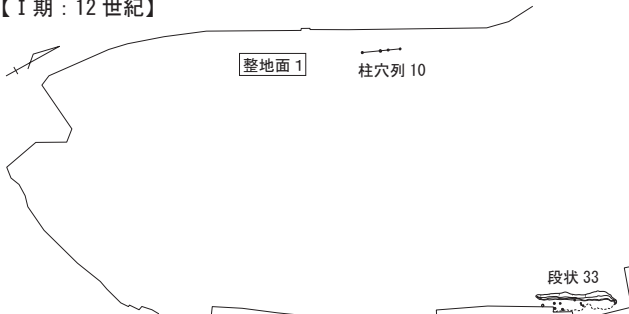
III期は14世紀で、整地面1・3が継続することに加え、整地面2が造成されて居住域がさらに拡大し、集落の最盛期となる。整地面1では掘立柱建物5が14世紀中頃、掘立柱建物3が14世紀、掘立柱建物4が14世紀後半に比定され、切り合い関係を合わせると、14世紀中頃から後半にかけて掘立柱建物6→5、7→8、2→3→4の順で各々建て替えられたことが想定される。このなかで、掘立柱建物2・7は併存した可能性がある。整地面2では掘立柱建物9・11が造られた後、14世紀第4四半期に掘立柱建物10・12が併存したと考えられる。総柱や庇を伴う可能性がある構造や30㎡前後の小型でもやや規模が大きい掘立柱建物の存在から、やや高位の階層者が居住したことが推測され、集落内では特別な空間と言える。また、整地面2の北端には14世紀後半に段状遺構31が造られ、鏡像が埋納された。さらに、整地面3では14世紀後半に溝1、15世紀第3四半期に溝6が埋没しており、この間に掘立柱建物13→14→15→16が建て替えられたことが推測される。掘立柱建物14～16は1間×1間で、10㎡前後の小型のみで構成される。このほか、段状遺構35が4区中央に配置された。

全体的に整地面1～3では14世紀中頃～後半に複数の掘立柱建物が建ち並んで最盛期を迎えた。高尾北ヤシキ遺跡の北隣にある桑山南古墳群⁽¹⁾では14世紀頃の土坑墓群(大小10基)が確認されており、本遺跡の集落と桑山南古墳群の墓域の時期が重なることから、両遺跡の関係性が窺える。

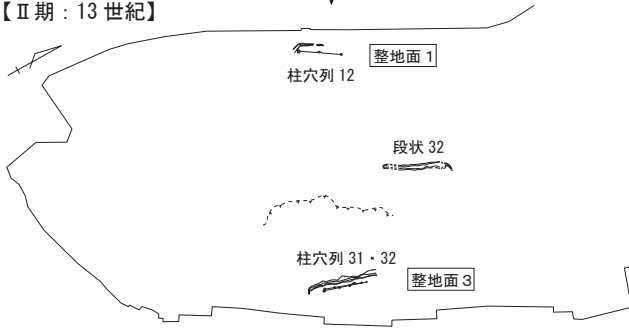
IV期は15世紀～16世紀前半にあたる。整地面1では、溝2が16世紀前半までの遺物を含むが、居住遺構は明確ではない。整地面2では掘立柱建物が確認できない。整地面3では溝6が15世紀第3四半期に埋没した可能性がある。全体的に集落は縮小、あるいは一時的に衰退する。

V期は16世紀後半にあたる。整地面1～3の機能が停止したのち、集落が大幅に再編された。整

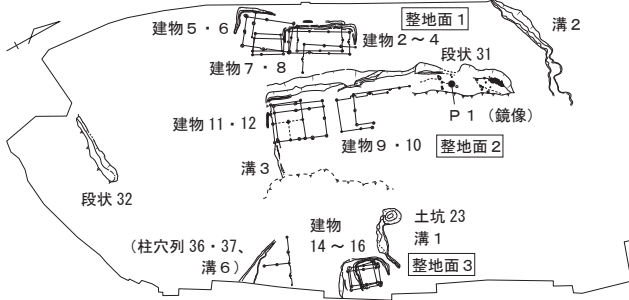
【Ⅰ期：12世紀】



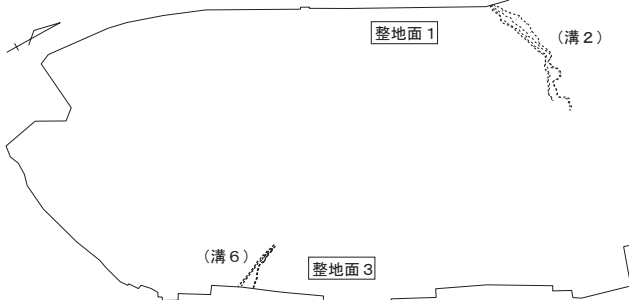
【Ⅱ期：13世紀】



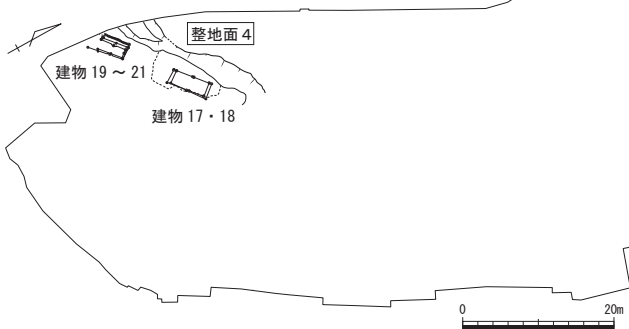
【Ⅲ期：14世紀】



【Ⅳ期：15世紀～16世紀前半】



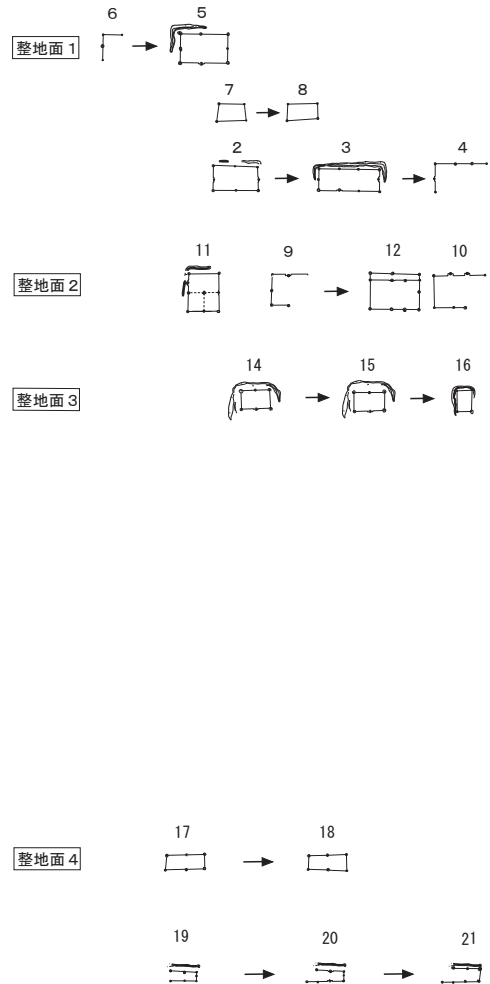
【Ⅴ期：16世紀後半】



	西暦1100年	1200年	1300年	1400年	1500年	1600年	建物の切り合い関係
	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	
整地面1		柱穴列10	柱穴列12	(建物5～8) 建物2～4	溝2		6→5 7→8 2→3→4
整地面2				建物10・12 段状31 溝3			9→10 11→12
整地面3			柱穴列32	(建物14) 溝1	溝6		14→15→16
整地面4						建物18	17→18 19→20→21
その他	段状33		段状35				

※掘立柱建物2・6～8・9～11・13～16・17・19～21、柱穴列3～6・7～9・11・13～30・34・36～40、段状遺構28～30・32・34・36、土坑7～23は中世に属すると考えられるが、詳細な時期は不明。

【掘立柱建物の建て替え】



第286図 高尾北ヤシキ遺跡における中世遺構の変遷 (1/1,000)

地面4が新たに造成され、16世紀後半に掘立柱建物17→18に建て替えられた。掘立柱建物19～21も掘立柱建物17・18に併存したことが推測される。これらの掘立柱建物は1間×3間以上、1間×2間で、10㎡弱と規模が小さい。その後の遺構は認められず、16世紀後半をもって集落が途絶えた。

3 掘立柱建物の構造・規模

高尾北ヤシキ遺跡で確認した中世の掘立柱建物20棟のうち、規模が把握できた14棟は床面積が5.4㎡～30.4㎡に収まり、小規模の建物のみで構成される。床面積が10㎡未満は7棟、10～15㎡未満と15～20㎡未満は各1棟、20～25㎡未満は3棟、25～30㎡未満と30～35㎡未満は各1棟で、10㎡前後と25㎡前後が多い。掘立柱建物11は2間×2間の総柱建物、掘立柱建物は西庇を伴う2間×3間の側柱建物の可能性があるほかは、すべて1間×1間～2間×3間の側柱建物である。

津山市域の中世の掘立柱建物は、規模や構造から、次のⅠ～Ⅲ類に大別できる（第17表、第287図）。

Ⅰ類：床面積が80㎡以上の突出した規模や総柱、庇を伴う建物を主体とした集落で、大田茶屋遺跡・大田障子遺跡⁽²⁾が該当する。両遺跡では最大で81.4㎡の庇付総柱建物が1棟、50㎡以下の庇付総柱建物が1棟、総柱建物が6棟、15㎡以下の側柱建物が5棟確認されている。

Ⅱ類：床面積が50～80㎡未満の建物を含む集落で、稗田遺跡⁽³⁾、二宮遺跡⁽⁴⁾が該当する。稗田遺跡は71㎡の総柱建物が1棟確認されたが、調査範囲が限られ、建物数は少ない。二宮遺跡では52㎡の三面庇の総柱建物、同規模の側柱建物が各1棟、50㎡未満の側柱建物が31棟と多く確認された。

Ⅲ類：床面積が50㎡未満の建物で構成される集落で、高尾北ヤシキ遺跡、岡道東遺跡⁽⁵⁾、せんご遺跡、隠地東遺跡⁽⁶⁾、半太遺跡、久保田遺跡⁽⁷⁾、美作国府跡⁽⁸⁾、林田池ノ内遺跡⁽⁹⁾、堀坂節分田遺跡、堀坂田中遺跡⁽¹⁰⁾が該当する。このうち、岡道東遺跡では50㎡の総柱建物、せんご遺跡は48㎡の側柱建物、半太遺跡は40㎡の両庇の総柱建物、美作国府跡は39㎡の総柱建物が各1棟あり、集落内で特別な建物が含まれる。それに対し、高尾北ヤシキ遺跡、林田池ノ内遺跡、堀坂節分田遺跡、堀坂田中遺跡などは一部で総柱建物が1棟あるものの、30㎡以下の側柱建物を主体とする集落である。

室町時代の農家について階層別に住居規模を分類した伊藤鄭爾氏の研究⁽¹¹⁾を参考にすれば、Ⅰ類は地侍層、Ⅱ類は名主層、Ⅲ類は被官百姓層を主体とした建物であったことが想定できる。

4 高尾北ヤシキ遺跡における中世集落の性格

津山市域の中世集落の存続期間（第17表右）をみると、大田茶屋遺跡・大田障子遺跡、二宮遺跡、高尾北ヤシキ遺跡は長期継続した集落であるが、それ以外は短期間に営まれた集落であった。

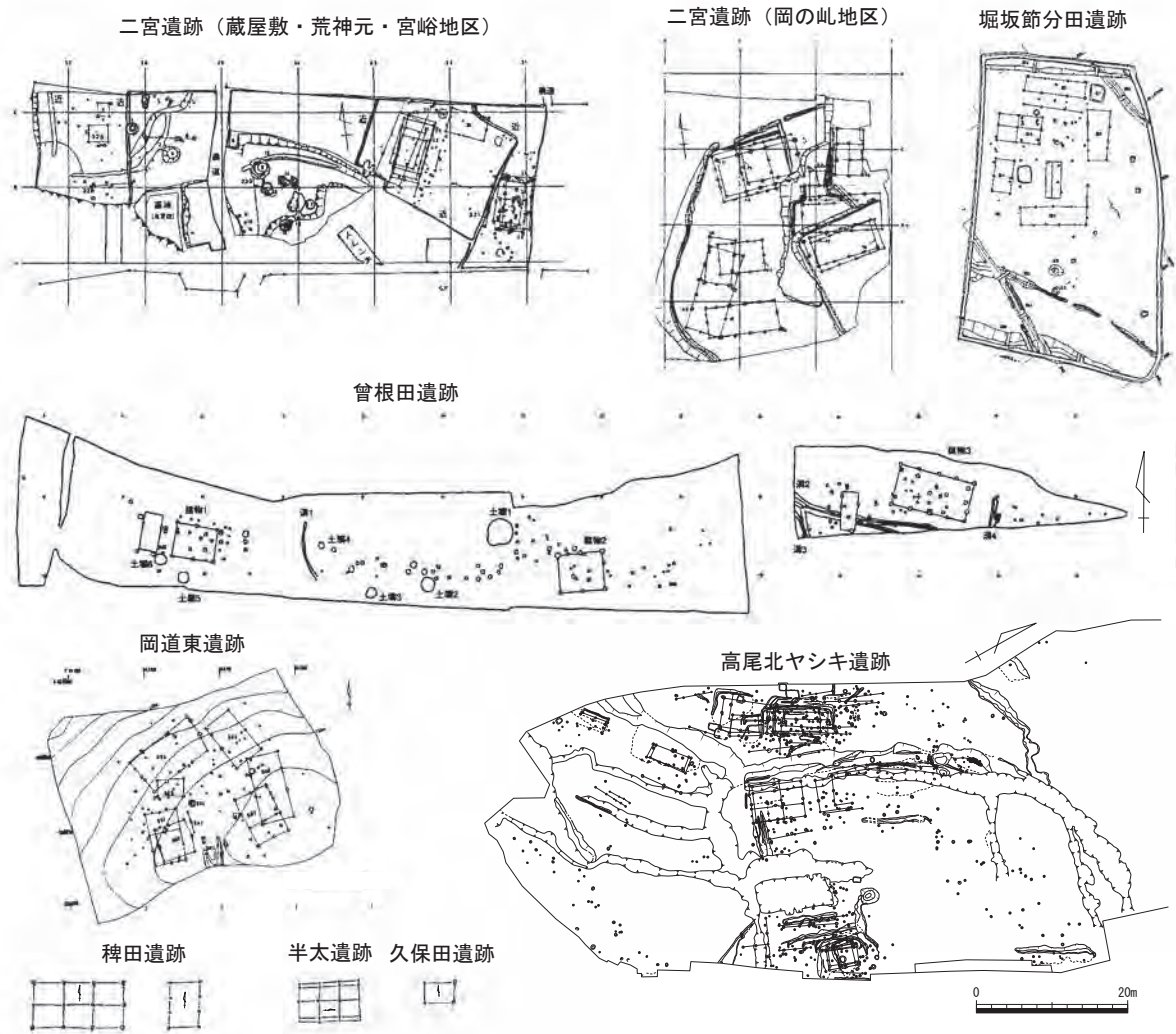
大田茶屋遺跡・大田障子遺跡は12世紀の城砦的な軍事施設で構成される遺跡、13世紀後半から14世紀は大・中規模の総柱建物や小規模の総柱・側柱掘立柱建物で構成される屋敷地というように性格を変えながら15世紀前半まで断続ながら長期にわたって営まれた。

二宮遺跡は美作国二ノ宮である高野神社に近接する集落で、広範囲に中小規模の総柱・側柱建物が複数棟あり、地区ごとに建物の建て替えの有無、構造や規模が異なる。12世紀末から17世紀初頭にかけて長期継続した集落であるが、天承元（1131）年「美作国留守所下文」、応保2（1162）年に制作された高野神社の木造隨身立像などから、立石・漆間氏一族との関わりが深い集落で、15世紀末から16世紀初めは美和山城に関連する館跡であったことが示唆されている⁽¹²⁾。漆間氏は法然上人を輩出した豪族であり、その父時国は美作国久米郡の押領使と伝える。また、二宮遺跡周辺は二宮庄の比

第17表 津山市域における中世の掘立柱建物の床面積別軒数と集落の時期

遺跡名	津山市	中世の掘立柱建物の床面積 (㎡)																集落の時期					備考
		III								II								I	平安	鎌倉	南北朝	室町	
		5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80						
		5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80	85	12C	13C	14C	15C	
大田茶屋遺跡 大田障子遺跡	大田	1	2	3		②		1	③		①						①	■	■	■			城砦的軍事施設か
二宮遺跡	二宮	1	①	①	4	6	5	2	3	1	1	②							■	■	■	■	漆間氏、高野社、二宮庄、美和山城関連
岡道東遺跡	福田		1		1		2	1	1								1				■		付近に天神山城跡、丸山城跡
稗田遺跡	戸脇		1													①			■	■			倭文庄城
せんご遺跡	桑上					1	1					1							■	■			倭文庄城
半太遺跡	戸脇										①							■	■				倭文庄城
美作国府跡	総社								①									■	■				美作国府
高尾北ヤシキ遺跡	高尾		7	1	1	3	①	1										■	■	■	■	■	佐良庄城か 付近に嵯峨山城跡
林田池ノ内遺跡	林田					1	1													■	■		付近に「光善寺」
下石屋遺跡	宮部上		2				1												■	■			大井庄城か 付近に宮ノ上城跡
堀坂節分田遺跡	堀坂				1	3	①											■					溝で区画 付近に堀坂城跡
堀坂田中遺跡	堀坂		1	1														■					付近に堀坂城跡
隠地東遺跡	桑下		1															■					倭文庄城

※数字は全体の規模が分かる建物の軒数を示し、○の数字は総柱建物、他は側柱建物である。



第287図 津山市域における主な中世の掘立柱建物 (1/1,000)

定地であり、正安2（1300）年に高野山行寛法印が関東奉行により二宮庄地頭職に補任されたことが「素浄外十五連署陳状案」（高野山金剛三昧院文書）に記されている⁽¹³⁾。以上のことから、大規模な建物や長期継続した両集落は、有力豪族や軍事的な性格、社寺や荘園に関わると考えられる。

倭文庄域に比定されている津山市戸脇周辺には、稗田遺跡、せんご遺跡、半太遺跡、隠地東遺跡が近接しているが、建物の建て替えは少ない。稗田遺跡は中規模の総柱建物と小規模の側柱建物、せんご遺跡は中小規模の側柱建物、半太遺跡は小規模の両庇付総柱建物、隠地東遺跡は小規模の側柱建物で構成され、遺跡によって建物の構造や規模が異なる。これらの集落は建物の機能や居住者の階層によって集落が分かれていたことや、12～13世紀は短期間で別の集落に移ったと推測される。

堀坂節分田遺跡は小規模の総柱建物1棟と側柱建物4棟で構成され、溝で囲まれた可能性がある。建物の建て替えはなく、12世紀の一時期に営まれた。付近に連郭式の堀坂城跡、加茂川の対岸には医王山城跡が所在するが、縄張りから推測される年代観や関連する文献史料とは集落の時期が異なる。

岡道東遺跡は15世紀に営まれた集落で、7棟の側柱建物があり、少なくとも1回の建て替えが認められる。遺跡の南西隣にある山頂には天神山城跡や丸山城跡が所在し、天神山城跡は南北朝期の特徴をもつことが指摘されている⁽¹⁴⁾ことから、岡道東遺跡の集落とも時期が重なる可能性がある。

林田池ノ内遺跡は7棟の側柱建物が確認され、1回程度の建て替えが認められる。調査範囲は集落の一部に過ぎず、全体が分かる建物は2棟のみで、いずれも小規模である。集落は14世紀ごろに営まれ、付近にある「光善寺」に関わる集落と想定されている。

高尾北ヤシキ遺跡は小規模の側柱建物で主に構成される集落で、14世紀後半に限って総柱建物や庇付側柱建物が集落域の一部に建てられた可能性がある。集落範囲や遺構の数・密度は時期によって異なるが、整地面1～4では掘立柱建物や柱穴列が集中的に配置して建て替えを繰り返していたことから、計画的に集落が形成され、12～16世紀は比較的安定的に長期継続したことが考えられる。上述したように、小規模な掘立柱建物で構成される集落は、津山市域では短期間に営まれることが多かったが、高尾北ヤシキ遺跡は長期間継続しており、他の遺跡とは異なった集落存続のあり方を示す。

高尾北ヤシキ遺跡が所在する津山市高尾は、明治22年6月～昭和22年は佐良山村、近世から明治22年5月は久米南条郡高尾村、古代・中世は久米郡に属した。この周辺には中世の集落や社寺、城館が分布する（第288図）。「続遍照發揮性靈集補闕鈔」には、和氣真体が亡妹和氣朝臣の七十七忌日に際して、天長3（826）年10月8日に神護寺伝法供料として土佐国久満并田村庄、美作佐良庄、但馬国針谷の田などを奉入されたことが記されている⁽¹⁵⁾ことから、少なくとも9世紀に佐良庄があったことが窺える。佐良庄は『久米郡誌』⁽¹⁶⁾では佐良山村大字高尾皿中島平福、『津山市史』⁽¹⁷⁾では津山市佐良山、永山卯三郎氏⁽¹⁸⁾は久米南条郡皿村、三好基之氏⁽¹⁹⁾は津山市皿を中心とする一帯に比定され、諸説ある。皿川下流域右岸に広がる津山市皿の平野部には古墳時代～中世の遺物の散布地が点在する。また、皿川下流域左岸の嵯峨山東麓では、桑山遺跡で8～9世紀の土器や銚帯（丸鞆）が見つかり、佐良庄が神護寺に寄進された前後の時期と重なる。こうした地理的歴史的な環境を考慮すると、嵯峨山や笹山、神名備山に囲まれた皿川下流域とその支流種川流域に広がる平野部や丘陵裾部を中心に荘園が経営されたことが推測される。平安時代以降、『古今和歌集』などに残るように「久米のさら山」を歌枕にした古歌が度々うたわれたことも当地域と都との繋がりを反映したものであろう。

佐良庄が寄進された神護寺は京都市右京区に建立され、山号は高雄山である。神護寺は奈良時代末に和氣清麻呂によって開かれたという高雄山寺に端を発すると伝えられる。高雄山寺は天長元（824）

年に定額寺として「神護国祚真言寺」（略して神護寺）と改名し、空海に付属されることとなる。

和気氏は7世紀末から8世紀に備前国藤野郡を本拠とすることは広く知られているが、邑久郡、赤坂郡、御野郡、美作国勝田郡にも縁があり、7世紀中葉より以前は勝田郡が元来の本拠地とし、7世紀中葉頃には美作から備前に移住したことが湊哲夫氏により説かれている⁽²⁰⁾。『日本後紀』（延暦7年6月癸未条）には、宝亀元（770）年に和気清麻呂に備前・美作国造の称号が与えられ、清麻呂の高祖父佐波良以下、佐伎豆、宿奈、乎麻呂の祖先4名も同国造の称号が追贈されたことが記されている。そのほか、『日本後紀』和気清麻呂の墓伝、『続日本紀』神護景雲3年6月壬戌条などからも、和気氏が美作と深く関わったことを読み取ることができる。

佐良庄の比定地や範囲、経営期間は定かでないが、神護寺は9～11世紀に隆盛を誇る。ところが、神護寺は12世紀中頃に急激に荒廃し、平安時代末から中世は文覚、上覚、明恵らが復興を願うもの



第288図 皿川下流域周辺における中世遺跡の分布 (1/30,000)

の、近世まで争乱や兵火などで寺運なく衰退したようである⁽²¹⁾。高尾北ヤシキ遺跡の中世集落は神護寺が荒廃した時期に営まれており、佐良庄の存続期間や本遺跡との関連は不明と言わざるを得ない。

本遺跡の中世集落のうち、Ⅰ～Ⅲ期（12～14世紀）は、美作守護職が院庄に置かれて存続した時期⁽²²⁾と重なる。本遺跡から美作守護職の居館と推定される院庄館跡までは吉井川を挟んで北西3.3kmと程近い。そのうえ、小規模な掘立柱建物を主体とした集落でありながら、集落の長期かつ安定的な居住性、整地面1～3の計画的な配置や拡大、青磁や天目茶碗を含む陶磁器、鏡像などの特殊な遺物が出土したことなどから、美作守護の支配が及んだ一集落であったことを想定したい。特にⅢ期は、14世紀中頃に赤松貞範が美作守護となった後、貞治3・正平19（1364）年に山名義理がその任を担うなか、明德2・元中8（1391）年に明德の乱によって山名氏が討伐されるまでの南北朝の動乱期に集落が最盛期を迎えた。また、14世紀後半に最盛した整地面1～3の遺構群が廃絶するときに鏡像が埋納されており、大きな画期となった。

さらに、Ⅳ期（15世紀～16世紀前半）の衰退期を挟み、集落が再編されたⅤ期（16世紀後半）は、整地面4の限定的な空間を使用する集落であった。Ⅰ～Ⅲ期と比べて、掘立柱建物は規模が縮小し、画一的かつ同規格で2～3回の建て替えがあるほか、遺物も極端に少ない。本遺跡と同じ山塊の北西頂部には嵯峨山城跡が立地し、皿川の対岸には笹山城跡、神南備山城跡がある。元龜年間（1570～1573年）ごろ、小早川隆景の兵が出城にしていた「さが山」の城を荒神山城に居城する宇喜多方の花房職秀が攻め取ったほか、天正7（1579）年には宇喜多氏と毛利氏が対立したのち、毛利方の拠点となった院庄構城と「皿山の補手」に拠る宇喜多直家の家臣である河端丹後が対峙したと伝えられている⁽²³⁾。Ⅴ期の集落は、存続時期が美作で宇喜多氏と毛利氏が覇を競った頃で、皿川下流域の諸城周辺で争った時期や記述とも重なることから、争乱に関わる一時的な集落であったと推測される。（米田）

註

- (1) 岡山県教育委員会 2022『桑山南古墳群 細畝古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 255
- (2) 岡山県教育委員会 1998『大田茶屋遺跡 2 大田障子遺跡大田松山久保遺跡 大田大正開遺跡 大田西奥田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 129
- (3) 久米町教育委員会 2005『曾根田遺跡 半太遺跡 稗田遺跡 久保田遺跡』
- (4) 岡山県教育委員会 1978『二宮遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 28
- (5) 小郷利幸 1996「岡道東遺跡発掘調査報告」『年報津山弥生の里』第3号（平成6年度）津山弥生の里文化財センター
- (6) 津山市教育委員会 2006『せんご遺跡 隠地東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 77
- (7) 久米町教育委員会 2005『曾根田遺跡 半太遺跡 稗田遺跡 久保田遺跡』
- (8) 岡山県教育委員会 2011『美作国府跡 小田中遺跡 山北遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 228
- (9) 津山市教育委員会 2005『林田池ノ内遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 75
- (10) 津山市教育委員会 2006『堀坂地内遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告 76
- (11) 伊藤鄭爾 1968『中世住居史』東京大学出版会
- (12) 高畑知功 1978「岡の岨地区 小結」『二宮遺跡』岡山県教育委員会
- (13) 津山市 2022『新修津山市史』資料編 古代・中世
- (14) 島崎東 2020「天神山城跡」『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第3冊一美作編一 岡山県教育委員会
- (15) 津山市 1972『津山市史』第1巻 原始・古代

- (16) 久米郡教育會 1923『久米郡誌』
- (17) 註15文献と同じ
- (18) 永山卯三郎 1979『岡山県農地史』世界聖典刊行協会
- (19) 三好基之 1999「美作国」『講座日本荘園史 9 中国地方の荘園』吉川弘文館
- (20) 湊哲夫 2002「和氣氏の成立」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』古代吉備研究会
- (21) 谷内乾岳 1987「神護寺の沿革史」『魅惑の仏像 19 五大虚空蔵菩薩 京都・神護寺』毎日新聞社
- (22) 津山市 1977『津山市史』第2巻 中世
- (23) 岡本泰典 2020「嵯峨山城跡」『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第3冊—美作編— 岡山県教育委員会

第8節 高尾北ヤシキ遺跡から出土した鏡像について

1 高尾北ヤシキ遺跡出土の鏡像

本節では、高尾北ヤシキ遺跡における鏡像の性格を探るため、岡山県内の御正体や日本列島の中世遺跡出土の御正体⁽¹⁾を整理し、埋納状況や出土遺跡・遺構、御正体について検討を加えたい。

高尾北ヤシキ遺跡では段状遺構31のP1から青銅製の鏡像M24が出土した。鏡像は段状遺構31の底面で確認したP1上面において背面を上に向けて水平になった状態で見つかり、丁寧に埋納されたと考えられる。鏡像の鏡面には菩薩像が線刻されており、尊像は文殊菩薩、あるいは虚空蔵菩薩の可能性もある。鏡像は肩部の縁に小さな鈕があり、鏡板とともに一鑄されている。こうした制作技法の特徴から、制作時期は平安時代後半から鎌倉時代初めと推定されている(第5章第7・8節)。それに対して、段状遺構31の下層や集石1の出土遺物は14世紀後半に比定され、鏡像の埋納時期もその頃とみられる。つまり、この鏡像は制作から埋納まで少なくとも150年は伝世して長く信仰されたのである。鏡像が埋納された14世紀後半は高尾北ヤシキ遺跡の集落の最盛期にあたるが、その後は整地面1～3の遺構群が急に衰退する。鏡像の埋納は集落の盛衰の画期として位置づけられる。

2 岡山県における中世の御正体

岡山県における中世の御正体は、現状で19件24点⁽²⁾が知られる(第18表)。資料の分類別にみると、社寺の奉納品・美術資料12件15点、考古資料3件5点、購入文化財1点、その他3件と多岐にわたる。これらは鏡像2点、懸仏12点、基板1点、銅鏡9点に分けられる。奉納品は社寺や地域で大切に保護されて信仰され続けており、保存状態が良好なものも少なくない。このうち、遺跡出土の御正体は高尾北ヤシキ遺跡、横田東古墳群、マゴロ山経塚、豊楽寺の土版塚の4遺跡、計6点ある(第289図)。

横田東古墳群では祠のような石組みの17号遺構の付近で、平安時代末～鎌倉時代の秋草双雀流水紋鏡が1面見つかった。鏡面には大日如来を意味する梵字、その下に蓮の台座、両脇に花瓶が墨書された。鏡の縁には2か所に孔があげられ、懸垂された可能性が高い。

マゴロ山経塚は明治36年以前、御崎宮の南斜面で偶然見つかった。経塚からは、銅製の経筒、松喰鶴鏡と胎蔵曼荼羅の中台八葉院が線刻された唐式花卉文鏡が各1面、懸仏2面、刀身などが出土したと伝わる。時期は平安時代末～鎌倉時代とされるが、懸仏の共伴関係については検討を要する。

豊楽寺の土版塚では、多数の土版塔に加え、薄い銅製の懸仏片、土師器片や木片、鉄釘が出土した。

第18表 岡山県における中世の御正体一覧

所在地(遺跡名)	所有者等	名称	数量	時代	備考	文献
岡山市北区建部町(豊楽寺土版塚)	豊楽寺・岡山市	懸仏	1	平安末	多数の土版塔、土師器、鉄釘が出土	水原岩太郎 1936『豊楽寺印仏之図 土版塔之研究』建部町 1995『建部町史(通史編)』
岡山市北区御津紙工	宇甘神社	鏡銘	1	鎌倉	「永仁二年」銘	永山卯三郎 1954『岡山縣金石史』岡山県金石史刊行会
津山市加茂町	個人	崇道天王紐鏡	1	室町	「天正十二」銘	永山卯三郎 1954『続岡山縣金石史』岡山県金石史刊行会
津山市高野山西	荒神社	三宝荒神社神鏡	1	平安	「承平三年」銘	
津山市高尾(高尾北ヤシキ遺跡)	岡山県教育委員会	鏡像	1	平安末~鎌倉初	出土遺構は室町前半	本書
玉野市滝	早瀬比咩神社	懸仏基板	1	室町	玉野市指定文化財	玉野市役所 1972『玉野市史続編』
井原市野上町	頂見寺旧蔵	蓬萊山神鏡	1	室町	備中守為資寄附	永山卯三郎 1954『続岡山縣金石史』岡山県金石史刊行会
高梁市備中町	長建寺	金銅阿弥陀三尊懸仏	3	室町	高梁市指定重要文化財 県指定重要文化財	岡山県立博物館 2016『カミとほとけの姿』
高梁市有漢町(マゴロ山経塚)	東京国立博物館	毛彫銅鏡(唐式花卉文鏡)	1	平安(鎌倉初期)	胎藏界中台九尊を線刻	石田茂作 1955「岡山県有漢村経塚遺物」『吉備考古』第90号 吉備考古学会
		懸仏	2		十一面観音 来迎阿弥陀	吉備考古学会 1956「有漢経塚懸佛補遺」『吉備考古』第91号
新見市哲西町矢田(横田東古墳群・17号遺構)	岡山県教育委員会	墨書和鏡(秋草双雀流水紋鏡)	1	平安末~鎌倉	梵字(キリク)や花瓶を墨書	岡山県教育委員会 1978「横田東古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査13』岡山県埋蔵文化財調査報告書23
赤磐市馬屋	熊野神社	懸仏	1	室町	「永享〇年」銘	
赤磐市今井	笹岡村八幡宮	懸仏	1	室町		
真庭市上河内	郷社上河内神社(現熊野神社)旧蔵	王子権現神鏡	1	室町	「永祿三庚申天」銘 「尼子晴久奉納」	永山卯三郎 1954『続岡山縣金石史』岡山県金石史刊行会
真庭市上河内	個人	惣社鏡	1	室町	「天正八」銘	
新庄村	御鴨神社	懸仏	1	室町	「応永廿六年」銘	
		懸仏	1	室町	「文明十五年」銘 尊像欠	
(和歌山県)	岡山県立博物館	蔵王権現・釈迦如来鏡像	1	平安	購入文化財	岡山県立博物館 2016『カミとほとけの姿』

※上記のほか、浦八幡宮の御正体(「正安四年」銘)、岡山市で懸仏1面が伝わる。

横田東古墳群(17号遺構周辺)

墨書種子(秋草双雀流水紋鏡)



1

高尾北ヤシキ遺跡

鏡像



M24



マゴロ山経塚

鏡面毛彫胎藏界中台九尊(唐式花卉文鏡)



2

線刻の模式図

(2の写真をもとに浄書)



来迎阿弥陀懸仏



3

十一面観音懸仏



4

1 直径 9.5 cm

2 直径約 19.7 cm = 径 6 寸 5 分

3 直径約 17.4 cm = 径 4 寸 6 分

4 直径約 10.6 cm = 径 3 寸 5 分

M24 直径 11.8 cm

※写真出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム (<https://colbase.nich.go.jp/>)

第289図 岡山県における遺跡出土御正体(1/4)

これらは平安時代末頃に埋納されたと推測されている。

高尾北ヤシキ遺跡出土の鏡像は、岡山県内の中世の御正体では上記3遺跡に次ぐ出土例であり、鏡像としては初例となる。

3 中世における御正体出土遺跡・遺構

日本列島で遺跡から出土・採集した中世の御正体は、管見によれば93遺跡、少なくとも計490点⁽³⁾に及ぶ(第19表⁽⁴⁾)。その分布から中世には列島各地に神仏習合が広がっていたことが窺える。出土遺跡の種別(第290図上)をみると、集落や社寺が各22例と3割ずつで多く、次いで、経塚19例、城館が15例各2割を占める。そのほかは祭祀7例、古墳2例、官衙1例、その他5例と少ない。こうした傾向から御正体が集落、社寺、城館で主に使用、埋納されたことが考えられる。

出土遺構97件のうち、遺構の種別(第290図下)をみると、経塚19、土坑8、溝7、建物6(堅穴1、掘立柱建物の柱穴2・周辺1、礎石2)、城館の曲輪周辺5、社寺の堂宇や境内4、祭祀4、井戸・ピット各2、段状遺構・墓各1、遺構外や包含層24、その他7、採集8、不明11に分けられる。件数が多い遺構は御正体で使用、あるいは埋納された場と推測できる。経塚、集落内の土坑やピット、掘立柱建物の柱穴から出土した御正体は完形やほぼ完形のものが多く、意図的に埋納されたと考えられる。本遺跡の出土状況はこうした事例に当てはまる。それに対して、遺構外・包含層、曲輪周辺から出土した御正体は破片や残欠が大半で、破損して屋外に放置されたものも少なくない。

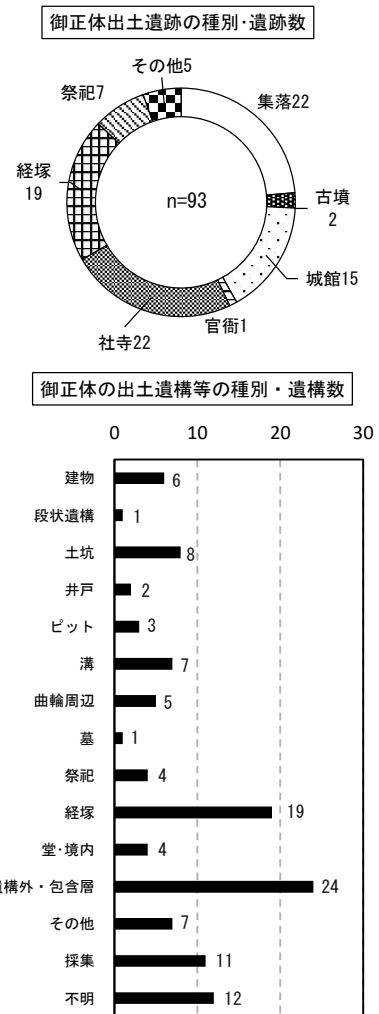
尊像が確認できる資料133点のうち、尊像は如来30点、菩薩93点、明王、天各2点、三尊4点、脇侍、九尊各1点に分けられる。本例と同じく菩薩は全体の7割を占めるが、出土資料のなかでは文殊菩薩を表したものは奈良県八王子神社に事例が限られる一方、虚空蔵菩薩を表したものは管見に触れない。

4 ピットに埋納された中世の御正体・銅鏡

高尾北ヤシキ遺跡では段状遺構31のP1上面で鏡像が出土し、丁寧に埋納されたと考えられる。縁の一部が欠けるものの、埋納された時は完形の状態であった可能性が高い。

第19表のうち、ピットに御正体や銅鏡を埋納した事例は、本遺跡のほか、宮城県田東山寂光寺跡、徳島県寺山遺跡の3遺跡、4例が確認できる(第291図)。

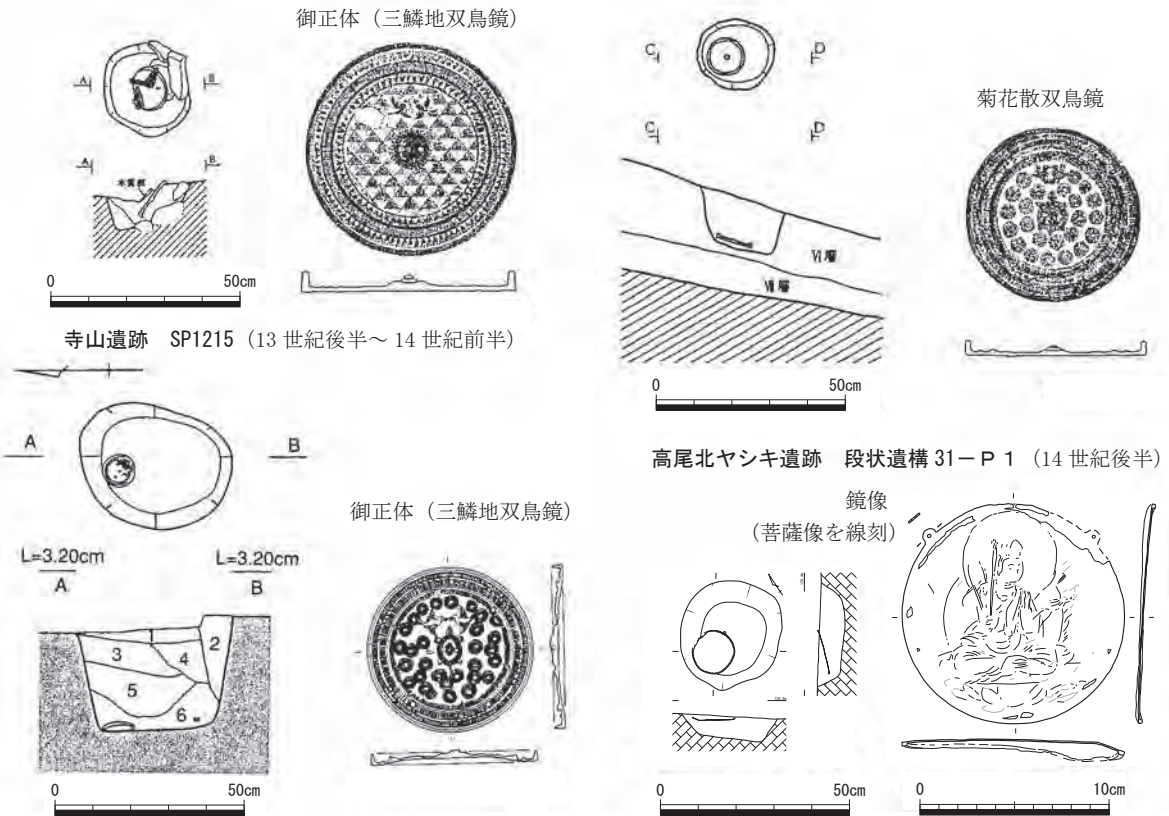
宮城県田東山寂光寺跡のD区では、掘立柱建物周辺で1・2号鏡埋納遺構が確認された。1号鏡埋納遺構は径20cm、深さ10cmのピットで、その上面で三鱗地双鳥鏡が鏡面を上にした状態が斜めになって見つかった。鏡は懸垂のための孔があげられ、表面には木質が付着していたことから、御正体に転用された銅鏡を木箱に納めて埋納されたことが復元できる。一方、2号埋納遺構は径25cm、深さ15cmのピットで、その底面で菊花散双鳥鏡が鏡面を下に向けた状態で出土した。銅鏡には墨書や毛彫り



第290図 中世の御正体出土遺跡・遺構の種別・件数

田東山寂光寺跡 D区1号鏡埋納遺構（鎌倉後半～室町）

田東山寂光寺跡 D区2号鏡埋納遺構（鎌倉後半～室町）



第291図 ピットに埋納された御正体・銅鏡と出土状況 (1/20・1/4)

や懸垂の孔が認められないことから、御正体であったかどうかは定かではない。

徳島県寺山遺跡では長軸約40cm、短軸34cm、深さ29cmのピットSP1215の底面で、菊花散双鳥雀鏡が鏡面を下に向けた状態で見つかった。鏡の背面中央の鈕孔は貫通していないが、外縁に2つの孔があげられ、懸垂鏡として転用されたと考えられる。

以上のようにピットに御正体や銅鏡を埋納した例をみると、ピットの底面あるいは上面において、鏡体を水平にし、鏡面を上下のどちらかに向けていることが共通する。なかでも、本遺跡の段状遺構31-P1と同じく、鏡面を下に向けて水平にして埋納した例は、田東山寂光寺跡のD区2号鏡埋納遺構と寺山遺跡のSP1215があげられる。限られた事例ではあるが、御正体や銅鏡をピットに埋納する所作は13～14世紀に各地で共有されていた可能性がある。

高尾北ヤシキ遺跡に鏡像が埋納された歴史的背景に迫ることは現状では難しいが、本例は中世の美作地域における神仏習合を具体的に物語る資料として評価できる。今後、遺跡出土の御正体を考古学的に検討することで御正体研究が進展し、神仏習合の一端が明らかになることに期待したい。(米田)

註

(1) 本書の第3・6章では御正体、鏡像、懸仏の定義について、難波田1990を参考とした。

難波田徹 1990『鏡像と懸仏』日本の美術1 No.284 至文堂

(2) 第18表の作成は岡崎有紀氏、中田利枝子氏に御協力いただき、県内の御正体について有益な御教示を賜った。

(3) 出土数が一括と記されている資料群については、仮に「1」として集計した。

(4) 第19表の作成にあたり、島根県の事例は守岡正司氏に御協力いただいた。

第19表 中世の御正体出土遺跡一覧

所在地	遺跡名	遺跡種別	出土遺構等	出土遺構等の時期	名称	数量	材質	尊像	状態・部位	製作技法	備考	文献
北海道 上ノ国町	上之国館跡 (州崎館跡)	城館	第3調査区 遺物包含層	15～16世紀	懸仏	1	銅	毘沙門天像	尊像	銅板 打ち出し	製作は14～15世紀	1
北海道 上ノ国町	上之国館跡 (花沢館跡)	城館	第4調査区	15世紀代	懸仏	1	銅	如意輪観音	尊像	铸造		2
青森県 青森市	浪岡城跡	城館	P 48 - I 層	12世紀後半～ 13世紀前半	御正体(銅鏡)	1	銅		破片		縁に孔1	3
宮城県 栗原市	鶴ノ丸館	城館	土壘崩壊土	鎌倉後半～ 安土桃山?	懸仏	1	銅	阿弥陀如来	ほぼ 完形	一铸	両肩に鈕。製作は鎌倉 後半～室町	4
宮城県 亘理町	館南田遺跡	集落	第4調査区	中世	懸仏?	1	銅		吊金具?			5
宮城県 南三陸町	田東山寂光寺跡	寺院	A区東SB01・ SB02周辺	中世～近代	懸仏	1	鉄	坐像		铸造		6
			B区a東トレン チ整地面	鎌倉～室町	懸仏	3	銅鉄	聖観音2 不明1	尊像	铸造		
			D区平坦面 1号鏡埋納 遺構	鎌倉後半 ～室町	御正体 (三鱗地双鳥鏡)	1	銅			鏡板		
秋田県 秋田市	秋田城跡	城館	溝SD935	鎌倉	懸仏	1	銅	坐像	尊像	铸造	塗金?	8
秋田県 大仙市	(中仙町 上鷲野出土)	不明	採集か	平安	鏡像(唐花鏡)	1	銅	阿弥陀三尊等	破片		鏡面に「長元四年七月 十三日」などを線刻	9
山形県 鶴岡市	羽黒山頂経塚	経塚	経塚	13世紀後半	懸仏	1	銅		尊像・ 鏡板片		「建長二二年」「文保三 年」の陰刻銘経筒	10
山形県 東根市	薬師寺経塚	経塚	経塚	平安	鏡像	1	銅					11
山形県 鮭川村	上野遺跡	館	竪穴建物 ST170	15～16世紀 前半	懸仏	1	青銅	脇侍	尊像	铸造	表に鍍金。裏に鈕	12
福島県 郡山市	王宮経塚	経塚	経塚	中世	御正体(和鏡)	1	銅				陶製壺1 鏡背に如法経…の刻銘	13
茨城県 土浦市	岡の宮遺跡	集落	第1号井戸跡	中・近世	懸仏	1	銅	菩薩	尊像 頭部	铸造	被熱による破損	14
茨城県 常陸大宮市	赤岩遺跡1	集落	遺構外	中世以降	懸仏?	1	銅		破片		板状の銅製品で、裏面 に鉄で補強。	15
栃木県 宇都宮市	宇都宮城跡	城館	掘立柱建物跡 SB1-P54b	中世末	懸仏2点	2	銅			銅板打ち 出し?	紐付着。破片2点	16
栃木県 栃木市	吾妻古墳	古墳	前上部主体部 玄室内攪乱	近世以前	懸仏	1	銅	不明	破片	毛彫り		17
栃木県 日光市	日光男体山頂 遺跡	祭祀	Cトレンチ	中世	御正体 台座	1	銅	欠落	鏡板 (覆輪・ 銀座)		両肩に鈕を取付け。鏡 板中軸上に孔1、下に 孔2。	18
				中世	懸仏	1	銅	阿弥陀如来	尊像	铸造	半肉彫。銅釘残存。製 作は室町	
			H地区	中世	懸仏	1	金銅 銅木	千手観音 坐像	完形 裏板	铸造	半肉彫。本尊は金銅製、 鏡板は銅製。光背や銀 座を取り付け。製作は 鎌倉末～室町初。	
				Iトレンチ	中世	鏡像	1	金銅	千手観音	完形	铸造 毛彫り	
中世	御正体 (山吹双雀鏡)	1	銅		欠落	鏡板 覆輪 銀座		両肩に鈕を取り付け(片 側のみ銀座が残存)。鏡 板に孔4。				
群馬県 高崎市	下芝五反田遺跡	祭祀	1号建物	平安～鎌倉	鏡像 (瑞花双鳥八稜鏡)	2	青銅	阿弥陀如来 2体	完形		鏡の製作は11世紀後半 ～12世紀。鏡面に仏像 を毛彫り。堂宇?	19
千葉県 横芝光町	篠本城跡・ 城山遺跡	城館	5号水場	鎌倉～室町	御正体 (秋草双鳥鏡)	1	青銅	有無不明	ほぼ 完形		鏡面上部に孔2	20
		城館	10号区画5F -32-15	鎌倉～室町	御正体 (菊花双雀鏡)	1	青銅	有無不明	完形		鏡面上部に孔2	
東京都 八王子市	白山神社経塚	経塚	経塚	平安	鏡像	1	銅	五仏			仁平4年奥書の経巻と 共伴	21
神奈川県 鎌倉市	覚園寺旧境内 遺跡	社寺	第4面土坑1	13世紀後葉	転用和鏡	1	青銅	有無不明	完形		小皿の上に鏡板が蓋の ように出土。上部外区に 孔2。格子目状の文様。	22
新潟県 新潟市	大藪遺跡	社寺か		中世	懸仏	1						23
新潟県 上越市	狐山遺跡	散布地	採集	中世?	懸仏	1	銅		尊像		中ノ山遺跡に隣接。	24
新潟県 佐渡市	佐渡国 蓮華峰寺骨堂	寺院	骨堂	戦国末～近世	懸仏	3	銅		尊像1 残欠2			25
富山県 射水市	八塚C遺跡	社寺	SD11	15世紀後半～ 16世紀後半	懸仏	1	銅	薬師如来	尊像	铸造	製作は室町後半(14世 紀後半)	26
富山県 高岡市	江道地区	不明	採集	鎌倉後期	懸仏	1	金銅	千手観音坐像	尊像	铸造	鍍金。裏面に突起、銀 止めの孔。	27

第6章 総括

所在地	遺跡名	遺跡種別	出土遺構等	出土遺構等の時期	名称	数量	材質	尊像	状態・部位	製作技法	備考	文献	
富山県立山町	ミクリガ池・池の地藏堂跡	祭祀			懸仏	1		聖観世音菩薩				28	
					懸仏	1	銅		尊像頭部	打ち出し	採集		
富山県立山町	玉殿窟・虚空蔵窟遺跡	祭祀			懸仏	1					明治初年に発見と伝わる	29	
富山県立山町	芦崎寺宝堂遺跡	社寺	南室と周辺SK1	12世紀中頃～14世紀	懸仏	1	銅		釣金具	铸造			
富山県入善町	じょうべのま遺跡	集落	K地区包含層	鎌倉～南北朝	懸仏	1	銅		鏡板		一端に孔2	30	
石川県七尾市	七尾城跡	城館		室町～安土桃山(16世紀)	懸仏	1						31	
石川県七尾市	万行遺跡	集落			懸仏	1						32	
石川県小松市	白江梯川遺跡	集落	祠跡推定遺構	15世紀	懸仏	1	銅	十一面観音菩薩	完形		製作は14世紀後半	33	
					懸仏	2	銅	如来坐像	尊像				
石川県白山市	笈岳経塚	経塚	経塚	室町	懸仏	1	銅				永世15年銘経筒などを共伴	34	
山梨県韭崎町	苗敷山山頂遺跡	祭祀		中世	懸仏	1		大日如来			山頂付近で発見	35	
山梨県富士川町	氷室神社周辺	社寺	不明	中世?	鏡像	1					昭和期に独鈷杵とともに出土。	36	
長野県中野市	建応寺跡	寺院	第一号堂址	平安後期～室町末	懸仏	1	銅	阿弥陀如来	尊像	铸造		37	
					懸仏	1	銅	観音菩薩	尊像	铸造			
					懸仏	1	銅	神像	尊像破片	铸造			
					懸仏残欠	42	銅	鏡板	破片		銅塊7、仏像片3		
長野県中野市	高梨氏館跡	城館	東入口(虎口)の内部	(鎌倉中期～)室町	御正体吊環座	1	銅		吊環座			38	
長野県塩尻市	吉田向井遺跡	集落	174号土壇(墓)	平安～鎌倉	御正体(双雀鏡)	1	青銅	有無不明	完形		製作は平安後期～鎌倉前期。鏡体に角孔1	39	
長野県立科町	中与惣塚	祭祀	採集	鎌倉後期～室町初め	御正体(鏡板)	13	銅		鏡板		両肩に孔。御正体は祠の板の内側に打ち付けられたものか。一部に鍍金。	40	
岐阜県郡上市	東林寺跡周辺	社寺	元兼の桜の古木下	(平安末)	懸仏	1	銅	十一面観音菩薩	完形	毛彫り	鍍銀。天曆9(1759)年の発見と伝わる。	41	
					(鎌倉)	懸仏	1	金銅	十一面観音菩薩	完形			圈縁に鍍金。
					(鎌倉)	懸仏	1	金銅	阿弥陀如来	完形			
					中世	懸仏	1	金銅	十一面観音菩薩	尊像			
					(室町初期)	懸仏	1	金銅	観世音菩薩	尊像			
					(室町初期)	懸仏	1	金銅	勢至菩薩	尊像			
岐阜県下呂市	鳳慈尾山大威徳寺跡	社寺	採集	平安末	懸仏	1		聖観音坐像	尊像	銅板打ち出し	阿弥陀寺所蔵懸仏。約200年前に大威徳寺跡で発見。	42	
岐阜県池田町	谷際第1号墳	古墳		6世紀	懸仏	1						43	
三重県伊勢市	朝熊山経塚	経塚	経塚	平安	鏡像(磯馴松双鶴長方鏡)	1	銅	阿弥陀三尊来迎像	完形	線刻	平治元年銘経筒伴出	44	
					鏡像(草花双鳥鏡)	1	銅	阿弥陀三尊来迎像	完形	線刻			
					鏡像(草花双鳥鏡)	1	銅	阿弥陀如来坐像	完形	線刻			
					鏡像(楓枝双鳥鏡)	1	銅	阿弥陀三尊像	完形	線刻			
滋賀県彦根市	肥田城遺跡	城館	溝S2	中世	懸仏	1	金銅		尊像	銅板打ち出し	鍍金。上下に孔	45	
滋賀県野洲市	光明寺遺跡(第42次)	集落	溝SD42112	15世紀後半	懸仏	1	銅		尊像	銅板打ち出し	上下端に孔が各1	46	
京都府京都市	平安京跡六角堂(第3次)	寺院	II区SD03	鎌倉後期13世紀	懸仏	1	銅	如意輪観音菩薩	尊像		鍍金。裏面中央に有孔の突起	47	
京都府京都市	鳥羽離宮金剛心院跡(第109次)	社寺	池16第2層	中世	懸仏	1	銅		板状金具		懸仏の鏡板を切断	48・49	
京都府京都市	鞍馬寺経塚	経塚	経塚③	平安	懸仏残欠	27	銅					尊像12、花瓶7、鏝座6、その他2	50
					懸仏	4	銅				毘沙門天三尊ほか		
京都府京都市	花背別所経塚	経塚	8号経塚	平安	懸仏残欠	1	銅					51	
京都府京都市	清閑寺経塚	経塚	経塚		懸仏残欠	1	銅					52	
京都府宮津市	籠神社経塚	経塚	経塚	鎌倉初期	鏡像	1	銅	阿弥陀如来		線刻		53	
大阪府堺市	真福寺遺跡	集落	3Eトレンチ包含層3層	平安～中世	懸仏	1	銅+鉄	薬師如来坐像	尊像	铸造	表面にアマルガム鍍金	54	
大阪府枚方市	津田遺跡	社寺	第1面3建物241・242礎石	安土桃山	鏡像	1		十一面観音		線刻	背面中央に鈕。両肩に孔	55	
					懸仏	1			尊像				
大阪府和泉市	横尾山経塚	経塚	経塚	平安	鏡像	1	銅	胎蔵界五仏坐像		毛彫り	長方形の鏡体。保延5年銘経筒伴出。	56	

第8節 高尾北ヤシキ遺跡から出土した鏡像について

所在地	遺跡名	遺跡種別	出土遺構等	出土遺構等の時期	名称	数量	材質	尊像	状態・部位	製作技法	備考	文献	
兵庫県神戸市	兵庫津遺跡(第53次)	集落	SK101 中層～下層		懸仏	1			破片			57	
兵庫県川西市	栄根寺廃寺遺跡	社寺	仏堂跡	室町	懸仏	1						58	
奈良県奈良市	八王子神社	社寺	石組基壇	12世紀末～14世紀中葉	鏡像	7	銅	五髻文殊菩薩2 観音菩薩1 文殊菩薩4	完形3 半分以上3 半分以上1	鏡起2 彫彫り1 毛彫り3			59
					鏡像?	41	銅	不明	完形・破片				
					懸仏	76	銅	菩薩坐像30 文殊菩薩2 文殊菩薩坐像2 阿弥陀如来1 阿弥陀如来坐像1 勢至菩薩1 地藏菩薩1 観音菩薩2 亡失34	完形4 半分以上17 尊像22 残欠33	鑄造34 打ち出し7			
					残欠28 (28点のうち8点は他と一具)	28	銅		破片	打ち出し 鋳止め	光背6、天蓋4、獅嚙座3、釣手金具2、花瓶1、覆輪11、鏡体1		
奈良県天川村	金峯山経塚	経塚	経塚③	平安	懸仏	3	銅					60	
			経塚⑤	平安	鏡像	2	銅	蔵王権現ほか					
					懸仏残欠	17	銅				うち鑑座6		
和歌山県新宮市	神倉山経塚	経塚	1号経塚	平安以降	懸仏	12	銅					61・62	
			2号経塚	平安以降	鏡像・懸仏	一括	銅	如来ほか			毛彫如来鏡像		
和歌山県新宮市	如法堂経塚	経塚	1号経塚	平安以降	鏡像1	1	銅	薬師如来	完形	毛彫り		63	
					残欠1	1			破片				
和歌山県那智勝浦町	那智山経塚	経塚	(経塚)	平安	鏡像(素文長方鏡)	1	銅	阿弥陀如来	完形	鑄造	上下に孔	64	
				平安	鏡像(素文長方鏡)	1	銅	薬師如来	完形	鑄造	上下に孔		
				平安	鏡像(素文長方鏡)	1	銅	十一面千手観音	完形	鑄造	上下に孔		
				平安	鏡像(竹垣菊花双鳥鏡)	1	銅	釈迦如来	完形	鑄造	上縁に孔2		
				平安	鏡像(松鶴鏡)	1	銅	十一面千手観音	完形	鑄造			
				平安	鏡像(瑞花鴛鴦鏡)	1	銅	十一面観音	完形	鑄造	縁に孔		
				平安	鏡像(蝶鳥方鏡)	1	銅	不動明王	やや欠	鑄造			
				平安	鏡像(三ツ割格子双鳥鏡)	1	銅	観音	やや欠	鑄造	縁に孔		
				平安	鏡像(竹垣双鳥鏡)	1	銅	十一面千手観音	やや欠	鑄造	上縁に孔2		
				平安	鏡像	1	銅	千手観音	破片	鑄造			
				平安	鏡像	1	銅	十一面千手観音	破片	鑄造			
				平安	鏡像片	5	銅		破片	鑄造			
				平安	鏡像(竹籠目双鳥鏡)	1	銅	釈迦	ほぼ完形	鑄造	墨書で梵字(釈迦)の種子		
				平安	鏡像(竹垣草花双鳥鏡)	1	銅	十一面千手観音	ほぼ完形	鑄造	墨書で梵字(十一面千手観音)の種子		
				平安	鏡像(流水草花双鳥鏡)	1	銅	千手観音	ほぼ完形	鑄造	墨書で梵字(千手観音)、「藤原女」の種子。上縁に孔2		
				平安	鏡像(竹垣草花双鳥鏡)	1	銅	不動明王	ほぼ完形	鑄造	墨書で梵字(不動明王)の種子。上縁に孔2		
				平安	鏡像(山吹双鳥鏡)	1	銅	千手観音			鏡面に「千手観音」「飛瀧権現」の文字を針書彫		
				鎌倉	懸仏	2	銅	十一面千手観音	完形				
				鎌倉	懸仏残欠	8	銅	十一面千手観音	尊像				
				鎌倉	懸仏残欠	1	銅	如来	尊像				
鎌倉	懸仏残欠	1	銅	十一面観音	尊像片								
鎌倉以降	懸仏残欠	62	銅		破片		尊像、蓮弁、千手、花瓶、鑑座、銅板、覆輪など						
島根県松江市	(的場)	不明	室町?	懸仏鏡板	4	金銅1 銅2	阿弥陀如来1	尊像3 鏡板片1	一鑄1 打ち出し2	鍍金1 大正初年に出土	65		
島根県出雲市	鱒淵寺(池王窟)	社寺	経塚	平安末(仁平元年～三年)	鏡像(洲浜菊花双鳥鏡、竹枝飛雀鏡、亀甲文散蝶鳥鏡、波濤飛雀鏡各1)	4	銅	如来形1 普賢菩薩1 十一面観音1 聖観音1	完形		各尊像を線刻。鏡像・墨書種子は縁の両側に孔。石製経筒、湖州鏡2面と伴出。経筒には「仁平元年辛未二月卅日」などの銘が線刻。	66	
					墨書種子(菊薄飛雀鏡2、松飛雀鏡、波濤飛雀鏡、山吹飛雀鏡、無文の円形銅板各1)	6	銅	墨書種子(菊薄飛雀鏡1 墨書種子5)					
島根県安来市	(宮嶋神社)	社寺	椎の古木の下	不明	懸仏	1	銅	地藏菩薩	ほぼ完形	鑄造	「保元元年丙子十二月日」と陽鑄。享保9年に古木の下から出土と伝わる。	67	
岡山県岡山市	豊楽寺土版塚	経塚	塚?	平安末	懸仏	1	銅		破片		多数の土版塔、土師器、鉄釘が出土	68	

第6章 総括

所在地	遺跡名	遺跡種別	出土遺構等	出土遺構等の時期	名称	数量	材質	尊像	状態・部位	製作技法	備考	文献	
岡山県津山市	高尾北ヤシキ遺跡	集落	段状遺構 31- P 1	14 世紀後半	鏡像	1	青銅	文殊菩薩か、虚空蔵菩薩	ほぼ完形	一鑄	尊像は線刻。肩に鈕。制作は平安末～鎌倉初	69	
岡山県高梁市	マゴロ山経塚	経塚	採集		鏡像(唐式花卉文鏡)	1	銅	胎蔵界中台九尊	完形		唐式花卉文鏡の背面中央に鈕。明治 36 年頃に採集。銅製経筒、松喰鶴鏡、刀身片を含む。	70・71	
			採集		懸仏	1	銅	十一面観音	完形				
			採集		懸仏	1	銅	来迎阿弥陀	完形				
岡山県新見市	横田東古墳群	祭祀	17 号遺構周辺(石組み)	平安末～鎌倉	墨書種子(秋草双雀流水紋鏡)	1	銅	梵字(大日如来)	完形		鏡面に墨書種子両肩の縁に孔 2	72	
広島県尾道市	家ノ城跡	城館	1 郭周辺 SK35	14 世紀中葉	懸仏	1	銅	坐像	尊像			73	
広島県福山市	草戸千軒町遺跡	集落	溝 SD1000	15 世紀後半～16 世紀初頭	懸仏	1	銅		2/3 残	銅板打ち出し	両肩に鈕。周囲に珠紋。背面に木質	74	
			井戸 SE152		鏡板	1	銅		半分残		背面中央に鈕を溶接。両端に孔		
			黒灰色土		懸仏	1	銅			鏡板台座	鑄造	背面に木質台座	75
			礎石建物 SB1780 西側	不明	懸仏	1	銅	観音像?	尊像	鑄造	表土		
			灰色砂質土	15 世紀末～16 世紀初頭以降	懸仏	1	銅			鏡板花瓶	鑄造	花瓶を鋳止め	76
			溝 SD585	15 世紀末～16 世紀初頭	懸仏	1	銅	如意輪観音	尊像・鏡板片	銅板打ち出し			
溝 SD825	16 世紀前半～17 世紀中頃	懸仏	1	銅	観音像	尊像	鑄造			77			
広島県三次市	南天山城跡	城館	採集	中世	懸仏	1						78	
広島県庄原市	伝神福寺跡	社寺	採集	南北朝期～室町初頭	懸仏	1	銅	如来坐像	尊像	鑄造		79	
徳島県徳島市	寺山遺跡	集落	SP1215	13 世紀後半～14 世紀前半	御正体(菊花双鳥鏡)	1	青銅		完形		両肩に孔 2	80	
徳島県東みよし町	中庄東遺跡	集落	6 地区 SX1023	13 世紀中葉	鏡像(宋鏡式鏡)	1	銅	如来坐像	2/3 残	毛彫り	背面中央に鈕、「あみたほとけ」「五」の線刻	81	
愛媛県久万高原町	大宝寺経塚	経塚	経塚	鎌倉	懸仏	1	銅					82	
高知市南国市	岡豊城跡	城館	話の東側石列裾部	室町～16 世紀初頭	懸仏	1	金銅	観音坐像	尊像	鑄造	台座と宝冠部に孔各 4	83	
福岡県北九州市	永犬丸遺跡	集落	II C 区 2 層	中世	懸仏	1	青銅	尼丘形(地藏菩薩など)	尊像鏡板	鑄造打ち出し	一部鍍金。鏡板の周縁に珠紋を打ち出し	84	
			不明	不明	懸仏	1			破片		昭和 33 年調査		
福岡県福岡市	博多遺跡群(第 60 次)	集落	第 V 面土壌 300	中世	懸仏	1	銅		ほぼ完形	打ち出し? 鋳止め	鏡板の両肩に孔	85	
			博多遺跡群(第 78 次)	その他	中世	懸仏	1	銅	十一面観音	尊像	鑄造	室町時代は石城山妙楽寺付近	86
			博多遺跡群(第 71 次)	C-4 区 SK249	12 世紀	鏡板?	1	銅	—	破片			
			博多遺跡群(第 111 次)	F-10 区		懸仏	1	銅	不明	尊像			
				G-8 区		懸仏	1	銅	不明	尊像			
博多遺跡群(第 216 次)	集落	第 3 面 SP191	13～16 世紀	懸仏	1	粘土	不明	尊像			89		
福岡県福岡市	箱崎遺跡(第 30 次)	集落	16-B 区 SK-379	中世	御正体(素文鏡)	1	青銅	なし			中央に鈕の痕跡。縁に孔 1。	90	
福岡県福岡市	長峰遺跡	集落	C-4 区灰色土層	13～15 世紀か	懸仏	1	銅	十一面観音	尊像鏡板	鑄造鋳止め	鏡板は裏から連珠文を打ち出し	91	
福岡県福岡市	樋井川 A 遺跡	集落	E14 グリッド上部客土	16～17 世紀か	懸仏	1	銅	十一面観音	尊像	鑄造	裏面に突起	92	
福岡県太宰府市	太宰府史跡(第 57 次)	官衙	黒灰色土層	中世?	懸仏	1	銅	如来形	尊像	打ち出し	中央に孔	93	
			茶砂層	中世?	鏡板	1	銅	—	半分残存	毛彫り打ち出し	両肩に孔 2。花瓶と蓮花を毛彫り。周縁に珠紋を打ち出し。		
		社寺	観世音寺境内	中世?	鏡板	1	銅	—	破片	鑄造	草花を線刻		
太宰府史跡(第 122 次)	社寺	観世音寺境内	中世?	懸仏	1	銅		尊像	鑄造		94		
太宰府史跡(第 39-2 次)	社寺	観世音寺境内	中世?	懸仏	1	銅		尊像	鑄造				
福岡県糸島市	潤遺跡群 II	集落	56 号土坑(上層)	中世	鏡板	1	銅	—	破片		中央に鈕の痕跡	95	
福岡県上毛町	真正寺跡	社寺	採集	中世?	懸仏	1	銅	十一面観音?	尊像鏡板	鑄造鋳止め	鏡板の肩に孔	96	
佐賀県佐賀市	西山遺跡	社寺?	2 区 D	室町末	懸仏	1	銅	如来坐像	尊像	鑄造		97	
佐賀県唐津市	佐志中通遺跡	集落	包含層(D・C・15)	鎌倉～室町	懸仏	1	銅		尊像	鑄造	裏面に突起	98	
大分県豊前市	妙法寺	社寺	宝地院地区	中世以降	懸仏	1	銅	—	吊鏝座	鑄造	獅噛形	99	
					懸仏	1	銅	—	花瓶	鑄造	鋳止め		
長崎県諫早市	諫早農業高校遺跡	集落	掘立柱建物跡 SB03-SP01	室町	懸仏か	1	銅	観音菩薩立像	尊像	鑄造	背面が平坦	100	
長崎県新上五島町	古曲墓群	墓	採集	中世か	御正体(素文鏡)	1	銅		完形		中央に鈕。両肩に孔	101	
熊本県山江村	山田城跡	城館	主軸尾根平坦部	14 世紀末～15 世紀中葉	懸仏	1	銅	坐像		鑄造	背面に孔	102	

第20表の文献

- 1 塚田直哉 2021「上ノ国町洲崎遺跡」『北海道考古学情報』No.15 北海道考古学情報交換会
- 2 上ノ国町教育委員会 2022『史跡上之国館跡（花沢館跡 勝山館跡）整備活用基本計画』
- 3 浪岡町教育委員会 1988『浪岡城跡IX』
- 4 宮城県教育委員会 1981『東北自動車道遺跡調査報告書V』
- 5 宮城県教育委員会 1991『館南団遺跡ほか』
- 6 宮城県教育委員会 1989「寂光寺」『亙理町三十三間堂遺跡ほか』
- 7 宮城県教育委員会 1991「田東山寂光寺跡」『合戦原遺跡ほか』
- 8 秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所 1987『秋田城跡』
- 9 東京国立博物館 1978『鏡像と懸仏』
- 10 山形県遊佐町教育委員会 1993『遊佐町金保経塚（木製経筒出土）』調査報告書
- 11 保角里志 1979「東根市薬師寺裏山経塚出土遺物について」『さあべい』3-2
- 12 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006『上野遺跡発掘調査報告書』
- 13 福島県文化センター 1977『福島県の経塚遺物展 解説目録』
- 14 財団法人茨城県教育財団 2003『岡の宮遺跡』
- 15 常陸大宮市教育委員会・株式会社日本窯業史研究所 2012『赤岩遺跡1』
- 16 宇都宮市教育委員会 2008『宇都宮城跡』
- 17 栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2011『吾妻古墳』
- 18 日光二荒山神社 1963『日光男体山』山頂遺跡発掘調査報告書 角川書店
- 19 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『下芝五反田遺跡－奈良・平安時代遺構編－』
- 20 千葉県企業庁 財団法人東総文化財センター 2000『千葉県匝瑳郡光町 篠本城跡・城山遺跡 本編』
- 21 東京国立博物館 1986『経塚－関東とその周辺』
- 22 鎌倉市教育委員会 2015『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』
- 23 新潟市教育委員会 1989『新潟市南浦原遺跡範囲等確認調査報告書』
- 24 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 1995『宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡』
- 25 普請帳研究会 1984『佐渡国蓮華峰寺骨堂修理工事報告書』
- 26 富山県大島町教育委員会 1998『八塚C遺跡』
- 27 高岡市教育委員会 1999『国吉・石堤地区の遺跡調査概要』
- 28 立山町 1977『立山町史』上巻
- 29 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1994『芦峠寺室堂遺跡－立山信仰の考古学的研究－』
- 30 富山県入善町教育委員会 1981『入善町じょうべのま遺跡予備調査概要（4）』
- 31 七尾市教育委員会 2002『七尾市内遺跡発掘調査報告書II』
- 32 七尾市教育委員会 2003『石川県万行遺跡発掘調査概報』
- 33 石川県立埋蔵文化財センター 1988『白江梯川遺跡I』
- 34 日本考古学会 1923「経筒」『考古学雑誌』13-11
- 35 葦崎市教育委員会 2003『苗敷山山頂遺跡』
- 36 増穂町遺跡調査会 1991『平林大平遺跡』
- 37 中野市教育委員会 1979「建応寺跡第一次発掘調査」『高井』第46号 高井地方史研究会
- 38 中野市教育委員会 1991『高梨氏館跡発掘調査概報II』
- 39 長野県教育委員会・財団法人長野県埋蔵文化財センター 1988「吉田向井遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 40 長野県北佐久郡立科町教育委員会 1995『雨境峠』
- 41 大和町 1984『大和町史 通史編』上巻
- 42 下呂市教育委員会 2007『平成15～18年度範囲確認調査報告書』
- 43 池田町教育委員会 1985『谷際第1号墳発掘調査報告書』
- 44 石田茂作 1961「伊勢朝熊山経塚」『立正考古』18 立正大学考古学研究会
- 45 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010『肥田城遺跡 肥田西遺跡 鶴田遺跡』
- 46 中主町教育委員会 1999『平成10年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報II』
- 47 財団法人古代学協会 2006『六角堂第3次・第4次調査』
- 48 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002『鳥羽離宮跡I』
- 49 京都市文化市民局 2016『平成28年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 鳥羽離宮金剛心院跡出土品』
- 50 田澤金吾 1933『鞍馬寺経塚遺宝』

第6章 総括

- 51 魚澄惣五郎・梅原末治 1923「花背村ノ経塚及ヒ関係遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊
- 52 景山春樹 1954「山城考古展の新資料」『史迹と美術』242 史迹美術同攷会
- 53 川勝政太郎 1944「籠神社と古遺物」『史迹と美術』157 史迹美術同攷会
- 54 財団法人大阪府文化財調査研究センター 2002『南河内郡美原町所在 丹上遺跡・真福寺遺跡』
- 55 財団法人大阪府文化財センター 2010『枚方市 津田遺跡Ⅱ』
- 56 和泉市 1965『和泉市史』第1巻
- 57 神戸市教育委員会 2012『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』
- 58 川西市教育委員会生涯学習部社会教育室 2003『川西市栄根寺廃寺遺跡』
- 59 奈良県立橿原考古学研究所 1984『三郷町平隆寺』
- 60 石田茂作・矢島恭介 1937『金峯山経塚遺物の研究』皇室博物館
- 61 巽三郎 1957「新宮市神倉山経塚概報」『考古学雑誌』42-4 日本考古学会
- 62 巽三郎 1963『熊野新宮経塚の研究』熊野神宝館
- 63 奈良国立博物館 1977『経塚遺宝』
- 64 東京国立博物館 1985『那智経塚遺宝』東京美術
- 65 鳥谷芳雄 1990「的場出土の懸仏」『続竹矢郷土誌』松江市竹矢公民館
- 66 出雲市文化環境部文化財課 2015『出雲鱒淵寺埋蔵文化財調査報告書』
- 67 島根県立博物館 1995『鏡像と懸仏展』
- 68 水原岩太郎 1936『豊楽寺印仏之図 土版塔之研究』
- 69 本書(岡山県教育委員会 2024『高尾北ヤシキ遺跡 高尾北ヤシキ古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告269)
- 70 石田茂作 1955「岡山県有漢村経塚遺物」『吉備考古』第90号 吉備考古学会
- 71 吉備考古学 1956「有漢経塚懸佛補遺」『吉備考古』第91号 吉備考古学会
- 72 岡山県教育委員会 1978「横田東古墳群(64)」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査13』
- 73 財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室 2012『家ノ城跡』
- 74 広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 75 広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 76 広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1995『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- 77 広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1995『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』
- 78 吉田町歴史民俗資料館 1993『広島県の鏡像・懸仏』
- 79 妹尾周三 1992「伝神福寺跡採集の懸仏」『研究輯録Ⅱ』財団法人広島県埋蔵文化財センター
- 80 財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2008『寺山遺跡』
- 81 徳島県教育委員会 財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2005『中庄東遺跡』
- 82 柳原多美雄 1934「菅生大宝寺境内発見の経塚」『伊予史談』79 伊予史談会
- 83 高知県教育委員会 1990『岡豊城跡-第1~5次発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財調査報告書31
- 84 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1994『永大丸遺跡』
- 85 福岡市教育委員会 1992『博多30』
- 86 福岡市教育委員会 1995『博多44』
- 87 福岡市教育委員会 1996『博多53』
- 88 福岡市教育委員会 2002『博多85』
- 89 福岡市教育委員会 2021『博多171』
- 90 福岡市教育委員会 2006『箱崎26』
- 91 福岡市教育委員会 1988『長峰遺跡』
- 92 福岡市教育委員会 2001『樋井川A遺跡』
- 93 九州歴史資料館 1979『太宰府史跡』
- 94 九州歴史資料館 2010『太宰府史跡発掘調査報告書Ⅵ』平成20・21年度
- 95 糸島市教育委員会 2012『潤遺跡群Ⅱ』
- 96 大平村教育委員会 1990『土佐井地区遺跡』
- 97 佐賀県教育委員会 1974『佐賀郡大和町西山遺跡』
- 98 唐津市教育委員会 1997『佐志中通遺跡』
- 99 豊前市教育委員会 1983『妙法寺』
- 100 長崎県教育委員会 2018『諫早農業高校遺跡』
- 101 長崎県若松町教育委員会 1996『曲古墓群』
- 102 熊本県教育委員会 1990『山田城跡Ⅱ・Ⅲ』

遺構一覧表

遺物観察表ほか

新旧遺構名対照表

遺構一覧表 凡例

- 1 遺構の規模のうち、「()」は、現存最大値を示す。
- 2 削平・流失等により本来の規模が分からない項目には「－」を示した。存在が確認できない項目については「×」を示した。
- 3 「新旧遺構対応表」の「旧遺構名」は調査時点でのものであり、出土遺物への注記、遺構図面（調査原図）などはこれにしたがっている。

遺物観察表 凡例

土器・埴輪

- 1 「計測値」のうち、「口径」と「底径」は実測値または復元値を表し、「(数値)」はその残存率が約1/6以下のものの復元値であることを示す。また、「器高」の「(数値)」は残存最大値を表す。また、底径に記載している計測値は、高杯等の場合にはその脚径を、高台がつく杯や碗等の場合にはその高台径を示す。欠損等により計測ができない項目には「－」を示した。
- 2 「状態」の「完形」及び「ほぼ完形」は、接合・復元も含めた状態を示す。
- 3 「色調」は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

石器・石製品、土製品、金属製品、ガラス製品

- 1 「計測値」のうち、「(数値)」は残存値を示す。
- 2 金属製品の「重量」は、クリーニング後、含浸処理前の数値である。
- 3 玉類及び土製品の「色調」は、土器・埴輪－3のほか、『新版色の手帖』（永田泰弘監修 2002 小学館）による。
- 4 石器・石製品に記載した「石材」のうち、「※」は岡山大学鈴木茂之氏の石材同定による。

高尾北ヤシキ遺跡 竪穴住居一覧

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	床面標高 (m)	柱穴	焼土面	壁体溝	カマド	時期	備考
竪穴住居 1	方	370	(75)	(2.07)	136.72	2	1	○	西辺中央	古墳	
竪穴住居 2	方	458	(147)	(5.36)	135.98	(3)	×	○	×	古墳	
竪穴住居 3	方?	267 以上	—	—	132.00	—	—	○	—	古墳	
竪穴住居 4	方	320	(149)	(3.47)	129.52	(3)	1	×	西壁中央 南寄り	古墳	
竪穴住居 5	方	490	(179)	(6.21)	131.07	(3)	×	○	?	古墳	
竪穴住居 6	方	(323)	(90)	(0.71)	127.38	2	×	○	×	古墳	
竪穴住居 7	方	(330)	(290)	(6.39)	127.31	4	×	○	北辺中央	古墳	炭面 2
竪穴住居 8	方	432 以上	—	—	125.35	—	—	○	—	古墳	
竪穴住居 9	方	537	(158)	(6.47)	125.35	(2)	2	○	×	古墳	焼失
竪穴住居 10	方	610	(255)	(12.89)	125.49	(2)	×	○	×	古墳	間仕切溝
竪穴住居 11	方	640	(260)	—	128.83	4	—	○	×	古墳	
竪穴住居 12	方	350	(226)	(5.89)	126.34	(2)	1	○?	東辺中央	古墳	管玉
竪穴住居 13	方	(220)	(210)	(3.12)	126.93	(3)	×	×	—	古墳	
竪穴住居 14	方	422	(305)	—	126.70	4	×	○	—	古墳	
竪穴住居 15	方	486	(268)	(10.54)	126.74	(3)	2	○	—	古墳	
竪穴住居 16	方	493	(166)	(6.21)	126.49	(2)	×	○	—	古墳	紡錘車
竪穴住居 17	方	510	(239)	(7.41)	126.50	7	×	○	×	古墳	
竪穴住居 18	方?	151 以上	—	—	125.85	—	—	○	—	古墳	
竪穴住居 19	方	(303)	(246)	(5.97)	125.97	(3)	×	○	北辺中央	古墳	
竪穴住居 20	方	(250)	(32)	(0.16)	125.88	(2)	×	○	—	古墳	
竪穴住居 21	方	(350)	(155)	(3.65)	125.74	(3)	×	○	—	古墳	

高尾北ヤシキ遺跡 掘立柱建物一覧

遺構名	規模 (間)	柱間寸法 (cm)		桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積 (㎡)	棟の方向	柱掘り方	時期	備考
		桁	梁							
掘立柱建物 1	1 × 2	153 ~ 194	160	347	160	5.62	N - 31° - E	円 / 不整円	弥生	
掘立柱建物 2	2 × 2	287 ~ 307	142 ~ 190	602	313	19.10	N - 30° - E	円	中世	
掘立柱建物 3	2 × 3	249 ~ 286	128 ~ 160	806	288	23.09	N - 30° - E	円 / 不整円	中世	
掘立柱建物 4	(2 × 3)	196 ~ 269	178 ~ 198	682	376	(25.77)	N - 34° - E	円	中世	
掘立柱建物 5	2 × 2	271 ~ 357	186 ~ 194	628	380	23.96	N - 38° - E	円 / 不整円	中世	
掘立柱建物 6	(1 × 2)	152 ~ 186	250	338	250	(8.47)	N - 53° - E	円	中世	
掘立柱建物 7	1 × 1	335 ~ 390	216 ~ 236	390	236	8.12	N - 30° - E	円	中世	
掘立柱建物 8	1 × 1	393 ~ 410	200 ~ 220	410	220	8.48	N - 27° - E	円	中世	
掘立柱建物 9	(2 × 3)	215 ~ 271	192 ~ 216	751	408	(30.44)	N - 22° - E	円 / 不整円	中世	
掘立柱建物 10	(1 × 3)	155 ~ 252	419	645	419	(29.18)	N - 22° - E	円 / 不整円	中世	
掘立柱建物 11	(2 × 3)	247 ~ 248	202 ~ 213	497	415	20.22	N - 67° - W	円 / 楕円	中世	総柱?
掘立柱建物 12	2 × 3	175 ~ 282	154 ~ 386	654	472	30.80	N - 22° - W	円 / 不整円	中世	庇付?
掘立柱建物 13	(1 × 3)	155 ~ 228	174	545	174	(9.52)	N - 7° - E	円 / 不整円	中世	
掘立柱建物 14	1 × 2	187 ~ 200	244	387	244	9.45	N - 21° - E	円 / 不整円	中世	

遺構名	規模(間)	柱間寸法(cm)		桁行 (cm)	梁行 (cm)	面積(m ²)	棟の方向	柱掘り方	時期	備考
		桁	梁							
掘立柱建物 15	1×2	191～219	238～251	410	251	10.05	N-22°-E	円/不整円	中世	
掘立柱建物 16	1×1	274～280	190～200	280	200	(5.40)	N-75°-W	円/不整円	中世	
掘立柱建物 17	1×2	234～276	190～192	522	192	9.72	N-50°-E	円	中世	
掘立柱建物 18	1×2	247～263	180～213	497	192	9.93	N-54°-E	円	中世	
掘立柱建物 19	(1×2)	160～193	115	363	115	(4.16)	N-49°-E	円/不整円	中世	
掘立柱建物 20	(1×3)	141～193	130	485	130	(6.23)	N-48°-E	円/不整円	中世	
掘立柱建物 21	(1×3)	141～194	174	485	174	(8.23)	N-60°-E	円/不整円	中世	

高尾北ヤシキ遺跡 柱穴列一覧

遺構名	規模(間)	全長(cm)	柱間距離(cm)	方向	柱掘り方	時期	備考
柱穴列 1	2間	328	163～165	N-30°-E	円/不整円	弥生	
柱穴列 2	2間	393	181～212	N-0°-E	円	古墳	柱痕
柱穴列 3	2間	318	158～160	N-14°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 4	3間	606	178～240	N-11°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 5	3間	582	182～216	N-10°-E	円	中世	
柱穴列 6	3間	537	143～202	N-11°-E	円/楕円	中世	
柱穴列 7	2間	408	186～222	N-20°-E	円	中世	
柱穴列 8	3間	633	161～285	N-21°-E	円	中世	
柱穴列 9	3間	622	194～217	N-29°-E	円	中世	段状遺構
柱穴列 10	2間	502	241～261	N-23°-E	円	中世	
柱穴列 11	3間	588	158～217	N-27°-E	円	中世	
柱穴列 12	2間	562	272～290	N-35°-E	円/不整円	中世	壁体溝
柱穴列 13	2間	593	293～300	N-30°-E	円/楕円	中世	壁体溝
柱穴列 14	2間	445	181～264	N-28°-E	円	中世	壁体溝
柱穴列 15	3間	488	138～176	N-33°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 16	2間	377	183～194	N-35°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 17	2間	416	202～214	N-30°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 18	1間	263	263	N-21°-E	円/楕円	中世	壁体溝
柱穴列 19	3間	798	231～309	N-21°-E	円/不整円	中世	壁体溝
柱穴列 20	2間	412	188～224	N-48°-E	円	中世	
柱穴列 21	3間	476	100～214	N-21°-E	円	中世	
柱穴列 22	3間	813	263～275	N-26°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 23	1間	357	357	N-32°-E	円/楕円	中世	壁体溝
柱穴列 24	3間	568	106～300	N-21°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 25	2間	513	178～335	N-22°-E	円/楕円	中世	
柱穴列 26	2間	685	320～365	N-25°-E	円/楕円	中世	
柱穴列 27	2間	560	226～334	N-50°-E	円	中世	
柱穴列 28	4間	808	165～257	N-24°-E	円/不整円	中世	
柱穴列 29	3間	778	237～293	N-23°-E	円/不整円	中世	

遺構名	規模 (間)	全長 (cm)	柱間距離 (cm)	方向	柱掘り方	時期	備考
柱穴列 30	3 間	690	174 ~ 301	N - 26° - E	円 / 不整円	中世	壁体溝
柱穴列 31	3 間	562	130 ~ 264	N - 30° - E	円 / 不整円	中世	壁体溝
柱穴列 32	3 間	511	140 ~ 208	N - 29° - E	円 / 楕円	中世	壁体溝
柱穴列 33	2 間	424	189 ~ 235	N - 20° - E	円 / 不整円	中世	壁体溝
柱穴列 34	2 間	408	199 ~ 209	N - 17° - E	円	中世	壁体溝
柱穴列 35	2 間	418	208 ~ 210	N - 25° - E	円 / 不整円	中世	
柱穴列 36	4 間	634	124 ~ 198	N - 69° - W	円 / 不整円	中世	
柱穴列 37	2 間	317	153 ~ 164	N - 21° - E	円 / 不整円	中世	
柱穴列 38	3 間	301	66 ~ 141	N - 58° - E	円	中世	
柱穴列 39	3 間	469	146 ~ 170	N - 61° - E	円	中世	
柱穴列 40	2 間	554	246 ~ 308	N - 53° - E	円 / 不整円	中世	

高尾北ヤシキ遺跡 段状遺構一覧

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面標高 (m)	柱穴	壁体溝	土坑	時期	備考
段状遺構 1	(695)	(89)	136.15	○	○		弥生	
段状遺構 2	735	(80)	136.58	○	○		弥生	
段状遺構 3	975	(128)	136.42	○	○		弥生	
段状遺構 4	793	(92)	131.25	—	○		弥生	
段状遺構 5	212	(51)	130.59	—	○		弥生	
段状遺構 6	280	(38)	131.85	—	○		弥生	
段状遺構 7	(855)	(62)	129.35	—	○		弥生	
段状遺構 8	(100)	(35)	122.09	—	○		古墳	
段状遺構 9	584	(98)	121.84	○	○		古墳	
段状遺構 10	716	113	130.62	○	—		古墳	
段状遺構 11	200	(58)	130.05	○	—		古墳	
段状遺構 12	(150)	(65)	127.90	○	○		古墳	
段状遺構 13	(55)	(195)	127.86	○	—		古墳	
段状遺構 14	(70)	(202)	127.78	○	○		古墳	
段状遺構 15	(445)	(235)	127.82	○	○		古墳	P 4 : 管玉
段状遺構 16	(475)	(62)	126.88	—	—		古墳	
段状遺構 17	338	(22)	126.10	—	—		古墳	
段状遺構 18	(345)	(40)	126.16	—	○		古墳	
段状遺構 19	348	(40)	125.88	—	○		古墳	
段状遺構 20	(278)	(53)	127.55	—	○		古墳	
段状遺構 21	(395)	(55)	128.02	—	—		古墳	
段状遺構 22	(206)	(80)	127.95	—	—		古墳	
段状遺構 23	(265)	(25)	127.95	—	○		古墳	
段状遺構 24	(465)	(143)	127.70	—	○		古墳	
段状遺構 25	491	(40)	128.90	—	○		古墳	
段状遺構 26	(345)	(131)	126.12	—	—	1 基	古墳	

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面標高 (m)	柱穴	壁体溝	土坑	時期	備考
段状遺構 27	(320)	(120)	122.18	○	○		古代	
段状遺構 28	514	(55)	122.48	—	○		中世	
段状遺構 29	(360)	(205)	133.74	○	—		中世	
段状遺構 30	(145)	(30)	132.04	—	○		中世	
段状遺構 31	1,295	(231)	129.49	○	○		中世	鏡像、集石 1
段状遺構 32	895	(75)	128.08	—	○		中世	
段状遺構 33	1,045	(163)	123.42	○	○		中世	
段状遺構 34	(462)	(28)	124.45	?	?		中世	
段状遺構 35	(960)	(93)	128.12	—	—		中世	
段状遺構 36	(360)	(200)	131.16	—	—		中世	
段状遺構 37	(90)	(50)	118.62	—	—		中世	

高尾北ヤシキ遺跡 土坑一覽

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	時期	備考
土坑 1	不整円形	皿形	209	(148)	68	120.24	弥生	
土坑 2	不整形	不整逆台形	51	38	18	117.97	弥生	
土坑 3	不整形	逆台形	63	50	32	131.19	弥生	
土坑 4	不整楕円形	逆台形	86	62	58	131.13	弥生	
土坑 5	不整楕円形	不整皿形	(421)	261	55	127.12	古墳	ガラス小玉、モモ核
土坑 6	不整楕円形	皿形	(95)	62	12	126.49	古墳	底に炭層、壁面は被熱
土坑 7	楕円形	皿形	126	109	32	120.29	中世	集石
土坑 8	楕円形	椀形	177	103	23	129.09	中世	
土坑 9	不整楕円形	不整椀形	258	175	71	129.19	中世	
土坑 10	方形	皿形	173	(152)	8	131.76	中世	
土坑 11	楕円形	皿形	104	66	11	131.62	中世	
土坑 12	方形	箱形	96	91	41	131.60	中世	
土坑 13	楕円形	皿形	115	77	6	131.35	中世	
土坑 14	方形	逆台形	91	88	18	131.94	中世	
土坑 15	長方形	皿形	217	139	10	131.40	中世	
土坑 16	長方形	皿形	182	118	18	131.48	中世	
土坑 17	長方形	皿形	176	94	10	161.66	中世	
土坑 18	不整形	不整逆台形	82	69	26	129.72	中世	
土坑 19	不整楕円形	箱形	51	41	63	135.23	中世	
土坑 20	円形	不整逆台形	60	59	31	124.80	中世	
土坑 21	円形	逆台形	56	54	29	124.96	中世	
土坑 22	不整円形	皿形	90	79	11	124.72	中世	
土坑 23	不整円形	不整逆台形	244	208	86	125.18	中世	溝 1 と連結
土坑 24	不整楕円形	不整椀形	(169)	139	50	132.39	不明	
土坑 25	円形	椀形	65	60	18	130.88	不明	底面の石に被熱
土坑 26	不整円形	不整形	258	243	51	122.23	不明	

高尾北ヤシキ遺跡 墓一覧

遺構名	平面形	掘り方上面		底面		深さ (cm)	小口溝						小口間 距離 (cm)	主軸	時期	備考
		長軸 (cm)	短軸 (cm)	長軸 (cm)	短軸 (cm)		位置	長軸 (cm)	深さ (cm)	位置	長軸 (cm)	深さ (cm)				
墓1	長方形	162	65	112	51	23	東	39	4	西	48	5	112	N-84°-E	弥生	木棺墓
墓2	長方形	110	70	94	56	21	-	-	-	-	-	-	-	N-30°-E	近世	
墓3	長方形	119	82	104	65	46	-	-	-	-	-	-	-	N-65°-E	近世	棺金具

高尾北ヤシキ遺跡 溝一覧

遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
溝1	椀形	147	95	42	中世	整地面3、土坑23と連結
溝2	皿形	250	210	25	中世	整地面1
溝3	椀形	105	20	30	中世	整地面2
溝4	椀形	65	45	14	中世	整地面2
溝5	椀形	62	23	13	中世	整地面2
溝6	皿形	175	148	26	中世	整地面3

高尾北ヤシキ遺跡 集石一覧

遺構名	規模		石				上面標高 (m)	時期	備考
	長軸 (cm)	短軸 (cm)	個数	個体重量 (kg)	平均重量 (kg)	総重量 (kg)			
集石1	204	72	237	0.1~3.00	0.65	153.96	120.24	中世	段状遺構31底面
集石2	185	82	67	0.1~5.35	0.89	59.58	117.97	中世	包含層1中か
集石3	126	72	30	0.35~39.00	4.15	124.60	131.19	中世	包含層1中
集石4	380	136	75	0.15~14.00	3.03	226.90	131.13	中世	包含層1中

高尾北ヤシキ遺跡 被熱面・炉一覧

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	上面標高 (m)	時期	備考
被熱面1	不整形	113	46	131.71	弥生	
炉1	不整形	65	45	118.30	不明	

高尾北ヤシキ古墳一覧

標高	墳丘		埋葬主体			埋葬 人数	埴輪	主な副葬品							特記事項
	墳形	規模	種別	主軸方向	規模 (内法)			刀	鏃	弓	馬具	耳環	玉類	刀子	
117.25 ~ 119.50	円	13.7	横穴式 石室	N 35° W	全長 6.5 m 幅 1.7 m 高さ 1.9 m	1+	×	1	1	○	鏡 鉸具 鞍 留金具 馬鈴	×	30	○	陶棺 筒形土製品 革袋形瓶 雛形鉄器 両頭金具
			竪穴式 石室	N 60° W	全長 1.6 m 幅 0.4 m 高さ 0.5 m	1+	×	×	×	×	×	2	8	×	鉄芯紡錘車

高尾北ヤシキ古墳 土坑墓一覧

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	主軸	遺物	時期	備考
土坑墓1	長方形	196	74	52	126.54	N-55°-W	須恵器 (高杯)	古墳	
土坑墓2	長方形	(145)	84	24	118.48	N-5°-W	須恵器 (短頸壺)	古墳	

高尾北ヤシキ遺跡 土器・陶磁器・埴輪観察表

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調		胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高	外面					
15-1	段状遺構 1	弥生土器	甕		7.0	(2.1)	にぶい黄橙 (5YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ?	
2	段状遺構 2	弥生土器	壺		10.0	(5.0)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母・赤色土粒	良好	破片	内面ユビオサエ	
3	段状遺構 3	弥生土器	壺	19.5		(5.9)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部に刻目文	
4	段状遺構 3	弥生土器	壺		11.2	(6.1)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ	
5	段状遺構 3	弥生土器	高杯	15.8		(3.2)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁端部に2条の凹線文?	
6	段状遺構 3	弥生土器	高杯	16.8		(3.9)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部ヨコナデ	
17-7	段状遺構 4	弥生土器	甕	(22.6)		(4.9)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	外面ハケメ	
8	段状遺構 4	弥生土器	甕		5.0	(5.4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	内面ユビオサエ	
18-9	段状遺構 5	弥生土器	甕			(2.1)	黒 (10YR2/1)	2mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部ヨコナデ	
19-10	段状遺構 7	弥生土器	壺			(1.4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部上面に櫛描斜格子文、円形浮文、貼付突帯。 口縁端部に凹線文、刻目文	
11	段状遺構 7	弥生土器	甕			(2.5)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部に3条の凹線文	
12	段状遺構 7	弥生土器	甕		8.2	(3.3)	褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ?	
13	段状遺構 7	弥生土器	壺	15.0		(8.6)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	外面ハケメ、ヘラミガキ 内面ユビオサエ	
14	段状遺構 7	弥生土器	高杯	17.6		(3.2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片		
15	段状遺構 7	弥生土器	器台	(16.2)		(2.8)	褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部上面に櫛描波状文。 口縁端部に4条の凹線文、円形浮文	
20-16	土坑 1	弥生土器	壺	17.8		(4.6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部に貼付突帯、刻目文	
17	土坑 1	土師器	壺	21.8		(1.9)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部に貼付突帯	
21-18	土坑 2	弥生土器	壺	10.0		(20.5)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	5mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母・赤色土粒	良好	破片	口縁部に貼付突帯文。外面ハケメ。内面ヘラケズリ、ユビオサエ	
22-19	土坑 3	弥生土器	甕	(16.8)		(4.6)	橙 (7.5YR6/6)	3mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ?	
20	土坑 3	弥生土器	高杯		(15.6)	(2.5)	灰褐 (7.5YR5/2)	3mm以下の砂粒を多く含む長石・雲母	良好	破片	外面に黒斑	
23-21	土坑 4	弥生土器	壺		(9.3)	(2.7)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片		
26-22	土器溜まり 1	弥生土器	壺	17.6		(2.2)	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部上面に円形浮文と穿孔、2条の沈線文。 口縁端部に刻目文、2条の凹線文、円形浮文	
23	土器溜まり 1	弥生土器	壺	(19.8)		(4.6)	黄灰 (2.5Y4/1)	3mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁端部に3条の凹線文と円形浮文。口縁部に5条の凹線文	
24	土器溜まり 1	弥生土器	壺	15.8		(2.3)	明黄褐 (10YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁端部に3条の凹線文と2列の円形浮文	
25	土器溜まり 1	弥生土器	壺	16.6		(2.0)	黄褐 (10YR5/8)	3mm以下の砂粒を多く含む長石	良好	破片	口縁部上面に4条一単位の櫛描波状文と円形浮文。口縁端部に3条の凹線文と2個一対の円形浮文	
26	土器溜まり 1	弥生土器	壺	21.0		(2.5)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部に斜方向の刻目目文、4条の凹線文	
27	土器溜まり 1	弥生土器	壺			(2.9)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	口縁部上面に櫛描斜格子文。口縁端部に刻目文、凹線文、棒状浮文、円形浮文	
28	土器溜まり 1	弥生土器	壺	(32.4)		(6.5)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部上面に貼付突帯と波状文、円形浮文。口縁端部に3条の凹線文と円形浮文	
29	土器溜まり 1	弥生土器	壺	25.2		(6.6)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部に綾杉文と円形浮文。頸部に押圧貼付突帯文	
30	土器溜まり 1	弥生土器	壺	(18.0)		(4.5)	にぶい橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部に2条の貼付突帯と刻目文	
31	土器溜まり 1	弥生土器	壺	(16.8)		(4.3)	橙 (7.5YR6/8)	2mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部に3条の貼付突帯と刻目文	
32	土器溜まり 1	弥生土器	壺	(19.0)		(2.6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	口縁部に3条の貼付突帯と刻目文	

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
26-33	土器溜まり1	弥生土器	壺	(21.2)		(4.2)	黄橙 (7.5YR7/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に3条の貼付突帯 と刻目文
34	土器溜まり1	弥生土器	壺	(19.2)		(4.4)	灰黄褐 (10YR5/3)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に3条の貼付突帯 と刻目文
35	土器溜まり1	弥生土器	壺	(16.6)		(4.7)	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁端部に2条の凹線文 と円形浮文、肩部に櫛 描直線文、波状文
36	土器溜まり1	弥生土器	壺	(14.3)		(2.4)	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に刻目文
37	土器溜まり1	弥生土器	壺	(17.8)		(3.2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に3条の凹線文 と円形浮文、刻目文
38	土器溜まり1	弥生土器	壺	15.4		(3.0)	明褐 (7.5YR5/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に3条の凹線文 と円形浮文。頸部に押 圧貼付突帯
39	土器溜まり1	弥生土器	壺か甕	(29.9)		(8.9)	明黄褐 (10YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部ヨコナデ 内面ユビオサエ
27-40	土器溜まり1	弥生土器	無頸壺	11.8		(6.7)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部上面に2条の凹 線文。口縁部に3条と6 条の凹線文、櫛描波 状文
41	土器溜まり1	弥生土器	壺			(6.9)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	肩部に櫛描直線文・波 状文、5条の凹線文
42	土器溜まり1	弥生土器	壺			(6.4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	肩部に6条と3条の凹 線文、櫛状斜格子文
43	土器溜まり1	弥生土器	無頸壺	(20.6)		(2.6)	褐灰 (7.5YR4/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英多く含む	良好	破片	口縁部上面に円形浮 文。口縁端部に貼付 突帯と櫛描波状文
44	土器溜まり1	弥生土器	無頸壺	15.6		(4.4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土 粒・雲母	良好	破片	口縁部上面に円形浮 文。口縁部に櫛描波 状文、貼付突帯と 棒状浮文
45	土器溜まり1	弥生土器	甕	(19.6)		(6.2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
46	土器溜まり1	弥生土器	甕	(13.8)		(7.6)	にぶい橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に1条の凹 線文
47	土器溜まり1	弥生土器	壺		8.4	(5.2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
48	土器溜まり1	弥生土器	壺		9.6	(5.3)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ？ 内面ユビオサエ
49	土器溜まり1	弥生土器	壺		8.4	(4.5)	明黄褐 (10YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ヘラケズリ
50	土器溜まり1	弥生土器	壺		8.0	(7.0)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ユビオサエ
51	土器溜まり1	弥生土器	甕		5.8	(5.1)	にぶい黄橙 (10YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ユビオサエ
52	土器溜まり1	弥生土器	甕		6.4	(3.7)	橙 (7.5YR6/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ユビオサエ
53	土器溜まり1	弥生土器	甕		5.2	(4.1)	灰黄褐 (10YR5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ、 ナデ内面ユビオサエ
54	土器溜まり1	弥生土器	甕		5.2	(6.2)	にぶい橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラケズリ。 内面ユビオサエ、炭 化物付着
55	土器溜まり1	弥生土器	高杯？			(1.8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土 粒・雲母	良好	破片	口縁部上面に3条の 凹線文と櫛描波状 文。口縁部端部に 円形浮文
56	土器溜まり1	弥生土器	高杯	(32.3)		(6.7)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部上面に3条の 櫛描斜格子文、円 形浮文
57	土器溜まり1	弥生土器	高杯	28.6		(6.3)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面に円形 浮文
58	土器溜まり1	弥生土器	高杯	(27.0)		(5.4)	灰黄褐 (10YR6/2)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラミガキ
59	土器溜まり1	弥生土器	高杯	(23.0)	15.5	(5.6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土 粒・雲母	良好	破片	脚部に三角形の透 かし孔
60	土器溜まり1	弥生土器	高杯			(5.3)	にぶい橙 (5YR6/4)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・角閃石	良好	破片	脚柱部に3条と1 条以上の凹線文、 円孔
61	土器溜まり1	弥生土器	高杯？			(7.3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・角閃石 ・雲母	良好	破片	脚柱部に5条以上 の貼付突帯
62	土器溜まり1	弥生土器	高杯		16.4	(2.5)	黄褐 (10YR5/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
63	土器溜まり1	弥生土器	高杯		17.8	(3.6)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
28-64	土器溜まり1	弥生土器	器台	(37.2)		(3.8)	浅黄橙 (10YR8/3)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土 粒・雲母	良好	破片	口縁部上面に4~5 条の凹線文、円形 浮文？。口縁部 に6条の凹線文、 円形浮文。頸部に 7条の凹線文、透 かし孔、鋸歯文？
65	土器溜まり1	弥生土器	器台	23.2		(3.0)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土 粒・雲母	良好	破片	口縁部上面に1条 の凹線、櫛描波 状文。口縁部に 5条の凹線文、 刻目文、円形浮 文
66	土器溜まり1	弥生土器	器台	(15.6)		(3.0)	黄橙 (10YR8/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面に円形 浮文。口縁部に5 条の凹線文と2 列の円形浮文

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
28-67	土器溜まり1	弥生土器	器台か壺			(1.7)	褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面と端部に櫛描斜子文、円形浮文
68	土器溜まり1	弥生土器	器台	(14.3)		(1.9)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面に3条の凹線文、櫛描波状文、円形浮文。口縁端部に4条の凹線文、円形浮文
69	土器溜まり1	弥生土器	器台	15.6		(3.2)	明黄褐 (10YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面に2条の凹線文と円形浮文。口縁端部に5条の櫛描波状文、円形浮文、刻目文
70	土器溜まり1	弥生土器	器台か壺	(23.0)		(2.8)	橙 (2.5YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面に2条の凹線文、円形浮文。口縁部に4条の凹線文、4列の円形浮文
71	土器溜まり1	弥生土器	器台		25.0	(5.5)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部に多条の凹線文、長方形の透かし孔。脚裾部に8条以上の凹線文、櫛描波状文
72	土器溜まり1	弥生土器	器台		26.4	(14.6) (5.9)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚柱部に多条の凹線文、長方形の透かし孔
73	土器溜まり1	弥生土器	器台		24.8	(4.9)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚裾部に6条の凹線文、ヘラ描斜格子文
74	土器溜まり1	弥生土器	器台		33.6	(3.3)	褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚裾部に凹線文、櫛描波状文
75	土器溜まり1	弥生土器	器台		18.2	(5.5)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚裾部に4条の凹線文
29-76	土器溜まり1	弥生土器	器台		22.4	(4.5)	浅黄橙 (10YR8/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
77	土器溜まり1	弥生土器	器台		(22.8)	(7.3)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚裾部に8条の凹線文、櫛描波状文
78	土器溜まり1	弥生土器	器台		29.2	(5.3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚裾部に11条の凹線文
79	土器溜まり1	弥生土器	器台		32.2	(5.9)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚裾部に8条の凹線文
80	土器溜まり1	弥生土器	器台		30.5	(7.8)	浅黄橙 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚裾部に11条の凹線文、山形文
81	土器溜まり1	弥生土器	器台		25.4	(7.8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚裾部に5条の凹線文
82	土器溜まり1	弥生土器	回転台形土器	25.9		(5.3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ、ナデ、一部ハケメ。内面ユビオサエ、ハケメ
83	土器溜まり1	弥生土器	回転台形土器			(1.6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	外面はヘラミガキ。内面ユビオサエ
30-84	被熱面1	弥生土器	甕		4.8	(6.0)	褐灰 (10YR4/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
85	被熱面1	弥生土器	高杯	18.8		(6.0)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内外面ヘラミガキ?
31-86	P1	弥生土器	壺		(9.7)	(7.3)	灰黄褐 (10YR5/2)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・角閃石・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
87	P1	弥生土器	甕		4.4	(3.9)	灰黄褐 (10YR6/2)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
88	P2	弥生土器	甕		(2.0)		にぶい黄橙 (10YR7/2)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁端部に円形浮文
89	P3	土師器	甕	(18.4)		(0.9)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
90	P3	弥生土器	高杯	(21.0)		(7.0)	灰黄褐 (10YR6/2)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁端部に刻目文、2個一対の円孔。内外面ハケメ、ヘラミガキ
91	P4	土師器	甕		7.2	(5.1)	橙 (5YR6/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
32-92	遺構に伴わない	弥生土器	壺	17.8		(6.8)	橙 (7.5YR6/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に円形浮文、口縁部に3条の貼付突帯
93	遺構に伴わない	弥生土器	壺	22.6		(2.2)	黄橙 (7.5YR8/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に斜方向の刻目文と4条の凹線文
94	遺構に伴わない	弥生土器	壺	14.7		(7.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部に3条の貼付突帯
95	遺構に伴わない	弥生土器	壺		7.8	(4.2)	にぶい褐 (7.5Y5/4)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内外面ヘラミガキ? 底部内面ユビオサエ
96	遺構に伴わない	弥生土器	甕	(17.4)		(4.8)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部に2条の凹線文 内外面ヨコナデ、ハケメ
97	遺構に伴わない	弥生土器	台付鉢?		8.0	(3.4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚部外面に刺突文
98	遺構に伴わない	弥生土器	高杯		5.8		灰黄褐 (10YR6/3)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	脚部に4条の凹線文 内面ヘラミガキ
99	遺構に伴わない	弥生土器	高杯		(14.8)	(3.4)	橙 (5YR7/6)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	脚部に透かし孔、2条の凹線文
37-100	竪穴住居1	土師器	甕	(19.0)		(12.8)	明赤褐 (5YR5/6)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ハケメ 内面ヘラケズリ
101	竪穴住居1	土師器	甕			(12.4)	橙 (7.5YR6/6)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ?

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
37-102	竪穴住居1	土師器	甕	(19.4)		(3.6)	橙 (7.5YR6/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部ヨコナデ 内面ヘラケズリ?
103	竪穴住居1	土師器	甕			(4.6)	橙 (5YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ
104	竪穴住居1	須恵器	杯身	(11.2)		(3.5)	灰 (5Y6/1)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
105	竪穴住居1	須恵器	有蓋高杯 蓋	(14.0)		(5.8)	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
106	竪穴住居1	須恵器	甕	(20.4)		(10.7)	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕
38-107	竪穴住居2	土師器	甕	12.0		(8.5)	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ヘラケズリ
108	竪穴住居2	土師器	甕			(12.4)	明褐 (7.5YR5/6)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面ハケメ 内面ヘラケズリ
109	竪穴住居2	土師器	高杯			(7.7)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	
110	竪穴住居2	須恵器	横瓶			(16.7)	灰白 (7.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕 胎土分析試料No.29
41-111	竪穴住居4	土師器	甕	20.4		32.6	橙 (5Y6/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	ほぼ 完形	外面スス付着 内面ヘラケズリ
112	竪穴住居4	土師器	甕	17.5		30.3	明赤褐 (2.5YR5/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	ほぼ 完形	外面タタキ、ハケメ 内面ヘラケズリ、ユビオ サエ
113	竪穴住居4	土師器	甕	18.4		(18.8)	橙 (5YR6/8)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面タタキ、ハケメ 内面ヘラケズリ
114	竪穴住居4	土師器	甕	17.4		(14.8)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	
115	竪穴住居4	土師器	甕	(22.4)		(9.8)	橙 (7.5YR7/6)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
116	竪穴住居4	土師器	甕	14.5		(10.9)	橙 (5Y6/6)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ヘラケズリ
117	竪穴住居4	土師器	甕			(11.7)	橙 (7.5YR7/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ
118	竪穴住居4	土師器	甕	(14.4)		(7.1)	橙 (5YR6/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ、ユビオ サエ
119	竪穴住居4	須恵器	杯蓋			(1.0)	灰 (N5/)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
42-120	竪穴住居5	土師器	鉢	(1.8)		(6.8)	橙 (7.5YR6/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面の一部ユビオサエ
121	竪穴住居5	須恵器	杯蓋	14.2	(8.3)	4.9	灰白 (10YR8/2)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	やや 不良	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
122	竪穴住居5	須恵器	杯蓋	(15.6)		(2.8)	淡黄 (2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を含む 長石・石英	不良	破片	回転ナデ
123	竪穴住居5	須恵器	杯	(10.4)	(4.2)	(4.0)	灰褐 (5YR5/2)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
124	竪穴住居5	須恵器	長頸壺	6.2		(6.2)	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ ロクロの回転方向：右 胎土分析試料No.25
46-125	竪穴住居7	土師器	壺	(10.2)		(6.4)	橙 (7.5YR7/6)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ユビオサエ
126	竪穴住居7	土師器	甕	(20.0)		(5.7)	橙 (5YR6/8)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ?
127	竪穴住居7	弥生土器	甕	(20.4)		(17.9)	橙 (7.5YR7/6)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	外面ハケメ、スス付着 内面ヘラケズリ
128	竪穴住居7	土師器	高杯			(3.6)	橙 (5YR6/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
129	竪穴住居7	須恵器	杯蓋	15.0		4.5	灰 (5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
130	竪穴住居7	須恵器	杯身	12.9		4.3	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 胎土分析試料No.18
131	竪穴住居7	須恵器	甕			(1.5)	灰白 (5Y8/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	内外面回転ナデ
132	竪穴住居7	須恵器	把手付鉢?	(8.4)		(5.0)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	外面に1条の沈線、4条 の縞描波状文
133	竪穴住居7	須恵器	裝飾付壺	(10.0)		(3.0)	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
134	竪穴住居7	須恵器	裝飾付壺?	(17.2)		(4.0)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	裝飾付壺の脚部か
49-135	竪穴住居9	土師器	壺	(7.9)		(4.4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ
136	竪穴住居9	土師器	壺	(11.3)		(4.6)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ?
137	竪穴住居9	土師器	甕	(14.8)		(3.7)	橙 (5YR7/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・赤色土粒	良好	破片	
138	竪穴住居9	土師器	高杯	(13.4)		(4.3)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	8mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
49 - 139	竪穴住居 9	須恵器	杯蓋	(13.6)		4.7	灰 (7.5Y6/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ、 ロクロの回転方向：右
140	竪穴住居 9	須恵器	杯蓋	(12.2)		(3.3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	不良	破片	回転ナデ
141	竪穴住居 9	須恵器	杯身	13.4		(5.0)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ、 ロクロの回転方向：右
142	竪穴住居 9	須恵器	杯身	12.0		(2.7)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	不良	破片	回転ナデ
143	竪穴住居 9	須恵器	杯身	13.0		4.9	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ、 ロクロの回転方向：右
144	竪穴住居 9	須恵器	杯身	(12.4)		(3.3)	にぶい橙 (5YR7/3)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	破片	回転ナデ
145	竪穴住居 9	須恵器	杯身	13.9		(3.4)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
146	竪穴住居 9	須恵器	甕		2.0	(3.9)	暗緑灰 (10G4/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	外面カキメ、櫛状工具に よる刺突文、沈線文
50 - 147	竪穴住居 10	土師器	壺	(10.0)		(5.0)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面一部ハケメ
148	竪穴住居 10	須恵器	杯蓋	13.3		4.2	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部一部回転ヘラケズリ、 ヘラ切り 胎土分析試料No.17
149	竪穴住居 10	須恵器	杯蓋	(14.7)		4.3	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ
150	竪穴住居 10	須恵器	杯蓋	13.8		4.1	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 胎土分析試料No.16
151	竪穴住居 10	須恵器	杯蓋	13.6		4.2	灰 (N4/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ、 ロクロの回転方向：右
152	竪穴住居 10	須恵器	杯蓋	14.3		4.6	灰 (N6/)	5mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ、 ロクロの回転方向：右
153	竪穴住居 10	須恵器	杯身	12.2		(3.6)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒わずかに含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ、 ヘラ切り。ロクロの回転方 向：右
154	竪穴住居 10	須恵器	有蓋高杯 蓋	14.0		5.0	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
155	竪穴住居 10	須恵器	椀	13.6	7.4	(4.1)	灰褐 (7.5YR5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	底部ヘラ切り後ナデ
156	竪穴住居 10	須恵器	高杯		11.5	(6.5)	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部に2条の沈線文、 長方形の透かし孔
157	竪穴住居 10	須恵器	高杯		(21.4)	(2.4)	灰黄 (2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を含む 長石	良好	破片	外面に刺突文、突帯
158	竪穴住居 10	須恵器	甕			(2.0)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
159	竪穴住居 10	須恵器	短頸壺			(11.1)	灰 (N6/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面格子目タタキ、4条 の沈線文、綾杉文 胎土分析試料No.27
160	竪穴住居 10	須恵器	高杯	(28.1)		(6.3)	褐灰 (5YR5/1)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に刻目文 外面に刺突文、沈線文
51 - 161	竪穴住居 11	土師器	甕	20.0		(10.2)	橙 (5YR6/6)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ヘラケズリ
162	竪穴住居 11	土師器	甕			(6.1)	橙 (5YR6/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	頸径 15.5 cm
163	竪穴住居 11	須恵器	杯蓋	13.7		(5.0)	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
164	竪穴住居 11	須恵器	杯蓋	14.7		(4.2)	灰 (7.5Y6/1)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
53 - 165	竪穴住居 12	土師器	甕	(16.4)		(11.5)	橙 (5YR6/8)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
166	竪穴住居 12	土師器	高杯			(3.2)	にぶい橙 (5YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
167	竪穴住居 12	須恵器	杯蓋	14.5		5.1	浅黄橙 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	不良	破片	天井部ヘラ切り 口縁内面沈線
168	竪穴住居 12	須恵器	杯蓋			(1.3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	不良	破片	
169	竪穴住居 12	須恵器	杯身	(11.5)		(4.0)	浅黄橙 (7.5YR6/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	やや 不良	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
170	竪穴住居 12	須恵器	杯蓋	(12.7)		(3.6)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面に沈線 口縁部内面に段
171	竪穴住居 12	須恵器	杯身	14.0		(3.0)	褐灰 (10YR4/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
172	竪穴住居 12	須恵器	杯蓋	(13.8)		(2.2)	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	外面に沈線 口縁部内面に段
173	竪穴住居 12	須恵器	杯身	(13.2)		(2.6)	にぶい橙 (5YR6/3)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ 二次的な被熱
174	竪穴住居 12	須恵器	杯蓋	(17.0)		(3.2)	灰褐 (7.5YR6/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	外面に沈線 口縁部内面に段
175	竪穴住居 12	須恵器	杯身	(13.4)		(2.6)	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
53 - 176	竪穴住居 12	須恵器	有蓋高杯			(3.6)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ 内面同心円文当て具痕 ロクロの回転方向：右
177	竪穴住居 12	須恵器	有蓋高杯	12.9	9.0	(3.2)	灰 (N6/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚部に円孔（4方向か？）
178	竪穴住居 12	須恵器	有蓋高杯	11.6	10.4	8.6	灰 (N6/) 黒 (N1.5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	体部回転ヘラケズリ 脚部に円孔（3方向）
179	竪穴住居 12	須恵器	甕			(4.7)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒 長石	良好	破片	外面格子目タタキ、カキメ。 内面同心円文当て具痕。 摩滅が著しい。
56 - 180	竪穴住居 14	須恵器	杯身	(13.2)	(7.6)	(4.3)	灰白 (N7/)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
58 - 181	竪穴住居 15	土師器	壺	(10.0)		(3.1)	明赤褐 (5YR5/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや不良	破片	
182	竪穴住居 15	土師器	甕			(5.5)	橙 (5YR6/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
183	竪穴住居 15	土師器	甕	(21.0)		(8.1)	黄橙 (7.5YR7/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
184	竪穴住居 15	土師器	甕	20.0		(15.2)	橙 (7.5YR6/8)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ハケメ 内面ヘラケズリ
185	竪穴住居 15	土師器	甕	(30.2)		(11.3)	明黄褐 (10YR7/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや不良	破片	
186	竪穴住居 15	須恵器	杯蓋			(2.9)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	不良	破片	天井部ヘラ切り
187	竪穴住居 15	須恵器	杯身	12.0		4.7	灰白 (N7/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
188	竪穴住居 15	須恵器	高杯			(4.5)	灰白 (N7/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
189	竪穴住居 15	須恵器	短頸壺	8.4		(3.3)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	外面に蓋の重ね焼き痕
61 - 190	竪穴住居 16	土師器	甕	(17.4)		(9.4)	明赤褐 (5YR5/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	外面ハケメ。内面ヘラケズリ、 ユビオサエ
191	竪穴住居 16	土師器	高杯			(2.5)	黄橙 (7.5YR6/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	
192	竪穴住居 16	土師器	竈			(8.7)	黄橙 (7.5YR7/8)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	
193	竪穴住居 16	土師器	甌	(22.4)	14.0	22.5	明赤褐 (5YR5/8)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	内面ヘラケズリ 円孔
194	竪穴住居 16	須恵器	杯蓋	14.4		(4.0)	灰 (7.5Y6/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
195	竪穴住居 16	須恵器	杯蓋	14.1		3.9	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	不良	破片	天井部回転ヘラケズリ 口縁内面に沈線
196	竪穴住居 16	須恵器	杯蓋	(13.0)		(4.2)	灰白 (N7/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ 口縁内面に沈線
197	竪穴住居 16	須恵器	杯蓋			(3.5)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
198	竪穴住居 16	須恵器	杯蓋	13.8		(3.0)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
199	竪穴住居 16	須恵器？	杯身			(3.3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	生焼け
200	竪穴住居 16	須恵器	杯身	(10.0)		(3.9)	灰 (N5/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ、ヘラ切り？
201	竪穴住居 16	須恵器	杯身			(3.5)	灰 (10Y5/1)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
202	竪穴住居 16	須恵器	杯身	(12.8)		(3.5)	黄灰 (2.5Y6/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
203	竪穴住居 16	須恵器	杯身	(13.0)		(2.9)	淡黄 (2.5Y8/3)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	不良	破片	生焼け
204	竪穴住居 16	須恵器	杯身	(12.6)		(2.5)	灰白 (5Y7/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	やや不良	破片	回転ナデ
205	竪穴住居 16	須恵器	杯身			(3.2)	灰 (7.5Y5/1)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	底部回転ヘラケズリ
206	竪穴住居 16	須恵器	杯身	(11.8)		(2.8)	暗緑灰 (10GY4/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
207	竪穴住居 16	須恵器	杯身	(12.0)		(2.7)	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
208	竪穴住居 16	須恵器	杯身	(12.5)		(2.4)	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
209	竪穴住居 16	須恵器	有蓋高杯 か杯蓋			(2.0)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
210	竪穴住居 16	須恵器	高杯？			(1.5)	灰褐 (5YR5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面に櫛状工具による刺突文
211	竪穴住居 16	須恵器	甕か壺		2.2	(4.2)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部内面に櫛状工具痕
212	竪穴住居 16	須恵器	壺？	(12.4)		(2.7)	灰白 (7.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面カキメ
213	竪穴住居 16	須恵器	短頸壺	6.4		(6.4)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	外面下半回転ヘラケズリ 後ナデ

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
61 - 214	竪穴住居 16	須恵器	壺		7.4	(2.9)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部ヘラ切り
215	竪穴住居 16	須恵器	甕			(6.5)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕
62 - 216	竪穴住居 15・16	須恵器	甕	20.4		(8.0)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	不良	破片	外面平行タタキ 内面当て具痕?
217	竪穴住居 15・16	須恵器	高杯	13.8		(4.3)	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
218	竪穴住居 15・16	須恵器	高杯			(8.5)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	脚柱部に長方形の透かし孔 (3方向)、2条の沈線文
219	竪穴住居 15・16	須恵器	甕			(10.4)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒 長石・石英多く含む	良好	破片	外面平行タタキ 内面同心円文当て具痕
64 - 220	竪穴住居 17	土師器	甕	23.0		(13.8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	外面ハケム 底部スス付着
221	竪穴住居 17	土師器	杯		3.5	(4.0)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・雲母・赤色土粒	良好	破片	内面ユビオサエ
222	竪穴住居 17	須恵器	杯蓋	(12.8)		(3.1)	灰白 (2.5Y8/2)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
223	竪穴住居 17	須恵器	杯蓋	13.2		4.0	灰 (10Y6/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
224	竪穴住居 17	須恵器	杯身	(11.2)		(3.5)	灰 (N5/)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	
225	竪穴住居 17	須恵器	甕			(9.5)	灰褐 (7.5YR5/1)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・雲母	良好	破片	外面格子目タタキ、カキ メ。内面同心円文当て具 痕、カキメ
226	竪穴住居 17	須恵器	甕			(3.6)	灰 (5Y6/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面平行タタキ 内面同心円文当て具痕
67 - 227	竪穴住居 19	土師器	甕	(21.9)		(13.7)	橙 (5YR7/8)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	内面ユビオサエ
228	竪穴住居 19	土師器	甕	19.4		(15.0)	橙 (5YR6/8)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ヘラケズリ
229	竪穴住居 19	土師器	甕	(18.0)		(6.3)	浅黄橙 (10YR8/3)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ?
230	竪穴住居 19	土師器	甕			(5.6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
231	竪穴住居 19	須恵器	杯蓋	(13.0)		(3.8)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面沈線 口縁内面に段
232	竪穴住居 19	須恵器	杯蓋	(13.4)		(2.7)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	口縁内面に段
233	竪穴住居 19	須恵器	杯身	11.4		4.8	にぶい橙 (2.5YR6/4)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英・赤色土粒	良好	ほぼ 完形	底部回転ヘラケズリ、ヘ ラ切り ロクロの回転方向：右
234	竪穴住居 19	須恵器	杯身	13.5		3.5	灰白 (N8/)	5mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	ほぼ 完形	底部回転ヘラケズリ、ヘ ラ切り ロクロの回転方向：右
235	竪穴住居 19	須恵器	杯身	13.0		4.2	灰白 (N7/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左 胎土分析試料No.20
236	竪穴住居 19	須恵器	杯身	13.6		3.9	灰白 (5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	破片	底部回転ヘラケズリ
237	竪穴住居 19	須恵器	杯身	13.2		(2.3)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
238	竪穴住居 19	須恵器	高杯		8.4	(9.2)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	脚柱部に沈線文、長方形 の透かし孔(3方向)
239	竪穴住居 19	須恵器	短頸壺	5.7	1.4	9.2	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	底部回転ヘラケズリ 肩部蓋の重ね焼き痕 ロクロの回転方向：右 胎土分析試料No.28
240	竪穴住居 19	須恵器	甕			(4.8)	灰白 (N8/)	1mm以下の砂粒を含む 長石	良好	破片	外面格子目タタキ 内面同心円文当て具痕
68 - 241	竪穴住居 20	須恵器	高杯			(1.4)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	
242	竪穴住居 20	須恵器	杯蓋	(11.8)		(3.0)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ
70 - 243	竪穴住居 21	土師器	甕			(5.2)	橙 (7.5YR7/6)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内面ユビオサエ
244	竪穴住居 21	土師器	甕			(4.7)	橙 (2.5YR6/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	把手
245	竪穴住居 21	須恵器	杯蓋	(14.0)		(4.0)	灰白 (2.5Y8/1)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
246	竪穴住居 21	須恵器	杯蓋			(3.8)	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
247	竪穴住居 21	須恵器	杯身	12.0		4.8	灰白 (N7/)	1mm以下の砂粒を含む 長石	良好	破片	底部ヘラ切り
248	竪穴住居 21	須恵器	杯身	10.4		3.3	灰白 (5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
249	竪穴住居 21	須恵器	杯身	(12.6)		(3.0)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
70 - 250	竪穴住居 21	須恵器	有蓋高杯 蓋	15.1		6.9	灰白 (N7/)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 胎土分析試料No.23
251	竪穴住居 21	須恵器	高杯か 杯身?	(13.2)		(2.4)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
252	竪穴住居 21	須恵器	高杯			(6.1)	灰白 (2.5Y8/2)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部に長方形の透かし 孔(3方向か)、沈線文
253	竪穴住居 21	須恵器	高杯	12.7	12.0	10.3	灰白 (N7/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	体部回転ヘラケズリ 脚部に1条の沈線文 ロクロの回転方向：右
254	竪穴住居 21	須恵器	高杯		16.8	(17.0)	灰白 (5Y7/1)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部に沈線文、2段の 透かし孔(3方向か) 胎土分析試料No.21
255	竪穴住居 21	須恵器	壺	(13.0)		(1.3)	灰白 (2.5Y7/1)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
256	竪穴住居 21	須恵器	壺	(17.6)		(1.8)	黄灰 (2.5Y5/1)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
257	竪穴住居 21	須恵器	壺?			(3.3)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	胴部最大径7.2cm 装飾壺の小壺?
258	竪穴住居 21	須恵器	甕			(9.7)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕
259	竪穴住居 21	須恵器	提瓶			(6.3)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面カキメ 環状把手
71 - 260	竪穴住居 17~21	須恵器	装飾付壺	(13.4)		(2.2)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	装飾付壺の口縁部か
261	竪穴住居 17~21	須恵器	壺		7.3	(2.2)	灰白 (7.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面同心円文当て具痕 底部ヘラ切り
262	竪穴住居 17~21	須恵器	提瓶			(1.6)	灰白 (N7/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	
263	竪穴住居 17~21	須恵器	提瓶			(6.6)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	外面カキメ
73 - 264	段状遺構 8	土師器	甕	14.0		(6.0)	橙 (7.5YR6/6)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	外面ヨコナデ。内面ユビ オサエ、ヘラケズリ
265	段状遺構 9	須恵器	杯蓋	14.1		(4.0)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ
266	段状遺構 9	勝間田焼	椀	(17.0)		(2.3)	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
74 - 267	段状遺構 10	土師器	甕	(24.2)		(6.8)	橙 (7.5YR6/6)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部ヨコナデ 内面ヘラケズリ
268	段状遺構 10	土師器	高杯			(4.1)	橙 (7.5YR6/8)	5mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	
269	段状遺構 10	須恵器	杯蓋	(14.8)		(3.9)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	回転ナデ
270	段状遺構 10	須恵器	壺		5.4	(6.5)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	底部ヘラ切り。内面に黒 褐色の有機物が薄く付着。 百濟系の模倣か。
75 - 271	段状遺構 11	須恵器	杯蓋			(1.4)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面回転ナデ
272	段状遺構 11	勝間田焼	椀			(3.2)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	
77 - 273	段状遺構 15	土師器	甌	(22.0)		(12.6)	黄橙 (7.5YR7/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
274	段状遺構 15	土師器	甌			(7.1)	橙 (7.5YR7/6)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	把手
275	段状遺構 15	土師器	甌			(4.1)	橙 (2.5YR6/8)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	把手
276	段状遺構 15	須恵器	杯蓋	(14.8)		(2.7)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	破片	回転ナデ
277	段状遺構 15	須恵器	杯蓋			(1.8)	灰 (10Y5/1)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
278	段状遺構 15	須恵器	杯身			(3.8)	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部ヘラケズリ
279	段状遺構 15	須恵器	有蓋高杯 蓋			(1.9)	灰 (N5/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
280	段状遺構 15	須恵器	高杯		11.5	(6.6)	灰白 (N7/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	外面カキメ(ナデ)条線 残存、菱形の透かし孔
281	段状遺構 15	須恵器	甕	(17.8)		(7.4)	灰白 (10YR8/2)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	回転ナデ
78 - 282	段状遺構 16	須恵器	杯身			(2.5)	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	やや 不良	破片	回転ナデ
283	段状遺構 19	土師器	高杯	12.5	8.0	9.1	橙 (5YR7/8)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
284	段状遺構 19	須恵器	杯身	12.6	2.0	4.8	灰 (N6/)	5mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 胎土分析試料No.19
79 - 285	段状遺構 20	土師器	甕	16.4		(7.7)	橙 (5YR6/8)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ヘラケズリ
286	段状遺構 20	土師器	甕	(17.8)		(10.4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面ヘラケズリ

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
81 - 287	段状遺構 21	須恵器	杯身		9.0	(2.2)	灰 (5Y6/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	底部へラ切り ロクロの回転方向：左
288	段状遺構 21	須恵器	装飾付壺	16.6		(4.4)	褐灰 (10YR6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	装飾付壺の脚部か
289	段状遺構 23	須恵器	蓋	(11.6)		(3.4)	緑灰 (10G5/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ナデ 外面1条の沈線
290	段状遺構 23	須恵器	杯蓋	(15.0)		(4.3)	灰 (N4/)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
291	段状遺構 23	須恵器	杯身		(2.6)	(2.8)	灰 (N6/)	1mm程の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
292	段状遺構 23	須恵器	杯身			(2.1)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	破片	回転ナデ
293	段状遺構 24	須恵器	杯蓋			(1.9)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
82 - 294	段状遺構 26	須恵器	杯蓋	19.3		4.6	浅黄橙 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	不良	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
295	段状遺構 26	須恵器	高杯			(1.1)	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
296	段状遺構 26	須恵器	高杯	14.1		(1.7)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚部に1条の沈線文
297	段状遺構 26	須恵器	甕			(2.9)	灰白 (N7/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
298	段状遺構 26	須恵器	甕			(6.0)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕
83 - 299	段状遺構 27	土師器	甕	(15.9)		(18.4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	外面スス付着 内面ヘラケズリ
300	段状遺構 27	土師器	甕	21.6		(23.7)	橙 (2.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	外面ハケメ。内面ヘラケ ズリ、ユビオサエ
301	段状遺構 27	土師器	甕	23.1		31.8	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	外面ハケメ 内面ユビオサエ
302	段状遺構 27	土師器	甕			(5.8)	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	1mm以下の砂粒 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	把手
303	段状遺構 27	須恵器	杯身	11.7		(2.1)	灰 (10YR6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
304	段状遺構 27	須恵器	杯身	12.3	9.3	3.5	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ 底部へラ切り
85 - 305	土坑 5	土師器	甕	24.0		(17.8)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	6mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
306	土坑 5	土師器	高杯	13.9		(4.8)	橙 (5YR7/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	
307	土坑 5	須恵器	杯蓋	12.8		4.3	灰 (N6/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
308	土坑 5	須恵器	杯蓋	12.8		3.9	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右 胎土分析試料No.15
309	土坑 5	須恵器	杯身	12.9		(4.2)	灰 (N5/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
310	土坑 5	須恵器	杯身	12.6		4.0	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	不良	破片	底部へラ切り、ナデ
311	土坑 5	須恵器	有蓋高杯 蓋	13.6		(5.7)	灰 (10Y5/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左 胎土分析試料No.22
312	土坑 5	土師器	高杯	12.8	8.8	7.6	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面一部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
313	土坑 5	須恵器	高杯	13.2	10.4	8.8	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒・長石	良好	完形	杯部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
314	土坑 5	須恵器	長頸壺蓋	6.6		4.9	灰白 (N7/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	ほぼ 完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：左
315	土坑 5	須恵器	装飾 小型壺			(4.3)	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ナデ、ユビオサエ 内面ナデ
316	土坑 5	須恵器	平瓶	6.2		(6.5)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	頸部径 3.8 cm
317	土坑 5	須恵器	提瓶			(3.8)	灰 (N6/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	頸部径 5.2 cm 把手は欠損
318	土坑 5	須恵器	提瓶			(6.7)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	外面カキメ
319	土坑 5	須恵器	提瓶			(19.3)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面カキメ 把手は欠損 胎土分析試料No.24
320	土坑 5	須恵器	甕			(3.6)	浅黄 (2.5Y7/3)	1mm以下の砂粒を含む 長石	不良	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円当て具痕
321	土坑 5	須恵器	甕			(10.4)	浅黄 (2.5Y7/3)	2mm以下の砂粒を含む 長石	不良	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円当て具痕
322	土坑 5	須恵器	甕			(14.6)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を含む 長石	良好	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円当て具痕
88 - 323	遺構に伴わない	土師器	高杯			(2.4)	橙 (5YR6/8)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
88 - 324	遺構に伴わない	土師器	高杯	(7.4)		(5.8)	橙 (5YR6/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
325	遺構に伴わない	土師器	甌			(3.1)	橙 (5YR7/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	把手
326	遺構に伴わない	須恵器	壺か甌			(3.4)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面沈線文、ヘラ状工具 による斜線文
327	遺構に伴わない	須恵器	甌			(4.1)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	2条の沈線と櫛描刺突文 が2単位
98 - 328	掘立柱建物 3	瓦質土器	鍋			(3.2)	灰 (5Y4/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
99 - 329	掘立柱建物 4 - P 3	瓦質土器	羽釜			(4.3)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	外面スス付着 貼付鏝
330	掘立柱建物 4 - P 4	勝間田焼	椀	(13.7)		(2.7)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	不良	破片	回転ナデ
331	掘立柱建物 5	備前焼	播鉢			(4.6)	浅黄橙 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面6条の節目 397と同一個体か
332	掘立柱建物 5 - P 3	瓦質土器	鍋			(3.1)	灰白 (2.5Y8/1)	3mm以下の砂粒を含む	良好	破片	外面スス付着 貼付鏝
108 - 333	柱穴列 10 - P 2	青磁	皿			(1.2)	釉薬：灰オリーブ (7.5Y6/2)	精良	堅緻	破片	内面片切り彫り、櫛描文 同安窯系皿 I 類
110 - 334	柱穴列 12 - P 1	瓦質土器	羽釜	(25.4)		(3.6)	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面スス付着 貼付鏝
122 - 335	整地面 2	土師器	皿	10.4	7.0	1.9	にぶい橙 (2.5YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
336	整地面 2	土師器	皿	(10.3)	(6.0)	(2.2)	浅黄橙 (10YR8/3)	3mm以下の砂粒を多く含む 石英・赤色土粒	良好	破片	
337	整地面 2	備前焼	甕	(29.0)		(4.4)	黄灰 (2.5Y6/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
338	整地面 2	備前焼	播鉢	(27.8)		(6.7)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面6条の節目
339	整地面 2	備前焼	播鉢			(4.3)	灰 (N4/)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石わずかに含む	良好	破片	内面6条の節目
340	整地面 2	瓦質土器	羽釜	(29.8)		(3.5)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	外面スス付着
341	整地面 2	瓦質土器	鍋	(26.8)	18.2	9.5	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	やや 不良	破片	外面スス付着 貼付把手
123 - 342	掘立柱建物 9 - P 3	土師器	小皿	(10.0)	7.4	1.3	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	底面ヘラ切り、板目 二次的な被熱
127 - 343	掘立柱建物 12 - P 3	土師器	小皿		5.2	(0.9)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	不良	破片	
344	掘立柱建物 12 - P 3	備前焼	播鉢			(4.0)	褐灰 (10YR6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面5条以上の節目
138 - 345	掘立柱建物 14・15	青磁	皿	11.9		(1.8)	釉薬：灰黄 (2.5Y6/2)	精良	堅緻	破片	内外面施釉 腰折皿
346	掘立柱建物 14・15	備前焼	播鉢		15.4	(6.0)	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面8条の節目。使用に よる摩滅が著しい
347	掘立柱建物 14 - P 5	土師器	小皿	(8.8)	(6.6)	(1.0)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母		破片	底部ヘラ切り？
144 - 348	柱穴列 31・32	土師器	皿		7.0	(1.0)	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	底部ヘラ切り
349	柱穴列 31・32	備前焼	甕		(22.9)	(6.3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面一部ヘラケズリ
350	柱穴列 31・32	瓦質土器	鍋			(6.9)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部ユビオサエ
150 - 351	掘立柱建物 17・18	備前焼	播鉢	(35.2)		(8.0)	灰赤 (7.5R4/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面8条の節目
352	掘立柱建物 17・18	青磁	皿			(1.9)	釉薬：灰みの黄 (2.5Y6/2)	精良	良好	破片	
151 - 353	掘立柱建物 19～21	青磁	皿		6.0	(0.9)	釉薬：明灰黄 (2.5Y7.5/2)	精良	良好	破片	
160 - 354	段状遺構 31	土師器	小皿	6.6	5.2	0.9	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面ナデ
355	段状遺構 31	土師器	小皿	7.0	6.0	1.0	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面ナデ
356	段状遺構 31	土師器	小皿	5.9	5.1	0.9	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面ナデ
357	段状遺構 31	土師器	高杯		(7.7)	(4.9)	浅黄橙 (10YR8/3)	5mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	やや 不良	破片	
358	段状遺構 31	土師器	高杯			(5.0)	灰白 (2.5Y8/2)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	破片	
359	段状遺構 31	勝間田焼	椀		7.0	(2.0)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
360	段状遺構 31	勝間田焼	椀		7.1	(1.4)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
361	段状遺構 31	勝間田焼	椀		6.2	(2.0)	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	やや 不良	破片	底部回転糸切り
362	段状遺構 31	勝間田焼	椀		5.4	(1.5)	灰白 (5Y8/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	底部回転糸切り

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
160 - 363	段状遺構 31	勝間田焼	甕			(7.5)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ハケメ
364	段状遺構 31	勝間田焼	甕			(2.3)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石わずかに含む	良好	破片	外面タタキ
365	段状遺構 31	備前焼	播鉢	(26.6)		(4.8)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	5mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面7条の節目
366	段状遺構 31	備前焼	播鉢	(27.9)		(4.8)	灰褐 (7.5YR6/2)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面8条の節目 重ね焼きの痕跡
367	段状遺構 31	備前焼	甕	(39.0)	(36.4)	(61.9)	明赤褐 (5YR5/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	
368	段状遺構 31	瓦質土器	鍋			(3.8)	暗灰 (N3/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	外面スス付着。内面ハケ メ。草戸千軒II期後半
369	段状遺構 31	瓦質土器	鍋			(5.9)	灰 (5Y4/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	外面ユビオサエ。スス付 着
370	段状遺構 31	瓦質土器	鍋			(6.3)	浅黄 (2.5Y7/3)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚部
371	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜	(26.8)		(5.2)	灰白 (2.5Y8/2)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
372	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜	24.1		(5.2)	灰 (5Y6/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面にスス付着
373	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜			(2.2)	灰 (7.5Y4/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	貼付鏝
374	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜			(2.3)	灰黄 (2.5Y6/2)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
375	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜	(33.4)		(2.5)	黄灰 (2.5Y6/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
376	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜			(5.7)	黄灰 (2.5Y5/1)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	貼付鏝
377	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜			(4.0)	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	貼付鏝
378	段状遺構 31	瓦質土器	羽釜	(37.5)		(5.7)	灰 (N5/)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	
379	段状遺構 31	褐釉陶器	壺			(3.1)	灰白 (5Y8/2)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面回転ナデ 外面褐釉
380	段状遺構 31	陶器 瀬戸美濃	天目茶碗	(11.5)		(3.2)	釉薬：褐 (7.5YR4/4)	精良	良好	破片	素地：灰白(10YR8/2) 胎土分析試料No.30
166 - 381	段状遺構 31 -集石1	備前焼	播鉢	(30.6)		(8.9)	浅黄橙 (10YR8/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	やや 不良	破片	内面6条の節目
382	段状遺構 31 -集石1	備前焼	甕			(7.2)	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	2mm以下の砂粒 長石・石英	良好	破片	内面一部布目痕
383	段状遺構 31 -集石1	勝間田焼	甕			(3.5)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・赤色土粒	やや 不良	破片	外面タタキ
167 - 384	段状遺構 32	須恵器	甕	(21.0)		(4.0)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
385	段状遺構 32	備前焼	甕		(20.2)	(13.3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面ハケメ、回転ナデ 内面ナデ
168 - 386	段状遺構 33	須恵器	提瓶			(6.7)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	外面カキメ、放射状の刻 目文
387	段状遺構 33	土師器	皿	(12.8)	(11.6)	1.7	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒 長石・石英わずかに含む	良好	破片	
388	段状遺構 33	勝間田焼	椀	(14.4)		(2.4)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
389	段状遺構 33	勝間田焼	椀	(13.2)		(3.1)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
390	段状遺構 33	勝間田焼	椀		6.4	(1.3)	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
391	段状遺構 33	勝間田焼	椀		4.8	(1.9)	灰 (7.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	底部回転糸切り
392	段状遺構 33	勝間田焼	椀		(5.8)	(1.4)	灰白 (5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
170 - 393	段状遺構 35	瓦質土器	羽釜	(26.0)		(5.0)	灰白 (2.5Y8/1)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	外面スス付着 貼付鏝
174 - 394	土坑 9	勝間田焼	椀	(15.0)		(2.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	
395	土坑 9	勝間田焼	甕			(4.3)	黄灰 (2.5Y5/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	外面タタキ、カキメ 内面ハケメ
396	土坑 9	瓦質土器	羽釜			(3.6)	灰 (5Y6/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	貼付鏝
177 - 397	土坑 14	備前焼	播鉢			(8.1)	浅黄橙 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面6条の節目 331と同一個体か
178 - 398	土坑 17	瓦質土器	羽釜	(22.4)		(2.8)	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	貼付鏝
181 - 399	土坑 20	瓦質土器	羽釜			(4.8)	灰 (5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面にスス付着
183 - 400	土坑 23	土師器	甕			(3.1)	浅黄橙 (10YR8/3)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	把手
401	土坑 23	勝間田焼	甕			(3.5)	褐灰 (10YR6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	外面格子目タタキ

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
184 - 402	溝 1	土師器	小皿		5.7	(0.7)	にぶい橙 (5YR6/4)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部ヘラ切り?
403	溝 1	土師器	小皿	(9.8)	(6.6)	(1.6)	橙 (5YR6/8)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	底部ヘラ切り?
404	溝 1	勝間田焼	椀		(5.9)	(2.0)	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
405	溝 1	備前焼	播鉢		(17.0)	(5.2)	灰褐 (7.5YR6/2)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内面7条の節目。使用による摩滅が著しい
406	溝 1	青磁	碗	(13.4)		(1.4)	釉薬：灰オリーブ (7.5Y6/2)	精良	堅緻	破片	
407	溝 1	瓦質土器	羽釜			(4.2)	灰 (5Y4/1)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	外面スス付着 内面ハケメ
185 - 408	溝 2	須恵器	長頸壺	(13.8)		(4.8)	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	外面カキメ
409	溝 2	青磁	碗			(2.6)	釉薬：明灰緑 (10G7/2.5)	精良	堅緻	破片	外面蓮弁文 龍泉窯系B3類
410	溝 2	陶器 瀬戸美濃?	皿	(17.0)		(1.1)	釉薬：黄褐 (2.5Y5/3)	精良	堅緻	破片	内外面施釉 素地：灰褐 (7.5Y5/2)
411	溝 2	瓦質土器	鍋	(31.7)		(9.0)	灰白 (10YR8/2)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	胴部外面スス付着 草戸千軒II期前半
186 - 412	溝 3	瓦質土器	羽釜			(2.4)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	貼付鏝
413	溝 3	瓦質土器	羽釜			(2.5)	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	
414	溝 5	土師器	小皿			(1.6)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の砂粒を含む 長石	やや 不良	破片	
415	溝 5	勝間田焼	皿		4.8	(1.1)	灰 (10Y6/1)	1mm以下の砂粒を含む 長石	良好	破片	底部回転糸切り
187 - 416	溝 6	備前焼	播鉢	(33.3)		(6.1)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	内面8条の節目
191 - 417	集石 4	備前焼	播鉢	(33.4)		(6.0)	赤褐 (5YR5/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面6条の節目
192 - 418	P 7	土師器	小皿	9.6	7.0	1.2	灰白 (10YR8/2)	4mm以下の砂粒 長石・石英・赤色土粒	不良	完形	外面ナデ、ヘラ切り? 内面ユビオサエ、ナデ
419	P 8	土師器	小皿	(9.1)	(5.8)	(1.3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	
420	P 9	土師器	皿		(10.0)	(1.2)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	底部ヘラ切り?
421	P 9	白磁	碗	(15.8)		(1.8)	釉薬：透明	精良	堅緻	破片	太宰府条坊跡白磁碗IV類 -1・2
422	P 10	土師器	小皿	(8.7)	(7.3)	(1.2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒・雲母		破片	底部ヘラ切り?
423	P 11	備前焼	播鉢			(4.0)	灰赤 (2.5R4/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内面4条以上の節目
424	P 12	土師器	小皿	(7.2)	(5.7)	(1.0)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	底部ヘラ切り?
425	P 13	備前焼	播鉢			(3.5)	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	内面5条以上の節目
193 - 426	遺構に伴わない	勝間田焼	椀	14.4	6.2	5.5	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	貼付高台
427	遺構に伴わない	勝間田焼	椀		6.0	(1.8)	灰白 (2.5Y7/1)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り 貼付高台
428	遺構に伴わない	勝間田焼	椀		5.4	(2.9)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を含む 長石	良好	破片	底部回転糸切り
429	遺構に伴わない	勝間田焼	椀		6.0	(1.7)	灰 (N4/)	5mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	底部回転糸切り
430	遺構に伴わない	勝間田焼	椀		4.6	(1.1)	灰 (5Y6/1)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	底部回転糸切り
431	遺構に伴わない	勝間田焼	椀		6.0	(0.9)	橙 (5YR6/6)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・赤色土粒	不良	破片	底部回転糸切り 生焼け
432	遺構に伴わない	勝間田焼	甕	22.2		(7.4)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面格子目タタキ 内面ハケメ
433	遺構に伴わない	勝間田焼	甕			(5.2)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	外面格子目タタキ
434	遺構に伴わない	勝間田焼	皿	(8.8)		(1.0)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	回転ナデ
435	遺構に伴わない	備前焼	壺	(21.0)		(6.7)	灰黄 (2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内外面回転ナデ
436	遺構に伴わない	備前焼	播鉢		16.8	(5.8)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	内面7条の節目
437	遺構に伴わない	備前焼	甕	(40.8)		(3.9)	褐 (7.5YR4/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内外面回転ナデ
438	遺構に伴わない	備前焼	甕		(42.2)	(12.0)	褐灰 (10YR4/1)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	内外面ハケメ 外面ヘラケズリ
194 - 439	遺構に伴わない	勝間田焼	鉢	(24.6)		(6.8)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
440	遺構に伴わない	青磁	碗	(14.6)		(2.2)	釉薬：オリーブ灰 (10Y6/2)	精良	堅緻	破片	東口碗 龍泉窯系B3類

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
194 - 441	遺構に伴わない	青磁	碗	(14.6)		(2.7)	釉薬：灰オリーブ (5Y6/2)	精良	良好	破片	龍泉窯系碗B類 蓮弁文
442	遺構に伴わない	青磁	碗			(2.4)	釉薬：浅黄 (7.5Y7/3)	精良	堅緻	破片	施釉、貫入、光沢あり
443	遺構に伴わない	青磁	碗			(2.6)	釉薬：灰白 (10Y7/1)	精良	良好	破片	
444	遺構に伴わない	陶器 瀬戸美濃系?	天目茶碗	(12.0)		(2.5)	釉薬：黒 (N1.5/)	精良	良好	破片	鉄釉 素地：灰黄 (2.5Y6/2)
445	遺構に伴わない	灰釉陶器	碗	(17.4)		(4.2)	釉薬：灰白 (5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	山茶碗。内外面施釉 外面下部露胎
446	遺構に伴わない	陶器 瀬戸美濃	瓶			(4.4)	釉薬：暗オリーブ (5Y4/4)	精良	良好	破片	素地：灰黄 (2.5Y6/1)
447	遺構に伴わない	瓦質土器	羽釜	25.0		(6.5)	浅黄橙 (10YR8/3)	2mm以下の砂粒を少し含む 石英・雲母・赤色土粒	良好	破片	内面ハケメ、ナデ
448	遺構に伴わない	瓦質土器	羽釜	(21.8)		(4.2)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	貼付鏝
449	遺構に伴わない	瓦質土器	鍋	(28.6)		(7.3)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面ハケメ 貼付把手、円孔
450	遺構に伴わない	瓦質土器	甕	17.2		(4.1)	浅黄橙 (10YR8/3)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ? 内外面スス付着
197 - 451	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	壺	17.4		(4.2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に円形浮文、刻目 文、3条の貼付突帯
452	包含層1 (2c・中層)	弥生土器	壺	(13.0)		(4.6)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に2条の貼付突帯
453	包含層1 (2b・下層)	弥生土器	壺	(16.6)		(3.1)	にぶい黄褐 (10YR4/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に斜格子文、2条 の貼付突帯
454	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	壺	(17.6)		(3.9)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に3条の凹線文、 2条の貼付突帯
455	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	壺	18.0		(8.8)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に3条の凹線文、 2列の円形浮文 頸部の4条の貼付突帯
456	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	短頸壺	(26.2)		(14.6)	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	頸部押圧貼付突帯文(2 列)
457	包含層1 (2b・中層)	弥生土器	壺	11.8		(5.4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	頸部に押圧貼付突帯文
458	包含層1 (2b・下層)	弥生土器	壺	(14.0)		(2.2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面に櫛描波状文。 口縁端部に刻目文
459	包含層1 (2b・下層)	弥生土器	壺	(16.0)		(3.3)	明黄褐 (10YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に刻目文
460	包含層1 (3c・下層)	弥生土器	壺			(6.1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	肩部に櫛描平行線文、波 状文
461	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	壺	9.6		(4.3)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に3条の貼付突帯 文
462	包含層1 (2b・中層)	弥生土器	壺			(7.7)	黒 (7.5YR2/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面2条の貼付突帯、櫛 描平行線文、波状文
463	包含層1 (3b・下層)	弥生土器	壺			(8.3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	肩部に多条の凹線文、櫛 描波状文
464	包含層1 (2・3b)	弥生土器	壺	22.0		(2.9)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部上面に櫛描波状文。 口縁端部に5条の凹線文、 刻目文、円形浮文(3個 2列)
465	包含層1 (3b・下層)	弥生土器	壺	24.4		(7.6)	黄橙 (10YR8/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	口縁端部に刻目文 頸部に押圧貼付突帯文
466	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	壺	20.0		(9.8)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部上面に円形浮文 口縁端部に5条の凹線文、 円形浮文。頸部に4条の 凹線文
467	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	短頸壺	(21.4)		(4.5)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒 長石・石英多く含む	良好	破片	口縁端部に刻目文、3条 の凹線文
468	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	短頸壺	16.1		(5.2)	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁端部に刻目文、2条 の凹線文、円形浮文。肩 部に櫛描平行線文、波状 文、斜格子文
469	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	短頸壺	(16.0)		(2.7)	灰褐 (7.5YR5/2)		良好	破片	口縁端部に2条の凹線文、 刻目文。頸部に押圧貼付 突帯
470	包含層1 (3b・下層)	弥生土器	短頸壺	18.7		(5.0)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に2条の凹線、 円形浮文。頸部に押圧痕 貼付突帯文
471	包含層1 (2b・上層)	弥生土器	短頸壺	20.3		(3.9)	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁端部に円形浮文 頸部に押圧痕貼付突帯
472	包含層1 (3c・下層)	弥生土器	短頸壺	19.3		(4.4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁端部に3条の凹線、 円形浮文
198 - 473	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	壺		(17.4)	(4.6)	灰黄褐 (10YR5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ハケメ
474	包含層1 (3b・下層)	弥生土器	壺		10.2	(5.7)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
475	包含層1 (2c・下層)	弥生土器	壺		8.3	(5.7)	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ?、ユビ オサエ

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
198 - 476	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	壺		(8.3)	(5.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
477	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	壺		(7.3)	(4.4)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ。内面ヘ ラケズリ?、ユビオサエ
478	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	壺		(7.1)	(4.1)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ?、黒斑 あり。内面ユビオサエ
479	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	甕	(32.6)		(9.0)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	内面ヘラミガキ、ユビオ サエ
480	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	甕	(15.2)		(4.4)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ? 内面ユビオサエ
481	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	甕	(21.4)		(7.2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	
482	包含層 1 (3a・下層)	弥生土器	甕	(15.9)		(4.5)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	口縁部ヨコナデ
483	包含層 1 (3d・下層)	弥生土器	甕	(28.0)		(6.6)	明黄褐 (10YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	内面ユビオサエ
484	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	甕	(18.2)		(4.2)	明黄褐 (10YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	
485	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	甕	25.0		(4.5)	淡白 (2.5YR8/3)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	
486	包含層 1 (3b・上層)	弥生土器	甕	(23.4)		(3.2)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	
487	包含層 1 (2b・下層)	弥生土器	甕	(16.4)		(6.4)	黄橙 (10YR8/6) 褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石多く含む	やや 不良	破片	内面ユビオサエ
488	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	甕	(22.4)		(3.1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	ヨコナデ
489	包含層 1 (2b・下層)	弥生土器	甕	(24.7)		(7.9)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内外面ハケメ
490	包含層 1 (2b・上層)	弥生土器	甕	(19.8)		(3.0)	明黄褐 (10YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	口縁端部に2条の凹線文?
491	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	甕	(17.0)		(1.7)	灰黄褐 (10YR6/2)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	口縁端部に3条の凹線文
199 - 492	包含層 1 (3c・下層)	弥生土器	甕		6.3	(6.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ハケメ、ユビオサエ
493	包含層 1 (3a・下層)	弥生土器	甕		5.3	(6.6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
494	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	甕		(7.1)	(5.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
495	包含層 1 (2d・下層)	弥生土器	甕		5.0	(4.6)	橙 (5YR6/6)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・雲母	良好	破片	
496	包含層 1 (2b・中層)	弥生土器	甕		(6.7)	(4.1)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
497	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	甕		(7.1)	(3.3)	灰褐 (7.5YR5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・雲母	良好	破片	外面ヘラミガキ 内面ユビオサエ
498	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	甕		5.4	(4.9)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ 底部に焼成後穿孔
499	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	甕		5.8	(3.1)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	底部に焼成後穿孔
500	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	台付鉢		8.2	(2.4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
501	包含層 1 (2c・中層)	弥生土器	蓋	11.0		3.7	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部に2個一対の円孔
502	包含層 1 (2c・中層)	弥生土器	蓋		(4.1)		橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ユビオサエ
503	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	高杯	(25.6)		(4.8)	灰黄褐 (10YR5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	外面ハケメ 内面ヘラミガキ
504	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	高杯	(23.6)		(2.6)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	ヨコナデ
505	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	高杯		(4.2)		にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁端部に円孔
506	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	高杯		(5.1)		にぶい黄橙 (10YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部に2条の貼付突帯文
507	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	高杯		(5.0)		橙 (7.5YR7/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部外面6条の凹線文
508	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	高杯		(7.3)		褐灰 (5YR4/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	長方形の透かし孔(3方 向?)、3条の凹線文
509	包含層 1 (3c・中層)	弥生土器	高杯		10.8	(8.1)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部外面にヘラ描きに よる2・4条の沈線文
510	包含層 1 (3b・下層)	弥生土器	高杯	(12.2)		(2.9)	灰黄褐 (10YR4/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	ヘラ描き沈線文、山形文
511	包含層 1 (2b・上層)	弥生土器	高杯	(13.6)		(3.7)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ヘラミガキ? 内面ユビオサエ
512	包含層 1 (2c・下層)	弥生土器	器台	(37.0)		(3.2)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・金雲母	良好	破片	口縁部上面に3条の凹線 文、口縁端部に4条の凹 線、2段の円形浮文
513	包含層 1 (3b・上層)	弥生土器	器台		(19.0)	(6.7)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	外面4条以上の凹線文

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
199 - 514	包含層 1 (2 b・上層)	弥生土器	器台		(27.2)	(8.1)	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・赤色土粒	良好	破片	外面7条の凹線文
515	包含層 1 (3 b・上層)	弥生土器	器台		(26.0)	(3.5)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面3条の凹線文、ヘラ 描山形文
516	包含層 1 (2 b・下層)	弥生土器	器台		(17.0)	(7.2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	長方形の透かし孔(6~ 7方向?)、5条の凹線文
517	包含層 1 (3 c・中層)	弥生土器	器台		17.4	(7.2)	褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面3条の貼付突帯
518	包含層 1 (2 c・下層)	弥生土器	器台		25.4	(11.7)	橙 (5YR6/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	未貫通の長方形の透かし 孔(8方向?)、竹管文
200 - 519	包含層 1 (3 c・上層)	土師器	甕			(2.9)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
520	包含層 1 (2 c)	土師器	壺	(10.8)		(7.8)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面ユビオサエ
521	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕	(13.0)		(4.5)	橙 (5YR6/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・角閃石	良好	破片	内面ヘラケズリ
522	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕	(15.4)		(6.2)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	内面ヘラケズリ
523	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕	(15.7)		(6.8)	橙 (2.5YR7/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ?
524	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕	13.6		(9.1)	灰褐 (7.5YR5/2)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ヘラケズリ
525	包含層 1 (2 c・上層)	土師器	甕	(16.6)		(7.1)	橙 (5YR7/6)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
526	包含層 1 (2 c・上層)	土師器	高杯	13.8	12.4	10.1	橙 (2.5YR6/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	脚部外面ハケメ 内面ユビオサエ、ナデ
527	包含層 1 (3 c・上層)	土師器	高杯	7.6	5.2	5.7	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	完形	脚部外面ハケメ
528	包含層 1 (2 b・中層)	土師器	高杯		(11.3)	(6.2)	橙 (5YR6/6)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
529	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	高杯		14.2	(7.1)	橙 (2.5YR6/8)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	脚部外面ハケメ 内面ユビオサエ
530	包含層 1 (2 c)	土師器	高杯		13.0	(6.3)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
531	包含層 1 (2 c・上層)	土師器	高杯		11.4	(4.2)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	
532	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	高杯		10.4	(3.9)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	
533	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	高杯		9.8	(5.2)	橙 (7.5YR7/6)	精良	良好	破片	
534	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	高杯			(4.0)	橙 (7.5YR7/6)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
535	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	高杯			(2.6)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
536	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	高杯			(7.7)	橙 (5YR6/6)	5mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	外面にスカシの痕跡(本 来は3方向か)
537	包含層 1 (2 b・中層)	土師器	高杯		2.8	(3.3)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	
538	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	高杯		7.6	(1.3)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	やや 不良	破片	
539	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	鉢	12.3	4.2	4.6~ 4.8	橙 (5YR7/8)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
540	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	鍋	27.8		(23.8)	橙 (7.5YR6/8)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	外面ハケメ? 内面ヘラケズリ
541	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕か鍋			(17.0)	橙 (7.5YR7/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	内面一部ヘラケズリ
201 - 542	包含層 1 (3 b c・上層)	土師器	甕か鍋			(7.2)	橙 (2.5YR6/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	把手
543	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	甕か鍋			(6.3)	橙 (5YR7/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	把手
544	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	甕か鍋			(6.1)	橙 (7.5YR6/8)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	不良	破片	把手
545	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕か鍋			(6.7)	橙 (5YR6/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	良好	破片	把手
546	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕か鍋			(4.9)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	把手
547	包含層 1 (2 b・中層)	土師器	甕か鍋			(6.8)	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	不良	破片	把手
548	包含層 1 (2 c・上層)	土師器	甕か鍋			(4.5)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	把手
549	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕か鍋			(3.6)	橙 (5YR6/6)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	把手
201 - 550	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕か鍋			(4.4)	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	把手
551	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甕か鍋			(4.2)	橙 (5YR6/8)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	把手
552	包含層 1 (3 b・中層)	土師器	甕か鍋			(5.1)	橙 (7.5YR7/6)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	把手

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
201 - 553	包含層 1 (2 b・下層)	土師器	甌か鍋			(4.2)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	把手
554	包含層 1 (2 c・中層)	土師器	甌か鍋			(4.7)	橙 (5YR7/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	把手
555	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	甕形土器			(18.2)	橙 (7.5YR7/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内外面ユビオサエ、ナデ
556	包含層 1 (3 b・上層)	土師器	小皿		5.7	(1.2)	褐灰 (7.5YR4/1)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	底部回転ヘラ切り 内外面は二次的な被熱
557	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	高台付椀		4.2	(1.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	底部回転ヘラ切り
558	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	杯?		6.1	(1.4)	灰白 (10YR8/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	
559	包含層 1 (3 c・中層)	土師器	皿	11.7		(2.4)	浅黄橙 (10YR8/3)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	破片	
560	包含層 1 (2 b・上層)	埴輪	円筒埴輪			(10.3)	浅黄橙 (10YR8/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	破片	摩滅により調整不明 タガ1本残存
561	包含層 1 (2 b・上層)	埴輪	円筒埴輪			(4.5)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ナデ 外面タテハケ
562	包含層 1 (2 c・中層)	埴輪	円筒埴輪			(4.8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内面ナデ 外面タテハケ
202 - 563	包含層 1 (3 c・上層)	須恵器	杯蓋	13.3		4.1	暗灰 (N3/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
564	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯蓋	14.7	8.9	4.3	灰 (N6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
565	包含層 1 (3 b・中層)	須恵器	杯蓋	12.8		4.0	褐灰 (10YR5/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ、 ヘラ切り。 ロクロの回転方向: 左
566	包含層 1 (3 b・上層)	須恵器	杯蓋	(15.3)	6.0	4.2	褐灰 (5YR5/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ、 ヘラ切り。 ロクロの回転方向: 左
567	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	杯蓋	(13.6)		(4.1)	灰 (7.5Y5/1) 灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 左
568	包含層 1 (2 c・上層)	須恵器	杯蓋	13.8		(3.5)	灰 (7.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
569	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器?	杯身	11.4		(3.8)	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	生焼け
570	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器?	杯身	(13.6)		(3.0)	橙 (5YR7/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	生焼け
571	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	13.2		4.9	灰白 (N7/)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
572	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	(12.8)	6.0	4.3	灰白 (5Y7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
573	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	12.6		(4.2)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	不良	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 左
574	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	杯身	11.6	8.3	4.1	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
575	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	(14.6)		(3.7)	暗灰 (N3/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
576	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	(11.4)		(4.0)	灰 (N5/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 左
577	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	15.3		(3.9)	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 左
578	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	12.4	5.8	4.5	灰白 (2.5Y7/1)	2mm以下の砂粒 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
579	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	12.0		4.0	灰白 (7.5Y7/1) 少し青灰色	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
580	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	13.2	6.8	(3.5)	灰白 (2.5Y8/2)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	底部ヘラ切り
581	包含層 1 (3 b・中層)	須恵器	杯身	(11.6)		(3.4)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
582	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	杯身	13.2		3.7	灰白 (2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	不良	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 右
583	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	杯身	14.4	9.0	4.0	灰白 (2.5Y8/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	底部回転ヘラケズリ?
584	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	有蓋高杯 蓋	13.8		4.4	灰 (N4/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロの回転方向: 左
585	包含層 1 (2 b・上層)	須恵器	有蓋高杯 蓋	(15.9)		4.7	灰 (N4/)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	外面回転ヘラケズリ、沈線 文。ロクロの回転方向: 左
586	包含層 1 (2 c)	須恵器	高杯			(12.4)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	内外面回転ナデ 脚柱部に長方形の透かし 孔 (2列3方向)
587	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	高杯			(6.1)	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部に長方形の透かし孔 (2段3方向か)、沈線文
588	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	高杯			(2.4)	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	脚柱部に長方形の透かし 孔 (3方向)
589	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	高杯			(4.9)	灰白 (N8/) もう少し灰色	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	
590	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	高杯			(3.0)	灰褐 (7.5YR6/2)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
202 - 591	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	高杯		13.4	(3.5)	褐灰 (10YR6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	長方形の透かし孔
592	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	高杯		(11.0)	(6.1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	4mm以下の砂粒 長石・石英	不良	破片	脚部外面カキメ
593	包含層 1 (2 c)	須恵器	高杯		(13.6)	(2.7)	暗灰 (N3/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
203 - 594	包含層 1 (3 b・上層)	須恵器	甕	(10.3)		(2.7)	灰 (7.5Y6/1)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	外面に沈線文、斜線文
595	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	甕	12.2		(2.6)	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	外面櫛描波状文、刺突文
596	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	甕			(7.2)	灰 (10Y6/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	外面櫛描波状文。頸部に 沈線文。体部に円孔
597	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	甕			(3.9)	暗灰 (N3/)	2mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
598	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	甕		3.2	(7.3)	灰白 (N7/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面回転ナデ、カキメ、 回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
599	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	甕			(6.2)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	体部に円孔
600	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	蓋	13.2		7.3	灰白 (N7/)	6mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ、 3条のヘラ記号 ロクロの回転方向：右
601	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	蓋	(10.2)		(2.9)	灰白 (N7/)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
602	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	蓋	(11.2)		(2.2)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
603	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	蓋?			(1.7)	暗灰 (N3/)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
604	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	蓋?	(16.7)		(2.5)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	不良	破片	カキメ、回転ナデ
605	包含層 1 (3 c・上層)	須恵器	蓋?			(2.8)	灰 (10Y6/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
606	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	裝飾付壺			(3.9)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を含む 長石	良好	破片	外面櫛描波状文、1条の 沈線文
607	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	長頸壺	(13.8)		(7.1)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
608	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	長頸壺	(7.8)		(5.6)	灰 (7.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面2条の沈線文
609	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	壺?			(4.2)	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	肩部外面に1条の沈線文
610	包含層 1 (3 c・上層)	須恵器	壺		(2.0)	(5.0)	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面回転ヘラケズリ ロクロの回転方向：右
611	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	台付壺	9.6		(3.6)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	脚端部に1条の沈線文
612	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	高杯	(15.0)		(5.8)	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	椀形の器台形高杯か、 体部に沈線文、櫛描波状文
613	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	提瓶	8.0		(2.0)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
614	包含層 1 (2 c)	須恵器	提瓶	8.6		(3.8)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	回転ナデ
615	包含層 1 (2 b・上層)	須恵器	提瓶	7.2		(2.0)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石	良好	破片	回転ナデ
616	包含層 1 (3 b c・上~下層)	須恵器	提瓶			(13.6)	灰 (N4/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面カキメ 放射状の刻目文
617	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	壺	21.0		28.8	灰 (N5/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕
618	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	甕	18.0		(3.5)	灰 (7.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面一部カキメ
619	包含層 1 (3 b・中層)	須恵器	甕	17.7		(3.8)	灰白 (7.5Y8/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	不良	破片	口縁端部に沈線文 頸部タタキ後カキメ
620	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	甕	25.6		(6.8)	橙 (7.5YR7/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面一部カキメ
204 - 621	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	横瓶	12.4		(32.6)	灰白 (5Y8/1)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕
622	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	器台	(45.4)		(5.5)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面に2段の櫛描刺突文、 2条の沈線文
623	包含層 1 (2 c・中層)	須恵器	蓋	(17.8)		(1.7)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を含む 長石・石英多く含む	良好	破片	外面回転ヘラケズリ
624	包含層 1 (3 b・上層)	須恵器	杯		(10.8)	(2.1)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	貼付高台
625	包含層 1 (3 c・中層)	須恵器	杯		11.0	(1.5)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	貼付高台
626	包含層 1 (2 b・上層)	須恵器	杯		(8.2)	(1.7)	灰白 (2.5Y7/1) 少し灰白	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	やや 不良	破片	貼付高台
627	包含層 1 (2 c・上層)	須恵器	皿	9.8		(1.9)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
628	包含層 1 (3 c・上層)	須恵器	壺		7.8	(3.9)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転系切り、内面に酸 化鉄を含む赤色顔料が付着 (材質分析：第5章第5節)

掲載 番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
204 - 629	包含層 1 (3 b・上層)	緑釉陶器	椀			(1.4)	釉薬：くすんだ 黄緑 (5GY5/5)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面施釉。素地：にぶい 黄橙 (10YR7/3)
630	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	片口壺			(3.0)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	注口部
631	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	壺	12.1		(3.5)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
632	包含層 1 (3 c・上層)	備前焼	播鉢	(27.7)		(5.7)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内面 4 条以上の御目
633	包含層 1 (3 d・上層)	備前焼	播鉢			(5.1)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	注口部 内面 5 条以上の御目
634	包含層 1 (2 c・上層)	備前焼	播鉢			(4.3)	赤褐 (10R4/3)	4mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	注口部 内面 6 条の御目
635	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢			(4.5)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	注口部付近 内面 6 条以上の御目
636	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	甕	(33.0)		(6.4)	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
637	包含層 1 (3 d・上層)	備前焼	甕	(22.8)		(1.3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
638	包含層 1 (2 b・上層)	備前焼	甕		(24.4)	(3.7)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面ハケメ 底部糸切り
639	包含層 1 (2 b・上層)	備前焼	甕		(22.8)	(6.0)	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部糸切り
205 - 640	包含層 1 (2 c・中層)	備前焼	播鉢	(31.1)		(9.8)	赤褐 (10R5/4)	5mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	内面 10 条の御目
641	包含層 1 (2 b・上層)	備前焼	播鉢	(29.3)		(5.5)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	内面 7 条以上の御目
642	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢			(4.5)	にぶい赤褐 (2.5YR5/3)	7mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面 8 条? の御目
643	包含層 1 (2 c)	備前焼	播鉢			(7.4)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面 6 条の御目
644	包含層 1 (2 b・上層)	備前焼	播鉢	(29.2)		(6.7)	灰褐 (5YR5/2)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内面 8 条? の御目
645	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢			(3.7)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	
646	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢			(1.1)	灰褐 (7.5YR6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面 5 条の御目
647	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢		(14.2)	(3.5)	にぶい橙 (2.5YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面 7 条の御目。使用に より摩滅が著しい
648	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢		(15.6)	(4.6)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内面 7 条の御目。使用に より摩滅が著しい
649	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢		(11.2)	(5.1)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内面 8 条の御目
650	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢		(15.6)	(7.3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面 7 条の御目。使用に より摩滅が著しい
651	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢		(16.4)	(5.3)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	使用により内面の摩滅が 著しい
652	包含層 1 (3 b・上層)	備前焼	播鉢		(15.6)	(4.5)	灰褐 (5YR5/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内面 7 条の御目
653	包含層 1 (3 b・上層)	勝間田焼	椀	13.8		(4.7)	青灰 (5PB6/1)	2mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
654	包含層 1 (3 c・中層)	勝間田焼	椀	13.8		(4.1)	灰白 (10Y7/1)	3mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	回転ナデ
655	包含層 1 (3 b・中層)	勝間田焼	椀		7.2	(3.4)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	底部回転糸切り 貼付高台
656	包含層 1 (3 b・中層)	勝間田焼	椀		7.7	(1.7)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	不良	破片	貼付高台
657	包含層 1 (2 b・上層)	勝間田焼	椀		8.2	(1.9)	浅黄橙 (7.5YR0/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	底部回転糸切り 貼付高台
658	包含層 1 (3 c・上層)	勝間田焼	椀		5.8	(2.1)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	やや 不良	破片	底部回転糸切り 貼付高台
659	包含層 1 (3 b・上層)	勝間田焼	椀		6.0	(1.8)	淡黄 (2.5Y8/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	底部回転糸切り 貼付高台
660	包含層 1 (3 c・上層)	勝間田焼	高台付椀		6.0	(2.1)	灰 (N6/)	6mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
661	包含層 1 (3 c・中層)	勝間田焼	椀		6.4	(1.7)	橙 (5YR7/6)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	不良	破片	底部回転糸切り 生焼け
662	包含層 1 (3 b・上層)	勝間田焼	高台付椀		6.1	(1.7)	灰白 (10YR8/2)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	不良	破片	底部回転糸切り
663	包含層 1 (3 c・上層)	勝間田焼	椀		5.9	(1.6)	灰 (N6/)	4mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
664	包含層 1 (2 b・上層)	勝間田焼	高台付椀		5.6	(1.4)	灰 (5Y6/1)	3mm以下の砂粒を含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
206 - 665	包含層 1 (2 b)	勝間田焼	皿	8.4	5.2	1.7	灰 (5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転糸切り
666	包含層 1 (3 b・上層)	勝間田焼	播鉢		7.0	(2.0)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内面格子目状の御目 底部回転糸切り
667	包含層 1 (2 b・上層)	勝間田焼	甕			(9.1)	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石	良好	破片	外面格子目タタキ

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
206 - 668	包含層 1 (2 d・上層)	勝間田焼	甕			(13.4)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む長石	良好	破片	内面ナデ 外面格子目タタキ
669	包含層 1 (3 b・上層)	青磁	碗			(3.6)	釉薬：オリーブ灰 (2.5GY6/1)	精良	堅緻	破片	龍泉窯系。平口 内面劃花文
670	包含層 1 (2 b・上層)	青磁	碗			(1.9)	釉薬：灰みの黄緑 (5GY5/3)	精良	堅緻	破片	内外面に施釉。内面に草花文。削り出し高台。摩擦減が著しい。太宰府条坊跡Ⅲ 1 B類
671	包含層 1 (3 b・上層)	青磁	碗	(17.6)		(6.0)	釉薬：灰 (10Y6/1)	精良	堅緻	破片	内外面施釉
672	包含層 1 (3 b・上層)	青磁	碗	(13.2)		(2.8)	釉薬：灰オリーブ (7.5Y5/2)	精良	堅緻	破片	内外面施釉 端反り
673	包含層 1 (3 b・上層)	青磁	碗			(3.4)	釉薬：灰 (10Y6/1)	精良	堅緻	破片	内外面施釉 摩擦減が著しい
674	包含層 1 (3 b・上層)	青磁	瓶	(8.0)		(3.0)	釉薬：灰みの黄緑 (5GY5/3)	精良	堅緻	破片	内外面施釉
675	包含層 1 (3 b・上層)	陶器 瀬戸美濃系	天目茶碗			(2.7)	釉薬：黒 (10YR2/1)	緻密	良好	破片	内外面施釉 (鉄釉) 素地：灰白 (10YR8/2)
676	包含層 1 (3 b・上層)	陶器 瀬戸系?	茶入・ 香炉形			(1.8)	釉薬：黒 (N2/)	緻密	良好	破片	素地：にぶい橙 (10YR7/2)
677	包含層 1 (3 b・上層)	瓦質土器	鍋			(5.0)	暗灰 (N3/)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	
678	包含層 1 (3 b・上層)	瓦質土器	鍋	31.7		(5.9)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	
679	包含層 1 (3 b・上層)	瓦質土器	鍋			(5.3)	暗灰 (N3/)	1mm以下の砂粒を少し含む長石	やや不良	破片	外面スス付着。内面ヘケズ。草戸千軒Ⅱ期前半
680	包含層 1 (3 b・上層)	瓦質土器	鍋	27.1		(2.6)	灰黄褐 (10YR5/2)	1mm以下の砂粒を少し含む長石・石英	良好	破片	
681	包含層 1 (3 b・上層)	瓦質土器	鍋			(4.6)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	
682	包含層 1 (2 c・中層)	瓦質土器	羽釜	18.6		(4.2)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む長石	良好	破片	貼付鏝
683	包含層 1 (2 c・上層)	瓦質土器	羽釜	25.4		(3.1)	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む長石	良好	破片	貼付鏝
684	包含層 1 (3 b・上層)	瓦質土器	羽釜	28.6		(3.0)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む長石	良好	破片	貼付鏝
685	包含層 1 (3 b・上層)	瓦質土器	羽釜	21.0		(3.2)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む長石	良好	破片	貼付鏝
214 - 686	段状遺構 37	須恵器	杯蓋			(1.6)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ

高尾北ヤシキ遺跡 石器・石製品観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
15 - S 1	段状遺構 2	石鎌	13.0	13.6	2.7	0.40	サヌカイト	凹基式
19 - S 2	段状遺構 7	石鎌	(16.7)	(13.5)	3.6	(0.75)	サヌカイト	凹基式
23 - S 3	土坑 4	石包丁未成品?	(52.4)	47.0	12.7	(46.50)	緑色片岩	裏面に研磨痕
29 - S 4	土器溜まり 1	石鎌	20.7	15.6	3.3	0.80	サヌカイト	凹基式。風化が著しい
S 5	土器溜まり 1	剥片	34.0	20.7	4.6	4.00	サヌカイト	左辺に二次調整
S 6	土器溜まり 1	磨製石包丁	(62.8)	(45.2)	5.9	(20.98)	結晶片岩	周縁は欠損
S 7	土器溜まり 1	扁平片刃石斧未成品	119.0	69.0	17.4	198.88	緑色片岩	周縁の一部を調整剥離
31 - S 8	P 5	石鎌	(21.2)	14.0	2.8	(0.80)	サヌカイト	周縁を二次調整二次調整
S 9	P 5	剥片	37.0	(21.5)	7.2	(4.97)	サヌカイト	
S 10	P 6	石鎌	24.2	10.7	3.2	0.83	サヌカイト	凹基式
S 11	P 6	叩石	111.0	97.0	57.0	879.88	デイサイト※	下端に敲打痕
32 - S 12	遺構に伴わない	石鎌	23.8	15.3	2.8	0.69	サヌカイト	2区。凹基式
S 13	遺構に伴わない	石鎌	(16.8)	18.2	3.8	(0.68)	サヌカイト	2区。凹基式
S 14	遺構に伴わない	石鎌	24.0	17.7	3.6	0.95	サヌカイト	2区。凹基式
S 15	遺構に伴わない	石鎌	19.0	(12.8)	2.2	(0.38)	サヌカイト	4区。平基式
S 16	遺構に伴わない	石鎌	(19.5)	11.5	1.8	0.77	サヌカイト	3区。平基式
S 17	遺構に伴わない	石鎌	21.8	12.0	4.2	1.01	サヌカイト	4区。平基式
S 18	遺構に伴わない	石鎌	(22.9)	12.0	2.5	(0.79)	サヌカイト	4区。平基式
S 19	遺構に伴わない	石鎌	28.3	14.8	4.1	2.06	サヌカイト	2区。平基式
S 20	遺構に伴わない	剥片	32.4	23.0	6.8	5.91	サヌカイト	3・4区。わずかに二次調整
S 21	遺構に伴わない	剥片	25.1	40.1	4.7	4.33	サヌカイト	2区。下辺に二次調整
S 22	遺構に伴わない	扁平片刃石斧	86.5	52.4	13.0	(98.86)	粘板岩ホルンフェルス※	3区。表裏面は研磨
S 23	遺構に伴わない	磨製石包丁	(38.0)	32.1	6.4	(10.66)	緑色片岩	2区。表裏面は研磨

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
42-S 24	竪穴住居 5	石鏃	31.3	16.1	3.5	(1.89)	サヌカイト	平基式
S 25	竪穴住居 5	石鏃	28.2	(12.5)	4.2	(1.54)	サヌカイト	左辺を二次調整
49-S 26	竪穴住居 9	砥石	(94.0)	(76.5)	(45.0)	(239.50)	流紋岩※	作業面は 4 面
50-S 27	竪穴住居 16	鉄鉱石	69.0	79.0	52.0	499.10	鉄鉱石※	製鉄分析試料No.2
53-S 28	竪穴住居 16	管玉	37.4	14.6	(8.6)	(8.57)	碧玉	片面穿孔。暗緑色 (5G3/4)
58-S 29	竪穴住居 15	砥石	91.0	68.0	50.0	374.94	流紋岩※	作業面は 4 面
S 30	竪穴住居 15	砥石	(19.0)	(17.0)	(5.1)	(1.80)	デイサイト※	作業面は 1 面
59-S 31	竪穴住居 15-P 4	被熱石	310.0	84.0	43.0	(1,290.62)	安山岩※	右上を中心に被熱
S 32	竪穴住居 15-P 4	被熱石	154.0	92.0	45.0	644.65	凝灰角礫岩※	全体的に強い被熱
61-S 33	竪穴住居 16	紡錘車	34.4	34.6	10.0	19.75	蛇紋岩	下面に鋸歯文
70-S 34	竪穴住居 21	紡錘車未成品?	40.9	48.2	8.9	(27.13)	緑色片岩	全面研磨
71-S 35	竪穴住居 17~21 周辺	火打石	(22.8)	(22.0)	(7.8)	(5.55)	石英	下端面に敲打痕あり
77-S 36	段状遺構 15-P 4	管玉	25.1	6.4	6.1	1.70	碧玉	片面穿孔。灰緑色 (1.5G5/3)
82-S 37	段状遺構 26	石鏃	20.2	12.7	3.5	0.96	サヌカイト	
83-S 38	段状遺構 27	砥石	(50.0)	37.2	(26.0)	(65.83)	砂岩 (細粒)※	作業面は 5 面
97-S 39	掘立柱建物 2	石硯	(71.0)	70.8	(16.3)	(131.30)	粘板岩※	海部の擦痕が著しい。
140-S 40	掘立柱建物 16	円礫	141.0	137.0	57.0	1,676.48	花崗岩※	下端は敲打による欠損面か
S 41	掘立柱建物 16	小円礫	18.8	14.8	8.5	3.85	砂岩※	明るい灰色 (N7)
150-S 42	掘立柱建物 17・18	叩石	(97.5)	(59.0)	(50.0)	(329.03)	花崗岩※	側面に敲打痕
183-S 43	土坑 23	石鏃	(25.4)	(17.0)	3.8	(1.21)	サヌカイト	凹基式
186-S 44	溝 3	砥石	112.0	75.0	70.0	(689.97)	流紋岩※	作業面は 1 面
207-S 45	包含層 1 (2b・中層)	石鏃	16.8	17.4	3.8	(0.66)	黒曜石	凹基式。わずかに水酸化
S 46	包含層 1	石鏃	19.1	13.7	3.3	0.53	サヌカイト	凹基式
S 47	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	(19.0)	(14.2)	3.0	0.50	サヌカイト	凹基式。風化が著しい
S 48	包含層 1 (2b・下層)	石鏃	(19.0)	(17.7)	3.3	0.87	サヌカイト	凹基式
S 49	包含層 1 (2b・中層)	石鏃	(17.3)	(17.1)	4.3	(0.92)	サヌカイト	凹基式
S 50	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	(20.4)	(13.0)	3.0	(0.69)	サヌカイト	凹基式
S 51	包含層 1 (3c・下層)	石鏃	23.3	13.7	3.3	0.85	サヌカイト	凹基式
S 52	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	(22.0)	(13.0)	2.8	(0.71)	サヌカイト	凹基式
S 53	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	(31.0)	(14.5)	5.2	2.80	サヌカイト	凹基式
S 54	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	12.0	9.7	3.0	0.34	サヌカイト	平基式
S 55	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	14.1	12.1	2.1	0.38	サヌカイト	平基式
S 56	包含層 1 (2c・下層)	石鏃	12.6	13.3	2.5	0.45	サヌカイト	平基式
S 57	包含層 1 (2c・中層)	石鏃	16.4	12.5	2.6	0.48	サヌカイト	平基式
S 58	包含層 1 (2c・下層)	石鏃	15.8	12.2	2.3	0.46	サヌカイト	平基式
S 59	包含層 1 (2b・下層)	石鏃	(17.1)	(12.0)	2.0	(0.50)	サヌカイト	平基式
S 60	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	17.1	12.1	3.1	0.64	サヌカイト	平基式
S 61	包含層 1 (2c・中層)	石鏃	16.0	10.9	2.4	0.39	サヌカイト	凹基式
S 62	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	(18.7)	(16.0)	3.2	(0.76)	サヌカイト	平基式
S 63	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	20.6	14.1	4.2	1.12	サヌカイト	平基式
S 64	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	20.9	13.8	4.0	1.29	サヌカイト	平基式
S 65	包含層 1 (2b・中層)	石鏃	22.6	19.5	3.3	1.61	サヌカイト	平基式
S 66	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	(20.0)	(15.4)	2.5	(0.74)	サヌカイト	平基式
S 67	包含層 1 (2c・中層)	石鏃	(13.3)	13.6	2.4	(0.65)	サヌカイト	平基式
S 68	包含層 1 (2c・下層)	石鏃	(19.8)	(17.3)	(3.0)	1.15	サヌカイト	平基式
S 69	包含層 1 (3c・下層)	石鏃	(22.5)	16.4	3.5	(1.40)	サヌカイト	平基式
S 70	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	(22.4)	(15.8)	3.8	(1.22)	サヌカイト	平基式
S 71	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	(27.7)	(16.3)	(4.2)	2.04	サヌカイト	周縁を二次調整
S 72	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	31.3	22.8	3.8	2.49	サヌカイト	平基式
S 73	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	(20.8)	(10.5)	(3.0)	(0.63)	サヌカイト	両側縁を二次調整
S 74	包含層 1 (2c・下層)	石鏃	(27.0)	12.8	5.5	(1.93)	サヌカイト	平基式
S 75	包含層 1 (2c・中層)	石鏃	(25.3)	12.8	2.9	(1.07)	サヌカイト	平基式
S 76	包含層 1 (3b・下層)	石鏃	(26.8)	10.4	3.3	(0.99)	サヌカイト	凸基式
S 77	包含層 1 (3c・中層)	石鏃	(20.2)	(11.3)	3.3	(0.79)	サヌカイト	周縁のみ二次調整
S 78	包含層 1 (2b・上層)	石鏃	20.2	16.1	3.8	1.25	サヌカイト	平基式
S 79	包含層 1 (2c・下層)	石鏃	18.0	14.2	4.7	1.07	サヌカイト	錐部は使用によりやや摩滅
S 80	包含層 1 (2c・上層)	石鏃	(32.0)	20.9	6.0	3.98	サヌカイト	錐部は欠損
S 81	包含層 1 (2c・中層)	楔形石器	29.4	14.1	10.7	5.85	サヌカイト	両側面は裁断面
S 82	包含層 1 (2c・中層)	楔形石器	24.4	20.7	6.9	4.23	サヌカイト	両側面は裁断面

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
207-S 83	包含層1 (3c・中層)	楔形石器	21.8	18.2	6.1	3.36	サヌカイト	両側面は裁断面
S 84	包含層1 (3c・上層)	楔形石器	23.8	16.0	8.8	4.25	サヌカイト	両側面は裁断面
S 85	包含層1 (3c・中層)	楔形石器	27.0	20.6	9.0	4.69	サヌカイト	両側面は裁断面
S 86	包含層1 (2c・中層)	楔形石器	18.6	29.6	6.0	4.31	サヌカイト	両側面は裁断面
S 87	包含層1 (3c・中層)	石鏃未成品	(39.0)	24.6	5.9	(5.74)	サヌカイト	周縁を二次調整
S 88	包含層1 (3d・中層)	石鏃未成品	26.3	21.1	6.1	4.05	サヌカイト	周縁を二次調整
S 89	包含層1 (2c・下層)	石鏃未成品	47.5	26.2	6.1	8.64	サヌカイト	両側縁に二次調整
S 90	包含層1 (3b・上層)	石鏃未成品	42.6	24.6	5.7	(6.75)	サヌカイト	両側縁に二次調整
S 91	包含層1 (3c・中層)	剥片	26.2	35.0	8.5	11.55	サヌカイト	
S 92	包含層1 (3c・中層)	石剣?	(42.7)	(36.3)	(11.5)	29.17	サヌカイト	両側縁に二次調整
S 93	包含層1 (2c・中層)	石鏃未成品?	(27.3)	(26.2)	7.0	(4.34)	サヌカイト	表面の一部に研磨痕
S 94	包含層1 (3b・下層)	剥片	31.5	38.0	8.0	7.82	サヌカイト	下辺に二次調整
208-S 95	包含層1 (3c・中層)	剥片	41.0	24.0	7.9	7.57	サヌカイト	周縁を二次調整
S 96	包含層1 (2c・中層)	打製石包丁?	46.0	24.2	10.9	13.02	サヌカイト	表裏面の一部が光沢あり
S 97	包含層1 (2c・下層)	剥片	45.2	20.0	12.6	10.06	サヌカイト	両側縁に二次調整
S 98	包含層1 (3c・上層)	剥片	40.6	24.9	5.3	6.04	サヌカイト	右辺に二次調整
S 99	包含層1 (2c・下層)	剥片	39.0	33.0	7.7	8.76	サヌカイト	下辺に二次調整
S 100	包含層1 (2c・中層)	剥片	41.5	46.0	7.0	13.67	サヌカイト	下辺にわずかに二次調整
S 101	包含層1 (3c・中層)	磨製石包丁	(45.1)	(43.4)	(8.2)	24.00	緑色片岩	
S 102	包含層1 (2c・上層)	磨製石包丁	(40.8)	(28.6)	(6.2)	9.98	粘板岩※	S 106 と同一個体?
S 103	包含層1 (2b・下層)	磨製石包丁	(38.7)	(24.3)	(6.1)	7.15	結晶片岩	刃こぼれ
S 104	包含層1 (3b・中層)	磨製石包丁	(22.6)	(17.1)	(5.0)	2.14	緑色片岩	
S 105	包含層1 (3a・下層)	磨製石包丁	(39.8)	(34.6)	6.0	(12.00)	粘板岩※	周縁は欠損
S 106	包含層1 (3c・下層)	磨製石包丁	(68.0)	(42.1)	(8.2)	30.48	粘板岩	S 102 と同一個体?
S 107	包含層1 (2c・下層)	磨製石包丁	(57.0)	(30.2)	(6.7)	14.70	粘板岩※	表面に敲打による穿孔痕?
S 108	包含層1 (2c・中層)	磨製石包丁	(44.6)	(27.7)	(4.2)	6.39	泥質片岩※	
S 109	包含層1 (2b・下層)	磨製石包丁未成品	(57.7)	(24.6)	(8.0)	12.93	緑色片岩	研磨痕。敲打による穿孔痕
S 110	包含層1 (3c・下層)	磨製石包丁未成品	(59.0)	(42.0)	(9.0)	27.96	緑色片岩	一部、調整剥離
S 111	包含層1 (2c・中層)	磨製石包丁未成品	(67.7)	(37.0)	(9.0)	26.80	緑色片岩	裏面は主要剥離面
S 112	包含層1 (2b・上層)	扁平片刃石斧	(46.0)	30.0	7.8	(16.81)	緑色片岩	刃部と両側面のみ研磨
S 113	包含層1 (3b・上層)	扁平片刃石斧	44.8	32.0	10.2	20.78	緑色片岩	刃部のみ研磨
S 114	包含層1 (2c・中層)	扁平片刃石斧未成品	30.0	23.4	7.4	7.85	緑色片岩	下辺のみ調整剥離。研磨なし
S 115	包含層1 (3c・中層)	扁平片刃石斧未成品	38.2	29.2	8.0	14.26	緑色片岩	未調整。素材か
S 116	包含層1 (3d・中層)	扁平片刃石斧未成品	137.8	74.0	19.2	244.67	緑色片岩	下辺のみ調整剥離
209-S 117	包含層1 (3c・中層)	扁平片刃石斧未成品	85.5	48.2	17.5	76.56	流紋岩※	未調整。素材か
S 118	包含層1 (3b・中層)	鑿状片刃石斧	(37.6)	15.5	10.3	(8.50)	緑色片岩	刃部と両側面のみ研磨
S 119	包含層1 (3b・中層)	大型蛤刃石斧	(43.0)	(74.0)	(53.6)	179.16	安山岩※	基部の破片。研磨
S 120	包含層1 (3c・中層)	大型蛤刃石斧	(34.3)	(31.8)	(10.8)	16.43	安山岩※	表面は研磨
S 121	包含層1 (2c・中層)	砥石	(40.3)	(37.8)	(18.0)	35.88	粘板岩※	作業面は4面
S 122	包含層1 (3c・中層)	砥石	(73.3)	(54.0)	(37.0)	234.79	流紋岩※	作業面は4面
S 123	包含層1 (3b・上層)	砥石	320.0	630.0	450.0	479.90	流紋岩※	作業面は4面
S 124	包含層1 (3c・上層)	叩石	35.6	31.4	30.2	37.67	泥岩※	下端が被熱し、滓が付着?
S 125	包含層1 (2b・上層)	叩石	82.0	84.0	47.0	522.01	玄武岩※	側面全体に敲打痕
S 126	包含層1 (2b・上層)	叩石	(58.0)	60.0	42.0	247.65	斑レイ岩※	側面に敲打痕
S 127	包含層1 (3b・上層)	叩石	95.0	79.0	40.0	444.73	石英閃緑岩※	側面全体に敲打痕
S 128	包含層1 (2b・上層)	叩石	107.0	105.0	66.0	993.71	花崗岩※	側面に敲打痕
210-S 129	包含層1 (3b・上層)	火打石	12.3	10.2	(8.1)	(0.94)	チャート※	敲打痕。緑青色 (4.5B7/4)
S 130	包含層1 (3c・上層)	小円礫	17.3	16.4	4.8	2.12	細粒砂岩※	赤灰色 (2.5R5.5/1)。基石か
S 131	包含層1 (2b・下層)	台石	176.0	162.0	88.0	3.26	デイサイト質凝灰岩※	
S 132	包含層1 (3c・上層)	台石	(166.0)	(168.5)	(99.0)	4.68	デイサイト質凝灰岩※	

高尾北ヤシキ遺跡 土製品観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調 (外面)	胎土	焼成	状態	備考
			長さ	幅	厚さ						
29-C 1	土器溜まり 1	土器円板	50.5	50.0	7.0	18.57	にぶい黄橙 (10YR7/2)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	弥生土器甕の転用 孔内はわずかに摩滅
194-C 2	遺構に伴わない	土錘	21.3	13.0	13.4	3.47	明赤灰 (2.5YR7/2)	2mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	3区。管状
C 3	遺構に伴わない	土錘	44.6	15.3	15.2	8.86	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	3区。管状

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調 (外面)	胎土	焼成	状態	備考
			長さ	幅	厚さ						
210-C4	包含層1 (3b・下層)	土器円板	42.3	50.3	5.5	12.56	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	弥生土器連の転用未穿孔
C5	包含層1 (2c・下層)	土器円板	50.1	60.0	5.8	19.87	褐灰 (10YR5/1)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	弥生土器連の転用未穿孔
C6	包含層1 (3b・下層)	土器円板	53.7	60.5	6.4	20.27	橙 (7.5YR6/6)	2mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	弥生土器連の転用未穿孔
C7	包含層1 (2c・中層)	陶棺 (蓋の突起)	(7.9)	(6.2)	(5.7)	(227.75)	橙 (7.5YR7/6)	4mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	破片	
C8	包含層1 (3b・上層)	陶棺 (蓋)	(13.05)	(9.8)	4.7	(396.04)	橙 (5YR6/8)	5mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	破片	
C9	包含層1 (3b・上層)	陶棺 (身)	(14.4)	(13.4)	3.2	(560.68)	橙 (5YR7/8)	5mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	破片	
C10	包含層1 (3b・中層)	炉壁	(62.5)	(64.0)	(33.5)	(121.00)	にぶい橙 (7.5YR5/4)	5mm以下の砂粒(多) 長石・石英	—	破片	内面にガラス質滓製鉄分析試料No.1
C11	包含層1 (3b・中層)	炉壁	(92.5)	(97.0)	(53.0)	(338.27)	にぶい橙 (7.5YR5/4)	5mm以下の砂粒(多) 長石・石英	—	破片	内面にガラス質滓
210-C12	包含層1 (2c・上層)	土鍾	41.2	13.7	13.8	6.45	橙 (7.5YR7/6)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	管状
C13	包含層1 (2c・上層)	土鍾	40.7	15.0	15.3	7.17	橙 (5YR7/6)	2mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	管状
C14	包含層1 (3c・上層)	土鍾	40.6	13.5	13.0	5.64	灰黄褐 (10YR5/2)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	管状
C15	包含層1 (3c・上層)	土鍾	(43.5)	13.2	13.5	(5.91)	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	ほぼ完形	管状
C16	包含層1 (3c・上層)	土鍾	34.8	12.9	12.5	4.76	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	管状
C17	包含層1 (3c・中層)	土鍾	43.5	12.9	(11.7)	(5.07)	灰黄褐 (10YR6/2)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	破片	管状
C18	包含層1 (3c・上層)	土鍾	44.2	19.5	17.5	13.23	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒(多) 長石・石英・雲母・赤色粒	良好	完形	管状

高尾北ヤシキ遺跡 金属製品観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			全長	幅	厚さ			
49-M1	竪穴住居9	薄板状	(36.5)	(36.0)	2.0	(7.43)	鉄	孔あり
M2	竪穴住居9	針金状	(14.0)	2.5	2.5	(0.31)	鉄	ねじりあり
M3	竪穴住居9	椀形鍛冶滓	34.0	38.5	16.5	31.35	鉄滓	極小形。磁着強。完形
M4	竪穴住居9	椀形鍛冶滓	62.5	67.0	28.0	135.17	鉄滓	小形。磁着強。破面1。2/3残存。
M5	竪穴住居9	鉄塊系遺物	56.0	56.5	42.0	181.04	鉄滓	磁着強。錆化が著しい
50-M6	竪穴住居10	釘	(38.0)	5.6	5.0	(4.31)	鉄	
M7	竪穴住居10	釘	(36.5)	5.0	4.5	(2.51)	鉄	
53-M8	竪穴住居12	刀子	(54.0)	11.0	4.0	(5.26)	鉄	
58-M9	竪穴住居15	製錬滓	134.0	112.0	73.0	826.67	鉄滓	流出溝滓(ガス質)。磁石弱
61-M10	竪穴住居15・16	鉄塊系遺物?	21.5	29.0	15.0	11.15	鉄滓	
71-M11	竪穴住居17～21周辺	火打金	29.0	(42.0)	6.5	(8.51)	鉄	
74-M12	段状遺構10	製錬滓(炉内滓)	46.0	47.0	32.0	38.70	鉄滓	磁着弱。製鉄分析試料No.4
77-M13	段状遺構15	板状品	(23.8)	(24.6)	1.8	(2.57)	鉄	右隅に鉄銹?
M14	段状遺構15	釘	(78.0)	5.5	(5.0)	(7.23)	鉄	
M15	段状遺構15	製錬滓	61.5	79.5	46.5	195.8	鉄滓	磁着弱。製鉄分析試料No.5
83-M16	段状遺構27	板状品	(20.1)	(18.5)	(1.5)	(1.45)	鉄	孔あり。
86-M17	土坑5	鍛冶滓	(52.5)	(60.0)	38.7	139.30	鉄滓	含鉄。鍛冶分析試料No.6
100-M18	掘立柱建物3・4周辺	火打金?	(24.0)	(39.0)	4.0	(12.38)	鉄	
122-M19	整地面2	釘	70.5	(14.5)	9.0	(16.11)	鉄	
M20	整地面2	銅滓	(31.0)	(22.5)	8.3	(10.31)	銅滓	薄板状。紫黒色(5P2/1)
150-M21	掘立柱建物17・18	楔	49.5	18.0	4.0	18.91	鉄	
161-M22	段状遺構31	釘	(37.5)	7.5	5.0	(4.08)	鉄	
M23	段状遺構31	銅滓	(14.0)	(19.8)	8.4	(4.81)	銅滓	薄板状。紫黒色(5P2/1)
163-M24	段状遺構31-P1	鏡像	116.0	118.0	2.5 (11.0)	(53.01)	青銅	鏡体と鈕を一鑄。鏡面に菩薩像を線刻。

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			全長	幅	厚さ			
177 -M 25	土坑 16	釘	(33.5)	5.0	4.0	(4.09)	鉄	
178 -M 26	土坑 17	釘	(100.5)	15.5	9.0	(41.63)	鉄	
184 -M 27	溝 1	釘	(33.0)	9.8	8.0	(6.22)	鉄	
186 -M 28	溝 3	釘	(39.0)	6.0	4.2	(3.61)	鉄	
194 -M 29	遺構に伴わない	楔	58.5	15.1	6.0	22.67	鉄	2区
M 30	遺構に伴わない	楔	(53.5)	16.5	3.0	(15.66)	鉄	
M 31	遺構に伴わない	小刀?	(59.0)	20.0	3.5	(12.23)	鉄	3区。目釘孔。片関
M 32	遺構に伴わない	板状品	(41.8)	18.0	2.0	(5.94)	鉄	2区。孔あり
M 33	遺構に伴わない	釘	(72.5)	10.0	3.5	(11.95)	鉄	
M 34	遺構に伴わない	釘	(67.2)	11.3	4.0	(7.28)	鉄	
M 35	遺構に伴わない	釘	(21.0)	6.4	2.5	(0.79)	鉄	2区
M 36	遺構に伴わない	釘	(27.2)	6.8	2.5	(0.89)	鉄	2区
M 37	遺構に伴わない	銅滓	(77.5)	(42.0)	12.5	(76.89)	銅滓	2区。薄板状。紫黑色 (5P2/1)
M 38	遺構に伴わない	煙管 (吸口)	52.0	10.0	0.8	4.29	銅	2区。木質付着
M 39	遺構に伴わない	銭	25.6	-	1.5	(2.66)	銅	2区。天禧通寶
211 -M 40	包含層 1 (2c・下層)	鏃	(66.5)	38.0	(7.5)	(10.73)	鉄	腸袂三角形鏃群
M 41	包含層 1 (3c・中層)	鏃	(32.3)	19.5	5.5	(7.43)	鉄	方頭式?
M 42	包含層 1 (3b・中層)	鏃	(97.8)	9.0	7.0	(16.68)	鉄	
M 43	包含層 1 (2c)	鏃	(42.0)	8.0	7.5	(5.95)	鉄	
M 44	包含層 1 (3c・中層)	鏃	(32.5)	6.0	3.0	(2.13)	鉄	
M 45	包含層 1 (2c・中層)	鈍?	(45.5)	14.5	3.5	(10.73)	鉄	
M 46	包含層 1 (3c・中層)	刀子	(37.0)	9.5	2.5	(2.19)	鉄	
M 47	包含層 1 (3c・中層)	刀子	(32.8)	8.5	3.8	(2.31)	鉄	M 48 と同一個体か
M 48	包含層 1 (3c・中層)	刀子	(32.7)	14.0	4.0	(6.36)	鉄	M 47 と同一個体か
M 49	包含層 1 (3c・中層)	摘鎌	(40.5)	20.0	1.8	(4.12)	鉄	左端に折り返し残存
M 50	包含層 1 (3c・中層)	鎌?	(29.0)	20.0	1.7	(3.41)	鉄	
M 51	包含層 1 (3c・上層)	紡茎	(133.8)	5.0	4.5	(11.79)	鉄	
M 52	包含層 1 (3b・上層)	金具	(38.2)	(32.0)	2.0	(7.86)	鉄	半球状
M 53	包含層 1 (3b・中層)	金具?	(6.0)	(36.0)	5.5	(3.84)	鉄	ねじりあり
M 54	包含層 1 (3c・中層)	板状 (鎌?)	66.2	19.0	3.0	12.92	鉄	
M 55	包含層 1 (3b・中層)	板状	(45.0)	10.0	3.0	(6.46)	鉄	
M 56	包含層 1 (2c・中層)	棒状	(40.9)	5.5	2.5	(2.62)	鉄	
M 57	包含層 1 (3b・上層)	刀子	(36.3)	9.0	2.0	(1.76)	鉄	刃部の研ぎ減りが著しい
M 58	包含層 1 (3b・中層)	楔	32.5	16.0	4.0	14.81	鉄	使用により屈曲
M 59	包含層 1 (3b・中層)	鍋	(20.0)	-	(39.0)	(12.48)	鉄	口径不明。内面に突帯。鋳造
M 60	包含層 1 (3b・中層)	毛抜形?	(17.5)	7.3	2.0	(1.21)	鉄	
M 61	包含層 1 (3c・中層)	火打金	28.0	(49.4)	2.5	(9.78)	鉄	
M 62	包含層 1 (3d・上層)	釘	(62.5)	12.0	9.5	(20.90)	鉄	
M 63	包含層 1 (2b・上層)	釘	(73.0)	9.3	6.0	(13.83)	鉄	木質付着
M 64	包含層 1 (3b・上層)	釘	62.0	15.3	7.0	25.48	鉄	
M 65	包含層 1 (3b・上層)	釘	(59.4)	8.0	4.0	(12.81)	鉄	
M 66	包含層 1 (3c・中層)	釘	(47.7)	6.7	3.0	(3.29)	鉄	
M 67	包含層 1 (3b・上層)	釘	(49.0)	5.8	6.5	(10.25)	鉄	
M 68	包含層 1 (3b・中層)	釘	(49.0)	5.0	3.0	(2.88)	鉄	
M 69	包含層 1 (3b・上層)	釘	(46.9)	5.0	3.0	(4.24)	鉄	
M 70	包含層 1 (2b・上層)	釘	(36.2)	4.6	3.5	(2.64)	鉄	木質付着
211 -M 71	包含層 1 (3c・上層)	釘	(31.5)	6.0	5.0	(2.43)	鉄	

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			全長	幅	厚さ			
211-M72	包含層1 (3c・中層)	釘	(22.0)	7.2	4.5	(1.60)	鉄	
M73	包含層1 (3c・上層)	釘	(22.5)	4.9	2.8	(0.65)	鉄	
M74	包含層1 (3c・上層)	板状	58.5	(52.5)	5.0	(30.23)	鉄	
M75	包含層1 (2b・上層)	板状	(59.5)	(44.0)	6.5	(76.15)	鉄	鋳造
M76	包含層1 (3b・上層)	火打金?	(29.0)	22.5	3.5	(10.64)	鉄	
M77	包含層1 (3b・上層)	楔?	61.8	14.5	5.0	16.80	鉄	
M78	包含層1 (3c・中層)	鎌?	(47.0)	17.0	1.7	(6.29)	鉄	
M79	包含層1 (3c・中層)	板状	(23.0)	28.5	1.8	(3.10)	鉄	
M80	包含層1 (2c)	板状	(24.5)	(31.5)	9.5	(12.07)	鉄	
M81	包含層1 (3b・上層)	板状	(22.8)	25.2	3.0	(5.28)	鉄	
M82	包含層1 (3c・上層)	板状	(30.0)	14.5	2.7	(2.95)	鉄	刃部の研ぎ減りが著しい
M83	包含層1 (3c・上層)	板状	(20.5)	(15.0)	8.5	(2.68)	鉄	
M84	包含層1 (3b・中層)	銅銭	(17.5)	(24.0)	1.5	(0.38)	銅	皇宋口寶
M85	包含層1 (3b・中層)	銅銭	(14.5)	(22.0)	1.5	(0.63)	銅	口宋元 (寶)
212-M86	包含層1 (3c・中層)	炉内滓	(133.5)	(103.0)	83.5	(804.15)	鉄滓	木炭痕。底面に炉床土。磁着やや強
M87	包含層1 (3c・中層)	製錬滓	(181.5)	(133.5)	(106.5)	約 2,350	鉄滓	木炭痕。炉壁付。磁着弱
M88	包含層1 (3b・上層)	流出孔滓 (ガス質)	(77.5)	88.0	97.0	(590.36)	鉄滓	磁石弱
M89	包含層1 (2b・中層)	流動滓	(46.0)	(55.0)	22.0	47.80	鉄滓	磁着弱。製鉄分析試料No.3
M90	包含層1 (3c・中層)	流動滓	44.0	50.0	33.0	71.37	鉄滓	
M91	包含層1 (2c・中層)	椀形鍛冶滓	56.0	(33.8)	22.8	73.60	鉄滓	磁着弱。鍛冶分析試料No.9
M92	包含層1 (3c・中層)	椀形鍛冶滓	42.0	(30.5)	20.2	52.00	鉄滓	含鉄。鍛冶分析試料No.8
M93	包含層1 (3b・上層)	椀形鍛冶滓	46.0	55.5	15.3	51.30	鉄滓	極小形。磁着強。破面1。2/3残存
M94	包含層1 (3b・中層)	鍛冶滓	27.0	(32.5)	14.3	33.00	鉄滓	含鉄。鍛冶分析試料No.7
M95	段状遺構 31	銅滓	(64.0)	(37.5)	10.5	(47.36)	銅滓	薄板状。紫黒色 (5P2/1)
M96	包含層1 (3b・上層)	銅滓	(53.5)	(54.5)	12.0	(52.19)	銅滓	薄板状。紫黒色 (5P2/1)
M97	段状遺構 31	銅滓	(47.2)	(45.5)	7.5	(42.76)	銅滓	薄板状。紫黒色 (5P2/1)
M98	包含層1 (3c・上層)	銅滓	(39.5)	(29.0)	15.0	45.60	銅滓	銅生産関連遺物分析試料No.10
215-M99	墓 3	棺金具	(39.0)	14.5	11.0	(7.53)	鉄	木質付着
M100	墓 3	棺金具	(28.0)	15.5	11.5	(6.10)	鉄	木質付着
M101	墓 3	棺金具	(19.0)	12.0	11.5	(3.53)	鉄	木質付着
M102	墓 3	棺金具	(25.8)	7.0	6.5	(2.89)	鉄	木質付着

高尾北ヤシキ遺跡 ガラス製品観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
86-G1	土坑 5	小玉	4.8	3.6	3.5	0.09	ガラス	あざやかな緑みの青 (2.5B5/8)	孔径 1.6mm 上下端面の研磨なし

高尾北ヤシキ遺跡 瓦観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	胎土	焼成	状態	備考
			長さ	幅	厚さ					
213-R1	包含層1 (2c・上層)	平瓦	(8.5)	(7.2)	1.6	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	凹面布目痕 凸面タタキ
R2	包含層1 (3c・上層)	平瓦	(7.2)	(5.2)	1.4	灰白 (2.5Y8/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	やや不良	破片	凹面布目痕
R3	包含層1 (3c・上層)	平瓦	(10.7)	(7.7)	2.3	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	やや不良	破片	凹面ケズリ 凸面タタキ
R4	包含層1 (2c・上層)	平瓦	(8.6)	(5.6)	1.6	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	凹面布目痕 凸面タタキ
R5	包含層1 (3c・上層)	平瓦	(8.6)	(8.3)	1.9	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	やや不良	破片	
R6	包含層1 (3c・上層)	平瓦	(7.1)	(5.3)	1.3	灰白 (2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒・雲母	やや不良	破片	凹面布目痕

高尾北ヤシキ遺跡 石器石材剥片集計表

出土遺構等	時期	サヌカイト		玄武岩		緑色片岩		結晶片岩	
		点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)
竪穴住居 1	古墳後期	1	1.74	1	3.52				
竪穴住居 4	古墳後期	1	2.36						
竪穴住居 7	古墳後期	5	6.77	1	3.80				
竪穴住居 9・10	古墳後期			1	26.90				
竪穴住居 10	古墳後期	3	4.96						
竪穴住居 19	古墳後期	1	0.89						
掘立柱建物 3	中世	1	1.44	1	8.93	1	6.06		
掘立柱建物 23・24	中世			1	22.08				
柱穴列 20	中世	1	0.35						
段状遺構 2	弥生中期	1	0.05						
段状遺構 2・3	弥生中期	3	5.39						
段状遺構 3	弥生中期	1	1.93	1	211.79				
段状遺構 4	弥生中期	1	0.23						
段状遺構 9	古墳後期	1	1.88						
段状遺構 10	古墳後期	4	7.98	1	6.10				
段状遺構 15	古墳後期			1	1.92				
段状遺構 19	古墳後期			1	14.09				
段状遺構 23	古墳後期	1	0.23						
段状遺構 24	古墳後期	1	1.51						
段状遺構 31	中世	5	8.32						
段状遺構 32	中世	2	0.96						
段状遺構 33	中世	1	4.25						
土坑 5	古墳後期	3	1.68	1	1.05				
集石 4	中世	1	0.27						
土器溜まり 1	弥生中期	4	7.30	2	41.27				
溝 2	中世			1	115.22				
土坑 23	中世	2	3.46						
旧 3 A 区-P 90	弥生	1	1.14						
旧 3 A 区-P 122	弥生	1	0.69						
P 5	弥生	1	4.97						
旧 3 B 区-P 142	弥生	2	5.91						
旧 3 A 区-P 161	弥生	1	0.51						
旧 3 B 区-P 376	弥生	1	0.30						
包含層 1	弥生中期～中世	404	576.02	40	986.57	9	46.51	3	16.52
遺構に伴わない	—	18	27.06	3	112.71				
計	—	435	627.36	46	1,255.77	9	46.51	3	16.52

※S 5・9・21・90・91・94・95・97～100 を含む

高尾北ヤシキ遺跡 金属生産関連遺物の出土量

(g)

出土遺構等 (層位・地点)	地区	時期	鉄鉱石	炉壁	製錬滓			鉄塊系 遺物	椀形鍛冶滓		銅滓	計
					(含鉄)	(磁着弱)	(流動滓)		(含鉄)	(磁着弱)		
竪穴住居 2	3 A 区	古墳後期				4.3						4.3
竪穴住居 5	3 A 区	古墳後期		47.2								47.2
竪穴住居 7	3 B 区	古墳後期		277.3	24.5	109.8						411.6
竪穴住居 9・10	3 C 区	古墳後期		16.0		79.7			135.1			230.8
竪穴住居 9	3 C 区	古墳後期				16.0			51.7			67.7
竪穴住居 10	3 C 区	古墳後期	498.5		35.6	46.9	6.8		220.2			808.0
竪穴住居 12	4 C 区	古墳後期			39.5							39.5
竪穴住居 15	4 C 区	古墳後期			4.9	889.0						893.9
竪穴住居 16	4 C 区	古墳後期		13.0	31.8	182.5		11.2	5.6			244.1
竪穴住居 21	4 C 区	古墳後期		35.3	19.4	157.4	24.8	16.5				253.4
段状遺構 10	3 A 区	古墳後期		149.8		367.5	9.7		27.9			554.9
段状遺構 11	3 A 区	古墳後期		17.2				5.8				23.0
段状遺構 15	3 B 区	古墳後期				514.2						514.2
段状遺構 20	3 B 区	古墳後期				10.1						10.1
段状遺構 26	4 C 区	古墳後期				55.1						55.1
段状遺構 27	2 区	古墳後期				33.6						33.6
段状遺構 31	3 A 区	中世		258.9		266.3	14.2				4.9	544.3
段状遺構 33	3 C 区	中世				43.5						43.5
墓 3	4 C 区	近世		7.4		15.6						23.0
土坑 5	3 B 区	古墳後期		268.8	428.9	1,124.6						1,822.3
土坑 9	3 A 区	中世		24.7		18.7						43.4
溝 2	3 A 区	中世		8.8		131.8						140.6
溝 5	4 B 区	中世				4.5						4.5
旧 P 21	3 A 区					1.8						1.8
旧 P 5	3 B 区					3.1						3.1
旧 P 1	3 B 区			3.2		3.1						6.3
旧 P 118・119	3 C 区					10.8						10.8
包含層 1 (上層)	3 区・西側	(中世)		367.0		833.2	146.6		264.1	51.2	290.5	1,952.6
包含層 1 (上層)	3 区・中央	(中世)		399.4	153.0	2,708.3	42.8		41.3		73.0	3,417.8
包含層 1 (上層)	3 区・東側	(中世)				9.6						9.6
包含層 1 (中層)	3 区・西側	(古墳後期～古代)		1,207.3		3,842.3	110.1		50.1		15.7	5,225.5
包含層 1 (中層)	3 区・中央	(古墳後期～古代)		2,096.7	1,807.8	13,534.9	122.0		193.2	77.8	8.0	17,840.4
包含層 1 (中層)	3 区・東側	(古墳後期～古代)				17.5						17.5
包含層 1 (下層)	3 区・中央	(弥生)		93.8		73.2						167.0
遺構外	1 区	—		13.6			296.6					310.2
遺構外	2 区	—		117.5	147.3	309.4	151.3				11.6	737.1
遺構外	2 区・西側	—				128.8						128.8
遺構外	2 区・中央	—		13.8								13.8
遺構外 (古墳周辺)	2 区・東側	—		246.6	51.9	559		103.7				961.2
遺構外	3 区	—									51.4	51.4
遺構外	3 区・西側	—		12.9		21.4					72.2	106.5
遺構外	3 区・中央	—				50.3	45.6			127.7	191.3	414.9
遺構外	3 区・東側	—				21.1						21.1
遺構外	4 区・西側	—									21.7	21.7
古墳 (墳丘盛土)	2 区・東側	古墳後期		364.2	70.2	232.6						667.0
古墳 (周溝)	2 区・東側	古墳後期		2023.9	230.5	1665.7	449.1	55.9	182.6	69.4		4,677.1
古墳 (竪穴式石室)	2 区・東側	古墳後期				13.6						13.6
計			498.5	8,084.3	3,045.3	28,110.8	1,425.4	187.3	1,171.8	326.1	740.3	43,589.8
							41164.3	187.3		1497.9		
総計										42,849.5		

高尾北ヤシキ古墳 土器観察表

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
233 - 1	横穴式石室	須恵器	杯蓋	13.2		4.1	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 ヘラ記号「×」
2	横穴式石室	須恵器	杯身	12.5		3.7	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 ヘラ記号「×」
3	横穴式石室	須恵器	杯蓋	13.0		3.8	赤灰 (2.5YR4/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
4	横穴式石室	須恵器	杯身	11.6		3.3	灰 (N5/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	ほぼ 完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
5	横穴式石室	須恵器	杯蓋	13.6		4.4	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 ヘラ記号「×」
6	横穴式石室	須恵器	杯蓋	13.1		3.8	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
7	横穴式石室	須恵器	杯蓋	12.8		4.1	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
8	横穴式石室 陶棺の脚下	須恵器	杯蓋	12.7		3.9	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 胎土分析試料No.3
9	横穴式石室	須恵器	杯蓋	12.7		4.7	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 胎土分析試料No.1
10	横穴式石室 筒形土製品の上	須恵器	杯蓋	12.0		4.1	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 胎土分析試料No.2
11	横穴式石室	須恵器	杯身	11.9		3.8	褐灰 (7.5YR5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 内面の当て具痕後ナデ
12	横穴式石室	須恵器	杯身	12.0		3.7	灰 (N5/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	ほぼ 完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 ヘラ記号「×」
13	横穴式石室	須恵器	杯身	12.0		3.8	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左 ヘラ記号「×」
14	横穴式石室	須恵器	杯身	11.3		3.7	灰 (N6/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
15	横穴式石室	須恵器	杯身	11.4		3.6	黄灰 (2.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
16	横穴式石室 筒形土製品の上	須恵器	杯身	11.0		3.7	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
17	横穴式石室	須恵器	有蓋高杯 蓋	12.4		4.4	灰白 (5Y8/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：右 胎土分析試料No.7
18	横穴式石室 陶棺の下	須恵器	有蓋高杯 蓋	12.5		4.1	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	天井部回転ヘラケズリ 胎土分析試料No.8
19	横穴式石室	須恵器	高杯	11.7		(4.5)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	胎土分析試料No.5
20	横穴式石室 陶棺の下	須恵器	高杯	12.0	10.6	12.7	灰 (7.5Y6/1)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	完形	
21	横穴式石室	須恵器	高杯	14.0		(5.5)	灰 (7.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内外面回転ナデ 胎土分析試料No.4
22	横穴式石室 陶棺の下	須恵器	壺蓋	9.8		3.6	灰 (N5/)	2mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
23	横穴式石室	須恵器	壺蓋	9.9		3.3	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：右
24	横穴式石室	須恵器	短頸壺	8.8		8.4	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	ほぼ 完形	胴部に沈線文 ロクロ回転方向：右
25	横穴式石室	須恵器	短頸壺	8.0		8.2	灰 (N5/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	外面一部カキメ？ 底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
234 - 26	横穴式石室	須恵器	壺	10.1		(12.3)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	ほぼ 完形	肩部に沈線文
27	横穴式石室	須恵器	長頸壺	7.8	10.3	19.7	灰 (N5/)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	ほぼ 完形	平底。外面カキメ 肩部に放射状の刻目文 ロクロ回転方向：左
28	横穴式石室	須恵器	提瓶	6.1		19.7	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	ほぼ 完形	外面カキメ 把手1か所残存
29	横穴式石室	須恵器	皮袋形瓶	3.4		17.8	灰 (N4/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	完形	外面ケズリ後ナデ？ 口縁部に孔、把手 円盤充填
30	横穴式石室	須恵器	平瓶	6.0		14.3	灰 (N6/)	3mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	ほぼ 完形	外面カキメ ロクロ回転方向：左 ヘラ記号。円盤充填 底部回転ヘラケズリ
31	横穴式石室	須恵器	平瓶	6.3		11.4	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	ロクロ回転方向：右 円盤充填。円形浮文 胎土分析試料No.9
32	横穴式石室	土師器	高杯	20.0	12.5	12.2	橙 (5YR6/8)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母・赤色土粒	良好	ほぼ 完形	胎土分析試料No.11

掲載番号	出土遺構等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
				口径	底径	器高					
33	横穴式石室 陶棺内	土師器	小皿	7.8	5.0	1.4	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	内外面ナデ
34	横穴式石室 陶棺内	土師器	小皿	7.4	5.6	1.4	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内外面ナデ
35	横穴式石室	土師器	皿	13.9	7.6	3.2	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	破片	内外面ナデ
36	横穴式石室	土師器	高台付皿	8.3	7.1	4.2	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	内外面ナデ
37	横穴式石室 陶棺内	土師器	高台付皿		8.0	(3.4)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	内外面ナデ 貼付高台
38	横穴式石室	土師器	羽釜	19.6		(2.9)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	
241 - 39	縦穴式石室	須恵器	杯身	11.0		4.0	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英・雲母	良好	完形	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：右
40	縦穴式石室	須恵器	壺蓋	10.5		4.9	灰 (N6/)	5mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	完形	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：右
242 - 41	周溝	須恵器	杯身			(4.2)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：右
42	周溝	須恵器	杯	10.7		(4.0)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
43	周溝	須恵器	杯	11.9	6.9	3.4	黄灰 (2.5Y5/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	底部回転ヘラケズリ ロクロ回転方向：左
44	表土	須恵器	高杯			(6.1)	灰白 (5Y8/1)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面ナデ
45	周溝	須恵器	平瓶			(10.4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	不良		外面カキメ、回転ヘラケズリ。 円形浮文
46	周溝	須恵器	甕	9.0		(3.2)	灰 (N6/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	破片	内外面回転ナデ
47	周溝	須恵器	甕			(7.1)	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	肩部に沈線文、円孔
48	盛土	須恵器	壺	(15.8)		(4.6)	灰白 (5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	口縁部外面カキメ
49	周溝	須恵器	甕	23.3		(46.6)	灰 (N4/)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	外面平行タタキ、カキメ 内面同心円文当て具痕 胎土分析試料No.10
243 - 50	周溝	土師器	甕	19.8		(4.8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	外面ハケメ
51	周溝	土師器	甕	18.8		(6.3)	にぶい橙 (5YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
52	盛土	土師器	甕	22.0		(14.2)	橙 (7.5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	
53	周溝	土師器	甕	19.5		(7.6)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	内面ヘラケズリ
54	表土	土師器	甕	14.0		(4.6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	外面ハケメ 内面ヘラケズリ
55	周溝	土師器	甕	30.4			橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・赤色土粒	良好	破片	内面ヘラケズリ 把手
56	周溝	土師器	甕か鍋			(3.3)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	把手
57	表土	土師器	甕か鍋			(4.5)	橙 (5YR6/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	把手
58	周溝	土師器	甕か鍋			(4.4)	明黄褐 (10YR7/6)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	破片	把手
245 - 59	土坑墓1	須恵器	高杯	(14.2)	10.1	10.0	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英	良好	ほぼ 完形	受部外面回転ヘラケズリ 胎土分析試料No.6
246 - 60	土坑墓2	須恵器	短頸壺	6.4 ~ 6.9		10.0	灰 (N5/)	1mm以下の砂粒を少し含む 長石・石英	良好	完形	回転ナデ 底部回転ヘラケズリ 胎土分析試料No.26

高尾北ヤシキ古墳 陶棺観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (cm)			身						脚部			
			全長	最大幅	最大高	長さ (cm)		高さ	厚さ (cm)		色調		下端径 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)
						a	b		側面	底面	a	b			
			220.8	67.0	99.0	112.8	113.2	63.0	3.8	2.8	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	13.6 ~ 15.6	17.7 ~ 18.5	2.0 ~ 2.6
229・230 - C 1	横穴式石室	土師質 陶棺	蓋						備考						
			長さ (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)		色調	突起			4mm以下の砂粒を多く含む (長石・石英・雲母) 蓋・身の内外面ナデ 脚部の外面はハケメ 蓋・身の一部に黒色部分が認められる 胎土分析試料No.13・14				
					側面	天井部		形状	径 (cm)	高さ (cm)					
108.8	36.0	3.2	3.2	明赤褐色 (5YR5/6)	円柱	4.4 ~ 6.0	3.9								

高尾北ヤシキ古墳 土製品観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	状態	形態・手法の特徴など
			口径	底径	器高	外・内・断面				
231・232 -C 2	横穴式石室	土師質 筒形土製品 (煙突)	14.6	44.8	104.2	橙 (7.5YR7/6)	4mm以下の砂粒を多く含む 長石・石英・雲母	良好	完形	外面ハケメ、黒斑 内面ニビオサエ、ナデ 底部ナデ、植物質圧痕 胎土分析試料No.12

高尾北ヤシキ古墳 玉類観察表

掲載番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径 (大)	孔径 (小)				
237-S 1	横穴式石室 陶棺内	切子玉	19.0	12.5	3.2	1.5	3.38	水晶	白色透明	ほぼ完形。片面穿孔 研磨。やや摩滅
S 2	横穴式石室 陶棺の下	丸玉	9.4	12.4	3.6	1.3	1.95	水晶	白色透明	完形 片面穿孔、敲打痕 研磨
G 1	横穴式石室 陶棺内	小玉	6.0	7.5	2.3	2.3	0.40	ガラス	ごく暗い紫みの青 (5PB2.5/2)	完形 両端研磨
G 2	横穴式石室 陶棺内	小玉	5.3	7.3	2.5	2.5	0.38	ガラス	ごく暗い紫みの青 (5PB2.5/2)	両端研磨
G 3	横穴式石室 陶棺内	小玉	7.0	6.3	2.0	1.9	0.45	ガラス	暗い紫みの青 (5PB3/4)	完形 両端研磨
G 4	横穴式石室 陶棺内	小玉	5.6	6.9	1.5	1.5	0.43	ガラス	ごく暗い紫みの青 (5PB2.5/2)	完形 両端研磨
G 5	横穴式石室	小玉	2.7	4.3	1.1	1.1	0.06	ガラス	暗い紫みの青 (6PB2.5/4)	完形
G 6	横穴式石室 陶棺の下	不明	(4.3)	(4.1)	-	-	0.05	ガラス	うすい黄みの緑 (10GY8/7)	細片 (写真のみ掲載)
C 3	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.7	7.2	1.3	1.3	0.30	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 4	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.6	7.6	1.1	1.1	0.33	粘土	黒 (7.5YR2/1)	完形
C 5	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.6	(6.5)	1.7	-	0.14	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 6	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.5	7.1	1.0	1.0	0.19	粘土	黒 (7.5YR1.7/1)	
C 7	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.4	7.0	1.5	1.5	0.29	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 8	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.2	7.1	1.0	-	0.31	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 9	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.2	7.2	1.8	-	0.24	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 10	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.1	7.3	1.3	1.3	0.30	粘土	黒 (7.5YR2/1)	完形
C 11	横穴式石室 陶棺内	土玉	6.0	7.0	1.0	-	0.29	粘土	黒 (7.5YR1.7/1)	
C 12	横穴式石室 陶棺の下	土玉	6.0	6.9	1.1	1.1	0.21	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 13	横穴式石室 陶棺内	土玉	5.9	5.6	1.5	-	0.12	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 14	横穴式石室 陶棺内	土玉	5.9	7.0	1.2	1.2	0.29	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 15	横穴式石室 陶棺内	土玉	(5.2)	7.4	1.3	-	0.15	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 16	横穴式石室 陶棺内	土玉	5.2	6.9	1.6	-	0.22	粘土	灰褐 (7.5YR4/2)	
C 17	横穴式石室 陶棺内	土玉	5.0	6.8	1.0	1.0	0.28	粘土	黒 (7.5YR2/1)	完形
C 18	横穴式石室 陶棺内	土玉	4.8	6.9	1.7	1.7	0.22	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 19	横穴式石室 陶棺内	土玉	4.4	6.4	1.7	-	0.16	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 20	横穴式石室 陶棺の下	土玉	4.3	5.9	2.4	2.4	0.15	粘土	黒 (7.5YR2/1)	完形
C 21	横穴式石室 陶棺内	土玉	4.3	7.1	1.8	1.8	0.22	粘土	黒褐 (7.5YR3/1)	完形
C 22	横穴式石室 陶棺内	土玉	3.9	6.2	1.5	1.5	0.09	粘土	黒褐 (7.5YR3/1)	
C 23	横穴式石室 陶棺内	土玉	3.8	(6.1)	2.0	-	0.07	粘土	黒褐 (7.5YR3/1)	
C 24	横穴式石室 陶棺内	土玉	(3.6)	6.1	1.2	-	0.11	粘土	黒褐 (7.5YR3/1)	

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	色調	備考
			最大長	最大幅	孔径(大)	孔径(小)				
241 - C 25	竪穴式石室	土玉	5.7	7.2	1.4	1.4	0.27	粘土	黒 (7.5YR2/1)	完形
C 26	竪穴式石室	土玉	5.2	7.5	1.9	1.6	0.28	粘土	黒褐 (7.5YR3/1)	
C 27	竪穴式石室	土玉	(5.2)	7.1	1.0	—	0.15	粘土	褐灰 (7.5YR4/1)	
C 28	竪穴式石室	土玉	5.1	7.0	1.5	1.5	0.17	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 29	竪穴式石室	土玉	5.0	7.2	2.1	—	0.25	粘土	黒褐 (7.5YR3/1)	
C 30	竪穴式石室	土玉	4.8	7.7	1.6	1.6	0.28	粘土	黒褐 (7.5YR3/1)	完形
C 31	竪穴式石室	土玉	(4.1)	6.2	1.2	—	0.07	粘土	黒 (7.5YR2/1)	
C 32	竪穴式石室	土玉	3.9	7.3	1.6	1.6	0.23	粘土	黒 (7.5YR2/1)	完形

高尾北ヤシキ古墳 鉄刀・刀子観察表

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	備考
			全長	刃部長	刃部幅	茎長			
235 - M 1	横穴式石室	刀	(39.0)	(39.0)	(19.0)	—	4.33	鉄	切先部分のみ残存
M 20	横穴式石室 陶棺内	刀子	(113.5)	(50.0)	14.0	63.5	18.36	鉄	茎に木質残存 両側 刃部一部欠損、茎部完存
M 21	横穴式石室	刀子	87.5	—	(11.0)	—	5.46	鉄	刃部一部欠損、茎部に目釘孔 1
244 - M 72	周溝	刀子	(46.5)	(46.5)	12.5	—	6.51	鉄	切先付近のみ残存
M 73	周溝	刀片	(29.5)	(29.5)	(13.5)	—	5.51	鉄	刃部ごくわずかに残存
M 74	造成土	刀片	(25.5)	(25.5)	22.0	—	8.66	鉄	刃部ごくわずかに残存

高尾北ヤシキ古墳 鉄鏃観察表

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)					重量 (g)	材質	分類	矢柄 口卷	矢柄 木質	茎 糸巻	備考
			全長	鏃身長	鏃身幅	頭部長	茎長							
235 - M 4	横穴式石室	鏃	(108.5)	74.5	29.0	×	34.0	22.48	鉄	平根・方頭		○		茎下端欠損
244 - M 75	周溝	鏃	(79.5)	(77.0)	(35.0)	×	(2.5)	15.02	鉄	平根・方頭				鏃身部のみ ほぼ残存
M 76	周溝	鏃	(37.5)	(37.5)	(26.5)	(7.5)	—	8.02	鉄	平根・腸扶柳葉				鏃身・頭部 の一部残存
M 77	周溝	鏃	(38.0)	—	—	(30.0)	(8.0)	4.37	鉄					茎部のみ

高尾北ヤシキ古墳 飾り鋳観察表

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	備考
			鋳頭長軸	鋳頭短軸	鋳脚長	鋳脚幅			
235 - M 15	横穴式石室	鋳	11.0	10.0	13.5	4.0	3.78	鉄	完形
M 16	横穴式石室	鋳	10.5	10.5	15.0	3.5	3.74	鉄	完形 鉄地金銅貼
M 17	横穴式石室	鋳	10.0	10.0	12.0	3.5	3.30	鉄	完形
M 18	横穴式石室	鋳	9.0	9.0	14.0	3.5	3.80	鉄	完形

高尾北ヤシキ古墳 その他金属製品観察表

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
235-M2	横穴式石室 陶棺内	柄頭	32.5	〈長径〉34.5 〈短径〉28.0	3.0	41.28	鉄	目釘1か所(長さ12mm、径1.5mm) 内面木質残存
M3	横穴式石室 陶棺内	鞆尻金具	44.0	〈長径〉31.0 〈短径〉19.5	1.0	23.53	鉄	布目痕(平織)残存 内面木質残存
M5	横穴式石室	両頭金具	32.5	6.5	4.0	2.02	鉄	木質残存 完形
M6	横穴式石室	両頭金具	31.0	6.5	4.0	2.23	鉄	完形 木質残存
M7	横穴式石室	両頭金具	29.0	4.5	4.5	2.17	鉄	完形 木質残存
M8	横穴式石室	両頭金具	28.5	5.0	4.5	1.40	鉄	
M9	横穴式石室	鞆	〈輪部〉51.0 〈上の部分〉 78.5	〈輪部〉44.0 〈上の部分〉 5.5	〈輪部〉5.0 〈上の部分〉 2.5	26.91	鉄	完形
M10	横穴式石室	鞆	79.5	17.0	4	35.91	鉄	M13と癒着
M11	横穴式石室 陶棺内	馬鈴	50.0	35.0	2.0	24.41	鉄	一部欠損 孔径6.0mm、丸径11mm
M12	横穴式石室	鉸具	60.5	54.5	5.0	37.62	鉄	完形
M13	横穴式石室	鑑	98.0	66.0	4.5	35.91	鉄	M10と癒着
M14	横穴式石室	雲珠か仕金具	〈留金具長〉 29.0 〈上側鉸脚長〉 (11.5) 〈下側鉸脚長〉 (12.5)	〈留金具幅〉 22.0 〈上側鉸脚径〉 10.0 〈下側鉸脚径〉 11.0	〈留金具厚〉 2.0 〈上側鉸脚幅〉 3.0 〈下側鉸脚幅〉 3.0	9.79	鉄	ほぼ完形(脚端部欠損) 鉄地金銅貼
M19	横穴式石室	飾り金具	(24.0)	(15.0)	1.0	2.12	鉄	復元直径28mm
M22	横穴式石室	雛形鉄器 (U字形鋤先形)	(37.5)	(44.0)	1.0	5.25	鉄	
M23	横穴式石室	雛形鉄器 (刀子形か農工具形)	(82.5)	16.5	1.0	9.32	鉄	
M24	横穴式石室	雛形鉄器 (有袋鉄斧形)	(28.0)	(19.0)	1.5	4.85	鉄	
M25	横穴式石室	雛形鉄器(摘鎌形)	(30.0)	(30.0)	1.3	5.50	鉄	
M26	横穴式石室	雛形鉄器 (刀子形かU字形鋤先形)	(32.0)	(17.0)	2.0	5.44	鉄	
M27	横穴式石室	不明鉄器	(64.0)	(52.0)	1.5	7.15	鉄	
M28	横穴式石室	不明鉄器	(25.0)	(6.0)	2.0	2.25	鉄	
M29	横穴式石室	不明鉄器	(20.0)	(9.5)	0.5	左0.49 右0.67	鉄	
M30	横穴式石室	棒状鉄製品	(27.5)	4.5	3.0	2.60	鉄	
236-M31	横穴式石室	釘	47.0	10.5	5.0	3.56	鉄	頭部A類
M32	横穴式石室	釘	(46.0)	11.5	4.5	3.94	鉄	頭部A類
M33	横穴式石室	釘	(41.5)	7.5	6.0	5.65	鉄	頭部A類
M34	横穴式石室	釘	(41.0)	8.5	4.0	3.00	鉄	頭部A類
M35	横穴式石室	釘	(41.0)	8.0	4.5	2.43	鉄	頭部A類
M36	横穴式石室	釘	(40.5)	11.5	5.0	4.58	鉄	頭部A類
M37	横穴式石室	釘	(40.0)	(9.0)	6.0	3.36	鉄	
M38	横穴式石室	釘	(39.5)	(4.5)	4.0	3.19	鉄	
M39	横穴式石室	釘	(39.5)	(8.0)	5.5	3.53	鉄	頭部A類

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M 40	横穴式石室	釘	(37.0)	11.0	6.0	5.82	鉄	頭部A類
M 41	横穴式石室	釘	(36.5)	10.0	4.5	3.17	鉄	頭部A類
M 42	横穴式石室	釘	(34.5)	10.5	4.5	3.30	鉄	
M 43	横穴式石室	釘	(34.5)	9.0	4.0	1.99	鉄	頭部A類
M 44	横穴式石室	釘	(32.5)	11.0	4.0	2.53	鉄	頭部A類
M 45	横穴式石室	釘	(32.0)	(10.0)	3.5	1.39	鉄	頭部A類
M 46	横穴式石室	釘	(30.5)	11.5	4.5	2.90	鉄	頭部A類
M 47	横穴式石室	釘	(29.5)	7.0	3.5	1.51	鉄	頭部A類
M 48	横穴式石室	釘	(29.0)	10.5	4.5	2.67	鉄	頭部A類
M 49	横穴式石室	釘	(28.5)	9.0	4.5	2.71	鉄	
M 50	横穴式石室	釘	(28.0)	10.5	5.5	3.82	鉄	頭部A類
M 51	横穴式石室	釘	(18.5)	10.0	5.0	2.14	鉄	頭部A類
M 52	横穴式石室	釘	(15.5)	10.0	4.0	1.21	鉄	
M 53	横穴式石室	釘	(49.5)	(7.0)	3.5	5.09	鉄	頭部A類、木目b類 木質残存
M 54	横穴式石室	釘	(33.0)	(4.0)	(2.5)	1.45	鉄	木目b類かc類 木質残存
M 55	横穴式石室	棒状鉄製品	(29.0)	3.0	3.5	1.58	鉄	釘か
M 56	横穴式石室	棒状鉄製品	(23.0)	(5.0)	(2.5)	1.22	鉄	釘か鉄鏃
M 57	横穴式石室	棒状鉄製品	(20.5)	(3.5)	(3.0)	0.62	鉄	釘か
M 58	横穴式石室	棒状鉄製品	(19.0)	(4.0)	(3.0)	1.06	鉄	釘か
M 59	横穴式石室	楔	59.0	13.5	3.0	19.33	鉄	完形 中世?
M 60	横穴式石室	尖頭状鉄器	35.0	11.5	4.5	5.26	鉄	完形
M 61	横穴式石室	留金具	〈外径〉 24.5 ~ 25.0 〈内径〉 18.5 ~ 19.0	7.0	3.0	4.66	鉄	ほぼ完形
M 62	横穴式石室	棒状鉄製品	(37.0)	(4.0)	(3.0)	2.50	鉄	釘か鉄鏃
M 63	横穴式石室	棒状鉄製品	(35.0)	(4.0)	(3.5)	2.02	鉄	釘か鉄鏃
M 64	横穴式石室	棒状鉄製品	(33.5)	(3.0)	2.5	1.26	鉄	釘か鉄鏃
M 65	横穴式石室	銅銭	24.5		1.1	2.10	銅	熙寧元寶 1068年(北宋)
M 66	横穴式石室	銅銭	24.7		1.2	3.17	銅	熙寧元寶 1068年(北宋)
M 67	横穴式石室	銅銭	24.3		1.2	2.48	銅	景定元寶、背面に「二」 1260年(南宋)
M 68	横穴式石室	銅銭	25.2		1.6	3.26	銅	永樂通寶 1408年(明)
241 - M 69	竪穴式石室	耳環(銀環)	〈外径〉 30.2 ~ 32.8 〈内径〉 14.9 ~ 16.7	〈断面径〉 8.3	〈切れ目幅〉 2.7	28.52	銅	ほぼ完形 銅地銀貼か 緑青付着
M 70	竪穴式石室	耳環(銀環)	〈外径〉 30.2 ~ 33.1 〈内径〉 15.3 ~ 17.2	〈断面径〉 8.0 ~ 8.4	〈切れ目幅〉 2.5	30.01	銅	完形 銅地銀貼か 緑青付着

掲載 番号	出土遺構等	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
241 - M 71	竪穴式石室	紡錘車	〈鉄製紡茎〉 56.5 〈紡輪〉 35.2 ~ 35.8	〈鉄製紡茎〉 4.5	〈紡輪〉 18.5	70.80	〈紡茎〉 鉄 〈紡輪〉 滑石	完形 孔径 6.4 ~ 6.8 mm
244 - M 78	周溝	錐形鉄器 (有袋鉄斧形)	36.5	34.5	1.0	11.14	鉄	
M 79	造成土	錐形鉄器 (有袋鉄斧形)	(38.0)	(23.0)	2.0	6.73	鉄	折り曲げ部分の高さ 12.5mm
M 80	周溝	錐形鉄器 (有袋鉄斧形)	(38.0)	(17.5)	(1.0)	3.37	鉄	
M 81	造成土	釘	62.5	8.0	4.0	3.64	鉄	完形、木質残存 頭部A類、木目a類
M 82	周溝	釘	(39.5)	(9.0)	5.0	2.76	鉄	頭部A類
M 83	周溝	釘	(38.0)	7.0	4.0	3.92	鉄	頭部A類
M 84	周溝	釘	(37.0)	6.5	4.0	2.07	鉄	頭部A類
M 85	周溝	釘	(27.0)	(7.0)	4.5	2.27	鉄	頭部A類
M 86	周溝	釘	(20.5)	(6.0)	5.5	1.63	鉄	
M 87	周溝	釘	(18.5)	(7.5)	4.5	1.11	鉄	頭部A類
M 88	周溝	釘	(15.0)	10.5	5.0	1.32	鉄	頭部A類
M 89	周溝	釘	(43.0)	8.0	5.0	4.63	鉄	頭部A類
M 90	表土	釘	(39.0)	4.0	3.0	3.01	鉄	木質残存 木目b類か、c類
M 91	周溝	釘	(29.5)	4.0	3.0	1.65	鉄	
M 92	造成土	釘	(28.5)	4.0	4.0	2.16	鉄	木質残存、木目c類 M 95 と使用か
M 93	造成土	棒状鉄製品	(27.0)	5.0	4.0	2.14	鉄	釘か
M 94	周溝	釘	(15.5)	4.0	3.0	0.63	鉄	
M 95	表土	釘	(14.5)	5.0	4.0	2.28	鉄	木質残存 M 92 と使用か
M 96	造成土	棒状鉄製品	(30.0)	6.0	2.5	1.40	鉄	鉄鏃の頭部か
M 97	周溝	棒状鉄製品	(78.0)	9.0	2.0	7.56	鉄	
M 98	表土	銃弾 (鉛玉)	11.3	11.1	11.1	7.18	鉛	完形
M 99	包含層	銅銭	24.2		1.3	1.77	銅	元豊通寶 1078年 (北宋)
M 100	表土	銅銭	24.5		1.2	8.35	銅	寛永通寶 M 101・M 102 と癒着 1期 (1636 ~ 1659年)
M 101	表土	銅銭	24.4		1.1	8.35	銅	M 100・M 102 と癒着 完形。銭種不明
M 102	表土	銅銭	25.2		1.2	8.35	銅	寛永通寶 M 100・M 101 と癒着 新寛永 (2・3期)
M 103	表土	銅銭	(18.5)		1.3	1.36	銅	寛永通寶、背面に「文」 2期 (1668年 ~ 1683年)
M 104	表土	銅銭	24.3		1.2	2.48	銅	寛永通寶 3期 (1697 ~ 1747, 1767 ~ 1781年)
M 105	表土	銅銭	24.1		1.9	3.69	鉄	寛永通寶 一文銭 (1739年 ~)

高尾北ヤシキ遺跡 新旧遺構名対照表

掲載遺構名	旧遺構名
竪穴住居 1	No. 20
竪穴住居 2	No. 23
竪穴住居 3	No. 55
竪穴住居 4	No. 34
竪穴住居 5	No. 25
竪穴住居 6	No. 67
竪穴住居 7	No. 63
竪穴住居 8	No. 77 古
竪穴住居 9	No. 77 新
竪穴住居 10	No. 76
竪穴住居 11	No. 133
竪穴住居 12	No. 129
竪穴住居 13	No. 134
竪穴住居 14	No. 121 古
竪穴住居 15	No. 121 新
竪穴住居 16	No. 122
竪穴住居 17	No. 123
竪穴住居 18	No. 130 古
竪穴住居 19	No. 130 新
竪穴住居 20	No. 144
竪穴住居 21	No. 139
掘立柱建物 1	No. 35
掘立柱建物 2	No. 56・116、P 44・50・69・185・215・308・311・320
掘立柱建物 3	No. 52、P 47・56・73・104・187・210・221・317
掘立柱建物 4	No. 176、P 48・102・183・206・272・362
掘立柱建物 5	No. 113、P 210・218・248・263・267・302・309・310
掘立柱建物 6	No. 170、P 230・262・281
掘立柱建物 7	No. 173、P 231・238・251・264
掘立柱建物 8	No. 174、P 230・252・265
掘立柱建物 9	No. 161、P 16・22・157・177・182・184・660
掘立柱建物 10	No. 106、P 10・20・26・182・184・467・664
掘立柱建物 11	No. 154、P 415・417・421・423・430・438・443・450・462
掘立柱建物 12	No. 155、P 416・422・424・433・439・464・465・469・470・575・578・666
掘立柱建物 13	No. 167、P 27・44・64・65・107
掘立柱建物 14	No. 81 古、P 22・42・47・52・58
掘立柱建物 15	No. 81 新、P 23・49・53・60
掘立柱建物 16	No. 82、P 19・41・57・39
掘立柱建物 17	No. 124、P 327・349・370・512・522・529
掘立柱建物 18	No. 124、P 328・350・369・511・521・530
掘立柱建物 19	No. 109、P 322・324・335・345・346
掘立柱建物 20	No. 109、P 323・325・335・337・345・347・385
掘立柱建物 21	No. 109、P 325・334・336・337・347・363

掲載遺構名	旧遺構名
柱穴列 1	No. 41
柱穴列 2	P 37・43・44
柱穴列 3	No. 183
柱穴列 4	No. 184
柱穴列 5	No. 185
柱穴列 6	No. 186、P 7・10
柱穴列 7	No. 181、P 80・83・122
柱穴列 8	No. 180、P 5・9・29・167
柱穴列 9	No. 53、P 11・20・35・132
柱穴列 10	No. 179、P 21・78・127
柱穴列 11	No. 178、P 49・53・92・94
柱穴列 12	No. 115、P 70・224・367
柱穴列 13	No. 117、P 38・98・315
柱穴列 14	No. 146、P 36・233・256
柱穴列 15	No. 177、P 55・68・106・110
柱穴列 16	No. 175、P 34・188・386
柱穴列 17	No. 172、P 61・192
柱穴列 18	No. 118、P 75・202
柱穴列 19	No. 54、P 63・199・208・242
柱穴列 20	No. 150、P 249・254・294
柱穴列 21	No. 151、P 286・290・291・306
柱穴列 22	No. 163、P 156・170・173、No. 28 - P 8
柱穴列 23	No. 71、P 159・176
柱穴列 24	No. 162、P 149・150・183
柱穴列 25	No. 159、P 9・11・27
柱穴列 26	No. 108、P 428・461・576
柱穴列 27	No. 157、P 35・442・453
柱穴列 28	No. 164、P 78・84・90・651・653
柱穴列 29	No. 79・164、P 82・92・584・649
柱穴列 30	No. 78、P 81・96・583・585
柱穴列 31	No. 91 古、P 68・606
柱穴列 32	No. 91 新、P 67・103・605
柱穴列 33	No. 80・1165、P 24・106
柱穴列 34	No. 80・1、P 21・40・48
柱穴列 35	No. 168、P 71・72・594・596・597・601
柱穴列 36	No. 147、P 581・589・590・645・647
柱穴列 37	No. 147、P 587・607・645
柱穴列 38	No. 148 古、P 534・540・541・542
柱穴列 39	No. 148 新、P 533・535・537・538・539
柱穴列 40	No. 149、P 514・516・528
段状遺構 1	No. 18
段状遺構 2	No. 21
段状遺構 3	No. 19
段状遺構 4	No. 31
段状遺構 5	No. 30

掲載遺構名	旧遺構名
段状遺構 6	No. 147
段状遺構 7	No. 40・104
段状遺構 8	No. 12
段状遺構 9	No. 11
段状遺構 10	No. 29
段状遺構 11	No. 36
段状遺構 12	No. 51
段状遺構 13	No. 50
段状遺構 14	No. 49
段状遺構 15	No. 48
段状遺構 16	No. 64
段状遺構 17	No. 87
段状遺構 18	No. 93
段状遺構 19	No. 75
段状遺構 20	No. 88
段状遺構 21	No. 95
段状遺構 22	No. 94
段状遺構 23	No. 73
段状遺構 24	No. 72
段状遺構 25	No. 141
段状遺構 26	No. 128
段状遺構 27	No. 4
段状遺構 28	No. 3
段状遺構 29	No. 22
段状遺構 30	No. 62
段状遺構 31	No. 28
段状遺構 31 - P 1	No. 44
段状遺構 32	No. 43
段状遺構 33	No. 98
段状遺構 34	No. 138
段状遺構 35	No. 132
段状遺構 36	No. 153
段状遺構 37	No. 8
土坑 1	No. 2
土坑 2	No. 13
土坑 3	No. 32 - P 1
土坑 4	No. 32 - P 2
土坑 5	No. 68
土坑 6	No. 125
土坑 7	No. 1
土坑 8	No. 38
土坑 9	No. 33
土坑 10	No. 112
土坑 11	No. 126
土坑 12	No. 127
土坑 13	No. 101
土坑 14	No. 100
土坑 15	No. 111
土坑 16	No. 103
土坑 17	No. 102
土坑 18	No. 119

掲載遺構名	旧遺構名
土坑 19	No. 142
土坑 20	No. 92
土坑 21	No. 97
土坑 22	No. 90
土坑 23	No. 83
土坑 24	No. ①
土坑 25	No. ③
土坑 26	No. ②
墓 1	No. 27
墓 2	No. 84
墓 3	No. 131
溝 1	No. 89
溝 2	No. 24
溝 3	No. 137
溝 4	No. 136
溝 5	No. 135
溝 6	No. 143
集石 1	No. 28 集石
集石 2	No. 37
集石 3	No. 29 集石
集石 4	No. 45
土器溜まり 1	No. 5
整地面 1	—
整地面 2	—
整地面 3	—
整地面 4	—
被熱面 1	No. 74
炉 1	No. 14
包含層 1 (2 a・b)	No. 26 — 3 A 区南半
包含層 1 (2 c)	No. 26 — 3 B 区南半
包含層 1 (2 d・e)	No. 26 — 3 C 区南半
包含層 1 (3 a・b)	No. 26 — 3 A 区北半
包含層 1 (3 c)	No. 26 — 3 B 区北半
包含層 1 (3 d・e)	No. 26 — 3 C 区北半
P 1	3 A 区 - P 4
P 2	3 A 区 - P 90
P 3	3 A 区 - P 147
P 4	3 B 区 - P 1
P 5	3 A 区 - P 131
P 6	3 A 区 - P 159
P 7	2 C 区 - P 6
P 8	4 A 区 - P 191
P 9	3 A 区 - P 19
P 10	3 A 区 - P 103
P 11	4 B 区 - P 452
P 12	3 C 区 - P 4
P 13	3 C 区 - P 37

高尾北ヤシキ古墳 新旧遺構名対照表

掲載遺構名	旧遺構名
横穴式石室	—
竪穴式石室	No. 9

掲載遺構名	旧遺構名
土坑墓 1	No. 10
土坑墓 2	No. 42



1 調査地遠景（南西上空から）



2 調査地遠景（東上空から）



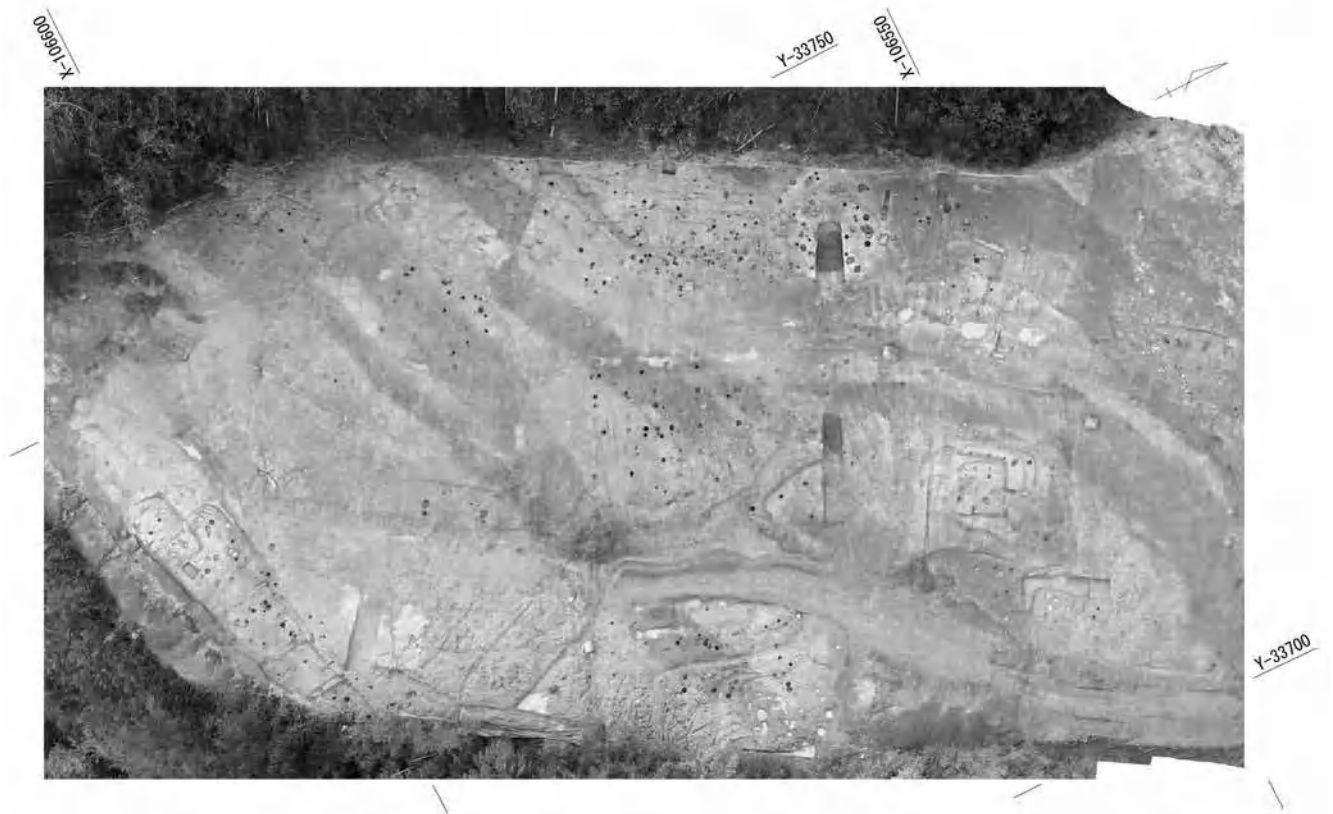
1 調査地遠景（南東上空から）



2 2区全景、3・4区調査前（東上空から）



1 3区南半・4区全景（北東上空から）



2 3区南半・4区オルソ画像（1/500）



1 3区南半・4区北半全景（南東上空から）



2 4区全景（南西上空から）



1 掘立柱建物 1、
柱穴列 1、
竪穴住居 5
(北東から)



2 段状遺構 1～3、竪穴住居 1 (東から)



1 段状遺構 1～3、竪穴住居 1 (南から)



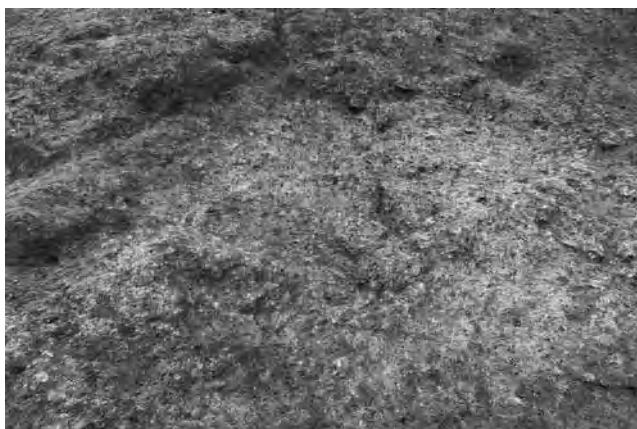
2 段状遺構 4・10 (南から)



1 段状遺構 5 (南から)



2 段状遺構 7 土層断面 (南西から)



3 土坑 1 (東から)



4 土坑 2 遺物出土状況 (東から)



5 土坑 3 (南西から)



6 土坑 4 (北東から)



7 墓 1 (南から)



8 土器溜まり 1 土層断面 (北東から)



1 豎穴住居 1 (東から)



2 豎穴住居 1 カマド周辺検出状況 (東から)



3 豎穴住居 1 カマド南側遺物出土状況 (南から)



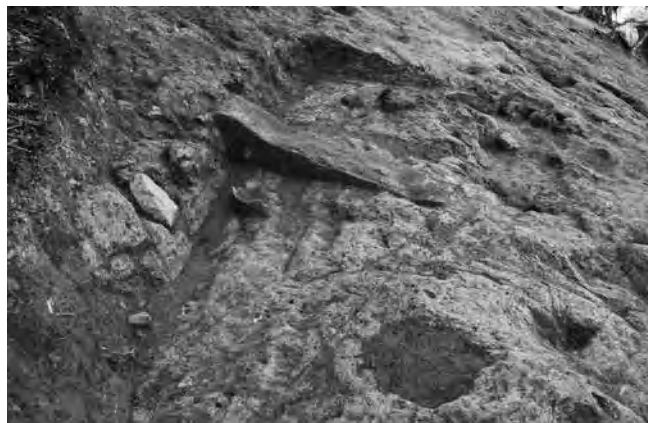
4 豎穴住居 1 カマド北側の溝 (東から)



5 豎穴住居 1 煙道完掘状況 (東から)



1 竪穴住居 2 (北東から)



2 竪穴住居 2 土層断面、床面検出状況 (南から)



3 竪穴住居 2 遺物 [108] 出土状況 (東から)



4 竪穴住居 2 遺物 [110] 出土状況 (東から)



5 竪穴住居 2-P1 (南東から)



1 竪穴住居4
遺物出土状況
(南西から)



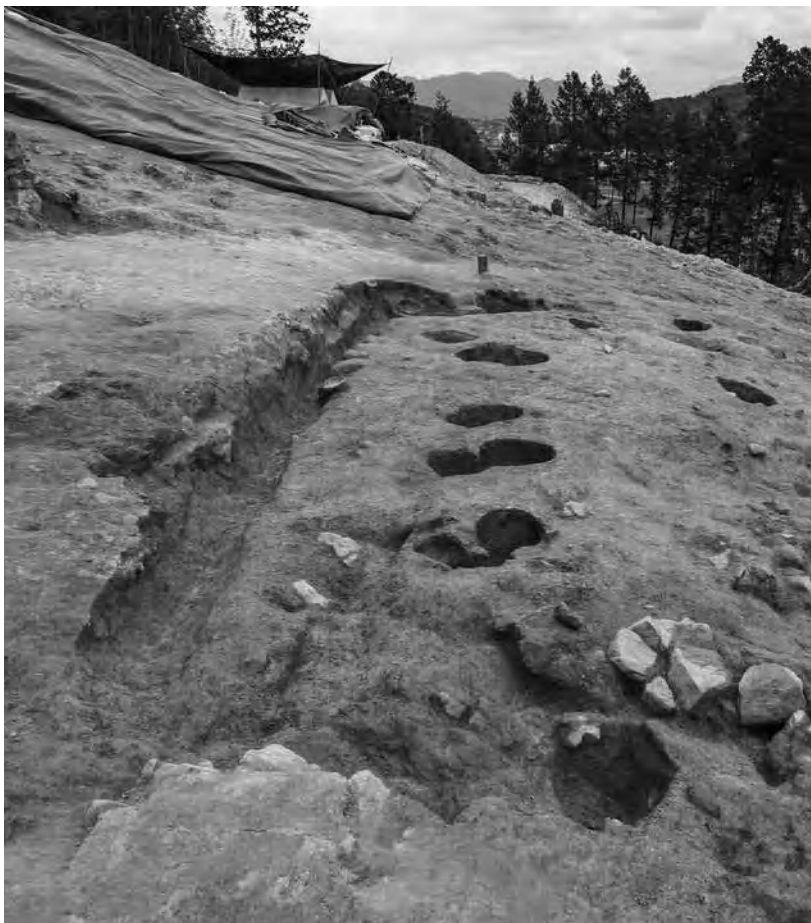
2 竪穴住居4
遺物出土状況
(東から)



3 竪穴住居4 遺物 [111] 出土状況 (東から)



4 竪穴住居4 カマド・煙道完掘状況 (南東から)



1 竪穴住居 5 (南西から)



2 竪穴住居 5 遺物 [120・124]
出土状況 (東から)



3 竪穴住居 5 遺物 [121]
出土状況 (東から)



4 竪穴住居 6・7、段状遺構 12～16、土坑 5 (南東から)



1 竪穴住居6・7、段状遺構16（南西から）



2 竪穴住居6・7土層断面（南から）



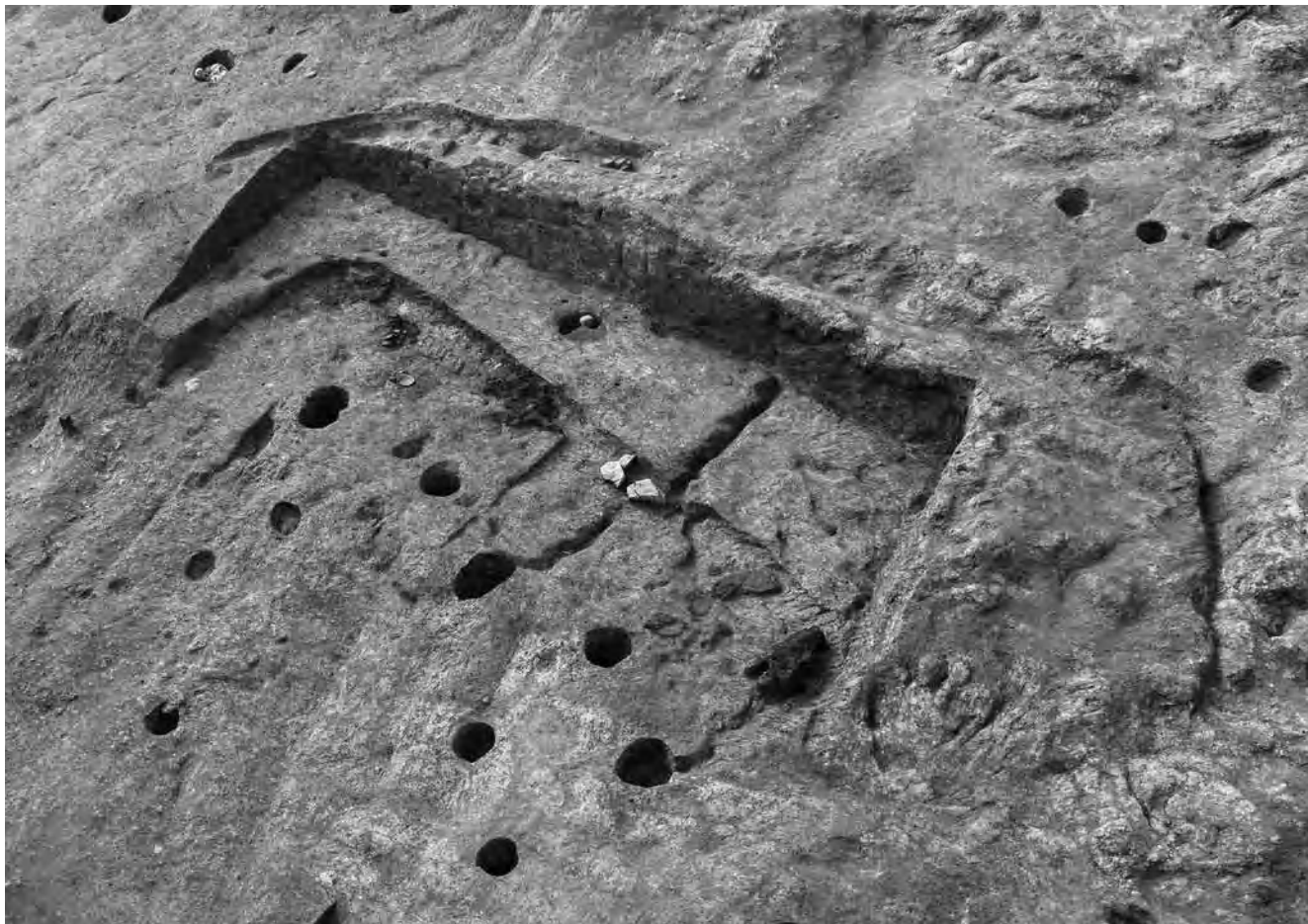
3 竪穴住居7遺物[127]出土状況（北東から）



4 竪穴住居7カマド煙道土層断面（南西から）



5 竪穴住居7カマド煙道完掘状況（南西から）



1 竪穴住居 8～10、段状遺構 18・19 (東から)



2 竪穴住居 8～10、段状遺構 18・19 (西から)



1 竪穴住居9炭化材等検出状況（南から）



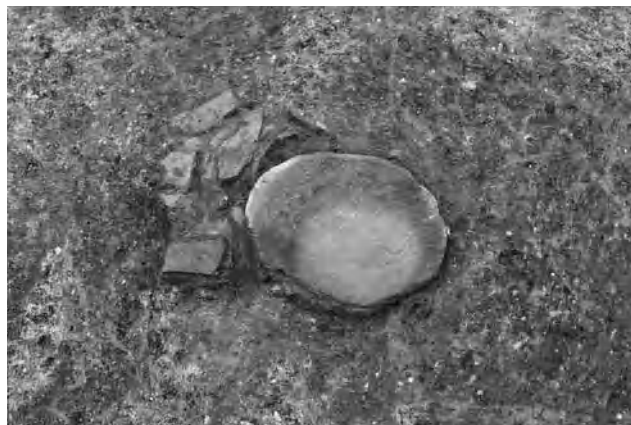
2 竪穴住居9・10土層断面（南西から）



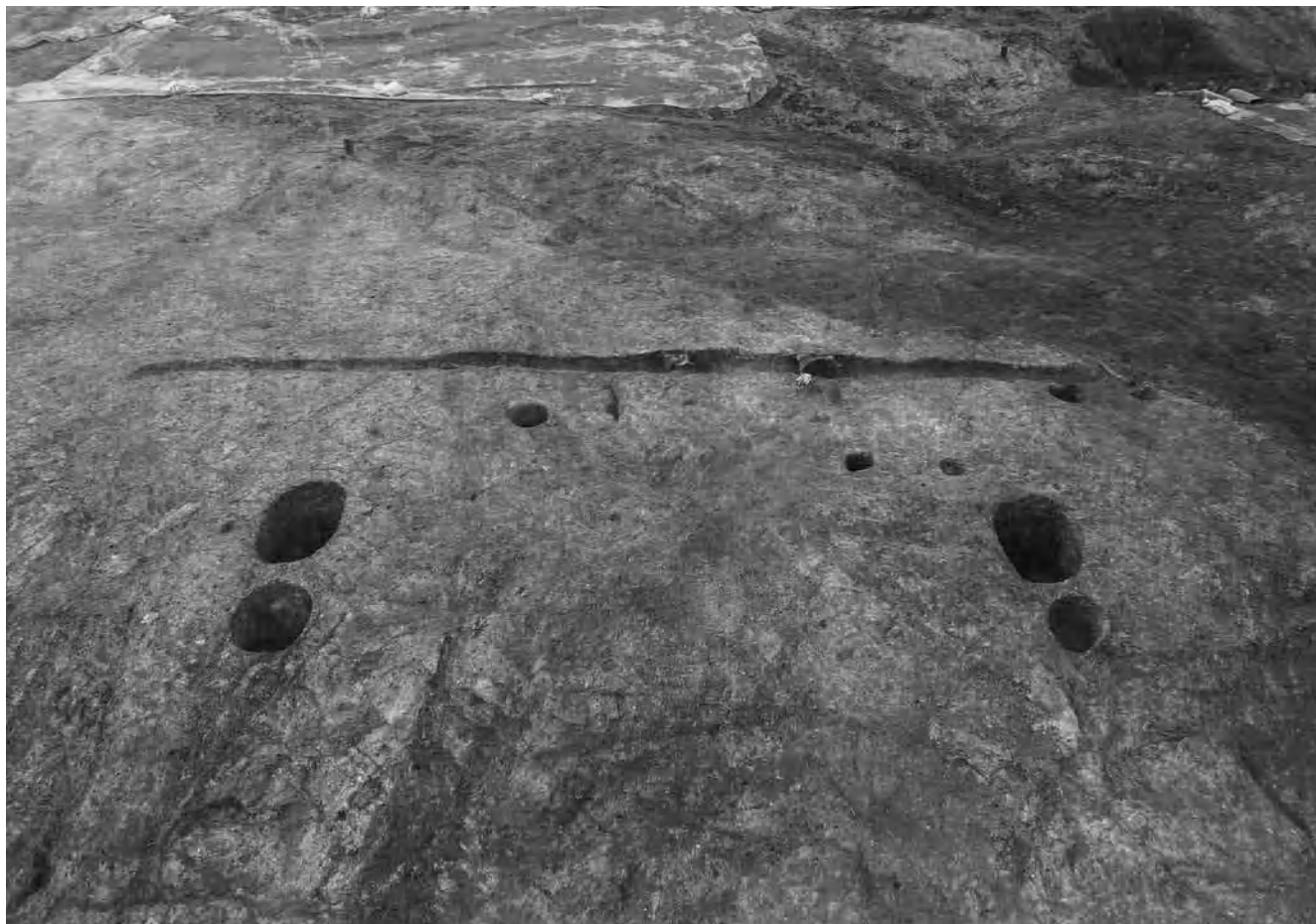
3 竪穴住居9北端炭化材検出状況（南西から）



4 竪穴住居9遺物 [135・143] 出土状況（南から）



5 竪穴住居9遺物 [138・140] 出土状況（東から）



1 豎穴住居 11 (南東から)



2 豎穴住居 11 - P 1・3 土層断面 (南西から)



3 豎穴住居 11 - P 2・4 土層断面 (南西から)



4 豎穴住居 11 - P 2・4 完掘 (南西から)



5 豎穴住居 11 壁体溝内遺物出土状況 (東から)



1 豎穴住居 12～21（南西上空から）



2 豎穴住居 12～21（北西上空から）



1 竪穴住居 12 (南西から)



2 竪穴住居 12 遺物出土状況 (南東から)



3 竪穴住居 12 - P 1 土層断面 (西から)



4 竪穴住居 12 カマド (南西から)



5 竪穴住居 12 カマド袖石 (西から)



1 竪穴住居 13～16 (南東から)



2 竪穴住居 15 遺物出土状況① (南東から)



3 竪穴住居 15 遺物出土状況② (南から)



4 竪穴住居 15 遺物 [187] 出土状況 (南から)



5 竪穴住居 15 - P 4 被熱石出土状況 (南東から)



1 竪穴住居 16 遺物出土状況 (南東から)



2 竪穴住居 16 紡錘車 S 33 出土状況 (西から)



3 竪穴住居 16 北東側遺物出土状況 (南から)



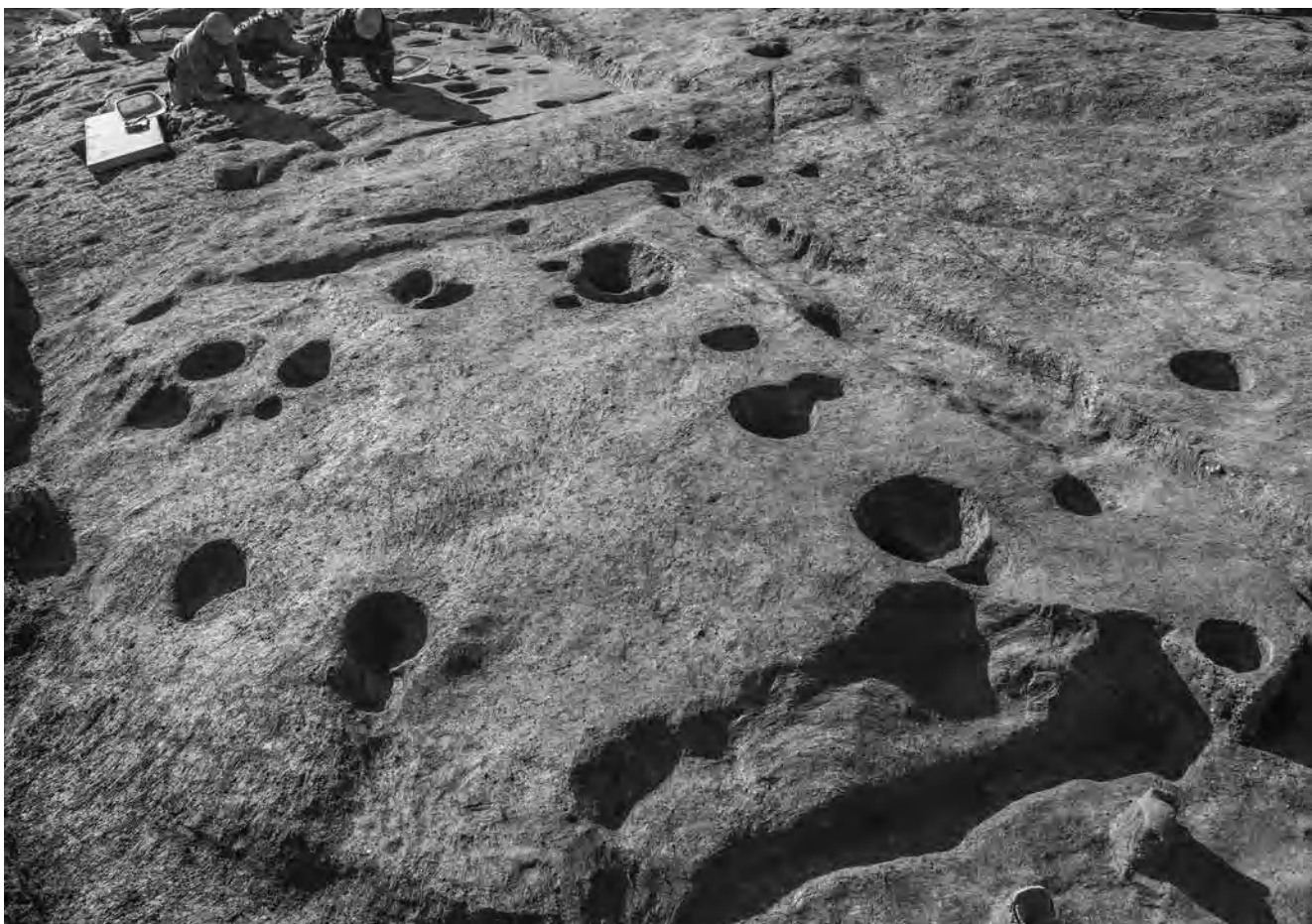
4 竪穴住居 16 - P 2 周辺遺物出土状況 (南から)



5 竪穴住居 16 遺物 [193] 出土状況 (南から)



1 竪穴住居 17 ~ 20 (東から)



2 竪穴住居 17 (東から)

1 竪穴住居 17
壁体溝
遺物出土状況
(南西から)



2 竪穴住居 19
土層断面、
遺物出土状況
(南西から)



3 竪穴住居 19
遺物出土状況
(南東から)





1 竪穴住居 19 遺物 [228] 出土状況 (南東から)



2 竪穴住居 19 カマド周辺遺物出土状況 (南から)



3 竪穴住居 19 遺物 [233 ~ 235] 出土状況 (南東から)



4 竪穴住居 19 遺物 [233] 出土状況 (南から)



5 竪穴住居 19 カマド・煙道検出状況 (南から)



6 竪穴住居 19 カマド・煙道完掘状況 (南から)



7 竪穴住居 18 ~ 21 (南西から)



8 竪穴住居 20 (南東から)



1 豎穴住居 21、段状遺構 26 (南西から)



2 豎穴住居 21 床面検出状況 (北西から)



3 豎穴住居 21 遺物出土状況 (東から)



4 豎穴住居 21 遺物出土状況 (北東から)



1 柱穴列 2、
段状遺構 24
(北東から)



2 段状遺構 9
(北から)



3 段状遺構 10
(南から)

1 段状遺構 11
(北東から)



2 段状遺構 12～15
(北東から)



3 段状遺構 12・13
(東から)





1 段状遺構 18
(北東から)



2 段状遺構 19、
竪穴住居 8～10
(西から)



3 段状遺構 19
遺物出土状況
(西から)

1 段状遺構 24
(北から)



2 段状遺構 21 ~ 23
土層断面
(北から)



3 段状遺構 26
(北東から)





1 段状遺構 27 (東から)



2 段状遺構 27 遺物出土状況 (北から)



1 土坑5遺物出土状況（東から）



2 土坑5土層断面（南から）



3 土坑5遺物出土状況（北西から）



4 土坑5遺物 [306] 出土状況（北から）



5 土坑6（南から）



1 整地面 1～4 (北東上空から)



2 整地面 1～4 (南東上空から)



1 整地面 1～4 (南西上空から)



2 整地面 1・2 (南東上空から)



1 整地面 1 (南東から)



2 整地面 1、掘立柱建物 2～8、柱穴列 12～17 (北東から)



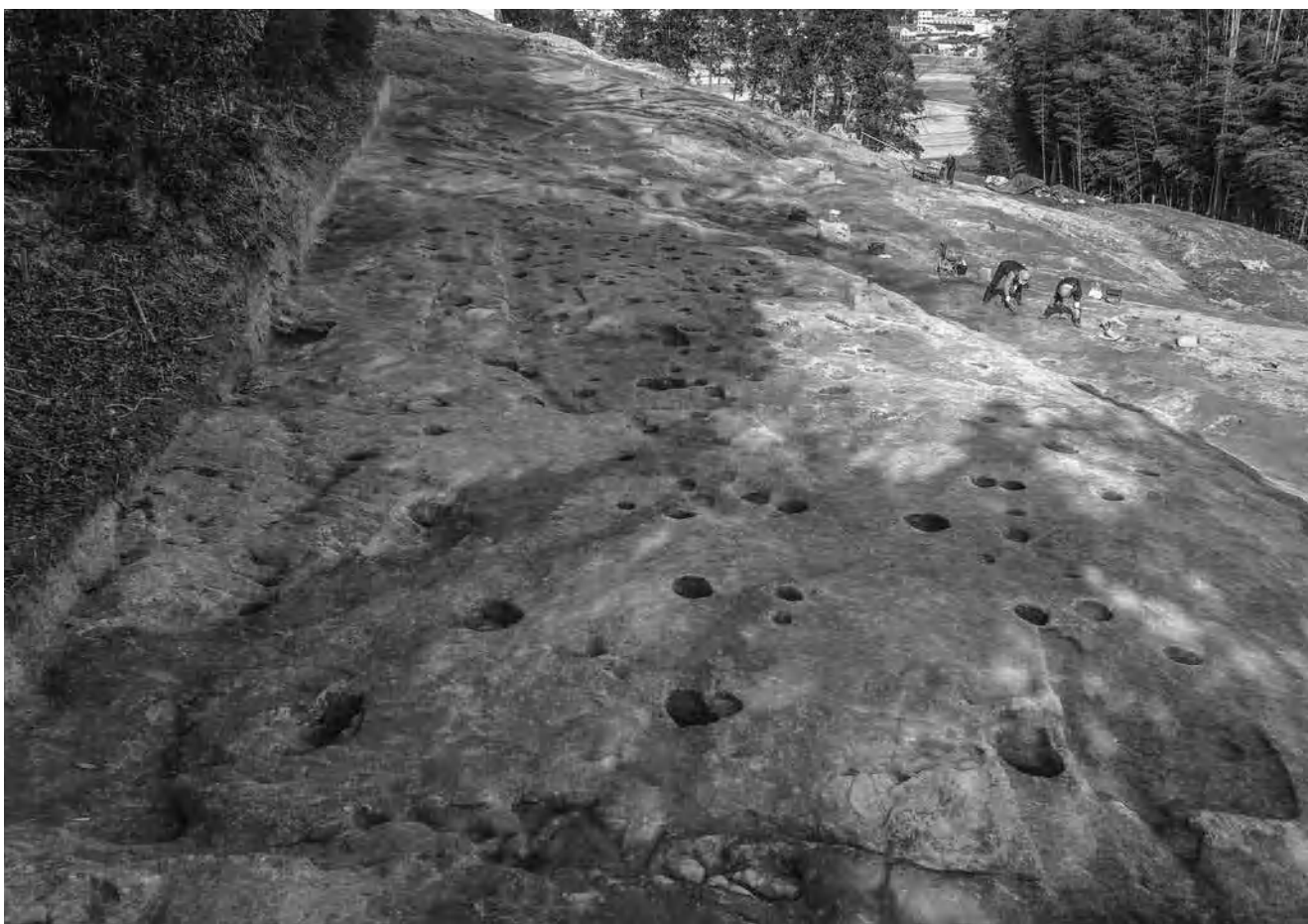
1 整地面 1 遺構検出状況（南西から）



2 整地面 1、掘立柱建物 2～4、柱穴列 11～13（南西から）



1 整地面 1、掘立柱建物 2～4、柱穴列 7・11～13 (北から)



2 整地面 1、掘立柱建物 5～8、柱穴列 14 (北西から)



1 整地面 2 (南東から)



2 整地面 2、掘立柱建物 9～12、柱穴列 25～27 (北東から)



1 整地面 2、掘立柱建物 9～12、柱穴列 25・26 (北から)



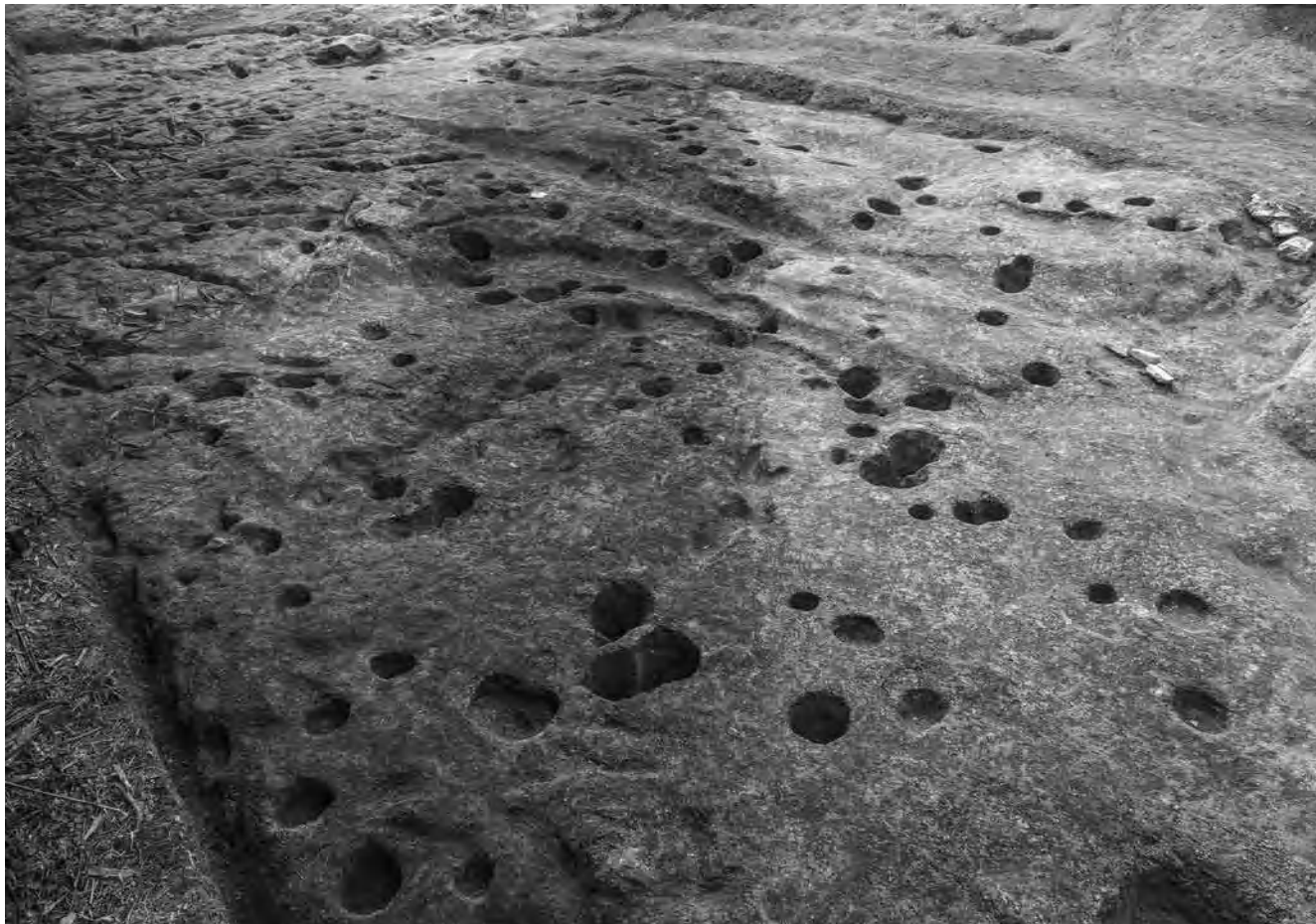
2 整地面 2、掘立柱建物 9～12、溝 3～5 (南西から)



1 整地面 3 (北から)



2 整地面 3、掘立柱建物 13～16、柱穴列 28～35 (北東から)



1 整地面 3、掘立柱建物 13～16、柱穴列 30～35 (東から)



2 整地面 3、掘立柱建物 13～16、柱穴列 31～34 (南から)



1 整地面 4 (南東から)



2 整地面 4、掘立柱建物 17・18、柱穴列 38～40 (東から)



1 整地面 4、掘立柱建物 17・18、柱穴列 40 (南東から)



2 整地面 4、掘立柱建物 17・18、柱穴列 40 (北東から)

1 整地面 4、
掘立柱建物 19～21
(南東から)



2 整地面 3、
溝 6 (北から)



3 掘立柱建物 2 - P 2 石出土状況 (北から)



4 掘立柱建物 12 - P 12 石出土状況 (南から)



1 段状遺構 28 (南から)



2 段状遺構 29 (東から)



3 段状遺構 31 土層断面 (北東から)



4 段状遺構 31 - 集石 1・2 検出状況 (北東から)



1 段状遺構 31 (北東から)



2 段状遺構 31 (北から)



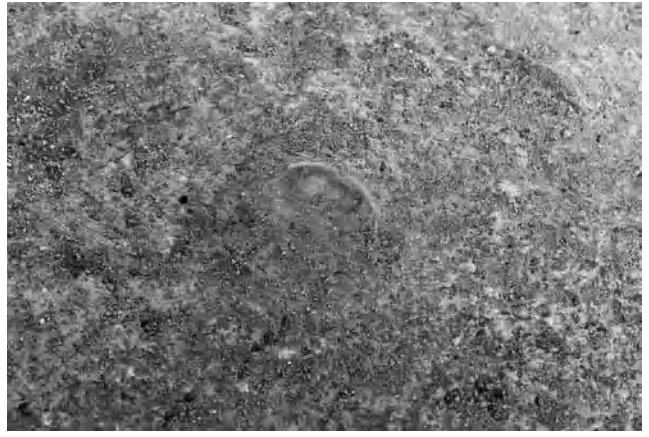
1 段状遺構 31 北半 (南から)



2 段状遺構 31、柱穴列 22・23 (南から)



1 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況 (北東から)



2 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況① (南から)



3 段状遺構 31 - P 1 鏡像上面の土層断面 (北から)



4 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況② (南から)



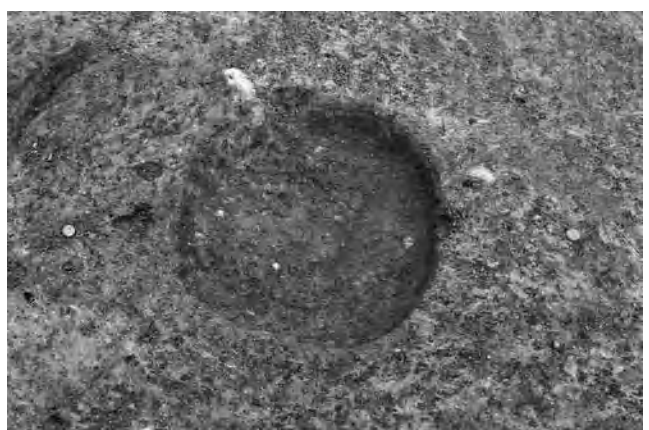
5 段状遺構 31 - P 1 鏡像出土状況③ (南から)



6 段状遺構 31 - P 1 土層断面① (東から)



7 段状遺構 31 - P 1 土層断面② (東から)



8 段状遺構 31 - P 1 完掘状況 (南から)



1 段状遺構 20・32
(北東から)



2 段状遺構 33
(南から)



3 段状遺構 35
(北東から)



1 土坑7 (北東から)



2 土坑8 (南東から)



3 土坑9 土層断面 (南西から)



4 土坑9 完掘状況 (東から)



5 土坑10・11 (南から)



6 土坑12 (東から)



7 土坑14 (南から)



8 土坑15 (東から)



1 土坑 16 (東から)



2 土坑 17 (南東から)



3 土坑 19 (南西から)



4 土坑 20 (南東から)



5 土坑 23 土層断面 (南から)



6 溝 1 (西から)



7 溝 2 (東から)



8 溝 3~5 土層断面 (東から)



1 段状遺構 31 - 集石 1 (東から)



2 集石 2 (南から)



3 集石 3 (北東から)



4 集石 4 (北西から)



5 包含層 1 西側 土層断面 (北東から)



1 包含層 1 中央西半
土層断面
(東から)



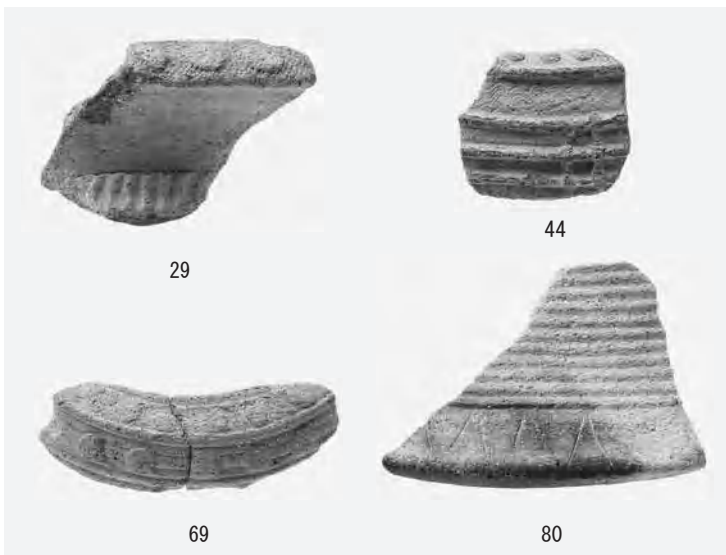
2 包含層 1 中央東半
土層断面
(北東から)



3 包含層 1 東側
土層断面
(北から)



1 段状遺構4出土土器



2 土坑2出土土器



3 土器溜まり1出土土器



4 P3出土土器



5 竪穴住居1出土土器



6 竪穴住居2出土土器



7 竪穴住居5出土土器



111



112



113



116

1 竪穴住居4出土土器



127



138



143



130



151



159

2 竪穴住居7出土土器

3 竪穴住居9・10出土土器



1 竪穴住居 10 出土土器

2 竪穴住居 12 出土土器



3 竪穴住居 15・16 出土土器



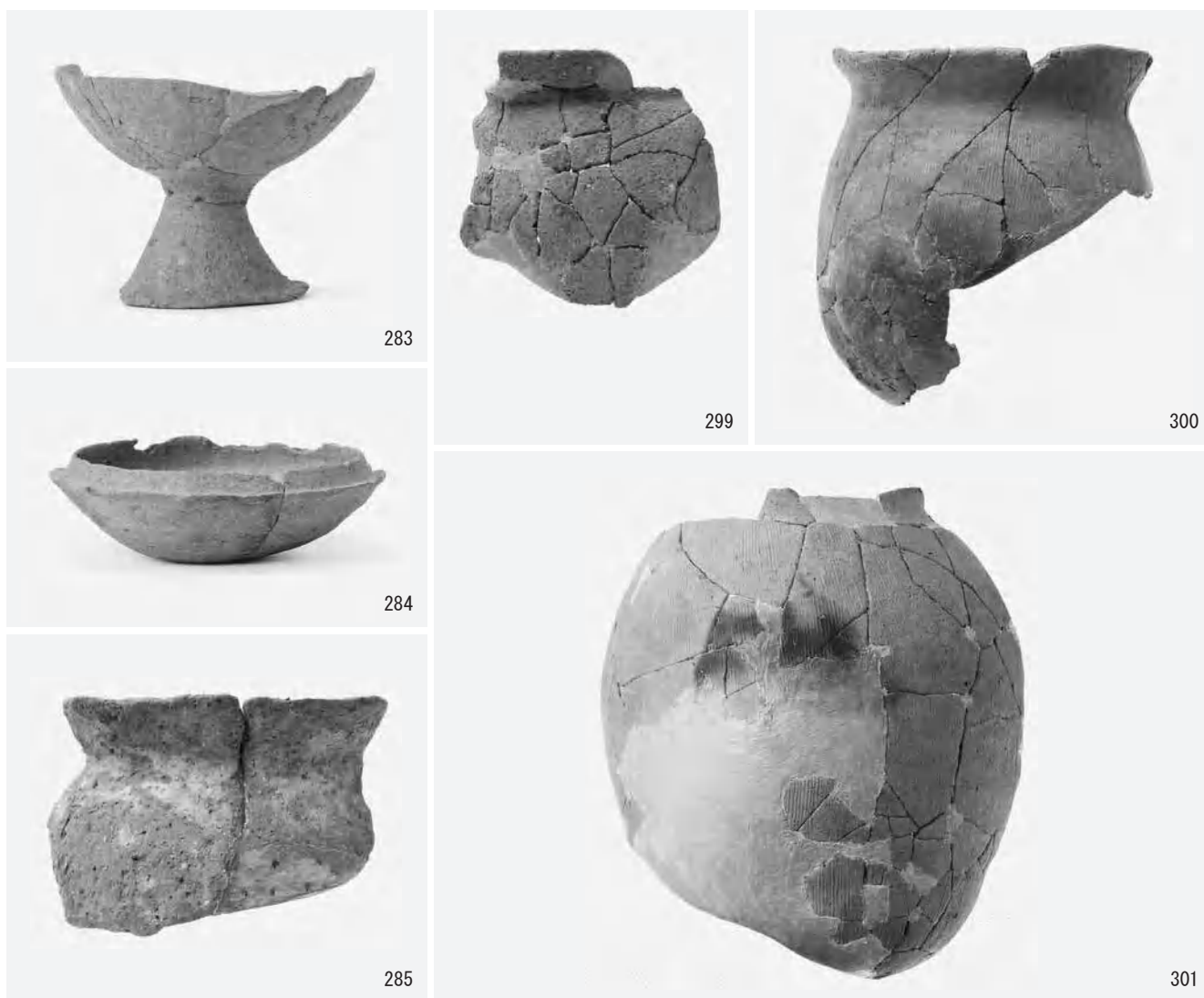
4 竪穴住居 17 出土土器

5 竪穴住居 19 出土土器



1 竪穴住居 21 出土土器

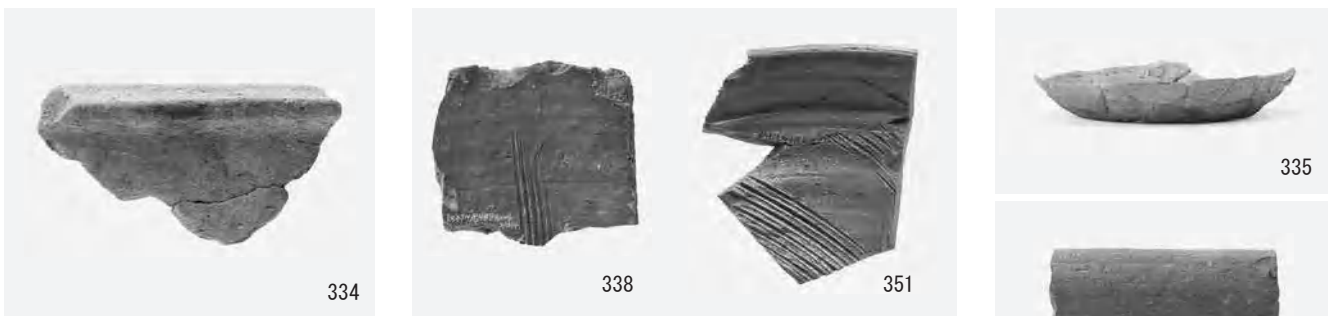
2 段状遺構 8・10 出土土器



3 段状遺構 19・20・27 出土土器

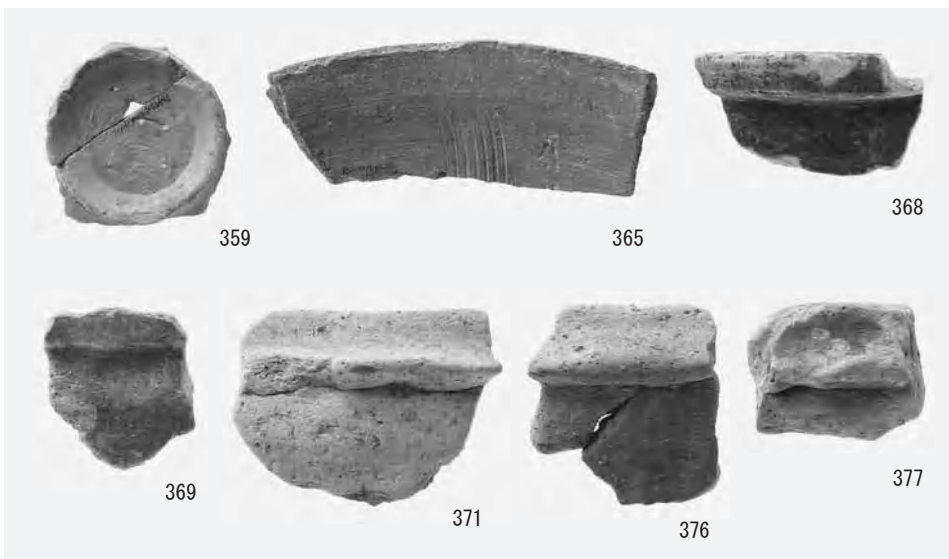


1 土坑5出土土器

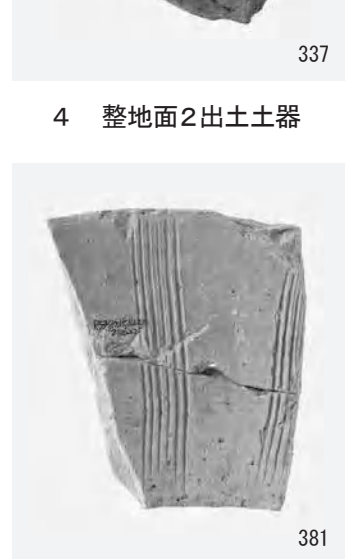


2 柱穴列12出土土器

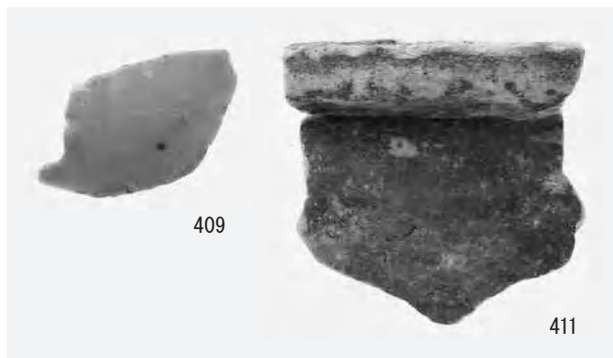
3 整地面2、掘立柱建物17・18出土土器



5 段状遺構31出土土器



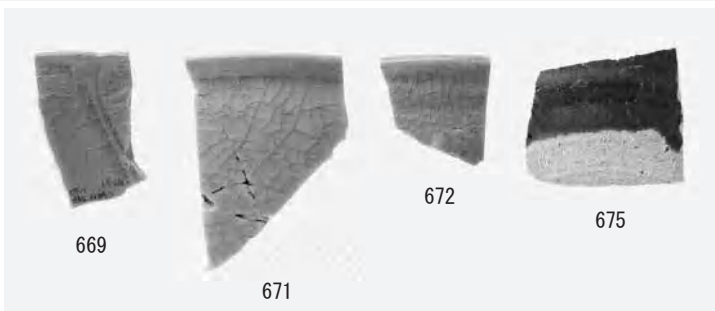
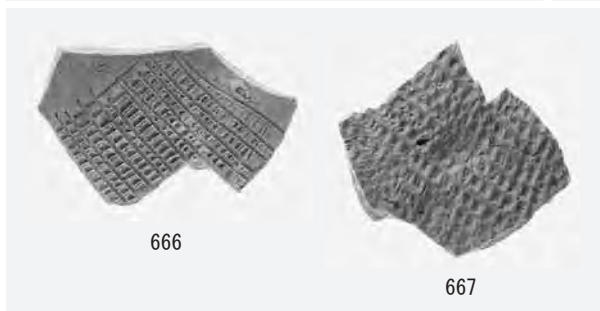
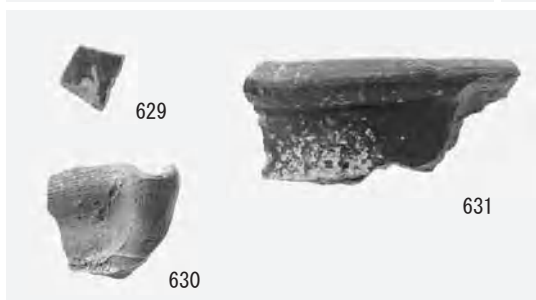
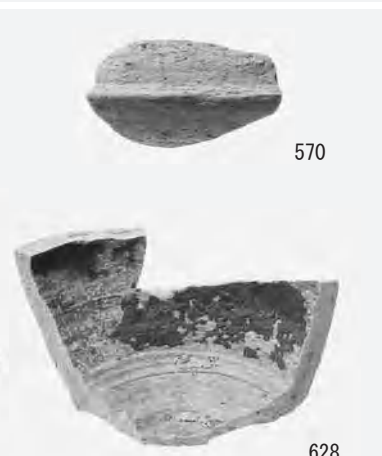
6 段状遺構31一集石1出土土器



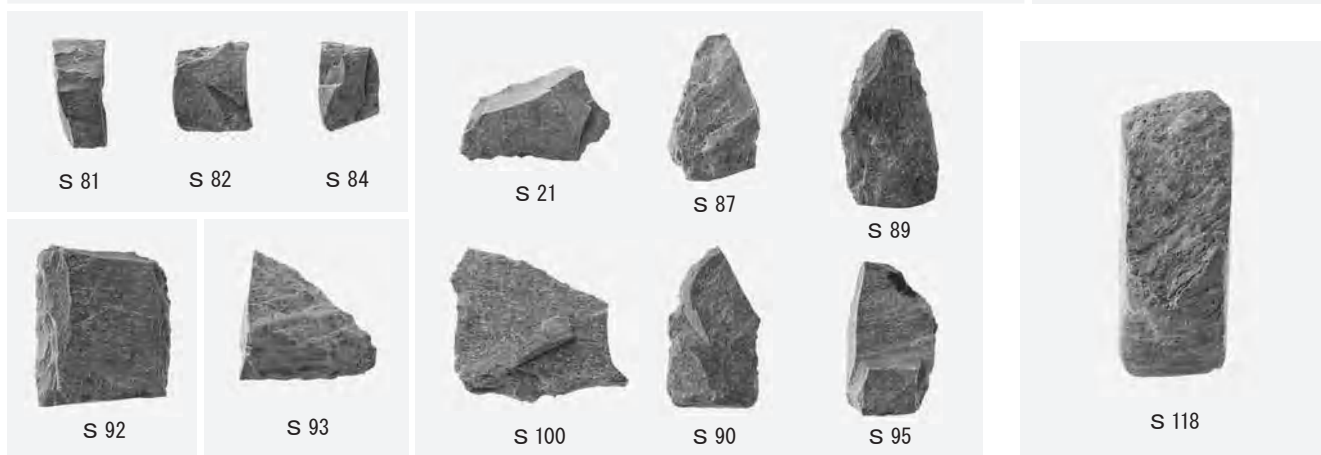
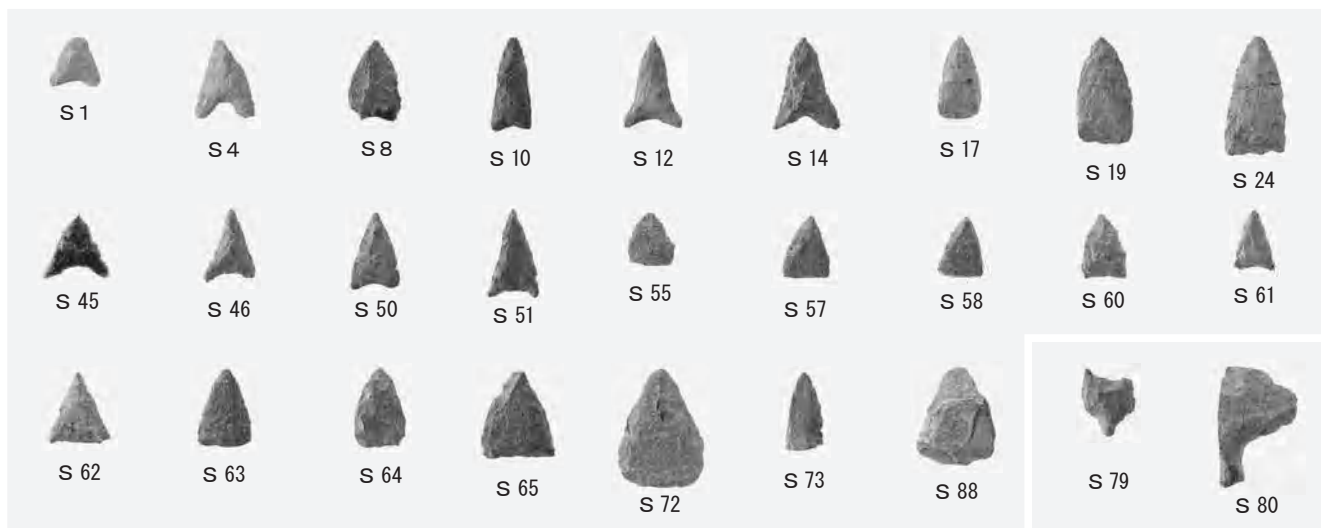
1 段状遺構 35 出土土器

2 溝2出土土器

3 集石4出土土器



4 包含層 1 出土土器



1 打製石器・剥片

2 鑿状片刃石斧

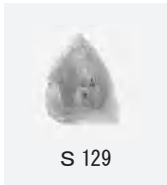


3 磨製石包丁未・完成品

4 大型蛤刃石斧



5 扁平片刃石斧未・完成品



S 129

1 火打石



S 41

S 130

2 小円礫



S 38

S 121

S 123



S 26

S 29

S 44

S 122

3 砥石

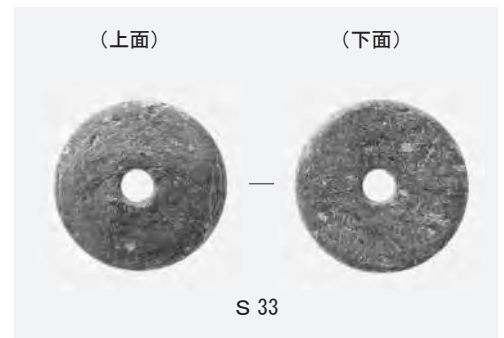


S 11

S 125

S 127

4 叩石

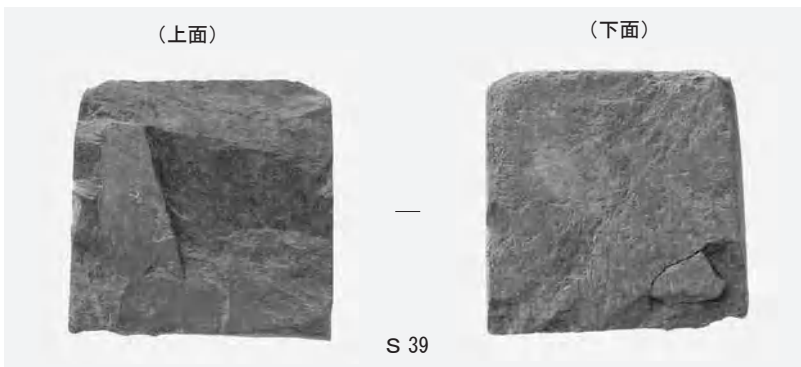


(上面)

(下面)

S 33

5 紡錘車



(上面)

(下面)

S 39

6 石硯



S 28

S 36

G 1

7 玉類



S 27

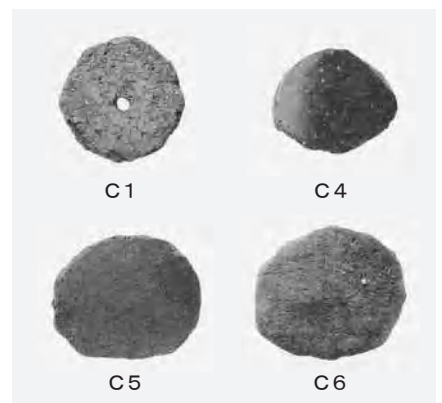
8 鉄鉱石



S 3

S 34

9 その他の石製品



C 1

C 4

C 5

C 6

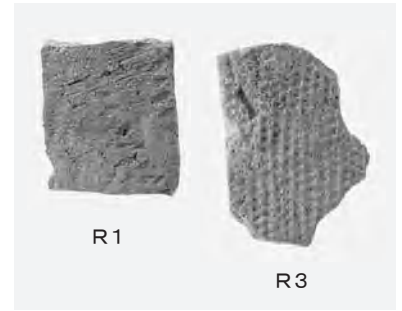
10 土器円板



1 炉壁



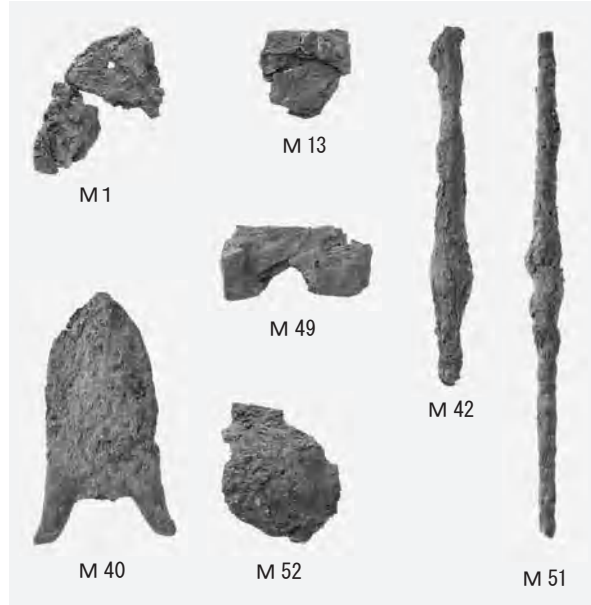
2 陶棺



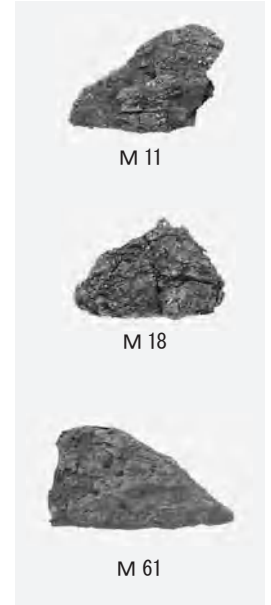
3 平瓦



4 土錘



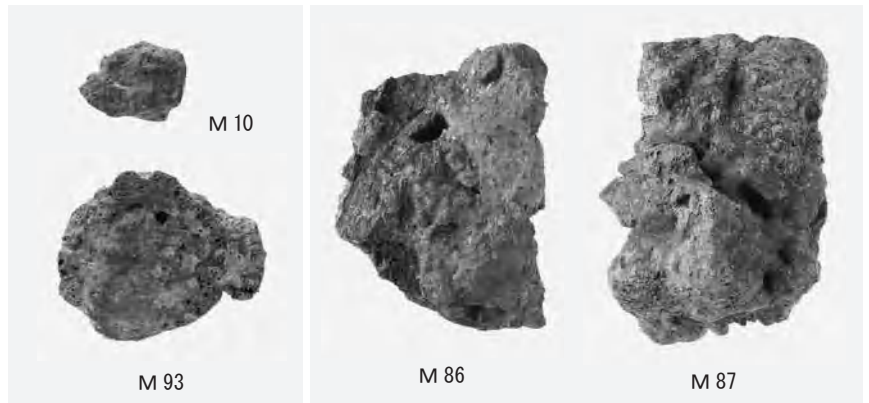
5 古墳時代の鉄製品



6 火打金



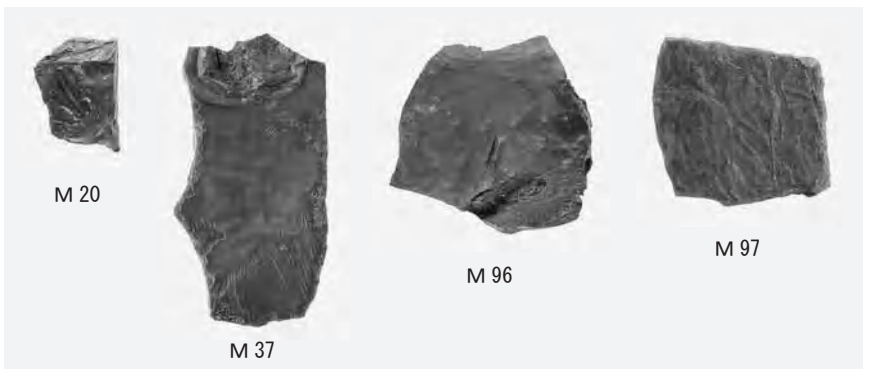
7 楔



9 鉄滓



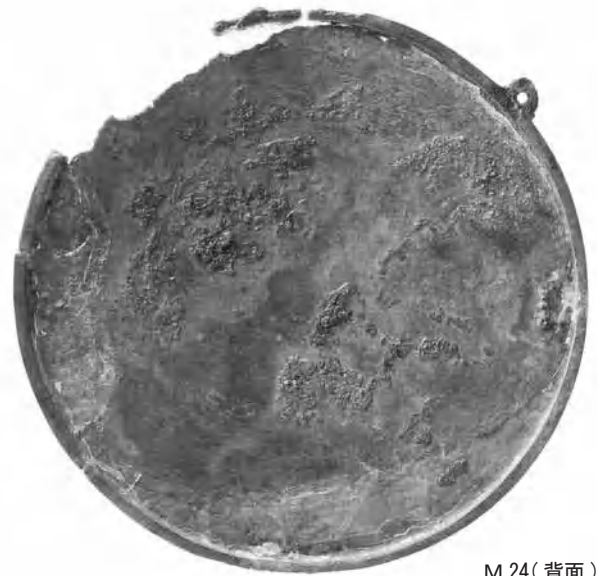
8 鉄釘



10 銅滓

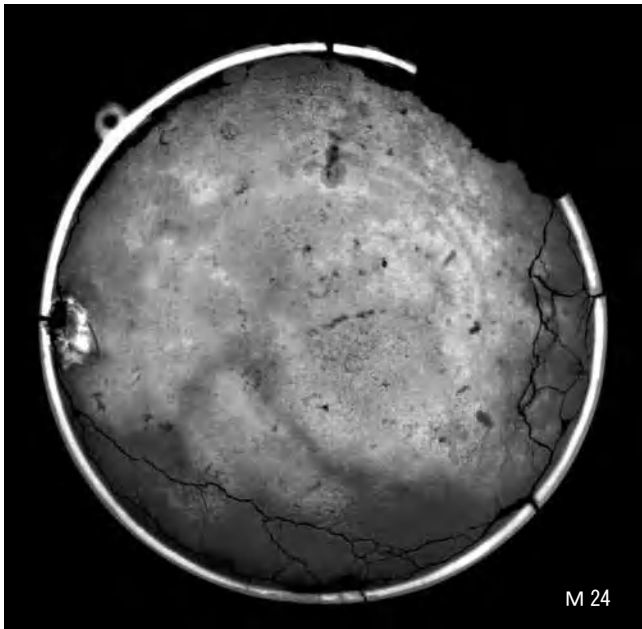


M 24(鏡面)



M 24(背面)

1 鏡像



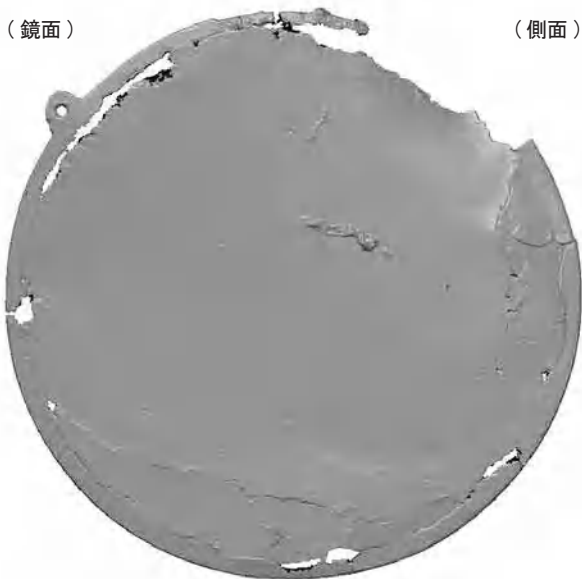
M 24

2 鏡像のX線画像



M 24

3 鏡像の赤外線画像



(鏡面)

(側面)



(背面)



M 24

4 鏡像の三次元画像

1 高尾北ヤシキ古墳
調査前
(西から)



2 横穴式石室
天井石検出状況
(南西から)



3 横穴式石室埋没状況
(南東から)





1 高尾北ヤシキ古墳全景（東から）



2 高尾北ヤシキ古墳全景（西から）



1 横穴式石室（南東から）



2 横穴式石室奥壁（南東から）



1 横穴式石室右側壁（西から）



2 横穴式石室左側壁（東から）



1 竪穴式石室
天井石検出状況
(北東から)



2 竪穴式石室
(南西から)



3 竪穴式石室
(南東から)



1 横穴式石室作業風景
(南東から)



2 横穴式石室作業風景
(東から)



3 横穴式石室
遺物出土状況
(上が北東)



1 横穴式石室陶棺片出土状況（南東から）



2 陶棺内石材・陶棺片出土状況（南東から）



3 陶棺脚部下の須恵器出土状況（東から）



4 筒形土製品検出状況（南東から）



5 筒形土製品口縁部出土状況（南東から）



6 筒形土製品内破片出土状況（南東から）



1 墳丘土層断面
(南東から)



2 墳丘土層断面
(南から)



3 墳丘内礫群出土状況
(北東から)

1 墳丘土層断面A-B
墳丘内礫群
(南東から)



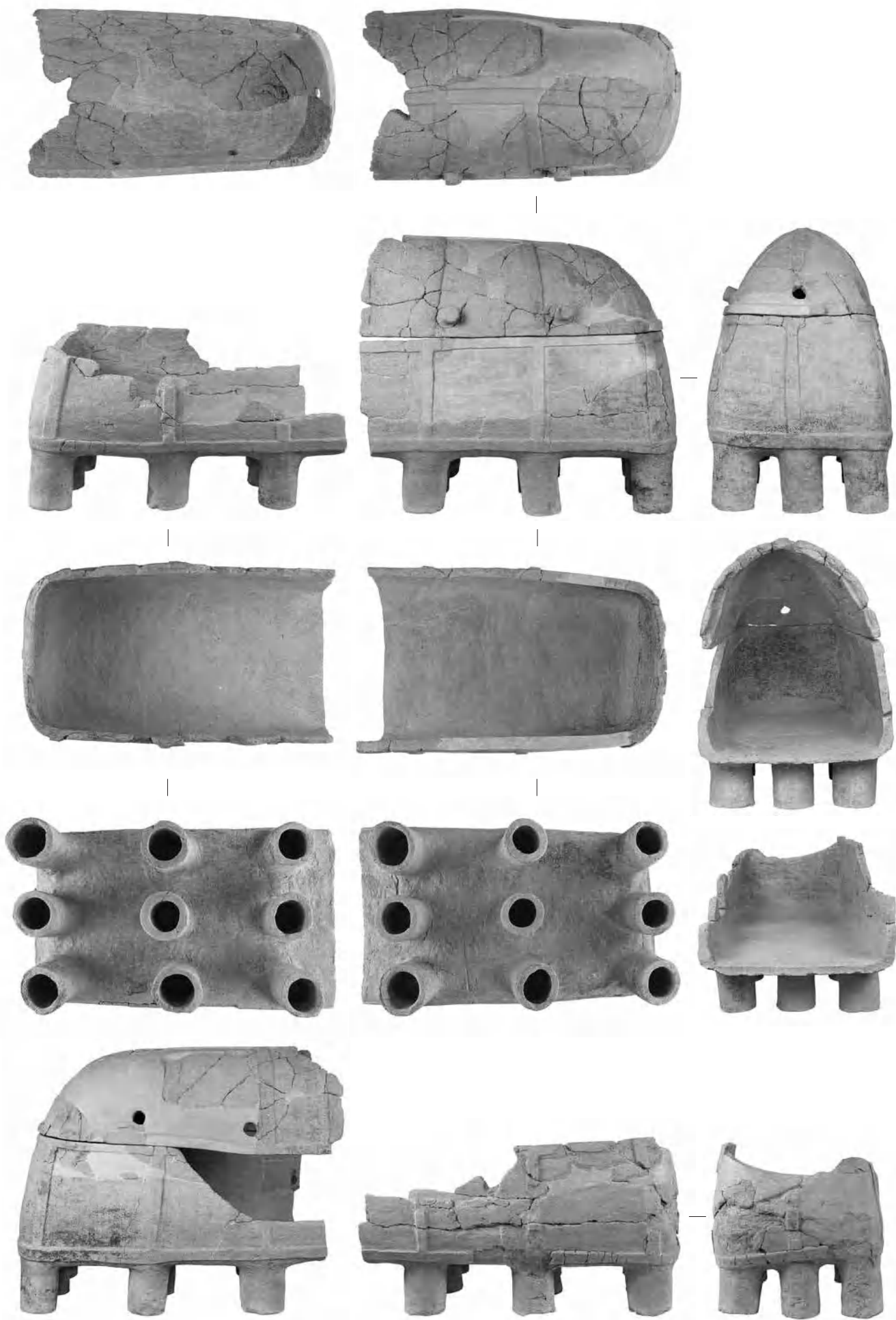
2 横穴式石室
積み直し掘り方
(南から)



3 土坑墓1 (南東から)

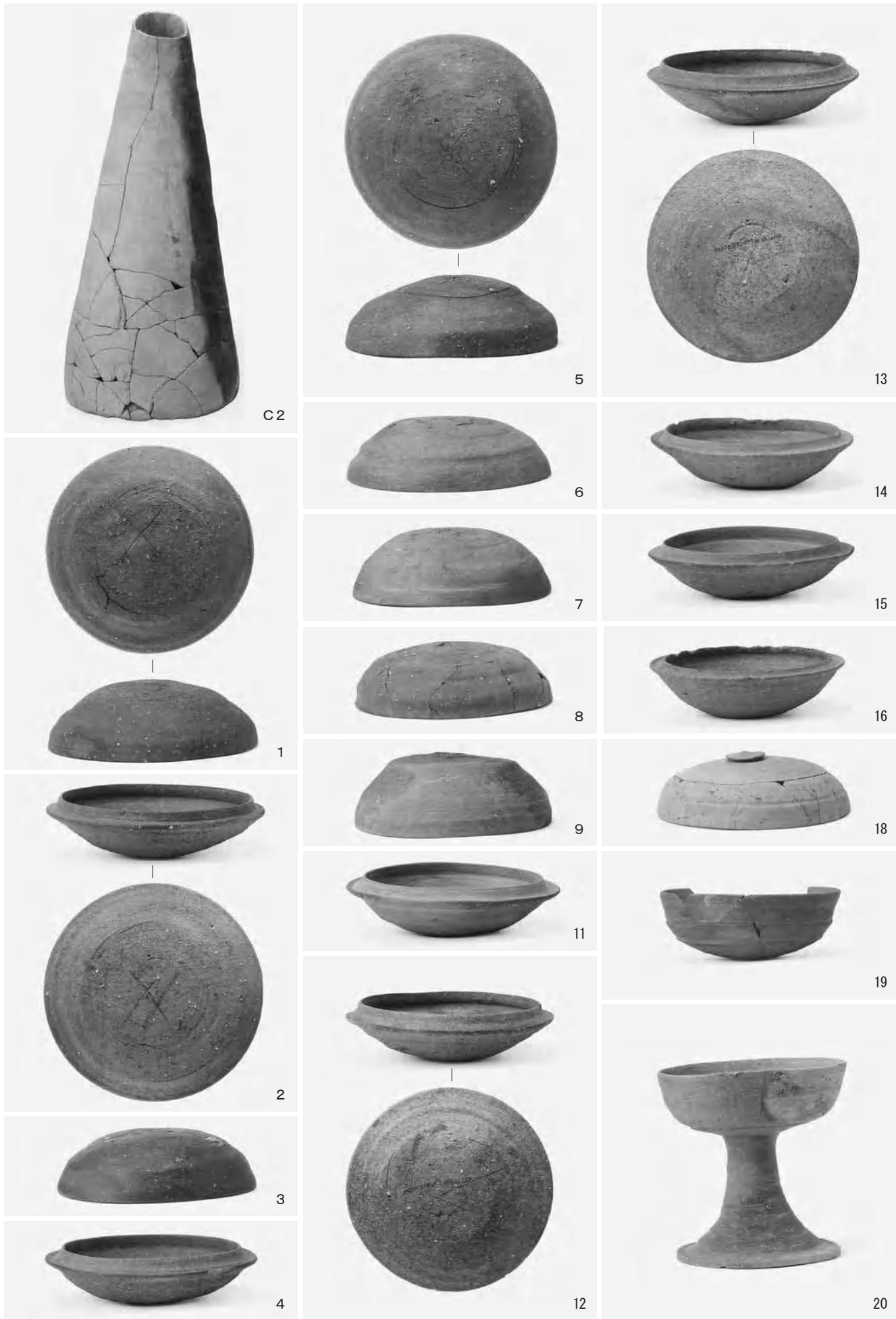


4 土坑墓2 (南東から)

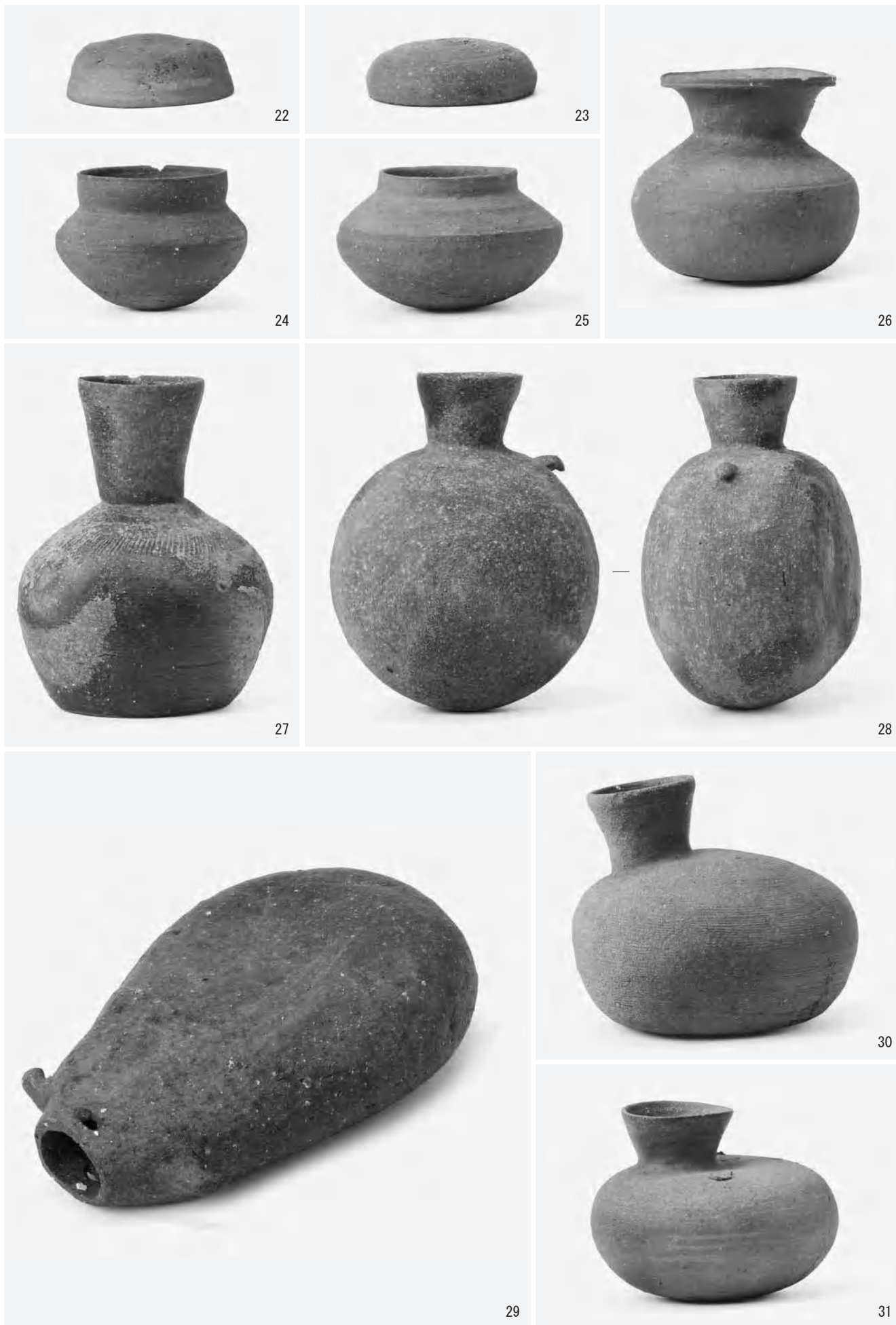


横穴式石室出土陶棺

C1



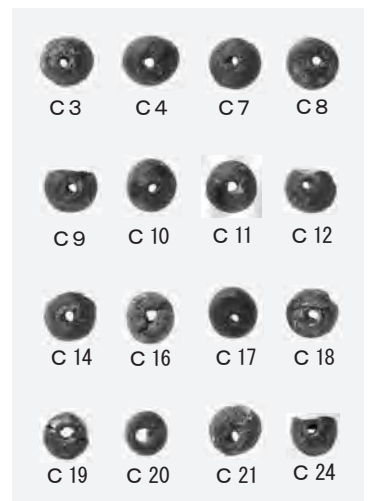
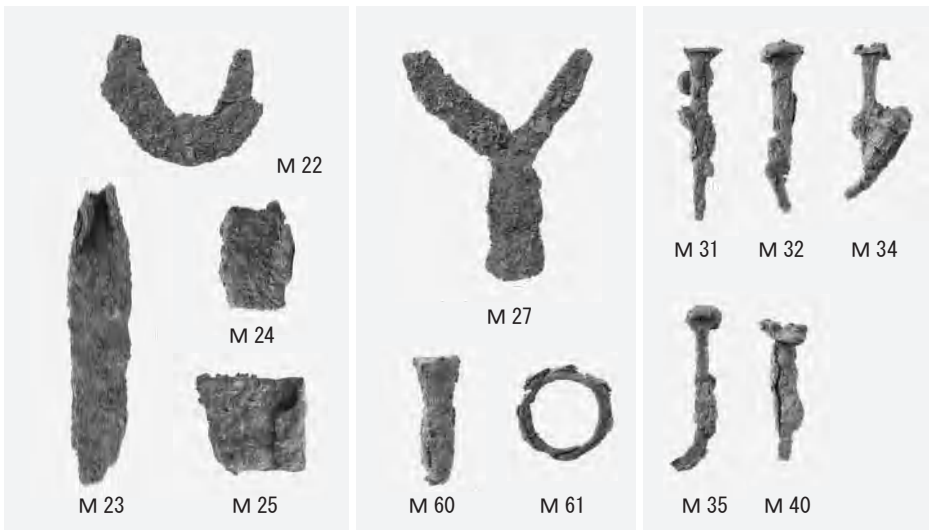
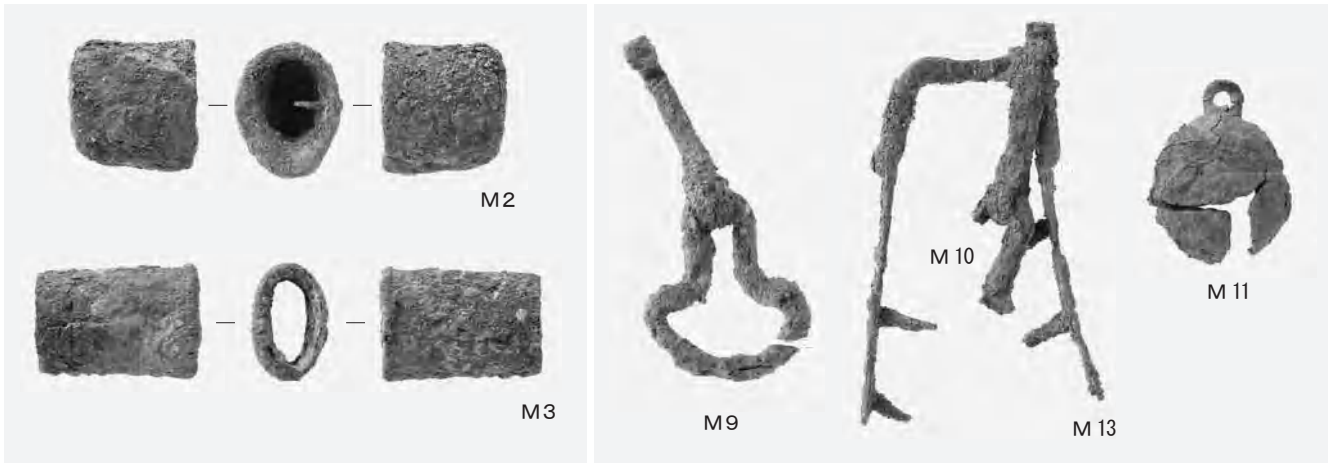
横穴式石室出土筒形土製品・土器



横穴式石室出土土器①



1 横穴式石室出土土器②



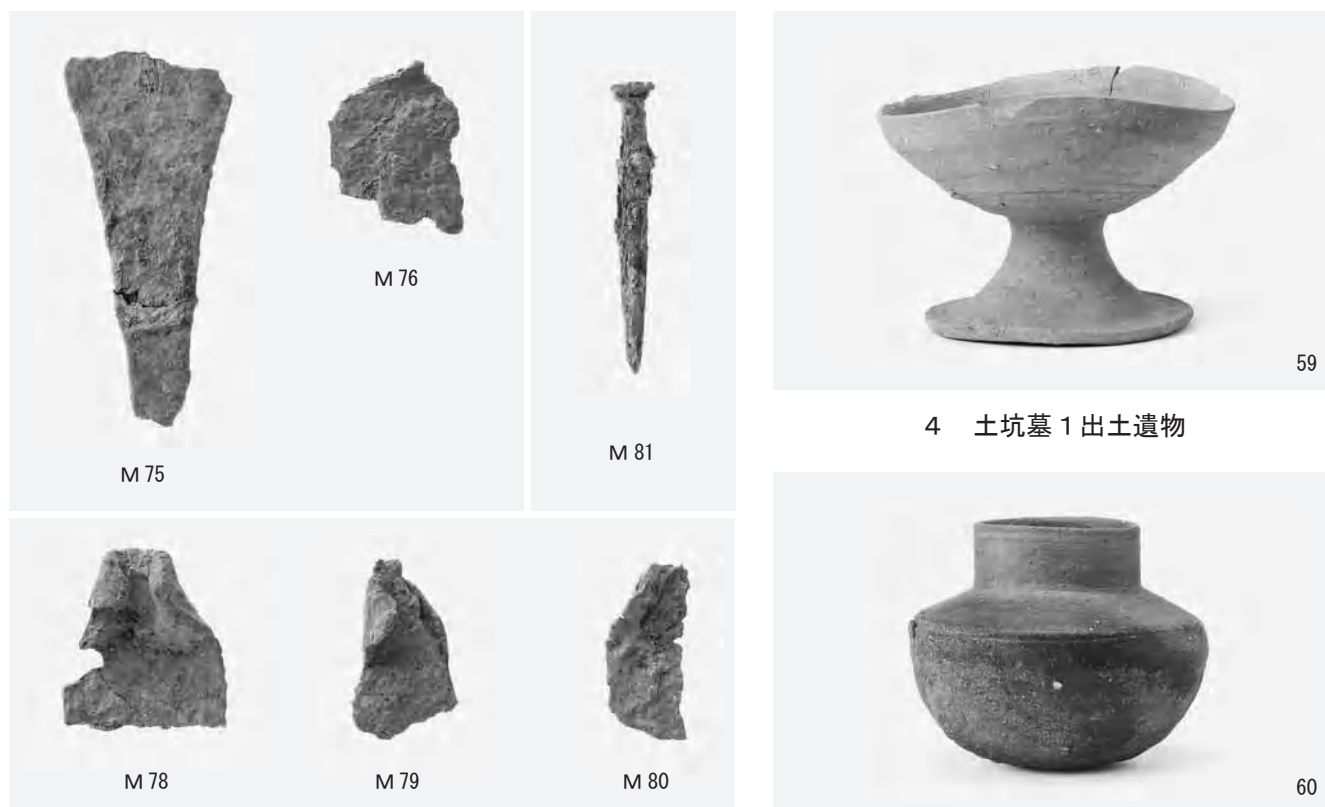
2 横穴式石室出土鉄器

3 横穴式石室出土玉類



1 竖穴式石室出土遺物

2 周溝出土土器



3 周溝出土鉄器

5 土坑墓 2 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たかおきたやしきいせき たかおきたやしきこふん							
書名	高尾北ヤシキ遺跡 高尾北ヤシキ古墳							
副書名	一般国道53号(津山南道路)改築工事に伴う発掘調査3							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	269							
編著者名	米田克彦 藤井雅大 尾上元規 小嶋善邦 氏平昭則 樋口英行 四田寛人 山口香織 西村 奏 大橋雅也 柴田英樹 白石 純 鈴木瑞徳 内藤 栄 高橋平明 植田直見 株式会社パレオ・ラボ							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2024年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかおきた 高尾北ヤシキ 遺跡	おかやまけん 岡山県 つやまし 津山市 たかお 高尾1423ほか	33203	332031237	30° 2' 21"	133° 57' 50"	20200121 ~ 20200221 20201007 ~ 20210331 20210401 ~ 20220331	7,095	記録保存調査
たかおきた 高尾北ヤシキ 古墳	おかやまけん 岡山県 つやまし 津山市 たかお 高尾1423ほか	33203	332030449	35° 2' 21"	133° 57' 51"	20201007 ~ 20210331		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高尾北ヤシキ 遺跡	集落 墓	弥生時代	掘立柱建物1、柱穴列 1、段状遺構7、土坑4、 木棺墓1、土器溜まり1	弥生土器、石器、土器円板				
	集落	古墳時代 ~古代	竪穴住居21、柱穴列1、 段状遺構20、土坑2基	土師器、須恵器、石製品、鉄 製品、玉類、紡錘車、陶棺、 炉壁、鉄滓、モモ核		5軒の竪穴住居に造り 付けのカマドを伴う		
	集落	中世	整地面4、掘立柱建物20、 柱穴列38、段状遺構9、 土坑17、溝6、集石4	土師器、緑釉陶器、備前焼、 勝間田焼、青磁、白磁、瀬戸・ 美濃、瓦質土器、石製品、鉄 製品、青銅製品(鏡像)、土製品、 銅銭、銅滓		中世の段状遺構に伴う 小穴に鏡像を埋納		
高尾北ヤシキ 古墳	古墳	古墳時代 後期	古墳1(横穴式石室1、 竪穴式石室1)、土坑墓 2	土師器、須恵器、筒形土製品、 鉄鎌、馬具、刀子、紡錘車、鉄釘、 耳環、玉類、陶棺		古墳の埋葬施設は横穴 式石室と竪穴式石室		
要約	高尾北ヤシキ遺跡 丘陵斜面に営まれた弥生時代中期の集落・墓、古墳時代後期~古代、鎌倉・室町時代の集落である。このうち、掘立柱建物を主体とする中世集落は12~16世紀に営まれ、段状遺構の小穴に鏡像が埋納された。 高尾北ヤシキ古墳 高尾北ヤシキ古墳は直径約13.7m、墳丘の残存高1mの円墳で、横穴式石室と竪穴式石室を1基ずつ確認した。竪穴式石室では須恵器、紡錘、玉類が副葬された。横穴式石室では陶棺が納められたうえ、土器、筒形土製品、馬具や鉄鎌などの鉄製品、耳環、玉類が副葬されており、渡来系の被葬者が想定される。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 269

高尾北ヤシキ遺跡
高尾北ヤシキ古墳
一般国道 53 号（津山南道路）
改築工事に伴う発掘調査 3

令和 6 年 3 月 15 日 印刷

令和 6 年 3 月 15 日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻 1325-3
発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下 2-4-6
印刷 株式会社 中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏 390

